鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（162）

川内川激甚災害対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅳ）

虎居城跡（とらいじょうあと）

（薩摩郡さつま町）

２０１１年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



遠景



曲輪Ⅰ土塁



空堀Ⅰ

序　　文

この報告書は，川内川激甚災害対策特別緊急事業に伴って，平成20，21年度に実施した薩摩郡さつま町に所在する虎居城跡の発掘調査の記録です。

調査の結果，土塁や空堀，虎口，掘立柱建物跡等の遺構や陶磁器，木製品，金属製品等の様々な遺物が出土し，中世山城の歴史を知る上で貴重な資料を得ることが出来ました。他にも縄文時代早期から近世にかけての遺構・遺物が出土し，複合遺跡であることがわかりました。

なお，平成20年度についてはさつま町教育委員会と共に調査し，協力をいただきました。

本報告書が，県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され，埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに，文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に，調査に当たりご協力いただいた国土交通省九州地方整備局川内川河川事務所，さつま町教育委員会，関係各機関及び発掘調査に従事された地域の方々に厚くお礼申し上げます。

平成23年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所　長　　山　下　　吉　美

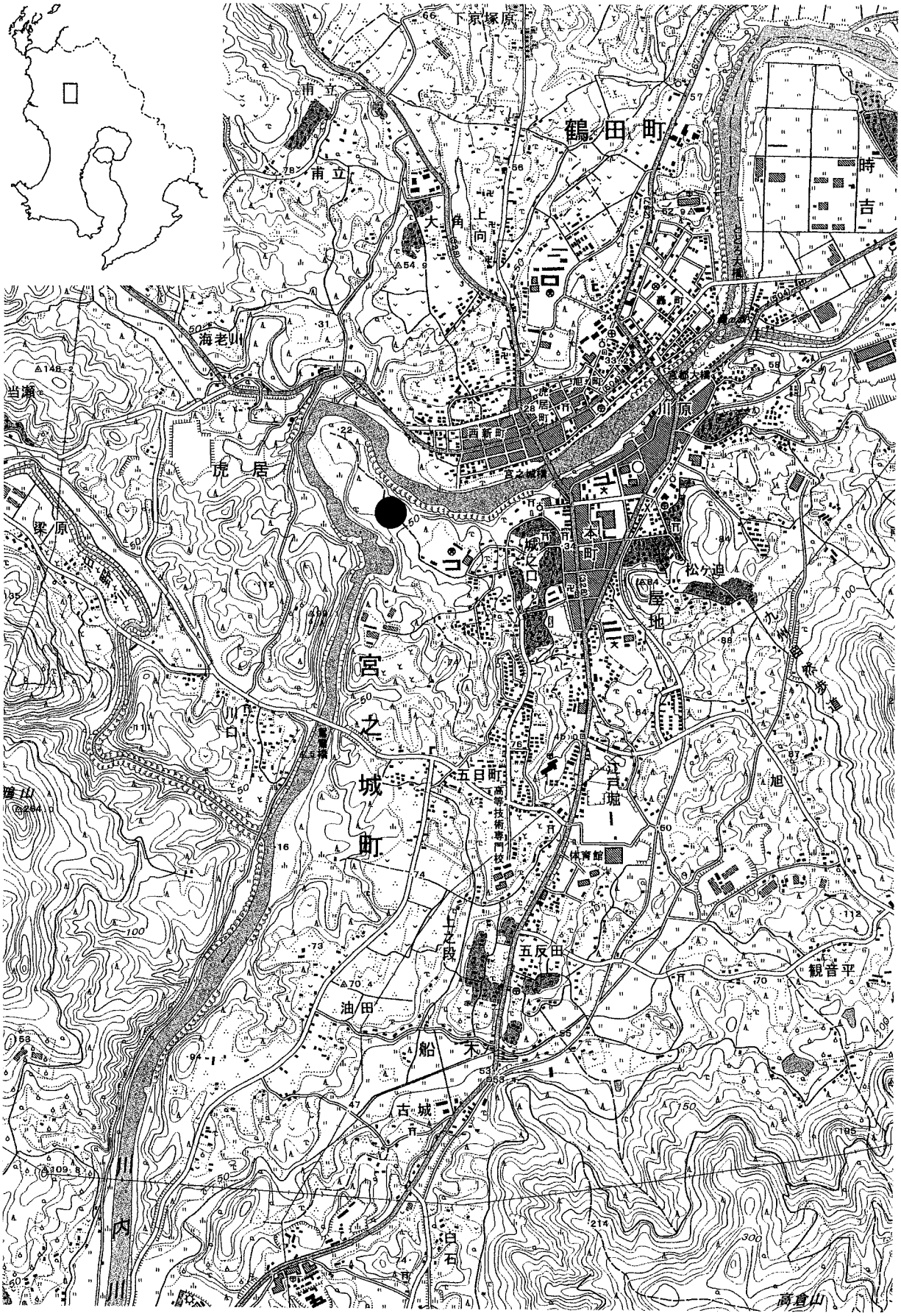
報　告　書　抄　録

ふりがな	とらいじょうあと
書名	虎居城跡
副書名	川内川激甚災害対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第162集
編集者名	青﨑和憲，永濵功治，羽嶋敦洋，吉元輝幸
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号　TEL 0995−48−5811
発行年月日	2011年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	発掘原因
虎居城跡 （とらいじょうあと）	鹿児島県 （かごしまけん） 薩摩郡 （さつまぐん） さつま町 （ちょう） 宮之城屋地 （みやのじょうやち） 字城ノ口 （あざしろのくち）	46392	66-167-0	31° 40′ 28″	130° 56′ 14″	本調査 2008.5.8～ 2009.3.19 2009.4.15～ 2009.10.28	59,450	川内川激甚災害対策特別緊急事業に伴う記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
虎居城跡	散布地	縄文早期	集石	前平式土器，吉田式土器，押型文土器，石鏃，石斧他	
	散布地	古墳	−	成川式土器，鏡	
	散布地	古代	−	土師器	
	山城	中世	土塁，空堀，虎口，掘立柱建物跡，炉，ピット，溝状遺構，土坑墓	土師器，須恵器，青磁，白磁青花，羽口，擂鉢，砥石，竈，木製品，柱，杭，刀子，金属器，坩堝，鉄滓他	
	散布地	近世	石切場	染付，薩摩焼，木製品，金属製品他	

遺跡の概要	虎居城跡は,三方を川内川に囲まれた中世山城である。発掘調査では中世末～近世初頭までの遺構･遺物が発見された。遺構としては曲輪,土塁,虎口,空堀の他,曲輪内の掘立柱建物跡,炉跡,土坑,ピット等が検出された。曲輪周囲には空堀が廻り,空堀の廃絶後の掘立柱建物跡,礎石建物跡,柱痕跡等の遺構も検出された。川内川に面した遺跡南側では石切場跡も検出された。遺物は青磁,白磁,青花,陶器,瓦質土器,炻器,土師器,漆器椀,下駄,柱等の木製品,金属器,坩堝,鉄滓等が出土した。


鶴田町
宮之城町
虎居
川原
本町
城之口
屋地
松ケ迫
五日町
上之段
五反田
観音平
油田
船木
古城
白石
川内川
海老川
梁原川
下京塚原
甫立
大角
上向
時吉
川口
高倉山

S = 1/25,000

例　言　・　凡　例

1　本報告書は，川内川激甚災害対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　本遺跡は，鹿児島県薩摩郡さつま町宮之城屋地に所在する。

3　発掘調査は，国土交通省九州地方整備局川内川河川事務所から鹿児島県教育委員会が依頼を受け，平成20年度は鹿児島県立埋蔵文化財センター及びさつま町教育委員会が担当し，平成21年度は県立埋蔵文化財センターが担当した。整理作業・報告書作成は県立埋蔵文化財センターが担当した。

4　発掘調査は，平成20年5月8日～平成21年3月19日，平成21年4月15日～平成21年10月28日にかけて実施し，整理作業・報告書作成は平成21，22年度に実施した。

5　掲載遺物の番号は通し番号とし，本文，挿図，表，図版の番号は一致する。

6　挿図の縮尺は各図面に示した。

7　本書で用いたレベル数値は，国土交通省九州地方整備局川内川河川事務所が提示した工事計画図面に基づく海抜絶対高である。

8　発掘調査における図面作成，写真撮影は，各年度の調査担当者が行った。空中写真撮影は平成20年度は（有）スカイサーヴェイ九州，（株）フジタに委託し，平成21年度は（有）九州航空に委託した。

9　遺構実測図のトレースは，整理作業員の協力を得て青﨑和憲，永濵功治，羽嶋敦洋，吉元輝幸が行った。

　遺物の実測・トレースは，整理作業員の協力を得て青﨑，永濵，羽嶋，吉元が行った。

　石器の実測・トレースは一部，（株）九州文化財研究所，国際航業株式会社鹿児島支店に委託し，監修は羽嶋が行った。

10　遺物の写真撮影は，吉岡康弘が行った。

11　自然科学分析の年代測定，種実同定は（株）加速器分析研究所，（株）パリノ・サーヴェイに委託し，坩堝の分析については中村幸一郎の協力を得て内山伸明，永濵，羽嶋が行った。

12　金属製品，木製品の保存処理は整理作業員の協力を得て中村幸一郎，内山伸明が行った。

13　地下レーダー探査の実施及び分析は琉球大学准教授後藤雅彦及び永濵が行った。

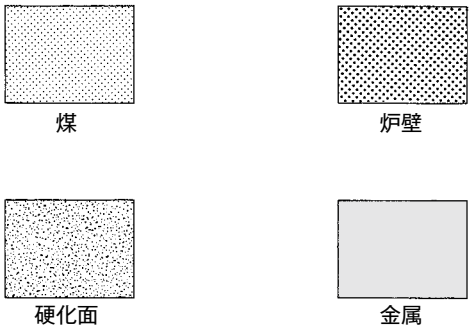
14　本書の編集は青﨑，永濵，羽嶋，吉元が担当した。また，陶磁器全般の分類，文章執筆は関明恵の協力を得た。虎居城跡の歴史的環境については元さつま町教育委員会文化課課長川添俊行氏が執筆し，青﨑が編集した。各章の執筆分担は次の通りである。

第1章……青﨑，永濵
第2章　第1節……羽嶋
　　第2節……青﨑
第3章　第1節……永濵
　　第2節……羽嶋
　　第3節 1,2,3(3),3(5),3(8),3(13)…… 青﨑
　　第3節 3(2),3(4),3(10),3(11)……永濵
　　第3節 3(1),3(7),3(9)…… 羽嶋
　　第3節 3(6),3(12)……吉元
第4章……文中に記載
第5章…… 青﨑，永濵，羽嶋，吉元

15　遺物は，県立埋蔵文化財センターで保管し，展示・活用する予定である。なお，虎居城跡の遺物注記の略号は「トライ」である。

16　虎居城跡の調査については，縄張り，遺構名等を考慮して地区割りし，便宜上C地区台地部を曲輪Ⅰ，E地区台地部を曲輪Ⅱ，I地区台地部を曲輪Ⅲ，G地区台地部を曲輪Ⅳ，M地区台地部を曲輪Ⅴとする。曲輪Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳはそれぞれ「塩の城」，「中の城」，「小城」，「おきたの城」と命名された文献がある。縄張りを意識して説明する場合，「曲輪○」の名称を用い，単に範囲としての意味をもって説明する場合「○地区」の名称を用いることとする。（第5図参照）

17　本書で用いる土器に付着した煤の範囲，炉壁の範囲，硬化面の範囲，坩堝等に付着した金属の範囲については次のように表す。



目　次

巻頭図版
序文
報告書抄録
例言・凡例
目次

第１章　発掘調査の経過…… 1
　第１節　調査に至るまでの経緯…… 1
　第２節　事前調査…… 1
　第３節　本調査…… 1
　第４節　整理・報告書作成作業…… 5
第２章　遺跡の位置と環境…… 7
　第１節　地理的環境…… 7
　第２節　歴史的環境…… 11
第３章　発掘調査の方法と成果…… 15
　第１節　調査の方法…… 15
　第２節　層序…… 18
　第３節　調査の成果…… 21
　　１　縄文時代の調査…… 21
　　２　古墳時代～古代の調査…… 26
　　３　中世～近世の調査…… 27
　　⑴　Ａ地区の調査…… 27
　　⑵　Ｂ地区の調査…… 32
　　⑶　Ｃ地区（曲輪Ⅰ）の調査…… 74
　　⑷　Ｄ地区の調査…… 108
　　⑸　Ｅ地区（曲輪Ⅱ）の調査…… 130
　　⑹　Ｆ地区の調査…… 145
　　⑺　Ｇ地区（曲輪Ⅳ）の調査…… 147
　　⑻　Ｈ地区の調査…… 152
　　⑼　Ⅰ地区（曲輪Ⅲ）の調査…… 171
　　⑽　Ｊ地区の調査…… 181
　　⑾　Ｋ地区の調査…… 188
　　⑿　Ｌ地区の調査…… 193
　　⒀　Ｍ地区（曲輪Ⅴ）の調査…… 194
　　４　遺物観察表…… 205
第４章　自然科学分析…… 221
　第１節　概要…… 221
　第２節　放射性炭素年代測定…… 221
　第３節　樹種同定…… 225
　第４節　坩堝の成分分析…… 234
　第５節　地下レーダー探査…… 236
第５章　総括…… 239
写真図版…… 249

挿　図　目　次

虎居城跡位置図
第 1 図　三国名勝図絵（宗功寺）…… 7
第 2 図　虎居城跡絵図等…… 8
第 3 図　周辺遺跡地図…… 10
第 4 図　虎居城跡全体図…… 16
第 5 図　調査範囲，地区割り，グリッド配置図…… 17
第 6 図　地区別基本土層柱状図…… 19
第 7 図　鹿児島県北西部地質図…… 20
第 8 図　縄文時代　集石…… 22
第 9 図　縄文時代　土器…… 23
第 10 図　縄文時代　石器(1)…… 24
第 11 図　縄文時代　石器(2)…… 25
第 12 図　古墳～古代　出土遺物…… 26
第 13 図　A 地区　全体図…… 27
第 14 図　A 地区　土層断面図…… 28
第 15 図　A 地区　出土遺物(1)…… 29
第 16 図　A 地区　出土遺物(2)…… 30
第 17 図　A 地区　出土遺物(3)…… 31
第 18 図　B 地区　全体図…… 32
第 19 図　B 地区　土層断面図…… 33
第 20 図　B 地区　遺構配置図(1)…… 35
第 21 図　B 地区　遺構配置図(2)…… 36
第 22 図　B 地区　遺構配置図(3)…… 37
第 23 図　B 地区　空堀Ⅰ・溝状遺構断面図…… 38
第 24 図　B 地区　空堀Ⅰ・溝状遺構出土遺物(1)…… 39
第 25 図　B 地区　空堀Ⅰ・溝状遺構出土遺物(2)…… 40
第 26 図　B 地区　空堀Ⅰ・溝状遺構出土遺物(3)…… 41
第 27 図　B 地区　空堀Ⅰ・溝状遺構出土遺物(4)…… 42
第 28 図　B 地区　掘立柱建物跡１…… 44
第 29 図　B 地区　掘立柱建物跡２…… 45
第 30 図　B 地区　掘立柱建物跡３，木樋…… 46
第 31 図　B 地区　柱，杭(1)…… 47
第 32 図　B 地区　柱，杭(2)…… 48
第 33 図　B 地区　柱，杭(3)…… 49
第 34 図　B 地区　柱，杭(4)…… 50
第 35 図　B 地区　柱，杭(5)…… 51
第 36 図　B 地区　柱，杭(6)，ピット…… 52
第 37 図　B 地区　柱，杭(7)…… 53
第 38 図　B 地区　杭列…… 54
第 39 図　B 地区　石列…… 57
第 40 図　B 地区　石組み遺構１…… 58
第 41 図　B 地区　桶，土坑，石組み遺構２…… 59
第 42 図　B 地区　建物跡…… 60
第 43 図　B 地区　遺構内出土遺物…… 61
第 44 図　B 地区　出土遺物(1)…… 64
第 45 図　B 地区　出土遺物(2)…… 65
第 46 図　B 地区　出土遺物(3)…… 66
第 47 図　B 地区　出土遺物(4)…… 67
第 48 図　B 地区　出土遺物(5)…… 68
第 49 図　B 地区　出土遺物(6)…… 69
第 50 図　B 地区　出土遺物(7)…… 70
第 51 図　B 地区　出土遺物(8)…… 71
第 52 図　B 地区　出土遺物(9)…… 72
第 53 図　B 地区　出土遺物(10)…… 73
第 54 図　C 地区　（曲輪Ⅰ）全体図 …… 74
第 55 図　C 地区　遺構配置図…… 75
第 56 図　C 地区　土層断面図・土層断面位置…… 76
第 57 図　C 地区　土塁…… 78
第 58 図　C 地区　土塁出土遺物…… 79
第 59 図　C 地区　虎口Ａ，Ｂ…… 79
第 60 図　C 地区　虎口Ａ…… 80
第 61 図　C 地区　虎口Ｂ…… 81
第 62 図　C 地区　虎口Ｂの柱穴と出土遺物…… 82
第 63 図　C 地区　掘立柱建物跡１…… 84
第 64 図　C 地区　掘立柱建物跡２…… 85
第 65 図　C 地区　掘立柱建物跡３…… 86
第 66 図　C 地区　掘立柱建物跡４…… 87
第 67 図　C 地区　掘立柱建物跡５…… 88
第 68 図　C 地区　掘立柱建物跡６…… 89
第 69 図　C 地区　掘立柱建物跡７・出土遺物…… 90
第 70 図　C 地区　掘立柱建物跡８…… 91
第 71 図　C 地区　ピット(1)…… 92
第 72 図　C 地区　ピット(2)…… 93
第 73 図　C 地区　ピット(3)…… 94
第 74 図　C 地区　ピット(4)…… 95
第 75 図　C 地区　土坑(1)…… 96
第 76 図　C 地区　土坑(2)…… 97
第 77 図　C 地区　炉跡(1)…… 98
第 78 図　C 地区　炉跡(2)…… 99
第 79 図　C 地区　炉跡(3)，ピット出土遺物……101

第 80 図　C 地区　ピット，土坑出土遺物…… 102
第 81 図　C 地区　出土遺物(1)…… 104
第 82 図　C 地区　出土遺物(2)…… 105
第 83 図　C 地区　出土遺物(3)…… 106
第 84 図　C 地区　出土遺物(4)…… 107
第 85 図　D 地区　全体図…… 108
第 86 図　D 地区　遺構配置図…… 109
第 87 図　D 地区　土層断面図(1)…… 110
第 88 図　D 地区　土層断面図(2)…… 111
第 89 図　D 地区　空堀Ⅱ，溝状遺構断面図…… 112
第 90 図　D 地区　空堀Ⅱ出土遺物(1)…… 113
第 91 図　D 地区　空堀Ⅱ出土遺物(2)…… 114
第 92 図　D 地区　空堀Ⅱ検出土師器集積(1)…… 114
第 93 図　D 地区　空堀Ⅱ検出土師器集積(2)…… 115
第 94 図　D 地区　掘立柱建物跡１…… 117
第 95 図　D 地区　掘立柱建物跡２…… 118
第 96 図　D 地区　掘立柱建物跡３，４の位置関係
と掘立柱建物跡３…… 119
第 97 図　D 地区　掘立柱建物跡４…… 120
第 98 図　D 地区　柱，杭(1)…… 121
第 99 図　D 地区　柱，杭(2)…… 122
第 100 図　D 地区　炉跡(1)…… 123
第 101 図　D 地区　炉跡(2)…… 124
第 102 図　D 地区　炉跡出土遺物…… 124
第 103 図　D 地区　出土遺物(1)…… 126
第 104 図　D 地区　出土遺物(2)…… 127
第 105 図　D 地区　出土遺物(3)…… 128
第 106 図　D 地区　出土遺物(4)…… 129
第 107 図　E 地区　（曲輪Ⅱ）全体図 …… 130
第 108 図　E 地区　土層断面図(1)…… 131
第 109 図　E 地区　土層断面図(2)…… 132
第 110 図　E 地区　土塁…… 133
第 111 図　E 地区　掘立柱建物跡１，２…… 134
第 112 図　E 地区　ピット…… 135
第 113 図　E 地区　炉跡(1)…… 136
第 114 図　E 地区　炉跡(2)…… 137
第 115 図　E 地区　土坑…… 138
第 116 図　E 地区　遺構内出土遺物…… 139
第 117 図　E 地区　出土遺物(1)…… 140
第 118 図　E 地区　出土遺物(2)…… 141
第 119 図　E 地区　出土遺物(3)…… 142
第 120 図　E 地区　出土遺物(4)…… 143
第 121 図　E 地区　出土遺物(5)…… 144
第 122 図　F 地区　全体図…… 145
第 123 図　F 地区　土層断面図…… 146
第 124 図　F 地区　出土遺物…… 146
第 125 図　G 地区　（曲輪Ⅳ）全体図，遺構配置図…… 147
第 126 図　G 地区　土層断面図…… 148
第 127 図　G 地区　掘立柱建物跡…… 149
第 128 図　G 地区　溝状遺構，硬化面…… 150
第 129 図　G 地区　土坑…… 151
第 130 図　G 地区　出土遺物…… 151
第 131 図　H 地区　全体図，遺構配置図…… 152
第 132 図　H 地区　土層断面図…… 153
第 133 図　H 地区　空堀Ⅰ，溝状遺構断面図…… 154
第 134 図　H 地区　空堀Ⅰ出土遺物…… 156
第 135 図　H 地区　空堀Ⅰ，溝状遺構１出土遺物…… 157
第 136 図　H 地区　礎石建物跡…… 159
第 137 図　H 地区　掘立柱建物跡…… 160
第 138 図　H 地区　土坑，ピット…… 161
第 139 図　H 地区　柱痕と塀，木樋…… 162
第 140 図　H 地区　柵(1)…… 163
第 141 図　H 地区　柵(2)…… 164
第 142 図　H 地区　柵(3)…… 165
第 143 図　H 地区　柵(4)…… 166
第 144 図　H 地区　柵(5)…… 167
第 145 図　H 地区　杭列…… 168
第 146 図　H 地区　出土遺物(1)…… 169
第 147 図　H 地区　出土遺物(2)…… 170
第 148 図　I 地区　（曲輪Ⅲ）全体図，遺構配置図…… 171
第 149 図　I 地区　土層，溝状遺構断面図…… 172
第 150 図　I 地区　土層，溝状遺構，土塁断面図…… 173
第 151 図　I 地区　溝状遺構出土遺物…… 175
第 152 図　I 地区　溝状遺構，ピット出土遺物…… 176
第 153 図　I 地区　炉跡，土坑…… 177
第 154 図　I 地区　土坑，ピット…… 178
第 155 図　I 地区　出土遺物(1)…… 179
第 156 図　I 地区　出土遺物(2)…… 180
第 157 図　J 地区　全体図，遺構配置図…… 181
第 158 図　J 地区　土層断面図…… 182
第 159 図　J 地区　空堀Ⅱ出土遺物…… 183
第 160 図　J 地区　空堀Ⅱ，溝状遺構出土遺物…… 184
第 161 図　J 地区　石列(1)…… 185
第 162 図　J 地区　石列(2)…… 186
第 163 図　J 地区　出土遺物…… 187
第 164 図　K 地区　全体図…… 188
第 165 図　K 地区　土層断面図…… 189
第 166 図　K 地区　石切場１…… 190
第 167 図　K 地区　石切場１断面図…… 191
第 168 図　K 地区　石切場２，３…… 192

第 169 図　K 地区　石切場 1 出土遺物…… 192
第 170 図　L 地区　全体図…… 193
第 171 図　L 地区　出土遺物…… 193
第 172 図　M 地区　（曲輪Ⅴ）全体図…… 194
第 173 図　M 地区　A 地点遺構配置図…… 195
第 174 図　M 地区　B 地点遺構配置図…… 196
第 175 図　M 地区　土層断面図…… 197
第 176 図　M 地区　竪穴建物跡 1，焼土遺構…… 198
第 177 図　M 地区　竪穴建物跡 2 及び出土遺物…… 199
第 178 図　M 地区　A 地点遺構配置及び遺物出土状況 201
第 179 図　M 地区　炉跡及び出土遺物…… 202
第 180 図　M 地区　土坑，土坑墓，出土遺物…… 203
第 181 図　M 地区　出土遺物…… 204
第 182 図　暦年較正グラフ(1)…… 222
第 183 図　暦年較正グラフ(2)…… 223
第 184 図　暦年較正グラフ(3)…… 224
第 185 図　暦年較正グラフ(4)…… 225
第 186 図　鹿児島県内の主な坩堝，取鍋出土遺跡…… 234
第 187 図　虎居城跡出土坩堝　付着銅粒子…… 224
第 188 図　虎居城跡出土坩堝　暗赤褐色部分…… 235
第 189 図　地下レーダー探査結果(1)…… 236
第 190 図　地下レーダー探査結果(2)…… 236
第 191 図　地下レーダー探査結果(3)…… 238
第 192 図　字絵図他，資料…… 239
第 193 図　地形断面…… 240
第 194 図　地形断面位置…… 241
第 195 図　編年と ^{14}C 年代測定表…… 242
第 196 図　遮断ライン…… 243
第 197 図　器種別遺物出土量…… 245
第 198 図　地区別遺物出土量…… 246
第 199 図　土器法量相関グラフ…… 246
第 200 図　土師器坏，皿分類…… 247
第 201 図　金属器出土数量…… 248

表　目　次

第 1 表　遺跡地名表…… 9
第 2 表　基本層位…… 18
第 3 表　B地区　掘立柱建物跡 1 計測表…… 44
第 4 表　B地区　掘立柱建物跡 2 計測表…… 45
第 5 表　B地区　掘立柱建物跡 3 計測表…… 46
第 6 表　B地区　木樋計測表…… 46
第 7 表　B地区　柱，杭計測表…… 55
第 8 表　B地区　柱，杭，ピット計測表…… 56
第 9 表　C地区　掘立柱建物跡 1 計測表…… 84
第 10 表　C地区　掘立柱建物跡 2 計測表…… 85
第 11 表　C地区　掘立柱建物跡 3 計測表…… 86
第 12 表　C地区　掘立柱建物跡 4 計測表…… 87
第 13 表　C地区　掘立柱建物跡 5 計測表…… 88
第 14 表　C地区　掘立柱建物跡 6 計測表…… 89
第 15 表　C地区　掘立柱建物跡 7 計測表…… 90
第 16 表　C地区　掘立柱建物跡 8 計測表…… 91
第 17 表　C地区　ピット，土坑，炉跡計測表…… 100
第 18 表　D地区　掘立柱建物跡 1 計測表…… 117
第 19 表　D地区　掘立柱建物跡 2 計測表…… 118
第 20 表　D地区　掘立柱建物跡 3 計測表…… 119
第 21 表　D地区　掘立柱建物跡 4 計測表…… 120
第 22 表　D地区　柱計測表…… 122
第 23 表　D地区　炉跡計測表…… 124
第 24 表　E地区　掘立柱建物跡 1 計測表…… 134
第 25 表　E地区　掘立柱建物跡 2 計測表…… 134
第 26 表　E地区　炉跡計測表…… 138
第 27 表　E地区　土坑計測表…… 138
第 28 表　G地区　掘立柱建物跡計測表…… 149
第 29 表　H地区　礎石建物跡計測表…… 159
第 30 表　H地区　掘立柱建物跡計測表…… 160
第 31 表　H地区　土坑，ピット計測表…… 162
第 32 表　Ⅰ地区　炉跡，土坑計測表…… 177
第 33 表　M地区　竪穴建物跡 1 計測表…… 199
第 34 表　M地区　竪穴建物跡 2 計測表…… 199
第 35 表　M地区　土坑計測表…… 203
第 36 表　縄文時代遺物観察表…… 205
第 37 表　古墳時代～古代遺物観察表…… 205
第 38 表　A地区　遺物観察表…… 206
第 39 表　B地区　遺物観察表(1)…… 207
第 40 表　B地区　遺物観察表(2)…… 208
第 41 表　B地区　遺物観察表(3)…… 209
第 42 表　B地区　遺物観察表(4)…… 210
第 43 表　C地区　遺物観察表(1)…… 211
第 44 表　C地区　遺物観察表(2)…… 212
第 45 表　D地区　遺物観察表(1)…… 213
第 46 表　D地区　遺物観察表(2)…… 214

第 47 表　E 地区　遺物観察表(1)…… 215
第 48 表　E 地区　遺物観察表(2)…… 216
第 49 表　F 地区　遺物観察表…… 216
第 50 表　G 地区　遺物観察表…… 216
第 51 表　H 地区　遺物観察表…… 217
第 52 表　I 地区　遺物観察表…… 218
第 53 表　J 地区　遺物観察表…… 219
第 54 表　K 地区　遺物観察表…… 219
第 55 表　L 地区　遺物観察表…… 219
第 56 表　M 地区　遺物観察表…… 220
第 57 表　樹種同定結果一覧表…… 229
第 58 表　年代測定結果一覧表…… 230

図　版　目　次

遠景……巻頭図版 1
曲輪 I 土塁，空堀 I ……巻頭図版 2

図版 1　A 地区…… 249
図版 2　B 地区(1)…… 250
図版 3　B 地区(2)…… 251
図版 4　B 地区(3)…… 252
図版 5　B 地区(4)…… 253
図版 6　B 地区(5)…… 254
図版 7　B 地区(6)…… 255
図版 8　B 地区(7)…… 256
図版 9　B 地区(8)…… 257
図版 10　B 地区(9)…… 258
図版 11　C 地区(1)…… 259
図版 12　C 地区(2)…… 260
図版 13　C 地区(3)…… 261
図版 14　C 地区(4)…… 262
図版 15　C 地区(5)…… 263
図版 16　C 地区(6)…… 264
図版 17　D 地区(1)…… 265
図版 18　D 地区(2)…… 266
図版 19　D 地区(3)…… 267
図版 20　D 地区(4)…… 268
図版 21　D 地区(5)…… 269
図版 22　E 地区(1)…… 270
図版 23　E 地区(2)…… 271
図版 24　E 地区(3)…… 272
図版 25　E 地区(4)…… 273
図版 26　E，F 地区…… 274
図版 27　G 地区(1)…… 275
図版 28　G 地区(2)…… 276
図版 29　H 地区(1)…… 277
図版 30　H 地区(2)…… 278
図版 31　H 地区(3)…… 279
図版 32　H 地区(4)…… 280
図版 33　H 地区(5)…… 281
図版 34　H 地区(6)…… 282
図版 35　H 地区(7)…… 283
図版 36　H 地区(8)…… 284
図版 37　H 地区(9)…… 285
図版 38　H 地区(10)…… 286
図版 39　I 地区(1)…… 287
図版 40　I 地区(2)…… 288
図版 41　I 地区(3)…… 289
図版 42　I 地区(4)…… 290
図版 43　I 地区(5)…… 291
図版 44　I 地区(6)…… 292
図版 45　I 地区(7)…… 293
図版 46　I 地区(8)…… 294
図版 47　J 地区(1)…… 295
図版 48　J 地区(2)…… 296
図版 49　J 地区(3)…… 297
図版 50　J 地区(4)…… 298
図版 51　K 地区(1)…… 299
図版 52　K 地区(2)…… 300
図版 53　K 地区(3)…… 301
図版 54　L 地区…… 302
図版 55　M 地区(1)…… 303
図版 56　M 地区(2)…… 304
図版 57　M 地区(3)…… 305
図版 58　M 地区(4)…… 306
図版 59　空撮(1)…… 307
図版 60　空撮(2)…… 308
図版 61　空撮(3)…… 309
図版 62　空撮(4)…… 310
図版 63　空撮(5)…… 311
図版 64　空撮(6)…… 312
図版 65　空撮(7)…… 313

図版 66　空撮(8)…… 314
図版 67　空撮(9)…… 315
図版 68　縄文・古墳時代・古代遺物…… 316
図版 69　青磁，火鉢…… 317
図版 70　A地区　遺物(1)…… 318
図版 71　A地区　遺物(2)…… 319
図版 72　B地区　遺物(1)…… 320
図版 73　B地区　遺物(2)…… 321
図版 74　C地区　遺物(1)…… 322
図版 75　C地区　遺物(2)…… 323
図版 76　D地区　遺物(1)…… 324
図版 77　D地区　遺物(2)…… 325
図版 78　E地区　遺物…… 326
図版 79　E,F,G地区　遺物…… 327
図版 80　H地区　遺物…… 328
図版 81　Ⅰ地区　遺物…… 329
図版 82　Ⅰ,J,L地区　遺物…… 330
図版 83　M地区　遺物…… 331
図版 84　鉄滓他,M地区土坑墓出土六道銭 …… 332
図版 85　金属器，鉄滓…… 333
図版 86　木製品(1)…… 334
図版 87　木製品(2)…… 335
図版 88　木製品(3)…… 336
図版 89　石器(1)…… 337
図版 90　石器(2)…… 338

第１章　発掘調査の経過

第１節　調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は，文化財の保護と活用を図るため，各開発関係機関との間で事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて事前に協議し，諸開発との調整を図ってきた。

この事前協議制に基づき，国土交通省九州地方整備局川内川河川事務所（以下，川内川河川事務所）は「川内川激甚災害対策特別緊急事業」の計画における堤防建設工事などに先立って，対象地内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下，県文化財課）に照会した。

これを受けて，県文化財課は遺跡台帳で照会したところ，当該地域に周知の遺跡である虎居城跡が所在することが判明した。その後，川内川河川事務所，鹿児島県教育委員会，さつま町教育委員会はその取扱いについて協議し，平成20年度と21年度に記録保存調査を実施することになった。

平成20年度の調査は鹿児島県立埋蔵文化財センターとさつま町教育委員会とで実施し，平成21年度の調査は県立埋蔵文化財センターで実施することとなった。

国土交通省，県文化財課，県立埋蔵文化財センター及び分水路施行業者との間で発掘調査の工程について協議が行われた。分水路建設に直接関わるエリアに加え，工事用道路建設に伴うエリアも追加され，発掘調査が行われた（L地区，第５図参照）。

平成20年度の調査対象面積は40,200㎡であった。４月～５月は国土交通省による委託により調査対象地区の樹木の伐採作業が業者により行われることとなった。そのため５月は地区を分けて業者による伐採作業と発掘調査が平行して実施された。

平成21年度は調査対象面積が19,250㎡であった。７月にはB地区北側から本格的な分水路建設に伴う掘削工事が始まり，発掘調査と業者による掘削工事が隣接して行われることとなった。８月にはＫ地区の伐採作業が業者により実施されることとなった。よって８月は地区を分けて伐採作業と発掘調査が実施された。

整理作業，報告書作成は平成21，22年度に県立埋蔵文化財センターで実施することとなった。平成20年度にさつま町が調査した遺物，作成した図面，写真等は県立埋蔵文化財センターが作成したものと統合して報告書作成を行った。

第２節　事前調査

虎居城跡は遺跡台帳と照合の結果，周知の遺跡であることが判明し，県文化財課と県立埋蔵文化財センターは平成19年12月６日，平成20年3月６日に事前調査を実施した。踏査による調査の結果，対象区域は杉などの樹木に広く覆われており，本調査のための伐採作業の必要性や曲輪や土塁，石切場の位置，広がり等を確認した。

第3節　本調査

１　調査体制

⑴平成20年度

事業主体	国土交通省九州地方整備局
	川内川河川事務所
調査主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター
	所長　宮原　景信
調査企画	次長兼総務課長　平山　章
	次長兼南の縄文調査室長　池畑　耕一
	調査第一課長　青﨑　和憲
	主任文化財主事
	兼第一調査課第二調査係長　井ノ上秀文
調査担当	文化財主事　中村　和美
	文化財主事　永濵　功治
	文化財主事　有馬　孝一
	文化財主事　福薗　慶明
事務担当	総務係長　紙屋　伸一
調査指導	鹿児島県文化財保護審議員　三木　靖
	広島大学教授　三浦　正幸
	鹿児島大学教授　森脇　広
	鹿児島県立短期大学教授　揚村　固
	国立歴史民俗博物館　千田　嘉博
	琉球大学准教授　後藤　雅彦
	鹿児島国際大学講師　太田　秀春

さつま町教育委員会

事業主体	国土交通省九州地方整備局
	川内川河川事務所
調査主体	さつま町教育委員会
企画・調整	さつま町教育委員会文化課
調査統括	さつま町教育委員会
	教育長　福滿　隆德
調査企画	文化課課長　川添　俊行
調査担当	主事　小倉　浩明
	調査員　佐藤　真人

事 務 担 当　主　　事　村原　政樹
調 査 指 導　鹿児島県文化財保護審議員　三木　　靖

⑵平成21年度

事 業 主 体　国土交通省九州地方整備局
　　川内川河川事務所
調 査 主 体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
調 査 統 括　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　　所　　長　山下　吉美
調 査 企 画　次長兼総務課長　齊藤　守重
　　次長兼南の縄文調査室長　青﨑　和憲
　　調査第一課長　中村　耕治
　　主任文化財主事
　　兼第一調査課第二調査係長　宮田　栄二
調 査 担 当　文化財主事　木之下悦郎
　　文化財主事　吉岡　康弘
　　文化財主事　永濵　功治
　　文化財主事　有馬　孝一
　　文化財主事　羽嶋　敦洋
　　文化財主事　福薗　慶明
事 務 担 当　総務係長　紙屋　伸一
調 査 指 導　鹿児島県文化財保護審議員　三木　　靖

2　調査経過

調査経過については，調査日誌を元に主な出来事を月単位で記す。

1　平成20年度（実働168日）

H20.5.8～5.28
機材搬入，環境整備，オリエンテーション，伐採作業
A地区　帯曲輪表土剥ぎ，精査，トレンチ設定，掘り下げ
A地区　帯曲輪表土剥ぎ，掘り下げ，炉跡検出
おきたの城表土剥ぎ（～5／21），確認トレンチ掘り下げ，拡張部掘り下げ，堀部精査
塩の城　先行トレンチ掘り下げ

H20.6.3～6.27
Ⅰ地区　帯曲輪炉跡検出・炉跡ミニトレ掘り下げ・実測
C地区　先行トレンチ掘り下げ，土塁平板測量，城下部分トレンチ設定　掘り下げ
B地区　空堀表層除去（重機）・トレンチ掘り下げ・写真撮影
H地区　空堀トレンチ掘り下げ・土層断面実測
Ⅰ地区　帯曲輪トレンチ掘り下げ
J地区　空堀トレンチ掘り下げ，石列検出
E地区　環境整備
D地区　谷部重機による表土剥ぎ
虎居城発掘調査連絡会（第1回）
（株）新和技術コンサルタント　杭打ち（～7／4）

H20.7.1～7.28
B地区　トレンチ掘り下げ
D地区　トレンチ掘り下げ
E地区　トレンチ掘り下げ
H地区　表土剥ぎ（重機），トレンチ掘り下げ・溝状遺構検出・掘り下げ・写真撮影・実測
J地区　石列検出作業・実測・石列トレンチ掘り下げ，道路敷石写真撮影
C地区　帯曲輪表土剥ぎ，土塁測量
7.9　空撮（県立埋文センター実施）
7.19　現地説明会（さつま町教委実施）

H20.8.1～27
C地区　表土剥ぎ，遺構検出・帯曲輪掘り下げ，炉跡検出
H地区　遺構検出・掘り下げ・溝状遺構実測（平板），柱（？）検出・実測
J地区　トレンチ清掃・写真撮影・断面北壁土層断面実測，石列精査・石列写真撮影・掘り下げ，石列断面実測，土坑（？）写真・半裁・完掘・写真，遺物出土状況写真撮
第2回虎居城跡発掘調査連絡会
健康診断：県保健センター
現地指導者：森脇　広教授（鹿児島大）

H20.9.1～29
H地区　掘り下げ，土層断面写真撮影・実測，溝状遺構写真撮影・平板実測，礎石建物跡写真撮影，ピット断面写真撮影・実測，確認トレンチ掘り下げ
C地区　掘り下げ，西側帯曲輪掘り下げ，炉跡・土層断面写真撮影，土塁掘り下げ，遺構検出
J地区　掘り下げ，礫出土状況写真撮影，P-5区トレンチ北壁写真撮影・実測，遺物一括取り上げ，遺物出土状況写真撮影，石列・杭・礫面掃除・写真撮影，下層確認トレンチ掘り下げ
D地区　土層断面実測
E地区　表土剥ぎ

H20.10.1～28
Ｃ地区　ピット掘り下げ，土塁清掃写真撮影，虎口検出，炉跡ミニトレンチ掘り下げ
Ｈ地区　土層断面写真撮影，表土剥ぎ（重機），木器出土状況写真撮影
Ｊ地区　掘り下げ・トレンチ掘り下げ・トレンチ内礫集中区写真撮影，トレンチ内溝状遺構検出・写真撮影，溝状遺構平板実測，遺物取り上げ（一括）・木製品（？）出土状況写真撮影，木製品・自然木取り上げ
Ｌ地区　（工事用道路部分）トレンチ設定掘り下げ（1～6トレンチ）・調査前写真撮影，堀切精査
Ｋ地区　トレンチ設定，掘り下げ
Ｅ地区　掘り下げ，抜根
国交省との連絡会議

H20.11.5～27
Ｃ地区　ピット掘り下げ，土塁手前溝状遺構掘り下げ・写真撮影，礎石検出，炉跡半裁，虎口検出
Ｈ地区　溝掘り下げ・写真撮影，木製品出土（竹製品，漆製品，板材）・取り上げ・竹製品実測，柱痕跡（1/4）掘り下げ，遺物出土状況写真撮影，土層断面実測
Ｊ地区　溝（堀）検出・埋土掘り下げ・写真撮影，木製品出土状況写真撮影・取り上げ，礫敷き（道？）検出
Ｂ地区　確認トレンチ掘り下げ（トレンチ2か所重機）・確認トレンチ設定
Ｄ地区　トレンチ掘り下げ，礫敷（道路？）写真撮影，中の城入口東側トレンチ設定・掘り下げ，柱痕跡・ピット検出・写真撮影・配置（トータル），焼土跡（炉跡？）検出
Ｌ地区　調査区内清掃
現地説明会準備
11.8現地説明会実施（県立埋文センター実施）
11.13　空撮（さつま町実施）
工程会議
現地指導者：三木靖（鹿国際短期大学名誉教授）

H20.12.1～24
Ｃ地区　虎口検出・写真撮影，ピット検出・掘り下げ・観察表記入，掘立柱建物跡配置確認，溝状遺構掘り下げ
Ｆ地区　土層断面実測・写真撮影，トレンチ設定・掘り下げ
Ｈ地区　溝掘り下げ・溝断面・柱痕跡実測・遺物写真撮影，平板実測（溝，ピット），竹製品出土位置平板実測，遺物取り上げ
Ｄ地区　重機表土剥ぎ，溝状遺構写真撮影・平板実測，ピット・柱痕検出状況写真撮影，炉跡半裁・実測
Ｊ地区　溝検出
Ｄ・Ｊ地区　重機表土剥ぎ，溝（堀）検出，溝断面実測（J地区），遺物出土状況写真撮影（D地区），漆器（木製椀）写真撮影・取り上げ，柱穴掘り下げ・写真撮影・実測
竹製品取り上げ（内山）
見学：鹿児島工業高校生徒40名

H21.1.6～28
Ｄ地区　柱痕跡検出・写真撮影・実測，漆器椀検出，塩の城法尻側掘り下げ，堀断面清掃・写真撮影・断面実測，中の城法尻掘り下げ，北東側谷部土層断面ライン引き
Ｅ地区　掘り下げ，集石検出，土塁実測・掘り下げ，溝検出
Ｈ地区　溝完掘状況写真撮影，礎石建物跡清掃・礎石建物跡実測（（株）埋文サポート），杭列実測・半裁，空堀断面写真撮影
Ｃ地区　遺構検出，柱穴等遺構掘り下げ・実測，溝状遺構掘り下げ・写真撮影，ピット等実測（(株)埋文サポート）
Ｊ地区　堀断面実測（（株）埋文サポート）
Ｌ地区　トレンチ配置実測（トータル），法尻掘り下げ
Ｈ地区　竹製品写真撮影・実測，杭列実測
地下レーダー探査実施（琉球大学後藤准教授）
地下探査ポイント測量
現地指導者：揚村固（鹿県短大教授），後藤雅彦（琉球大学准教授）

H21.2.2～25
Ｃ地区　遺構検出，土層断面写真・実測，ピット等実測（業者），土塁礫検出，炉跡写真撮影，虎口検出
Ｈ地区　掘り下げ，木製品出土状況写真撮影・取り上げ，溝・柵検出状況写真撮影，地下探査ポイント測定（トータル），遺構検出，竹製品取り上げ（切り取り，液体チッ素），溝状遺構掘り下げ，漆椀・下駄・横架材？出土，杭列実測，堀完掘状況写真撮影，掘立柱建物跡検出状況写真・実測，土坑完掘状況写真撮影，杭列完掘状況写真・実測，礎石建物跡掘り下げ・井戸掘り下げ・写真

Ｄ地区　中の城法尻掘り下げ，塩の城法尻土層断面注記・ポイント測定，谷部土層断面実測，堀検出，Ｓ－10区トレンチ設定掘り下げ，炉跡検出状況写真撮影・実測，ピット検出，堀出土土師器実測・取り上げ
Ｉ地区　掘り下げ・遺構精査
2.6　空撮（県立埋文センター実施）
現地指導者：三浦正幸（広島大学教授），三木靖（鹿国際短期大学名誉教授，さつま町指導依頼），太田秀春（鹿国際大講師）

H21.3.2～19
Ｃ地区　遺構精査，ピット実測，虎口礫実測，土坑・炉跡実測
Ｄ地区　谷部トレンチ（S-10区），掘り下げ，土層写真撮影，ピット掘り下げ，実測（トータル），炉精査・写真撮影・実測，空堀掘り下げ，Ｓ－10区トレンチ土層断面実測，柱痕跡検出，溝状遺構写真撮影・実測・柱痕取り上げ，空堀掘り下げ，土師器出土状況実測
Ｈ地区　掘立柱建物跡写真撮影・掘り下げ・実測，ピット写真撮影・実測，杭実測・取り上げ，土坑・溝配置図作成，木樋実測，井戸完掘・写真撮影
Ｉ地区　掘り下げ，精査，礫検出・写真撮影
Ｅ地区　掘り下げ・遺構検出，ピット検出
木製品シーラーパック
空撮（県立埋文センター実施）
国交省との協議
遺跡内片付け，発掘道具等整理，荷出し，リース等物品引渡し
調査終了

２　平成21年度（実働102日）

H21.4.15～28
発掘機材荷下ろし
Ｃ地区　精査，遺構掃除・掘り下げ・実測，遺構検出・実測（ピット，虎口）
Ｉ地区　溝掘り下げ・西側溝検出（掃除），遺構検出ピット掘り下げ（３㎝）・写真撮影
Ｅ地区　集石実測・溝断面精査，炉跡実測
中央道路　表土剥ぎ（重機），H21-1T掘り下げ，写真撮影
現地協議

H21.5.1～28
Ｃ地区　遺構検出，実測（虎口，平板）・炉跡・虎口実測，土坑実測，遺構完掘状況写真撮影
Ｉ地区　グリッドベルト土層断面実測・ピット掘り下げ・実測・完掘状況写真撮影，トータル実測
中央道路　表土剥ぎ
Ｂ地区（北）　空堀掘り下げ，木製品写真撮影・取り上げ，空堀断面写真撮影・実測
Ｂ地区（谷側）　トレンチ北壁土層断面実測・写真撮影
Ｂ地区（中央道路）　溝，土坑検出・半裁，石列検出
Ｂ地区（塩の東側）　コンタ図作成
Ｍ地区　トレンチ設定・掘り下げ，坩堝実測
土坑墓半掘・実測
Ａ地区　トレンチ設定，掘り下げ
現地協議

H21.6.1～26
Ａ地区　トレンチ拡張部分掘り下げ，写真撮影・実測，土層断面図作成，設定・掘り下げ
Ｂ地区（東）　掘り下げ，空堀検出状況写真撮影，溝内礫写真，木器写真撮影・取り上げ，土師器実測・写真撮影，溝断面写真撮影・実測，柱痕跡配置トータル実測・取り上げ，柱痕跡・杭検出・写真撮影・トータル実測，暗渠断面実測・写真撮影，建物跡等写真撮影
Ｂ地区（南東）　掘り下げ，石列周辺精査
Ｂ地区（南）　石列周辺・空堀掘り下げ・実測，重機表土剥ぎ
Ｂ地区（南西）　掘り下げ，杭痕跡検出・実測・写真撮影，遺物出土状況写真，柵，溝（空堀）断面写真撮影・実測，土層断面実測・写真撮影，石列周辺掘り下げ，木器写真撮影
Ｂ地区（南西（通路））　溝掘り下げ
Ｂ地区　溝実測
Ｂ地区（H側）　柵検出，実測
Ｍ地区　掘り下げ，遺構検出
Ｍ地区（Ｉ地区下）　掘り下げ，精査
協議（国交省・文化財課）
木製品取り上げ（椀等）内山文化財主事
現地説明会準備
実測委託（（株）新和技術コンサルタント）

H21．7.1～28
Ｂ地区　表土剥ぎ，空堀断面写真撮影・実測（委託），地形測量（委託），容器・木樋・柱痕跡実測，溝実測（トータル），木樋取り上げ，遺構実測，コンタ作成，礫出土状況写真撮影
空撮実施

Ａ地区　掘り下げ
Ｍ地区　掘り下げ，遺構検出，竪穴建物跡掘り下げ，井穴前重機による表土剥ぎ，竪穴建物跡実測，井穴前のトレンチ土層断面実測
H21.7.4（土）現地説明会532名見学
木器シーラーパック
協議（国交省，林建設，県立埋文センター）
現地指導者：上村俊雄（鹿国大教授），三木靖（鹿国際短期大学名誉教授）
遺跡見学：盈進児童クラブ（40名）

H21.8.1～28
Ｂ地区　掘り下げ，遺構（溝，柱痕跡，礫敷）検出，写真撮影，実測
Ｍ地区　掘り下げ，遺構検出・実測
Ｍ地区（井穴）入口付近掘り下げ，完掘，写真撮影，計測
Ｍ地区（石切場）加工痕のある石検出
Ａ地区　完掘写真
Ｂ地区　遺構実測，コンタ図作成（トータル）
木製品シーラーパック
協議
石切場周辺の伐採開始（林建設）
8／17～28は職員だけの調査

H21.9.1～28
Ｈ地区　表土剥ぎ（重機），掃除，石切場検出・写真撮影・実測（トータル）
Ｉ地区　現況写真撮影，掘り下げ，トレンチ掘り下げ・完掘状況写真撮影，土塁？断面写真撮影
Ｋ地区　トレンチ設定・掘り下げ・現況写真撮影，石切場検出，トレンチ断面写真撮影・実測，業者伐採

H21.10.1～28
Ｈ地区　空堀掘り下げ・完掘状況写真，おきた側斜面トレンチ掘り下げ，炭窯検出，石切場完掘・写真撮影，ピット掘り下げ・写真撮影・実測
Ｋ地区　石切場検出，トレンチ設定・掘り下げ・断面写真撮影・実測
Ｉ地区東側（道路横）空堀検出・完掘・写真撮影
調査区引き渡し立ち合い
現地指導者：森脇広（鹿大教授），三木靖先生
物品，機材，発掘道具等整理，片付け
荷出し，発掘調査終了

第３節　整理・報告書作成

1　調査体制

⑴　平成21年度

事業主体	国土交通省九州地方整備局 川内川河川事務所
作成主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
作成統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター 所長　山下　吉美
作成企画	次長兼総務課長　齊藤　守重 次長兼南の縄文調査室長　青﨑　和憲 主任文化財主事 兼調査第一課長　中村　耕治 主任文化財主事 兼第一調査課第二調査係長　宮田　栄二
作成担当	主任文化財主事 兼第一調査課第二調査係長　宮田　栄二 文化財主事　吉岡　康弘 文化財主事　永濵　功治
事務担当	総務係長　紙屋　伸一
作成指導	早稲田大学准教授　山本　信夫 (財)大阪府文化財協会主事　伊藤　幸司

⑵　平成22年度

事業主体	国土交通省九州地方整備局 川内川河川事務所
作成主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
作成統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター 所長　山下　吉美
作成企画	次長兼総務課長　田中　明成 次長兼南の縄文調査室長　中村　耕治 主任文化財主事 兼調査第一課長　長野　眞一 第一調査課第二調査係長　八木澤一郎
作成担当	文化財主事　青﨑　和憲 文化財主事　永濵　功治 文化財主事　羽嶋　敦洋 文化財主事　吉元　輝幸
事務担当	総務係長　大園　祥子
作成指導	西南学院大学教授　高倉　洋彰 鹿児島国際大学准教授　太田　秀春 鹿児島県文化財保護審議員　三木　靖
企画担当	文化財主事　関　明恵 文化財研究員　森　幸一郎

1　整理作業，報告書作成経過

整理作業日誌を元に主な出来事を月単位で記す。

⑴　平成21年度　整理作業

H21.4.6～4.28

遺物水洗い，ニス塗り，注記，接合，遺物整理，図面・写真整理

H21.5.1～5.28

遺物注記（C地区他），接合（D，H，I，J地区他），遺物整理，図面・写真整理

H21.6.1～6.26

接合（C，E地区他），図面整理（E，G地区他），ピット選別

H21.7.1～7.28

遺物整理・分類，接合，図面整理

H21.8.3～8.28

遺物水洗い，遺物整理，遺物復元部色塗り，実測（陶磁器，土師器等）

H21.9.1～9.28

遺物水洗い，遺物注記，実測（陶磁器，土師器等）

H21.10.1～10.28

遺物注記，接合，図面整理

H21.11.2～11.27

遺物水洗い（石器他），注記，接合（A，B，D，H，J地区他）図面整理，写真整理，土層断面図トレース

H21.12.1～12.22

遺物接合，土層断面図・遺構図トレース，柱痕跡図面整理・リスト作成・入力

H22.1.5～1.28

遺物接合（A，B地区等），図面整理，木器データ入力，遺物実測（青磁，土師器），遺構図トレース

H22.2.1～2.24

遺物接合・分類・実測（青磁，土師器），図面整理，遺構図トレース

H22.3.1～3.19

遺物・図面整理，遺構図トレース

⑵　平成22年度　報告書作成

H22.4.7～4.27

遺物分類，注記，接合，遺物実測（土師器，青磁，白磁，青花，縄文土器，木製品，金属製品），遺構図面整理，遺構トレース，拓本（縄文土器），デジタル処理（データ統合，地形図作成）

H22.5.6～5.28

遺物分類，注記，接合，復元，遺物実測（土師器，青磁，白磁，青花，炻器，須恵器，瓦質土器，陶器，羽口，石製竈，木製品，金属製品，鉄滓），実測修正，遺物トレース，遺構図面整理，遺構トレース，拓本（縄文土器，土師器，擂鉢，火鉢，古銭），拓本修正，金属製品レントゲン撮影，金属製品錆びおとし，木製品写真撮影，デジタル処理（地形，遺構配置図作成）

H22.6.1～6.28

遺物補強，復元，遺物実測，遺物トレース（青磁，青花，染付，土師器，擂鉢，火鉢，陶器），拓本，拓本貼り，遺構図面整理，遺構トレース，木製品仮レイアウト，観察表作成（土師器），金属器仕分け，デジタル処理（データ統合，地形，遺構配置図作成）

H22.7.1～7.27

遺物復元，遺物実測（土師器，坩堝，木器），遺物トレース（坩堝，カムィヤキ），拓本（古銭，カムィヤキ），拓本貼り，遺構図面整理，遺構トレース（ピット），遺構・遺物仮レイアウト，デジタル処理（遺構トレース，配置図作成）

H22.8.2～8.27

遺物実測，トレース，拓本，遺構図面整理，遺構トレース，遺構・遺物仮レイアウト，デジタル処理（遺構トレース，配置図作成）

H22.9.1～9.28

遺物実測，トレース，遺構トレース，遺構・遺物仮レイアウト，観察表作成，デジタル処理（遺構トレース，配置図作成），遺物写真撮影，木製品整理・水替え

H22.10.1～10.28

遺物実測修正，遺物トレース，拓本，復元，写真撮影，遺構トレース，遺構・遺物仮レイアウト，デジタル処理（遺構トレース，配置図作成），科学分析試料選別，遺構・遺物計測，観察表作成，石切場断面図作成，三木靖（鹿児島国際短期大学名誉教授）整理指導，高倉洋彰（西南大学教授）遺物指導

H22.11.1～11.26

拓本，石切場断面図作成，遺構・遺物トレース，写真撮影，遺構・遺物仮レイアウト，遺構・遺物計測，観察表作成，文章執筆，木製品水替え・シーラーパック，太田秀春（鹿国大准教授）整理指導

H22.12.1～

レイアウト，文章執筆，遺物整理



現地説明会

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

虎居城跡は，鹿児島県の北西部の薩摩郡さつま町宮之城屋地に位置する。遺跡のあるさつま町は2005年（平成17年）に宮之城町，薩摩町，鶴田町の３町が合併して誕生した。北に出水市，大口市，西，南側に薩摩川内市，東に霧島市と接する。

遺跡の場所は，平成17年に統廃合された県立宮之城高等学校（現さつま町立宮之城中学校）の敷地及びその周辺に所在する。川内川に三方を囲まれた尾根状に突き出た立地は，まさに天然の要害であり，「松社城」「中の城」「塩の城」「小城」「おきたの城」と呼ばれる曲輪跡が確認できた。

虎居城跡を取り囲むように蛇行する川内川（せんだいがわ）は，九州山地の白髪岳（標高1,417m）南麓に発し南流，程なく宮崎県に入る。加久藤盆地を西流。鹿児島県に入り一旦南流，湧水町栗野で再び西流して大口盆地を潤す。伊佐市からは概ね南西流，薩摩川内市西方で東シナ海に注ぐ。流域面積は1,600k㎡で九州では筑後川に次ぎ第二の規模を誇る一級河川である。

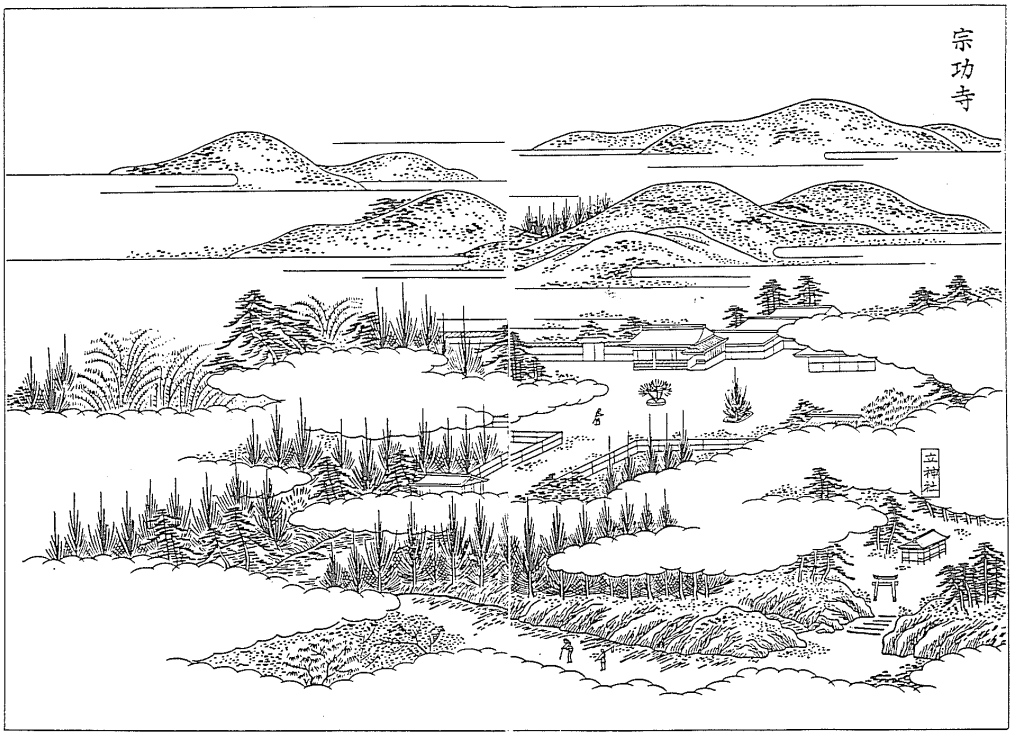
社会基盤では，主要都市へ通じる国道267号，367号，504号など，産業の展開や地域発展のための道路網が整備されており，各地域に向かう交通の要衝となっている。

平成18年７月，梅雨前線の停滞に伴う豪雨のために，川内川上流の観測所では降水量が1,165mmの年間総雨量の50％に相当する値を記録し，川内川流域では甚大な被害が出た。川内川流域では洪水が発生し，2,347戸が浸水する大きな被害を受けた。これを受けて2006年（平成18年）度から2010年（平成22年）度までの予定で直轄河川激甚災害対策特別緊急事業（激特事業）が実施された。さつま町に推込（しごめ）分水路を，曽木の滝に曽木の滝分水路を建設すると共に，各所で狭窄部の掘削，堤防や水門の新設などが行われる。鶴田ダムの洪水対策能力を強化する工事も実施された。

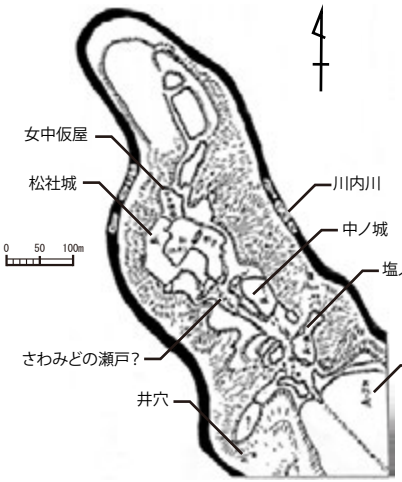
虎居城の対岸には宗功寺公園が整備されている。ここは慶長８年（1603年）頃にこの地の領主であった島津氏分家・宮之城家の当主であった島津忠長が菩提寺として建立した妙心寺末寺「大徳山宗功寺」（臨済宗）があった場所であった（第１図）。明治２年の廃仏毀釈により宗功寺は廃寺となったが，宮之城家の墓所だけは残され，跡地は墓所を鑑賞するための公園となった。

墓所自体は現在も宮之城家の管理下にあり，家型の特異な墓石などから鹿児島県指定史跡となっている。

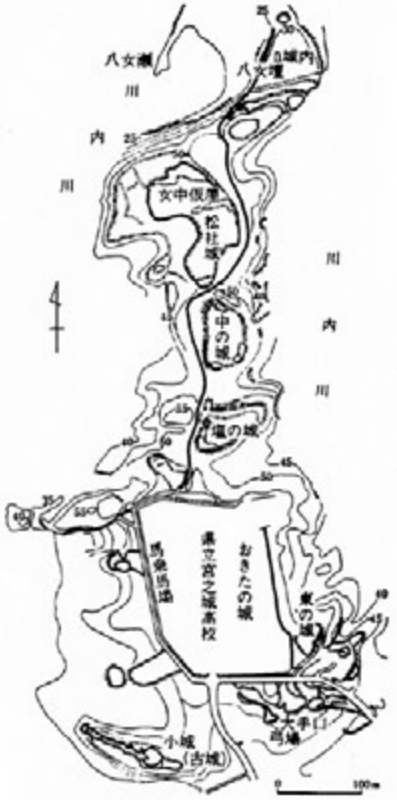
また，西の対岸には北薩広域公園が整備されている。



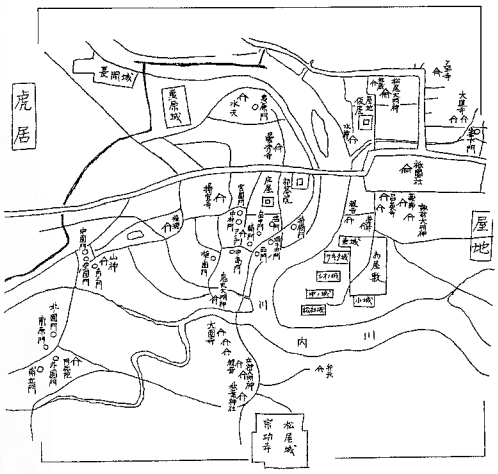
第１図　三国名勝図絵（宗功寺）



虎居城址平面図
福田信男氏「薩摩郡における
古城跡の調査」(昭和 12 年) より

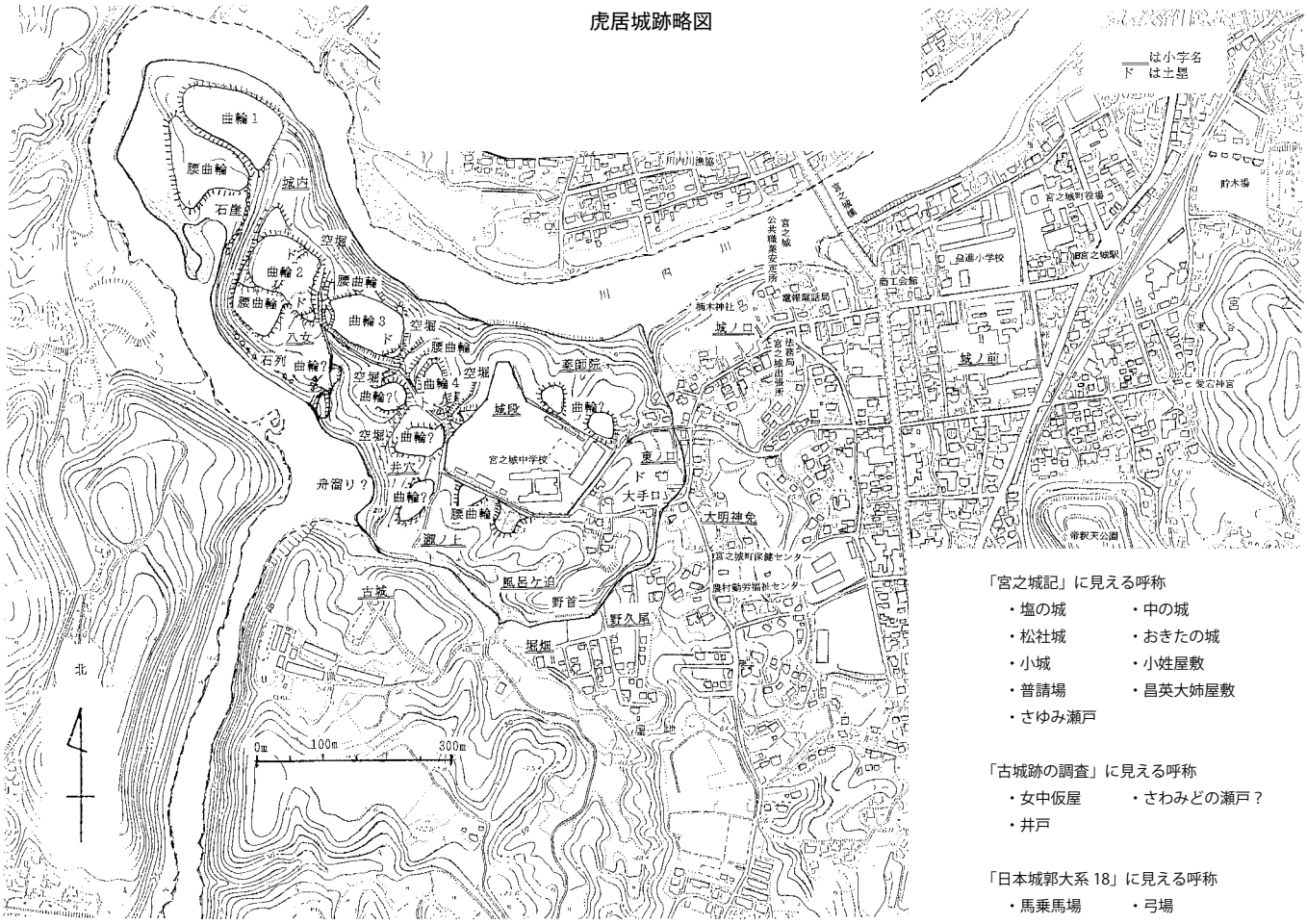


虎居城要図
「日本城郭大系 18」（昭和 54 年) より



「宮之城郷道路･門名図」文政 6 年 (1823 年) より
虎居内山軍兵衛画

虎居城跡略図



「宮之城記」に見える呼称
- 塩の城
- 中の城
- 松社城
- おきたの城
- 小城
- 小姓屋敷
- 普請場
- 昌英大姉屋敷
- さゆみ瀬戸

「古城跡の調査」に見える呼称
- 女中仮屋
- さわみどの瀬戸？
- 井戸

「日本城郭大系 18」に見える呼称
- 馬乗馬場
- 弓場

第２図　虎居城跡絵図等

第１表　遺跡地名表

番号	台帳	遺跡名	所　在　地	地形	遺跡の時代	備　考
1	39-9	**虎居城跡**	**さつま町屋地**	**台地**	**縄文・中世・近世**	
2	39-10	鼠ヶ城跡	さつま町田原	台地	平安	
3	39-62	簗詰	さつま町田原	河岸段丘	縄文・古墳	
4	39-74	北川	さつま町時吉・北川・焼畑他	台地	縄文・弥生～古墳	
5	39-46	中城跡	さつま町時吉字中城	台地	中世	中世城館跡
6	39-15	時吉城跡	さつま町時吉	台地	古墳・中世	
7	39-42	鶴ヶ城跡	さつま町田原字鶴ヶ城	台地	中世	中世城館跡
8	39-65	萩峯	さつま町時吉	山麓傾斜面	縄文～古墳	
9	39-64	赤道	さつま町時吉	山麓傾斜面	縄文	
10	39-12	田原古城跡	さつま町田原	台地	中世	
11	39-11	松尾城跡	さつま町虎居海老川	台地	縄文・中世	平成５・６・７年確認調査
12	39-35	宗功寺跡	さつま町虎居5254,5255	台地	近世	№39―１１内にあり，平成５・６・７年確認調査
13	39-120	後川	さつま町虎居西手	台地	縄文・古墳	
14	39-121	免田	さつま町虎居大角	台地	縄文・古墳	
15	39-122	原口	さつま町虎居大角・原口・堂ノ前・椿ノ下	椿ノ下，台地	古墳	
16	39-123	西ノ原	さつま町虎居甫立	台地	縄文・古墳	
17	39-125	大角原	さつま町虎居大角・甫立	台地	縄文～古墳	
18	39-126	登鹿倉	さつま町上向	台地	縄文・古墳	
19	39-38	轟原城跡	さつま町虎居字原口	台地	中世	中世城館跡・一部消滅・病院あり
20	39-6	轟原瀬ノ上	さつま町虎居轟原	低地	縄文（後）	
21	39-4	時吉瀬ノ上	さつま町時吉	河岸段丘	縄文（中・後）	昭和４６年出土
22	39-41	古城跡	さつま町屋地字古城	台地	中世	中世城館跡
23	39-49	巣山上段	さつま町屋地	台地	縄文・古墳・中世	平成５年分布調査
24	39-54	新堀	さつま町屋地	台地	縄文・古墳	
25	39-53	杪木堀	さつま町屋地	台地	縄文・古墳	
26	39-52	三角堀	さつま町船木西	台地	縄文・古墳～中世	
27	39-51	諏訪原	さつま町屋地	台地	縄文・古墳・近世	諏訪原の拡がり・一部消滅・平成４年分布調査 平成５年確認調査・平成６年本調査
28	39-50	柊崎	さつま町船木	台地	古墳・中世	屋地五日町と船木にまたがる
29	39-56	船木原	さつま町船木	台地	縄文・古墳	
30	39-58	下原	さつま町船木	台地	縄文・古墳	
31	39-57	原畑	さつま町船木	台地	縄文・古墳	遺物多量採取
32	39-60	坪井	さつま町船木	台地	縄文・古墳～中世	一部於天城跡
33	39-27	船木の古城跡	さつま町船木	台地	中世（室町）	中世山城跡
34	39-40	恋ノ巣城跡	さつま町船木字城ノ段	丘陵	中世	中世城館跡
35	39-92	宮ノ後	さつま町船木東	低地	古墳	
36	39-93	北ヶ原	さつま町船木東	低地	古墳・中世	
37	40-47	樋山	さつま町鶴田柏原字樋山	台地	縄文	
38	40-46	原田Ｂ	さつま町鶴田柏原	台地	縄文・古墳	
39	40-45	原田Ａ	さつま町鶴田柏原	台地	古墳	
40	40-43	原田後Ａ	さつま町鶴田柏原	台地	古墳	
41	40-40	原田前	さつま町鶴田柏原	河岸段丘	古墳	大前氏築城
42	40-19	椿城跡	さつま町鶴田柏原字御手水	台地	中世（鎌倉）	大前氏築城
43	40-18	長岡城跡	さつま町鶴田柏原字城ノ迫2847の外	台地	中世（鎌倉）	
44	40-41	御手水	さつま町鶴田柏原	河岸段丘	古墳	
45	40-42	下願寺	さつま町鶴田柏原	河岸段丘	縄文・古墳・中世	
46	40-55	水天向	さつま町鶴田柏原	自然堤防	縄文後晩・古墳・古代・中世	



第３図　周辺遺跡地図

S = 1/25,000

第２節　歴史的環境

虎居城跡は，鹿児島県薩摩郡さつま町大字宮之城屋地の北西側に位置する。半島状に突き出た城の外周を，鹿児島県内の唯一の大河川である川内川が東側を流れ，城の先端部の北西部で大きく屈曲し南側の下流に向かう。

虎居城の場所選定や築城にあたっては，自然の地形を活かし川が城を取り囲み，堀として利用できるこの場所を最適地として選び，城造りがなされたといえる。

さつま町は，平成17年３月（2005年），平成の市町村合併により旧宮之城町・鶴田町・薩摩町が合併した町である。

さつま町内に所在する周知の遺跡は，宮之城地域内に128遺跡，鶴田地域内に72遺跡，薩摩地域内に35遺跡がある。遺跡の時代は，多くは縄文時代・古墳時代の遺跡，そして山城などの中世の時期の遺跡であるが，旧石器時代の細石器などの出土も報告されている。

虎居城跡周辺の遺跡を見てみると，虎居城跡が所在する宮之城屋地地区から船木地区にかけては標高約75m前後の台地が川内川沿いに南側に拡がり，縄文時代から古墳時代の遺跡が多く存在している。また，川内川を挟んだ対岸の北側に位置する虎居地区から柏原地区についても同様である。

柏原地区にある小松原では，当地方の古墳時代の墓制とされる地下式板石積石室墓が発見され，昭和52年12月から翌年の１月（1977～1978年）にかけて調査が行われ，人骨片，刀片，鉄鏃が出土した。現在，小松原古墳として保存されている（さつま町指定文化財）。

平成21年（2009年），川内川激甚災害対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査としてさつま町教育委員会が調査を行った柏原地区の水天向遺跡では，縄文時代晩期，古墳時代，中世の遺構遺物の出土とともに，地下式板石積石室墓が１基確認された。

虎居城跡の北西，川内川対岸には松尾城及び宋功寺跡がある。宮之城町郷土史や宮之城記，薩隅日地理纂考によれば，「松尾城」は中世山城であり，「宗功寺」は島津藩政時代に宮之城島津家の菩提寺であったとされている。そして宗功寺跡は明治初期の廃仏毀釈による取り壊しがあるまで建立されていたことが記録されている。

山城跡は，「鹿児島県内の中世城館跡調査報告書（1987年・鹿児島県教育委員会）」によると，宮之城地域内に28城館，鶴田地区内に15城館，薩摩地区内に４城館の山城が報告されている。このうち虎居城跡周辺の中世山城には虎居城跡の南側に位置する古城跡，川内川を挟んで対岸に位置する松尾城跡，上流地域にあたる時吉地区に時吉城跡，虎居地区から柏原地区にかけて轟原城跡，長岡城跡などがある。

当地域の歴史や主な史跡などについて書かれている文書史料に，江戸時代中頃の編纂とされる「宮之城記」，「祁答院記」がある

現存しているものは，いずれも後の代に書写されたものであり，宮之城記は，近世鹿児島藩の中の宮之城郷のこれまでの歴史や主なできごと，そして社寺などについて記されている。宮之城記は２冊があり，そのなかの一冊には，後書きに「久方主の御代に土持新右衛門田部正博記之，享保二年の比歟，于時慶應三丁卯歳正月中橋佐五兵衛写之也」とある。

慶応３年（1867年）に写されたもので，久方主とは，宮之城島津家の７代島津久方（1692～1719年）のことで藩主島津綱貴（1650～1704年）の四男にあたり，宮之城島津家６代久洪（1662～1701年）の跡を継いでいる。この久方の代に家臣の土持新右衛門田部正博が編纂したもので，成立年代を享保２年（1717年）の頃であろうかとしている。

祁答院記は，数冊あり，中世から近世にかけて川内川の中流地域をさす地名である「祁答院」内の歴史，城跡や神社仏閣の由来など，そして旧記（古文書・棟札）を紹介している。祁答院記も宮之城記と同じく土持新右衛門田部正博の編によるもので，成立年代は享保14年頃（1729年）といわれている。

これらの史料に，虎居城についてどのように書かれているか見ていくと，宮之城記には最初に「尚久主一流歴代之譜并采邑宮城記」と書かれ，虎居城の位置や築城のこと，さらにそれぞれの城主の変遷の背景や経緯，そして宮之城島津家のことについて述べられている。

これによると，「宮城は，薗牟田・山崎・宮城・黒木・佐志・鶴田・長野・（※大村が脱か）の八郷の中間にあって，東南には鉾の尾峰，西北には上宮山(※紫尾山のこと)があり，自然の要害で堅固である。昔，大前氏は虎が臥した形にこの城を執り始めた。よって虎居城と号していた。大河(※川内川のこと)が郭の外を環っていて，逆波が漲り敵の進入を遮断することができる。そして大前氏は世々居城とした・・・・・」とある。

大前氏は，平安時代の万寿５年（1028年）に薩摩国の国司として下向した源氏の子孫といわれ，高城郡・東郷別府・薩摩郡・祁答院・入来院などを領域としていた。その一人に薩摩国在国司大前道助がいる。「平安遺文」の太治６年（1131年）の「薩摩国在国司大前道助請文案」，「入来文書」の「新田八幡宮観樹院文書」での康治元年（1142年）の「大前道助譲状案」に道助という名を見ることができる。そして，祁答院記には，「当院之古郡司　大前道助」と記している。

これらの史料から，虎居城が築城された時期を，大前道助の活動期である康治年間（1142～1143年）の頃とさ

れているところである。

続いて宮之城記には，「宝治年間（※正確には宝治２年(1248年)）に，渋谷庄の庄司重國の孫子吉岡は柏原重直といい，関東から下向し院郡司となる。五人の兄弟はともに皆将軍家の恩免を受け諸処の地頭となった。早河は車内實重といい薩摩郡東郷の城主となる。次吉岡は祁答院の城主となる。次は大谷重茂で祁答院鶴田の城主となる。次は禅師定心で入来院清敷の城主となる。次は落合重貞で薩州高城主となる。よって重直は古大前太郎道秀の亡き跡を継ぎ，それより以降孫子は次第に氏族を盛んにしていった・・・」とある。

重直の子孫達は，祁答院渋谷氏を名乗り虎居城を居城とし，約300年間もの間隆盛を高めていくことになる。

祁答院渋谷氏の領主の代数については通説があり，宮之城記・祁答院記では12代説，入来文書では13代説，その他14代説，16代説があるが，一般的には13代説がとられている。また，宮之城記では，最初の祁答院の城主を重直としているが，入来文書の入来院家系図では，重國の子光重には六人の男子がいて，三男の吉岡三郎重保が祁答院を称したとある。

ここでは13代説をとり，祁答院渋谷氏の主な出来事について述べてみることにする。

４代行重は，父重松の菩提のために，永仁年間（1293～1298年）に松尾山興全寺（佐志地内）を建てた（「祁答院記」）。その後，寺は近くに移されるなどしたが，今は，15世紀相当とされる本堂の内陣部分が現存している（鹿児島県指定文化財）。

６代公重は，柏原に黄龍山大願寺を創建する。今この地には，祁答院渋谷氏の領主や住職等の墓石塔が多く残っている（鹿児島県指定文化財）。

祁答院渋谷氏の頃の虎居城近辺での出来事について，次のような伝説などがある。

国道328号線沿いの平川地区に，「悪四郎石」と呼ばれる石塔がある（さつま町指定文化財）。石塔には，明徳４年（1393年）の銘があったといわれ，言い伝えによれば，出水の大重悪四郎が大軍を率いて虎居城を攻めにきた。しかし，なかなか川を渡ることが出来ず多くの兵が城下の川の中に押し込まれて戦死したという。地元では，中の城の北側にあたる川附近を「しごめ（推込）」と呼んでいる。

また，虎居城の先端部に「八女瀬」という瀬がある。この瀬の由来について宮之城記には，「この瀬は波が高く舟をやるには早い瀬である。古老の言い伝えるところによると，昔渋谷氏の息女が舟でこの瀬を下り遊覧していたところ，いかなる事であったろうか，息女が水に溺れ川底のみくつとなってしまった。お供をしていた女中達は驚き助けようと思い思いに川の中に飛び込んだが，七人の女中ともに波の底に沈んでしまい，息女共に女八人が水の泡と消えていった。これによりこの瀬を八女か瀬と名付けたという後，その死躰を取り上げ城裡の寺に葬った。法号徳英祐公禅定尼長禄三年巳卯二月七日，墳墓は八てうの壇に有り・・・」と。

これは，渋谷氏の娘が船遊びをしていたところ溺れてしまい，付き添いの女中７人とともに亡くなるという事故である。長禄３年（1459年）は，９代徳重の頃で，城内に「八女」という小字名があり，八女瀬に近い先端部の曲輪には数基の墓石塔がある。

10代重慶（重度）の頃になると，祁答院渋谷氏の勢力はさらに拡大し他の渋谷一族と共に守護島津忠昌（1463～1508年）に叛するようになる。これに対し，文明17年（1485年）島津方の祁答院攻めが開始される。これにより，薗牟田城が落とされ，大村城，久冨木城へと侵攻してきたが虎居城までは入ることができなかったという（「島津国史」「文明記」）。この戦いを，文明の大合戦といわれている。

享禄２年（1529年）正月，11代重武（？～1538年）は，島津氏の守護の跡継ぎをめぐる島津忠良（1492～1586年）と島津実久の大乱に乗じ姶良方面へ兵を進め，吉田城，帖佐新城を攻め落とし，これにより祁答院渋谷氏の勢力が姶良地方へと拡大した（「帖佐来由考」）。

ところがその後，帖佐城にいた重武の子良重（？～1566年）は，島津貴久（1514～1571年）に叛したため，天文23年（1554年）９月島津方による帖佐への攻撃が開始され，岩剣城などの大きな合戦が始まった。祁答院勢は，この一連の戦いに敗れ後退せざるを得なくなった。さらに弘治３年（1557年）４月，貴久勢は祁答院渋谷氏と行動を共にしていた蒲生氏の本拠蒲生城を落とし，蒲生範清は子の為清とともに虎居城の良重のもとへ逃れ，虎居城の対岸にある松尾城を居住とした（「旧記雑録」「宮之城記」）。

そして，最後まで島津方へ抵抗していた良重は，永禄９年（1566年）正月，虎居城内の松社城で最期を迎えることになる。

このことについて「宮之城記」には，次のように記している。

「・・・永禄八年の冬より平川名に行しゝ狩をして上宮山の嶽に小屋をうち山中にすまいをなして越年す，其時家臣等はおもひおもひ装束を持たせ上宮の嶽に登り年始之礼を遂ると今に傳ふ，去る程に良重の室はしつと深き人なれはかねて恨を含める事あり，是は薩州和泉の領主嶋津薩摩守義虎の姉也，仍て和泉よりひそかに磨を呼守刀をとかせらる，これ時分を以て良重を恨ん為なり，かくて良重は明る永禄九年正月十五日帰城す，室は待受し事なれは年始の御帰めてたしとて我と給仕を召れ夫より終日の酒宴なれは，良重は夢にもしらす前後もしらす

酔臥たり，妻室は守刀を抜持時分をうかかひ躍かゝつておもふさまにさし伏せたり，その時村尾亀三丸とて十二歳になりける小姓有，この有様をみるより早く良重の室を取て伏せ一刀にさし殺す，是までにて渋谷家滅亡す，この村尾亀三丸は後龍伯公より召出され村尾源左衛門と名乗る，良重法号を樹陰行鐵大禅定門といふ，墳墓は大願寺にあり，宮之城の松社は良重の死地なりと古老云傳ふ，近き比までは松社といふ社ありけると云」と。

鎌倉時代に下向し，永きにわたり祁答院地方を支配し，島津氏の三州統一にも強く抵抗し続けた祁答院渋谷氏の本流は，良重が妻に殺されるという悲劇的な事件により，事実上断絶することになる。

これにより，貴久の意志を嗣いだ島津義久（1533～1611年）は，弟の義弘（1535～1619年），歳久（1537～1592年）とともに，その後の元亀３年（1572年）木崎原で伊東氏を攻め，天正２年（1574年）には，肝付氏が降伏したため，島津氏による薩摩，大隅，日向の三州はほぼ統一されていった。

良重が亡くなり，虎居城が不在となったことにより，義弘が虎居城に移ってくる動きもあったようだが（「上井覚兼日記」），その弟である歳久が，天正８年（1580年）祁答院12か村（鶴田・求名・佐志・時吉・紫尾・柏原・湯田・船木・中津川・虎居・平川・久冨木）を賜り，虎居城に移ってくる。

島津氏は，三州統一後も勢力をさらに九州北部まで伸ばそうとした。このような島津氏の侵攻に，豊後の大友宗麟（1530～1587年）は耐えきれず，豊臣秀吉（1537～1598年）に救援を願い出た。秀吉は，義久に九州２分割の和解案を示すが，これを受け入れられず，とうとう天正15年（1586年）25万もの大軍を引き連れ，薩摩に乗り込んでくる。５月３日，川内の泰平寺に本陣をしいた秀吉のもとへ，義久は降伏を申し出で了承される。その後秀吉は，平佐城を見聞し川内川沿いにさかのぼり山崎城に入る。このとき虎居城にいた歳久は，病気を理由に秀吉に謁見しようとしなかった。そこで秀吉は，虎居城の歳久の様子を探るため52騎の兵を虎居城へと向かわせるが，船木の諏訪原に来たとき歳久の軍勢から追いかけられ，山崎城へ逃げる途中６騎が討ち取られたという（「島津国史」「旧記雑録」）。

そして，秀吉は山崎城を発ち船木の大村境の山手の方を通過し佐志から鶴田を経由して，大口へと向かう。

時は過ぎ，文禄元年（1592年）７月，秀吉から義久のもとへ朱印状が届く。朱印状の内容は，これまでの歳久のとった態度が気に入らず，歳久の誅殺を厳命するものであった。虎居城に居た歳久は，このことで兄義久に呼び出され，家臣を率い鹿児島へ出向き謁見する。ところがその帰り際，竜ケ水附近で義久の軍勢の待ち伏せに遭い供の家臣達は討ち死に，とうとう歳久も自害へと追いやられることとなった。この報はすぐ虎居城に届き，歳久の室悦窓夫人と孫の袈裟菊丸（常久）は家臣等とともに籠城することになる（「日置島津家文書」）。

孫の島津常久（？～1614年）は，４年後日置を宛がわれ，歳久を祖として日置島津家が起こり近世鹿児島藩の一所持の家格となる。

歳久を失ったことにより，虎居城は一時期不在となったが，太閤検地の知行割仕置により家臣の所替が行われ，これまで都城を本領としていた北郷左衛門尉時久（1530～1596年）が，孫の長千代丸とともに祁答院へ移り，虎居城に入ってくる。

ところが，慶長４年（1599年）３月，所替えにより都城を宛がえられていた伊集院忠真は，父忠棟（？～1602年）が京都伏見の島津藩邸で島津忠恒（家久）（1578～1638年）に殺されるという事件が起きた。これにより忠真は反乱を企て庄内の乱が勃発する。この時虎居城から北郷長千代丸（忠能）は兵を率いこの戦いに参戦している。忠真は義久に降伏し，北郷氏はまたもとの都城へ復帰することになる。

慶長５年（1600年）12月，島津貴久の弟尚久（1531～1562年）の子忠長（1551～1610年）が宮之城の地頭として移ってくる。忠長は，島津氏の三州統一や島原での竜造寺隆信との戦い，文禄の役，関ヶ原の戦いなどに参戦している人物である。虎居城の対岸の松尾城跡に菩提寺である宗功寺を建てる。そして，一所持の家格の宮之城島津家が始まる。

宮之城記には，城の経緯についてまた次のようにも書かれている。

「宮城　序文に委記候

昔大前氏はしめて此城を取始しに虎の臥したる形に順して築之なり，其時は城の名を虎居城と唱ふ今は村の名とせり，夫より渋谷か城と成りて十餘代居住す，中頃時吉の城を上の城と唱へ此城を下の城と唱ふ也，島津左衛門尉歳久領の比迄は下の城といふと見得たり，其の後北郷一雲領の時宮城と名付給ふといえり，城内に名所多し，塩の城，中の城，松社城，おきたの城，小城，小姓屋敷，普請場，歳久居城の時　太守義久公両度此城に駕を寄させ給ふ，又慶長之ころ図書頭忠長主の長女昌英大姉此城に移給ふ，旧跡御屋敷と号して今にあり，其砌家臣指宿治部入道猶存が居城は松社の地なり，竹田善左衛門，近藤孫右衛門，伊地知若狭，土持覚左衛門等のもの共其外数多之家臣共城内に令居城近藤屋敷と云傳ふ，且又城之大手をさゆみ瀬戸と云也，夏はすずしき瀬戸なれは　紹益様名付給ふと云傳たり」と。

これによると，城名を築城した時分は「虎居城」とい

い，北郷一雲（時久）の時に「宮城」と名付けたと述べているが，それ以前の島津歳久の居城の頃にすでに宮城といっていたと思われる（「日置島津家文書」）。また，紹益様とは忠長のことである。

さらに，城内には名所が多くあるとして，「塩の城」・「中の城」・「松社城」・「おきたの城」・「小城」の各曲輪名をあげている。また，島津忠長のときには，忠長の娘や多くの家臣達が城内に住んでいた様子が書かれている。

この曲輪名と位置関係については，その後の文政６年（1823年）に描かれた「宮之城郷絵図」にも表現されており，それによると，城内に入ると広い敷地の「御屋敷」，その右手の川内川上手に「東城」，続いて「おきた城」，「塩の城」，「中ノ城」，「松社城」があり，川内川の下手にあたる中ノ城と塩の城の間の向側に「小城」がある。

また，宮之城記には，次のことも記している。

「宮之城城内に一節　昌英様居住被成たる事有て，其時家中の面々も過分城内に居住す，然に大坂乱後城中の柄居不成事有て夫より昌英様城を御退被成也，松社の地は指宿治部少輔猶存か屋敷也，近藤源源右衛門か居所之地を近藤屋敷と今に云傳ふ」と。

大坂の乱，いわゆる慶長19年（1619年）の大坂冬の陣と翌年の夏の陣により豊臣氏は滅び，徳川氏による幕藩体制が始まる。元和元年（1615年）幕府は一国一城令を発布，大名の居城以外の城郭の破棄を命じることになる。宮之城記を見ると，このことによって虎居城もいくらか影響を受けていたことが感じられる。

今回の発掘調査では，Ⅰ地区曲輪Ⅲの呼び名を「近藤屋敷」として取り扱ったが，宮之城記や宮之城郷絵図による「小城」の可能性が高いといえる。また，川の下手に石切場が確認された。石切場がいつ頃からあったのか正確なことはわからないが，城内には普請場などの施設も有していたようである。

その他，城内の様子について，宮之城記には次のような記事がある。

「飛諏訪」として，「城内堀のめんに旧跡あり来由不詳」とある。

このことを「神社誌」（1935年鹿児島県神職会編）の中の宮之城屋地の諏訪大明神の神社明細帳の由緒書きを見ると，渋谷重保が薩州へ下向してきたときに信州諏訪上下の社を虎居村古野立というところに勧請した。天正年間に再興されたが元和年中（1615～1623年）に火難に遭い島津久元（1581～1643年・宮之城島津３代）のときに城内に移して奉ったが，幾年しないうちに再び天火の難にあったので，屋地村の五日町に移した。ということが書かれている。「飛諏訪」とは，久元の代に移された諏訪社のことであろうか。

また，「薬師院」の説明では，「此寺昔は城中薬師堂の辺にあり，近年寺を城外にうつす，古寺の跡有り来由不詳」と。

このように，城内には幾つかの社寺を建立していたことが覗える。

虎居城は大前氏の代に築城され，渋谷氏の代，島津歳久，北郷時久，そして島津忠長の代の頃までは，城としての機能を果たしていたようであるが，一国一城令の後，近世にいたっては宮之城島津家の家臣等の居住地となっていったようである。

文書史料によると，城名を始めは虎居城，そして下の城，また宮城（宮之城・みやのしやう）とも呼ばれており，この宮城が近世以降の宮之城の地名へと発展していくことになる。

【参考・引用文献】

土持新右衛門田部氏政博「宮之城記」写本　関盛充家蔵，『宮之城郷土史』宮之城町教育委員会，2000

土持新右衛門田部氏政博「祁答院記」写本『宮之城郷土史』宮之城町教育委員会，2000

「松尾城及び宗功寺跡⑵」　宮之城町埋蔵文化財発掘調査報告書⑸，宮之城町教育委員会，1995

「松尾城及び宗功寺跡⑶」　宮之城町埋蔵文化財発掘調査報告書⑺，宮之城町教育委員会，1997

「虎居城物語」　宮之城文化懇談会編，2001

「鹿児島県内の中世城館跡調査報告書」鹿児島県教育委員会，1987

第３章　発掘調査の方法と成果

第1節調査の方法

１　発掘調査の方法

虎居城跡は平成20，21年度に本調査を実施した。調査は，対象となる範囲を旧地形を基にＡ～Ｍの13地区に分けて実施した（第５図）。さらに国土公共座標値（－121,400，－525,400）を基準に，10m毎に基準杭を設置した（㈱親和技術コンサルタントへ委託）。グリッド名は基準から北側へ10m毎にA,B,C…，南側に10m毎にａ,ｂ,ｃ…とし，東側へ10m毎に１,２,３…，西側へ10m毎にア，イ，ウ…と設定した（第５図）。平成20年度は鹿児島県立埋蔵文化財センターがＡ，Ｂ，Ｃ，Ｄ，Ｆ，Ｈ，Ｊ，Ｌ，Ｍ地区を主に調査し，さつま町教育委員会がＥ，Ｇ，Ｉ地区を主に調査した。調査延べ面積は40,200㎡であった。平成21年度は鹿児島県立埋蔵文化財センターがＡ，Ｂ，Ｈ，Ｋ，Ｍ地区を調査した。調査延べ面積は19,250㎡であった。

調査対象範囲の旧地は杉，竹林で広く覆われており，発掘調査前に業者による伐採作業が行われた。遺構・遺物を保護するため，樹木は地表から30cm程度上部で伐採された。樹根が遺物包含層まで達する部分もあったため，遺構や遺物に影響を与えないように抜根作業を進めた。樹根の影響がなく，表土と想定される第Ⅰ層と無遺物層と確認された層はバックホウで掘削し，その他の遺物包含層及びその可能性がある層は人力による掘り下げを行った。掘り下げはヤマグワ，ジョレン，移植ゴテ，ネジリガマ等を用い，遺構・遺物の出土状況に応じ，道具を使い分けた。廃土はクローラーやタイヤショベル等を使用し調査区内で移動，仮置きした。

調査は対象地区毎に必要に応じ複数の確認トレンチを設定し，掘り下げを実施し，遺構・遺物の広がりを判断した。

掘り下げは，シラスの一次堆積層や岩盤に達した時点で終了した。調査終了後は国土交通省，文化財課との協議をもとに埋め戻しや安全対策等を施した上で随時引き渡した。

出土遺物は，基本的に出土層及び出土したグリッド毎に一括して取り上げた。遺構内遺物や特徴的な遺物についてはトータルステーションにより座標位置と標高を記録し，写真撮影を行った後，取り上げた。

写真撮影は35mmフイルムカメラ（NIKON　FM3）を用い，白黒用フィルムとスライド用フィルムに撮影した。また，デジタル一眼カメラ（NIKON　D100）で撮影した。石切場や虎口，空堀の一部等はブローニーでも撮影した。空中写真撮影も実施した。平成20年度は㈲フジタ，平成21年度は㈱九州航空に委託した。

木製品は水浸状態で出土したため，現場内では乾燥を防ぐため濡れたタオルを被せて乾燥を防いだ。また，取り上げ後はパンケース等に水をためて，中に浸けて保管したり，水を入れたビニールにシーラーパックしたりして一時保管した。

炉跡等の遺構から出土した炭化物は自然化学分析用のサンプリングを行った。

２　遺構の認定と検出方法

虎居城跡の基本土層は各地区，曲輪ごとに異なる。遺構検出は遺物の出土状況や土質の変化等をもとに，鍵層となる層の上面で検出した。鍵層上面をジョレンやネジリガマ等で精査し，埋土の違い等で遺構を判断した。検出された遺構は，基本的に検出面で写真撮影を行い，平板又はトータルステーションを使用し，検出位置と状況を記録した。その後，調査に必要な遺構内の埋土等を除去しながら断面状況を写真撮影・図化した。完掘後は写真撮影を行い，完掘状況を図化した。位置や状況の記録は調査工程に応じて平板とトータルステーションを使い分け，必要に応じて個別に実測した。

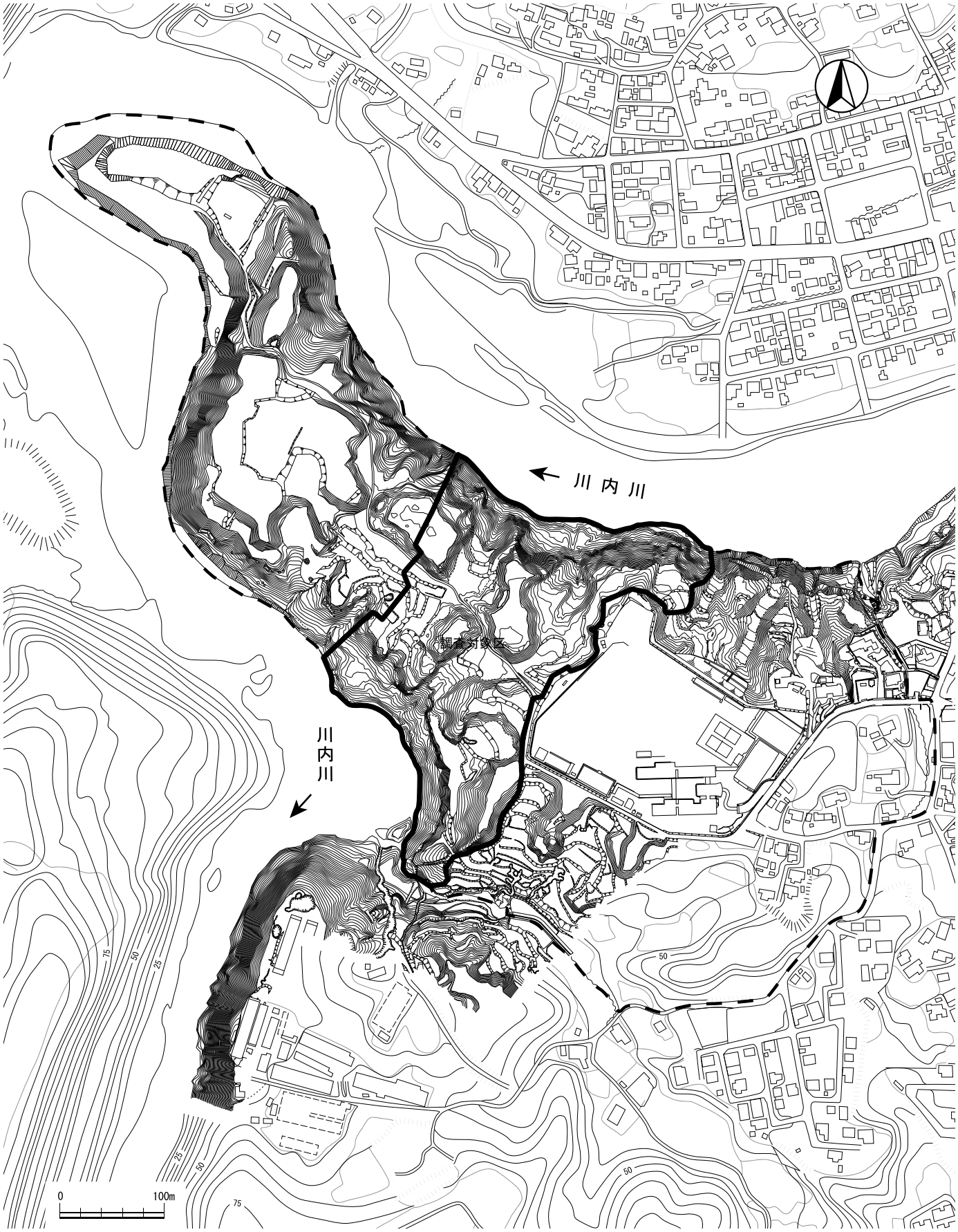
空堀の平面・断面やピットの実測等，遺構実測の一部は業者へ委託した。平成20年度はC地区のピット，土塁，D，J地区の堀の平，断面，H地区の堀の平，断面，礎石建物跡の実測を㈱埋文サポートに委託した。平成21年度はB地区の堀の平断面，H地区の空堀の平面・断面を㈱親和技術コンサルタントに委託した。

３　整理作業の方法

整理作業は平成21，22年度に県立埋蔵文化財センターが実施し，平成22年度に本報告書を刊行した。平成20年度にさつま町教育委員会が発掘調査した遺物，写真フィルム，データ，実測図，分析用サンプルは埋蔵文化財センターが合わせて整理し，報告書に掲載した。遺物は水洗い，注記，接合，復元，実測，トレース，写真撮影という一連の作業を行い，遺構は各図面やトータルステーションデータ，実測委託の成果品を整理，統合しながらロットリングペンを使ったトレースとパソコンを使ったデジタルトレースでまとめていった。水浸木製品は乾燥を防ぐため，濡れたタオル等で保護しながら実測，写真撮影を行った。

遺物の保存処理は当センターの南の縄文調査室が行った。基本的に漆器椀等，比較的小物については糖アルコール含浸法で処理し，柱等，比較的大物はポリエチレングリコール含浸法で処理した。

自然科学分析は木製品，炭化物の放射性炭素年代測定と樹種同定を㈱加速器年代測定と㈱パリノサーベーに委託した。



第４図　虎居城跡全体図



第５図　調査範囲，地区割り，グリッド配置図

第２節　層序

虎居城跡は，川内川が中流域で大きく蛇行する三方を川で囲まれた河岸段丘上に位置する。中生代の四万十層をベースとした地形と想定され，その上部に約30万年前の加久藤カルデラ噴出物（火砕流堆積物），その上位に阿多カルデラ噴出物（約10～11万年前），姶良カルデラ噴出物（約３万年前）が堆積している。（第７図）

今から約３万年前，姶良カルデラ噴出物（シラス）により，遺跡一帯は埋め尽くされたと考えられる。しかし，川内川の浸食により河岸段丘が形成され，２万年ほど前には現在の地形が形成されたとされる（森脇広鹿児島大学教授の御教示による）。

虎居城跡の層序は各曲輪や地区毎に異なるが，基本的層位を下表に示す（第２表）。遺物包含層はなく，曲輪部分は表土を除くとⅡ層またはⅢ層で遺構検出面になる。堀（谷地形）部分はⅡ・Ⅲ層が明瞭に確認されず，砂泥質土及びローム質土の流入や浸食が繰り返された水成堆積層等が覆う。これらの二次堆積土を掘り下げるとⅣ～Ⅷ層となり堀等の遺構面が検出される。また，Ⅶ，Ⅷ層は透水性が悪く，堀部分では多量の湧水に見舞われた。

第２表　基本層位

Ⅰ層	表土
Ⅱ層	アカホヤ火山灰
Ⅲ層	砂礫層
Ⅳ層	入戸火砕流堆積物
Ⅴ層	礫混粘質土
Ⅵ層	阿多火砕流堆積物
Ⅶ層	砂礫層
Ⅷ層	加久藤火砕流堆積物

Ⅰ層　暗褐色土　現表土

Ⅱ層　暗橙色火山灰層　通称アカホヤ火山灰層。約7,300年前に鬼界カルデラより噴出された広域火山灰。C，E地区で確認され，ピットや炉跡等の遺構検出面となっている。

Ⅲ層　砂礫層　I地区で確認され，非常に崩れやすいが遺構検出面となっている。

Ⅳ層　角礫混明黄白色砂質土　約26,000～29,000年前に姶良カルデラを噴出源とする。入戸火砕流堆積物，ATと表示される。

Ⅴ層　礫混粘質層

Ⅵ層　暗灰色ローム質土　約100,000年前に噴出した阿多火砕流堆積物。M地区の井穴はこの層に作られた横穴である。

Ⅶ層　砂礫層

Ⅷ層　加久藤火砕流堆積物　約400,000年前に加久藤カルデラより噴出した。川面に近いレベルでは溶結しており,K地区南側ではこの加久藤火砕流堆積物を利用した石切場が検出された。

地区毎の基本層位を第６図に示す。曲輪のあるC，E，G，I，M地区には標高57m前後にアカホヤ火山灰と想定される層が確認されている。アカホヤ火山灰層は遺構検出の鍵層となっている。G，I，M地区のアカホヤ火山灰層下位では砂礫層が確認された。I地区やC地区の北側ではアカホヤ火山灰層が削平されており，表土直下から砂礫層が検出された。そのため中世の遺構，遺物が残されていなかった可能性が高い。

谷部のA，B，D，H，J地区には共通するテフラ層は確認されていない。しかし，A地区の上層では黄橙色土が確認されており，標高的にもアカホヤ層若しくはその直下層か近接するG地区のアカホヤ火山灰が流れ込んだ可能性が考えられる。また，D，J地区の最下層では角礫層が確認されており，空堀がこの角礫層を掘り込んで形成されている。また，谷部であるため頻繁に流水により溝が形成され，レンズ状に砂，礫，粘質土が堆積している場所も認められる。

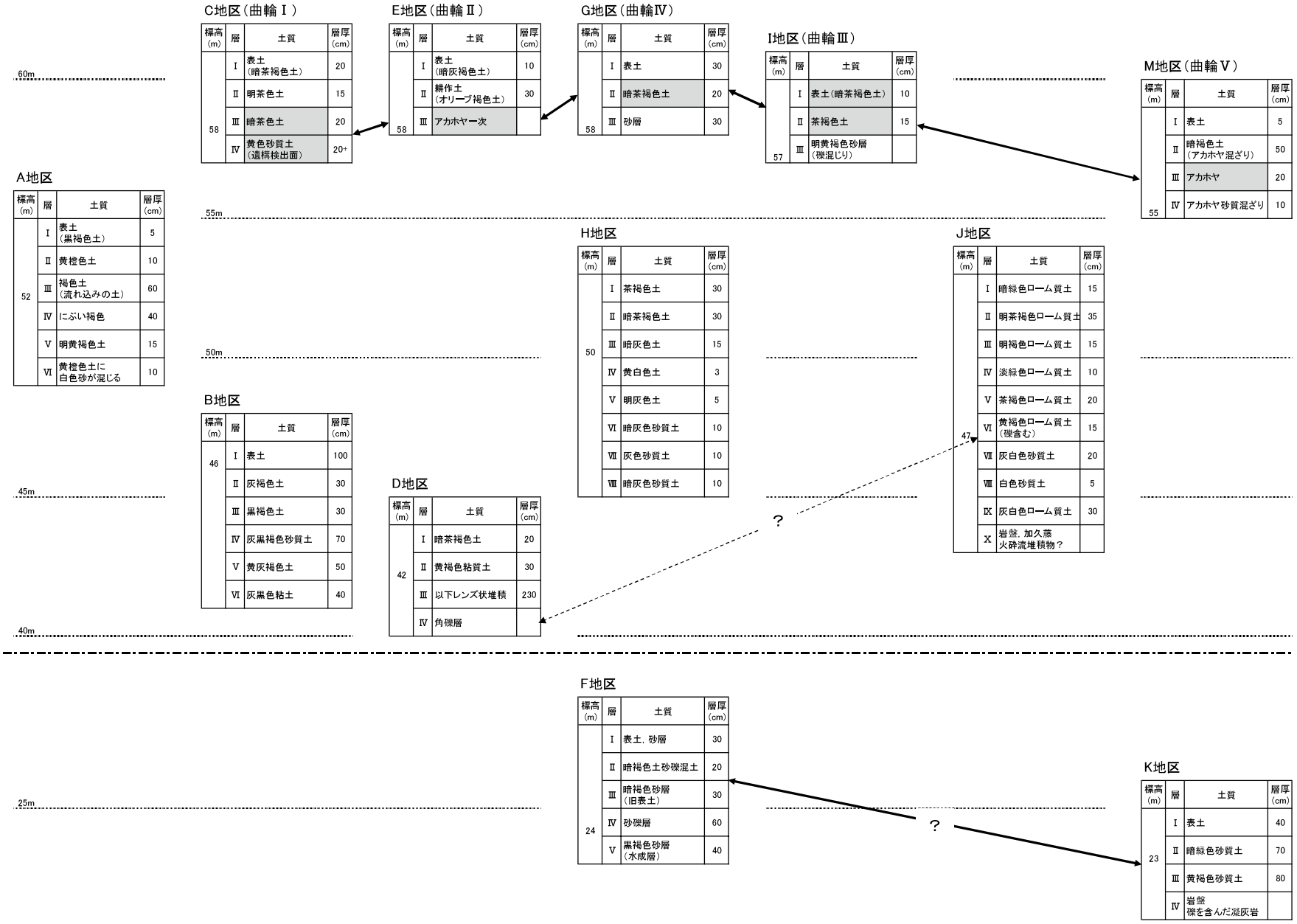
川面に近いF，K地区では標高23m前後に砂礫層が確認されている。これは，比較的最近の川の氾濫等により堆積したものと考えられ，下位には岩盤となる加久藤火砕流堆積層があり，川際で確認できる。また，K地区では石切場が検出された。これは加久藤火砕流堆積層上部の弱溶結部を摂理に沿って切り出したと考えられる。

【参考文献】

町田洋・新井房夫2003「新編火山灰アトラス」



E 地区曲輪断面



C地区（曲輪Ⅰ）			
標高(m)	層	土質	層厚(cm)
58	Ⅰ	表土（暗茶褐色土）	20
	Ⅱ	明茶色土	15
	Ⅲ	暗茶色土	20
	Ⅳ	黄色砂質土（遺構検出面）	20+

E地区（曲輪Ⅱ）			
標高(m)	層	土質	層厚(cm)
58	Ⅰ	表土（暗灰褐色土）	10
	Ⅱ	耕作土（オリーブ褐色土）	30
	Ⅲ	アカホヤ一次	

G地区（曲輪Ⅳ）			
標高(m)	層	土質	層厚(cm)
58	Ⅰ	表土	30
	Ⅱ	暗茶褐色土	20
	Ⅲ	砂層	30

I地区（曲輪Ⅲ）			
標高(m)	層	土質	層厚(cm)
57	Ⅰ	表土（暗茶褐色土）	10
	Ⅱ	茶褐色土	15
	Ⅲ	明黄褐色砂層（礫混じり）	

M地区（曲輪Ⅴ）			
標高(m)	層	土質	層厚(cm)
55	Ⅰ	表土	5
	Ⅱ	暗褐色土（アカホヤ混ざり）	50
	Ⅲ	アカホヤ	20
	Ⅳ	アカホヤ砂質混ざり	10

A地区			
標高(m)	層	土質	層厚(cm)
52	Ⅰ	表土（黒褐色土）	5
	Ⅱ	黄橙色土	10
	Ⅲ	褐色土（流れ込みの土）	60
	Ⅳ	にぶい褐色	40
	Ⅴ	明黄褐色土	15
	Ⅵ	黄橙色土に白色砂が混じる	10

H地区			
標高(m)	層	土質	層厚(cm)
50	Ⅰ	茶褐色土	30
	Ⅱ	暗茶褐色土	30
	Ⅲ	暗灰色土	15
	Ⅳ	黄白色土	3
	Ⅴ	明灰色土	5
	Ⅵ	暗灰色砂質土	10
	Ⅶ	灰色砂質土	10
	Ⅷ	暗灰色砂質土	10

J地区			
標高(m)	層	土質	層厚(cm)
47	Ⅰ	暗緑色ローム質土	15
	Ⅱ	明茶褐色ローム質土	35
	Ⅲ	明褐色ローム質土	15
	Ⅳ	淡緑色ローム質土	10
	Ⅴ	茶褐色ローム質土	20
	Ⅵ	黄褐色ローム質土（礫含む）	15
	Ⅶ	灰白色砂質土	20
	Ⅷ	白色砂質土	5
	Ⅸ	灰白色ローム質土	30
	Ⅹ	岩盤，加久藤火砕流堆積物？	

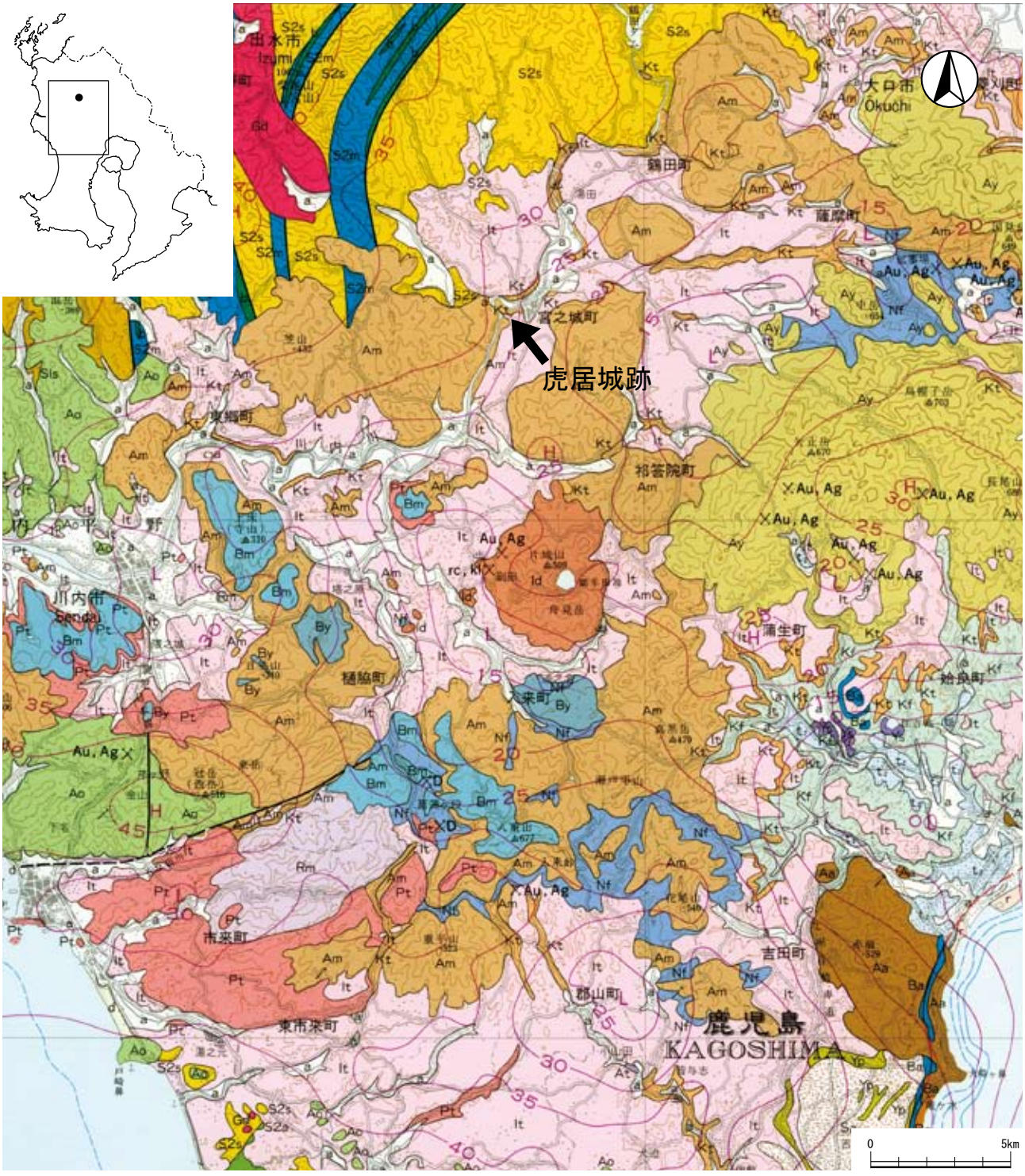
B地区			
標高(m)	層	土質	層厚(cm)
46	Ⅰ	表土	100
	Ⅱ	灰褐色土	30
	Ⅲ	黒褐色土	30
	Ⅳ	灰黒褐色砂質土	70
	Ⅴ	黄灰褐色土	50
	Ⅵ	灰黒色粘土	40

D地区			
標高(m)	層	土質	層厚(cm)
42	Ⅰ	暗茶褐色土	20
	Ⅱ	黄褐色粘質土	30
	Ⅲ	以下レンズ状堆積	230
	Ⅳ	角礫層	

F地区			
標高(m)	層	土質	層厚(cm)
24	Ⅰ	表土，砂層	30
	Ⅱ	暗褐色土砂礫混土	20
	Ⅲ	暗褐色砂層（旧表土）	30
	Ⅳ	砂礫層	60
	Ⅴ	黒褐色砂層（水成層）	40

K地区			
標高(m)	層	土質	層厚(cm)
23	Ⅰ	表土	40
	Ⅱ	暗緑色砂質土	70
	Ⅲ	黄褐色砂質土	80
	Ⅳ	岩盤 礫を含んだ凝灰岩	

第６図　地区別基本土層柱状図



通商産業省工業技術院地質調査所発行地質図「鹿児島」1:200,000 より

r	埋立地	a	砂及び泥	d	砂	t₂	砂，礫及び泥	f	火山性砕屑物
Sa	火山弾，石質火山礫，スコリア，軽石及び火山灰			Sh	安山岩溶岩及び火砕物	Sp	安山岩火砕物	Sl	安山岩溶岩及び火砕物
Ys	玄武岩火砕物	Sj	流紋岩火山灰及び火砕物	Ky	安山岩溶岩及び火砕物	Kl	安山岩溶岩及び火砕物	Kd	岩塊とその細粒物
Ko	安山岩，玄武岩及び火砕岩	Ir	軽石，火山灰及び砂礫	It	紫蘇輝石流紋岩火山灰及び軽石	w	紫蘇輝石流紋岩溶結凝灰岩	Sf	シルト，砂，礫及び凝灰砂質
Iw	輝石デイサイト溶結凝灰岩	At	輝石デイサイト溶結凝灰岩	Ba	玄武岩溶岩及び火砕物	Aa	安山岩，デイサイト溶岩及び火砕物	Ra	流紋岩溶岩及び火砕物
Kb	安山岩溶岩及び火砕物	Kt	角閃石輝石デイサイト溶結凝灰岩	Yp	輝石角閃デイサイト溶結凝灰岩	Id	安山岩，デイサイト溶岩及び火砕物	Kf	シルト，砂，凝灰岩及び凝灰角礫岩
By	玄武岩，安山岩溶岩及び火砕物	Ay	安山岩，デイサイト溶岩及び火砕物	Ny	安山岩溶岩及び火砕物	Bm	玄武岩溶岩及び火砕物	Am	安山岩，デイサイト溶岩及び火砕物
Rm	流紋岩溶岩及び火砕物	Pt	デイサイト溶結凝灰岩	Nf	泥，砂及び礫（火砕物を含む）	Ao	安山岩，デイサイト溶岩及び火砕岩	No	安山岩，デイサイト溶岩及び火砕岩
Gd	花崗閃緑岩，花崗岩及び花崗閃斑岩	Nd	変質溶岩及び火砕岩	Us	砂岩及び泥岩	b	苦鉄質火山岩及び赤色泥岩，ときにチャートを伴う		
sp	蛇　紋　岩	Km	砂岩を主とし，泥岩を伴う	S2c	礫岩及び砂岩	S2s	泥岩を主とし，砂岩を伴う	S2a	砂岩及び泥岩
S2m	泥岩を主とし，砂岩を伴う	Sls	砂岩を主とし，泥岩及びまれに礫岩を伴う	Gu	砂岩，礫岩及び泥岩	Jk	泥岩，砂岩，石灰岩及びチャート	Nm	角閃き岩及び変砂岩

第７図　鹿児島県北西部地質図

第３節　調査の成果

１　縄文時代の調査

本遺跡は，丘陵台地（曲輪部分）と谷部（空堀部分等）からなり，縄文時代早期の遺物は丘陵台地部，谷部にあたるＡ～Ｅ・Ｉ・Ｍ地区で出土している。なお，縄文早期の遺物包含層は中世山城の構築時に全体的に削平および攪乱されており，遺物の大半は表層からの出土である。そのため，縄文時代の記載は，一括して取り扱うこととする。

⑴　遺構

ア　集石（第８・107図）

集石遺構は，Ｅ地区（中の城）から３基が発見された。Ｅ地区は部分的にアカホヤ層の堆積がみられ，アカホヤ層下から出土した。

（ア）１号集石

Ｔ－7区で出土した。平面形が長径82㎝，短径70㎝の楕円形を呈す。深さ16㎝の土坑を伴う集石遺構である。土坑の床面は舟形状を呈し，床中央部には25×23㎝大の比較的大きめの扁平な自然礫を平置し，これを囲むように８個の角礫を花弁状に配置している。その上部には小角礫が幾重にも重なりまとまった状態で検出された。総数119個の礫を用い，これらはいずれも被熱。

（イ）２号集石

Ｓ－７区で出土した。長径70㎝，短径50㎝の範囲に集中している。構成礫は総数108個あり，石材は頁岩を用いている。これらはいずれも被熱が確認されるが炭化物や焼土は観察できない。

（ウ）３号集石

Ｓ－6区で出土した。長径120㎝，短径100㎝の範囲に比較的拡散して検出された。砂岩や頁岩を使用している。２号と同様に被熱するが，遺構内に炭化物や焼土は観察できない。

３基の集石遺構は，検出した層序や位置関係，周辺からの出土土器により縄文早期後葉に比定される。

⑵　遺物

ア　土器（第９～11図）

縄文早期の土器は，Ａ（２点），Ｂ（１点），Ｃ（３点），Ｄ（１点），Ｅ（13点），Ｉ（５点），Ｍ（１点），不明（１点）各地区からの計27点の出土である。特に集石遺構が集中して検出されたＥ地区に多く出土した。これらの土器は，縄文早期前葉から後葉のもので，Ⅰ類～Ⅸ類に細分した。

Ⅰ類　１は口縁部が直口する貝殻円筒土器である。口唇部に浅い刻目文を施し，胴部全体にはアナダラ属の貝殻腹縁による条痕文が横位方向に施されている。内面は弱い研磨がみられる。早期前葉の前平式土器である。

Ⅱ類　２は胴部片で，貝殻腹縁による縦位の刺突文を器面全面に施す。３は貝殻腹縁による押引文を横位に施す。内面は研磨調整。早期前葉の吉田式土器である。

Ⅲ類　４は直口する口縁部で口唇部は平坦に仕上げる。櫛状施文具による羽状文を施す。５は胴部片で，同様に櫛状施文具による羽状文を施す。早期中葉桑ノ丸タイプ土器である。

Ⅳ類　６・７は口縁部直下に波状の貝殻条痕文を巡らす円筒土器である。７の内面は篦研磨調整で仕上げる。貝殻文円筒土器の早期中葉中原式相当土器である。

Ⅴ類　８は頸部から口縁部にかけて緩やかに外反する頸部片である。撚糸文を施す。

Ⅵ類　Ⅵ類は早期中葉の押型文土器で山形押型文（Ⅵａ）と楕円押型文（Ⅵｂ）がある。

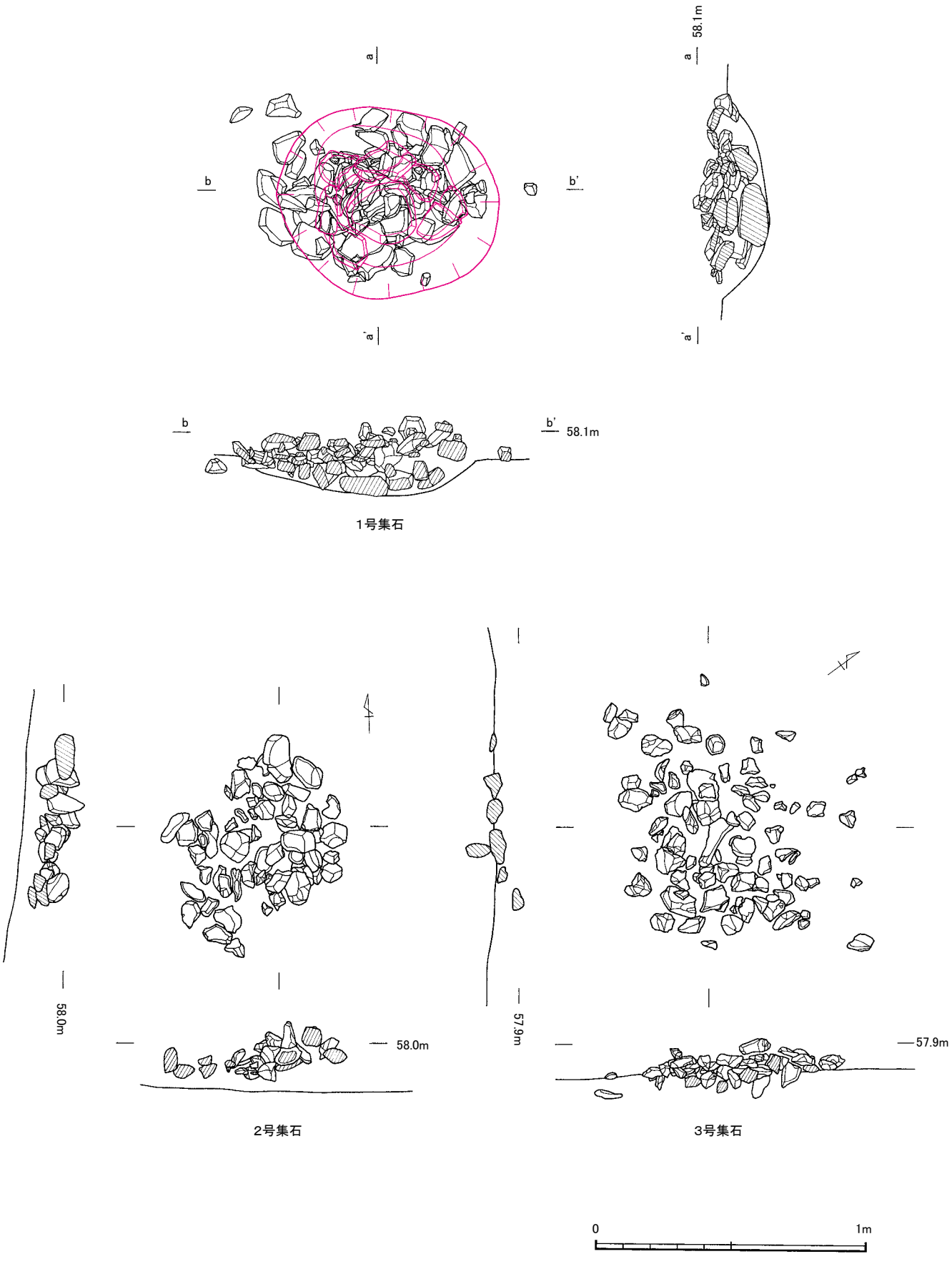
Ⅵa類　９～15は山形押型文土器である。９・10の口縁部は外反し，口唇部は平坦に仕上げる。11は胴部片である。いずれも縦位に比較的大型の山形回転押型文を施す。10・12の内側口縁部と口唇部には横位に山形押型文を施されている。12はやや外反する口縁部で，平坦に仕上げた口唇部にも山形押型文を施す。13・14は胴部片である。15は山形押型文の平底の底部である。いずれも縦列に山形押型文がみられる。

Ⅵｂ類　16～23は楕円押型文である。16は口縁部はやや外反する。口縁部内面にも施文するが，また，口縁部内面に横位の刻目文と口唇端部に楕円押型文がみられる。なお，口縁部下位５㎝の部位に文様が途切れた部分が観察され，長さ3.3㎝の施文原体が確認できる。同様に17・20の口縁部内面にも楕円押型文を横位に施文する。22は直口する口縁部で口唇部は先細りする。23も同様に極小の楕円押型文を横位に施文する。

Ⅶ類　24は頸部で屈折して外反する口縁部を呈する。器面全体に菱形の押型文を施す。早期中葉の手向山式土器である。25は上げ底の底部でⅦ類の底部と思われる。

Ⅷ類　26は口縁端部が蒲鉾状に肥厚し，わずかに外反する口縁部片である。肥厚した口縁部に羽状文その下位には刺突連点文を施す。早期後葉平椿式土器の壺形土器である。

Ⅸ類　27は頸部が「く」の字状に屈曲してやや内弯する口縁部を呈する鉢形土器である。口縁部に浅い刻目文，口縁部全体には刺突文を施す。早期後葉塞ノ神Ａ式土器である。

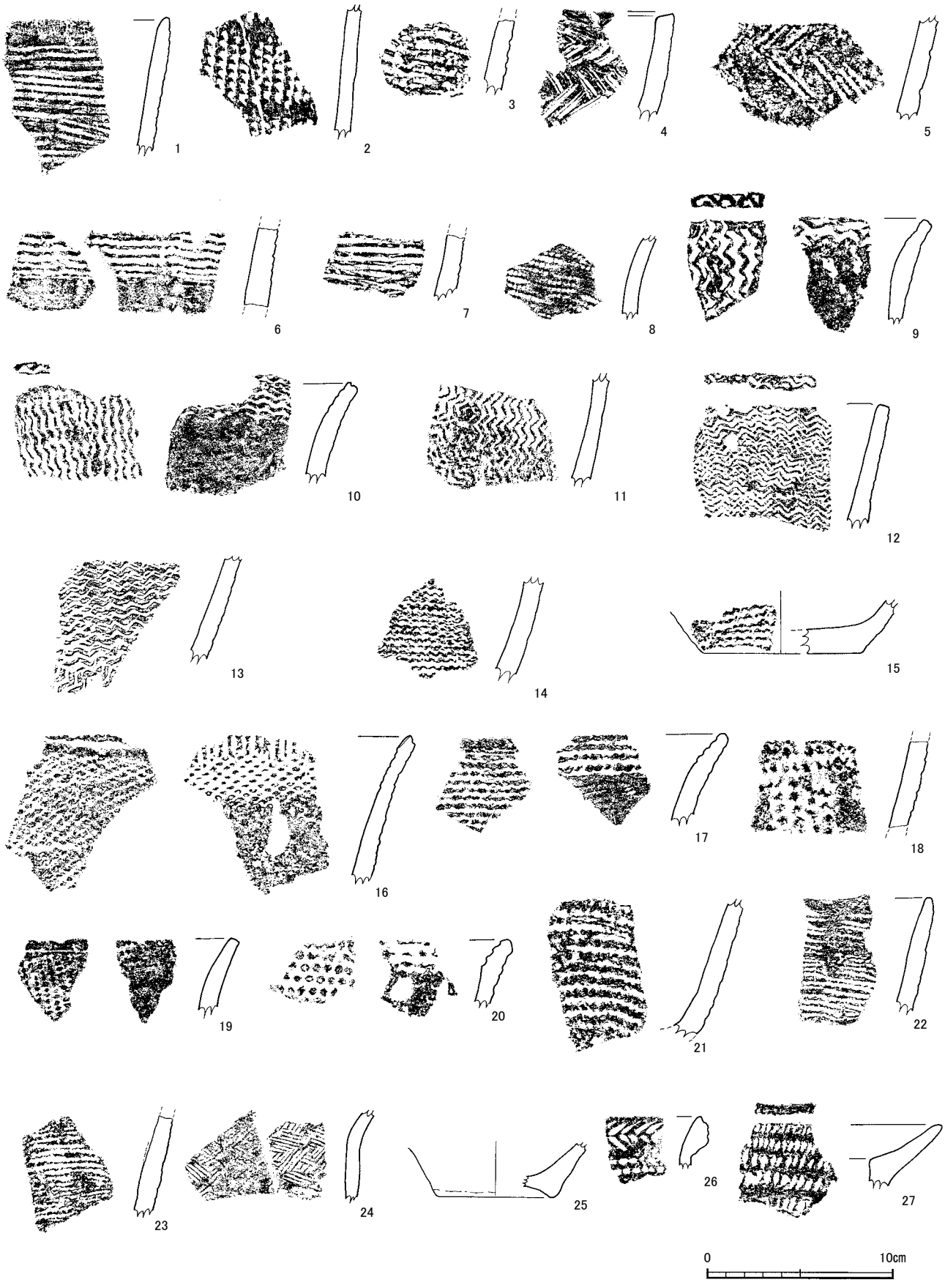


1号集石

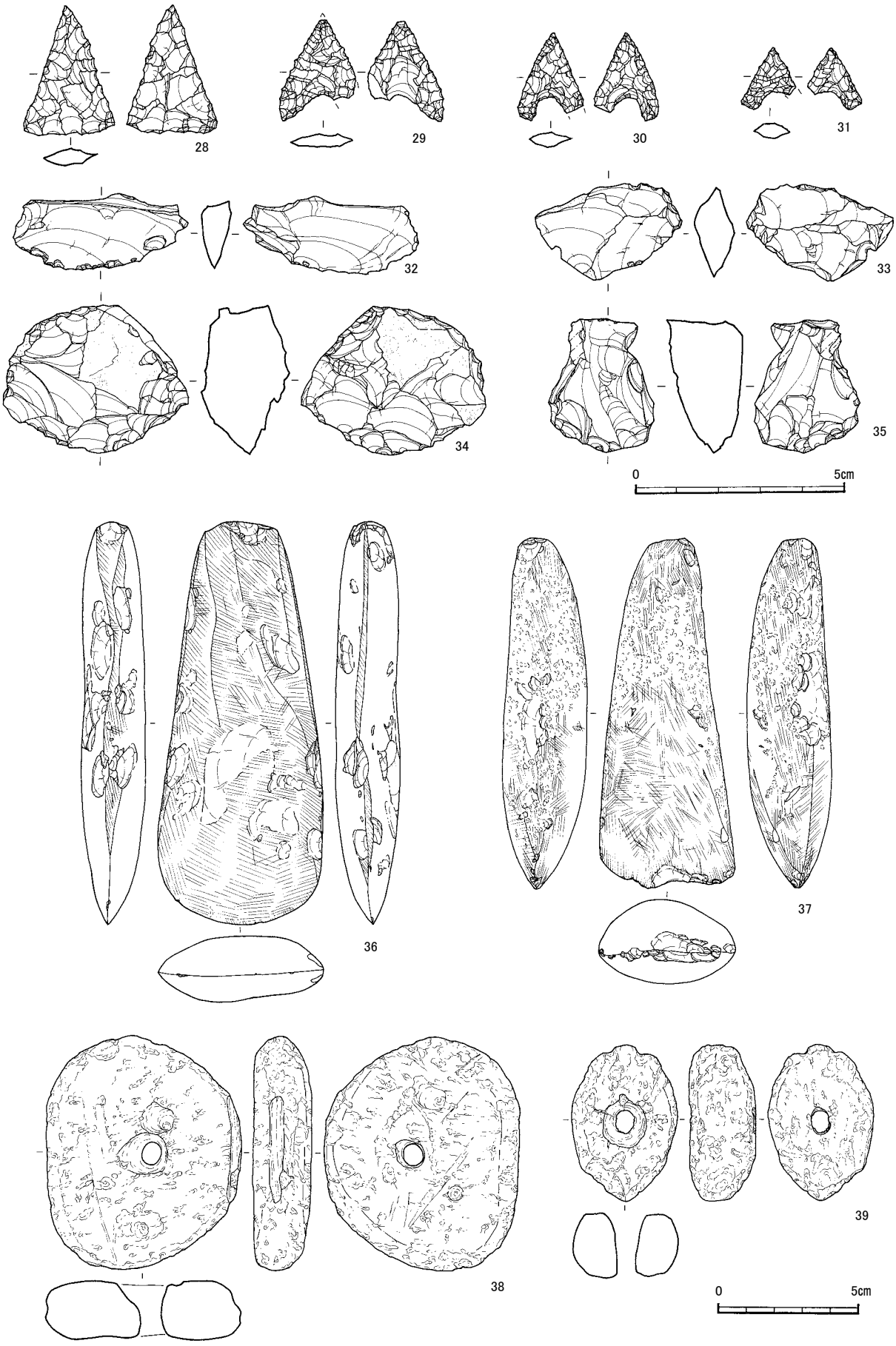
2号集石

3号集石

第８図　縄文時代　集石


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
0
10cm

第９図　縄文時代　土器



第10図　縄文時代　石器(1)

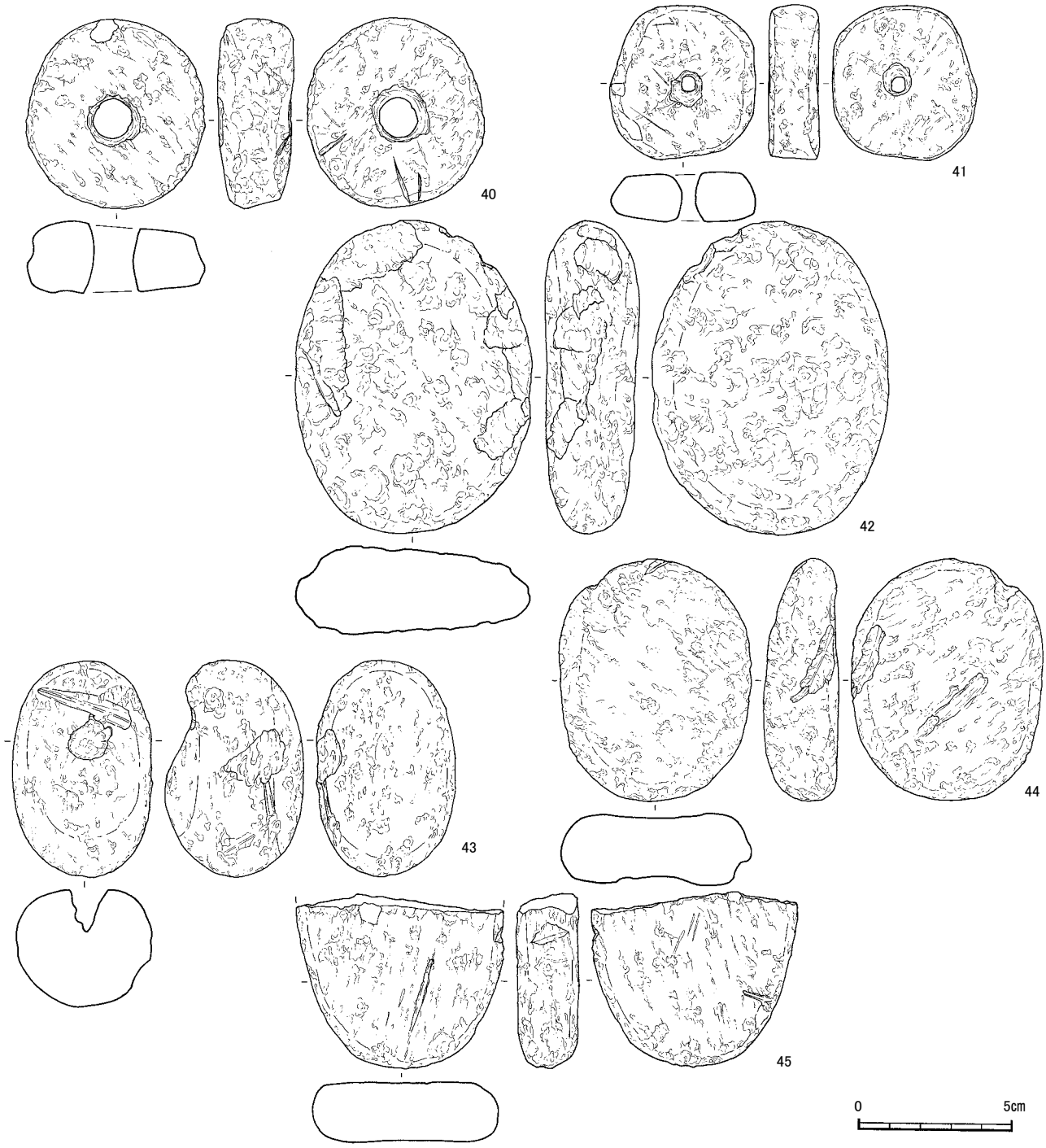
イ　石器

28～31は打製石鏃である。本遺跡では破損品，未製品を含め10点が出土した。うち4点を図化した。28の石材はチャートで，唯一抉りの無い打製石鏃である。29・31は腰岳系の石材，30は針尾系の石材を素材としている。

32は横長剥片の縁辺部を刃部とする玉随質素材の二次加工剥片である。33は32と同じく縁辺の一部を刃部として使用した痕跡のある二次加工剥片である。

34・35は玉随質石材を使用したスクレイパーである。刃部は両側から押圧剥離での刃部形成を施している。35は基部に抉りの加工が若干観察できるため，石匙としての使用の可能性も推測できる。

36・37は頁岩製の磨製石斧である。37は使用による刃こぼれが観察できる。38～45は軽石製品である。38～41は平坦な楕円礫を研磨により整形し，中心付近に穿孔加工を施した製品である。42から45は研磨痕や穿孔作業過程の加工痕などから，前述の製品の製作過程で破損したものか，製作途中の素材と推測される。



第11図　縄文時代　石器(2)

2　古墳時代～古代の調査

⑴　古墳時代

全体を通して，古墳時代～古代の文化層は確認できず，遺物も少量で，それに伴う遺構も確認できなかった。なお，遺物には，銅鏡の破片と成川式土器が出土した。

出土遺物（第12図）

46は銅鏡である。Ⅰ地区から出土した。鏡は復元直径12.1㎝で青銅製の小型鏡である。中程から紐部の内区を欠いており，鏡全体の約７分の１程度（長さ約５㎝，幅約2.3㎝）の破片である。鏡面は平滑で，縁部でわずかに弧状を呈す。匕縁の頂部は蒲鉾状に丸味を帯びる。文様構成は外縁部から中心部へ斜格子状文，二重の圏線，二重の縄絡文，一重の圏線，縄絡文，斜格子状文の順に細かく文様が施されている。

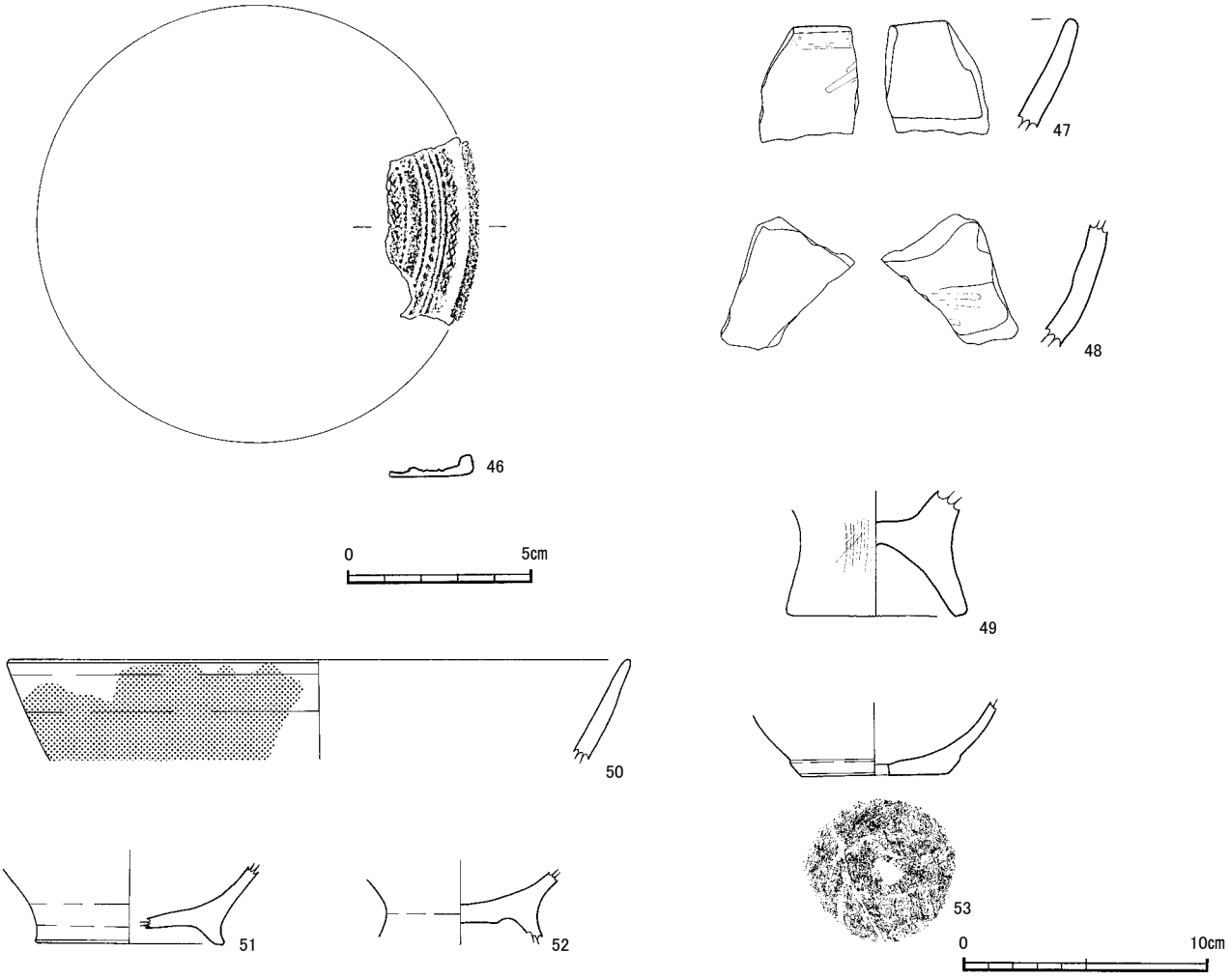
鏡の時代は，外縁部が匕縁で，その内側に数状の帯が巡り，帯に格子状文と縄絡文が認められることから，中国戦国時代末期，宋代（５世紀）の踏み返しの戦国鏡として想定される（西南学院大学高倉洋彰教授のご教示による）。

47は頸部から口縁部にかけてわずかに外反する甕形土器の口縁部片である。48は胴部片である。49は甕形土器の中空の底部である。これらは古墳時代中期相当と思われる。

⑵　古 代

出土遺物（第12図）

50は直口する口縁部で，口径25.5㎝椀である。刷毛目調整で轆轤引き。外器面には煤が付着している。外底部は篦調整が施され浅い段を残す。51・52は高台付きの椀で，高台は外開きの脚部である。いずれも脚部から直線的な体部へと移行する。53は篦切りの平底部で底部中央部分には径5mmの穿孔がみられる。これらは９～10世紀に比定される。



第12図　古墳～古代　出土遺物

3　中世～近世の調査

（1）　A地区の調査

ア　概要

A地区は，南側が宮之城中学校グランドに高低差約8mで，隣接する調査区の西端に位置する北側は，川面まで切り立った断崖になっている。西側も急斜面であるが，B地区とつながる。曲輪の標高は約50mでB地区との標高差は約3mである。東側の平坦部と西側の平坦部の高低差は約3mである。

A地区西部は，古図などから，M地区及びグランドを含んでおきたの城の張り出しの平坦部と推測される。

調査区は杉の植林地で抜根を進めながら6か所のトレンチを設定し，下層確認しながら調査を行った。

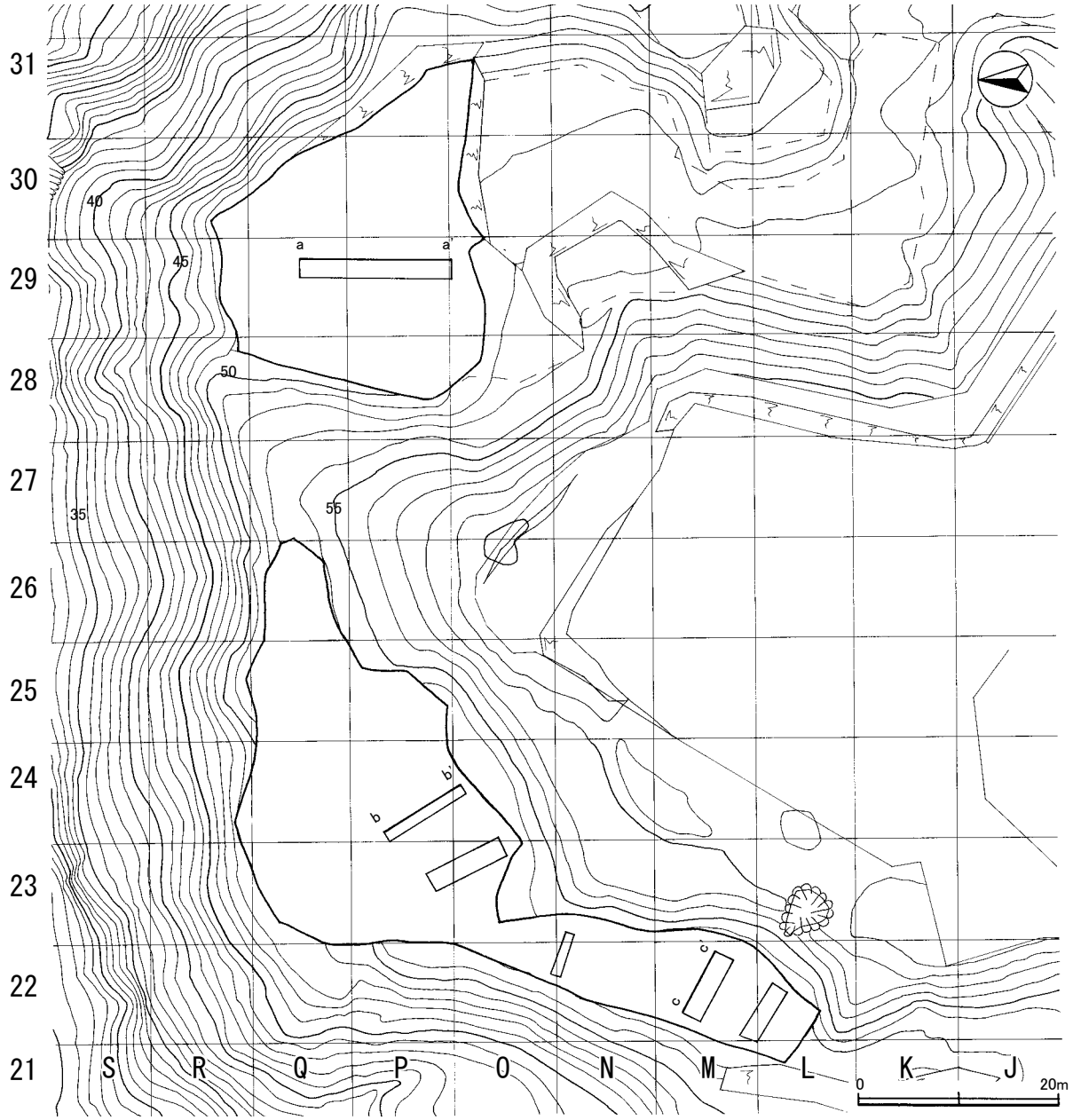
層位は，表土の下に黒褐色土，その下にアカホヤが存在する。他地区のように水の流水作用による崩壊等は受けていないため，比較的アカホヤまでの残存率が高い。

遺構には，L-23区より礫が散乱した焼土遺構が検出された。主な出土遺物には，青磁，白磁，青花，火打石，青銅製品，古銭などがある。

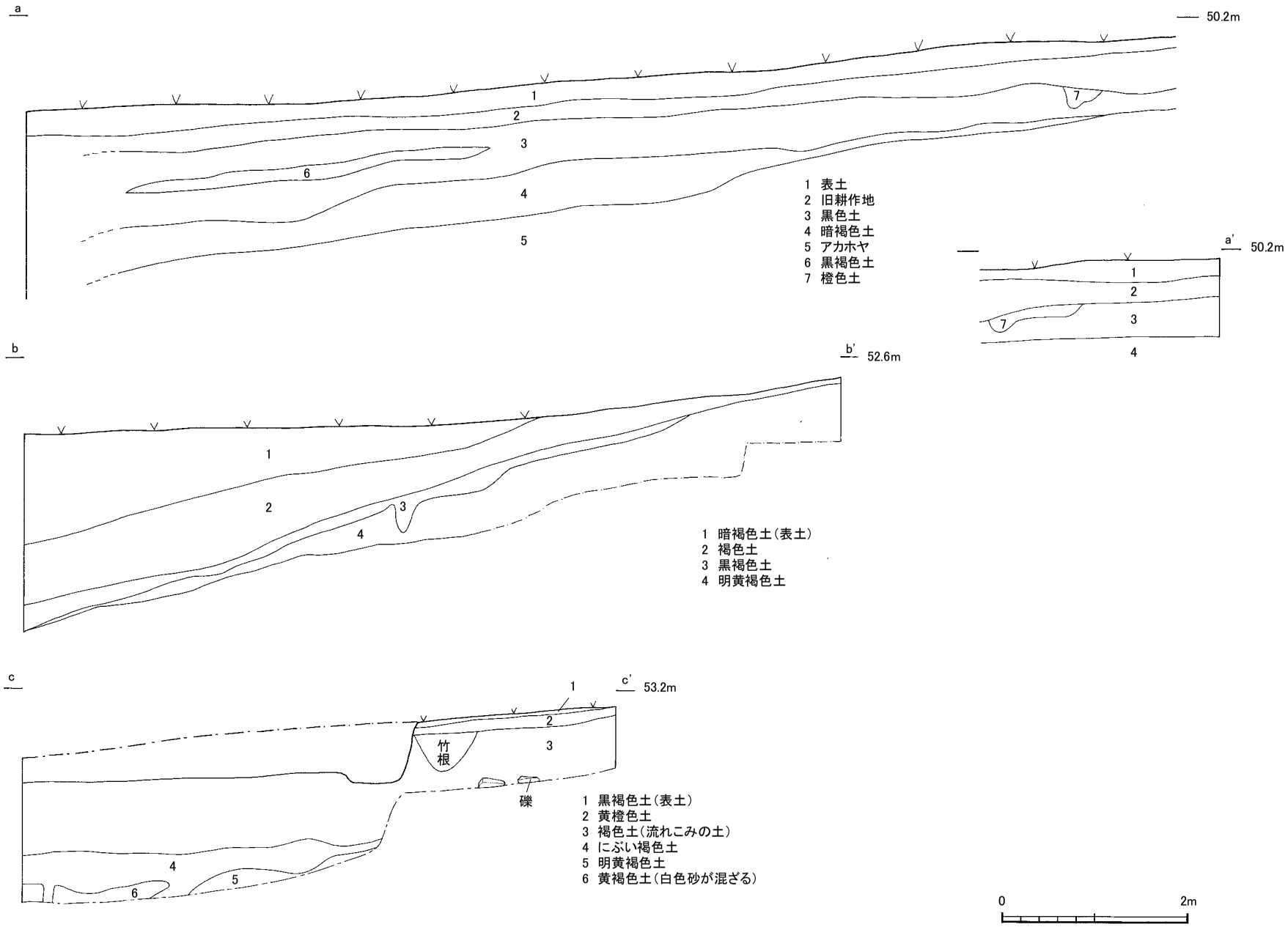
イ　出土遺物（第15・16・17図）

青磁

54～61は龍泉窯系青磁である。54・55は椀である。54は外面に細線で蓮弁文を描くが，上部のみで台内面までかかるが，底部は欠損しているため不明である。



第13図　A地区　全体図



第14図　A地区　土層断面図

56～58は皿である。56は内外無文である。57は中皿の底部である。外面は高台内面まで施釉され，高台内底は無釉である。58は碁笥底を呈する皿の底部である。59は盤の口縁部である。口縁部は輪花をなす。60は香炉である。釉は外面から内面口縁部下位までかけられる。61は瓶または壺の底部と思われる。内面は無釉である。

白磁

62・63・64は白磁である。62は高台が削り出しでつくられ，内面の釉は輪状に釉剥ぎされる。63は抉り高台を呈する坏である。外底面に墨書が書かれるが，残存部が少ないため判読不能である。64は壺と思われるが，詳細は不明である。外面に縦２条の沈線が入る。

青花・色絵

65～70は青花，71は色絵である。65は漳州窯系の碗である。胎土は粗く，呉須の発色もくすんでおり悪い。66は蓮子碗と称される碗の底部である。67は碗の底部である。高台内底に文字が描かれる（解読不明）。68は漳州窯系碗の底部である。見込みは輪状に釉剥ぎされる。69・70は皿である。69は口縁部が外反するもので，外面には唐草文が描かれる。70は漳州窯系のもので，底部は碁笥底を呈する。71は色絵の蓋である。

緑釉陶器

72は緑釉陶器である。詳細な用途は不明であるが，内面が無釉で，外底面に脚が３足付くと考えられることから，香炉等の用途が考えられる。

陶器

73は香炉と思われる。外面口縁下位に2条の細線が巡る。高台は断面四角形を呈し，外面腰部以下高台内面は露胎する。肥前内野山焼と思われる。

74の見込みは蛇の目釉剥ぎで，畳付きから高台内底面は無釉である。

土師器・椀・坏・皿

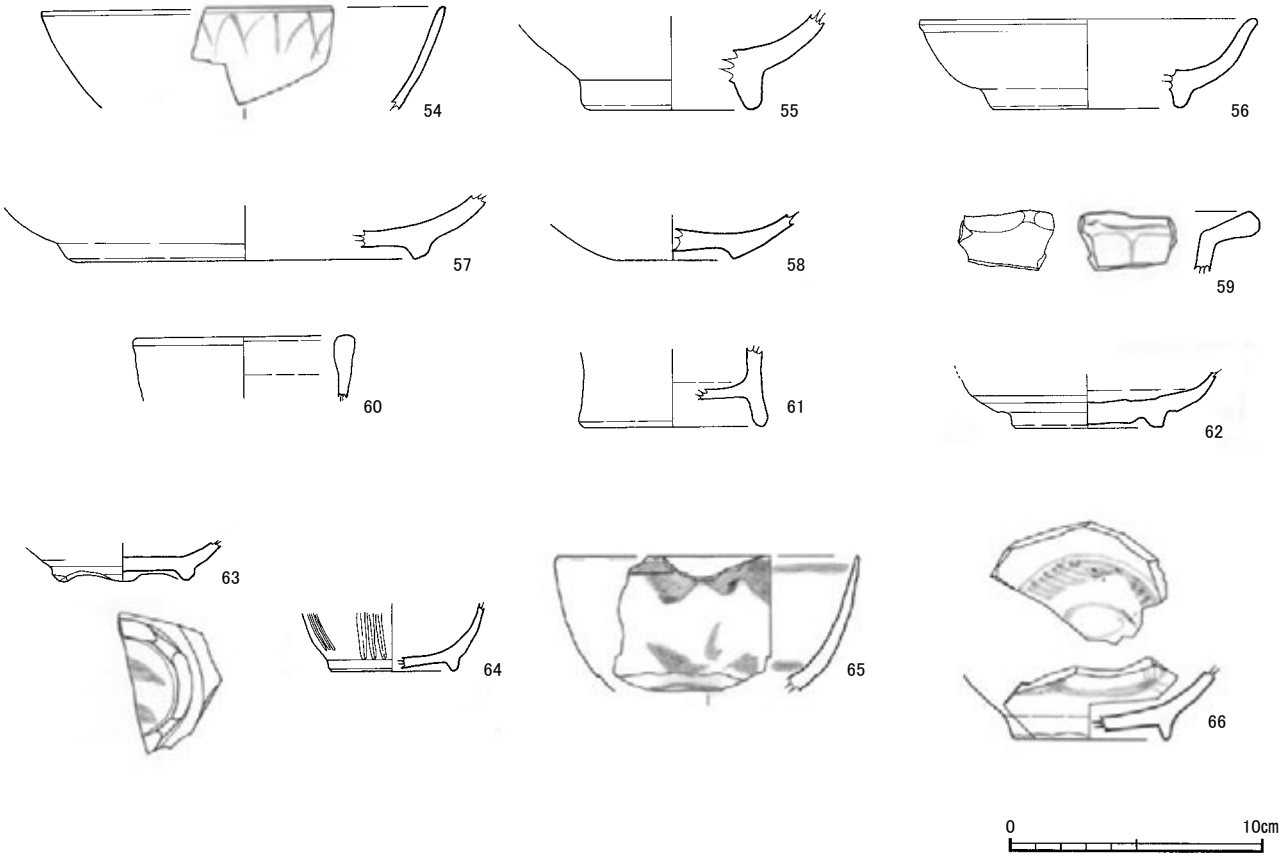
75・76は三脚付き椀と思われる。糸切り底である。75の底径7.8cm，76は10.8cm，体部は底部から外開きで直線的に立ち上がる。77・79は坏である。口径14.2cm，底径10cm，器高3.7cm。腰部はわずかに膨らみ立ち上がる。78・80～87は器高が3.5cm未満の皿である。全て糸切り底である。口径は82の14.6cm～87の6.2cmの小皿がある。78～83・86・87は底部から体部へは直線的移行し，体部から口縁部は外傾する。84・85は腰部が膨らんで口縁部へ移行する。

土錘

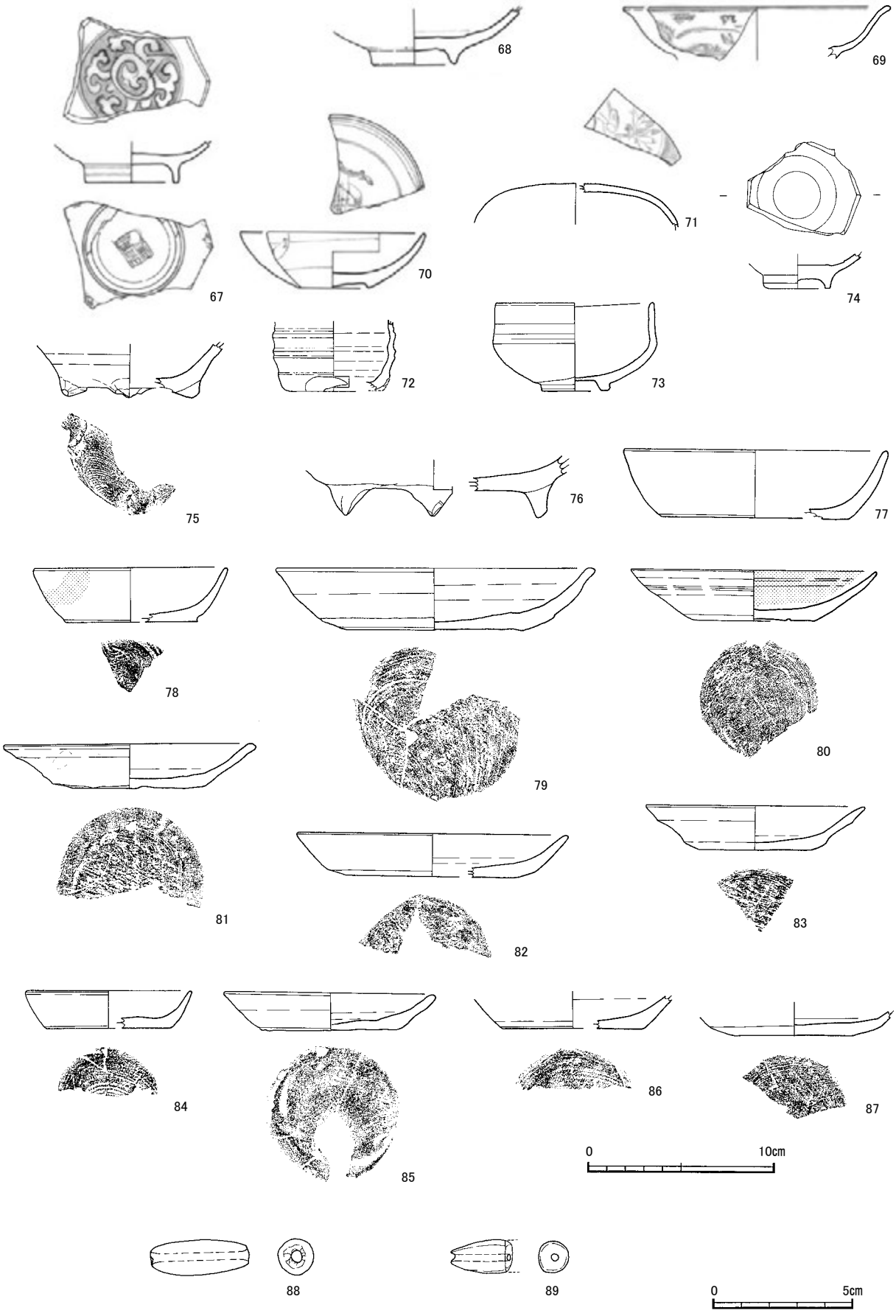
88・89は管状土錘で，88は長さ3.6cm，89は半欠品。

石製品

Ａ地区においては，火打石と推測できるものが，3点出土した。3点とも，調査区西側の平坦部より検出されている。90はチャートの角礫を，適当な大きさに打ち割り，加工したものである。礫の上部の側縁部に火打鎌と



第15図　A地区　出土遺物(1)

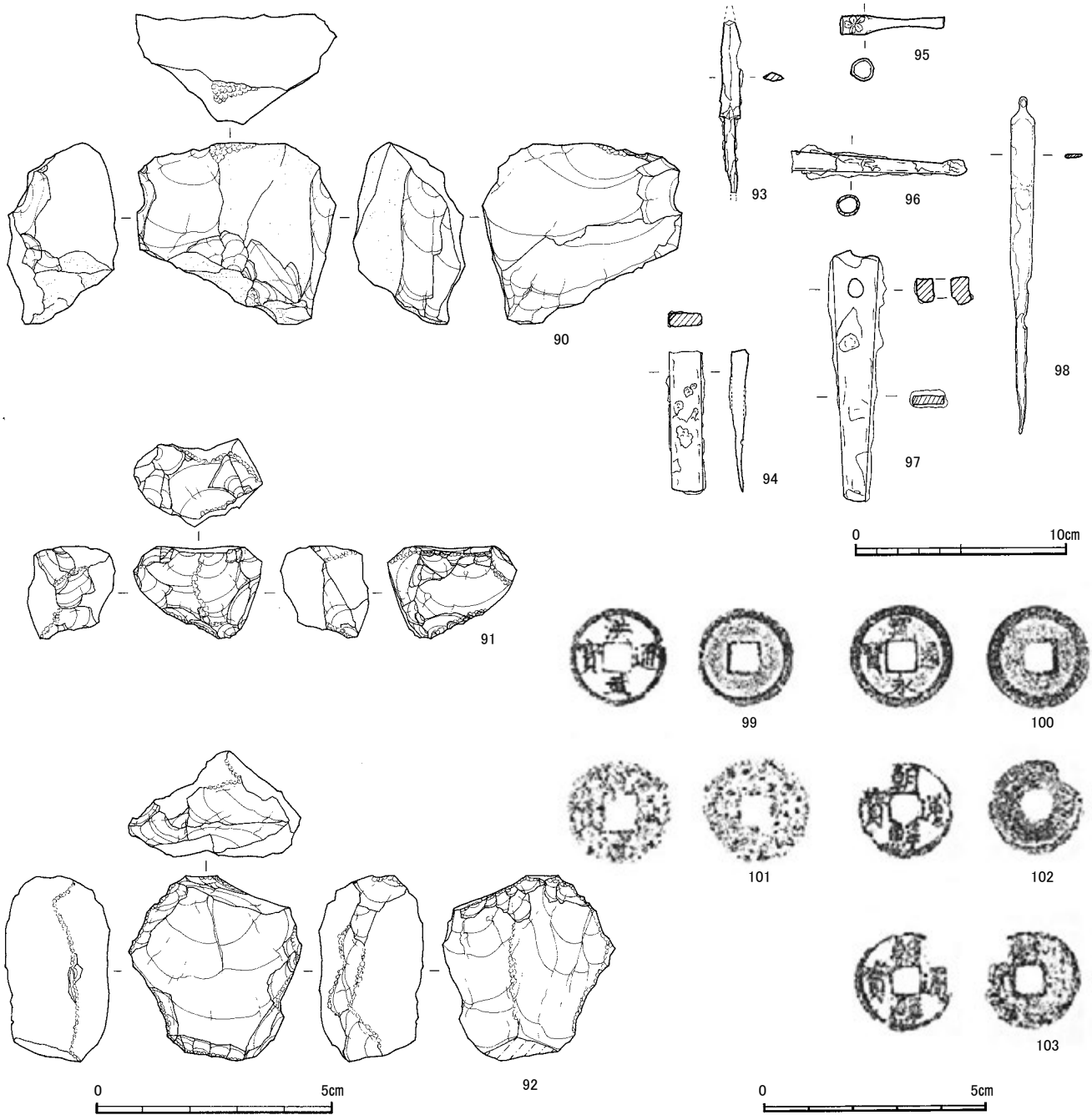


第16図　A地区　出土遺物(2)

の接触により潰された打撃痕が集中している。91は鉄石英の小礫を利用したものである。礫の側縁部全体及び稜線上に打撃痕が観察できる。92は石英の自然角礫を手頃な大きさに打ち割り，加工して使用している。礫の側縁部及び稜に多数の打撃痕が観察できる。

金属器

93は柳葉形鉄鏃である。刃部先端部は欠損しているが鏑がみられる。94は鉄製の楔と思われる。先端部を細く仕上げる。95・96は青銅製の煙管の吸い口である。97は上部に径８㎜の穴を開け，先細りの鉄製品である98は青銅製で長さ16.2㎝の笄である。99～103は古銭である。99は洪武通寶で中国の朱元璋（洪武帝）が1368年に国号を明とし，同時に鋳造された明銭である。100は寛永通寶である。なお，101は鉄銭の「寛永通寶」で初鋳造年は1636年である。102・103は朝鮮通寶である。朝鮮王朝により1423年に鋳造され，文字は真書体である。



第17図　A地区　出土遺物(3)

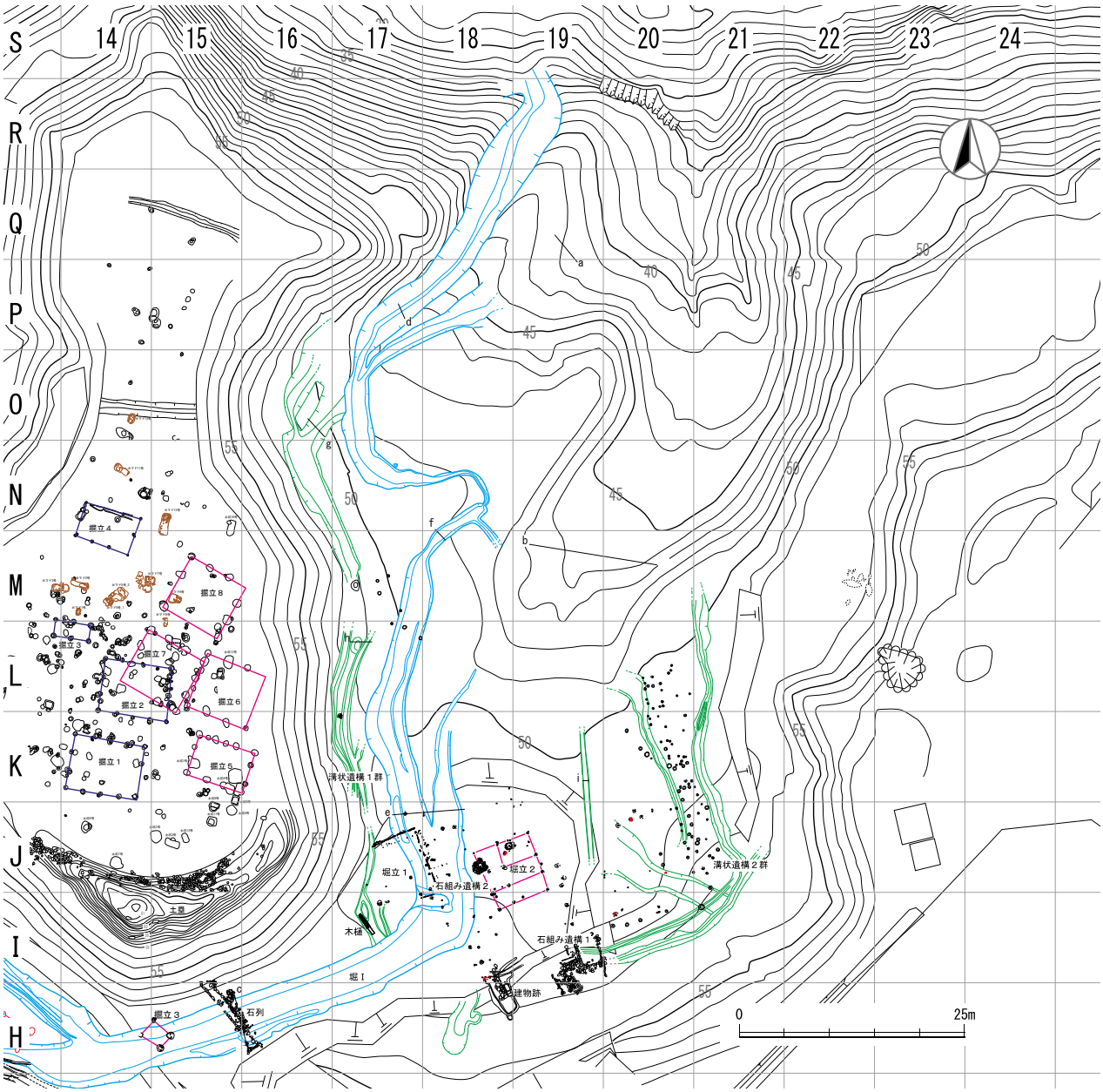
（2）　B地区の調査

ア　概要

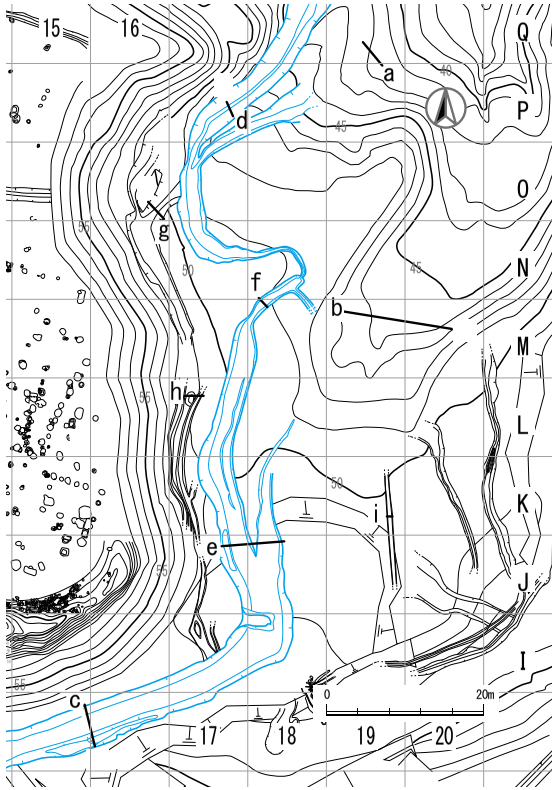
B地区は東側にA地区曲輪Ⅳ（おきたの城，現宮之城中学校），西側にC地区曲輪Ⅰ（塩の城）に挟まれた谷部分に位置する。B地区内の標高は南側が約50mで北側にいくにつれて緩やかに下り，F地区側には深い谷が形成されている。地形的にはA地区曲輪ⅣとC地区曲輪Ⅰに挟まれた空堀の様相を呈する。曲輪の標高は約58mなのでB地区との比高差は約８mである。調査前は雑木，雑草で覆われており，表土は厚い部分で約１mのシラスが堆積していた。発掘調査中は周囲と比べ標高が低いため，湧水に見まわれることが多かった。そのため，足場が不良で調査に影響が出る場面もあったが，有機質遺物の残存状態は良好であった。発掘調査はトレンチを設定し，下層確認しながら進めた。

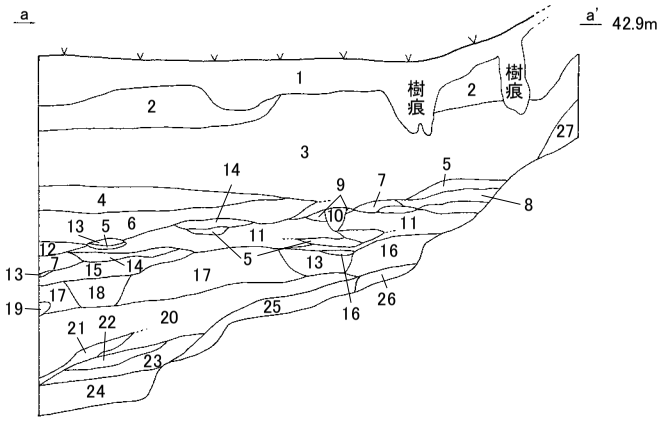
遺構，遺物の主な時期は土器形式や遺構の切り合い関係，^{14}C年代測定等からおおよそ中世末（15～16C）～近世初頭（17C）と想定される。中世末と想定される遺構は空堀，溝状遺構，掘立柱建物跡，柱痕跡，杭列，ピットで，近世初頭と想定される遺構は掘立柱建物跡，溝状遺構，石組み遺構，ピットである。

出土した主な遺物は青磁，白磁，青花，土師器，薩摩焼，陶器，炻器，石製品，金属器，木器である。遺物はB地区内から約1,100点出土し，ここには158点の実測図を掲載した。

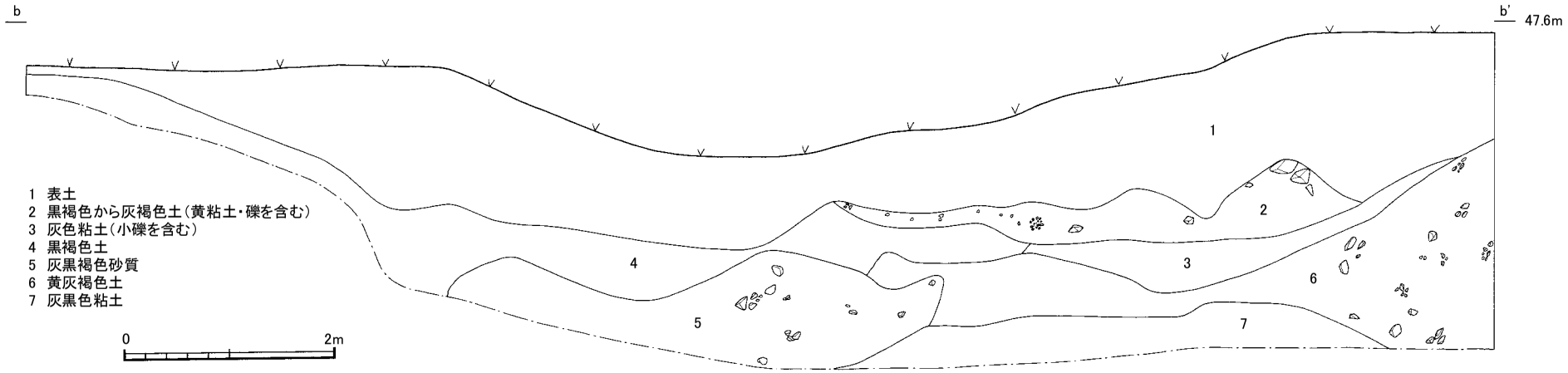


第18図　B地区　全体図





1 表土
2 3よりやや明るい
3 やや明るい暗茶色シルト質土
4 暗茶褐色シルト質土(礫が若干混ざる)
5 茶褐色砂質土
6 茶褐色砂質土(若干小礫が混ざる)
7 暗茶褐色砂
8 暗茶褐色シルト質土, 橙色パミスをやや含む
9 橙色砂質土
10 暗褐色砂
11 茶褐色シルト質土砂混ざり
12 暗茶褐色シルト質土炭化物混ざり
13 暗茶褐色シルト質土
14 灰茶褐色砂
15 茶褐色シルト質土
16 黄色砂質土
17 橙色小礫混ざり, 黄褐色砂質土(堆積がルーズ)
18 暗茶褐色シルト質土(少量炭化物が混ざる)
19 砂
20 橙色小礫混ざり, 黄褐色砂質土(やや大きめの礫も混ざる)
21 灰色シルト質土
22 21よりやや暗い
23 黄褐色砂質土
24 こぶし大円礫混ざり砂質土(堆積がルーズ)
25 砂礫
26 地山
27 円礫混じり暗橙色土(地山が流れたような堆積)



1 表土
2 黒褐色から灰褐色土(黄粘土・礫を含む)
3 灰色粘土(小礫を含む)
4 黒褐色土
5 灰黒褐色砂質
6 黄灰褐色土
7 灰黒色粘土

第19図　B地区　土層断面図

イ　遺構

（ア）空堀Ⅰ（第20～22図）

Ｃ地区曲輪Ⅰの東から南側にかけて裾野部分を廻るように空堀Ⅰが検出された。空堀ⅠはＣ地区曲輪Ⅰの南側に位置する土塁真下で規模が最大となり，最大幅5.5m，最大深2.3m，断面形は台形（箱形）を呈する（第23図）。土塁真下の位置では南西－北東方向に直線的にのび，Ⅰ－18区で屈曲した後，Ｃ地区曲輪Ⅰに沿うように北にのびていく。空堀Ⅰの底面レベルはH－16区で最高(48.85m)となり，雨水はH－16区から北東方向と南西方向に流れたと考えられる。Ⅰ－18区で屈曲した後は，北側にいくにつれ浅くなり，枝分かれしながら幅が狭くなる。N－18区では旧地形に沿うように屈曲し，さらに北側では枝分かれし，谷を形成しながらF地区へと下ると考えられる。

空堀Ⅰの断面を見ると，埋土は細粒の粘質土と砂質土との互層から成る水成堆積構造を示しており（第23図），人為的な埋め戻しとは異なる堆積状況を示す。

（イ）溝状遺構（第20～22図）

溝状遺構は主にＣ地区曲輪裾野（Ⅰ－17～R－19区付近，溝状遺構1群）とＡ地区西側の台地裾野(Ⅰ－19～M－21区付近，溝状遺構２群)で検出された。

溝状遺構１群はＣ地区曲輪Ⅰの東側裾野に沿うように複数条検出され，溝底面レベルはN－16区で最高となっている。そこから北側へは枝分かれしながらF地区へと下る。南側へは一部消失し，空堀Ⅰへと合流する。

空堀Ⅰに合流するⅠ－17区では溝状遺構内で木樋が検出された（第30図）。

溝状遺構２群はA地区西側の台地裾野に沿うように検出された。1群同様，分断，枝分かれした状態で検出された。

溝状遺構２群周辺も湿地で，柱や漆椀等の木製品が多数出土した。

空堀Ⅰ，溝状遺構内出土遺物（第24～27図）

青磁

104～114は青磁である。104～110は椀，111～114は皿である。104～106は口縁部が外反し，丸みを帯びる。104の見込みと高台内面は輪状に釉剥ぎされる。107は青磁と思われるが，焼成不良のためか，胎土が明橙色，釉は浅黄色の色調を呈する。111は口縁部が外反し，丸みを帯びる。109は畳付から高台内底は露胎する。110は外面に細線で線描蓮弁文が描かれるが，剣頭は細線を意識しながら，別に描かれる。108は畳付が平坦につくられ，高台は竹節高台状に中位に稜を有する。見込みには印刻も施される。112は口縁端部が丸みを帯びるものである。見込みは輪状に釉剥ぎされ，畳付から高台内底は露胎する。113は稜花皿である。114は皿と思われるが，他の器種の可能性も考えられる。腰部から外底面は露胎する。露胎した部分は，明橙色の色調を呈する。

青花

115～118は青花である。115～117は碗である。115の口縁端部は外反する。116は見込みが饅頭心を呈する。117は蓮子碗で，芭蕉文が描かれる。118は皿である。見込みに人物文が描かれる。

土師器

119～130は土師器である。全て糸切り底である。125は内面に煤が付着している。129は耳皿である。119，120，124，127，130は金属が付着している。130は土師器の坏を利用した坩堝である。

輸入陶器

131・132は輸入陶器である。どちらも中国南部産と思われる。131は壺である。外面には褐釉がかかる。132は鉢と思われる。焼き締めである。

陶器

133は備前産の擂鉢である。134は琉球産の泡盛用徳利である。135・136は備前産の大甕である。口縁部は玉縁状を呈する。

瓦質土器

137～142は瓦質土器である。137は火鉢等と思われる。内面にはハケ目状の工具痕が残り，外面には菊文が印刻される。138～140は擂鉢である。141・142は火鉢である。141は外面に花文が印刻される。

中世須恵器

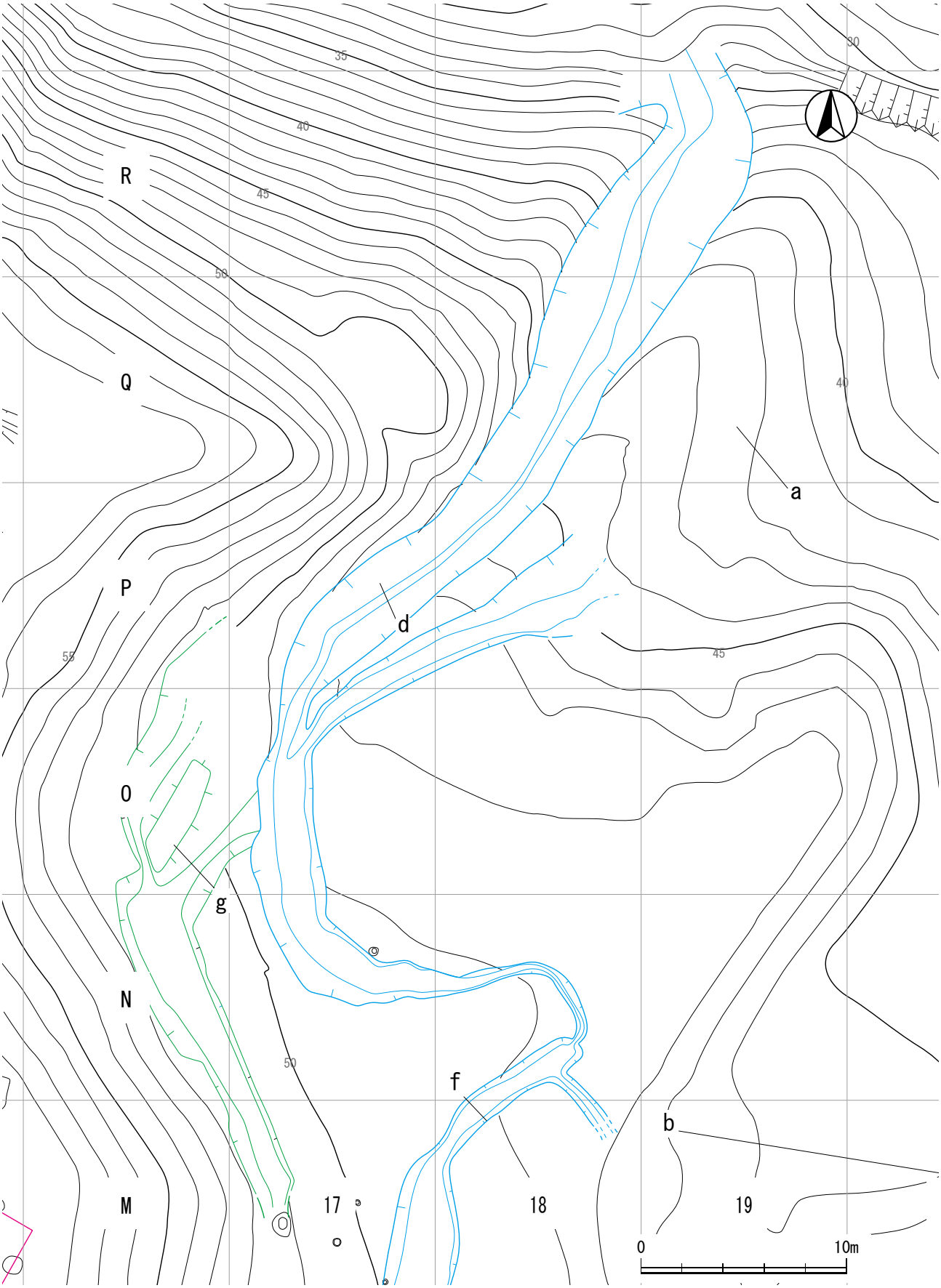
143は中世須恵器の甕である。外面は綾杉状のタタキが残り，内面はハケ目状の工具痕が残る。

土製品

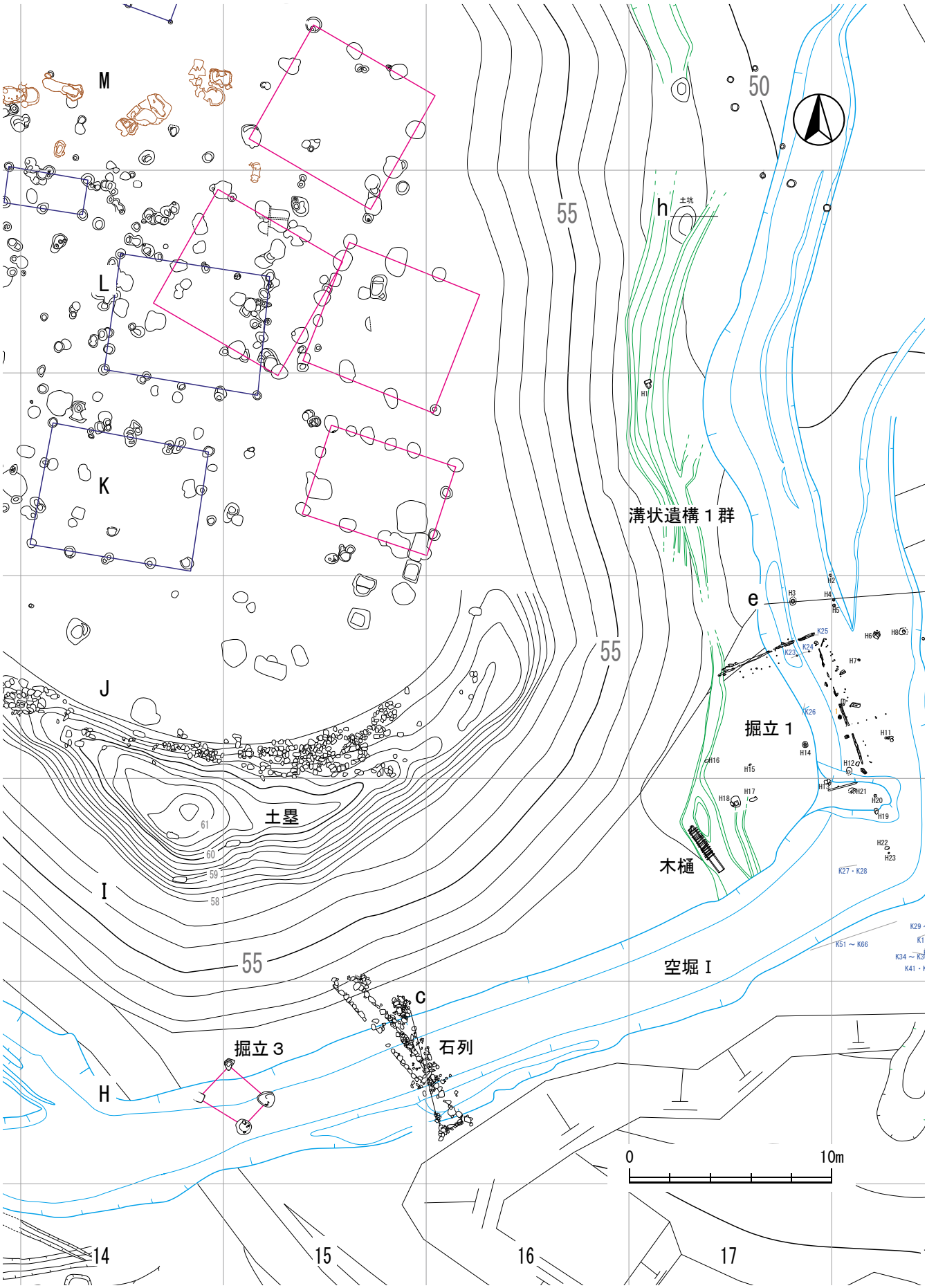
144は管状土錘である。表面の一部に煤が付着している。

金属製品

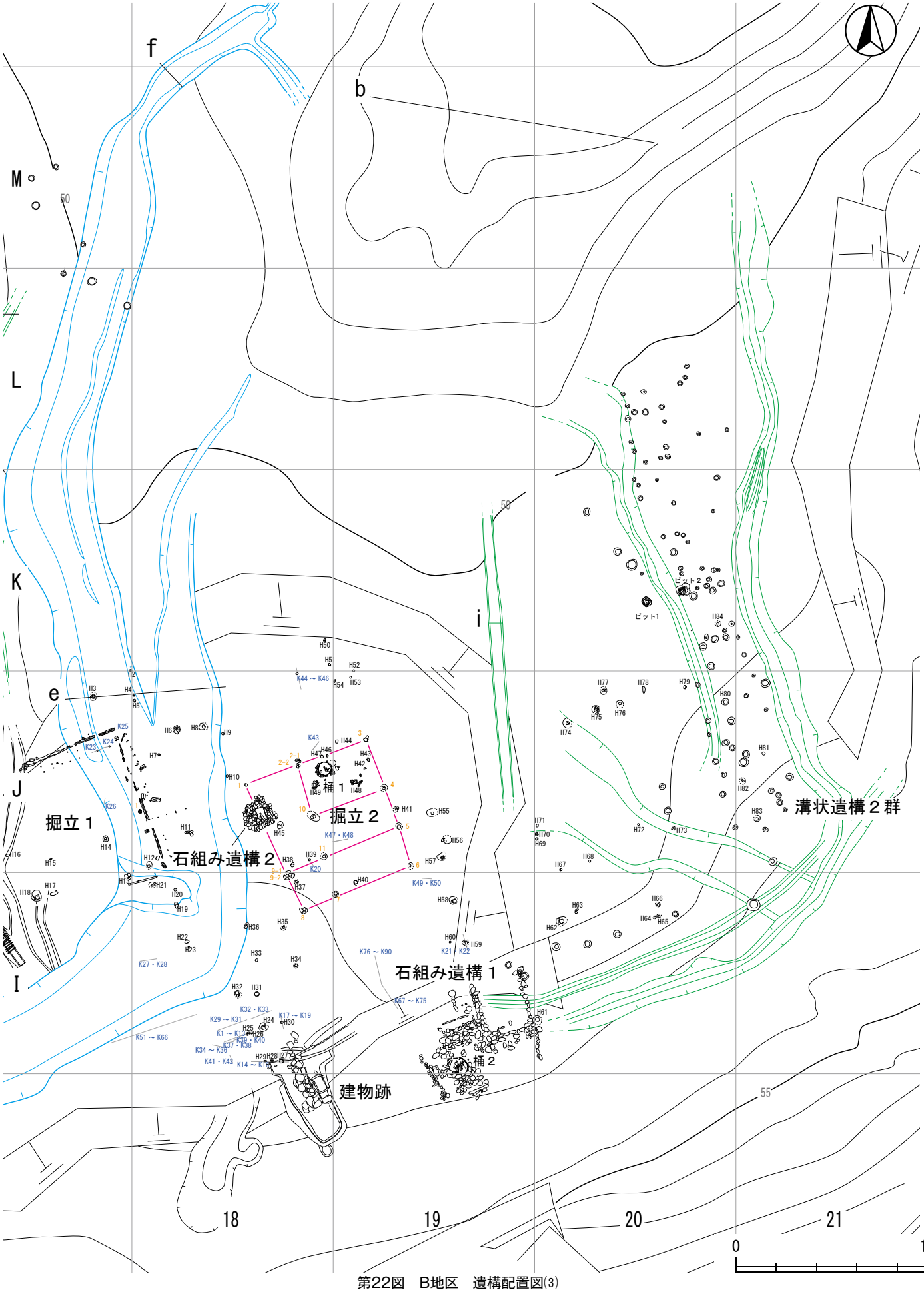
145は青銅製の細長の金属器である。断面は方形を呈し，両端は欠損している。



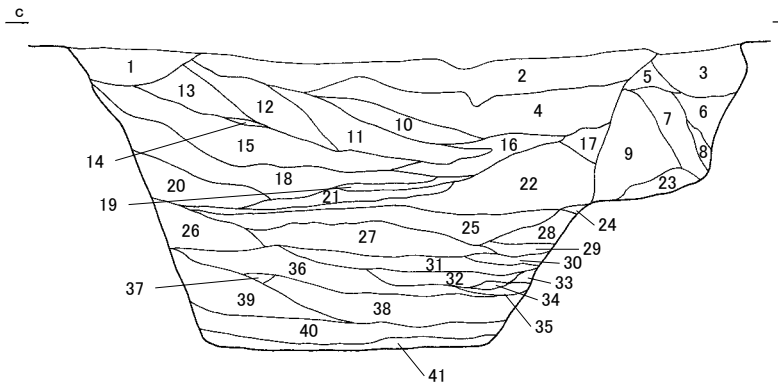
第20図　B地区　遺構配置図(1)



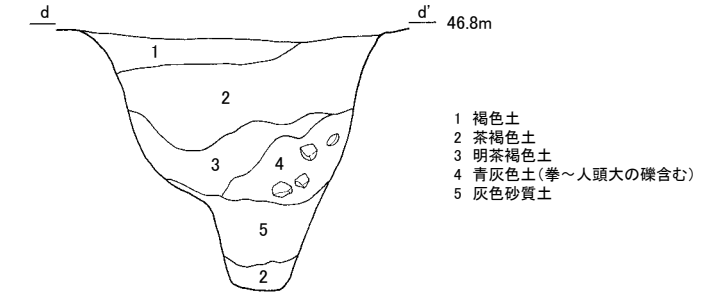
第21図　B地区　遺構配置図(2)



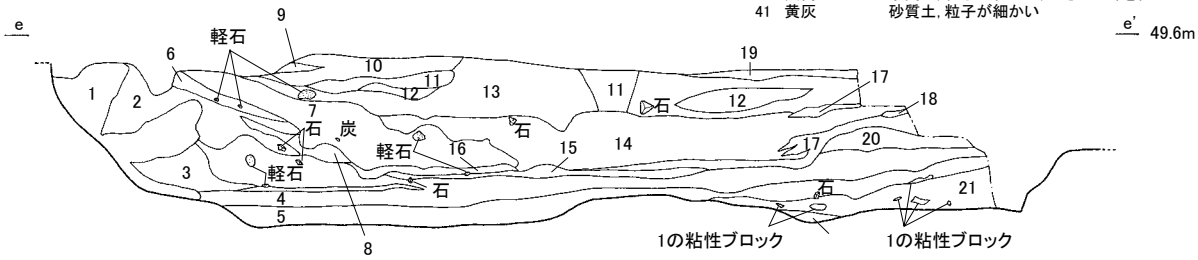
第22図　B地区　遺構配置図(3)



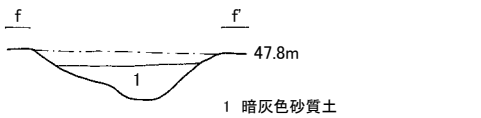
1 灰黄褐 シルト質土角礫を含む
2 黄褐 シルト多くの火山灰を含む
にぶい黄褐 砂,礫
3 にぶい黄褐 シルト,こぶし程礫2個
4 にぶい黄褐 粘土質,粒子が極めて細い,少量の砂・礫を含む
5 褐 シルト質土
6 にぶい黄橙 シルト質土
7 灰黄褐 かたい粘土質
8 暗赤褐 かたい土
9 黄褐 かたい粘土質
10 褐 砂質土,粘土細い
11 にぶい黄褐 砂質シルト
12 にぶい黄褐 シルト質土,若干やわらかい
13 にぶい黄褐 シルト質土,細い円礫を少量含む
14 褐 粘土質
15 にぶい黄褐 シルト質土,少量礫を含む
16 褐灰 粘土質,少量礫を含む
17 にぶい赤褐 砂質シルト
18 黒褐 粘土質,3～5cmの扁平礫を3個含む
19 灰黄褐 粘土質
20 黄褐 シルト質土
21 にぶい黄褐 砂質土,大量な礫を含む
22 明黄褐 粘土質,ややかたい
23 明黄褐 粘土質
24 灰黄褐 粘土質
25 黒褐 シルト質,5cm程礫を含む
26 灰黄褐 砂質土,やわらかい
27 黒褐 シルト質土,粒子が細い
28 にぶい黄褐 砂質土,粒子が細い
29 褐灰 シルト質土
30 灰黄褐 粘土質
31 黒褐 砂質土
32 黒褐 シルト質土,少量礫を含む
33 にぶい黄褐 粘土質
34 にぶい黄橙 粘土質
35 暗褐 砂質土
36 灰黄褐 砂質土,1～5cmの礫を含む
37 明黄褐 シルト
38 黒褐 シルト,やや粘土質がある
39 灰黄褐 シルト
40 黄褐 砂質土,粒子が細かい,小さい円礫を含む
41 黄灰 砂質土,粒子が細かい



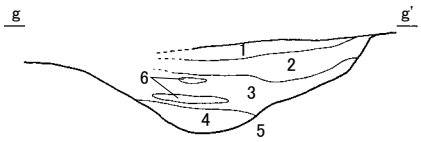
1 褐色土
2 茶褐色土
3 明茶褐色土
4 青灰色土(拳～人頭大の礫含む)
5 灰色砂質土



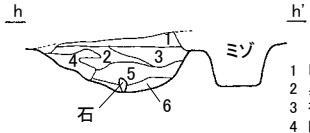
1 暗オリーブ灰 5mm大の青緑色の粒を多数含む(凝灰岩に似る),粒子は細かい粘性土
2 にぶい黄褐 20mm大の軽石,5mm～20mmの小礫を多数含む,粒子は粗い砂質土
3 黒褐 10mm大の軽石・小礫を少量含む,粒子は粗い砂質土
4 暗灰黄 20mm～100mm大の軽石・礫を含む,粒子は粗い砂質土
5 黄灰 10mm～50mmの軽石・礫を少量含む,粒子は粗い砂質土
6 浅黄 30mm大の軽石を少量含む,粒子は粗い砂質土
7 灰黄～にぶい黄褐 10mm～30mmの軽石・小礫を多く含み90mm大の軽石・30mm大の炭化物を含む,粒子は粗い砂質土
8 暗灰黄 10mm～30mmの軽石・小礫を少量含む,粒子は粗い砂質土
9 灰黄褐 2mm大の小礫を少量含む,粒子は粗い砂質土
10 灰黄褐 5mm～40mmの礫を多く含む,粒子は粗い砂質土
11 オリーブ褐 5mm～50mmの礫・10mm～20mmの軽石を少量含む,粒子は粗い砂質土
12 黒褐 5mm～50mmの礫を含む,粒子は粗い砂質土
13 黒褐 5mm～40mmの軽石・小礫を多く含む,粒子は粗い砂質土
14 黒褐 軽石・礫をほとんど含まない,粒子は細かい粘性土
15 灰黄褐 軽石・礫をほとんど含まない,粒子は細かい粘性土
16 灰黄褐 軽石・礫をほとんど含まない,粒子は細かい砂質土
17 にぶい黄褐 5mm～30mmの礫を多数含む,粒子は粗い砂質土
18 黄褐 5mm大の軽石を少量含む,粒子は粗い砂質土
19 浅黄 5mm～10mmの軽石を多数含む,粒子は粗い砂質土
20 灰黄褐 5mm大の軽石を少量含む,粒子は粗い砂質土
21 黄灰 1の粘性土のブロックを含む,粒子は粗い砂質土
22 灰 砂層



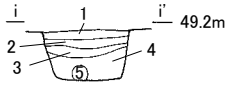
1 暗灰色砂質土



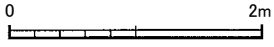
1 黒褐色(木の枝・葉など含む)
2 灰青砂質土(小礫含む)
3 暗黒褐色粘質土(木の枝葉含む)
4 礫を多く含む
5 灰オリーブ,硬質
6 さらに黒い



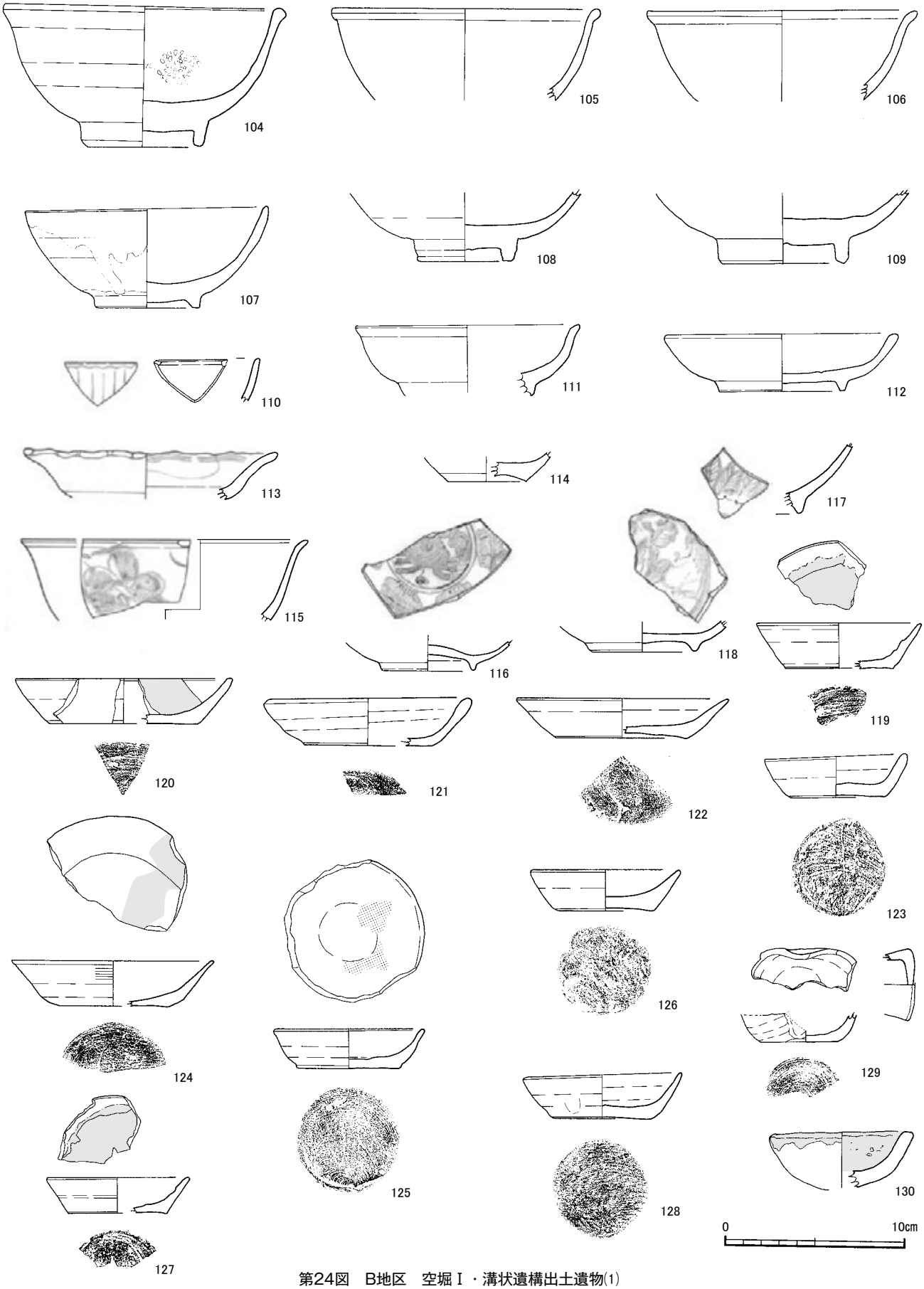
1 明灰褐色砂質土(小礫を多く含む)
2 黒褐色粘質土
3 褐灰粘質土
4 暗黒褐粘質土
5 黒色粘質土
6 灰,オリーブ粘質土



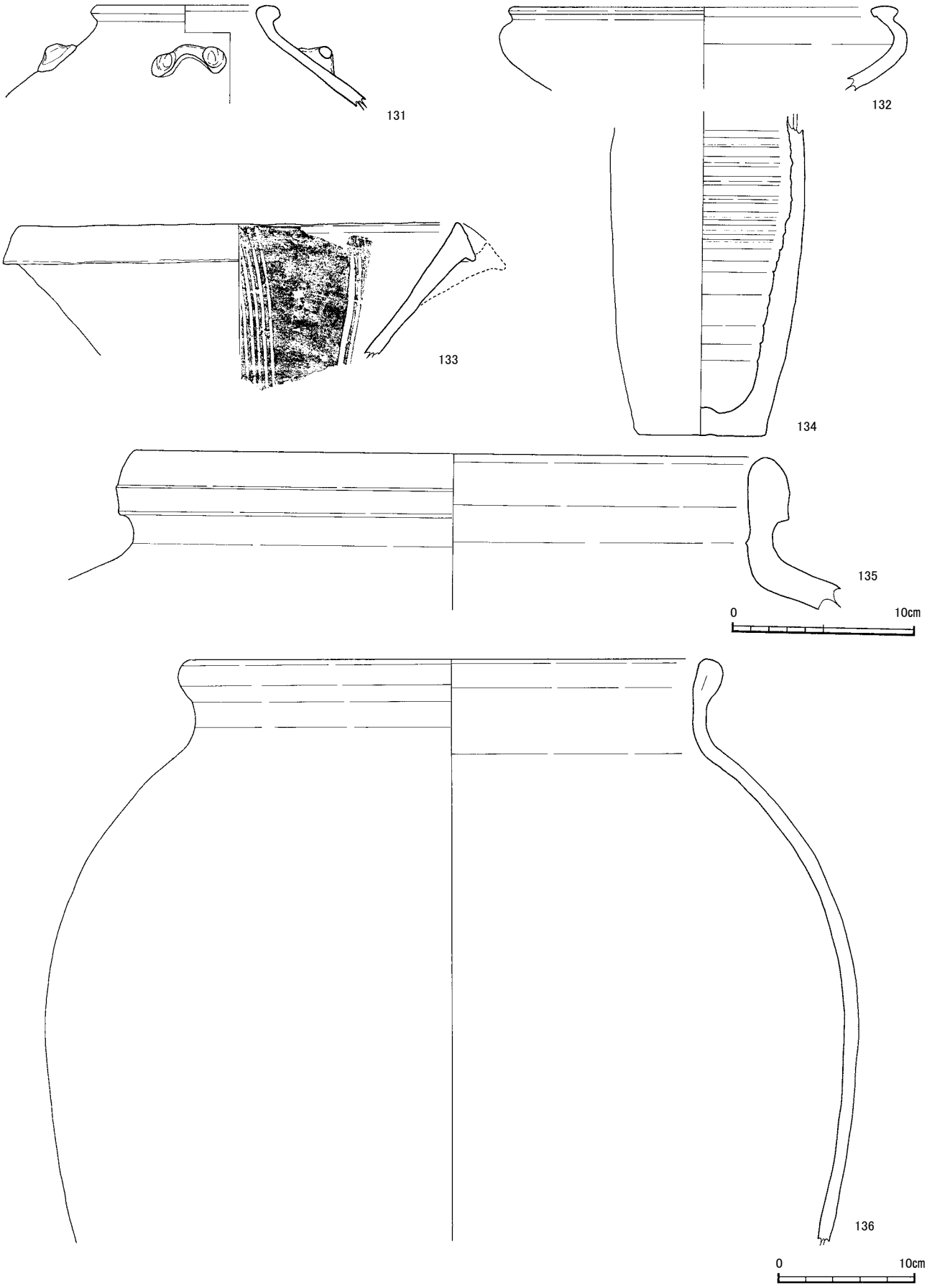
1 灰色,砂と粘土混ざり
2 灰色に赤が混ざる粘土
3 灰色に赤が混ざる砂質
4 灰色粘質土
5 黄色土



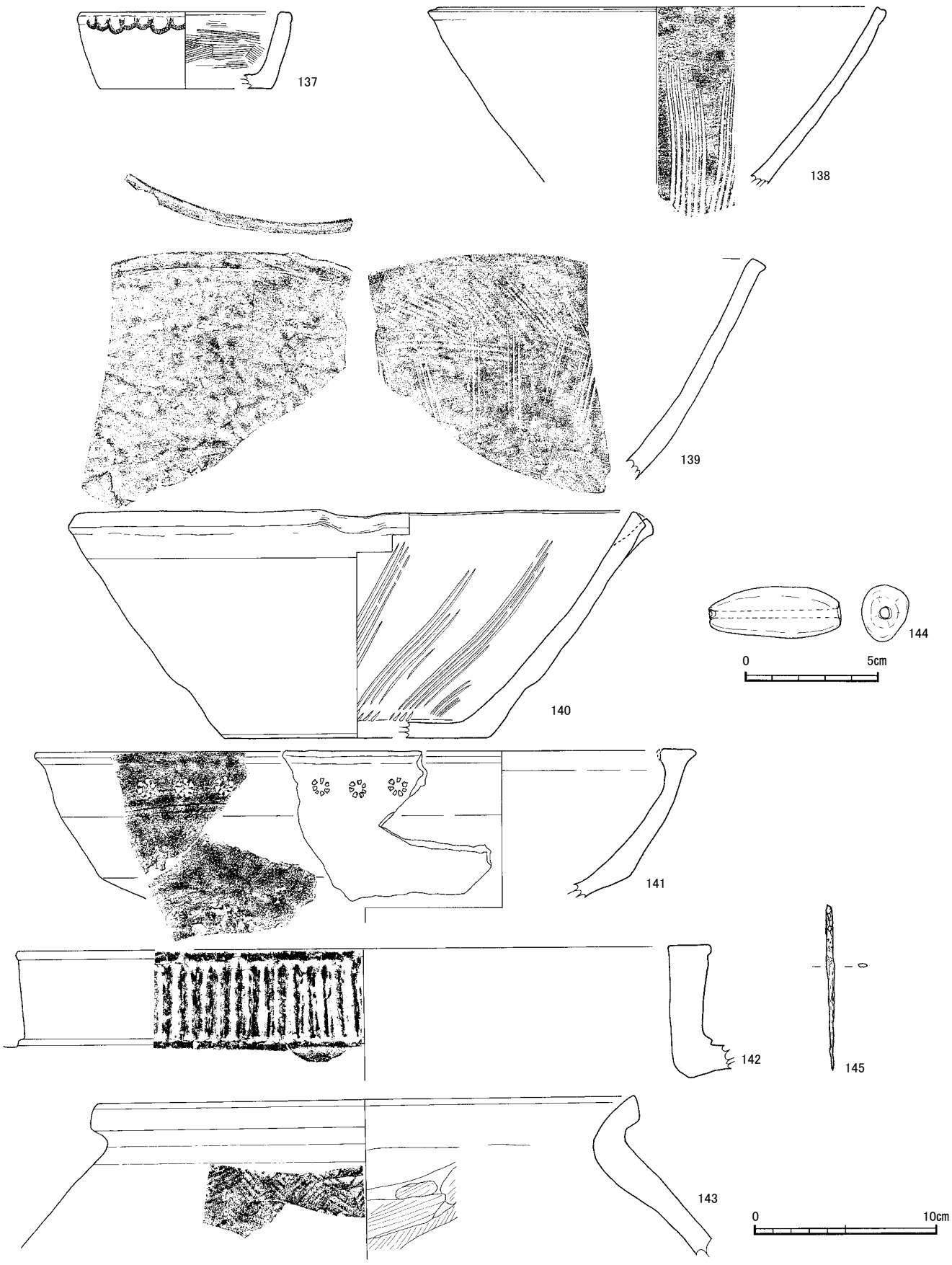
第23図　B地区　空堀Ⅰ・溝状遺構断面図



第24図　B地区　空堀Ⅰ・溝状遺構出土遺物(1)



第25図　B地区　空堀Ⅰ・溝状遺構出土遺物(2)



第26図　B地区　空堀Ⅰ・溝状遺構出土遺物(3)

木製品

空堀Ⅰ，溝状遺構内から出土した木製品の内，６点を掲載する。空堀Ⅰからは146，147の漆椀が２点，溝状遺構からは151の漆椀が１点，148の漆坏が１点，149の下駄１点，150の把手状木製品が１点出土した。

漆椀

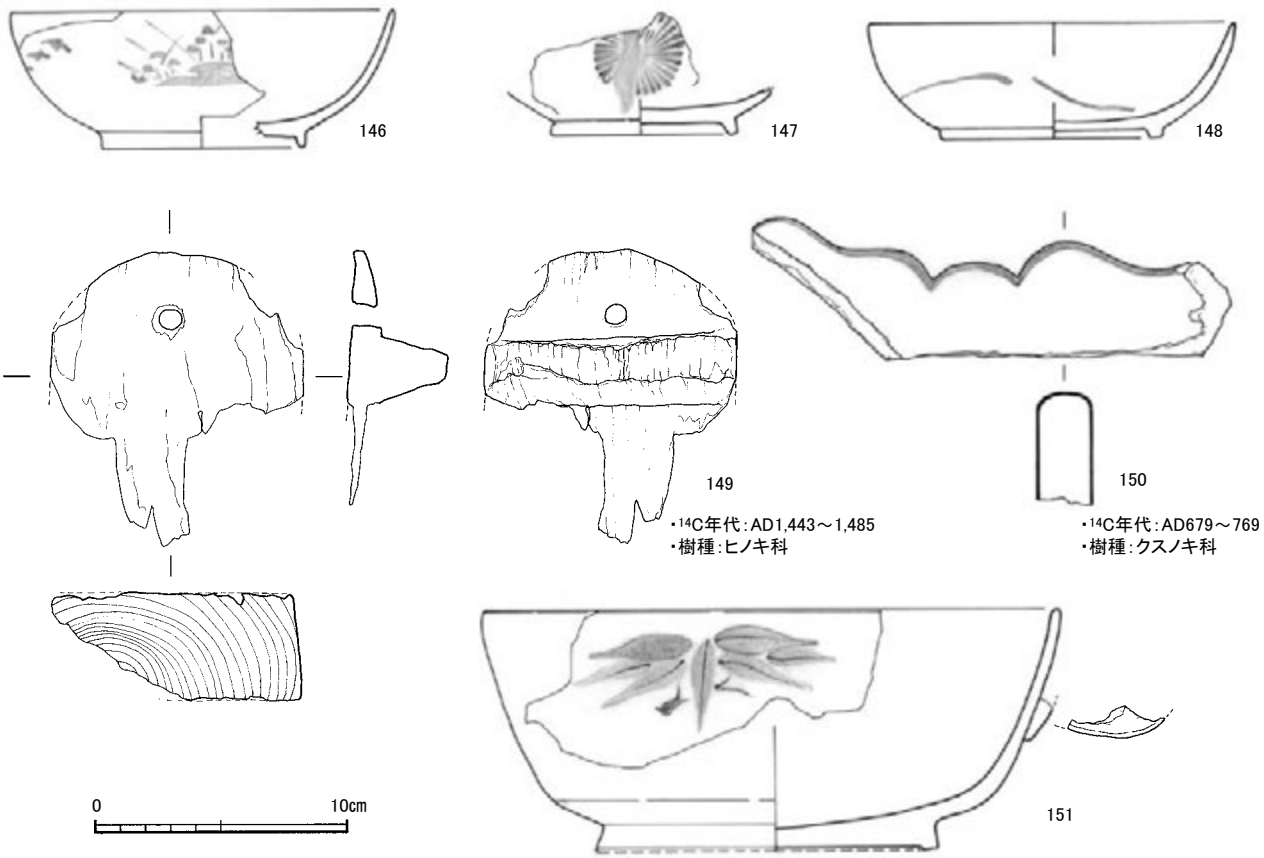
146はO-17区の空堀Ⅰから出土した。口径15.2㎝，底径8.2㎝，高さ5.4㎝。輪高台。内面赤色漆。松林と雲の漆絵。147は口縁部が欠けた漆椀である。148は空堀Ⅰから出土した。口径14.5cm，底径8.9cm，器高4.5cmである。外面に雲の漆絵がある。内面赤色漆。151はC－17区の溝状遺構1群から出土した。口径23㎝，器高9.7㎝，底径13.7㎝で総高台と思われる底部である。体部中程には把手と思われる残片が残されている。漆絵は竹笹文。内面赤色漆。

下駄

149はM―17区の溝状遺構から出土した。２枚歯の下駄で鼻緒部分である。^{14}C年代測定値はAD1,443～AD1,485という結果が出ている。また，樹種はヒノキ科である。歯はかなり磨り減っている。

把手

150はⅠ－21区の溝状遺構から出土した。黒漆塗りで雲形の把手の一部と思われる。縁辺に赤漆が使われ，一端が欠損している。飾りの一部である可能性もある。^{14}C年代測定値はAD679～AD769という結果が出ている。また，樹種はクスノキ科である。



第27図　B地区　空堀Ⅰ・溝状遺構出土遺物(4)

（ウ）掘立柱建物跡（第28～30図）

掘立柱建物跡１はＩ・Ｊ－17・18区で検出された（第28図）。柱には当時の地表面と想定されるレベル以下に生材が多く残存しており，横架材や杭列と思われる生材も多く残存していた。柱列は３方（コの字型）に並び，一部では柱列に沿うように杭列が検出された。東側の柱列が空堀Ｉ埋土上面で検出されたため，空堀Ｉが埋まった後の建物跡であることが分かる。横架材の^{14}C年代測定値はAD1480～1629で樹種はスギという結果が出ている。

掘立柱建物跡２はI－18～Ｊ－19区にかけて検出された。２×３間で建物内部から埋設された桶が１点検出された（桶１）。桶１の内部からは入れ子状に小型の桶，用途不明の木製品，土師器の皿が出土した。桶１の^{14}C年代測定値はAD1,307～1,398という結果が出ている。また，この掘立柱建物跡２から石組み遺構２が検出された（第29図）。石組み遺構２の中心には木製容器が置かれていた。木製容器は１本の木を刳り抜いて作られた刳物で，枡型を呈する。この他にもB地区内で４点木製容器が出土している。１点はこの石組みの中心から検出され，Ｈ－18区検出の建物跡から２点，Ｋ－17区土坑から出土している。いずれも用途については不明である。

掘立柱建物跡３はＨ－14，15区で検出された（第30図）。柱間は１×１間で，柱間は平均220cm，柱は残されていなかった。他の地区も含めて，柱間が１×１間はこの掘立柱建物跡３だけである。

（エ）木樋（第30図）

Ｉ－17区で溝状遺構１群内に木樋が出土した。木樋は長さ260cm，幅40cm，高さ25cmでU字型の断面を呈する。１本の木をくり抜き作られており，溝に沿うように内部に置かれていた。その上部には50cm程度の木を多数横置きし，さらにその上にスギの葉を覆い被せていた。^{14}C年代測定値はAD1,450～1,616で樹種はマツ属複維管束亜属という結果が出ている。

（オ）柱痕跡・杭列・ピット（第31～38図）

建物跡にならない柱痕跡や柱列（Ｈ１～84），杭列（Ｋ１～90）も多数検出された。これらはI－17区～Ｊ－19区の掘立柱建物跡や建物跡周辺で多数検出された。柱の断面形は四角，六角，八角，丸等様々である。

（カ）石列（第39図）

Ｈ－15，16区では石列が検出された。石列は人頭大の石を多く用い，約1mの幅で２列並べていた。また，外側をそろえるように配置されており，空堀を跨いでC地区曲輪Ｉへ突き当たるように検出された。

（キ）土坑（第41図）

Ｋ－17区で土坑が１基検出され，土坑内から木製容器が出土した。

（ク）石組み遺構（第40，41図）

Ｉ－19区で石組み遺構１が検出された。石組みは人頭大の円礫を並べており，北側はコの字型に礫が配列されており，Ｉ－19区とＨ－19区の境界付近では桶２が検出されている。コの字型の配置の規則性に合わせるように，木材や杭列も検出された。石組み遺構2で検出された桶とは異なり，底板が無く，内部から小礫が多数検出された。

石組み遺構２は前述した掘立柱建物跡２内で検出された。

（ケ）建物跡（第42図）

Ｈ－18区を中心に建物跡を検出した。自然の傾斜面を利用し作られた遺構は，内部に石製の竈や木製容器，人頭大の石や杭列などが含まれていた。石製の竈や礫，杭列，木製容器は建物跡の形状を意識して配置されており，倉庫や室のような機能も想定されるが，性格は不明である。

土坑内出土遺物

152は木製の容器である。長さ51.5cm，幅24cm，高さ13.5cmの刳物である。^{14}C年代測定値はAD1,521～AD1,636という結果が出ており，樹種はスギである。

桶出土遺物

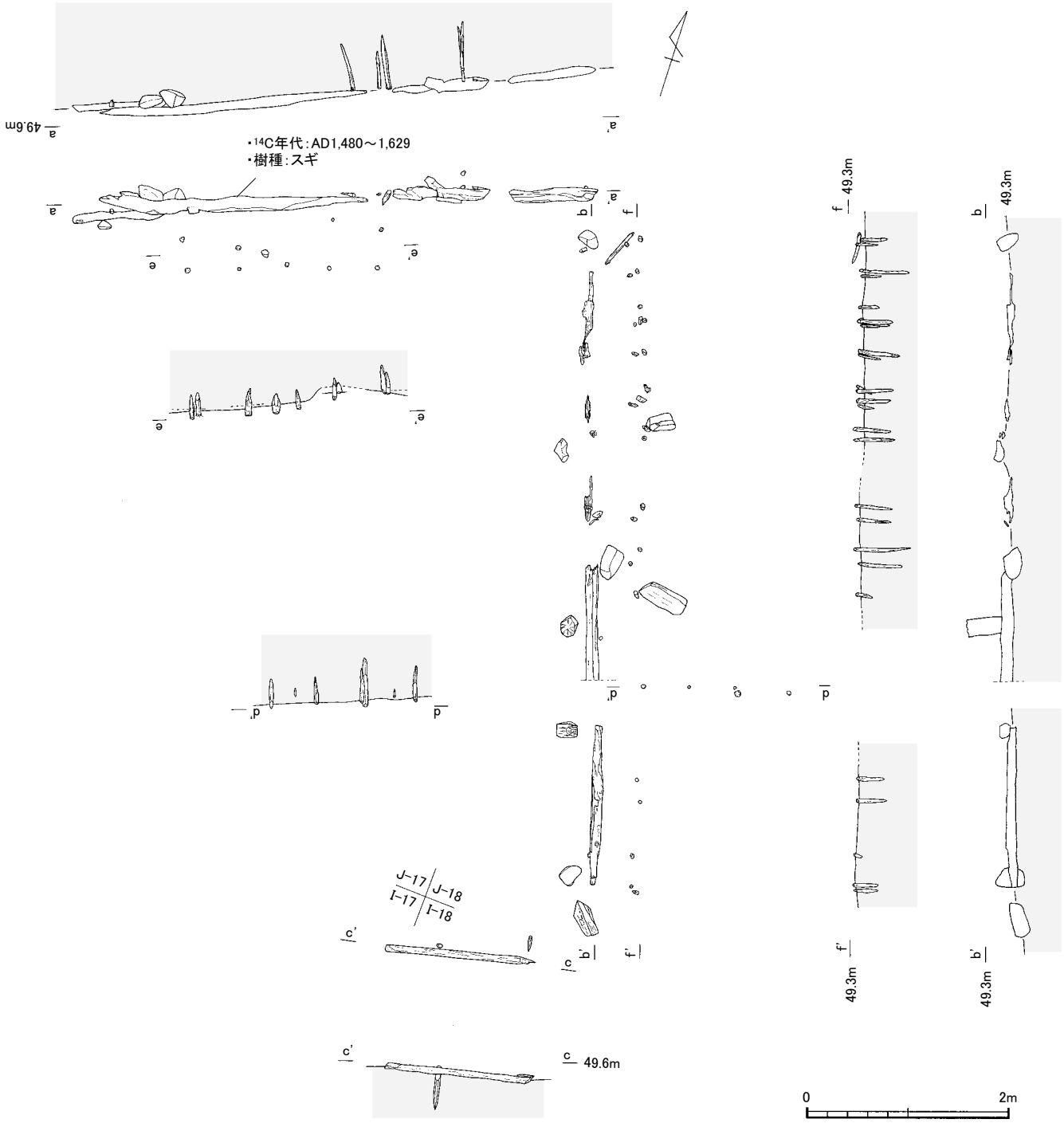
桶側板，土師器皿（第43図）

153～159は桶側板で，156～158は同一個体の桶側板である。153・154・159は桶の把手部側板で，方形のほぞ穴を穿っている。158の^{14}C年代測定値はAD1,636～AD1,666で，樹種はモミ属である。160は土師器の皿で，外面に広く煤が付着していた。糸切り底である。

建物跡出土遺物

木製容器，石製竈（第42，43図）

第42図①,②は建物跡から出土した木製容器である。どちらも刳物で，建物跡内に上下に置かれていた。①は数本の横木の上に置かれ，②は床面に直接置かれていた。161は石製の竈である。脚が３つあり，側部に焚き口，煙口と思われる穴が開く。２つに割れ，割れた面を下にして建物内に配置されていた。

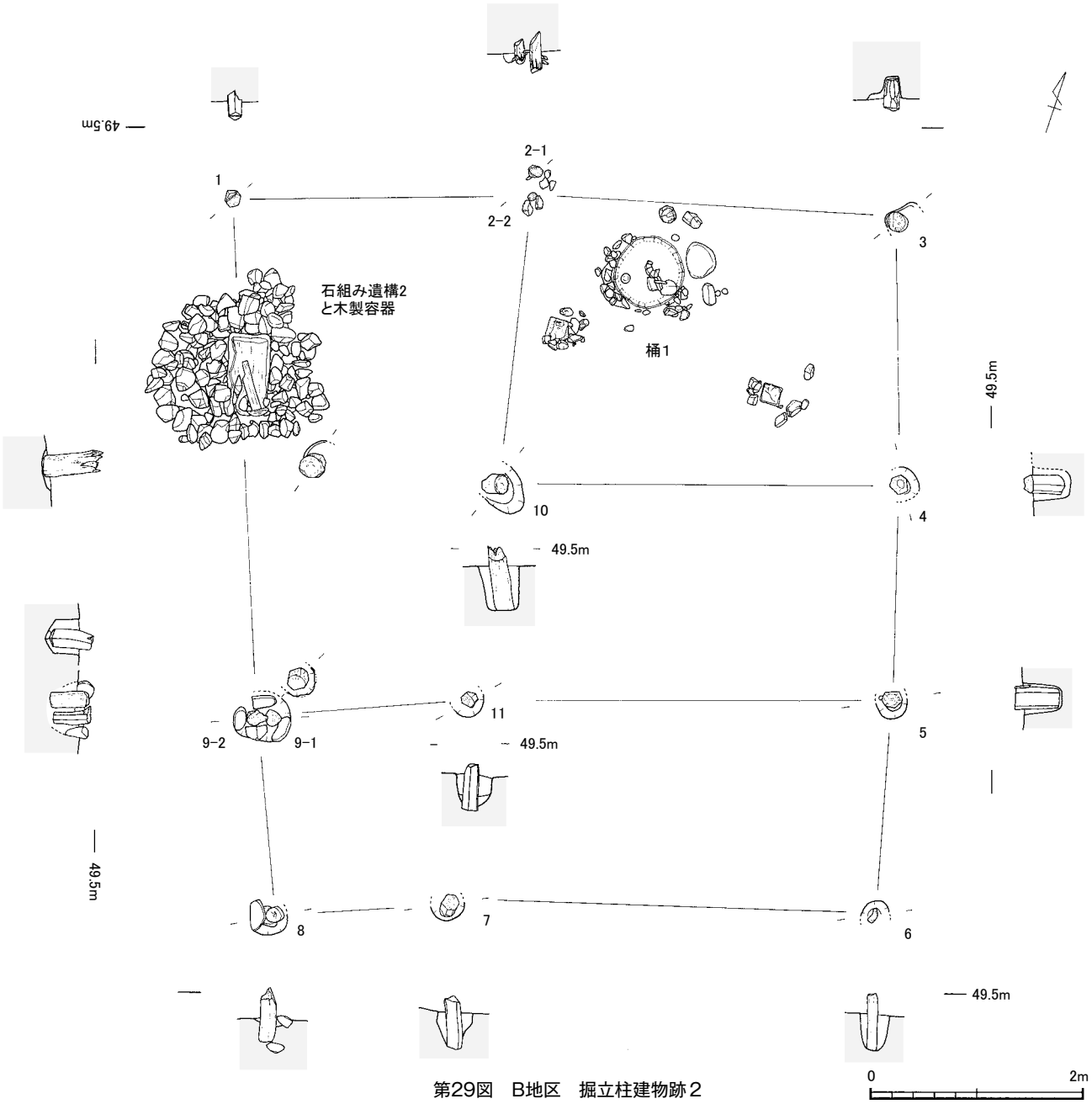


第28図　B地区　掘立柱建物跡１

第３表　B 地区掘立柱建物跡 1 計測表

主軸方向	方向	長さ	
		cm	尺＝30.2cm
N−21°−W	a−a’	525+	17.38+
	b−b’	775	25.66

主軸方向	方向	長さ	
		cm	尺＝30.2cm
N−21°−W	c−c’	210+	6.95+
	d−d’	195+	6.45+



第29図　B地区　掘立柱建物跡２

第４表　B 地区掘立柱建物跡２計測表

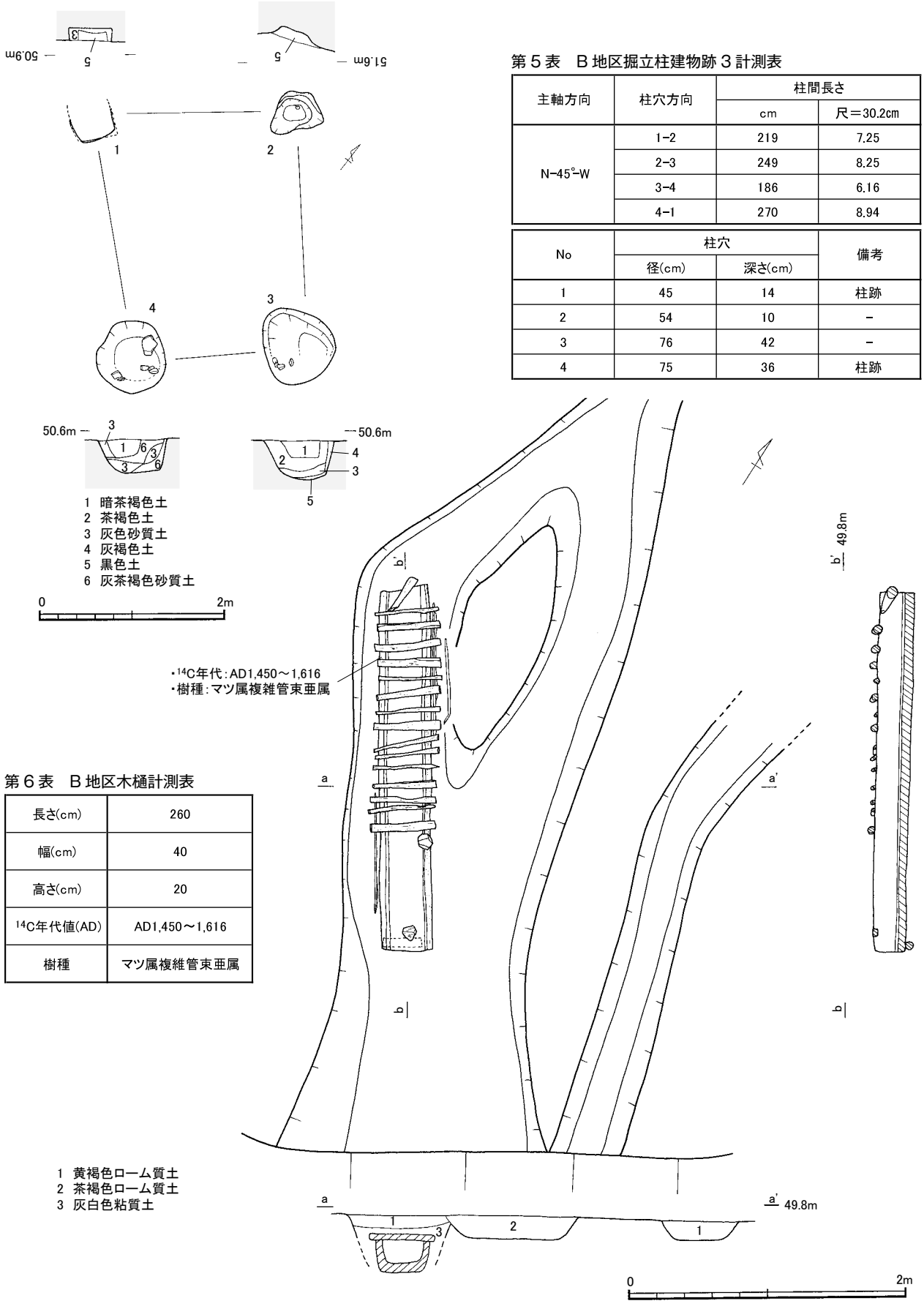
主軸方向	No-No	柱穴方向	柱間長さ		延長
			cm	尺＝30.2cm	
N-23°-W	桁行	1-(2-1)	275	9.11	635
		(2-1)-3	360	11.92	
		6-7	400	13.25	575
		7-8	175	5.79	
	梁間	3-4	255	8.44	660
		4-5	200	6.62	
		-6	205	6.79	
		8-(9-1)	190	6.29	680
		(9-1)-1	490	16.23	

No	柱穴		柱			樹種	備考
	径(cm)	深さ(cm)	形状	径(cm)	長さ(cm)		
1	-	-	六角	13	21	-	-
2-1	-	-	丸	11	22	-	ぐり石多数
2-2	-	-	丸	12	36	-	ぐり石多数石
3	?	?	丸	15	30	-	-
4	26+	36	六角	17	39	-	-
5	29	36	六角	20	41	-	礎石？
6	27	35	丸	9	54	-	-
7	32	35	六角	14	50	-	-
8	-	-	丸	15	51	-	礎石?ぐり石
-1	53	27+	丸	14	38	-	ぐり石
9-2	53	27+	六角	13	35	-	ぐり石
10	44+	43	丸	17	60	-	-
11	34	30	六角	14	45	-	-

第５表　Ｂ地区掘立柱建物跡３計測表

主軸方向	柱穴方向	柱間長さ	
		cm	尺＝30.2cm
N-45°-W	1-2	219	7.25
	2-3	249	8.25
	3-4	186	6.16
	4-1	270	8.94

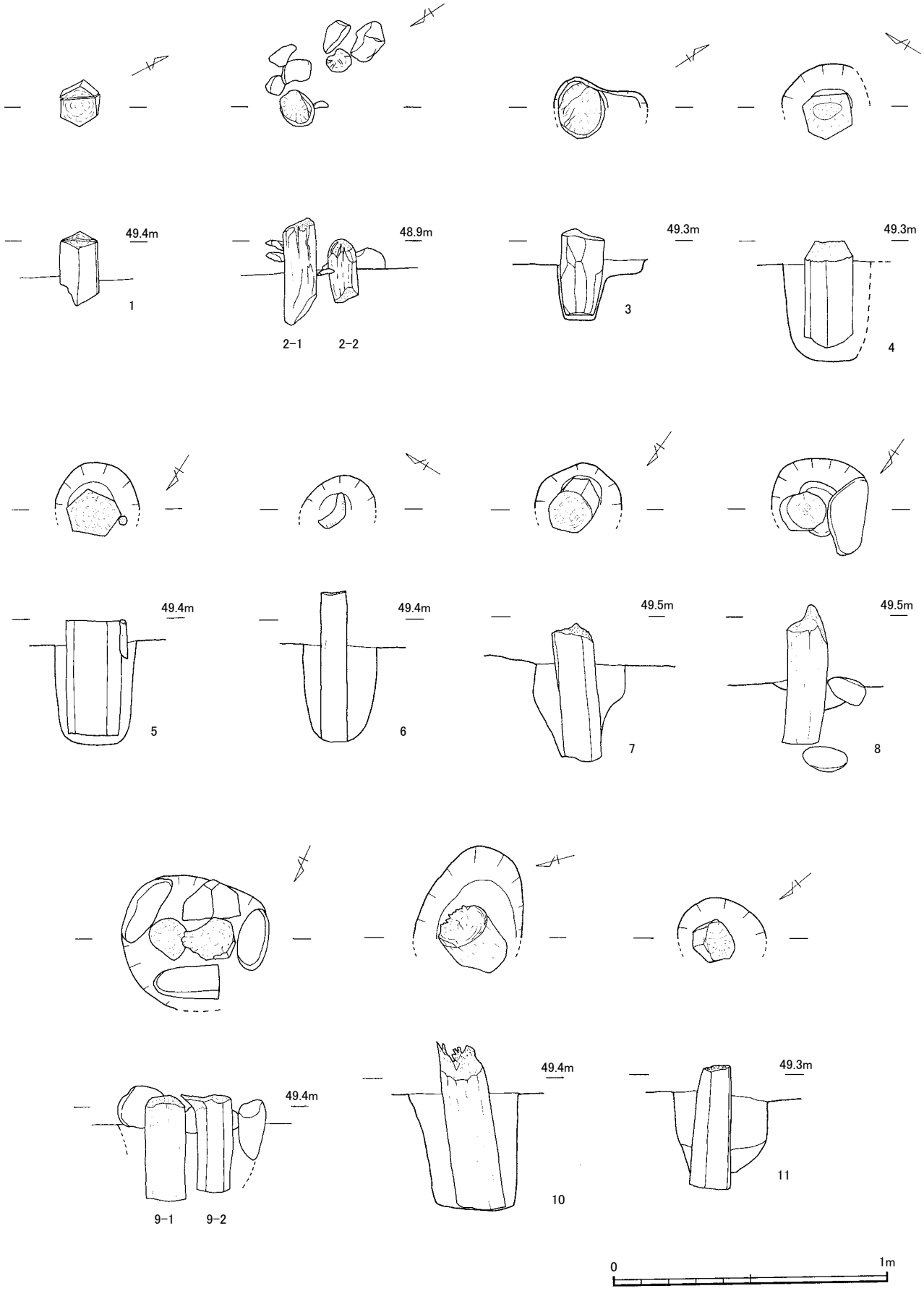
No	柱穴		備考
	径(cm)	深さ(cm)	
1	45	14	柱跡
2	54	10	−
3	76	42	−
4	75	36	柱跡



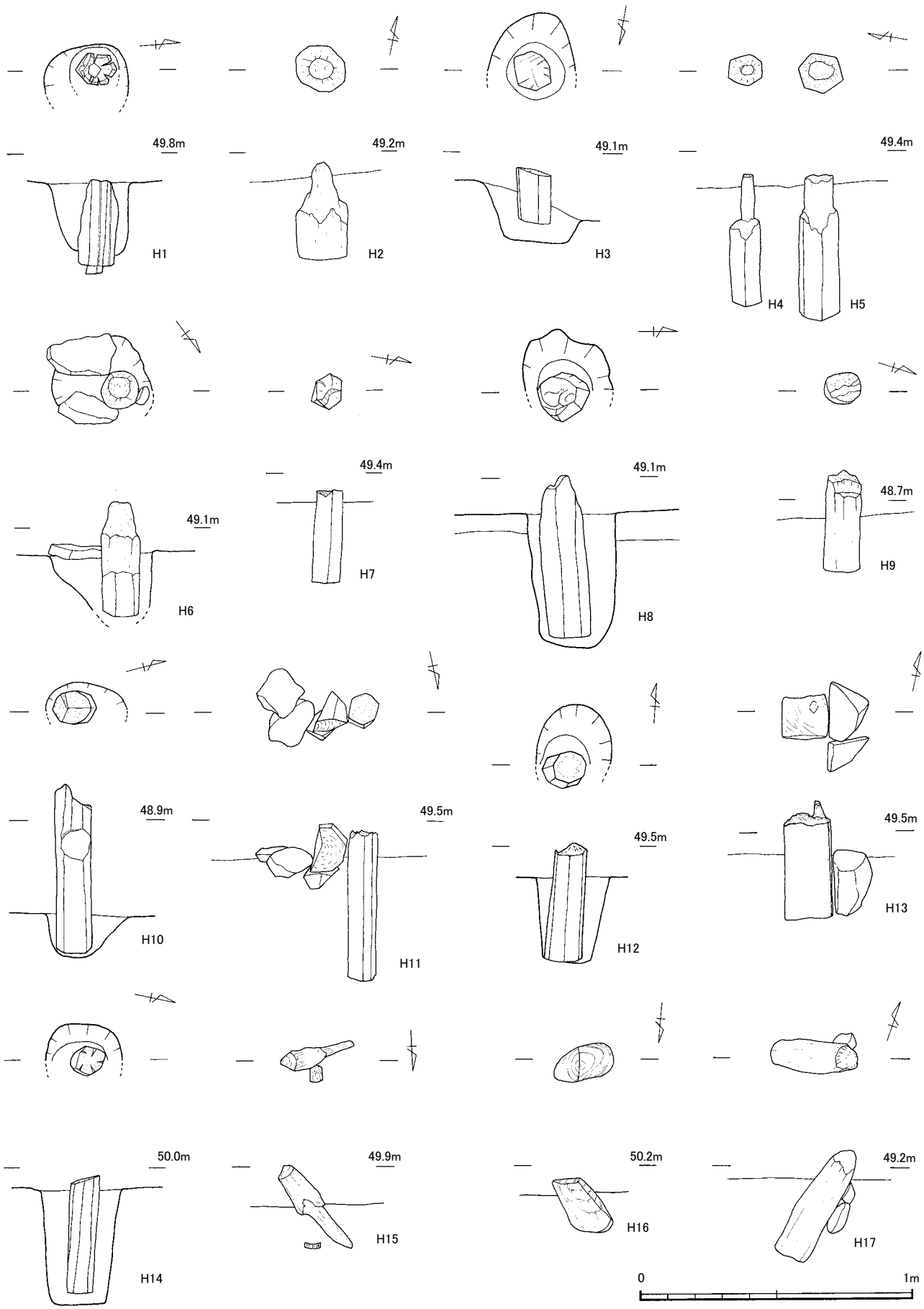
第６表　Ｂ地区木樋計測表

長さ(cm)	260
幅(cm)	40
高さ(cm)	20
14C年代値(AD)	AD1,450～1,616
樹種	マツ属複維管束亜属

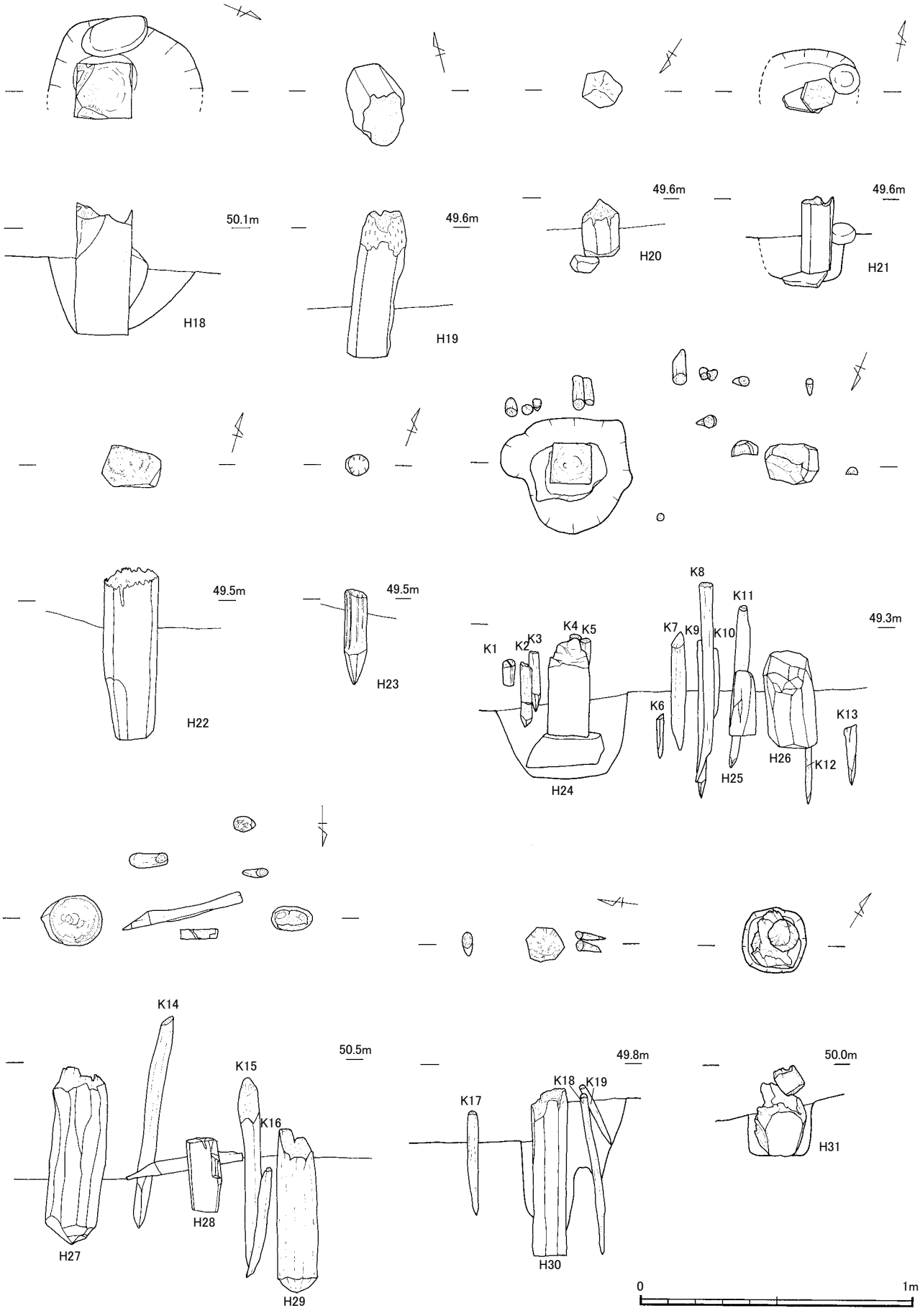
第30図　B地区　掘立柱建物跡３，木樋


49.4m
1
48.9m
2-1
2-2
49.3m
3
49.3m
4
49.4m
5
49.4m
6
49.5m
7
49.5m
8
49.4m
9-1
9-2
49.4m
10
49.3m
11
0
1m

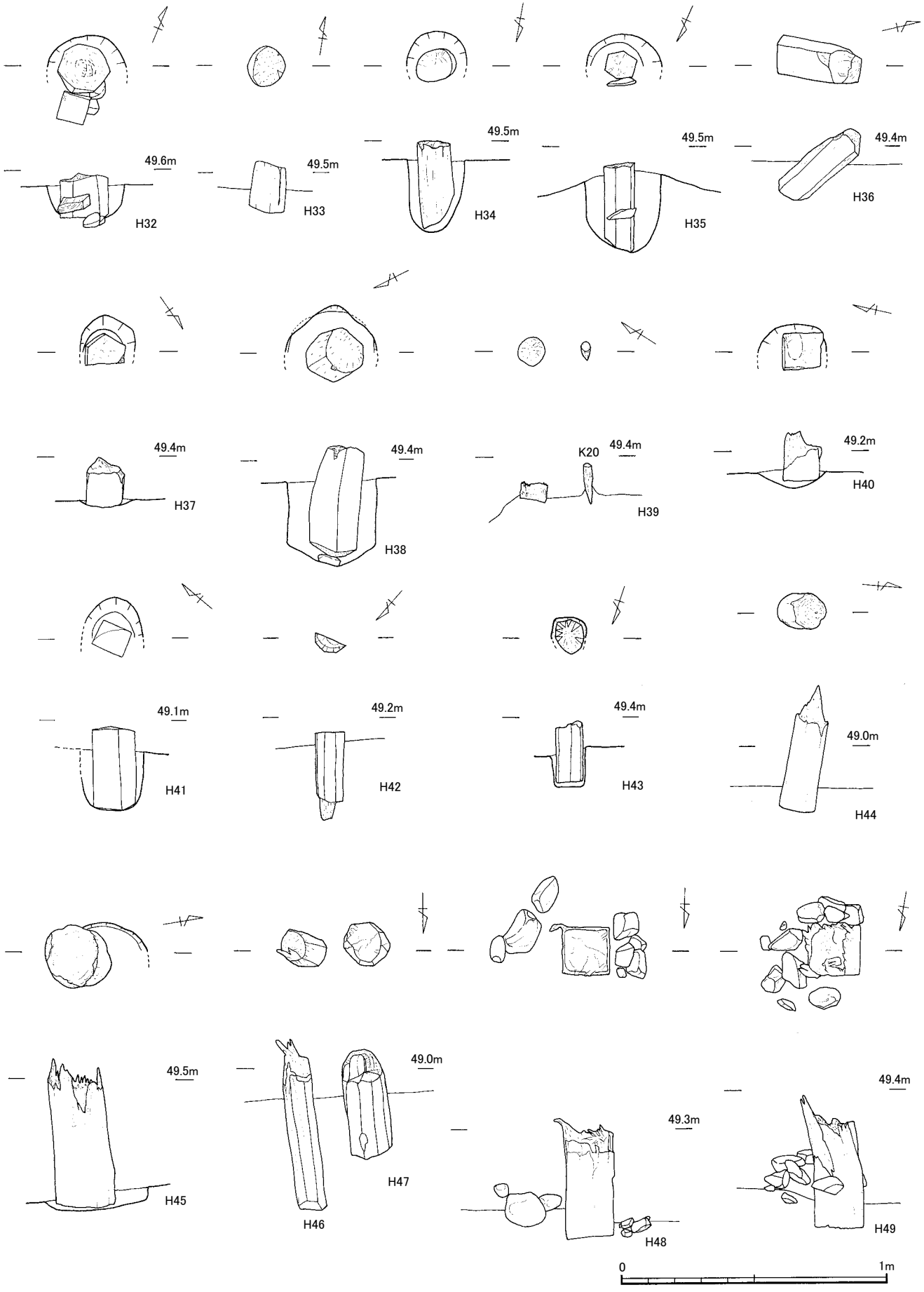
第31図　B地区　柱，杭 (1)


49.8m
H1
49.2m
H2
49.1m
H3
49.4m
H4
H5
49.4m
H7
49.1m
H6
49.1m
H8
48.7m
H9
48.9m
H10
49.5m
H11
49.5m
H12
49.5m
H13
50.0m
H14
49.9m
H15
50.2m
H16
49.2m
H17
0
1m

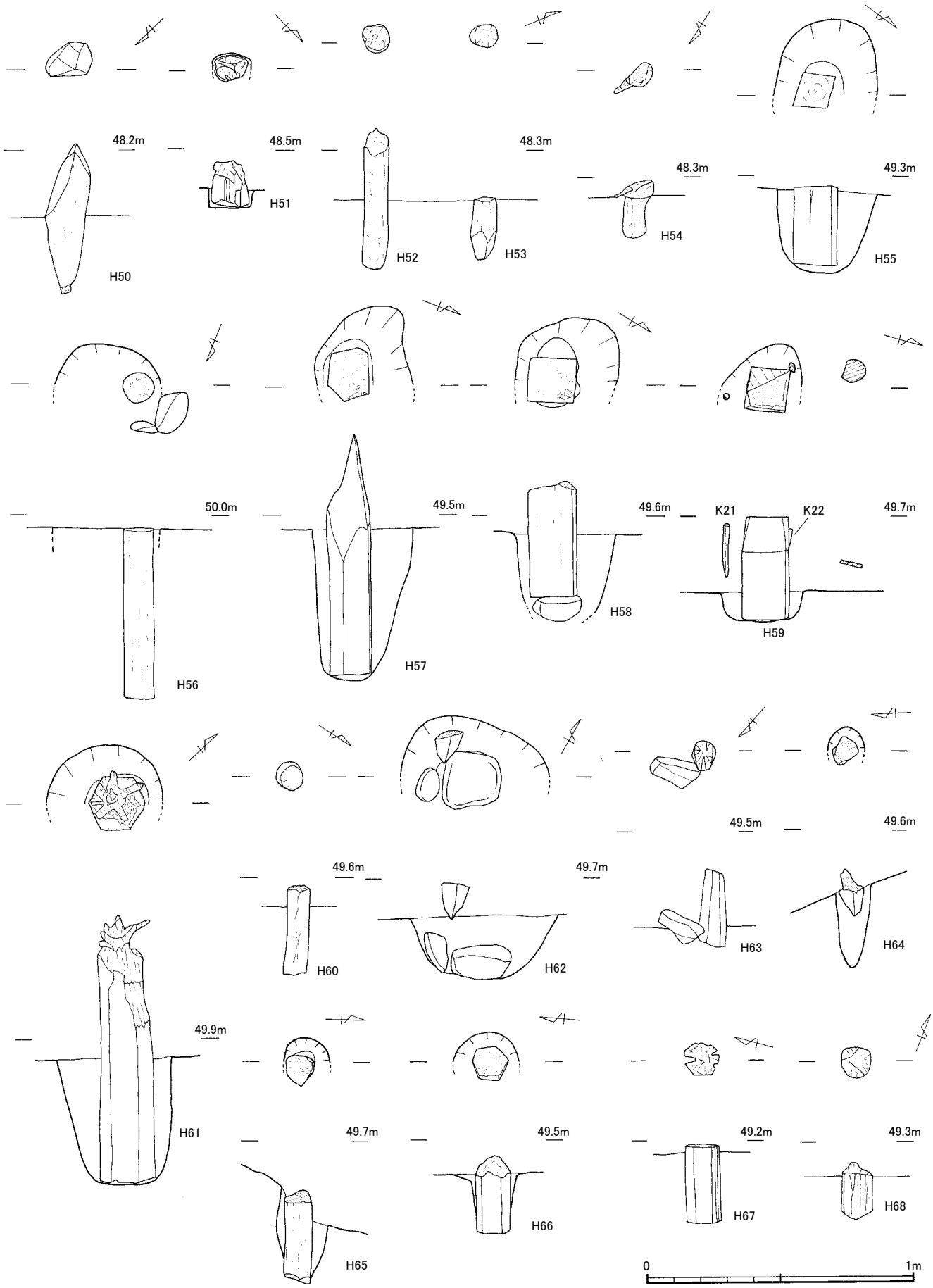
第32図　B地区　柱，杭 (2)


50.1m
H18
49.6m
H19
49.6m
H20
49.6m
H21
49.5m
H22
49.5m
H23
K1
K2
K3
K4
K5
K6
K7
K8
K9
K10
K11
K12
K13
49.3m
H24
H25
H26
K14
K15
K16
50.5m
H27
H28
H29
K17
K18
K19
49.8m
H30
50.0m
H31
0
1m

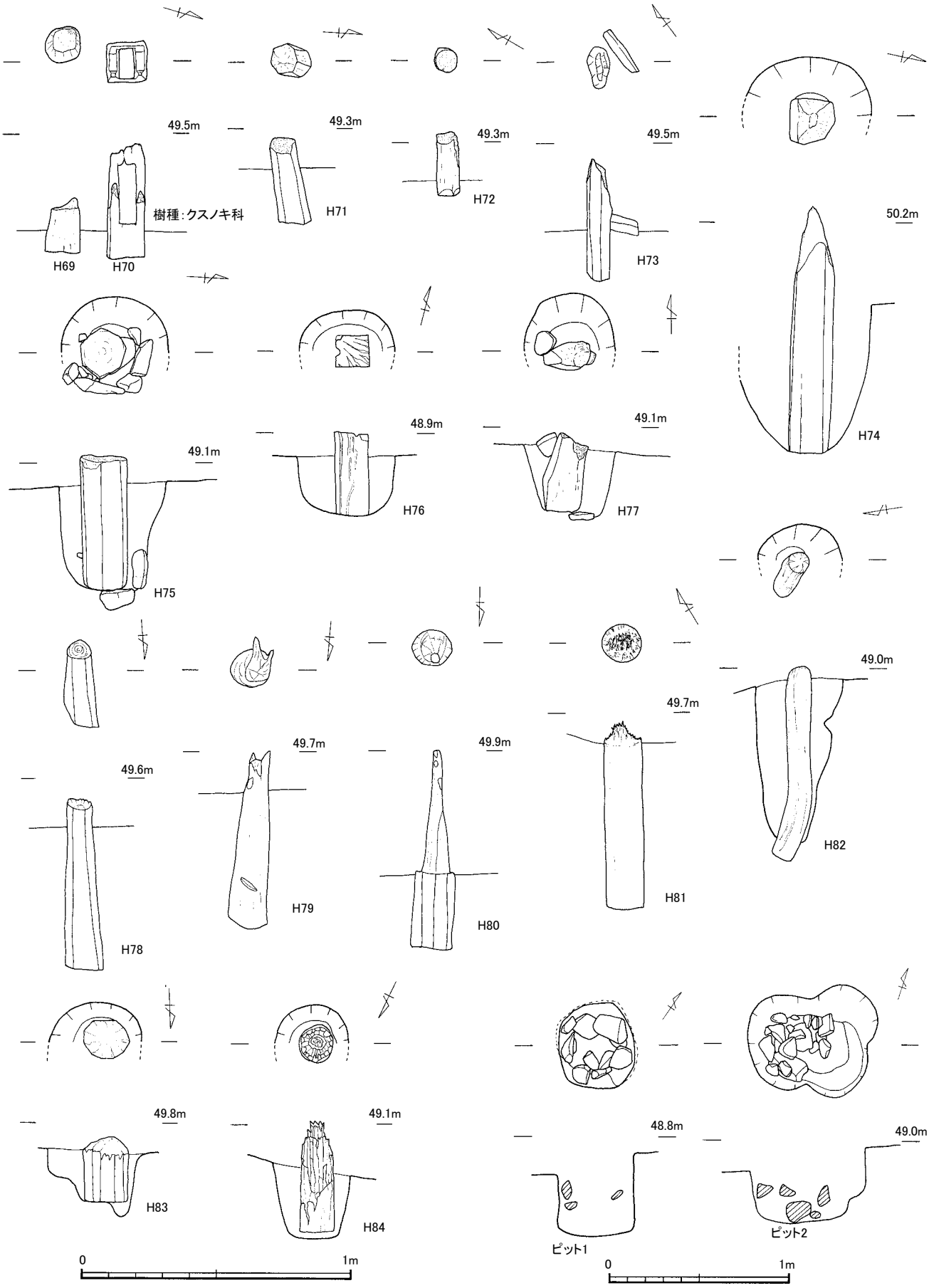
第33図　B地区　柱，杭 (3)


49.6m
H32
49.5m
H33
49.5m
H34
49.5m
H35
49.4m
H36
49.4m
H37
49.4m
H38
K20
49.4m
H39
49.2m
H40
49.1m
H41
49.2m
H42
49.4m
H43
49.0m
H44
49.5m
H45
H46
49.0m
H47
49.3m
H48
49.4m
H49
0
1m

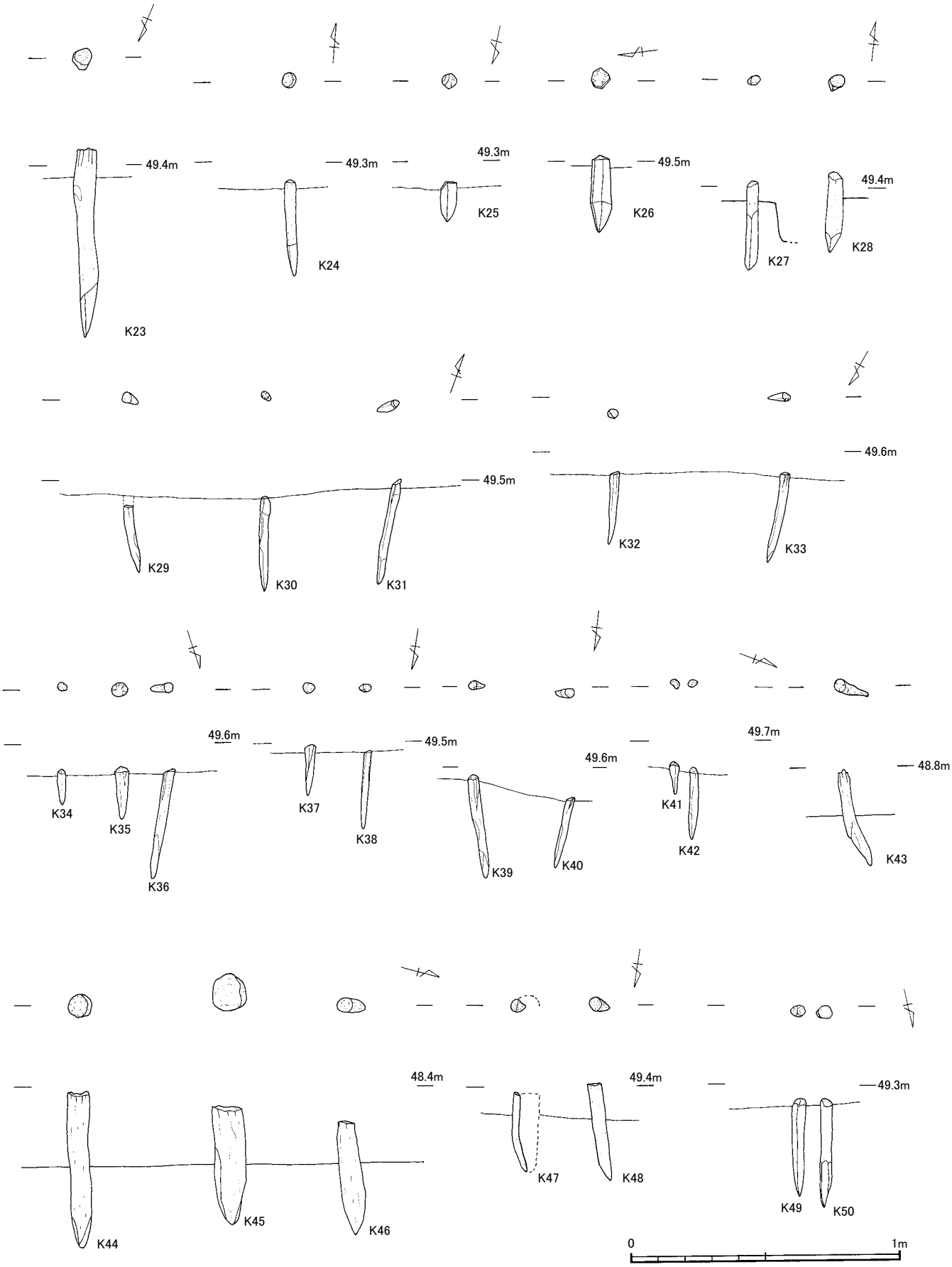
第34図　B地区　柱，杭 (4)


48.2m
H50
48.5m
H51
48.3m
H52
H53
48.3m
H54
49.3m
H55
50.0m
H56
49.5m
H57
49.6m
H58
K21
K22
49.7m
H59
49.5m
49.6m
49.6m
H60
49.7m
H62
H63
H64
49.9m
H61
49.7m
H65
49.5m
H66
49.2m
H67
49.3m
H68
0
1m

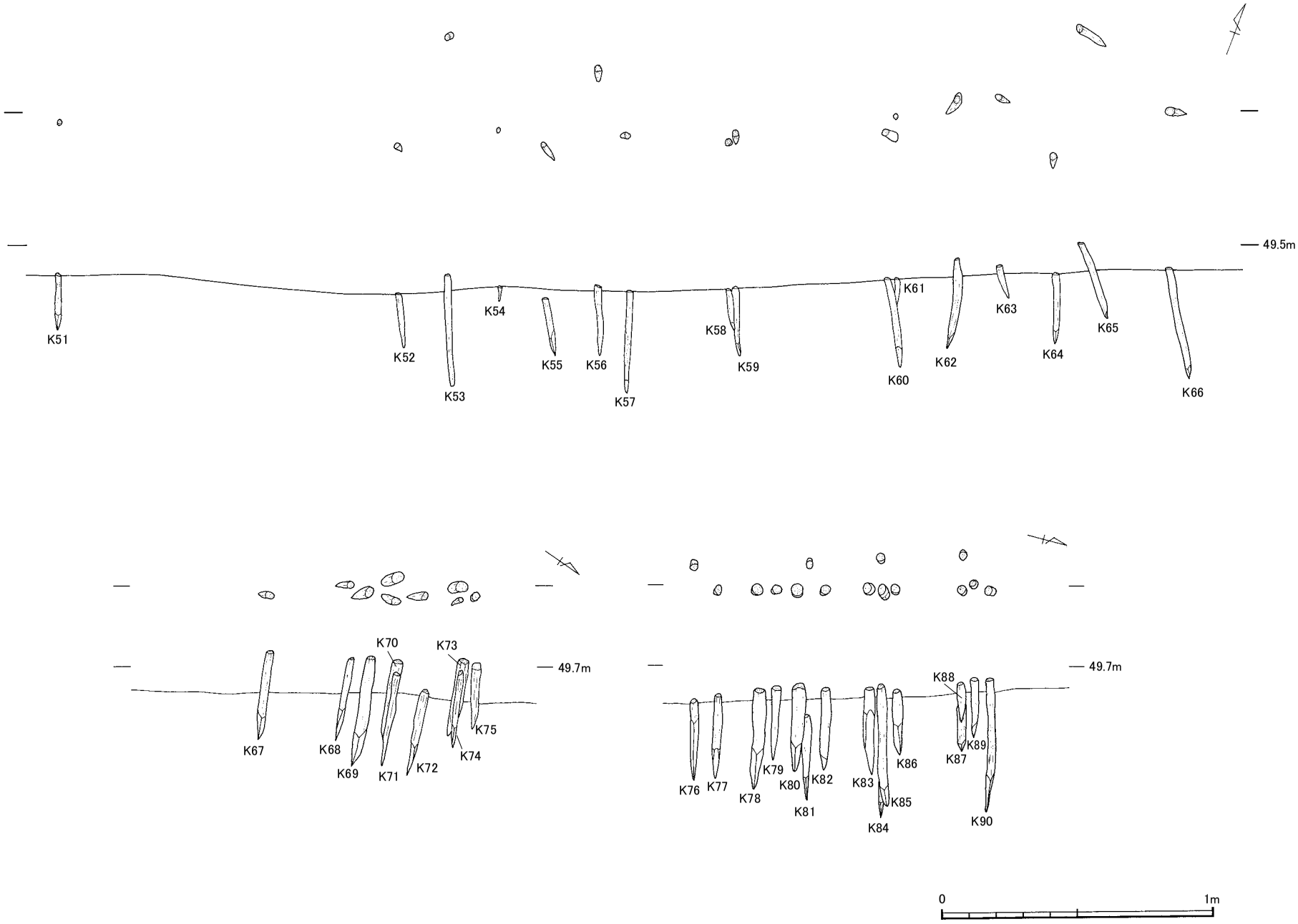
第35図　B地区　柱，杭 (5)



第36図　B地区　柱，杭 (6)，ピット


49.4m
K23
49.3m
K24
49.3m
K25
49.5m
K26
49.4m
K27
K28
49.5m
K29
K30
K31
49.6m
K32
K33
49.6m
K34
K35
K36
49.5m
K37
K38
49.6m
K39
K40
49.7m
K41
K42
48.8m
K43
48.4m
K44
K45
K46
49.4m
K47
K48
49.3m
K49
K50
0
1m

第37図　B地区　柱，杭 (7)


49.5m
K51
K52
K53
K54
K55
K56
K57
K58
K59
K60
K61
K62
K63
K64
K65
K66
49.7m
K67
K68
K69
K70
K71
K72
K73
K74
K75
49.7m
K76
K77
K78
K79
K80
K81
K82
K83
K84
K85
K86
K87
K88
K89
K90
0
1m

第38図　B地区　杭列

第7表　B地区柱，杭計測表

挿図番号	掲載番号	柱穴		柱			樹種	備考
		径(cm)	深さ(cm)	形状	径(cm)	長さ(cm)		
28	1	－	－	六角	18	46	－	掘立①近く
31	1	－	－	六角	13	21	－	－
	2-1	－	－	丸	11	22	－	ぐり石多数
	2-2	－	－	丸	12	36	－	ぐり石多数
	3	－	－	丸	15	30	－	－
	4	26+	36	六角	17	39	－	－
	5	29	36	六角	20	41	－	－
	6	27	35	丸	9	54	－	－
	7	32	35	六角	14	50	－	－
	8	－	－	丸	15	51	－	礎石？ぐり石
	9-1	53	27+	丸	14	38	－	ぐり石
	9-2	53	27+	六角	13	35	－	ぐり石
	10	44+	43	丸	17	60	－	－
	11	34	30	六角	14	45	－	－

挿図番号	掲載番号	柱穴		柱			樹種	備考
		径(cm)	深さ(cm)	形状	径(cm)	長さ(cm)		
32	H1	28	26	六角	14	34	－	－
	H2	－	－	丸？	19	36	－	－
	H3	32+	18	六角	12	20	－	－
	H4	－	－	六角	11	48	－	－
	H5	－	－	六角	14	54	－	－
	H6	37	25+	六角	14	42	－	ぐり石
	H7	－	－	六角	10	34	－	－
	H8	34+	50	六角	17	59	－	－
	H9	－	－	丸	13	38	－	－
	H10	30	16	六角	14	62	－	－
	H11	－	－	六角	11	54	－	ぐり石
	H12	31+	31	八角	13	44	－	－
	H13	－	－	四角	16	42	－	ぐり石
	H14	28	42	六角	10	42	－	－
	H15	－	－	丸	9	39	－	－
	H16	－	－	？	？	20	－	－
	H17	－	－	丸	13	45	－	ぐり石
33	H18	53	27	四角	20	48	－	ぐり石
	H19	－	－	六角	16	55	－	－
	H20	－	－	六角	13	21	－	礎石
	H21	31	17	六角	11	28	－	礎石？ぐり石
	H22	－	－	六角	20	63	－	－
	H23	－	－	丸	8	35	－	－
	H24	47	28	四角	15	35	－	礎石
	H25	－	－	丸？	9	23	－	－
	H26	－	－	八角	16	35	－	－
	K1～3	－	－	丸(3本)	4	23・12・10	－	－
	K4～5	－	－	丸(2本)	4	平?+?+	－	－
	K6	－	－	丸	3	16	－	－
	K7	－	－	丸	5	44	－	－
	K8	－	－	丸	5	60	－	－
	K9	－	－	丸	2	20+	－	－
	K10	－	－	丸	5	21	－	－

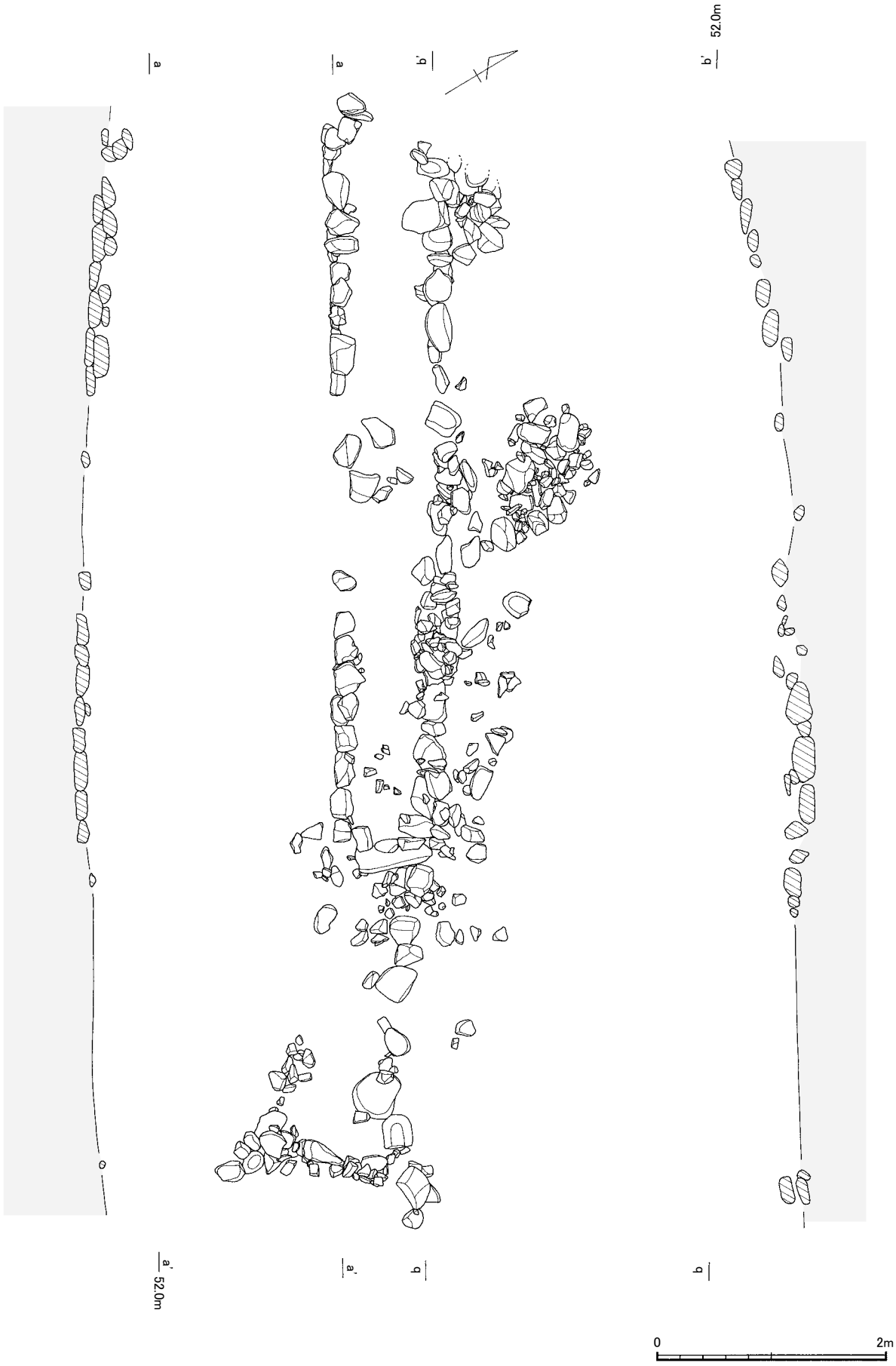
挿図番号	掲載番号	柱穴		柱			樹種	備考
		径(cm)	深さ(cm)	形状	径(cm)	長さ(cm)		
33	K11	－	－	丸	5	73	－	－
	K12	－	－	丸	3	58	－	－
	K13	－	－	丸	3	26	－	－
	H27	－	－	多角	20	64	－	－
	H28	－	－	－	－	－	－	－
	H29	－	－	丸？	15	60	－	－
	K14	－	－	丸	6	78	－	－
	K15	－	－	丸	7	69	－	－
	K16	－	－	丸	4	41	－	－
	H30	21	47	七角	12	61	－	－
	K17	－	－	丸	4	38	－	－
	K18	－	－	丸	3	58	－	－
	K19	－	－	丸	3	24	－	－
	H31	23	18	多角	18	26	－	－
34	H32	30	12	多角	18	17	－	ぐり石？
	H33	－	－	丸	13	19	－	－
	H34	21	27	丸	13	31	－	－
	H35	28	30	六角	11	33	－	ぐり石？
	H36	－	－	多角	12	36	－	－
	H37	20	3	多角	14	19	－	－
	H38	33	32	六角	19	41	－	礎石？
	H39	－	－	丸	10	7	－	－
	K20	－	－	丸	3	16	－	－
	H40	24	7	四角	13	18	－	－
	H41	21+	22	四角	16	31	－	－
	H42	－	－	八角？	11	33	－	－
	H43	12	14	六角	10	21	－	－
	H44	－	－	丸	12	48	－	－
	H45	38	7	丸	22	55	－	－
	H46	－	－	六角	11	65	－	－
	H47	－	－	八角	16	41	－	－
	H48	－	－	四角	18	45	－	ぐり石多数
	H49	－	－	四角	18	50	－	ぐり石多数
35	H50	－	－	？	15	57	－	－
	H51	22	7	多角？	13	17	－	－
	H52	－	－	丸	9	53	－	－
	H53	－	－	丸	9	23	－	－
	H54	－	－	丸	8	21	－	－
	H55	37	31	四角	12	30	－	－
	H56	40	?	丸	11	64	－	ぐり石？
	H57	37	56	六角	15	90	－	－
	H58	37	32+	四角	18	43	－	礎石
	H59	30	11	四角	15	39	－	まわりに杭等
	K21	－	－	丸	2	20	－	－
	K22	－	－	丸	3	8+	－	－
	H60	－	－	丸	8	33	－	－
	H61	43	47	六角	20	99	－	－
	H62	55	24	多角	9	13	－	礎石
	H63	－	－	六角	10	28	－	ぐり石？
	H64	13	31	多角	9	17	－	－

第8表　B地区柱，杭，ピット計測表

挿図番号	掲載番号	柱穴		柱			樹種	備考
		径(cm)	深さ(cm)	形状	径(cm)	長さ(cm)		
35	H65	17	25	丸	10	34	－	－
	H66	24	22	六角	13	29	－	－
	H67	－	－	六角	13	30	－	－
	H68	－	－	丸	11	21	－	－
36	H69	－	－	丸	13	20	－	－
	H70	－	－	四角	14	42	クスノキ科	
	H71	－	－	七角？	11	33	－	－
	H72	－	－	丸	8	23	－	－
	H73	－	－	多角	8	45	－	－
	H74	43	55	六角	15	91	－	－
	H75	40	40	六角	17	49	－	礎石?, ぐり石
	H76	35	21	四角	13	31	－	－
	H77	34	25	多角	15	29	－	ぐり石,礎石？
	H78	－	－	六角	12	63	－	－
	H79	－	－	丸	12	65	－	－
	H80	－	－	八角	15	73	－	－
	H81	－	－	丸	14	70	－	－
	H82	31	61	丸	9	72	－	－
	H83	34	23	多角	16	24	－	－
	H84	27	26	丸	13	40	－	－
37	K23	－	－	丸	8	70	－	－
	K24	－	－	丸	4	36	－	－
	K25	－	－	加工	6	15	－	－
	K26	－	－	加工	7	28	－	－
	K27	－	－	丸	4	33	－	－
	K28	－	－	丸	6	30	－	－
	K29	－	－	丸	3	25	－	－
	K30	－	－	丸	3	35	－	－
	K31	－	－	丸	3	40	－	－
	K32	－	－	丸	4	27	－	－
	K33	－	－	丸	3	34	－	－
	K34	－	－	丸	3	13	－	－
	K35	－	－	丸	5	19	－	－
	K36	－	－	丸	4	42	－	－
	K37	－	－	丸	4	20	－	－
	K38	－	－	丸	3	29	－	－
	K39	－	－	丸	4	39	－	－
	K40	－	－	丸	3	27	－	－
	K41	－	－	丸	3	12	－	－
	K42	－	－	丸	3	27	－	－
	K43	－	－	丸	5	36	－	－
	K44	－	－	丸	8	57	－	－
	K45	－	－	丸	12	44	－	－
	K46	－	－	丸	8	42	－	－
	K47	－	－	丸？	3+	30	－	－
	K48	－	－	丸	5	35	－	－
	K49	－	－	加工	5	36	－	－
	K50	－	－	丸	4	40	－	－

挿図番号	掲載番号	柱穴		柱			樹種	備考
		径(cm)	深さ(cm)	形状	径(cm)	長さ(cm)		
38	K51	－	－	丸	2	21	－	－
	K52	－	－	丸	2	20	－	－
	K53	－	－	丸	3	41	－	－
	K54	－	－	丸	1	6	－	－
	K55	－	－	丸	2	22	－	－
	K56	－	－	丸	2	25	－	－
	K57	－	－	丸	2	38	－	－
	K58	－	－	丸	2	左 15	－	－
	K59	－	－	丸	2	右 25	－	－
	K60	－	－	丸	2	33	－	－
	K61	－	－	丸	2	10+	－	－
	K62	－	－	丸	3	34	－	－
	K63	－	－	丸	2	12	－	－
	K64	－	－	丸	3	26	－	－
	K65	－	－	丸	2	30	－	－
	K66	－	－	丸	3	42	－	－
	K67	－	－	丸	3	33	－	－
	K68	－	－	丸	2	31	－	－
	K69	－	－	丸	4	41	－	－
	K70	－	－	丸	4	29+	－	－
	K71	－	－	丸	2	35	－	－
	K72	－	－	丸	3	32	－	－
	K73	－	－	丸	4	29	－	－
	K74	－	－	丸	2	29	－	－
	K75	－	－	丸	3	24	－	－
	K76	－	－	丸	3	30	－	－
	K77	－	－	丸	3	31	－	－
	K78	－	－	丸	5	37	－	－
	K79	－	－	丸	3	27	－	－
	K80	－	－	丸	5	33	－	－
	K81	－	－	丸	3+	31	－	－
	K82	－	－	丸	3	30	－	－
	K83	－	－	丸	4	32	－	－
	K84	－	－	丸	3	14+	－	－
	K85	－	－	丸	3	45	－	－
	K86	－	－	丸	4	24	－	－
	K87	－	－	丸	3	15	－	－
	K88	－	－	丸	3	17+	－	－
	K89	－	－	丸	3	22	－	－
	K90	－	－	丸	3	49	－	－

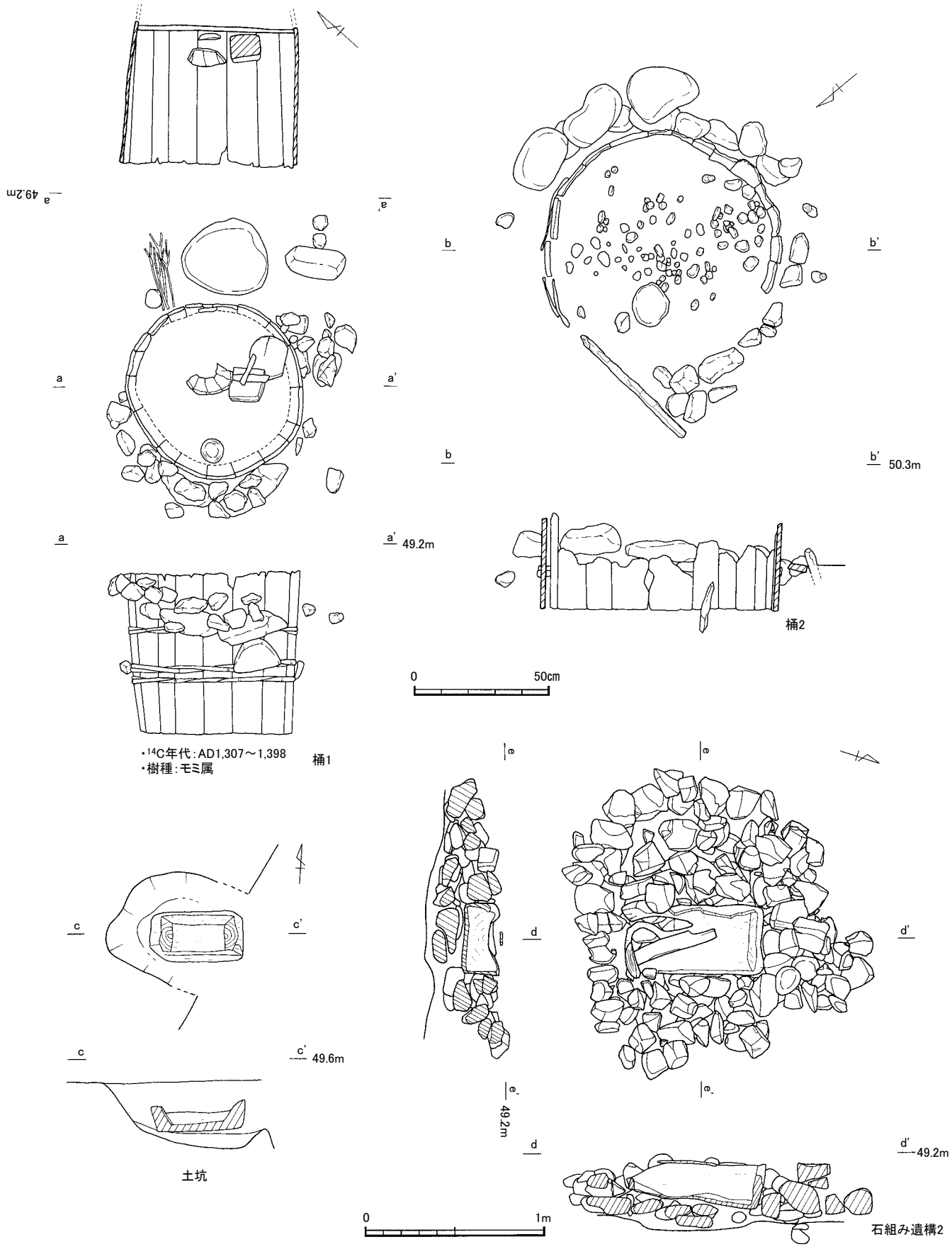
挿図番号	掲載番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考
36	ピット1	47	42	40	－
	ピット2	74	47	35	－



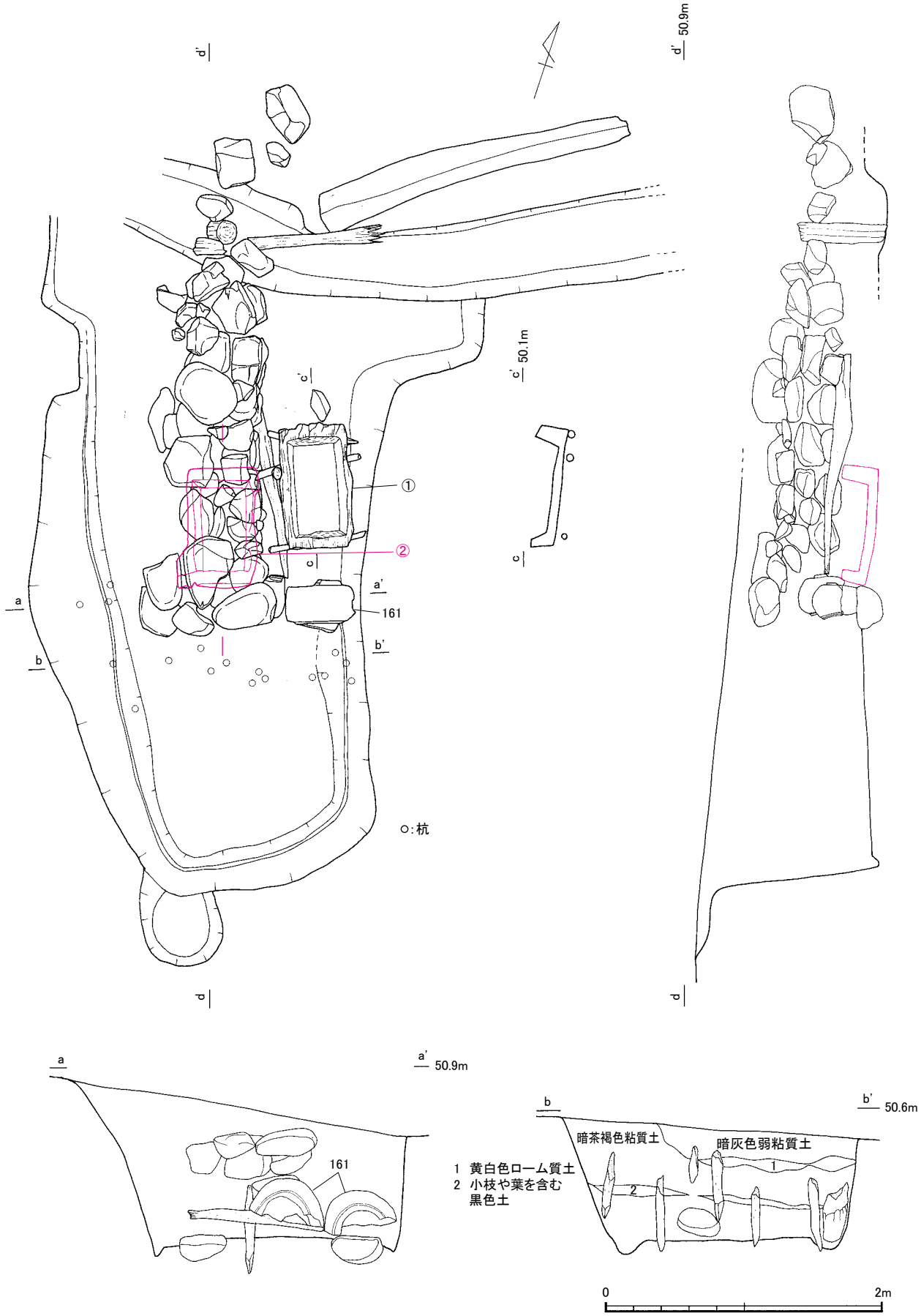
第39図　B地区　石列



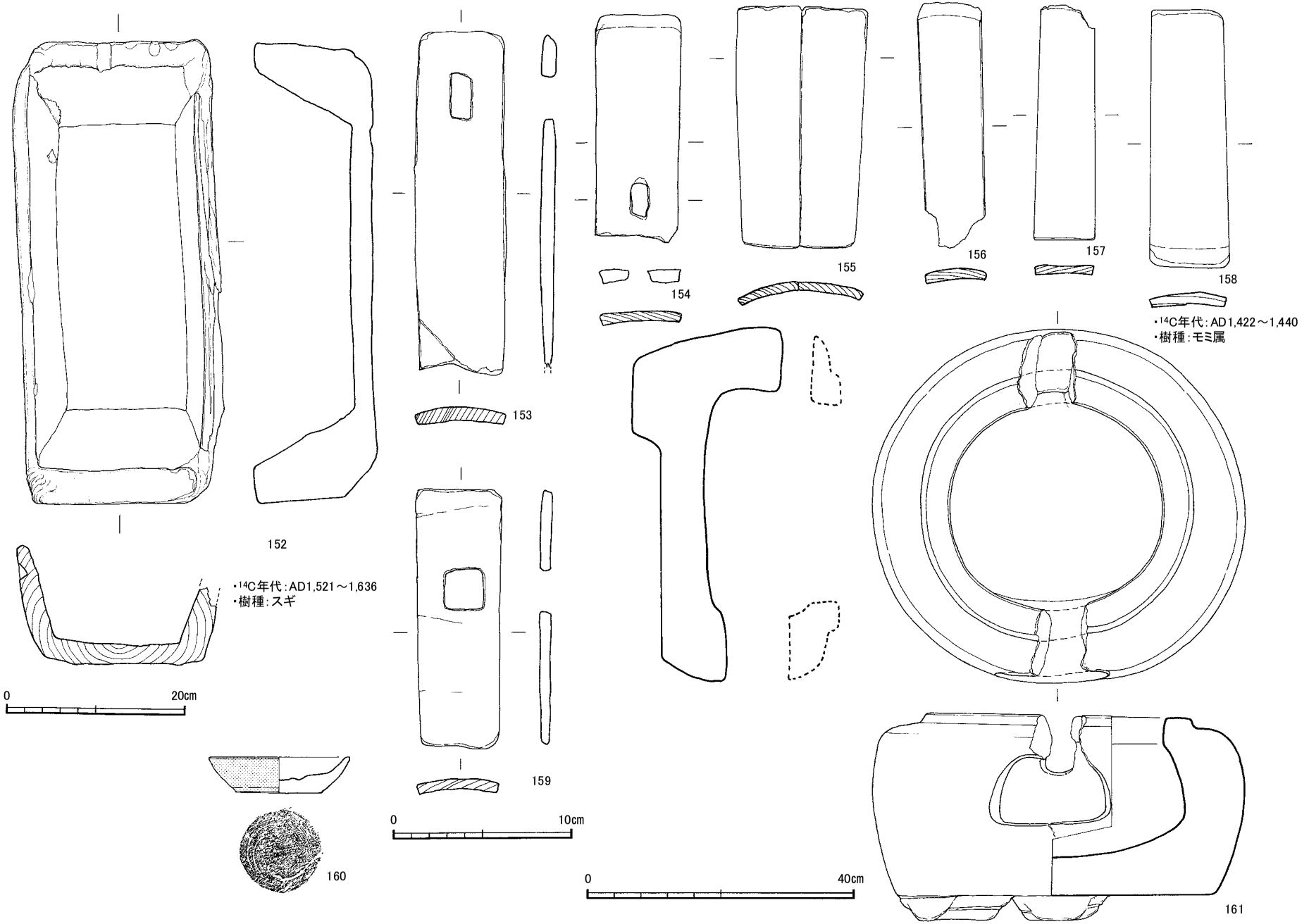
第40図　B地区　石組み遺構１



第41図　B地区　桶，土坑，石組み遺構２


d'
d' 50.9m
c'
c' 50.1m
①
②
c
a'
161
b'
a
b
d
○:杭
a
a' 50.9m
161
b
b' 50.6m
暗茶褐色粘質土
暗灰色弱粘質土
1 黄白色ローム質土
2 小枝や葉を含む
黒色土
1
2
0
2m

第42図　B地区　建物跡



第43図　B地区　遺構内出土遺物

ウ　遺物（第44～53図）

青磁

162～178は青磁である。

162～174は椀である。162は外面に片彫りの蓮弁文を描き，弁の中心線には鎬がないものである。163は片彫りで蓮弁文を表現するが，鎬や間はみられない。164はヘラ先による蓮弁文を外面に描く。見込みには花文が印刻される。高台内面は露胎する。165・166は外面に，細線と剣頭部が蓮弁としての単位を意識しないで描かれる。167は外面口縁部に雷文帯を有するもので，内面には花文が描かれる。168は釉下にハケ目状の調整痕がみられる。外面には砂粒も熔着する。169は内外面とも無文である。高台内面と外底面は施有されず露胎する。170は口縁部が外反するもので，見込みには印花文がスタンプされる。高台内面と外底面は施有されず露胎する。171は口縁部が外反するもので，口縁端部は丸みを帯びる。172は器壁が厚手で大振りなものである。高台内面まで釉が厚くかけられ，高台内底は輪状に釉剥ぎされる。173は高台内面と高台内底は施釉されず，露胎する。174は椀の底部である。高台内底は露胎する。

175～177は皿である。175は腰部で屈曲し，口縁部が外反するものである。内外面とも無文である。176は見込みの釉を円状に釉剥ぎする。177は稜花皿である。内面は片彫りによる文様が描かれ，見込みは円状に釉剥ぎされる。

178は盤である。

白磁

179・180は白磁である。179は口縁部が外反する皿である。180は皿もしくは盤と思われ，見込みに輪状の釉剥ぎが施される。外面腰部には工具による削り痕が残る。

青花

181～190は青花である。

181～184は碗である。181は口縁部が外反するものである。182・183は蓮子碗である。182は外面に花唐草文が描かれる。183・184は漳州窯系の碗と思われる。184は高台内面と高台内底は露胎し，高台内底面に「大」の墨書が描かれる。

185～190は皿である。185～187は口縁部が外反するものである。188は腰部が丸みを帯びるもので，高台内底には「大明年製」の文字が描かれる。189は底部が碁笥底を呈するものである。190は折れ縁皿である。口縁部は輪花をなす。

土師器

191・192は土師器の坏で，糸切り底である。193・195・197には内面に煤が付着する。197は小皿，198は耳皿である。

輸入陶器

199～203は壺である。すべて中国南部産と思われる。199は四耳壺と思われる。外面には褐釉がかかる。200は頸部である。胎土に微細な黒色砂粒が多く含まれる。焼き締めと思われる。201～203は壺の胴部から底部である。201・203は大形のもので，焼き締めである。202は内外面に褐釉がかかる。

瓦質土器

擂鉢

204～207は瓦質土器の擂鉢である。204は内底面に花文状の擂り目が入る。205は使用のため摩滅が強い。206は灰褐色の胎土に白色砂粒を多く含む。207は胴部と底部の境にヘラ状工具による削り調整が施される。

国内産陶器

208は備前産擂鉢である。口縁部はキャリパー状に内弯し，口縁部外面には2条の沈線が巡る。

火鉢・風炉

209～213は瓦質土器の火鉢である。209は浅鉢形のものである。口縁部下位に突帯を1条有し，口縁部との間に花文を印刻する。210は深鉢形のもので，内面に煤が付着する。外面口縁下位に２条の突帯を貼り付け，その間に花文が印刻される。内面にはヘラ状工具によるハケ目状の調整痕が残る。211は浅鉢形のもので，体部から口縁部はまっすぐに立ち上がる。外面に2条の突帯が貼り付けられ，その間に花文が印刻される。212は火鉢の脚部である。足の付け根に渦巻き状の文様を施す。213は外底面中央に「宗殊」と判読できる墨書が書かれ，その上から直径約１㎝の穴があけられたものである。火鉢を植木鉢に転用したものと思われる。214は風炉形である。

輸入陶器

215は輸入陶器と思われる壺である。詳細な産地は不明である。頸部から口縁部が短い形状を呈する。

土師質土器

216は蒸籠である。底面に穴があけられる。

217は焙烙である。内面と外側面には煤が付着する。

土錘

218・219は土錘である。

木製品（第44～53図）

漆椀　（第49図）

220は口径15.2㎝，底径8.2㎝，器高8.5㎝。底部は厚く，高台は1.5㎝で輪高台。腰部は丸みをおび，直行する口縁である。口縁部には縦１㎝，横１㎝の膠布を口縁部の内外に折り曲げて接着して補修材としている。漆絵は草文の紋様である。内面赤色漆である。^{14}C年代測定値はAD1,435～AD1,465という結果で，樹種はクスノキである。221は椀の口縁部で鶴の漆絵である。

漆坏　（第49図）

222～224。輪高台と無高台がある。222は口径13㎝，底径7.5㎝，器高3.6㎝。輪高台，内面赤色漆。体部に鶴の漆絵。^{14}C年代測定値はAD1,533～AD1,796という結果が出ている。223は口径12㎝，底径8㎝，器高3.0㎝の無高台の坏である。224は口径15.8㎝，器高5.4㎝，底径7.5㎝で，無高台の坏である。

下駄（第49図）

225は２枚歯の下駄で鼻緒部分である。歯はかなり磨り減っている。

その他（第49図）

226は本体が厚く，側面を丁寧に削って丸く仕上げ，丸形に縁辺を削る。用途不明。227は小判形をした黒漆塗りの木製鍔である，本体の木質部は大半が腐蝕し，一部残存し，表皮の漆で原型を留めていた。^{14}C年代測定値はAD1,219～AD1,255という結果が出ている。また，樹種はクスノキである。228は周辺を加工して，縁辺に紐を通す小穴を３個穿っている。229は片側を２段に切り込みを入れたもの。

円形板（第49・50図）

232～241は円形板である。233・236・238は一枚板，231・234・235・237・239～241は組板，238～240は小型丸桶の底板と思われる。232・233は比較的分厚く雑な造りである。232の樹種はクスノキである。230は杉材の平板。

折敷（第51図）

242～245は折敷で，いずれも檜材である。242・243は四隅を三角状に切り落としている。寄木造りの折敷である。立板の固定には，留め具として桜皮を用いている。242の^{14}C年代測定値はAD1,400～AD1,427という結果が出ている。また，樹種はモミ属である。244・245はほぼ正方形で一枚板である。

木製容器（第52図）

246・247は木製容器である。どちらも刳物で246は長さ20.2cm，幅11.1cm，高さ6.6cm，247は欠損しているため全体形は不明である。248は，枡である。長さ10cm，幅7.1cm，高さ5cmで^{14}C年代測定値はAD1,522～AD1,641という結果が出ている。樹種はスギである。249は掘立柱建物跡1付近から出土した木製容器である。欠損しているため全体形は不明である。250はスコップ形の木製品である。柄に相当する部分に１か所穿孔がある。樹種はスギである。

平板（第53図）

251は長さ45.2㎝，扁平で基部に両サイドに浅い抉りを入れている。基部から先端へ巾広い平板である。

棍棒（第53図）

252は長さ46.1㎝で，基部の４面を荒く面取した棍棒である。256は斜めに切断したもの。257は全体が６面体に加工し，基部は欠損している。

篦（第53図）

253～255は片刃の篦である。253は長さ30.4㎝，刃部の長さは9㎝で短く，刃部先端は丸く仕上げる。^{14}C年代測定値はAD1,303～AD1,395という結果が出ている。また，樹種はスギである。254は柄が細く，255は巾広で，両者とも全体の半分が刃部である。また，255の樹種はコウヤマキである。

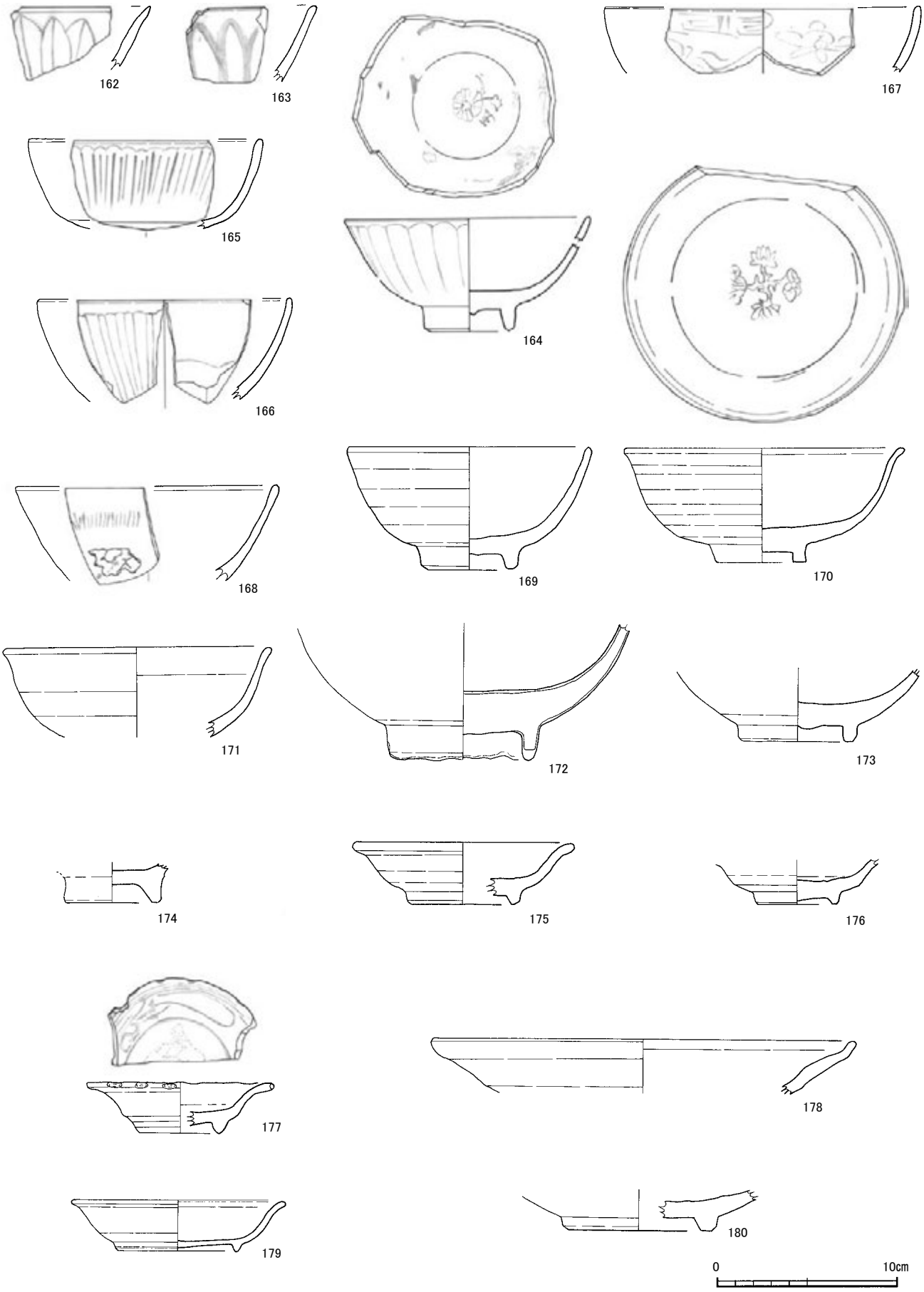
坩堝（第53図）

258は土製の坩堝である。口縁部一端に注ぎ口が認められる。

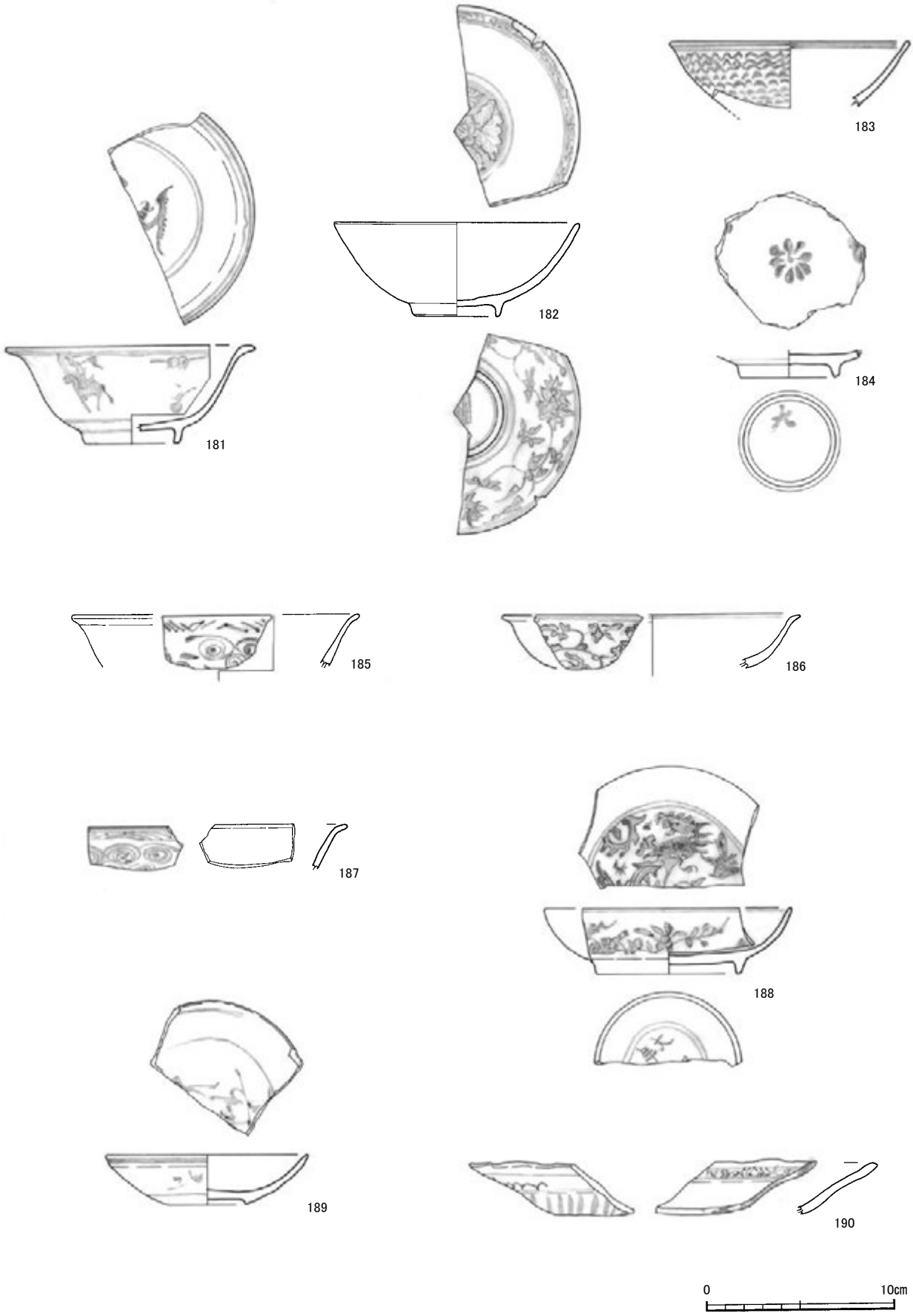
金属製品（第53図）

259は表層から出土したへら状の鉄器で，両端に欠損が見られる。全体が錆に覆われ，使途は不明である。全長は11.0㎝，最大幅2.0㎝，重さは27.51ｇを測る。また，両端からは空洞が見られることから筒状の鉄器であることが分かる。

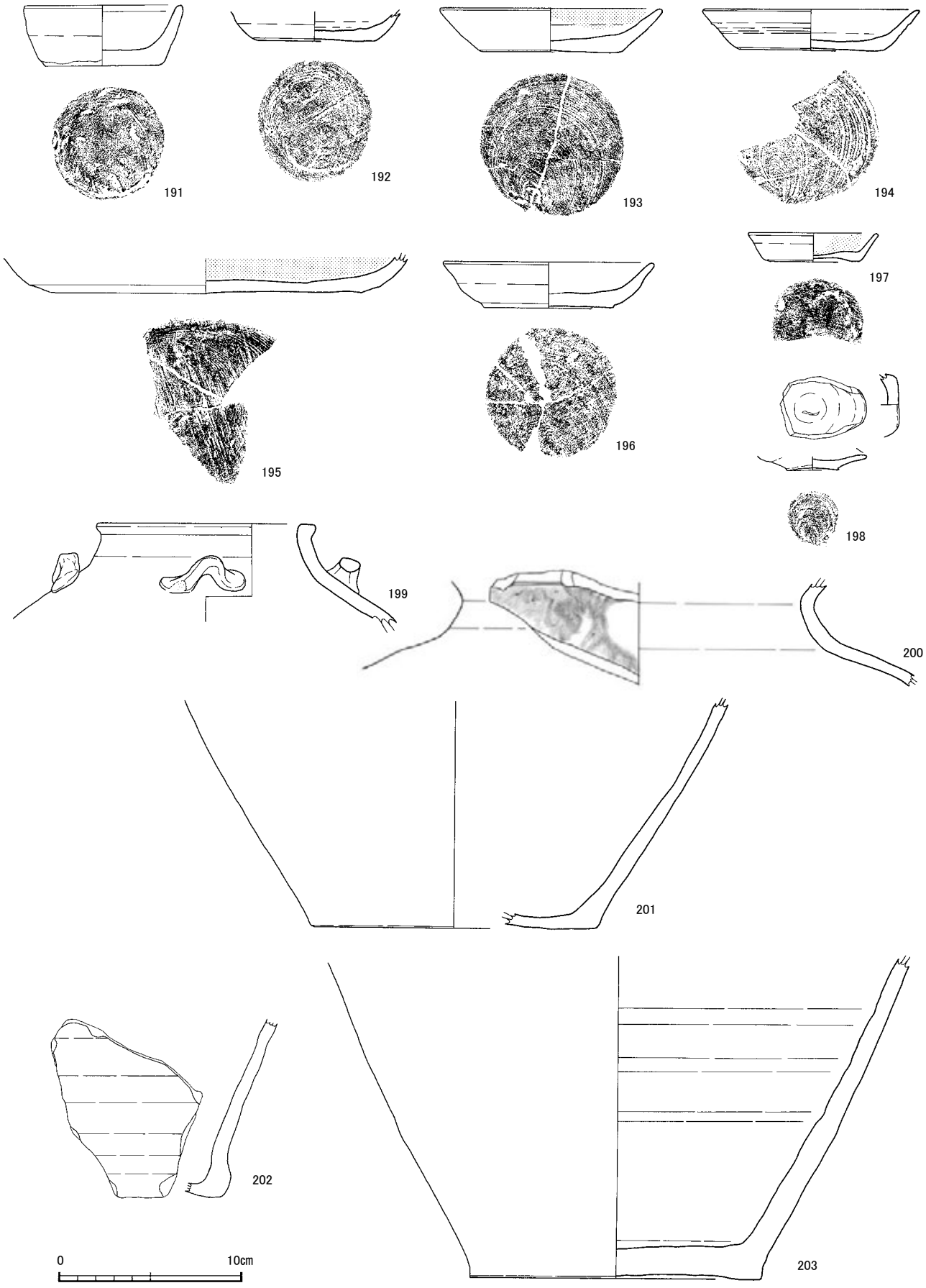
260は「洪武通寶」である。背文は見られなかった。261は「大世通寶」である。この銭は，琉球王朝の尚泰久が1454年に鋳造した銭で，明銭の「永楽」の文字を削り取り，「大世」の文字をはめ込んで鋳造された銭である。同銭も「大」と「世」に不自然な点が見られることから，「大」と「世」の文字をはめ込んで作られたと考えられる。同銭には背文は見られなかった。



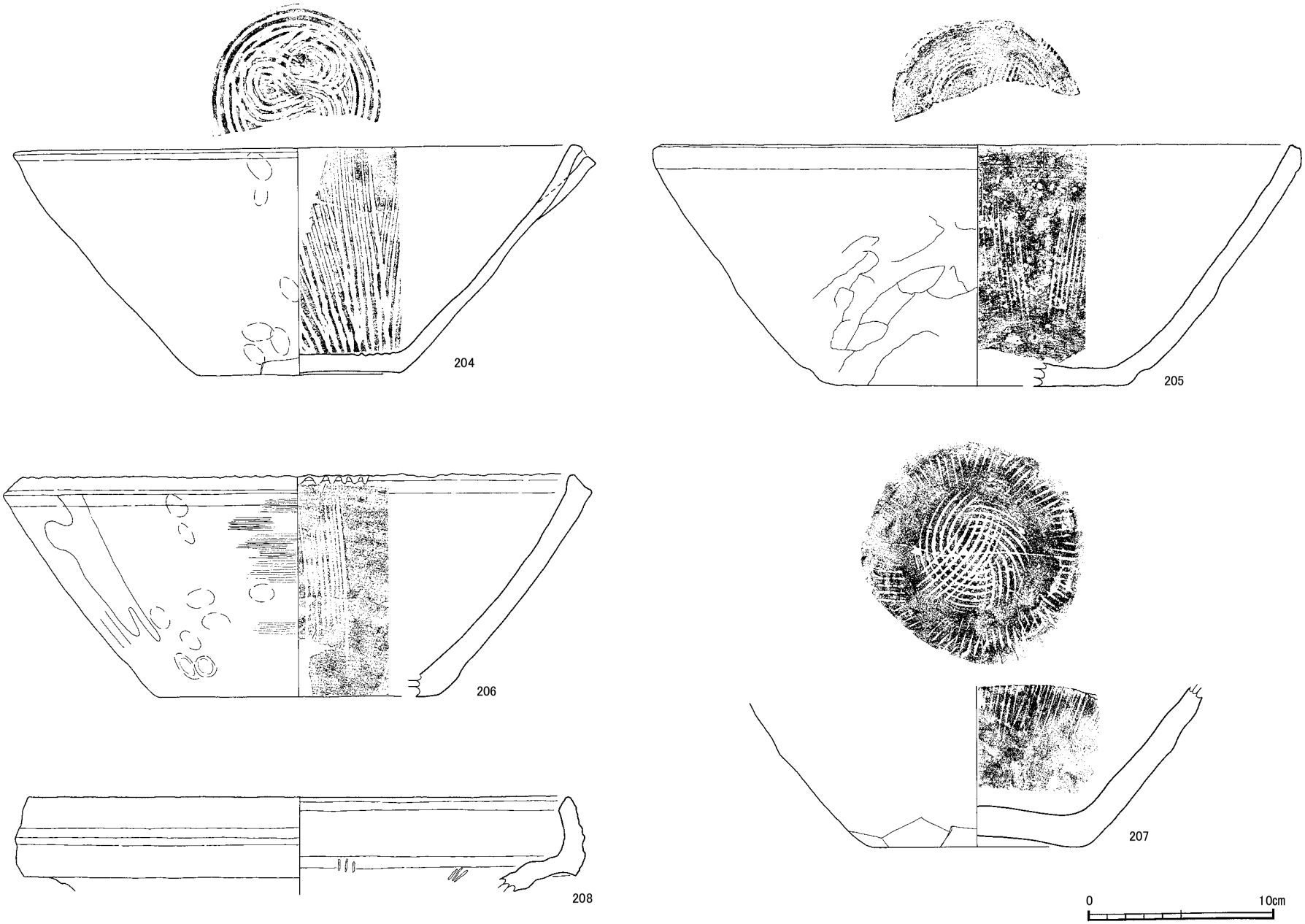
第44図　B地区　出土遺物 (1)



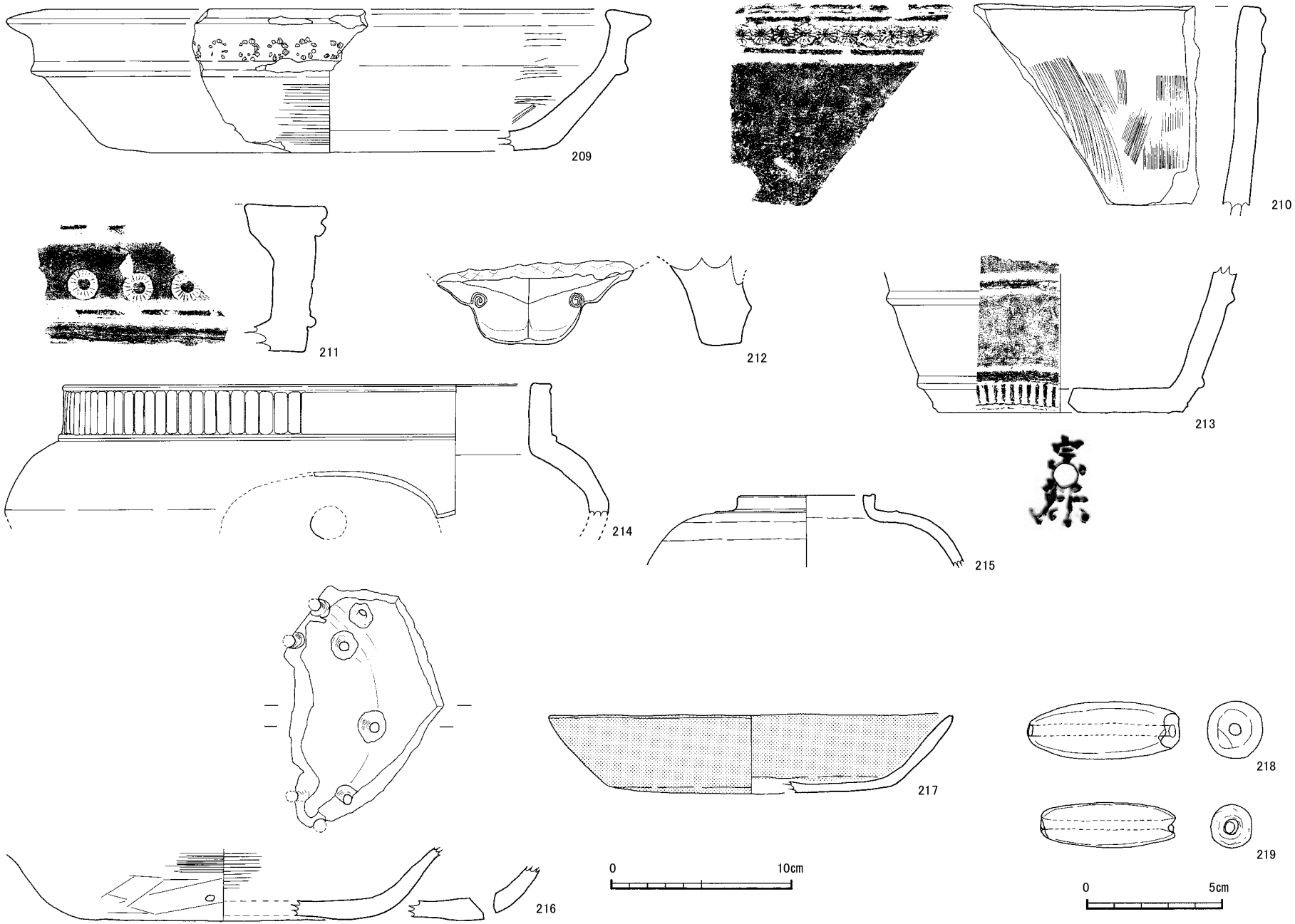
第45図　B地区　出土遺物 (2)



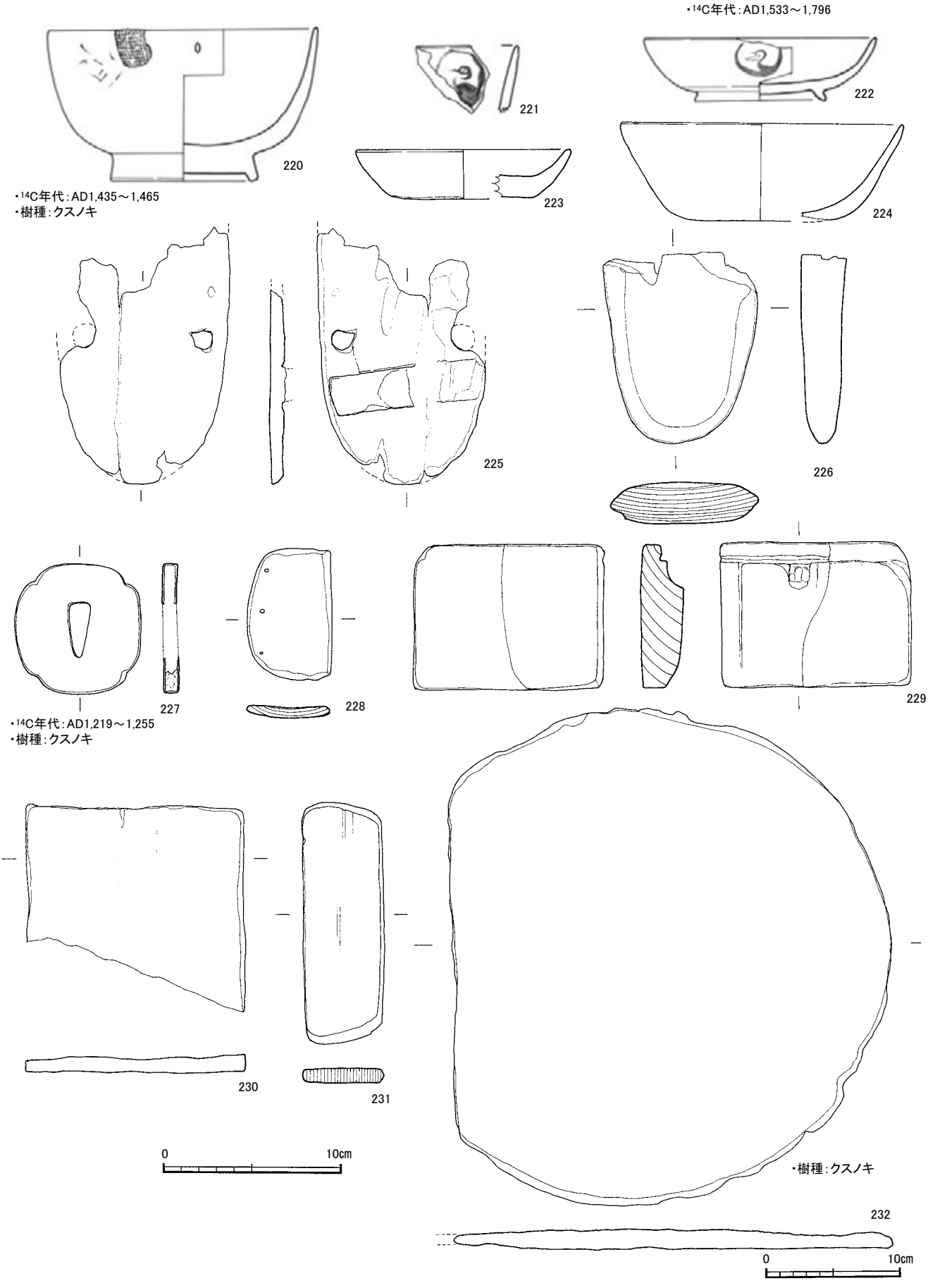
第46図　B地区　出土遺物 (3)



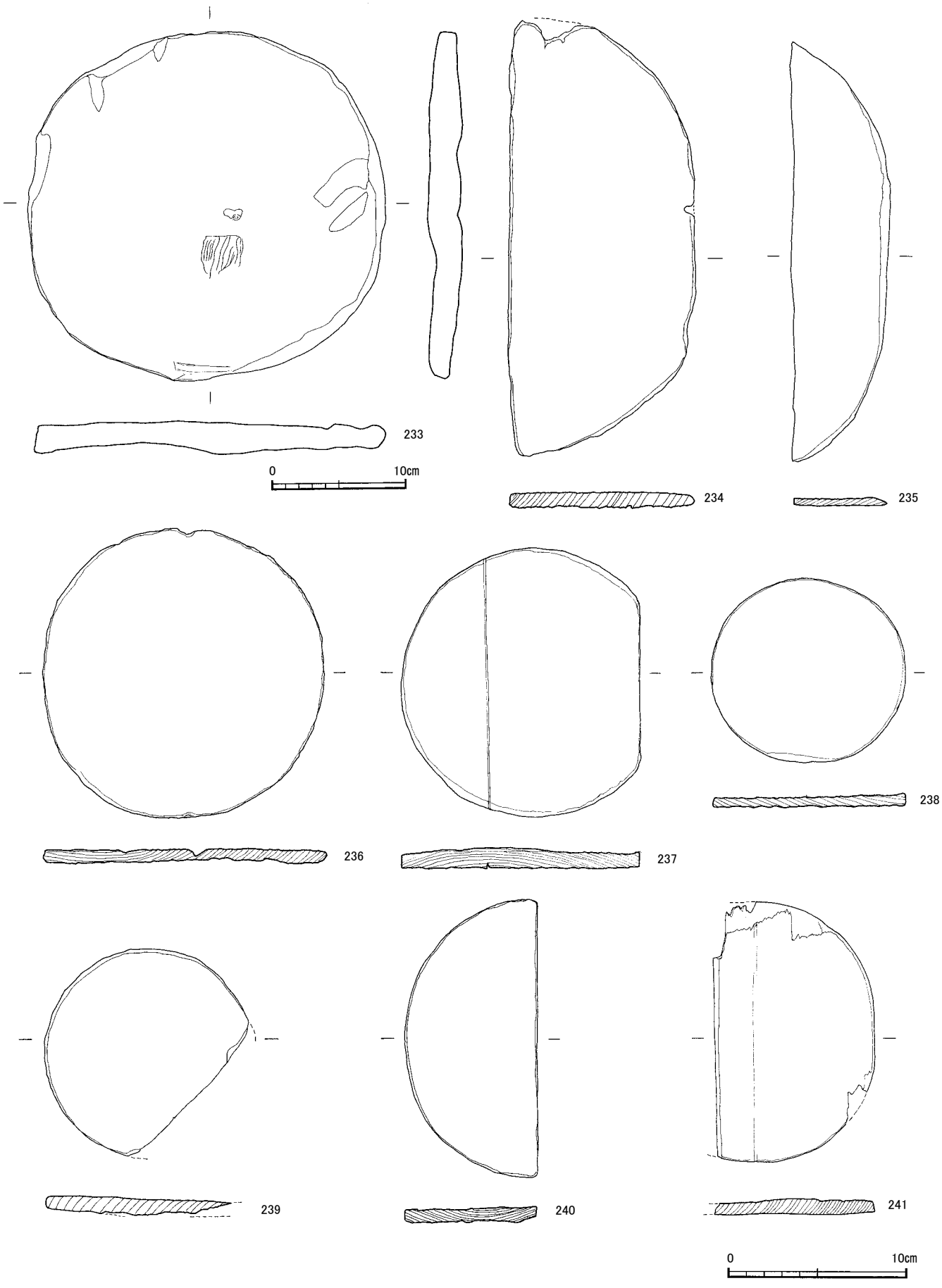
第47図　B地区　出土遺物 (4)



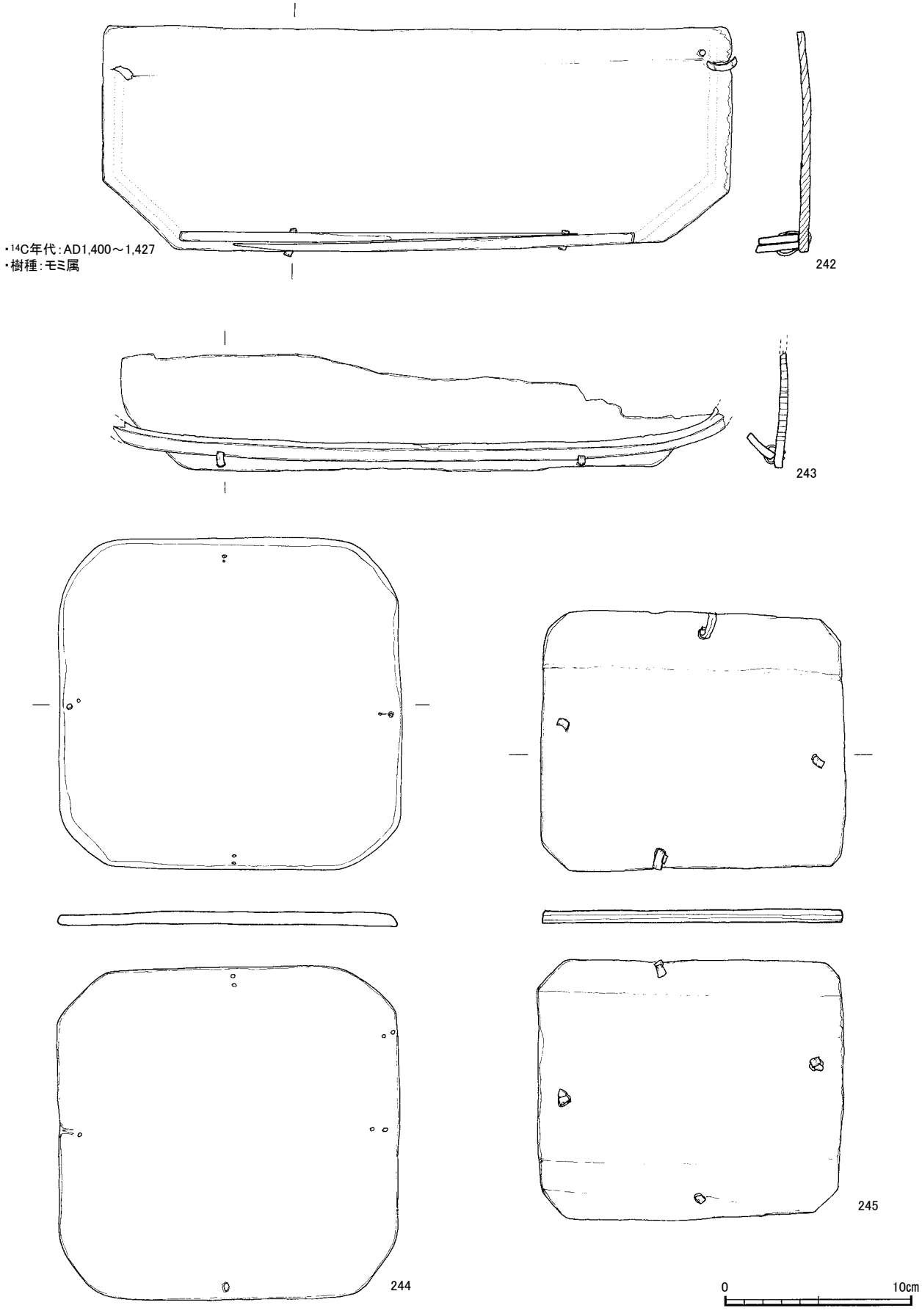
第48図　B地区　出土遺物 (5)



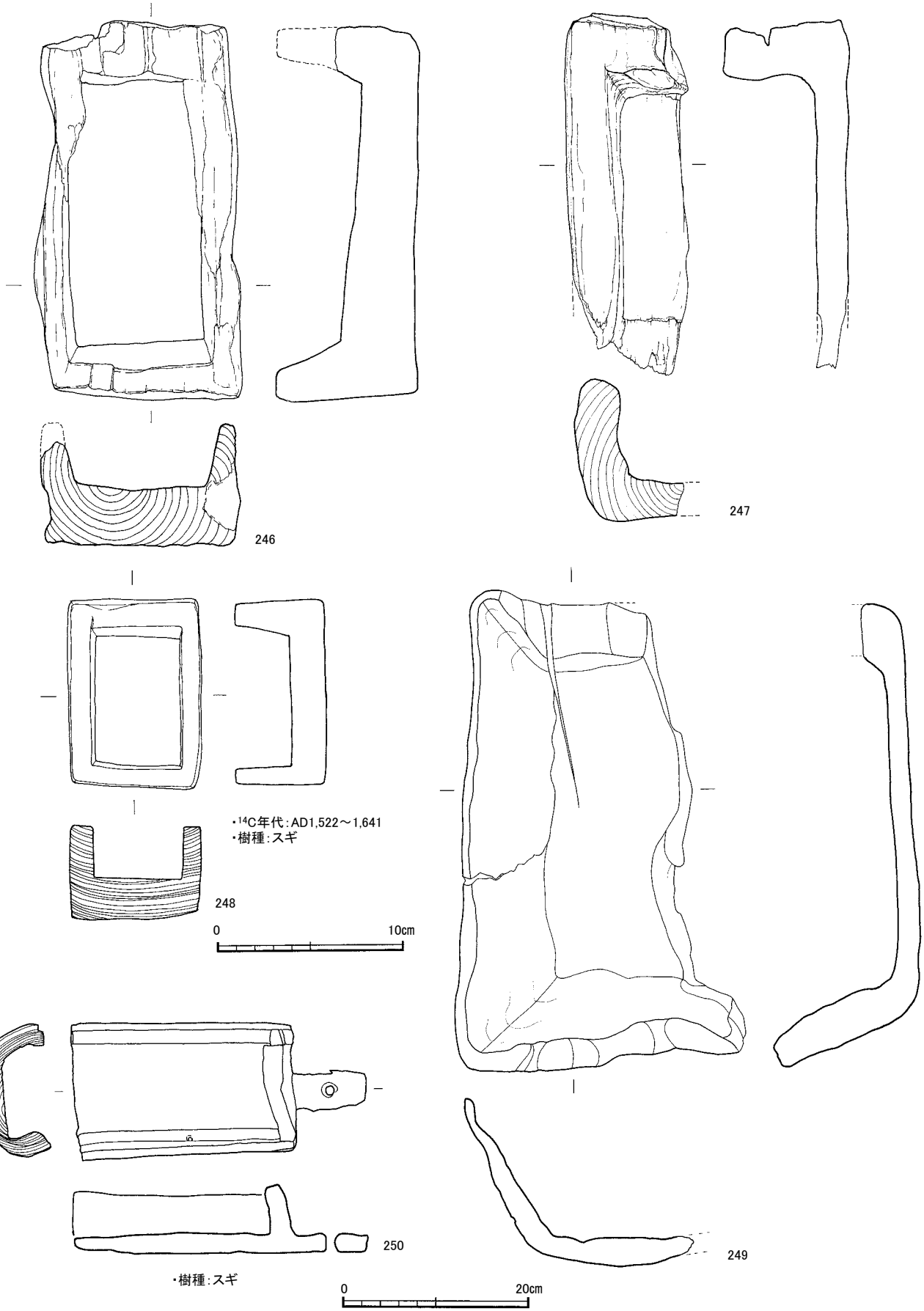
第49図　B地区　出土遺物 (6)



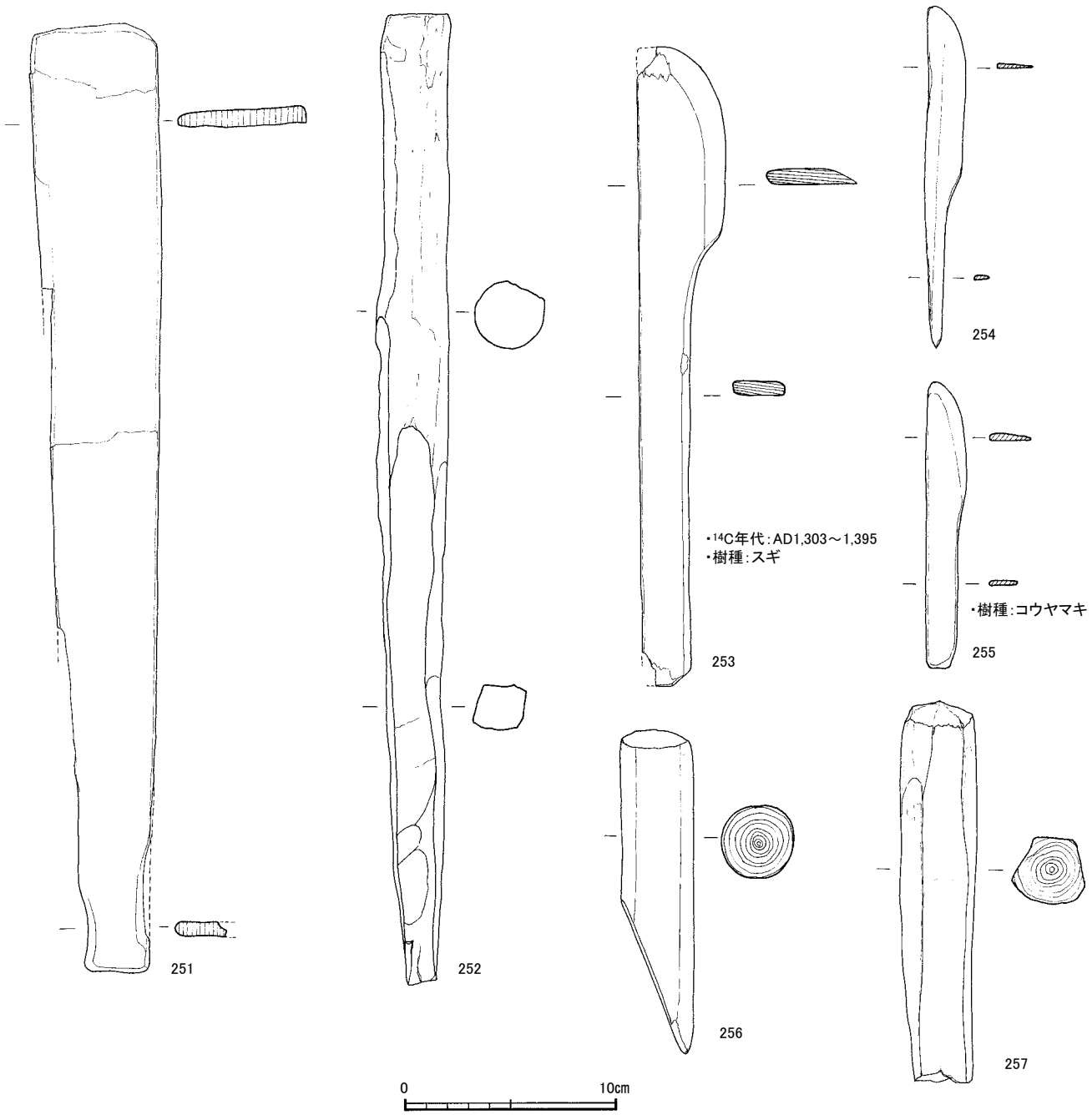
第50図　B地区　出土遺物 (7)

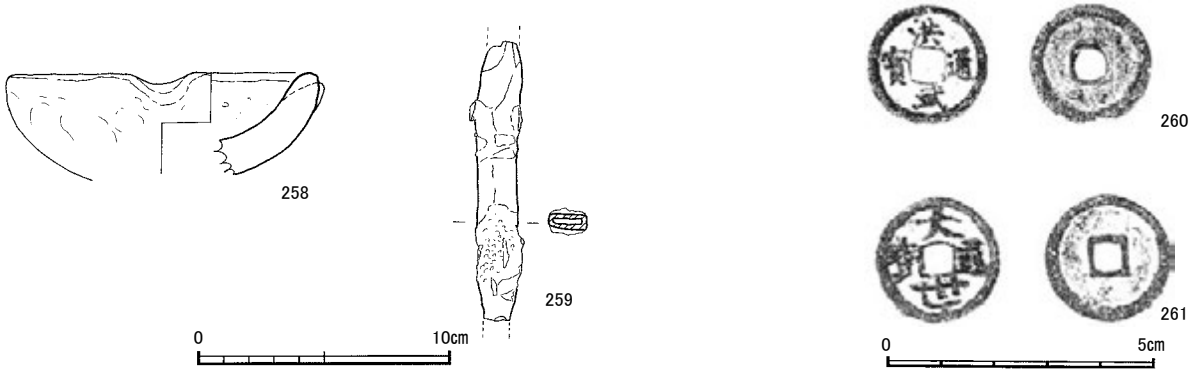


第51図　B地区　出土遺物 (8)



第52図　B地区　出土遺物 (9)





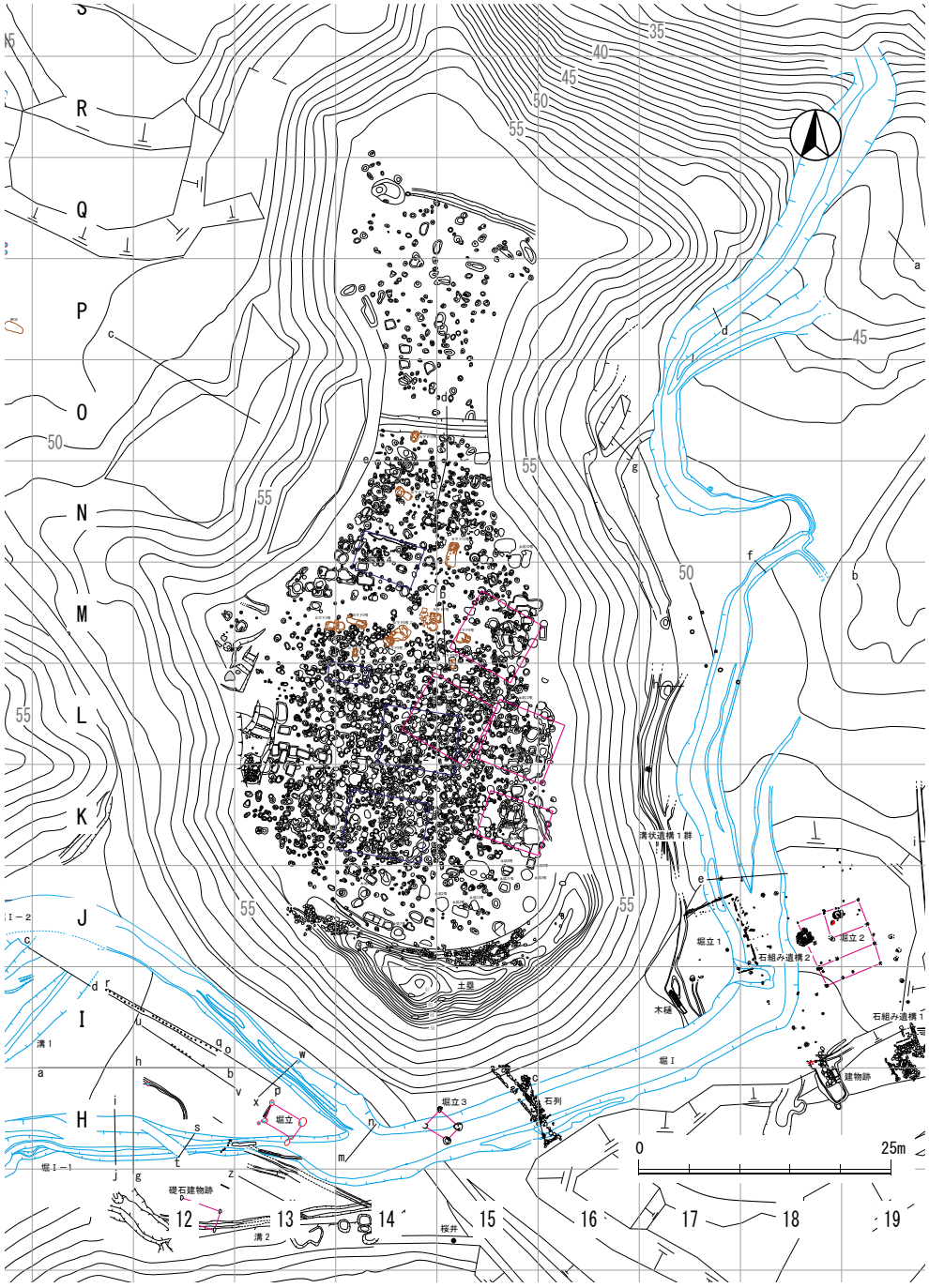
第53図　B地区　出土遺物 ⑽

（３）　Ｃ地区（曲輪Ⅰ）の調査

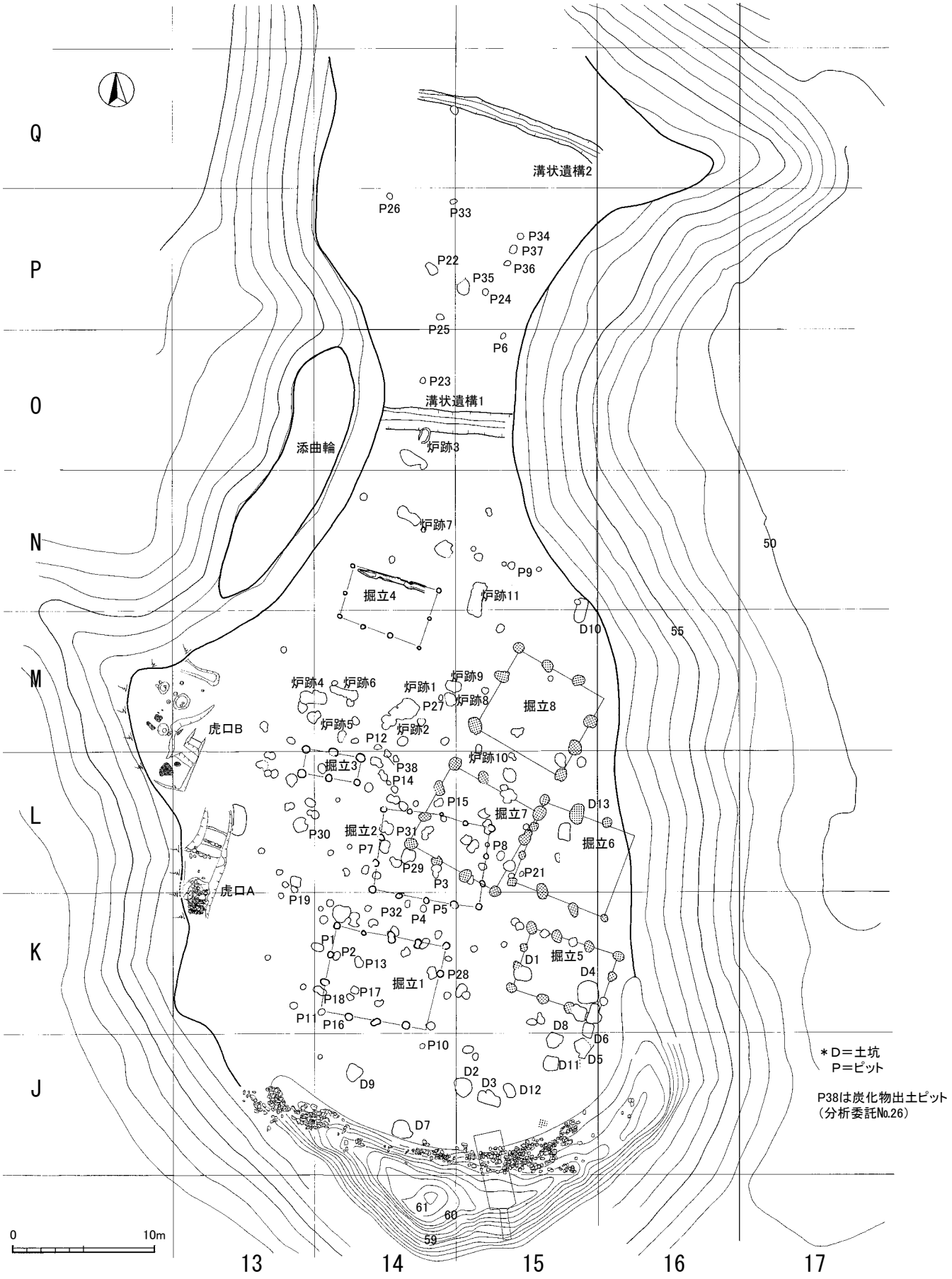
ア　概要

曲輪Ⅰは，宮之城記によると「塩の城」と呼称されている。調査区のほぼ中央部に位置し，南北約90m，東西約30m，北側で幅約10mで窄まった瓢箪の形をした標高約60mの台地に構築されている。面積約1,800㎡である。曲輪がくびれて狭まったＯ－14区の西側には曲輪より50㎝一段低い，長さ約20m，幅約3.5mの細長い添曲輪が接している。北側は急峻な崖が形成され，川面との標高差約60mで川内川に面する。東・西・南側の三方は谷に囲まれた急崖な地形からなり，標高差約20mである。なお，谷部には，曲輪Ⅰの東側と南側を取り巻く空堀（空堀Ⅰ）が検出されている。

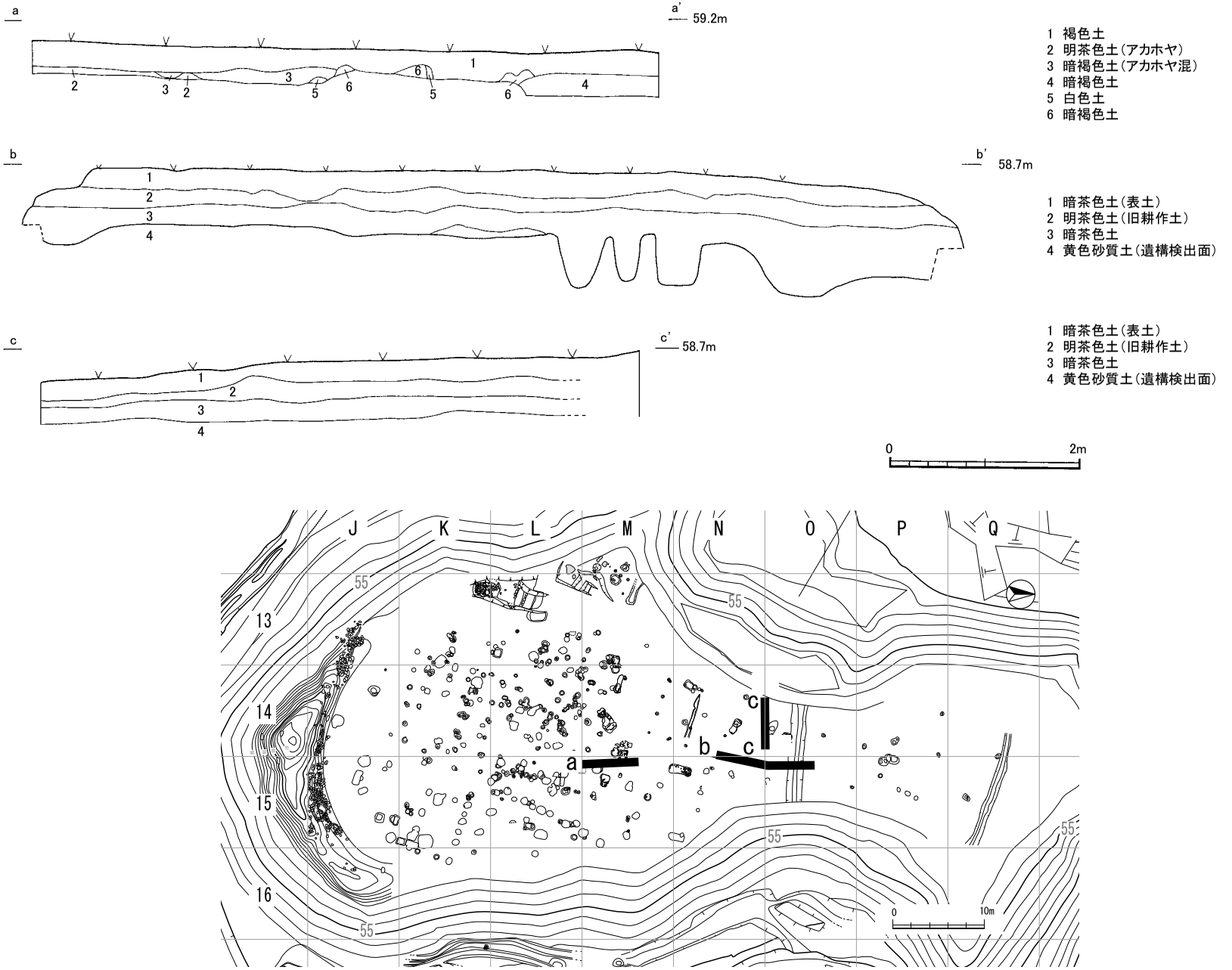
本曲輪の遺構には，現存する土塁をはじめ虎口，掘立柱建物跡，土坑，炉跡，溝，夥しい数のピット等の遺構とそれに伴う青磁・白磁・青花，石製品の遺物が出土した。



第54図　Ｃ地区　（曲輪Ⅰ）全体図



第55図　C地区　（曲輪Ⅰ）遺構配置図



第56図　C地区　土層断面図・土層断面位置図

イ　層位

虎居城跡は河岸段丘上に立地し，中生代の四万十層，加久藤カルデラ噴出物(火砕流層堆積物)，さらに姶良カルデラ噴出物（シラス）を基盤とする。Ⅰ層は暗茶褐色の表土層，Ⅱ層は明茶褐色（アカホヤ層）層，Ⅲ層は暗褐色層（Ⅱ層の軽石粒が多く混在），Ⅳ層は黄色砂質土で，一面に堆積している。中世山城の遺構検出面である。

ウ　遺構

（ア）　土塁（第57図）

土塁は曲輪の南側縁辺端（Ⅰ・Ｊ－13～16区）に丘陵状に明瞭な形で残存している。土塁の平面形は東西に細長い弓状で，中央部は幅が広く両端は舌状に先細となる，いわゆるブーメランの形を呈している。全長は約30m，最大幅約７ｍである。立面は中央部付近が最も高く，高さは曲輪の平坦部との比高差約2.1m，最高部を中心に四方の外縁に向かって緩やかに傾斜する小高い山稜の形である。土塁南側端から急崖となって谷部の空堀Ⅰへ続く。西側の土塁内側には浅い溝が検出されたが詳細は不明である。

また，土塁内側の傾斜面の中程から下位にかけて，数百個におよぶ川原石の人頭大および大小の石が葺かれた状態でほぼ全面に配されている。これらの石は土塁の地表面に露呈していたものが大半である。土塁の土砂流失防止，さらに強固な造りにする効果も考えられる。

土塁の地層断面の観察から表層下に黒色層，アカホヤ火山灰層および縄文早期相当の層が標準的な層序で残っていることから，土塁は削り出して築かれている。

土塁の位置し，規模の大きさ，葺石状の石を配する形状，曲輪との一体的な遺構である空堀Ⅰとの関連から，曲輪の高さをさらに強調する効果と南からの進入の防御施設とともにも権威を象徴するものとしての存在が推測される。

出土遺物（第58図）

262の口径13.8㎝，底径9㎝，高さ2.6㎝で糸切り底の土師器坏である。263は風炉である。底部は三脚の足が付く。体部には唐草文，花弁，花びら文をスタンプで，脚には連点文を付す。奈良火鉢である。

（イ）　虎口（第59～61図）

虎口は曲輪の西側縁のＫ・Ｌ－13区とＬ・Ｍ－12・13区の２か所で検出した。

Ｋ・Ｌ－13区に位置するものを虎口Ａ，Ｌ・Ｍ－12・13区に位置するものを虎口Ｂとした。虎口や入口の一部分は崩落を受けている。また，西側傾斜面からの登城道が想定されるが，完全に崩落していることから不明確である。

a　虎口Ａ（第59・60図）

Ｋ・Ｌ－13区，西側の推定登城道から虎口への入り口で，高さ約１.１ｍの正面東側壁で突き当たり「Ｔ字状」に左右二手に分岐して，階段を使って曲輪へ登る虎口である。右側を虎口Ａ１，左側を虎口Ａ２とする。

虎口Ａ１は，南側に直角に右に折れ，曲輪へ登る５段の階段で登り角度約20°である。入口部分の間口はやや広く，上部５段目で狭くなっている。それぞれの階段のテラスは弧状を呈す。西側縁は攪乱や崩壊を受けており，状況は不明である。階段のステップの高さは１段目から約７㎝，26㎝，31㎝，14㎝，全体の高さは78㎝である。各階のテラスは緩やかに傾斜している。３段目の西側端のテラスに，当時の路面と推定される長径70㎝，短径30㎝の楕円状の範囲に小石と川砂で突き固められた硬化面を確認した。なお，階段部分の上面全体は，多数の大石，小石の礫で覆われているが，階段との直接的な関係は認められず，虎口が使われなくなった後に，投げ込まれたものと思われる。

虎口Ａ２は，比較的良好な状態で検出された。枡形で造られている。虎口Ａ１とは反対向きで，入口から北側に直角に折れて，直線的に曲輪へ登る３段の階段である。登り角度は15°である。入口の間口はやや広いが，西側縁は一部崩落している。１段目の階段から３段目のテラスまでの長さは約2.2ｍである。階段の上面での幅は２.３ｍ，階段床面の幅は1.5～２ｍである。１段目と２段目には，踏みかけ石，土留め石として５～６個の人頭大の自然礫を整然と一列に配置している。３段目までの高さは約60㎝で，３段目からは緩やかな登り坂で曲輪へ続く。各階のテラスには硬化面は確認できなかった。

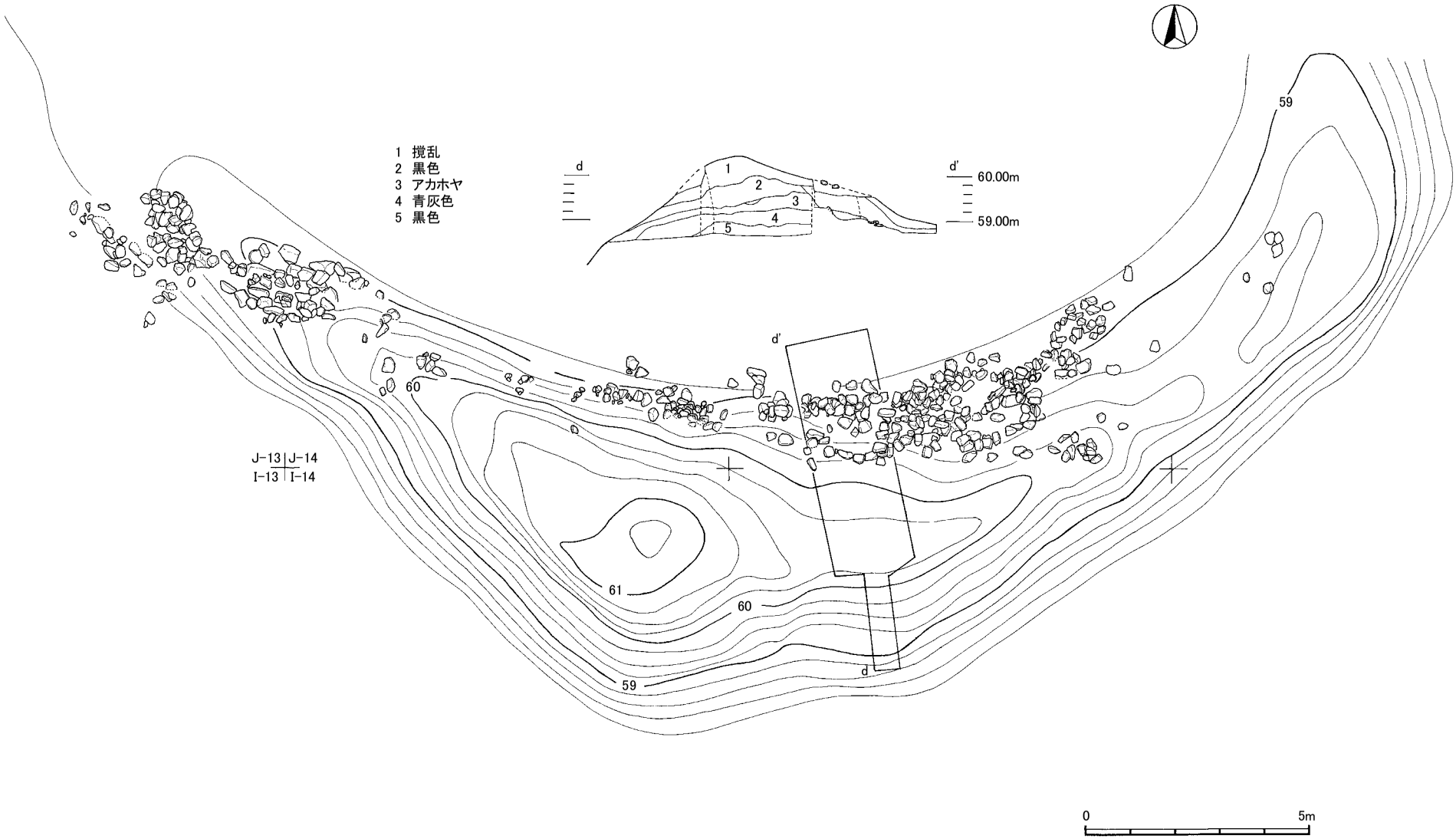
虎口Ａは，曲輪への登り口が左右二手に分岐した二重構造の虎口にもみえるが，虎口Ａ１には投げ込まれたと思われる多数の石に覆われていること状況から，同時性は考えられない。Ａ１がＡ２により古いものと想定した。ただし，二重構造の虎口の可能性もあり，今後の課題としたい。

b　虎口Ｂ（第59・61図）

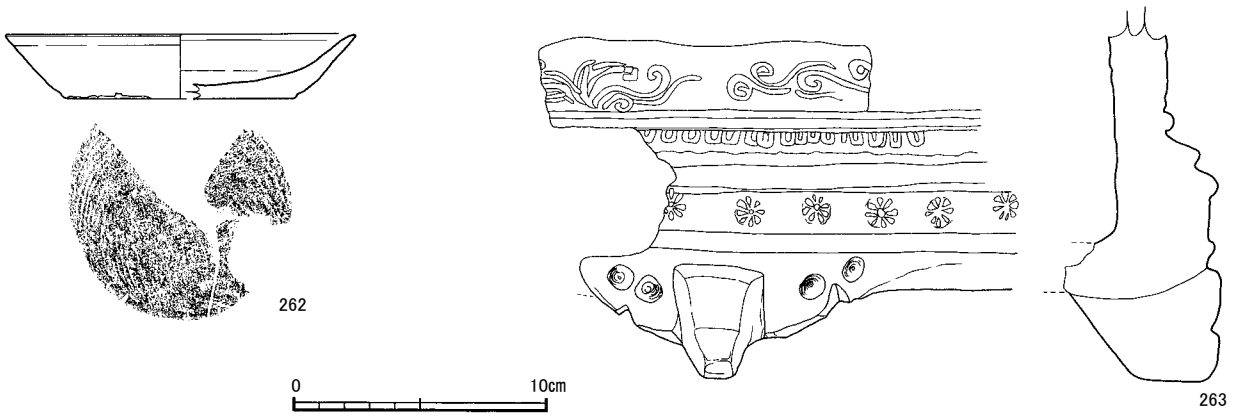
Ｌ・Ｍ－12・13区に位置する。東北の方向に並列，隣接して形態が異なる虎口Ｂ１，虎口Ｂ２が確認された。いずれも虎口入り口は，西側傾斜面からの登城道および虎口入り口の西端は崩落していることから詳細は不明である。

虎口Ｂ１は枡形で入り口の床面は縦横約２ｍで，高さは約90㎝である。北西方向へ直行して登る三段の階段を設け，長さ約２ｍ，登り角度18°である。二段目がやや高い。一段目には左へ広がるテラスを設け，右折してスロープで曲輪へ登る。虎口入り口の床面には，踏み固められた硬化面の一部が２か所で残存していた。

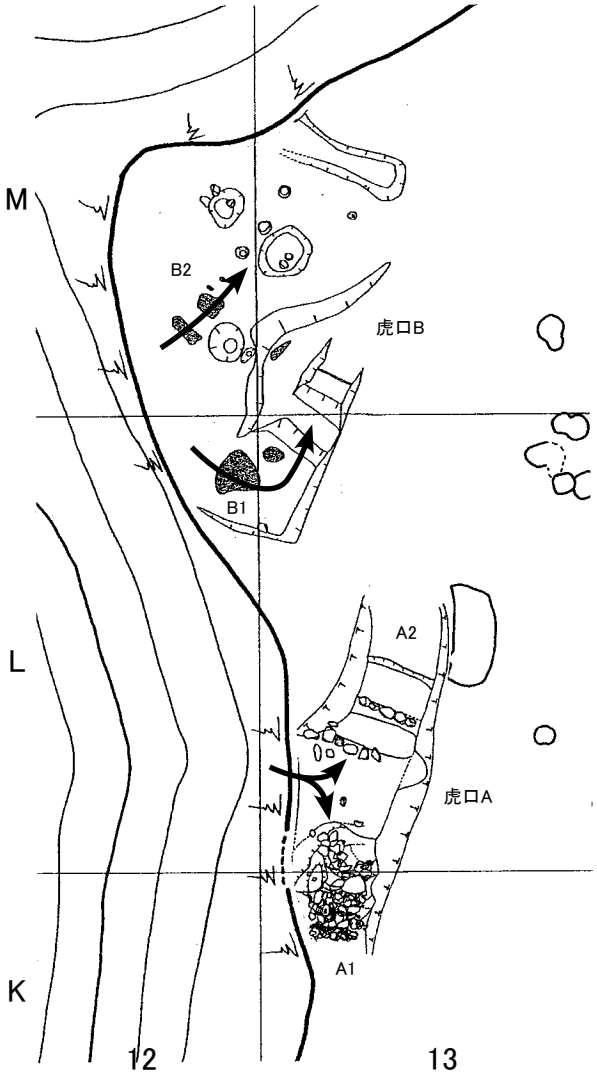
虎口Ｂ２は，虎口Ｂ１の北側に隣接する。虎口は平入りで曲輪へ登る方向は虎口Ｂ１とほぼ平行する。入り口部分は崩落し，詳細は不明である。虎口入り口付近から


1 撹乱
2 黒色
3 アカホヤ
4 青灰色
5 黒色
d
d'
60.00m
59.00m
59
60
61
J-13 J-14
I-13 I-14
0
5m

第57図　C地区　土塁



第58図　C地区　土塁出土遺物



第59図　C地区　虎口A，B

曲輪平坦面までの距離は約７ｍの登り坂である。

虎口の中程には，砂質層を掘り込んだ長径130㎝，短径110㎝，深さ30㎝と長径70㎝，短径50㎝，深さ70㎝の略円形の２個の大形ピット（柱穴）が登坂面に対し直角に並んで検出された。柱穴の心芯での間隔は170㎝である。柱穴内の埋土にはぐり石がみられる。

両柱穴とも規模が大きく，柱穴の位置関係から一対の遺構として捉え，門としての存在が推測される。

また，虎口B2の入口から門に向って直線状に4か所の硬化面が点在して検出された。硬化面は城門を通る通路との関連が想定される。

出土遺物（第62図）

青磁，青花，土師器坏，皿，羽口等が出土した。

264・265は青磁である。264は椀で，高台内底面は露胎する。265は稜花皿である。見込みは円上に釉剥ぎあり，高台内面から高台内底面は露胎する。266は璋洲窯系の青花の碗で，高台内底面に墨書で○が三つ書かれる。

267は口径14.8㎝，底部径6.4㎝，高さ3.2㎝の坏である。268はヘラ起こし，内外面に煤が付着している。269口径7.8㎝，270は口径6.5㎝で糸切り底の小皿である。271は羽口の先端部である。

（ウ）　溝状遺構（第55図）

曲輪の北側に２本の溝状遺構を検出した。

a　溝状遺構１

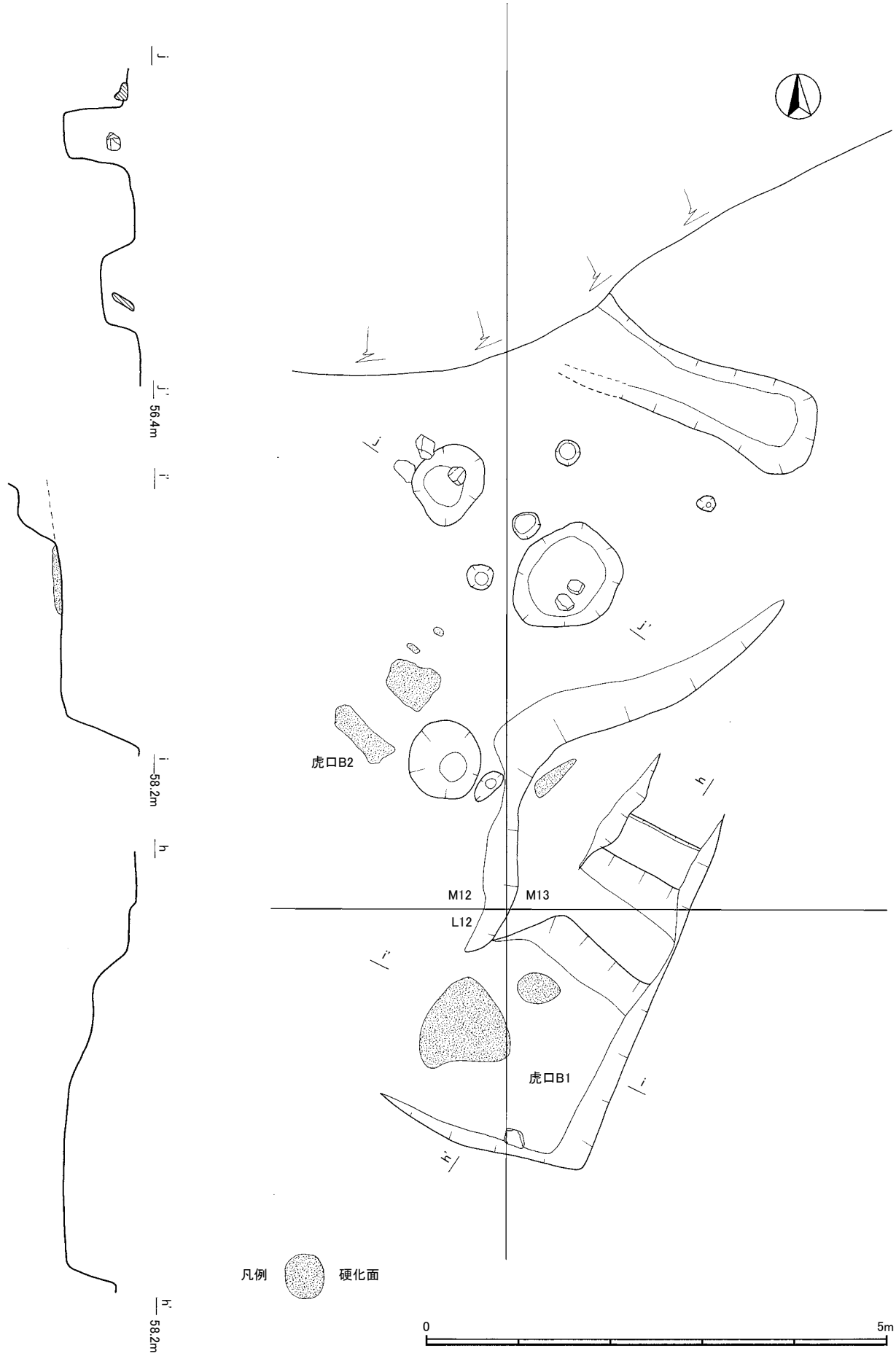
縦れた０－14・15区に曲輪を東西方向に横断する箱堀りの溝状遺構である。溝は直線的で長さ９ｍ，幅1.6ｍ，底面は平坦で幅35～55㎝，深さ60～70㎝である。曲輪を南北に分断する溝である。溝の西側は添曲輪と直結した位置関係にある。

b　溝状遺構２

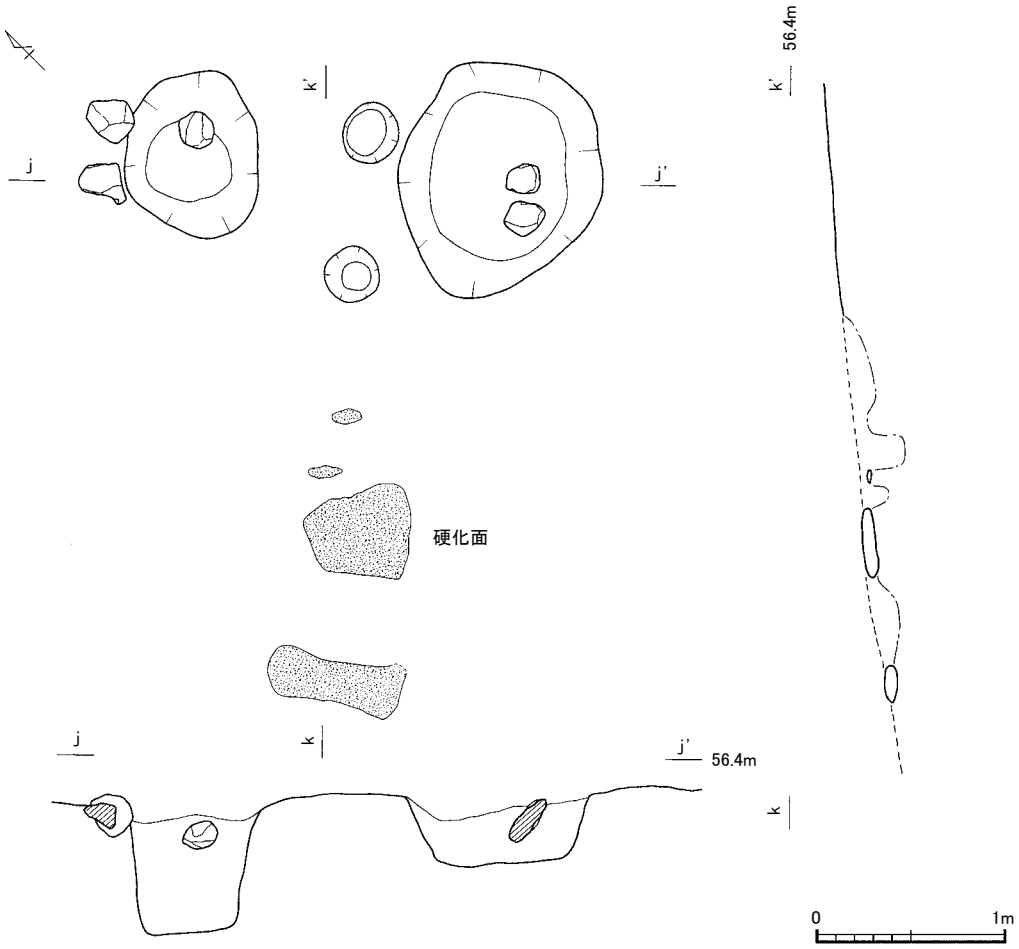
曲輪Ｃ北側先端部Ｑ－14・15区に長さ13m，幅約75～110㎝，底面の幅35～40㎝，深さ12～17㎝で浅い溝である。

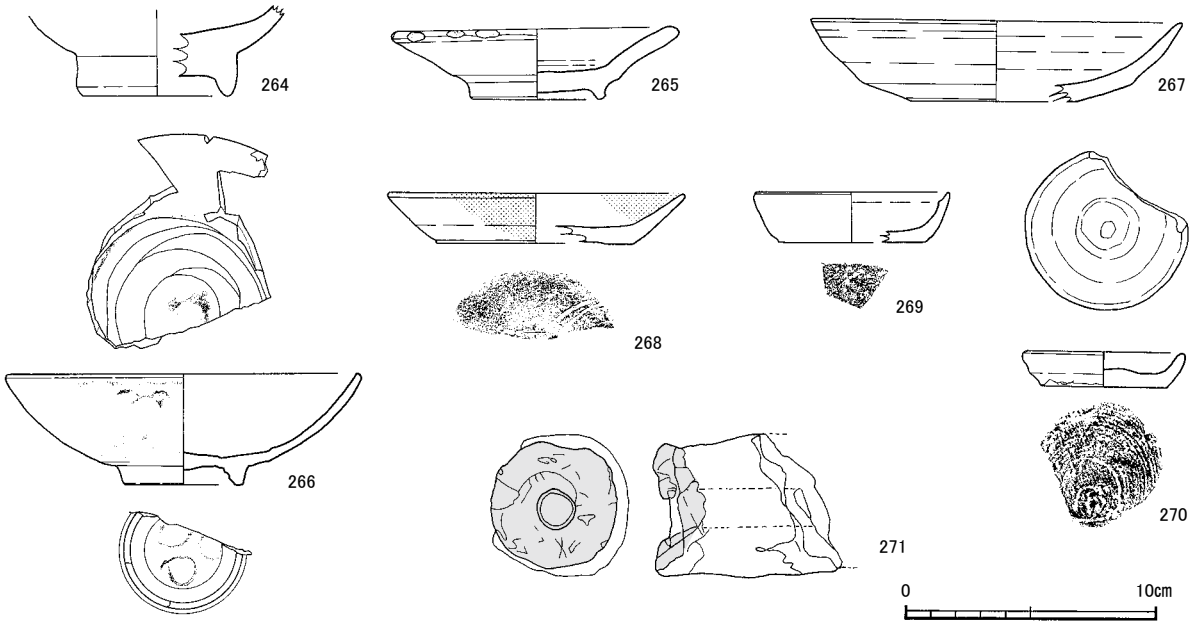


第60図　C地区　虎口A



第61図　C地区　虎口B





第62図　C地区　虎口Ｂの柱穴と出土遺物

（エ） 掘立柱建物跡（第63～70図）

砂層を掘り込んだ２千基余りの夥しいピットが検出された。素堀りのもの，ピット内に礎石をもつもの，ぐり石をもつもの，重複するもの，不定型なもの等，様々である。

これらの夥しいピットのいくつかは，掘立柱建物に関連するもので，８軒の掘立柱建物跡（以下，掘立柱建物跡１～８を１号～８号とする）を確認した。これらの建物には，柱穴が素堀りの掘立柱建物跡Ａと柱穴に礎石を持つ掘立柱建物跡Ｂの２タイプがある。これらのタイプが位置する場所や柱穴のあり方，１間ごとの柱間の規格に相違点をみることが出来る。　建物の配置，主軸の方向，建物の重複などから掘立柱建物跡A1～4，掘立柱建物跡B5・6，掘立柱建物跡B7・8の3時期にわたる建物跡と推定される。

a　掘立柱建物跡Ａ

掘立柱建物跡１～４で，４間×３間が２軒，３間×２間が１軒，２間×１間が１軒である。主軸の方向をほぼ同じくして曲輪の中央部分から北側に位置し，重複はみられない。

掘立柱建物跡１（第63図）

Ｋ－14区に位置する。主軸はＮ-78°-Wで４間×３間の建物跡である。東側梁間の柱穴２個の２間分は確認できなかった。

掘立柱建物跡２（第64図）

Ｌ・Ｋ－14・15区に位置する。掘立柱建物跡１の北側にあたり，主軸はＮ-80°-W。４間×３間の建物である。なお，掘立柱建物跡７が重複している。

掘立柱建物跡３（第65図）

Ｌ－13・14，Ｍ－13区に位置する。主軸はN-80°-W。２間×１間の掘立柱建物跡で小屋と思われる。柱間はわずかに梁行より桁行が長い。柱穴の径は23～32㎝，深さ11～23㎝で，比較的しっかりしている。

掘立柱建物跡４（第66図）

Ｍ・Ｎ－14区に位置する。主軸はN-75°-W。西側梁間が東梁間より短く，少し歪んだ建物となるが，３間×２の間掘立柱建物跡である。

北側の桁の柱穴１個は確認できなかった。柱穴の径は21～36㎝，深さ10～80㎝である。

b　礎石を持つ掘立柱建物跡Ｂ

礎石を持つ掘立柱建物跡は，曲輪の東側半分寄りに２列に並んで３間×３間の建物を４軒確認した。なお，柱間の数値は柱穴の心芯での数値である。桁行・梁間の１間の長さは均一でない。桁行が梁行に比べ１間の長さが長く，３間×３間の建物でも桁行の長い長方形に近いものとなる。

掘立柱建物跡６と掘立柱建物跡７は重複している。掘立柱建物の主軸の方向，位置関係から５号と６号，７号と８号が同時期の建物として捉えたい。

掘立柱建物跡５（第67図）

Ｋ－15区を主体に位置する。主軸はＮ-72°-W。３間×３間の建物跡で，桁行6.49～6.36ｍ，梁間4.5～4.55ｍである。桁行が約１ｍほど長い。桁行１間の平均値は2.14ｍ（約７尺），梁間の１間の平均値は1.5ｍ（約５尺）である。柱穴は直径55㎝～118㎝，深さは31㎝～84㎝の大型で，柱穴６と11を除いて柱穴の底面に礎石を用いている。

掘立柱建物跡６（第68図）

Ｌ－15区を主体に位置する。主軸はＮ-68°-W。

建物の東側梁行部分は，曲輪縁辺部で崩壊した場所にあたり，不明である。柱穴４からの梁行を推測し，３間×３間の掘立柱建物を想定した。南側桁行，西側梁間に係る柱穴の底には盤状の礎石が置かれている。

掘立柱建物跡７（第69図）

Ｌ－15区を主体に位置する。６号と重複している。

主軸をＮ-63°-Wに，桁行6.82ｍ～6.84ｍ，梁間6.44ｍ～6.40ｍである。桁行１間の平均値は2.27ｍ（約7.5尺），梁間の１間の平均値は2.1ｍ（約７尺）である。柱穴は直径67㎝～137㎝，深さは47㎝～82㎝で，柱穴８～10を除いて礎石がある。

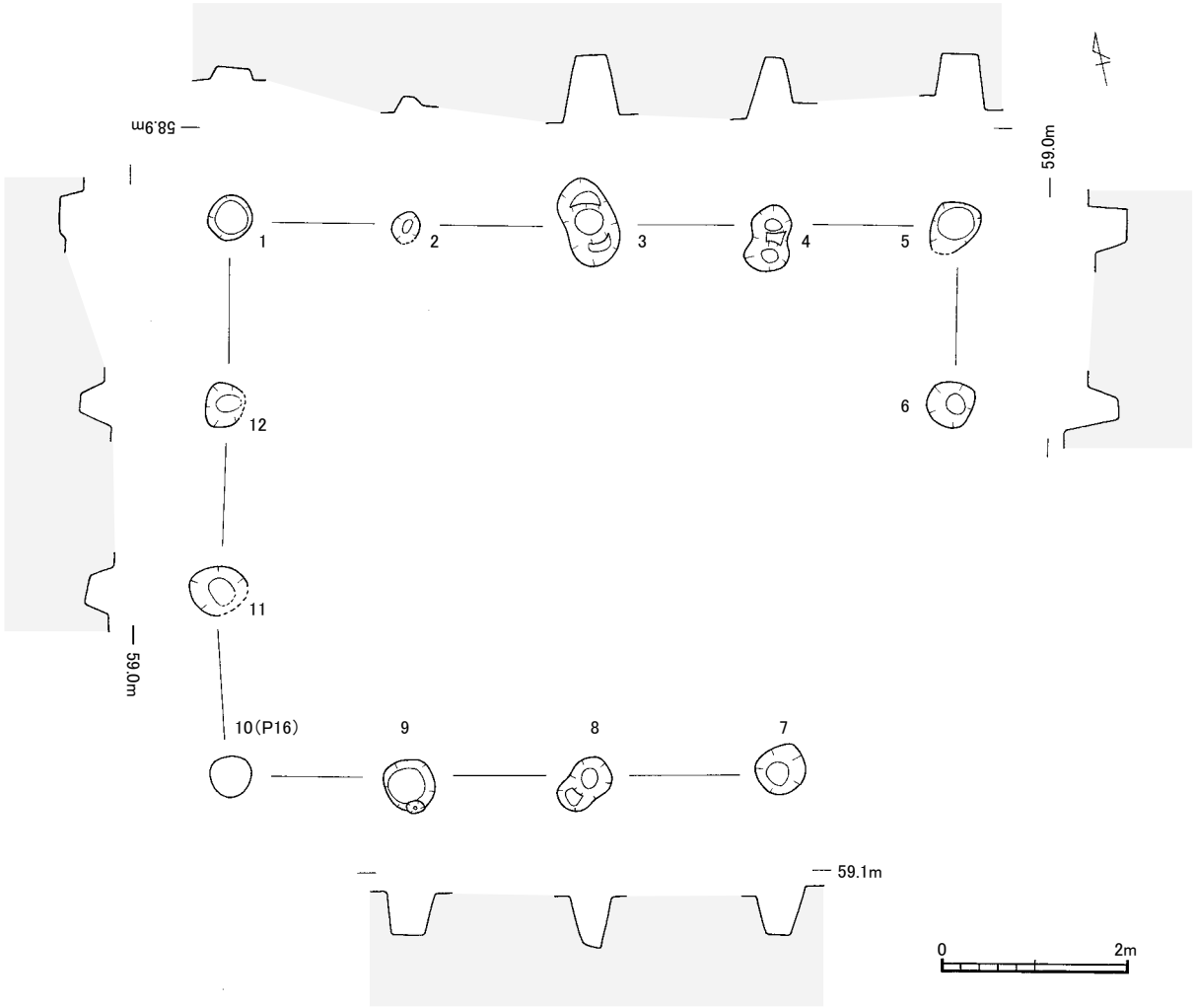
出土遺物（第69図）

272は口径13㎝の青磁椀である。剣先蓮弁文は線引きで簡略されたものである。15世紀後葉～16世紀前葉と思われる。

掘立柱建物跡８（第70図）

Ｍ－15区を主体に位置する。東側の桁と梁が交わる角の部分は崩落を受けており不明である。また，南側の中間の桁２間分はピットと重複していることから柱穴の存在の確定は困難であった。その他の柱穴は礎石を伴うことや位置関係から掘立柱建物跡８とした。

主軸をＮ-60°-Wに，桁行6.9ｍ，梁間ほぼ6.22ｍである。桁行１間の平均値は2.27ｍ（約7.5尺），梁間の１間の平均値は2.1ｍ（約７尺）である。柱穴は直径67㎝～116㎝，深さは40㎝～94㎝で，柱穴８～10を除いて柱穴の底面に礎石を持つ。

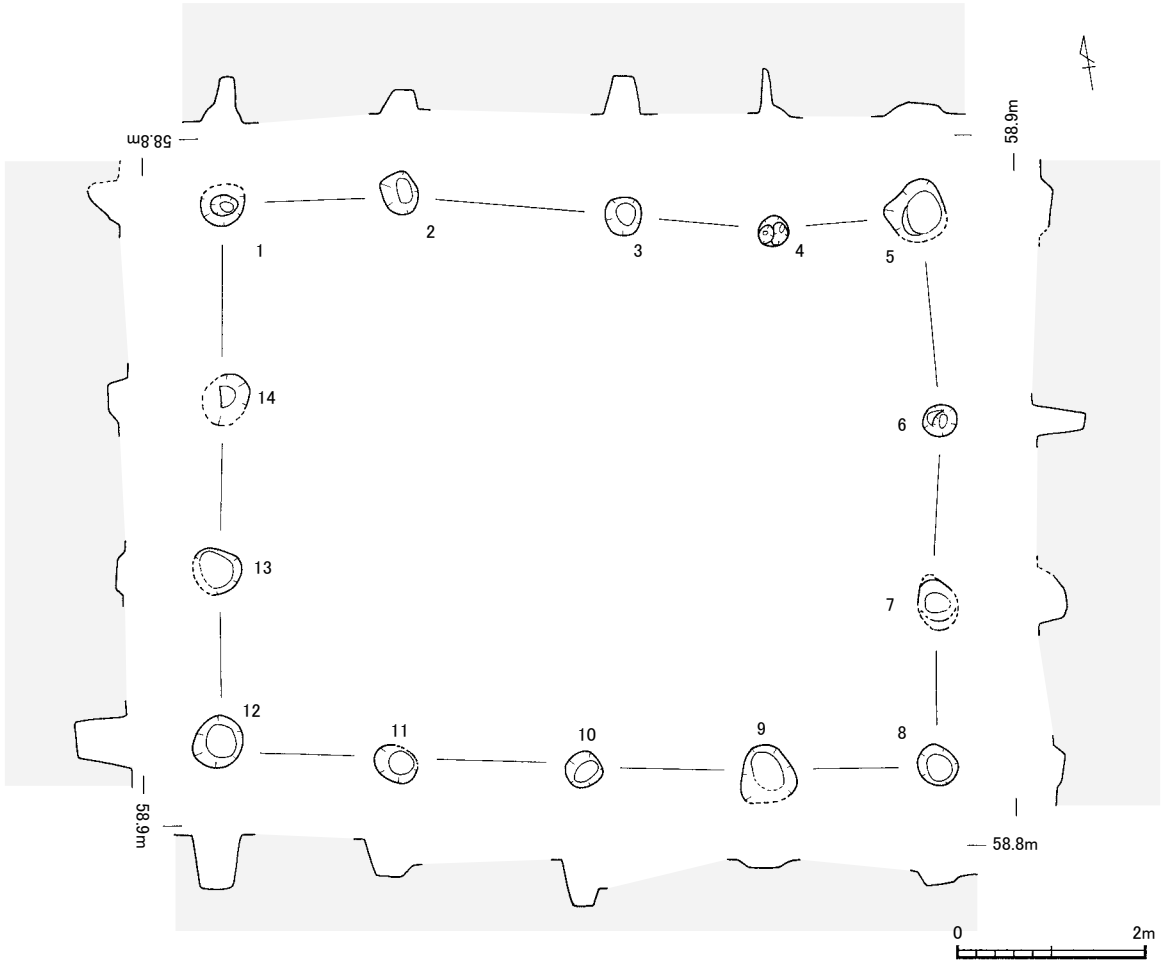


第63図　C地区　掘立柱建物跡１

第9表　C地区　掘立柱建物跡1計測表

主軸方向	方向	柱穴方向	柱間長さ		延長(cm)
			(cm)	尺=30.2cm	
N-78°-W	桁行	1–2	192	6.35	786
		2–3	198	6.55	
		3–4	195	6.45	
		4–5	201	6.65	
		-7	-	-	-
		7-8	205	6.78	
		8-9	198	6.55	
		9-10	194	6.45	
	梁間	5–6	188	6.22	-
		6-	-	-	
		10-11	202	6.68	599
		11-12	199	6.58	
		12-1	198	6.55	

No.	柱穴			柱			樹種	備考
	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	形状	径(cm)	長さ(cm)		
1	49	47	22	-	-	-	-	-
2	30	30＋	15	-	-	-	-	-
3	92	60	71	-	-	-	-	-
4	69	36	65	-	-	-	-	-
5	50	48	56	-	-	-	-	-
6	51	49	57	-	-	-	-	-
7	52	52	51	-	-	-	-	-
8	54	46	54	-	-	-	-	-
9	55	54	42	-	-	-	-	-
10	46	44	-	-	-	-	-	-
11	62＋	53	24	-	-	-	-	-
12	45	40	32	-	-	-	-	-

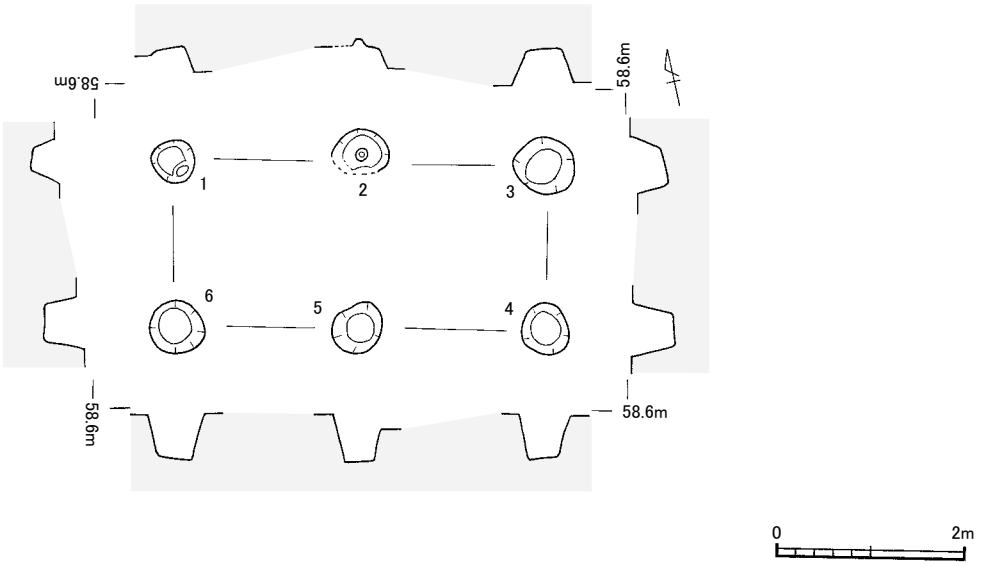


第64図　C地区　掘立柱建物跡２

第10表　C地区　　掘立柱建物跡2計測表

主軸方向	方向	柱穴方向	柱間長さ		延長 (cm)
			(cm)	尺=30.2cm	
N−80°−W	桁行	1−2	195	6.45	731
		2−3	217	7.18	
		3−4	160	5.29	
		4−5	159	5.26	
		8−9	185	6.12	769
		9−10	193	6.39	
		10−11	197	6.52	
		11−12	194	6.42	
	梁間	5−6	225	7.45	594
		6−7	196	6.49	
		7−8	173	5.72	
		12−13	184	6.09	571
		13−14	185	6.12	
		14−1	202	6.68	

No.	柱穴			柱			樹種	備考
	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	形状	径(cm)	長さ(cm)		
1	45	33＋	48	−	−	−	−	二段掘り
2	46	40	22	−	−	−	−	−
3	41	39	41	−	−	−	−	−
4	33	31	47	−	−	−	−	二段掘り
5	67	57＋	13	−	−	−	−	−
6	36	32	52	−	−	−	−	−
7	59＋	43＋	29	−	−	−	−	−
8	44	42	14	−	−	−	−	−
9	57＋	56	10	−	−	−	−	−
10	40	38	46	−	−	−	−	−
11	48	38＋	38	−	−	−	−	−
12	54	54	57	−	−	−	−	−
13	46	40＋	7	−	−	−	−	−
14	53	50＋	18	−	−	−	−	−



第65図　C地区　掘立柱建物跡３

第11表　C地区　掘立柱建物跡3計測表

主軸方向	方向	柱穴方向	柱間長さ		延長 (cm)
			(cm)	尺=30.2cm	
N−80°−W	桁行	1−2	200	6.62	396
		2−3	196	6.48	
		4−5	200	6.62	394
		5−6	194	6.42	
	梁間	1−6	180	5.96	180
		3−4	186	6.14	186

No.	柱穴			柱			樹種	備考
	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	形状	径(cm)	長さ(cm)		
1	48	46	30	−	−	−	−	−
2	64+	46+	22+	−	−	−	−	−
3	66	64	36	−	−	−	−	−
4	56	52	46	−	−	−	−	−
5	54	52	40	−	−	−	−	−
6	60	56	48	−	−	−	−	−

（オ） ピット（第71～74図）

２千基余りのピットの中で，礎石やグリ石を伴う37基のピットを取り上げた。平面プランは円形，楕円形，不定形を呈し，径38cm～102cm，深さ26cm～104cmである。その中でも，ピット9・27の底面には礎石を伴っているが，建物の柱穴や柵列等に係る遺構としての確証は得られなかった。

ピット内出土遺物（第79・80図）

青磁

273～276は龍泉窯系青磁である。273・274は椀である。273は口縁端部が丸みを帯び，腰部が張るものである。274は口縁部外面に雷文帯が巡る。275は底部が碁笥底を呈する皿である。276は盤である。

青花

277は体部が丸みを帯びる碗である。278は畳付から外底部は露胎で見込みに界線を施す。279は見込みに「五」と思われる文字が書かれる碗である。

278・279・281は漳洲窯系の青花である。281は折れ縁の盤である。

277･280･282は景徳鎮窯系の青花である。280は皿で，口縁端部は端反となる。282は壺蓋である。身受け部の釉は釉剥ぎされる。

色絵

283は景徳鎮窯系の色絵で，合子の蓋である。上面には赤と緑による上絵が描かれる。

土師器皿

284～296は土師器の小型皿である。口径5.9cm～14cm，高さは1.2cm～2.8cmで，平底で糸切り底である。292は灯明皿である。

輸入陶器

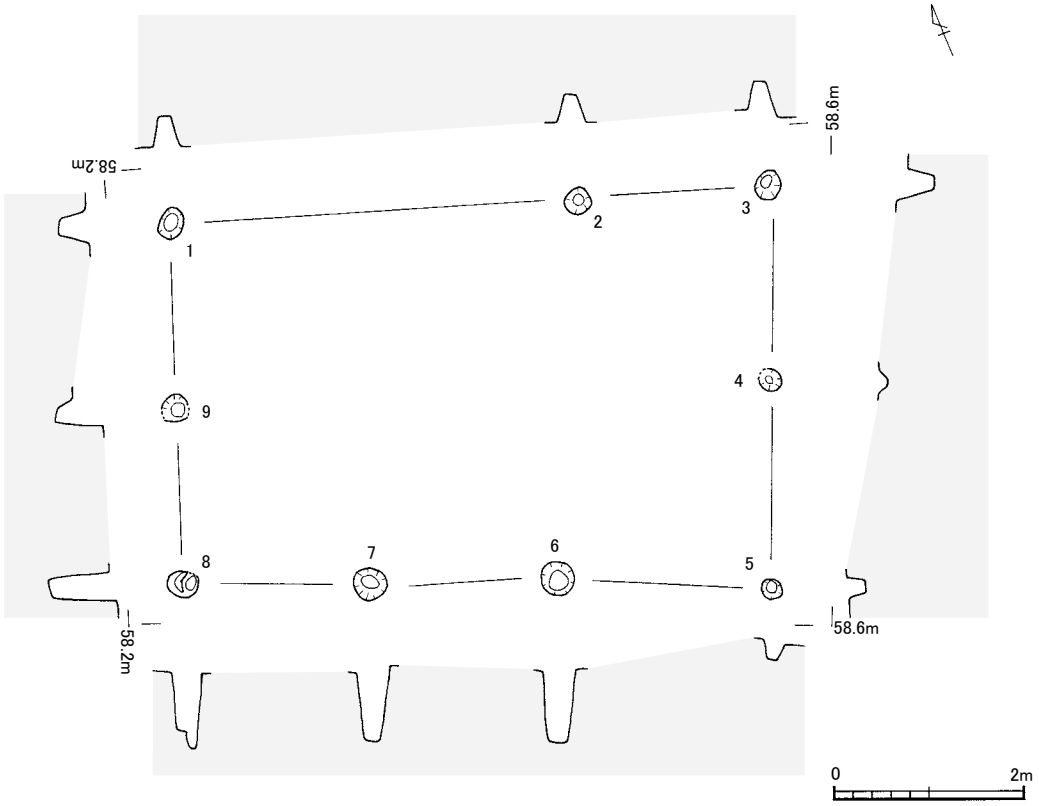
297は陶器の鉢である。中国南部産と思われる。内面に鉄泥と思われるものが塗布される。

瓦質土器

298は瓦質の深鉢形の火鉢である。口縁部は垂直に立ち，口唇部は平坦で外に突き出る。口縁に２条の三角突帯文と巴，櫛状のスタンプを付す。内外面には煤が付着し，内面には斜位のハケ目状の調整痕が残る。奈良火鉢で15世紀相当か。

土錘

299は長さ4.8cmで両端で細くなる管状土錘，300は長さ2.5cm，径2.3cmである。

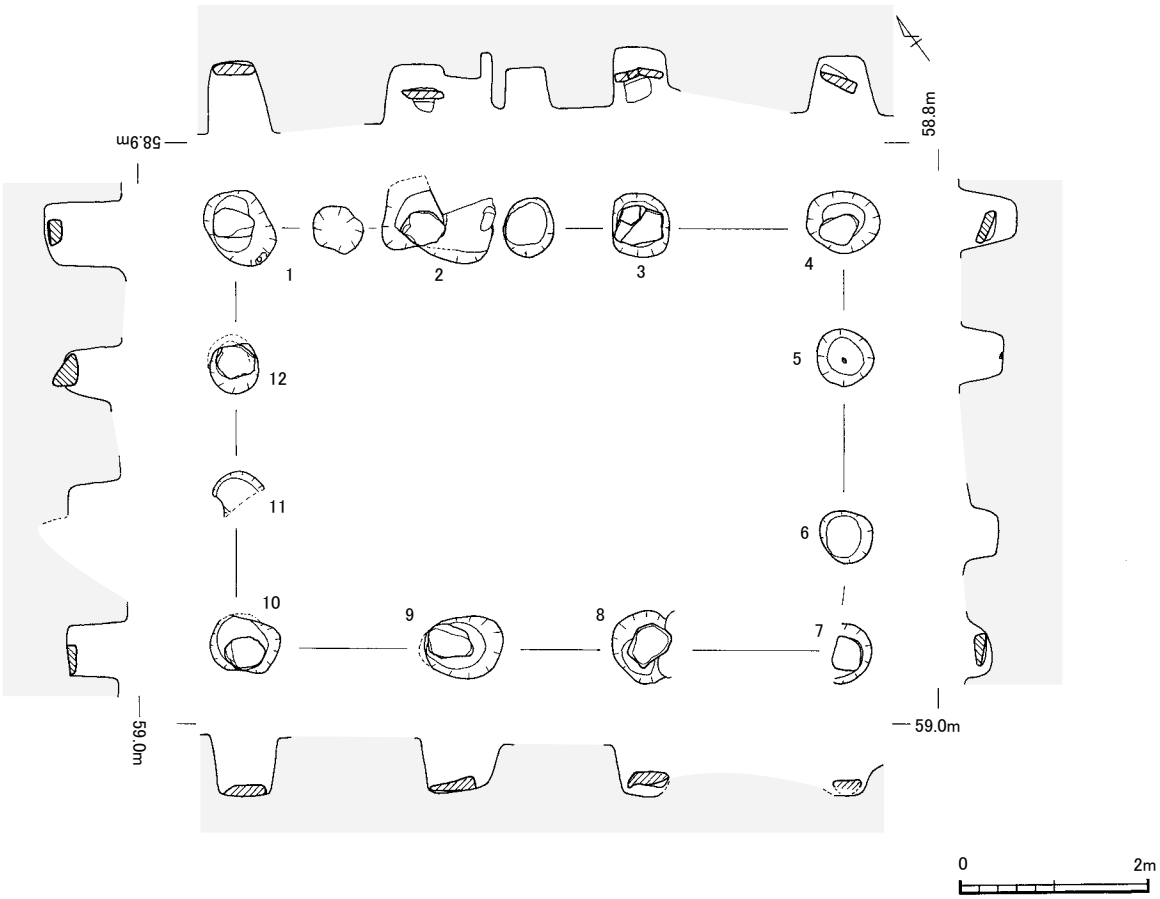


第66図　C地区　掘立柱建物跡４

第12表　C地区　掘立柱建物跡4計測表

主軸方向	方向	柱穴方向	柱間長さ		延長 (cm)
			(cm)	尺=30.2cm	
N−75°−W	桁行	1−2	433	14.33	636
		2−3	203	6.72	
		5−6	224	7.41	625
		6−7	200	6.62	
		7−8	201	6.65	
	梁間	3−4	203	7.21	421
		4−5	218	7.21	
		8−9	182	6.02	379
		9−1	197	6.52	

No.	柱穴			柱			樹種	備考
	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	形状	径(cm)	長さ(cm)		
1	32	28	32	−	−	−	−	−
2	30	27	31	−	−	−	−	−
3	30	27	40	−	−	−	−	−
4	24	24	10	−	−	−	−	−
5	21	21	21	−	−	−	−	−
6	36	34	78	−	−	−	−	−
7	34	34	78	−	−	−	−	−
8	34	28	80	−	−	−	−	二段掘り
9	28＋	28	46	−	−	−	−	−

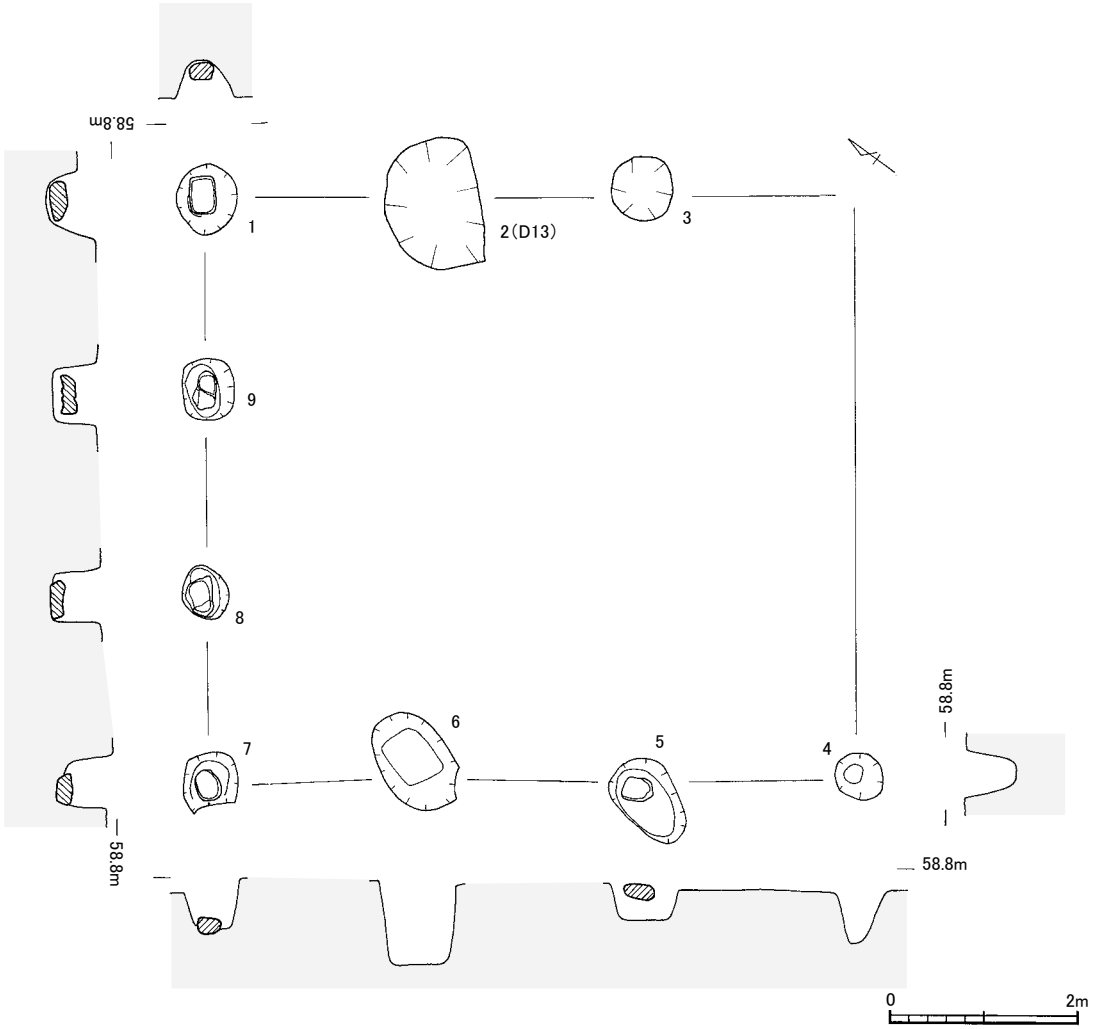


第67図　C地区　掘立柱建物跡５

第13表　C地区　掘立柱建物跡5計測表

主軸方向	方向	柱穴方向	柱間長さ		延長 (cm)
			(cm)	尺=30.2cm	
N−72°−W	桁行	1−2	218	7.12	649
		2−3	213	7.05	
		3−4	217	7.18	
		7−8	216	7.15	636
		8−9	190	6.29	
		9−10	230	7.61	
	梁間	4−5	140	4.63	450
		5−6	187	6.19	
		6−7	123	4.07	
		10−11	152	5.03	455
		11−12	157	5.19	
		12−1	146	4.83	

No.	柱穴			柱			樹種	備考
	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	形状	径(cm)	長さ(cm)		
1	85	65	84	−	−	−	−	礎石
2	118	44	78	−	−	−	−	礎石
3	74	62	65	−	−	−	−	礎石
4	80	72	66	−	−	−	−	礎石
5	63	60	46	−	−	−	−	礎石
6	61	56	36	−	−	−	−	−
7	63	61	31	−	−	−	−	礎石
8	87	59	55	−	−	−	−	礎石
9	85	66	59	−	−	−	−	礎石
10	76	60	65	−	−	−	−	礎石
11	62	57	56	−	−	−	−	−
12	55	52	75	−	−	−	−	礎石

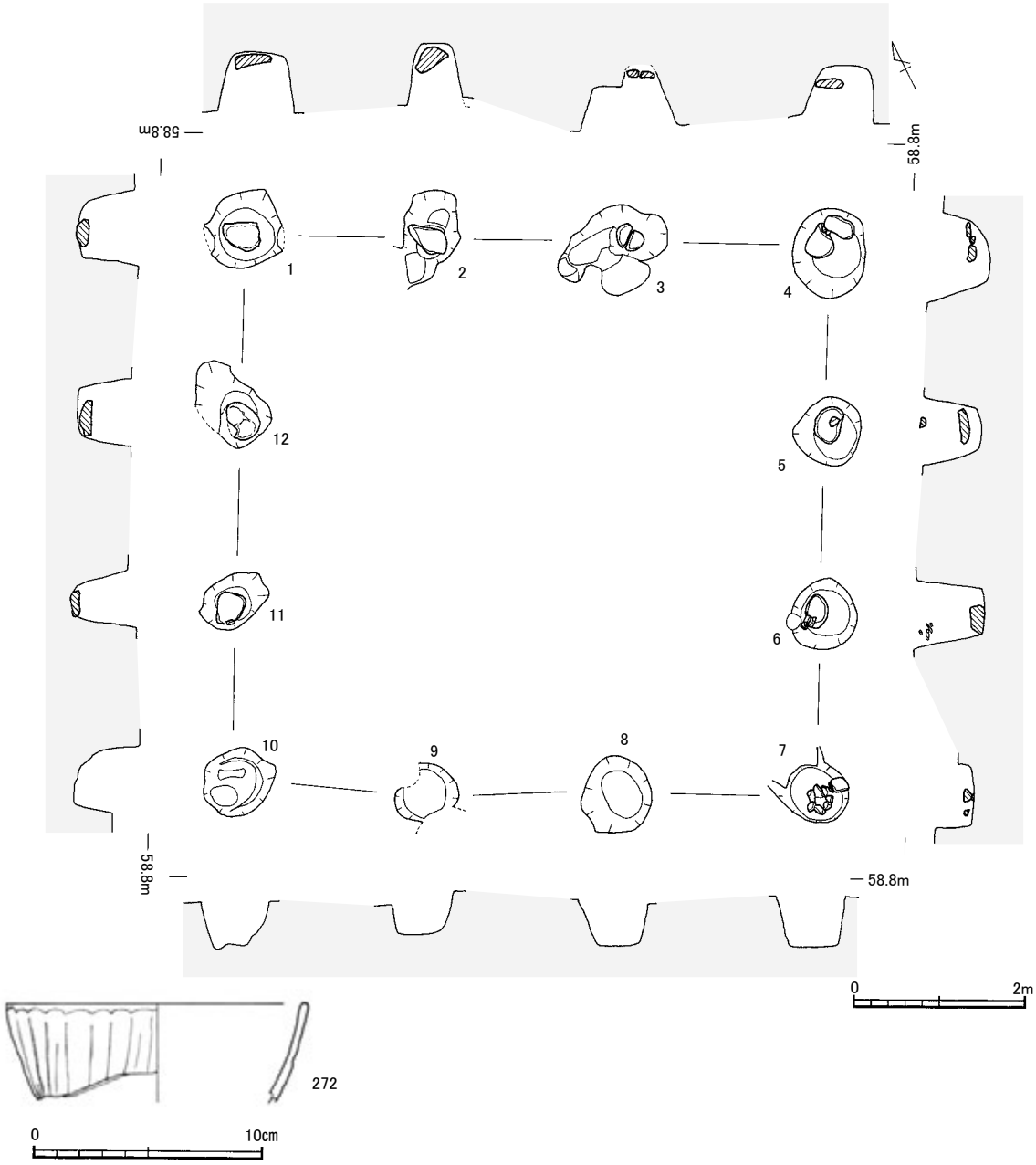


第68図　C地区　掘立柱建物跡６

第14表　C地区　掘立柱建物跡6計測表

主軸方向	方向	柱穴方向	柱間長さ		延長 (cm)
			(cm)	尺=30.2cm	
N−68°−W	桁行	1−2	247	8.17	−
		2−3	221	7.31	
		3−	−	−	
		4−5	234	7.74	694
		5−6	243	8.04	
		6−7	217	7.18	
	梁間	−4	−	−	−
		7−8	200	6.62	624
		8−9	218	7.21	
		9−1	206	6.82	

No.	柱穴			柱			樹種	備考
	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	形状	径(cm)	長さ(cm)		
1	76	67	54	−	−	−	−	礎石
2	141	100	−	−	−	−	−	−
3	72	69	−	−	−	−	−	−
4	56	52	58	−	−	−	−	−
5	100	67	40	−	−	−	−	礎石
6	107	74	92	−	−	−	−	−
7	74	60	60	−	−	−	−	礎石
8	62	50	56	−	−	−	−	礎石
9	70	56	46	−	−	−	−	礎石

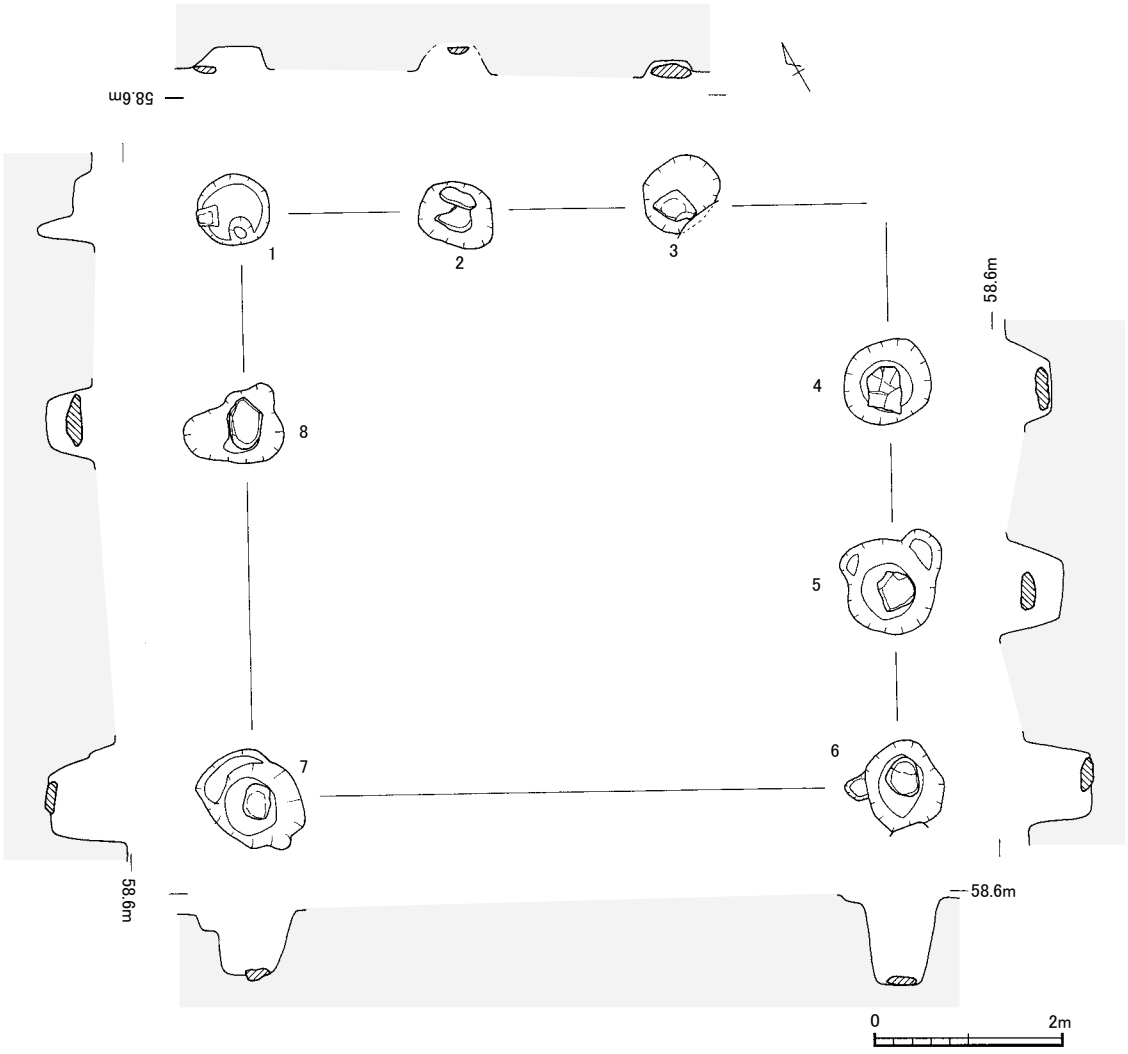


第69図　C地区　掘立柱建物跡７・出土遺物

第15表　C地区　掘立柱建物跡7計測表

主軸方向	方向	柱穴方向	柱間長さ		延長 (cm)
			(cm)	尺=30.2cm	
N−63°−W	桁行	1−2	222	7.35	682
		2−3	216	7.15	
		3−4	244	8.07	
		7−8	228	7.54	684
		8−9	226	7.48	
		9−10	230	7.61	
	梁間	4−5	218	7.21	644
		5−6	217	7.18	
		6−7	209	6.92	
		10−11	200	6.62	640
		11−12	227	7.51	
		12−1	213	7.05	

No.	柱穴			柱			樹種	備考
	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	形状	径(cm)	長さ(cm)		
1	100	79	71	−	−	−	−	礎石
2	135	67	75	−	−	−	−	礎石
3	137	84	80	−	−	−	−	礎石
4	105	91	70	−	−	−	−	礎石
5	80	75	68	−	−	−	−	礎石
6	84	77	82	−	−	−	−	礎石
7	78	70	47	−	−	−	−	礎石
8	81	92	55	−	−	−	−	−
9	79	74	50	−	−	−	−	−
10	92	78	55	−	−	−	−	−
11	83	57	80	−	−	−	−	礎石
12	105	65	65	−	−	−	−	礎石

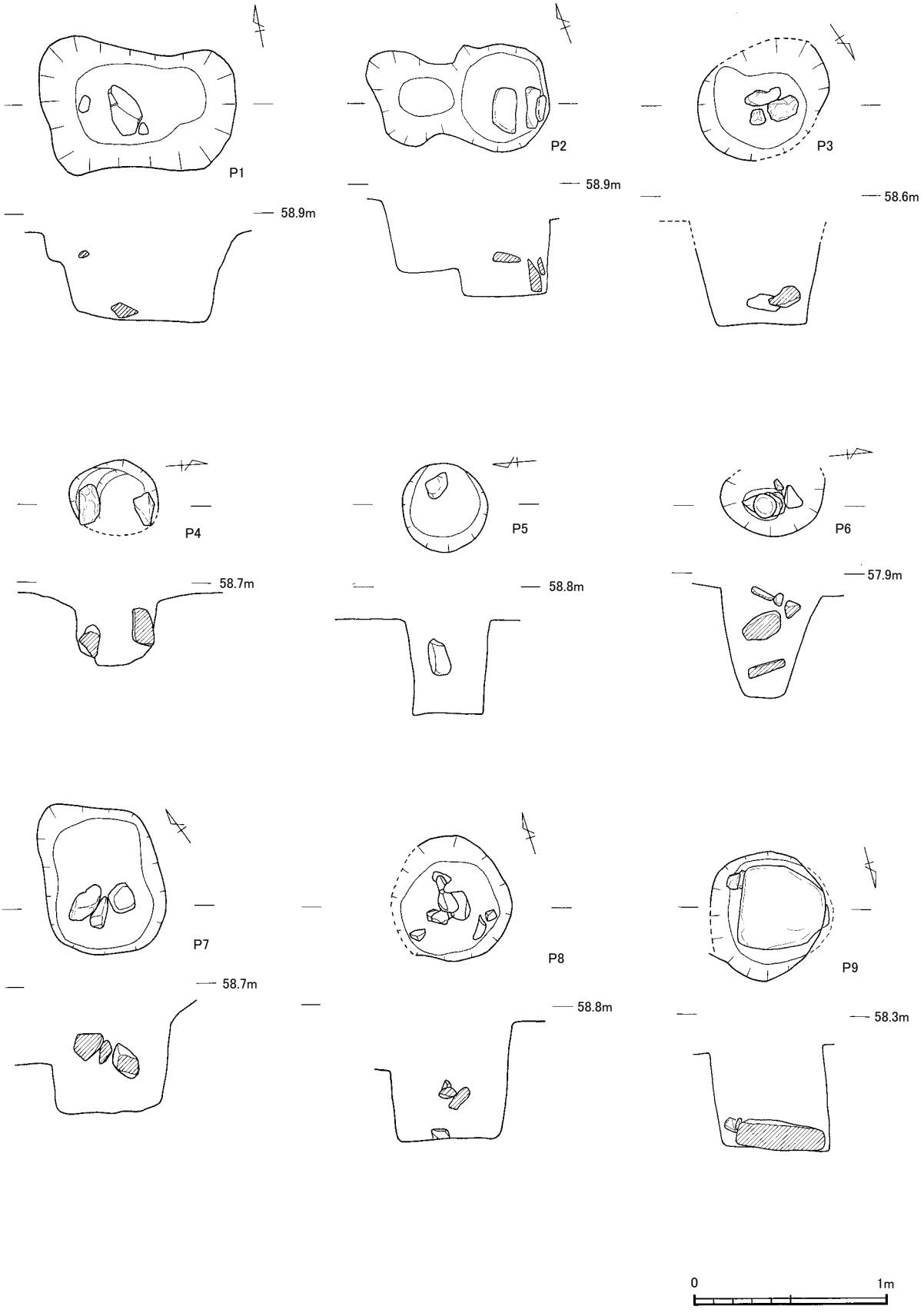


第70図　C地区　掘立柱建物跡８

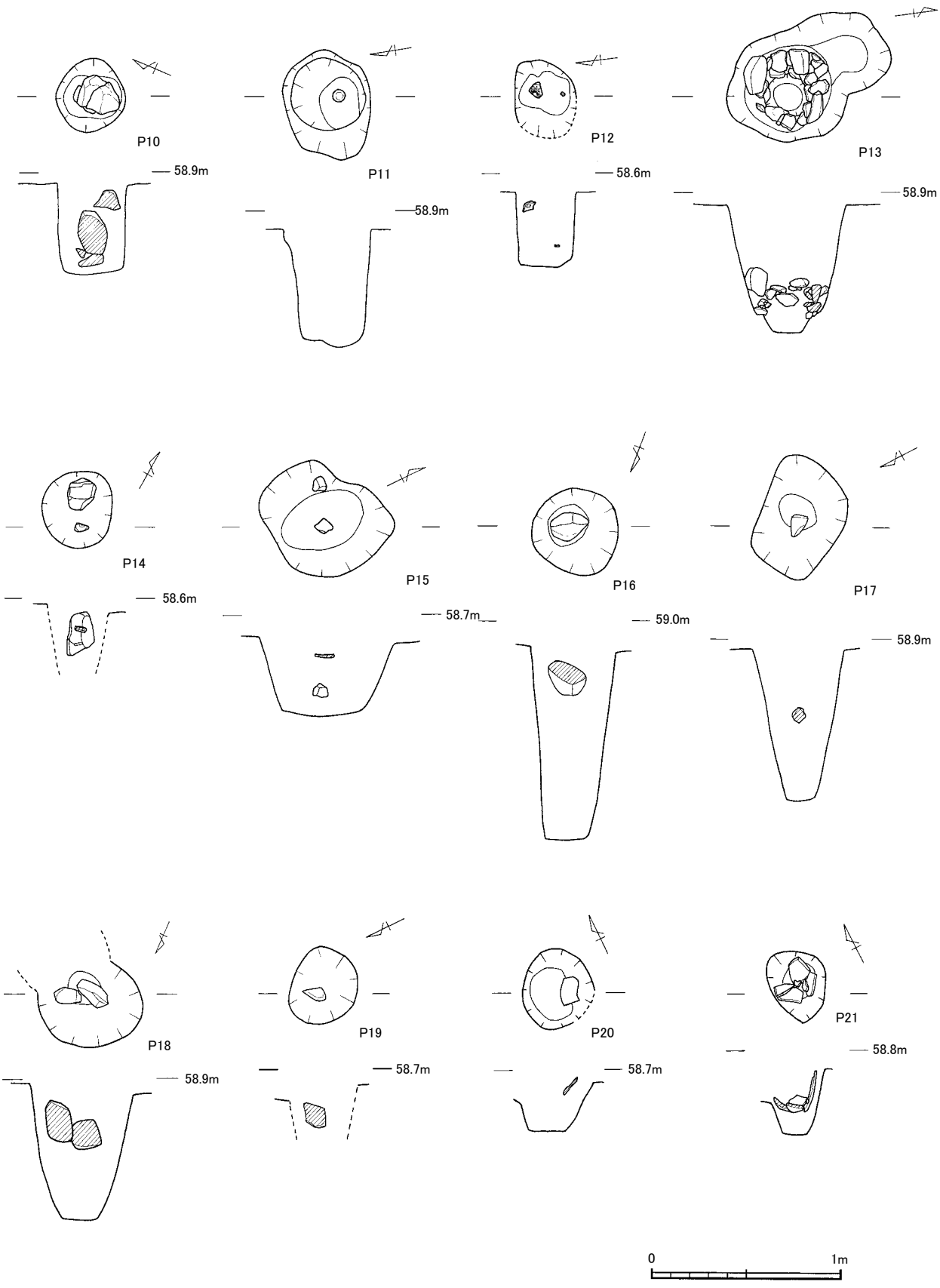
第16表　C地区　掘立柱建物跡8計測表

主軸方向	方向	柱穴方向	柱間長さ		延長 (cm)
			(cm)	尺=30.2cm	
N-60°-W	桁行	1–2	238	7.88	–
		2–3	236	7.81	
		3–	–	–	
		6–7	690	2.28	690
	梁間	–4	–	–	–
		4–5	218	7.21	
		5–6	209	6.92	
		7–8	393	13.01	620
		8–1	227	7.51	

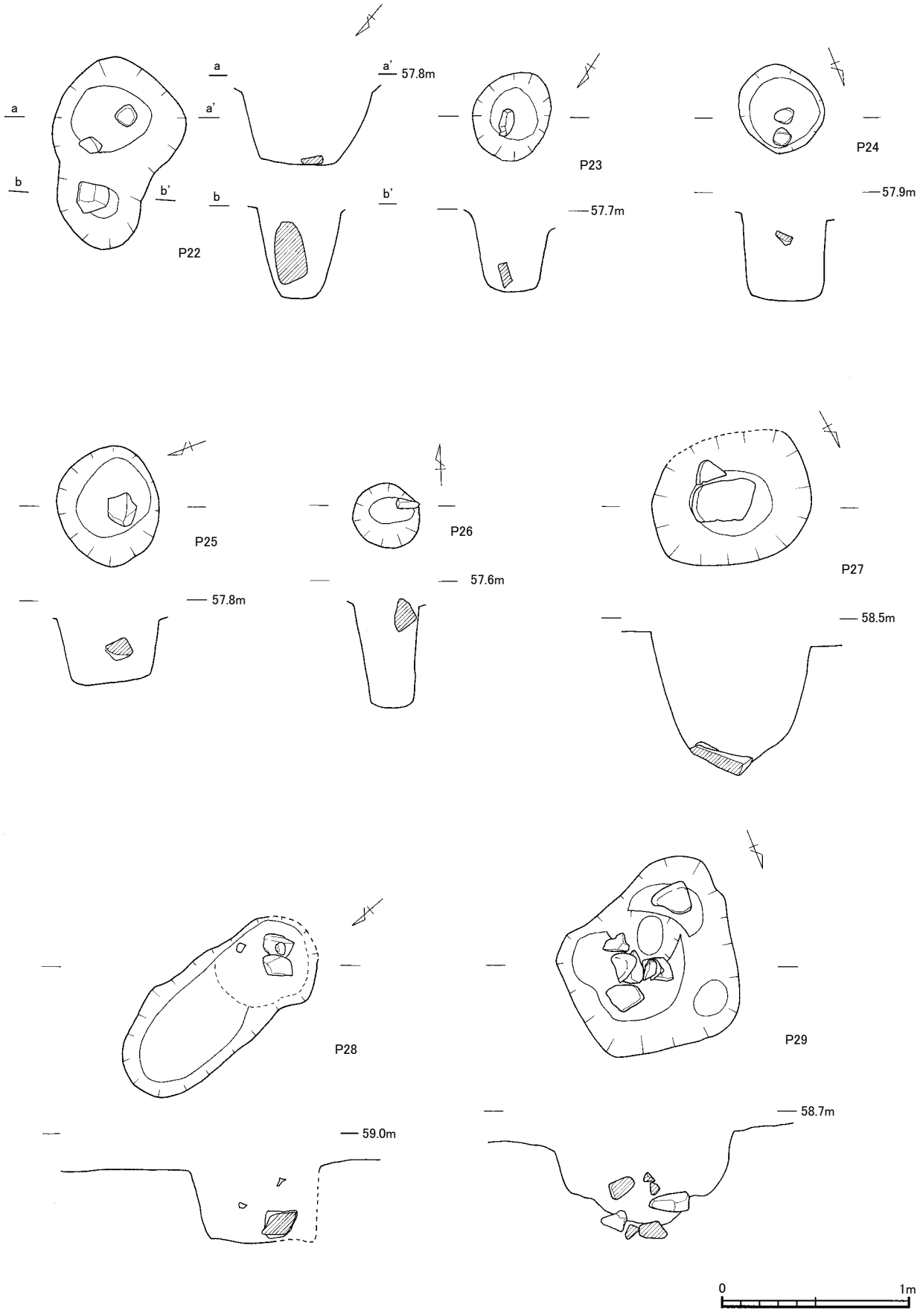
No.	柱穴			柱			樹種	備考
	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	形状	径(cm)	長さ(cm)		
1	80	76	62	–	–	–	–	礎石
2	85	67	40	–	–	–	–	礎石
3	85	68	22	–	–	–	–	礎石
4	100	90	48	–	–	–	–	礎石
5	110	93	68	–	–	–	–	礎石
6	96	83	94	–	–	–	–	礎石
7	116	93	76	–	–	–	–	礎石
8	106	80	51	–	–	–	–	礎石



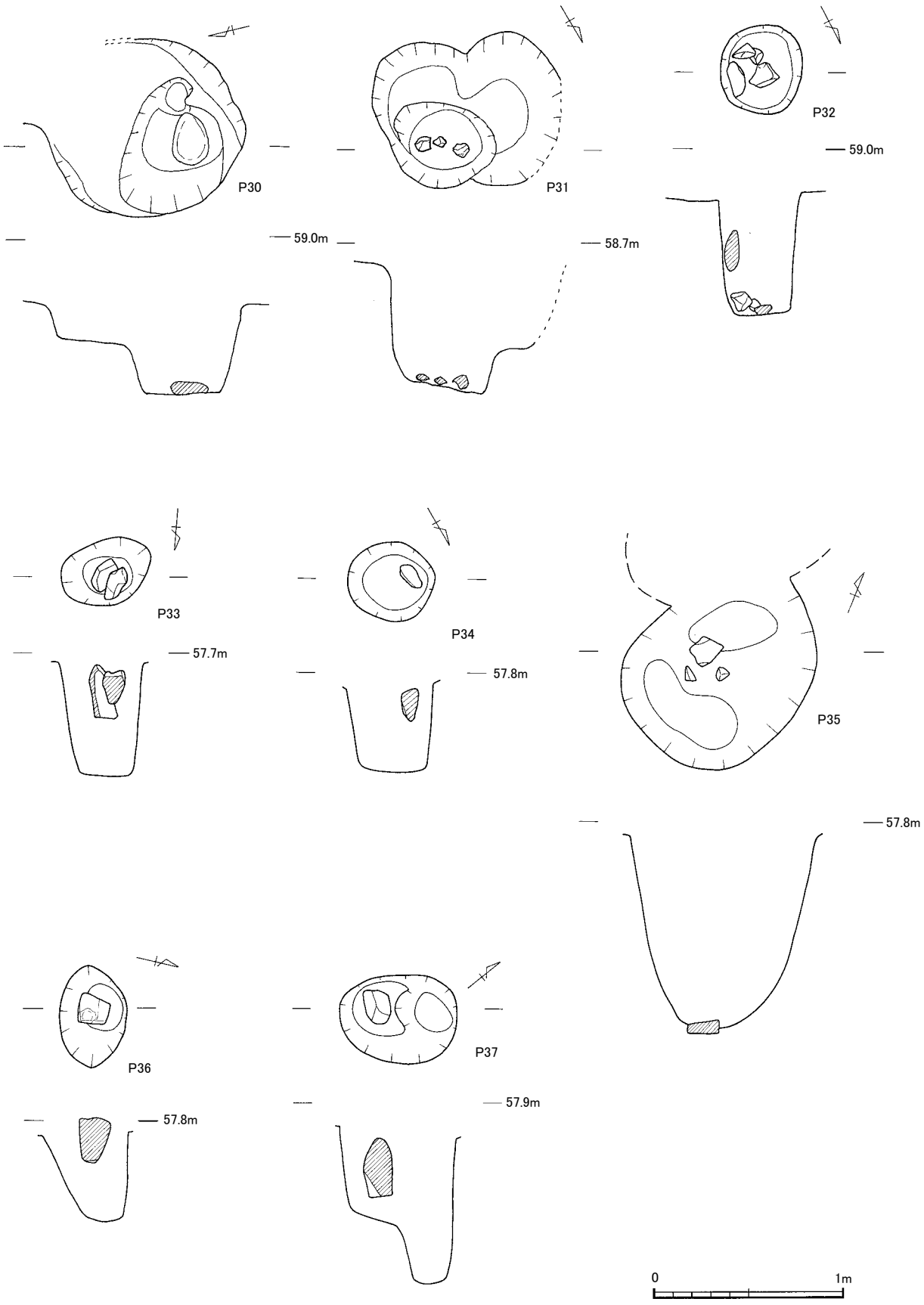
第71図　C地区　ピット(1)



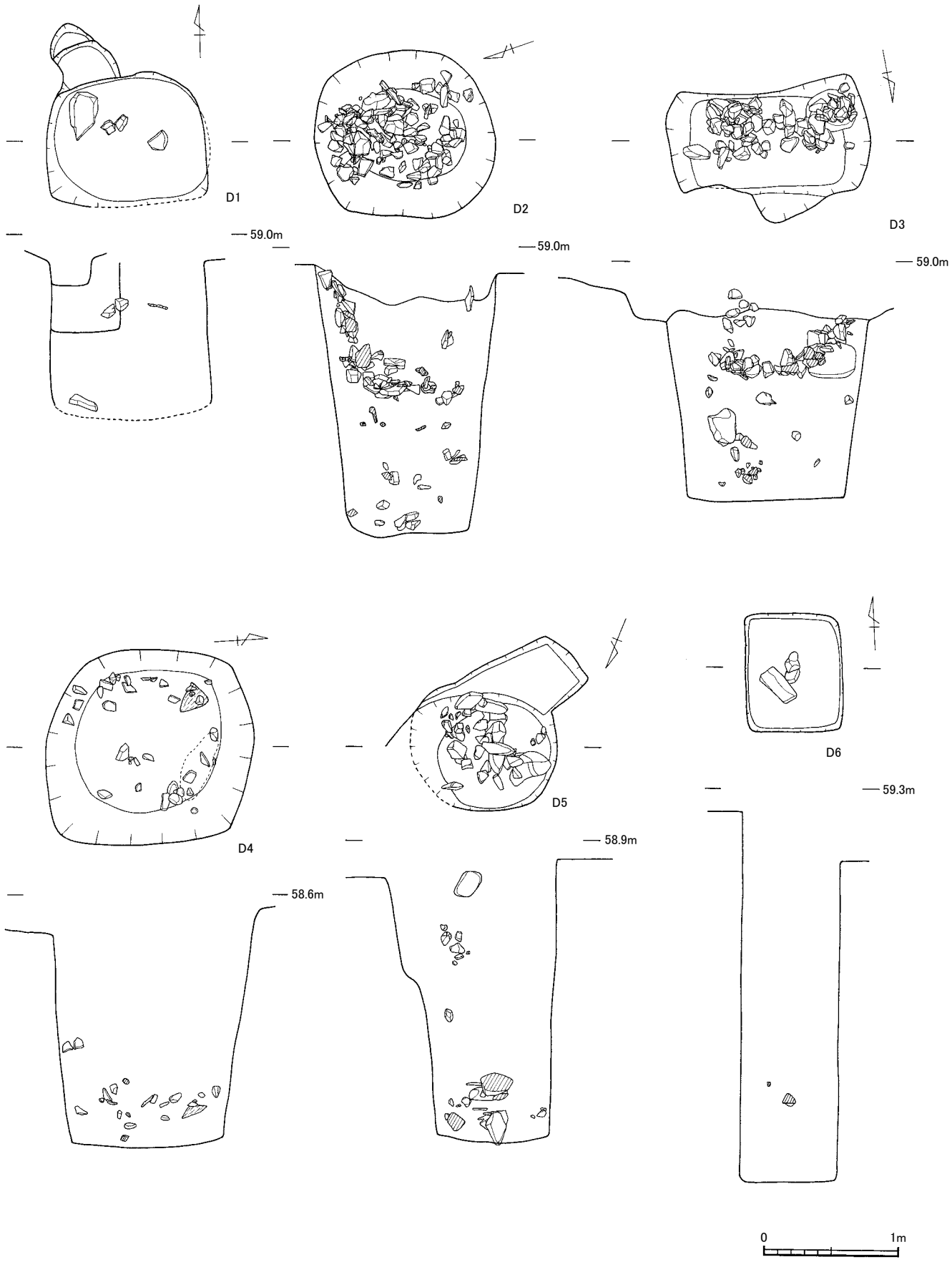
第72図　C地区　ピット(2)



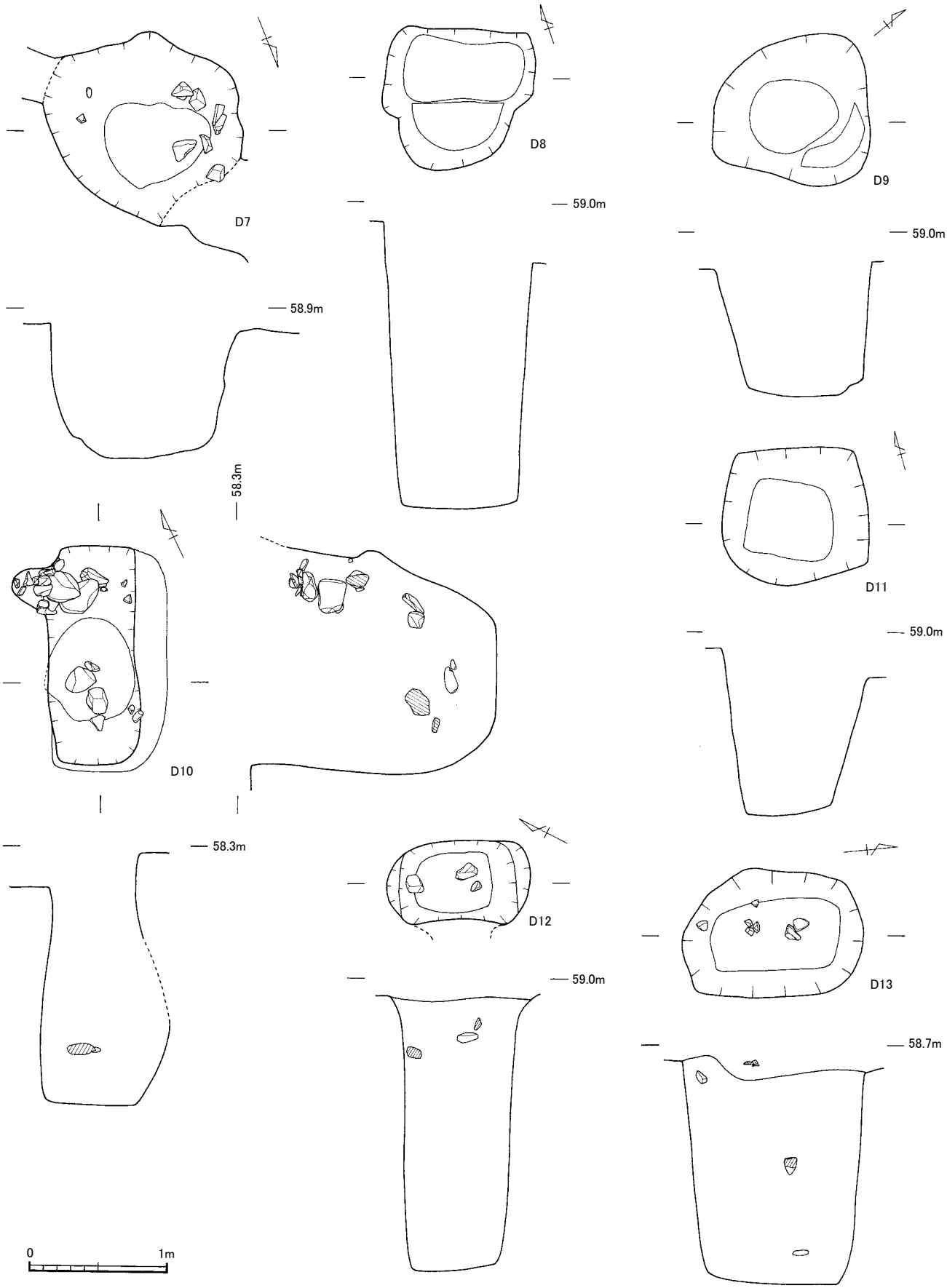
第73図　C地区　ピット(3)



第74図　C地区　ピット(4)



第75図　C地区　土坑(1)


D7
58.9m
D8
59.0m
D9
59.0m
58.3m
D10
58.3m
D11
59.0m
D12
59.0m
D13
58.7m
0
1m

第76図　C地区　土坑(2)

青銅製品

301・302は，ピットから出土した。青銅製品で薄い板状の小破片である。

古 銭

303～306はピットから出土した。303は「洪武通寶」で背面に「一銭」の文字が読み取れる。306は「洪武通寶」の破片，304・305は銭種の判別は不明。

（カ）土坑（第75・76図）

土坑は曲輪縁辺の東側，南側の土塁縁に沿って13基が検出された。

平面形は円形（楕円形），方形（略方形）の２種類がある。土坑はⅢ層以下，砂層，シラス層を掘り込んだ素堀りで，側面はほぼ垂直に，底面は水平に仕上げている。

円形土坑には２号の直径約1.24m，深さ２mのほか，４・５・９・11号がある。方形土坑は６号の縦90㎝，横72㎝，深さ2.74mのほか３・８・10・11・12・13号の大形土坑である。土坑１・４・13は掘立柱建物跡と重複している。

土坑内出土遺物（第80図）

土坑覆土内には８・９・11号を除いて，礫や小石，土師器片，備前焼の壺が出土している。特に２～５号には多い。廃棄時の混入と思われる。

307は口径6.4㎝，底径4.2㎝の糸切り底の灯明皿である。308・309は備前産と思われる壺である。308は口縁部が魂縁状を呈する。309は肩部に７条一単位の横筋が巡る。310は長さ5.3㎝の管状土錘である。

（キ） 炉 跡（第77～79図）

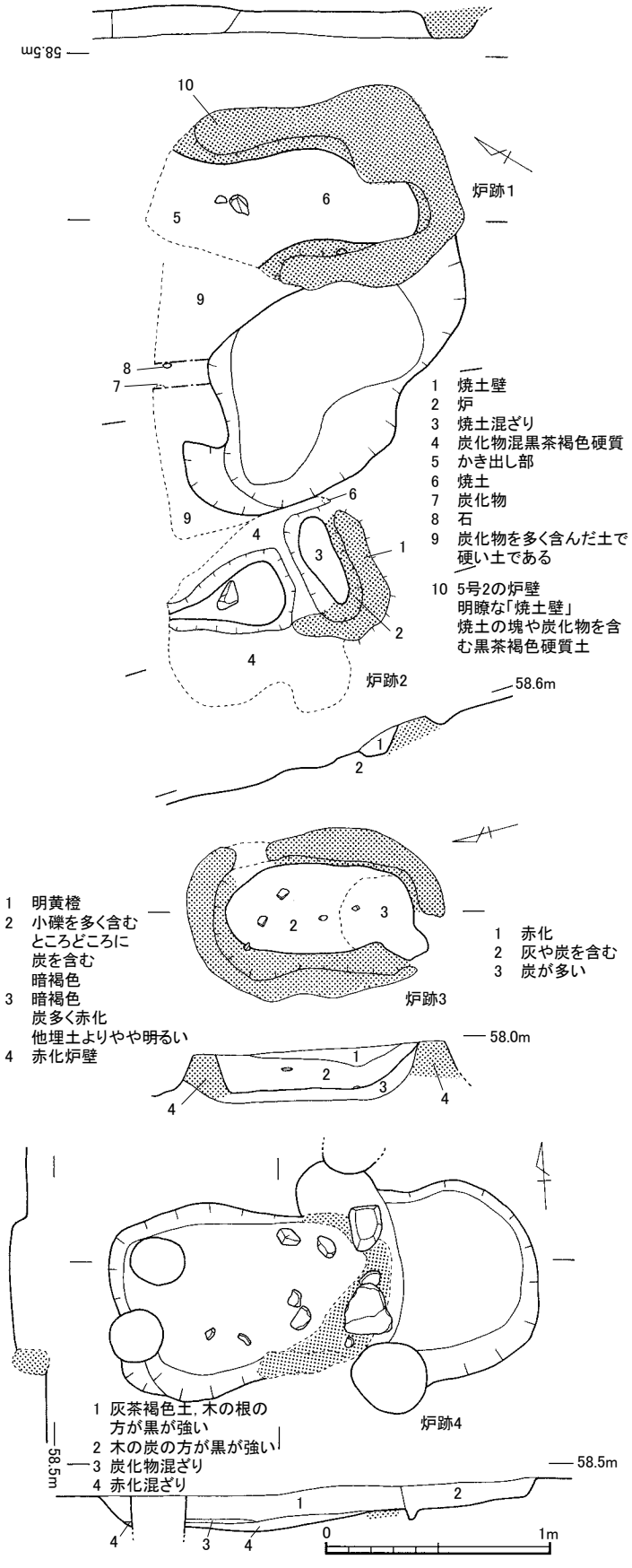
炉跡は，曲輪のほぼ中央（M～O－13～15区）以北に11基を検出した。掘立柱建物跡群の北側に位置する。主軸の方向は一定していない。

本来，炉本体は馬蹄形状を呈し，焚き口部や灰などの掻き出し部を伴うものであるが，ほとんどの炉の上部は失われ全体の形状は定かでない。炉の形状は不鮮明であるが，焼土や，被熱されて赤化した炉壁や粘土塊の痕跡がみられるものは炉跡とした。炉底は浅い掘り込みを伴う。

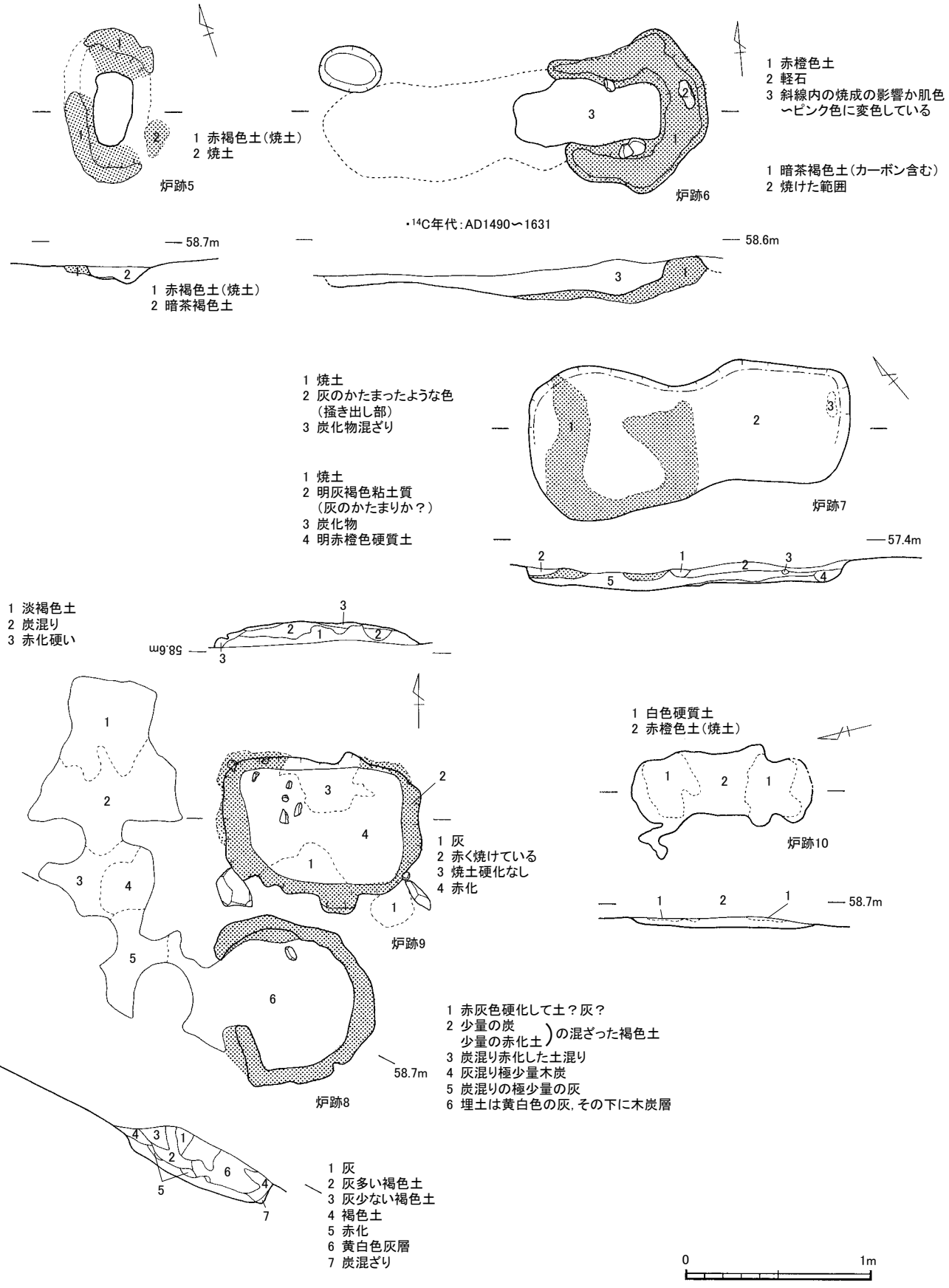
炉跡６号はU字状の径30㎝の炉体部が残存する。^{14}C年代測定値は，AD1.558～1.603が出ている。炉跡11は，N－15区から検出された。炉体は直径80㎝で馬蹄形を呈す。検出面での深さは約20㎝，焚き口には砂岩の円礫・角礫を立て，被熱して赤化した炉壁は粘土塊もみられた。床面は赤化し，木炭層がみられる。

掻き出し部は方形で，長さは約1.6㎝，幅約１m，深さ約30㎝で，炭や灰などが混在している。日常的な竈の可能性がある。

炉跡の位置，分布から，曲輪における居住地は南側，厨房は北側と，すみ分けしている。



第77図　C地区　炉跡(1)


1 赤褐色土(焼土)
2 焼土
炉跡5
1 赤橙色土
2 軽石
3 斜線内の焼成の影響か肌色～ピンク色に変色している
1 暗茶褐色土(カーボン含む)
2 焼けた範囲
炉跡6
・14C年代:AD1490～1631
58.7m
1 赤褐色土(焼土)
2 暗茶褐色土
58.6m
1 焼土
2 灰のかたまったような色(掻き出し部)
3 炭化物混ざり
1 焼土
2 明灰褐色粘土質(灰のかたまりか？)
3 炭化物
4 明赤橙色硬質土
炉跡7
57.4m
1 淡褐色土
2 炭混り
3 赤化硬い
58.6m
1 灰
2 赤く焼けている
3 焼土硬化なし
4 赤化
炉跡9
1 白色硬質土
2 赤橙色土(焼土)
炉跡10
58.7m
58.7m
1 赤灰色硬化して土？灰？
2 少量の炭 少量の赤化土 の混ざった褐色土
3 炭混り赤化した土混り
4 灰混り極少量木炭
5 炭混りの極少量の灰
6 埋土は黄白色の灰,その下に木炭層
炉跡8
1 灰
2 灰多い褐色土
3 灰少ない褐色土
4 褐色土
5 赤化
6 黄白色灰層
7 炭混ざり
0
1m

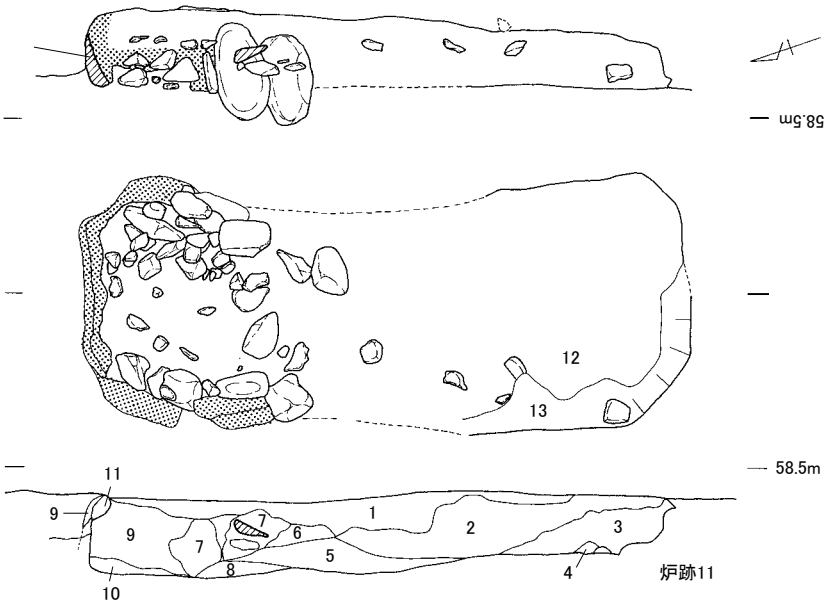
第78図　C地区　炉跡(2)

第17表　C地区ピット，土坑，炉跡計測表

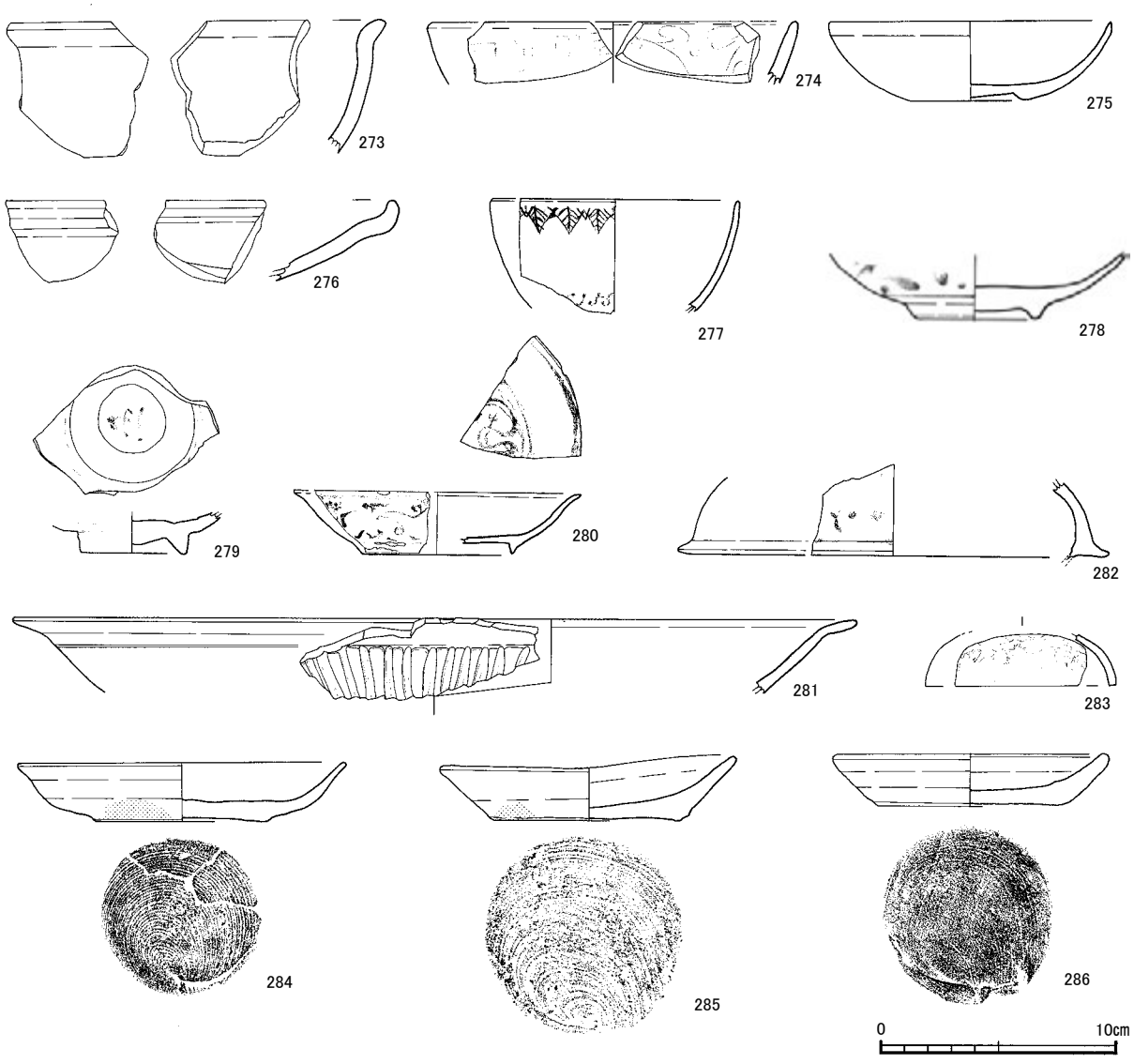
挿図番号	掲載番号	ピット			備考
		長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	
71	1	102	59	47	2段掘り
	2	90	36	45	2段掘り
	3	65	56＋	51＋	－
	4	47	38＋	38	2段掘り
	5	45	45	48	－
	6	53	35＋	57	285
	7	75	62	53	－
	8	66	63＋	60	－
	9	68	63	54	－
72	10	38	38	48	273
	11	54	45	62	2段掘り
	12	41＋	32	39	－
	13	83	60	68	2段掘り
	14	41	33	38＋	－
	15	68	50	42	－
	16	45	45	102	－
	17	66	47	80	－
	18	56	45＋	72	－
	19	41	36	27＋	－
	20	42	38	26	－
	21	38	27	32	－
73	22	102	45	48	－
	23	47	41	42	－
	24	48	45	45	－
	25	65	54	35	－
	26	35	35	57	－
	27	86	71＋	72	－
	28	69	48	39	－
	29	102	98	45	2段掘り
74	30	102	93	48	2段掘り
	31	83＋	81	84	2段掘り
	32	48	42	63	－
	33	45	35	60	－
	34	45	42	48	－
	35	98＋	98	104	－
	36	54	35	47	286
	37	62	45	78	2段掘り
	38	34	32	47	炭化物出土（分析委託№26，AD1,453～1,617）

挿図番号	掲載番号	土坑				備考
		長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	形状	
75	1	98+	118	120＋	四方形	－
	2	124	136	200	円形	－
	3	98	150	142	方形	－
	4	144	156	170	円形	309・310
	5	113	110	210	円形	－
	6	90	72	274	方形	－
76	7	140	140	96	－	308
	8	101	110	220	方形	－
	9	110	114	96	円形	－
	10	166	87	183	方形	－
	11	100	107	120	円形	－
	12	56	106	196	四方形	－
	13	95	134	154	方形	－

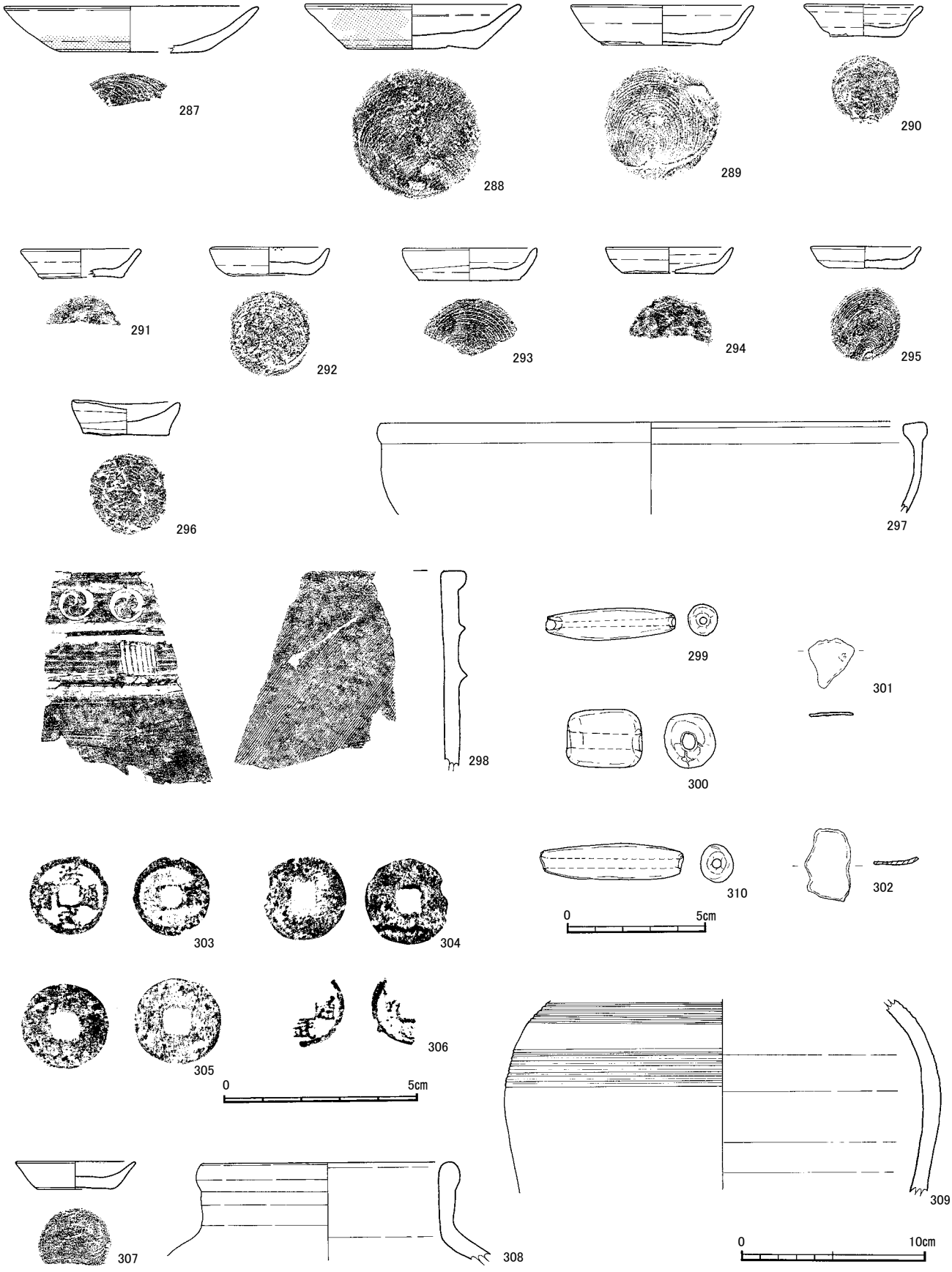
挿図番号	掲載番号	炉跡					備考
		長さ(cm)	巾(cm)	深さ(cm)	全長	形状	
77	1	85	40	11	140+	不定形	炉壁残存
	2	41	13	－	93	不定形	炉壁残存
	3	90	39	23	－	不定形	炉壁，焼土，炭化物
	4	34	52	15	126	方形	炉壁，焼土，炭化物
78	5	21	39	9	－	不定形	焼土
	6	53	35	23	205	不定形	焼土，炭化物
	7	42	40	10	182	不定形	焼土，炭化物
	8	73	68	24	－	不定形	焼土，灰土，炭化物
	9	61	82	12	－	不定形	焼土，灰土
	10	－	－	－	－	－	焼土
79	11	72	50	30	242	不定形	炉壁残存，礫



1 炭ごく少量の褐色土
2 炭の細かい粒で黒褐色
褐色土のブロック有
3 灰多く黒色
4 淡い黒色
5 上よりやや暗い褐色土，灰ごく少
下部は焼けてやや赤色土をおびて
いる部分もある
6 やや明るい褐色土
7 灰白色粘質土，ブロック多い
8 やや赤化
9 褐色土
10 炭多い
11 赤化
12 炭混ざり褐色土
13 炭混ざり



第79図　C地区　炉跡(3)，ピット出土遺物



第80図　C地区　ピット，土坑出土遺物

エ　出土遺物（第81～84図）

青磁

311～325は龍泉窯系青磁である。311～317は椀である。311は外面に剣先蓮弁文が描かれるが，細線と剣頭が蓮弁の単位を意識せずに描がれたものである。312は口縁端部が外反し，丸みを帯びるものである。313は口縁端部が丸くつくられるものである。314は口縁部外面にやや崩れた雷文帯が描かれる。315は底部が厚手のものである。高台内底面は露胎する。316は外面に片彫りによる蓮弁文が描かれるものである。蓮弁の中央に稜はみられない。317は外面に細線による蓮弁文が描かれるものである。318は底部で，見込みは円状に釉剥ぎされる。高台内面と高台内底面は露胎する。319・320は稜花皿である。321は小皿と思われる。内面には細線による文様，見込みには印刻が施される。高台内底面は露胎する。322は盤の底部で，高台内底面は露胎する。323は瓶の頸部と思われる。324は香炉である。獅子頭と思われる足を有する。内面と畳付から高台内底面は露胎する。325は瓶の底部である。畳付は露胎する。

白磁

326は底部である。見込みは円状に釉剥ぎで，腰部と高台および高台内底部は露胎である。327は体部から口縁部にかけて大きく端反る形状を呈し，釉調が淡緑色を帯びる白磁の皿である。見込みは輪状に釉剥ぎされ，外面は腰部以下高台内底面まで露胎する。

青花

328・329・331は景徳鎮窯系の青花と思われるものである。328・329は外面腰部に芭蕉葉文が描かれる。331は腰部が張る形状を呈する。畳付と高台内面の一部が露胎する。330は漳洲窯系の青花碗である。外面には芭蕉葉文と波頭文，見込みに花文が描かれる。畳付には籾殻が付着する。332は漳洲窯系の皿で，口縁部が折れ縁を呈する。外面腰部に籾殻が熔着し，高台内底面は露胎する。333は皿で見込みに玉取獅子文を描く。334は肥前磁器の染付で，仏飯器である。335は景徳鎮窯系青花の小坏である。底部径2.6㎝。

陶器

336は白色陶胎の小坏である。削り出しの低い底部で腰部で屈曲する。白化粧土がかけられ，鉄絵が描かれる。瀬戸焼・志野焼か。346は口径9.2㎝，やや内傾く直行の口縁部で口唇部は丸味を帯びる。頚部の３か所に貼り付けの耳を持つ。外面に褐釉がかかる。中国南部産の輸入陶器の壺である。

土師器坏・皿

338～340は器高が３㎝以上のもので坏とした。いずれも糸切り底である。345は三脚付きの坏である。口径13㎝，底径９㎝，高さ3.6㎝。底部に三脚が付く。

337 ・341～344は小皿である。337は口縁部が開く。341～344は口径が７㎝前後の小型の皿である。

陶器

350は肥前陶器の甕と思われる。内外面に鉄釉がかけられる。352・353は薩摩焼苗代川系の資料である。352は釜で，薩摩で山茶家と称されるものである。353は土瓶である。薩摩土瓶は，底部に3足の脚を有するものが一般的であるが，この資料にはみられない。

カムィヤキ

347はカムィヤキの壺の頸部である。内面は轆轤痕，外面は格子の叩き痕がある。

坩堝

348・349は坩堝で，口唇部には浅い注口が見られる。

焙 烙

351は土師質土器の焙烙と思われる。内外面に煤が付着する。

羽口

354・355は羽口である。354の断面は四角形を呈す。

土 錘

356～364は両端が細く，365～367はやや径が太めで長さが短い，368～370は玉状を呈する，三つのタイプの土錘である。

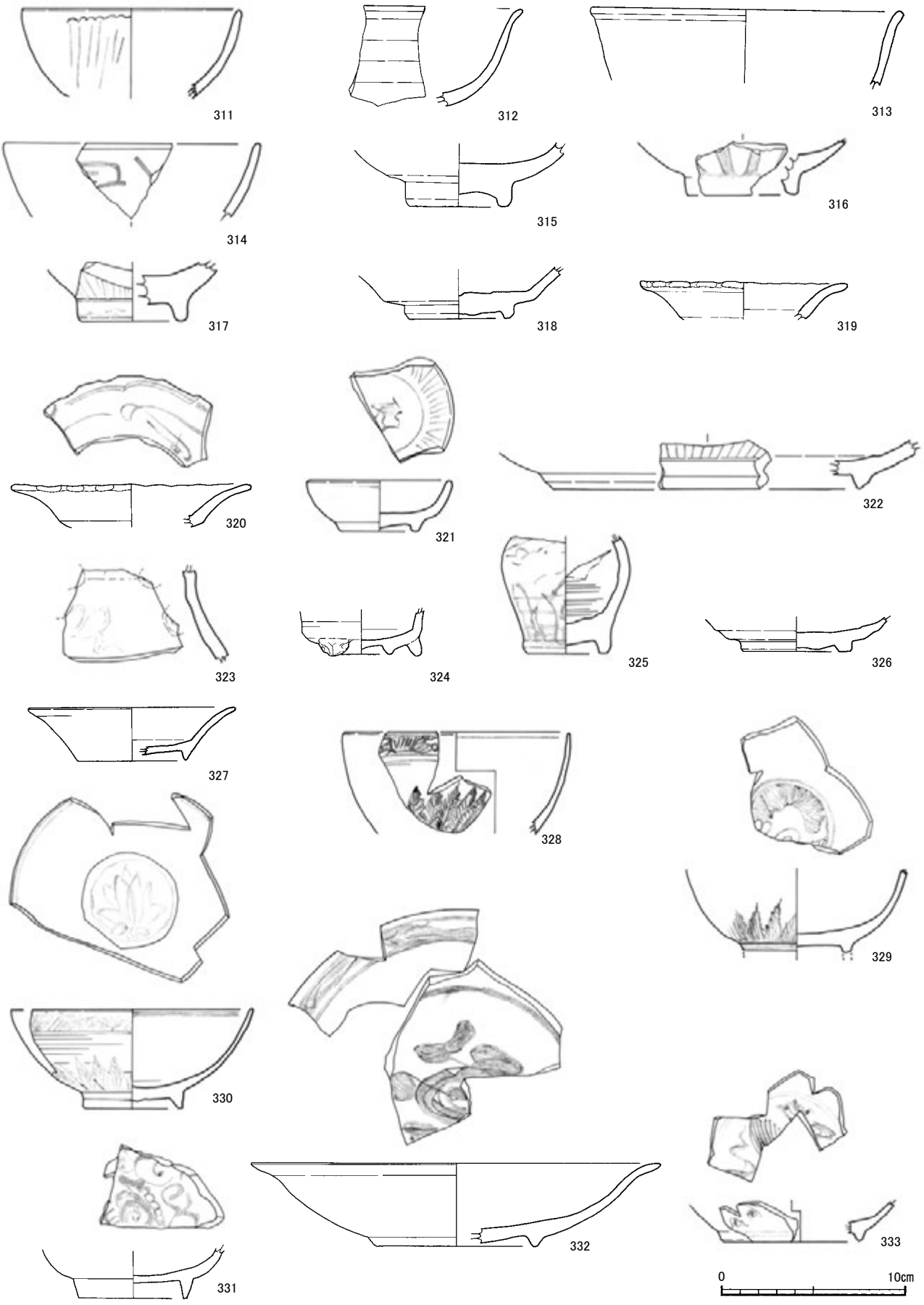
石製品

371は鉄石英で,下側縁部を繰り返し使用した打撃痕が観察できる。372は石英の角礫を利用し,作り出された側縁部のほぼすべてに打撃痕が観察される。373はチャートで，角礫を打撃加工して大きさを整え，鋭利な稜線を作出して使用したものと推測される。374は粘板岩を加工した硯の破損品である。海の部分が欠損している。375は頁岩製の垂飾品と推測される。中心部分に両面から穿孔を施し，穿孔を中心とする両面に平行な線溝の加工が施されている。ここでは垂飾品に分類したが，使用目的は不明である。

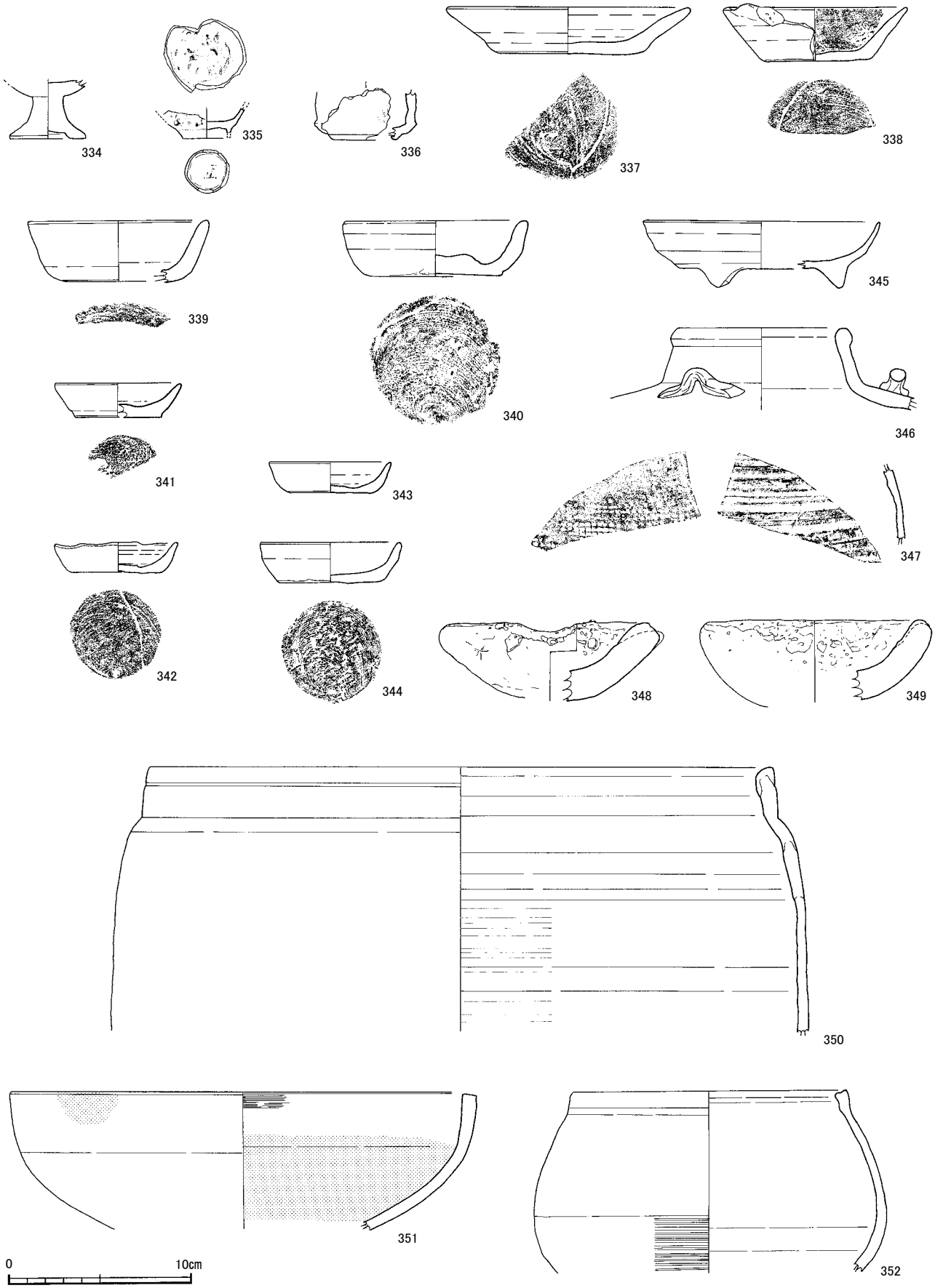
金属製品

376は角釘である。377は鉄鏃で長さ８㎝の柳葉形尖矢と思われる。身に縞を持つ。柄頭は欠損している。

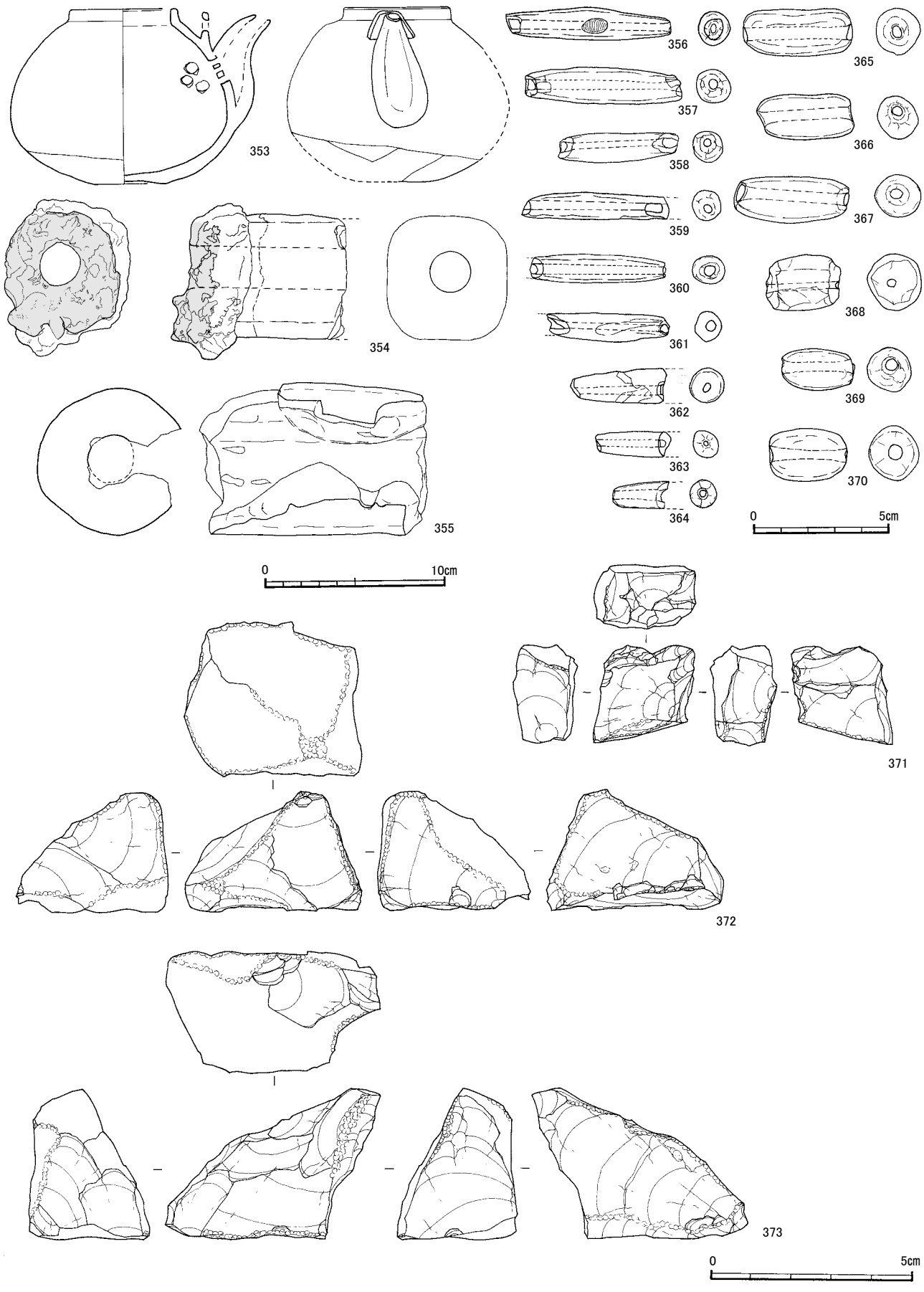
378は鉄製の雁又鏃である。両刃先は欠損しているが鯖尾型の雁又鏃と思われる。379・380は青銅製の煙管の吸い口である。381は方形の鉄製品,8個の小穴と一辺に突起がみられる。 382は鉄製の細い帯状の残片である。383は青銅製の小管で穴が貫通している。384は青銅製で真ん中に小つまみのあるボタン形で内側は空洞になっている。385は青銅製のリングである。



第81図　C地区　出土遺物(1)



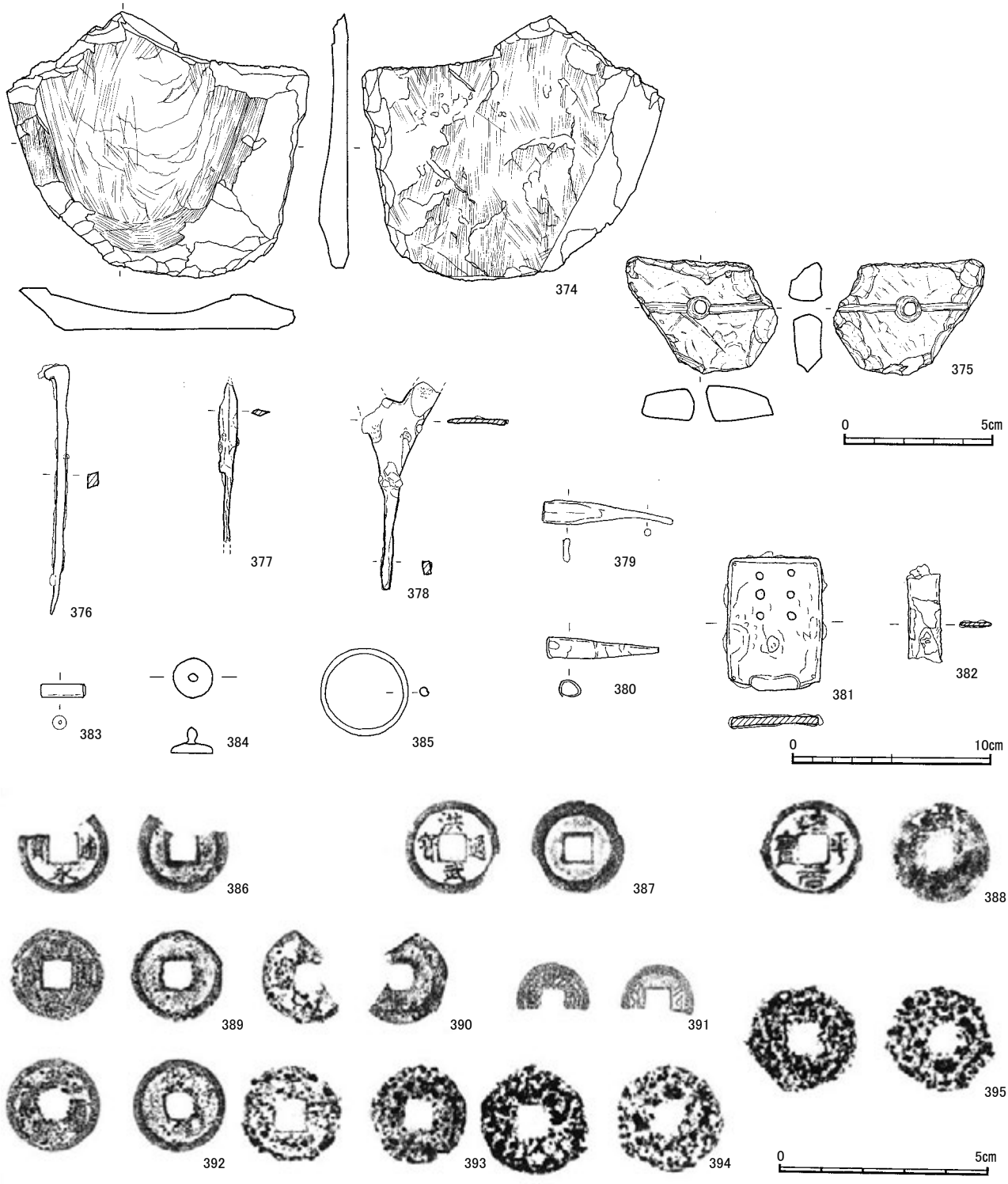
第82図　C地区　出土遺物(2)



第83図　C地区　出土遺物(3)

古銭

386～395は古銭である。386は「寛永通寶」で1636年～1659年に鋳造された古寛永の一種である「ス貝寶」である。387は「洪武通寶」，388は「冶平元寶」で，中国北宋の英宋が即位して元号を「冶平」と改元した後の1064年初鋳の銭である。391は「乾隆通寶」で，清の高宗が即位し，乾隆と改元し，1736年～1795年の間に鋳造されたものである。背文から戸部宝泉局（北京）で鋳造された内郾銭であると思われる。その他は，不明である。



第84図　C地区　出土遺物(4)

（4）　D地区の調査

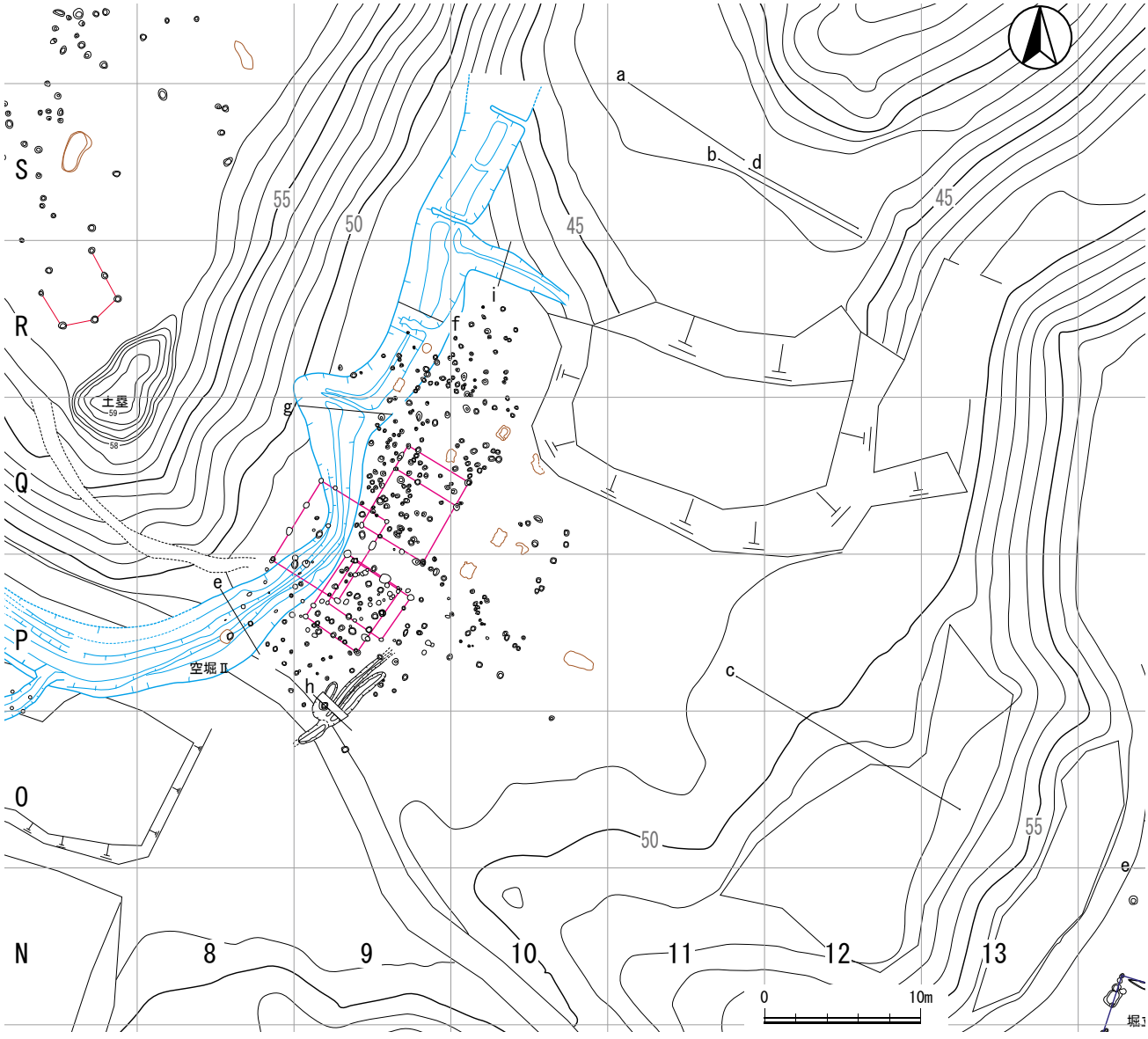
ア　概要

D地区は東側のC地区曲輪Ⅰ（塩の城）,西側のE地区曲輪Ⅱ（中の城）に挟まれた谷部分に位置する。D地区内の標高は南側が約50mで北側にいくにつれて緩やかに下り，F地区側には深い谷が形成されている。地形的にはC地区曲輪ⅠとE地区曲輪Ⅱに挟まれた空堀の様相を呈する。曲輪の標高は約58mなのでD地区との比高差は約8mである。調査前は雑木，雑草で覆われており，表土は厚い部分で約2m程のシラスが堆積していた。発掘調査中は標高が低いため，湧水に見まわれることが多かった。そのため，有機質遺物の残存状態は良好であった。調査はトレンチを設定し，下層確認しながら調査を進めた。D地区では鍵層となるテフラは確認されていない。土層断面a－a'等によると粘質土と砂質土が多数交互に堆積している。

遺構，遺物の主な時期は土器形式や遺構の切り合い関係，^{14}C年代測定等からおおよそ中世末（15～16C）～近世初頭（17C）と想定される。

遺構は空堀，溝状遺構，掘立柱建物跡，柱痕跡，杭列，ピット，炉跡等が検出された。

出土した主な遺物は青磁，白磁，青花，土師器，薩摩焼，陶器，炻器，石製品，金属器，木器である。遺物はD地区内から約2,100点出土し，ここには124点の実測図を掲載した。

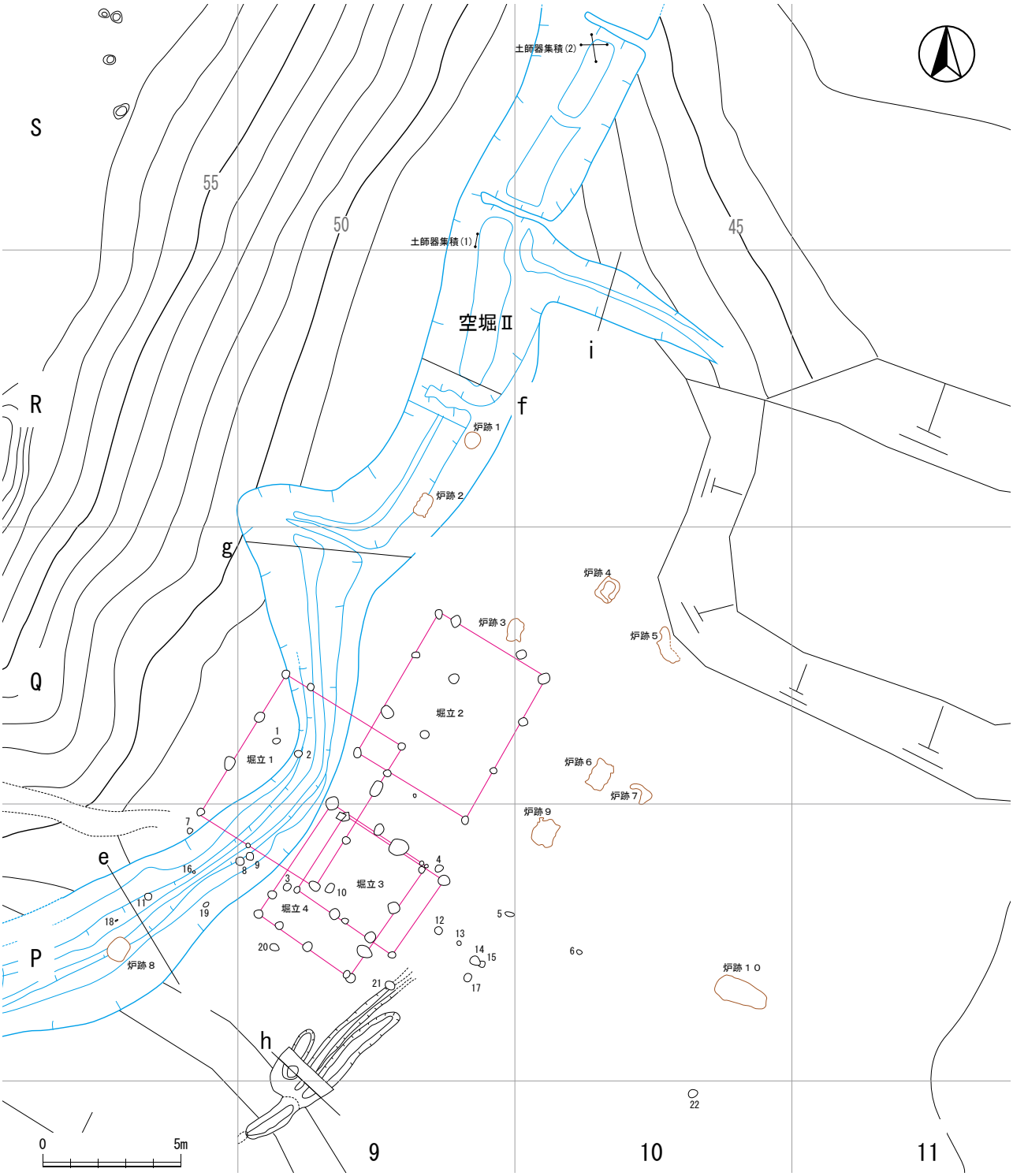


第85図　D地区　全体図

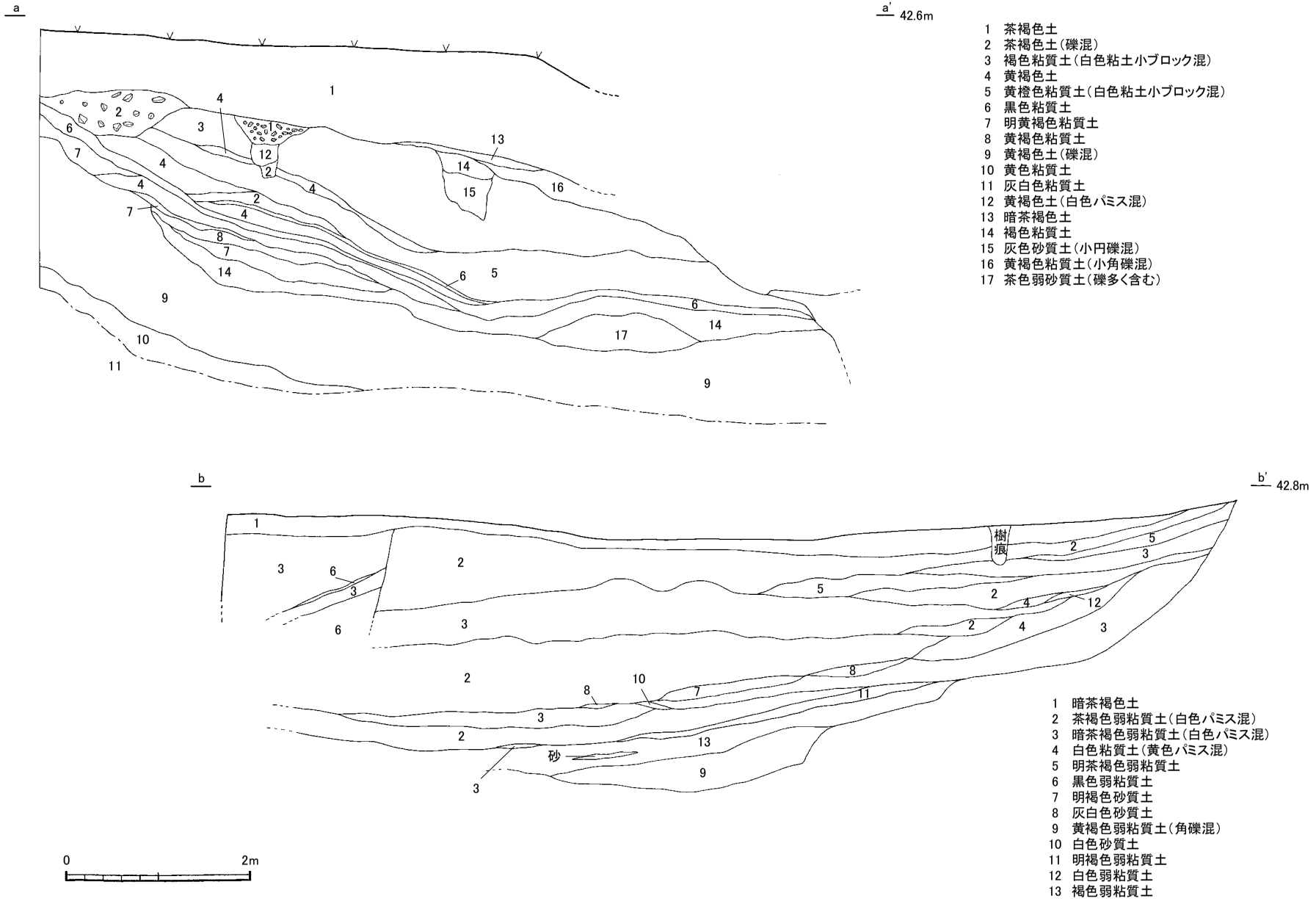
イ　遺構

（ア）空堀Ⅱ（第86図）

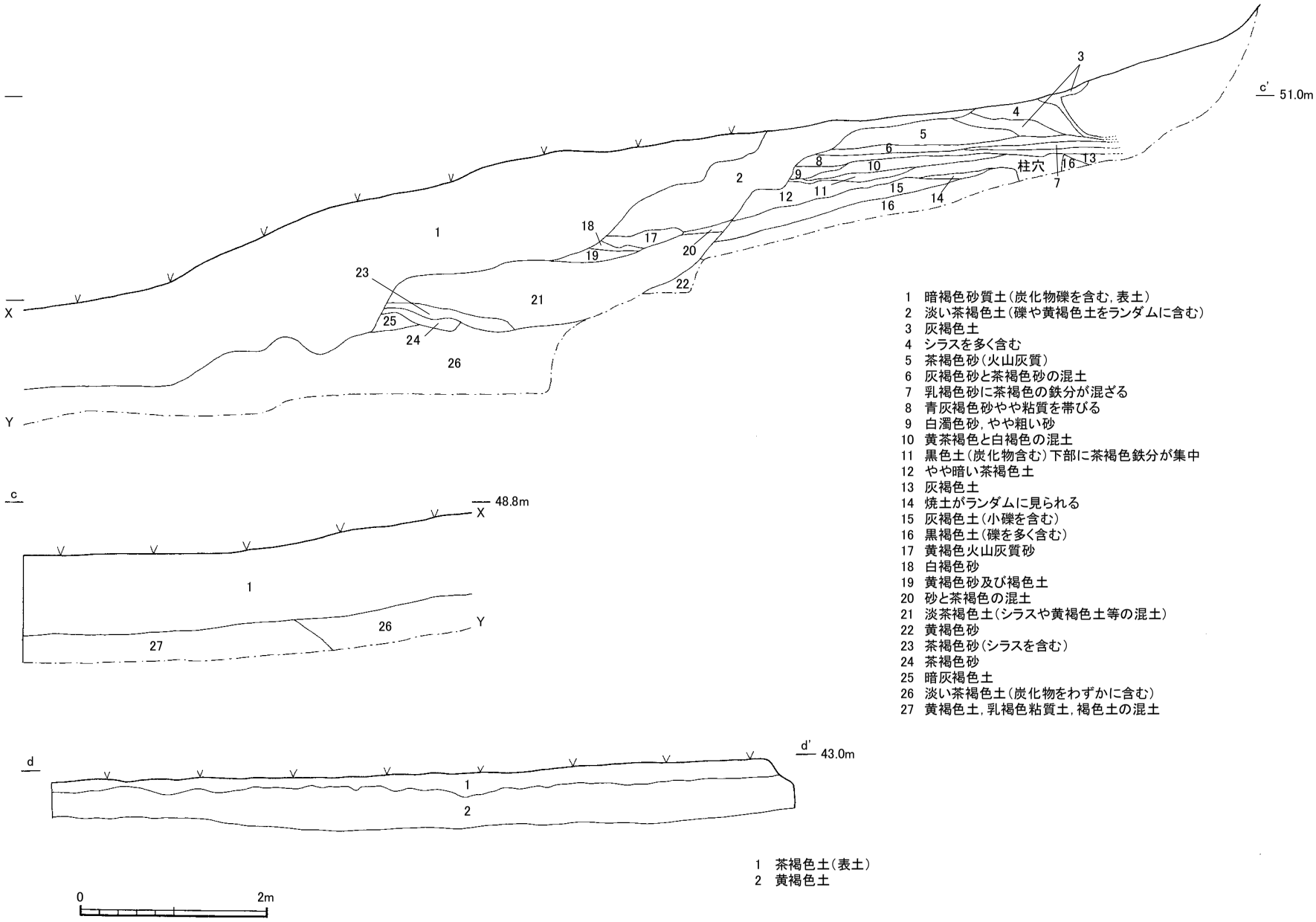
Ｅ地区曲輪Ⅱ（中の城）の裾野を沿うように空堀Ⅱが検出された。空堀Ⅱの一端はＪ地区側からのび，Ｅ地区曲輪Ⅱ（中の城）の裾野を沿うように検出され，そのまま北側Ｆ地区に向かい川へ下る。Ｄ地区での空堀Ⅱの断面形（第89図）は緩いＶ字形（薬研堀）～半円形の形状を呈し，深さは北側の深い所で約２ｍ，浅い地点では約１ｍ程度である。空堀Ⅱは阿多火砕流堆積層下位の礫層を堀りこんで形成されている。



第86図　D地区　遺構配置図



第87図　D地区　土層断面図(1)



1 暗褐色砂質土(炭化物礫を含む, 表土)
2 淡い茶褐色土(礫や黄褐色土をランダムに含む)
3 灰褐色土
4 シラスを多く含む
5 茶褐色砂(火山灰質)
6 灰褐色砂と茶褐色砂の混土
7 乳褐色砂に茶褐色の鉄分が混ざる
8 青灰褐色砂やや粘質を帯びる
9 白濁色砂, やや粗い砂
10 黄茶褐色と白褐色の混土
11 黒色土(炭化物含む)下部に茶褐色鉄分が集中
12 やや暗い茶褐色土
13 灰褐色土
14 焼土がランダムに見られる
15 灰褐色土(小礫を含む)
16 黒褐色土(礫を多く含む)
17 黄褐色火山灰質砂
18 白褐色砂
19 黄褐色砂及び褐色土
20 砂と茶褐色の混土
21 淡茶褐色土(シラスや黄褐色土等の混土)
22 黄褐色砂
23 茶褐色砂(シラスを含む)
24 茶褐色砂
25 暗灰褐色土
26 淡い茶褐色土(炭化物をわずかに含む)
27 黄褐色土, 乳褐色粘質土, 褐色土の混土

1 茶褐色土(表土)
2 黄褐色土

第88図　D地区　土層断面図(2)

空堀Ⅱの断面図（第89図f－f’，g－g’）には砂と粘土の互層となった水成堆積層が認められる。よって堀の人為的な埋め戻しは認められない。堀底面の標高はQ－９区が最も高い。また，Q－９区～S－10区にかけて，空堀Ⅱに仕切りが４か所残されている。この仕切りがあるため，雨水は仕切りの間に溜まることになる。またR－10区で東側に枝分かれした溝状遺構が検出された。溝の幅は約190cm，深さは約120cmで断面形はV字形である（第89図i－i’）。雨水は堀からこの溝へ流れていく。

堀内出土遺物

青磁，白磁，土師器，陶器

396は龍泉窯系青磁椀である。口縁部は外反し，端部は丸くつくられる。397は白磁の椀である。高台内底面には赤色顔料による「三」と思われる文字が書かれる。398～441は土師器の坏である。器高が3㎝以上のもの。外底～体部～口縁部と直線的に移行し，やや外傾する。外底から腰部はヘラ調整で弱い稜線が付く。外底～体部～口縁部へ直線的に移行し，やや外傾する先細の口縁部となる。

412～422は，口径が７～8.4㎝で器高が1.7～2.6㎝の小皿である。底部は糸切りの平底である。体部から口縁部はやや丸く仕上げる。422は口縁端部がわずかに外反する。多くは内外面に煤が付着している。特に403・408・418・419は煤の付着が著しい。底部は糸切りの平底である。

423は備前産の擂鉢である。

（イ）土師器集積

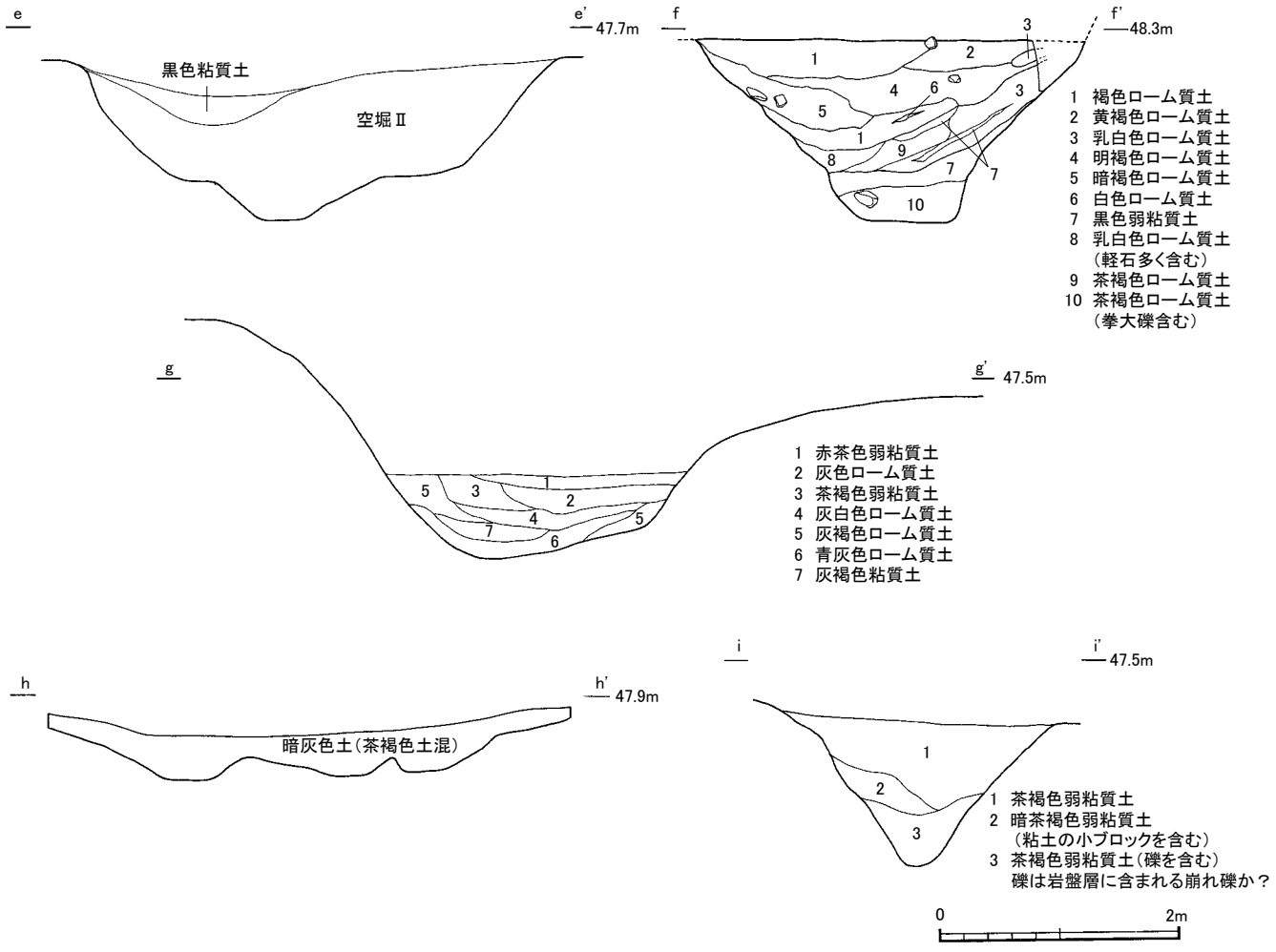
空堀Ⅱ内から土師器集積が２か所が検出された。

土師器集積⑴（第92図）

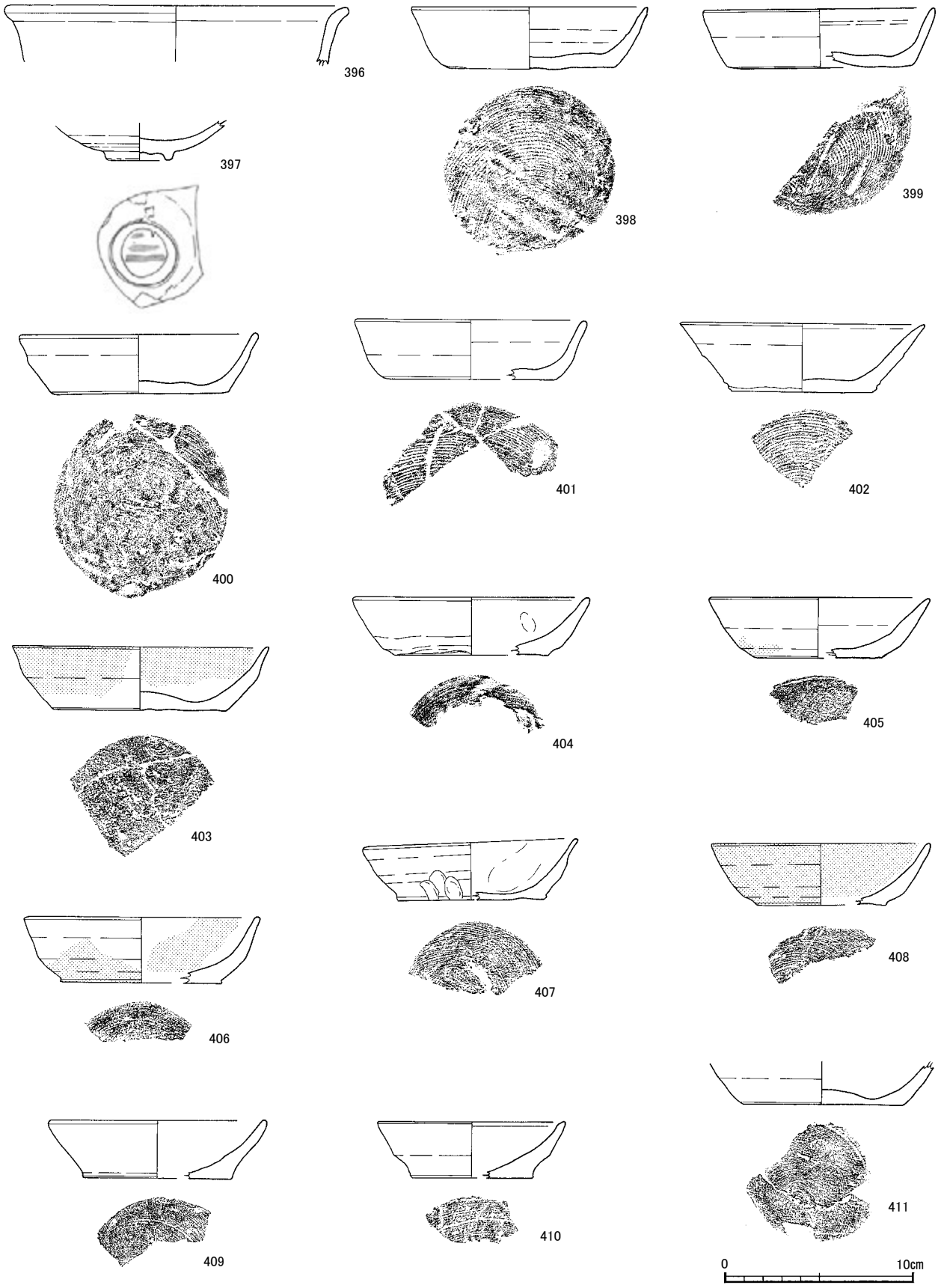
空堀Ⅱ内R－9区において坏一個と小皿３個が集中して出土した。424は坏，426は小皿である。

土師器集積⑵（第93図）

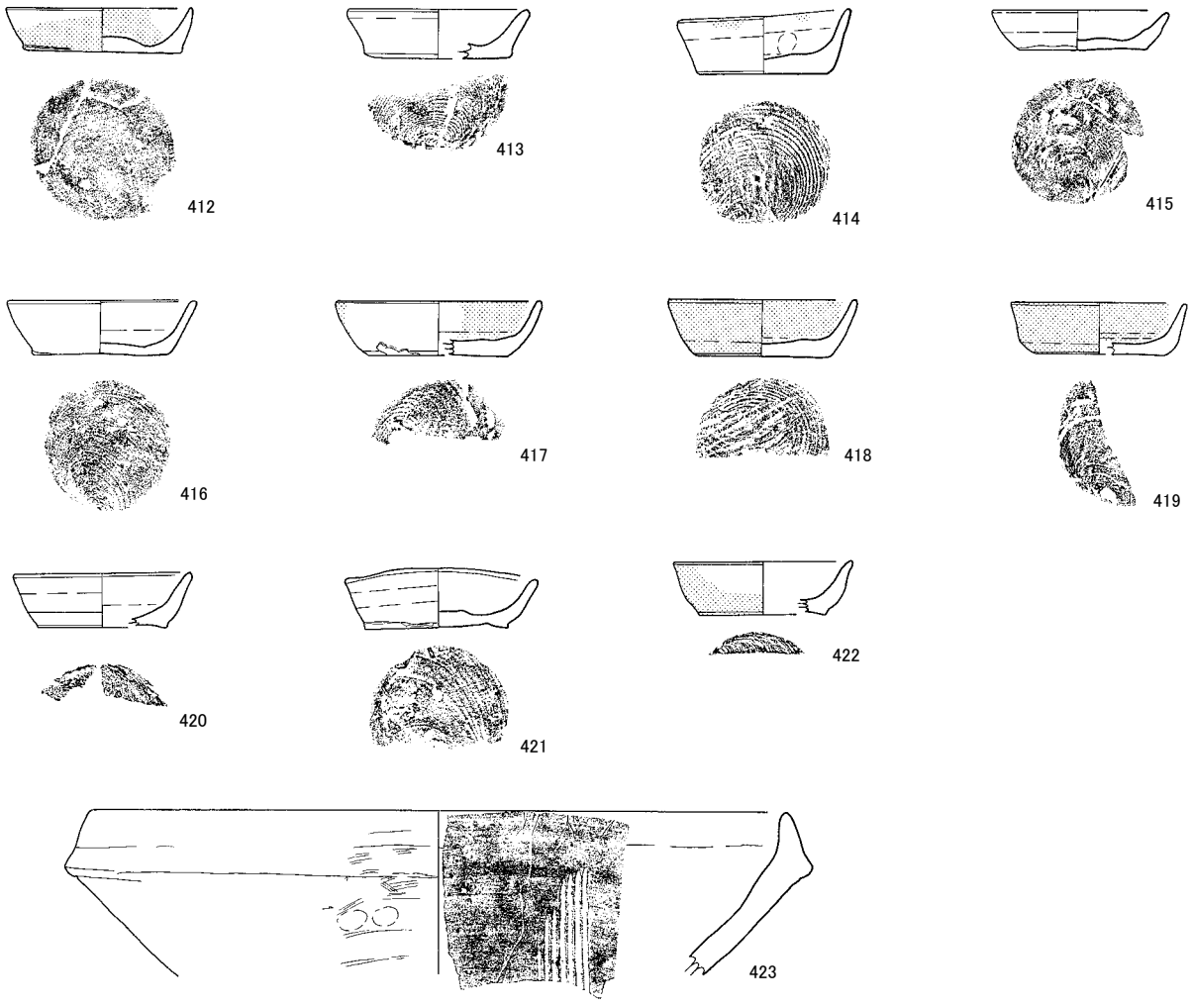
空堀Ⅱ内S－10区において坏の口縁部片４個と底部片11個が集中して出土した（428～442）。428～430は口縁端部がわずかに外反する。431は内弯気味の口縁部となる。底部はすべて糸切り底である。



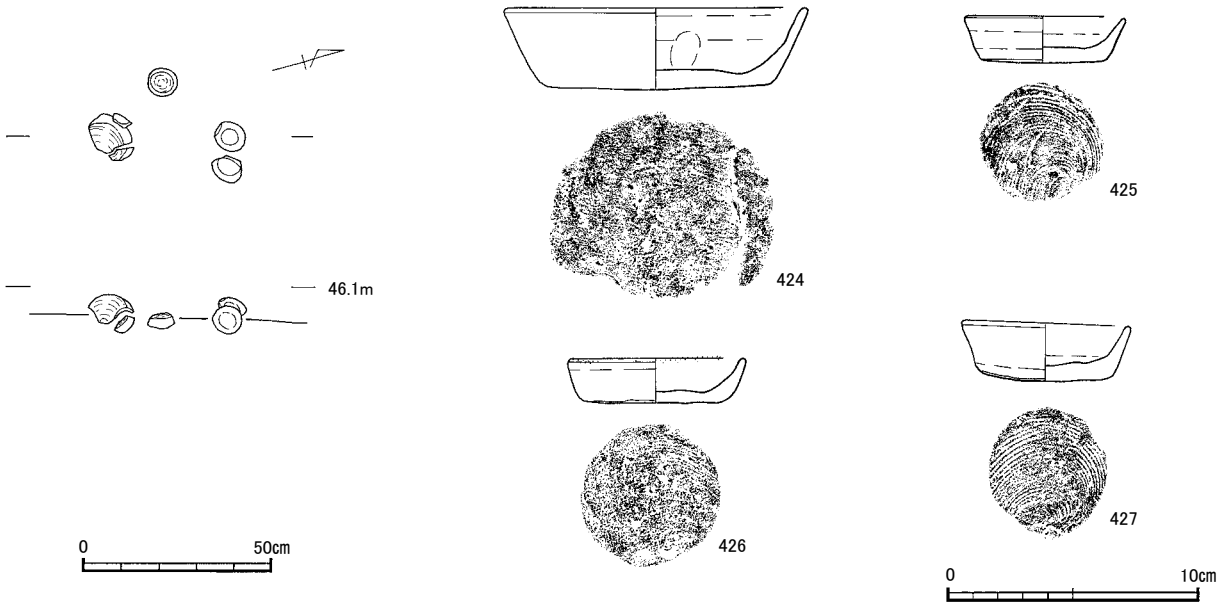
第89図　D地区　空堀Ⅱ，溝状遺構断面図



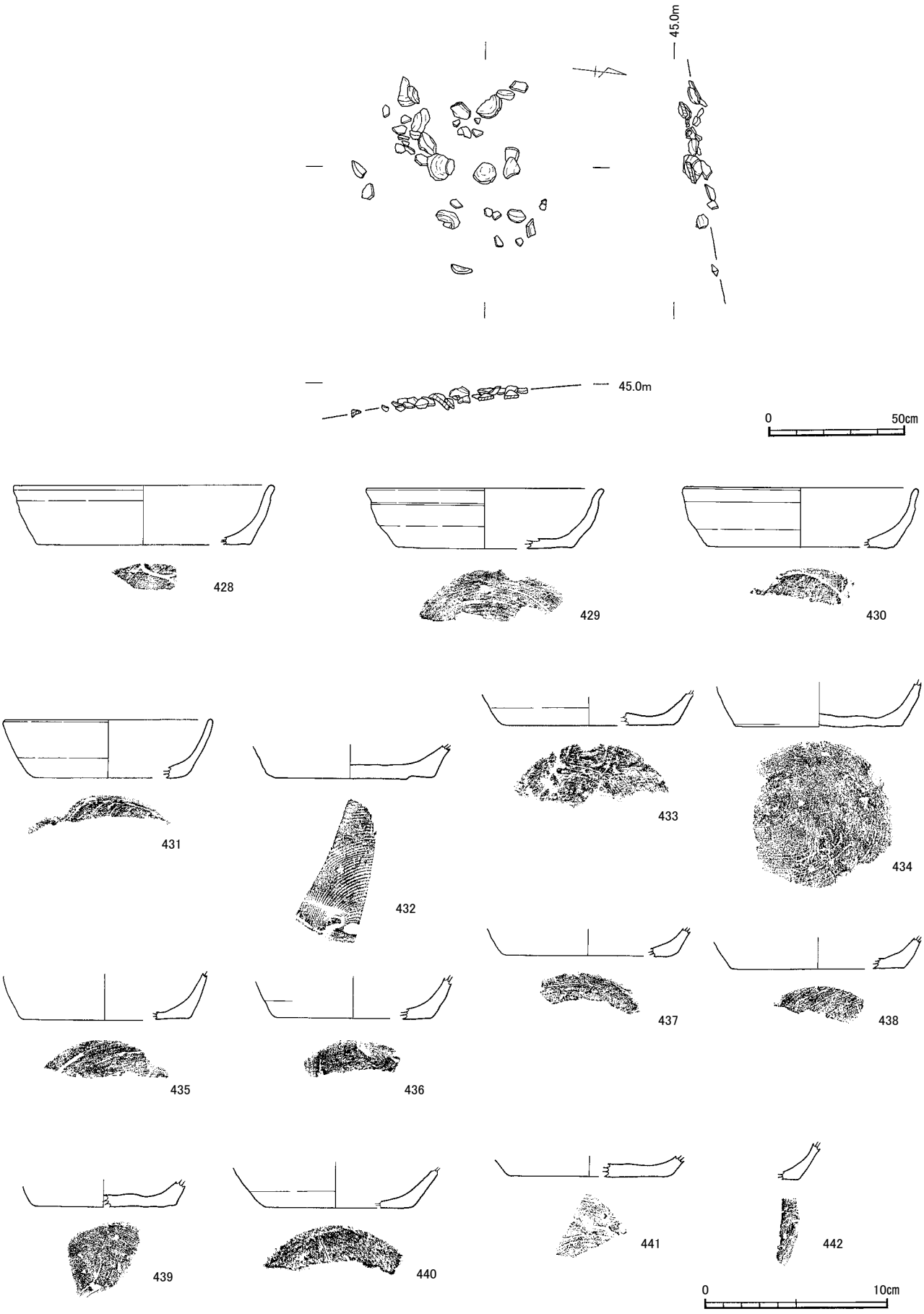
第90図　D地区　空堀Ⅱ出土遺物(1)



第91図　D地区　空堀Ⅱ出土遺物(2)



第92図　D地区　空堀Ⅱ検出土師器集積(1)



第93図　D地区　空堀Ⅱ検出土師器集積(2)

（ウ）掘立柱建物跡（第94～97図）

Ｐ・Ｑ－9区に掘立柱建物跡が４棟検出された。

掘立柱建物跡１（第94図）の柱間は２間×３間で空掘Ⅱを跨ぐような配置となっている。

掘立柱建物跡１は柱材が多く残存しており，その断面は六角形のものが多い。柱４と柱５の間は100cmで他と比べ短い。建物内及び周辺からは15C～16Cを中心とした青白磁，土師器等が出土しているが，更に詳細な帰属時期は遺物から判断できない。ただし，Ｐ９の柱材の^{14}C年代測定値はAD1,456～1,618という結果が出ている。樹種はＰ４はクスノキ科，Ｐ９はイスノキである。

掘立柱建物跡２（第95図）の柱間は３間×３間で，建物跡１に比べ柱がほとんど残存しておらず，柱穴のみが検出された。柱４と柱５の間は70cmで他と比べ短い。９はピットでなく平らな面を持つ石が検出された。根石の可能性もある。掘立柱建物跡１同様，建物跡の帰属時期は不明であるが，掘立柱建物跡１と主軸や位置がほぼ同じであることから掘立柱建物跡１の時期に近いと思われる。

掘立柱建物跡３（第96図）の柱間は１間×２間で，柱１以外は柱が残存していた。柱間は掘立柱建物跡１・２とは異なる。柱2－1・3・4・5は断面形が円で柱2－2は断面形が八角である。柱１と２は近い位置にもう１本ずつ柱が検出されており，柱の打ち直しや補充等が行われた可能性もある。掘立柱建物跡１・２と同様，帰属時期は不明であるが，主軸がほぼ直交することから掘立柱建物跡１・２に近い時期であると思われる。

掘立柱建物跡４（第97図）の柱間は統一されておらず，３・８以外は柱が残存していなかった。掘立柱建物跡３と大きく重複する場所に位置するため，建物跡３と４は同一の可能性も考えられる。柱３・８は断面形が円である。柱１・５・７・８・９は近い位置にピットが検出されていることから，柱の打ち直しや補充等の可能性がある。遺構の帰属時期は不明であるが，主軸がほぼ同じ又は直交することから掘立柱建物跡１～３に近い時期であると思われる。

（エ）柱痕跡，柱列，ピット

空堀Ⅱ側（Ｅ地区側）に多数の柱痕跡とピットが検出された。柱痕跡は断面形が六角形，四角形，円形とある。柱痕跡の中で，P12，P13，P14，P15が一直線に並ぶ柱列となる。掘立柱建物跡３等の主軸と平行（直交）になるため，掘立柱建物跡の関連施設である可能性がある。残存している柱痕跡の断面形と遺構配置には規則性を見出せていない。（柱の打ち直し等も想定できる。）D地区北側には木質が残っていないピットも多数検出された。

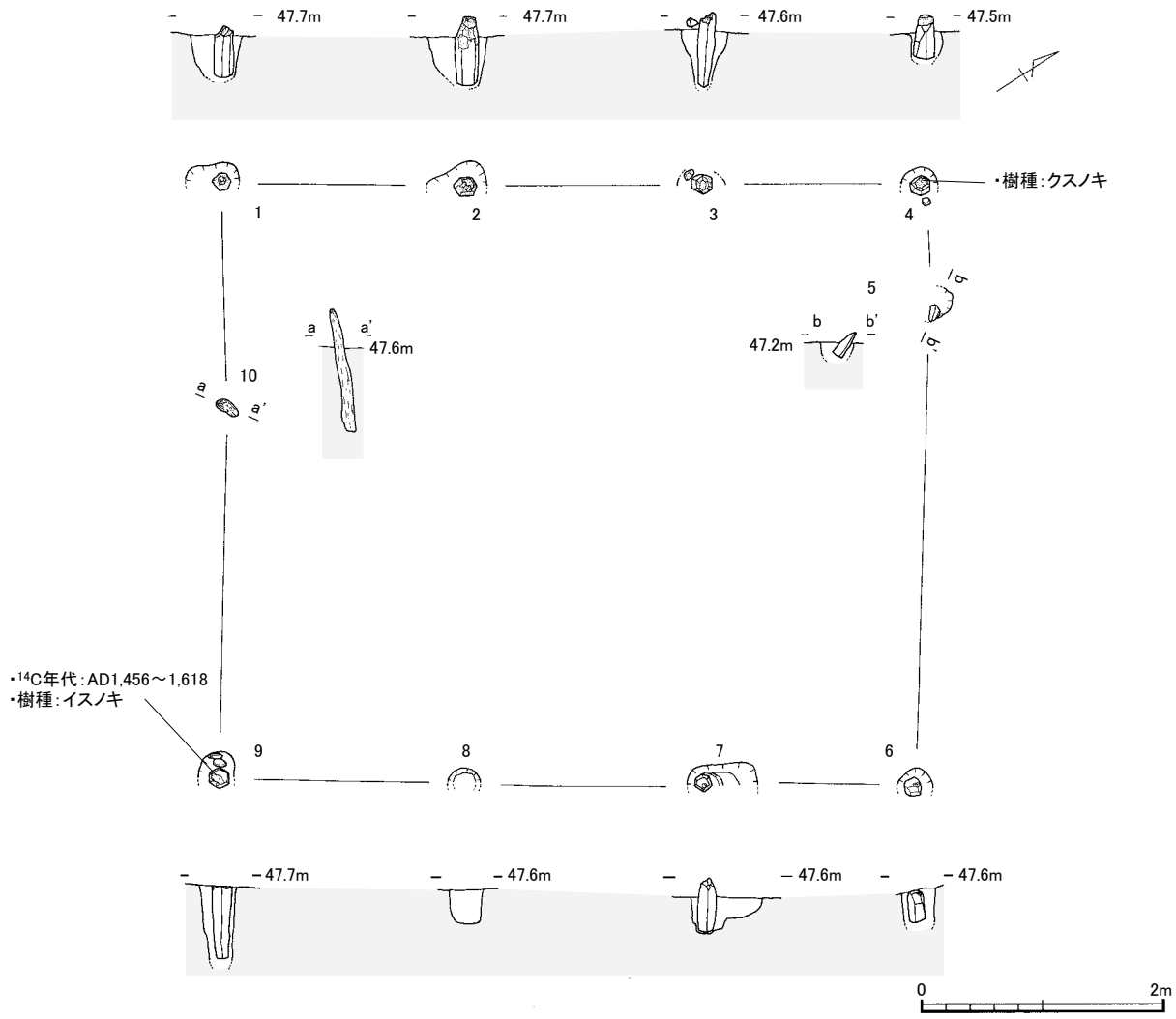
（オ）炉跡

柱痕跡，ピットが密集する範囲の外側（北東側）に炉跡が10基検出された。平面形は様々であるが，隅丸方形の炉壁をもつものが多い。炉跡の分布は掘立柱建物跡やピットの密集する範囲の外側に位置する傾向がある。これは塩の城と共通する特徴である。

炉跡1は平面形が楕円形で浅く窪む形態を呈する。周囲には乳白色～灰色のローム土が広がる。底面近くの埋土には炭化物や赤褐色ローム土が混ざる。土師器の皿が１点出土している。炉跡2は平面形が隅丸方形で浅く窪む形態を呈する。底面は乳白色土で底面近くの埋土には炭化物が混ざる。炉跡3は隅丸方形に近い平面形であるが一部不定型である。浅く窪み，底面には厚さ2cm程度の炭化物層が認められた。炉跡4は平面形が隅丸方形で，10cm程度窪む。周りには赤茶色の炉壁と思われる壁が残存し，底にはほぼ全面に炭化物が広がる。南東側の炉壁が一部欠けていた。炉跡5の平面形は楕円形と思われるが東側半分が調査前に削られていたため，はっきりとしない。２段掘りで30cm程度の深さがあり，壁に沿うように煤が付着した石が並んでいた。 壁は熱を受け赤化していた。炉跡6は平面形が隅丸方形で10cm程窪む周囲は熱を受け赤化し，硬化している。埋土には炭が多く混ざる。炉跡7も一部が欠損して検出されたと思われる。平面は不定形で，白色のローム土の帯が検出された。炭化物もほとんど出土していないため，別な遺構の可能性もある。炉跡8は平面が隅丸方形を呈し，炉壁と思われる赤橙色のロームの土手が廻る。埋土は炭化物を含む。出土炭化物の^{14}C年代測定値はAD1,449～1,615という結果が出ている。炉跡9は平面が隅丸方形を呈し北側隅の炉壁が欠けている。底面は焼け，炭化物が広がる。炉跡10は長楕円形で馬蹄形の炉壁を持ち，南西側の壁に平石が置かれていた。石は内側に被熱の痕跡があり，赤化，煤の付着が認められた。炉壁は東側が開口し，掻き出し口のように東側に乳白色ローム土のブロックや炭が広がる。

炉跡内出土遺物

443・444は炉跡５から出土した。443は龍泉窯系青磁椀である。外面口縁部に崩れた雷文帯が描かれる。444は土師器小皿で，445は炉跡１出土の内外面に煤が付着する土師器小皿。446は炉跡９から出土した土師器坏である。

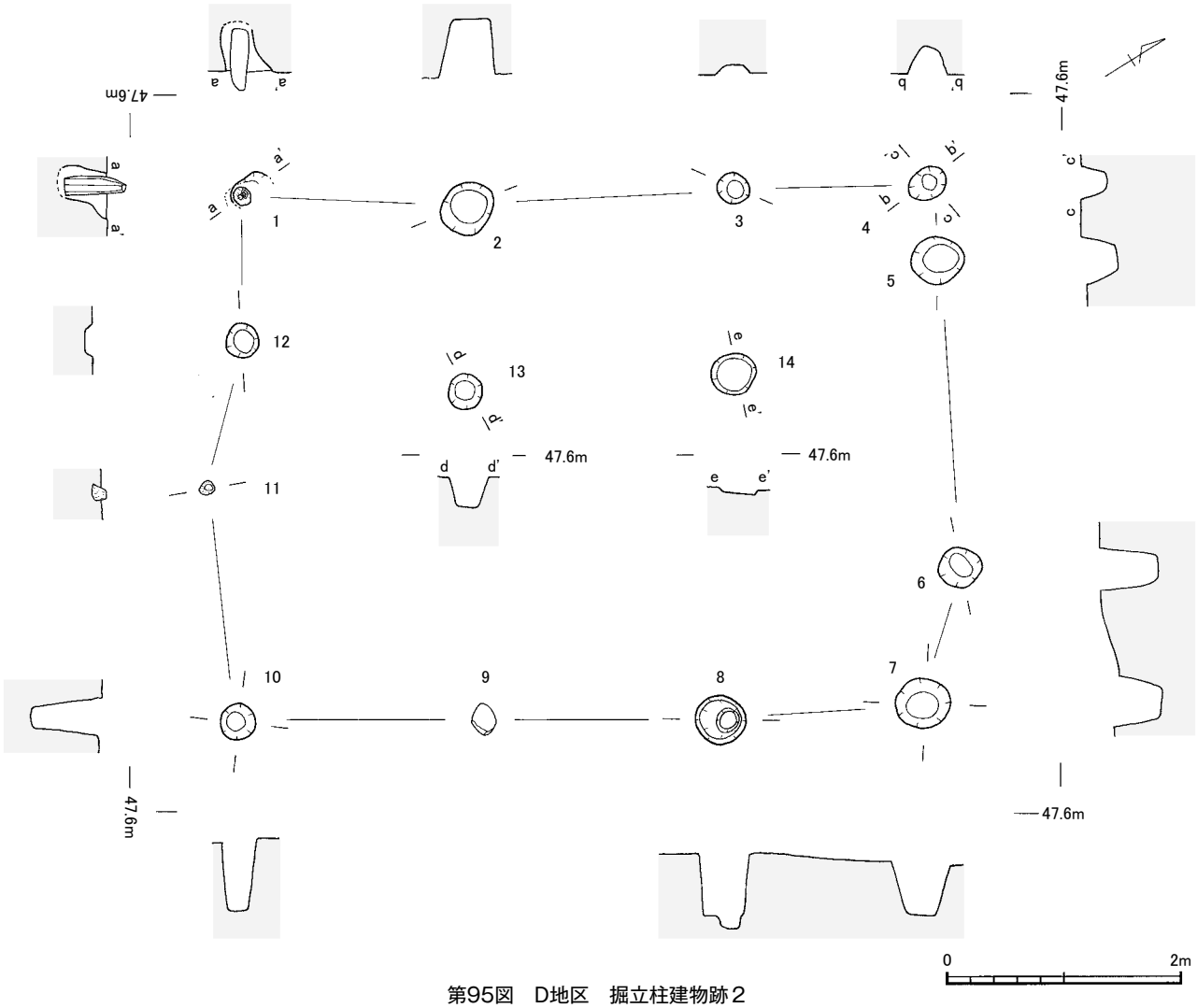


第94図　D地区　掘立柱建物跡１

第18表　D地区掘立柱建物跡1計測表

主軸方向	方向	柱穴方向	柱間長さ		延長
			cm	尺＝30.2cm	
N-32°-E	桁行	1-2	200	6.62	584
		2-3	200	6.62	
		3-4	184	6.09	
		6-7	174	5.76	574
		7-8	200	6.62	
		8-9	200	6.62	
	梁間	4-5	100	3.31	490
		5-6	390	12.91	
		9-10	310	10.26	500
		10-1	190	6.29	

No	柱穴		柱			樹種	備考
	径(cm)	深さ(cm)	形状	径(cm)	長さ(cm)		
1	42	37	六角	15	42	－	－
2	50	43	六角	18	56	－	－
3	39	50	六角	12	52	－	ぐり石
4	30	29	六角	17	37	クスノキ	ぐり石
5	27	14	多角	8+	25	－	－
6	28	－	多角	15	26	－	－
7	58	30	六角	14	44	－	－
8	25	28	－	－	－	－	－
9	29	67	六角	15	60	イスノキ	ぐり石
10	－	－	丸	10	103	－	－

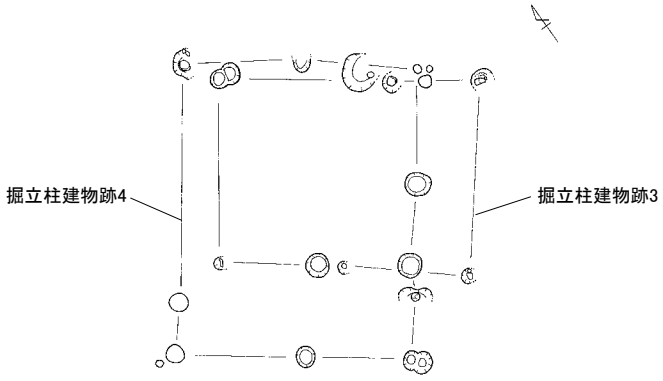


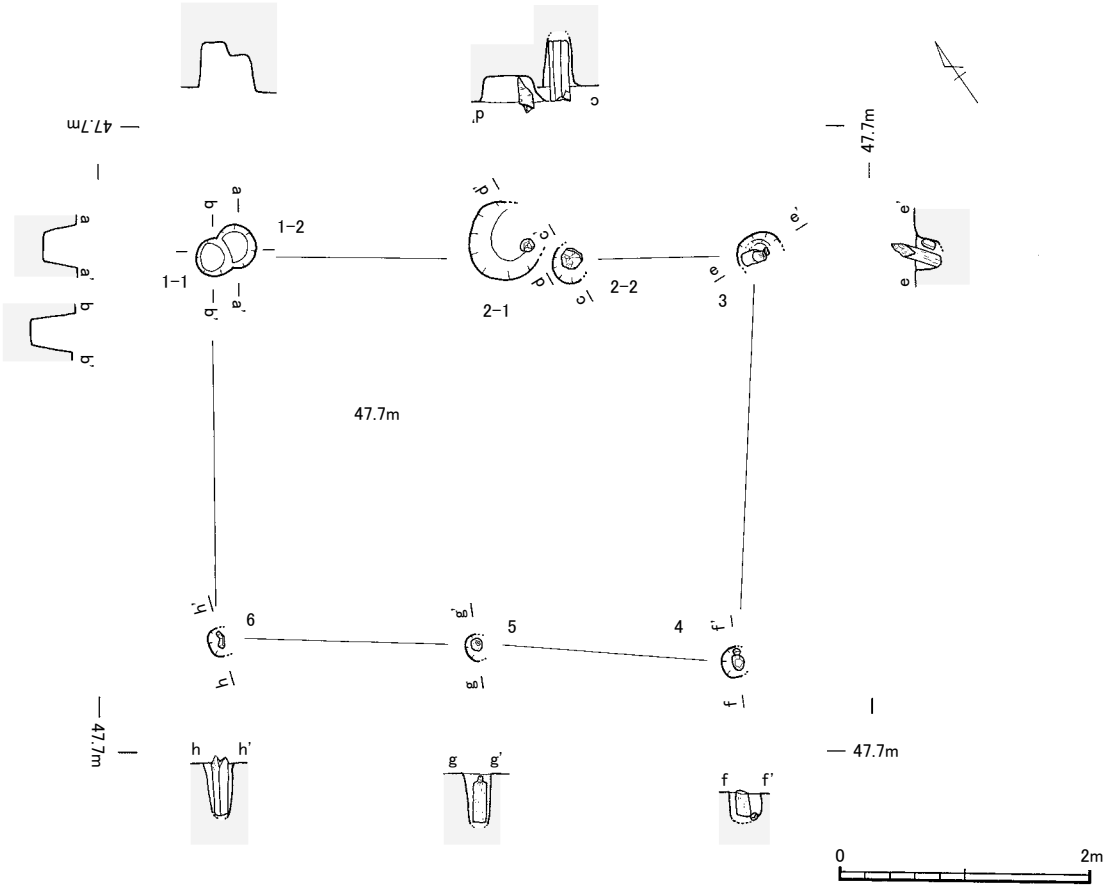
第95図　D地区　掘立柱建物跡２

第19表　D地区掘立柱建物跡2計測表

主軸方向	方向	柱穴方向	柱間長さ		延長
			cm	尺＝30.2㎝	
N-30°-E	桁行	1-2	185	6.12	580
		2-3	230	7.61	
		3-4	165	5.46	
		7-8	170	5.62	580
		8-9	200	6.62	
		9-10	210	6.95	
	梁間	4-5	70	2.31	450
		5-6	260	8.6	
		6-7	120	3.97	
		10-11	200	6.62	455
		11-12	125	4.13	
		12-1	130	4.3	

No	柱穴		柱			樹種	備考
	径(cm)	深さ(cm)	形状	径(cm)	長さ(cm)		
1	38	40+	八角	15	53	－	－
2	50	48	－	－	－	－	－
3	30	8	－	－	－	－	－
4	35	24	－	－	－	－	－
5	40	28	－	－	－	－	－
6	36	50	－	－	－	－	－
7	48	43	－	－	－	－	－
8	13	64	－	－	－	－	－
9	－	－	－	－	－	－	礎石
10	32	61	－	－	－	－	－
11	－	－	丸	12	13	－	－
12	30	6	－	－	－	－	－
13	31	25	－	－	－	－	－
14	34	5	－	－	－	－	－



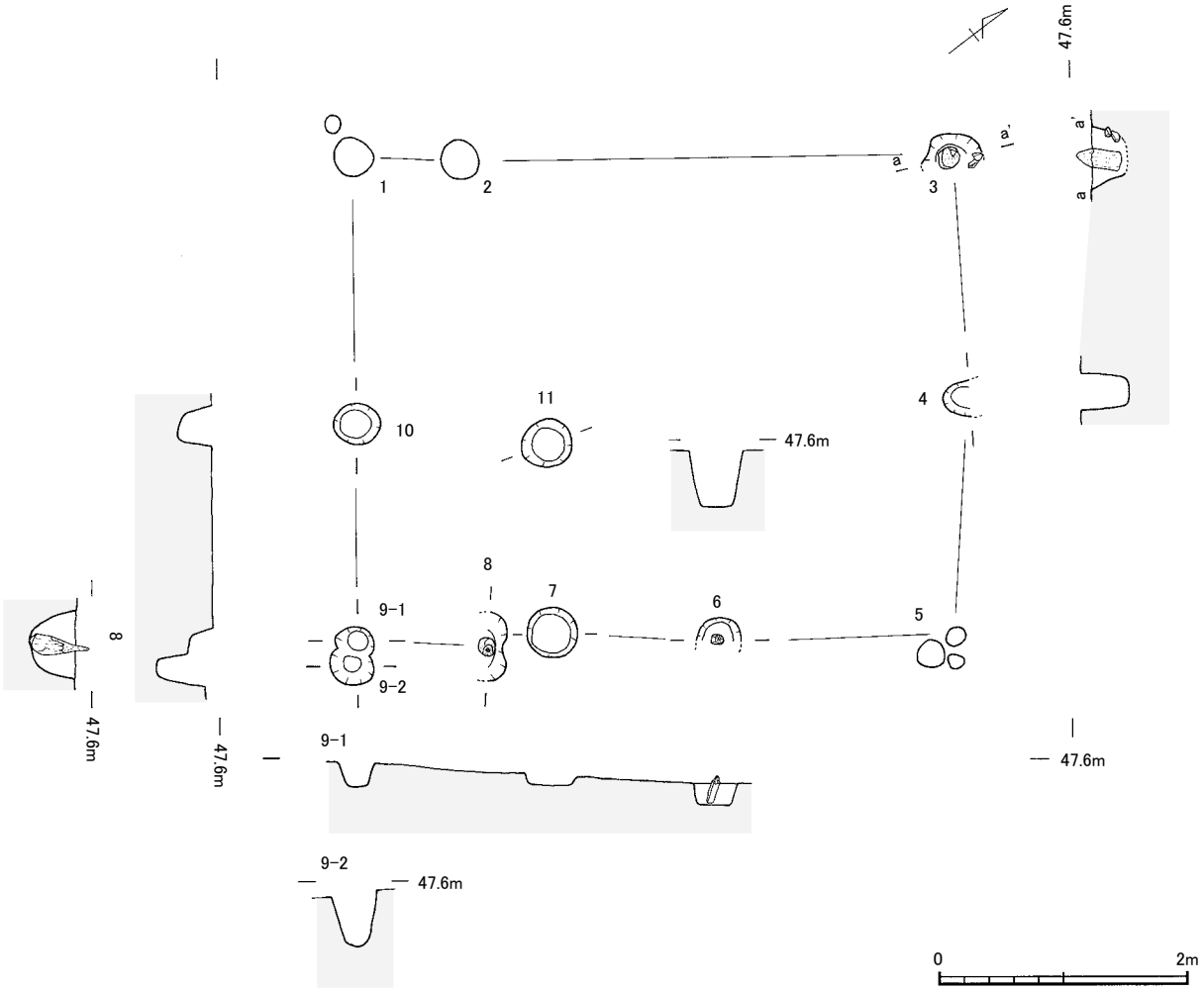


第96図　D地区　掘立柱建物跡３・４の位置関係と掘立柱建物跡３

第20表　D地区掘立柱建物跡3計測表

主軸方向	方向	柱穴方向	柱間長さ		延長
			cm	尺＝30.2㎝	
N-55°-W	桁行	(1-1)－(2-1)	250	8.28	440
		(2-1)－3	190	6.29	
		4-5	210	6.95	415
		5-6	205	6.79	
	梁間	3-4	330	10.93	－
		6-(1-1)	310	10.26	

No	柱穴		柱			樹種	備考
	径(cm)	深さ(cm)	形状	径(cm)	長さ(cm)		
1-1	30	35	－	－	－	－	－
1-2	34	27	－	－	－	－	－
2-1	64	21	丸	11	29	－	－
2-2	33	40+	八角	17	49	－	－
3	37	22+	丸	10	42	－	ぐり石
4	24	22+	丸	11	21	－	ぐり石
5	22	40+	丸	11	37	－	－
6	23	45+	多角	12	49	－	－

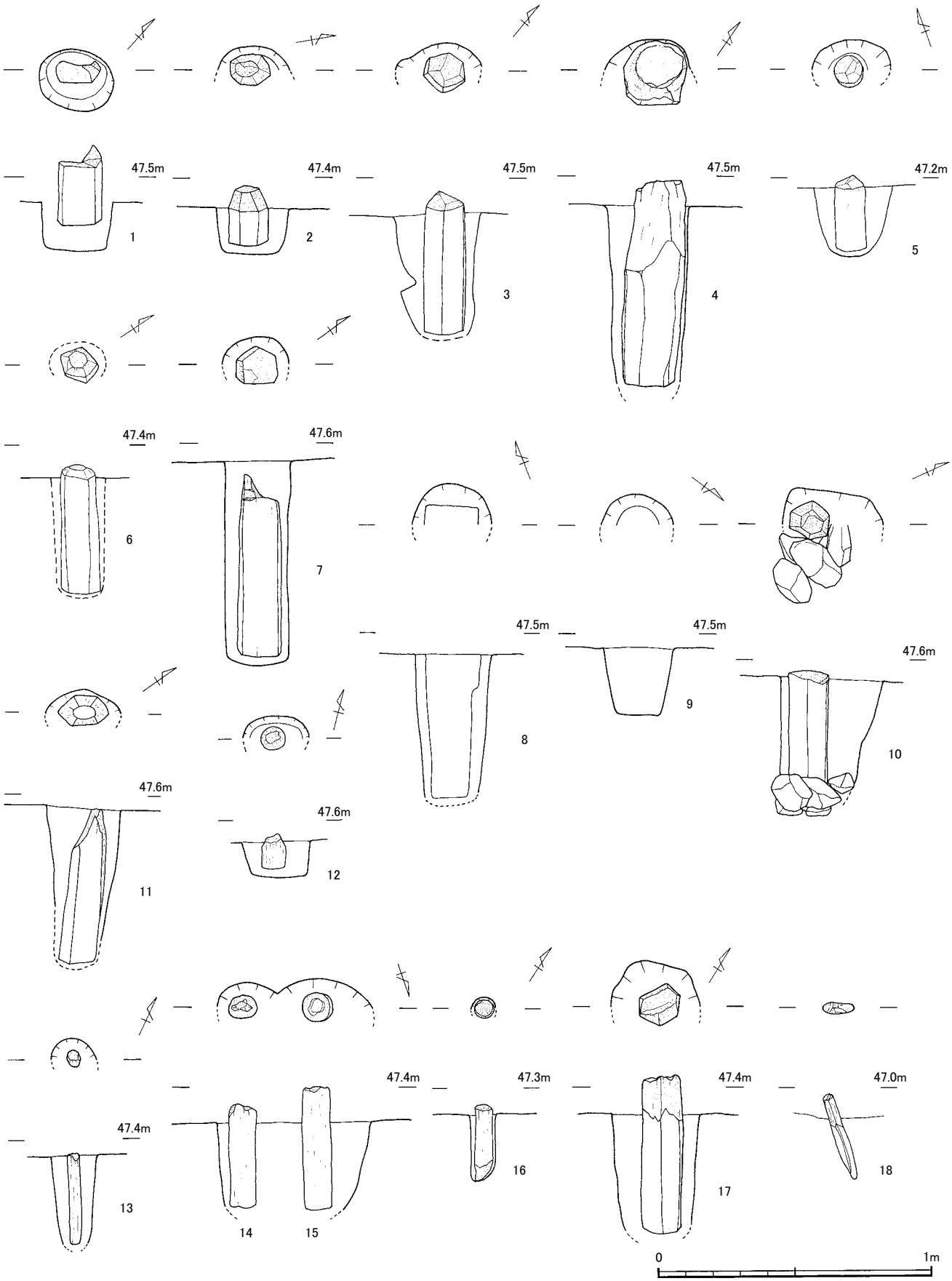


第97図　D地区　掘立柱建物跡４

第21表　D地区掘立柱建物跡4計測表

主軸方向	方向	柱穴方向	柱間長さ		延長
			cm	尺＝30.2cm	
N-35°-E	桁行	1-2	90	2.98	490
		2-3	400	13.25	
		5-6	190	6.29	490
		6-7	140	4.64	
		7-8	55	1.82	
		8-(9-1)	105	3.48	
	梁間	3-4	200	6.62	390
		4-5	190	6.29	
		(9-1)-10	175	5.79	395
		10-1	220	7.28	

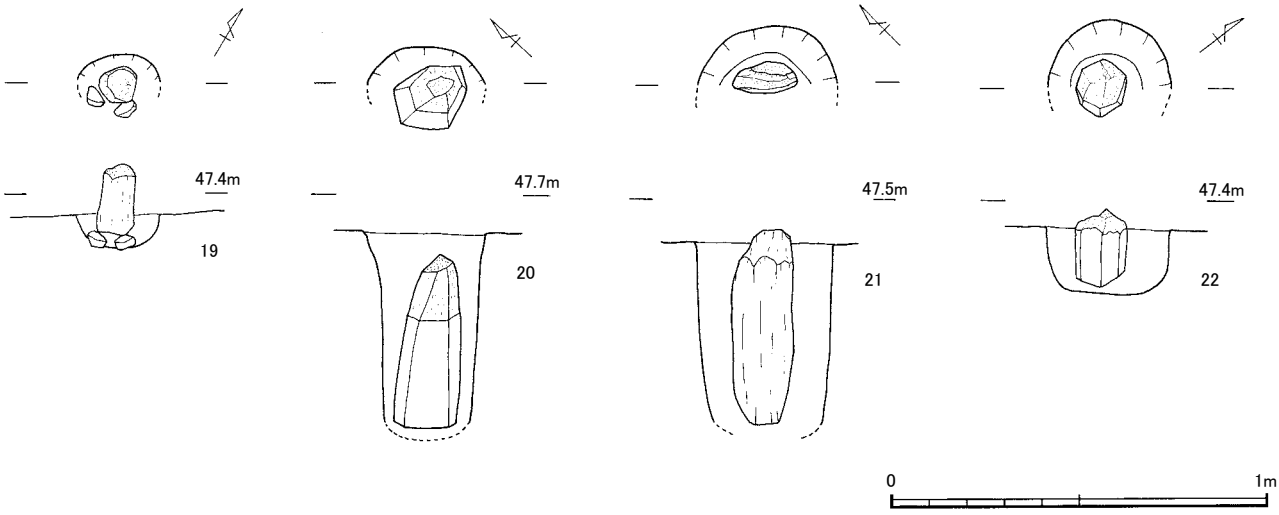
No	柱穴		柱			樹種	備考
	径(cm)	深さ(cm)	形状	径(cm)	長さ(cm)		
1	-	-	-	-	-	-	-
2	-	-	-	-	-	-	-
3	50	25+	丸	15	36	-	ぐり石
4	30	39	-	-	-	-	-
5	-	-	-	-	-	-	-
6	35	18	六角	7	23	-	-
7	41	9	-	-	-	-	-
8	56	36	丸	15	47	-	-
9-1	32	19	-	-	-	-	-
9-2	37	42	-	-	-	-	-
10	38	28	-	-	-	-	-
11	42	45	-	-	-	-	-


47.5m
1
47.4m
2
47.5m
3
47.5m
4
47.2m
5
47.4m
6
47.6m
7
47.5m
8
47.5m
9
47.6m
10
47.6m
11
47.6m
12
47.4m
13
47.4m
14
15
47.3m
16
47.4m
17
47.0m
18
0
1m

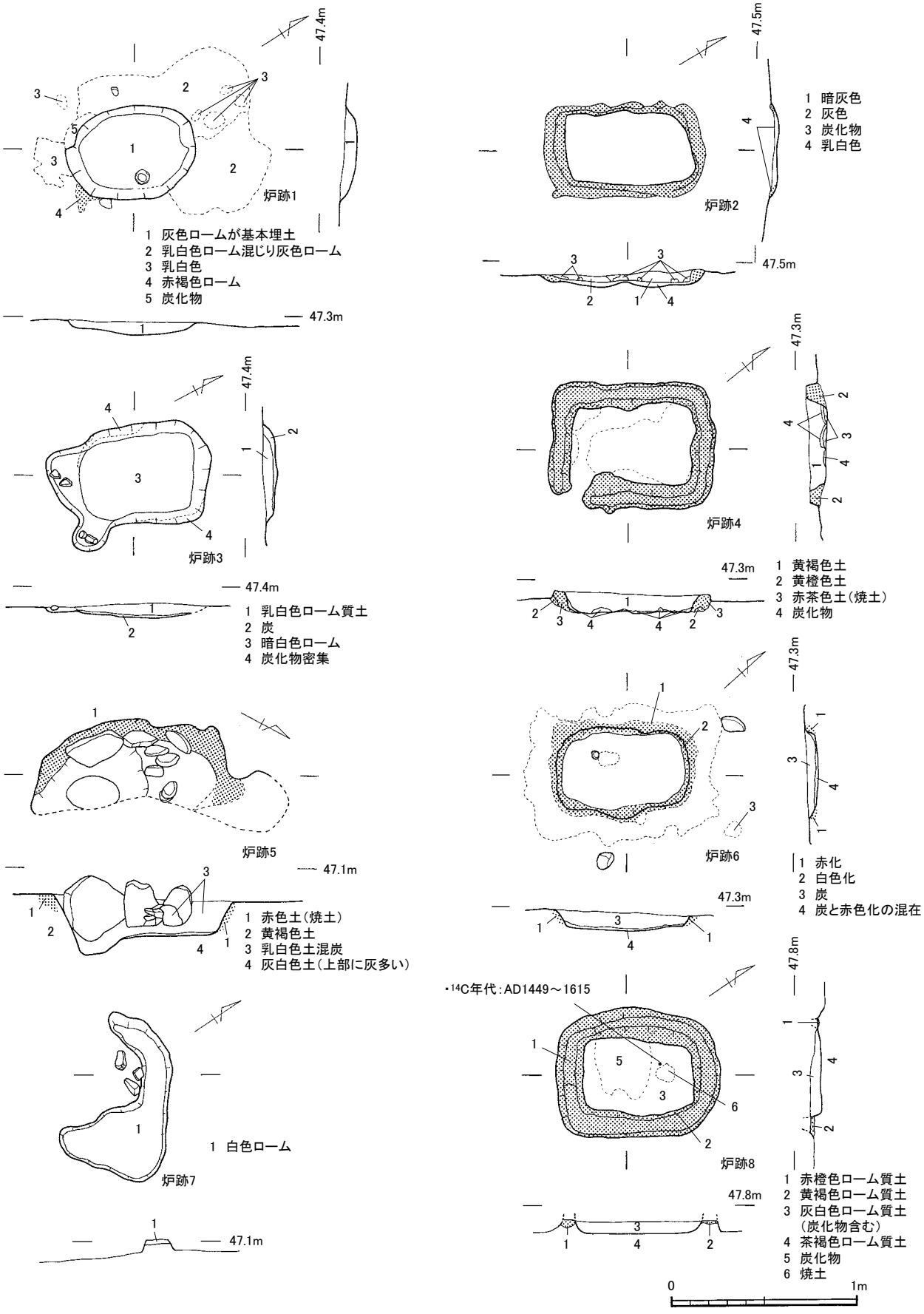
第98図　D地区　柱，杭(1)

第22表　D地区柱計測表

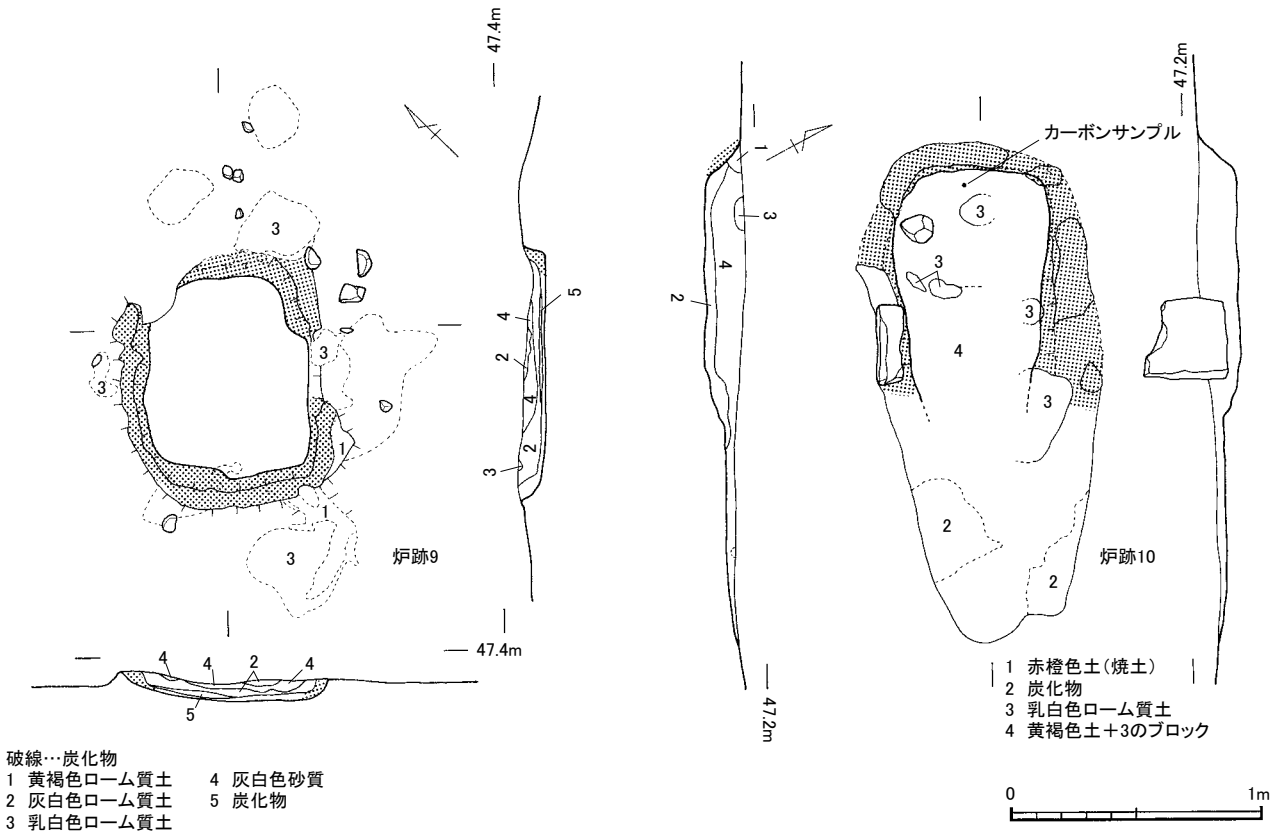
挿図番号	掲載番号	柱穴		柱			備考
		径(cm)	深さ(cm)	形状	径(cm)	長さ(cm)	
98	1	23～26	19	六角？	15	22	－
	2	27	16	六角	15	22	－
	3	32+	44+	六角	15	53	－
	4	30	65+	六角	25	76	－
	5	28	25	六角	11	18	－
	6	－	－	六角	14	47	－
	7	25	72	四角	15	16	－
	8	29+	53+	－	－	－	柱なし
	9	25	25	－	－	－	柱なし
	10	37	45+	六角	15	39+	柱穴内に礫
	11	27	60+	六角	18	56	－
	12	25	14	六角	9	13	－
	13	17+	33+	丸形	5	33	－
	14	21+	31+	丸形	10	38	－
	15	34+	32+	丸形	11	46	－
	16	10	25	丸形	7	18	－
	17	32	42+	六角	15	58	－
	18	－	－	？	5	33	杭?
	19	22	8	六角	11	19	柱穴内に礫
	20	32+	52+	六角	20	46	－
	21	36	50+	丸形	16	51	－
	22	33	17	六角	13	20	－



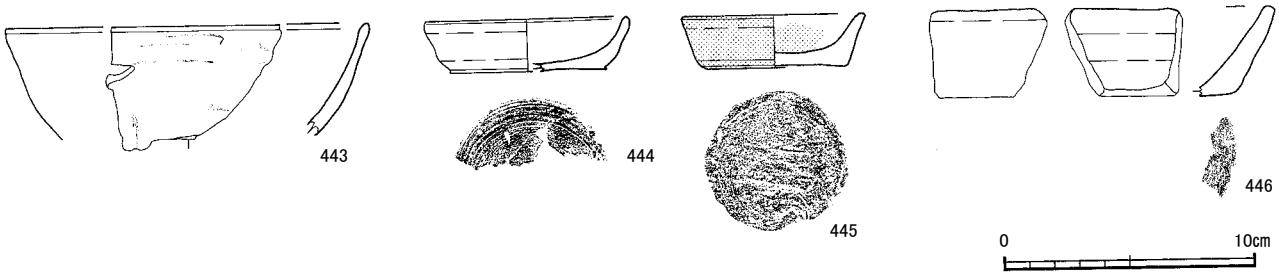
第99図　D地区　柱，杭(2)



第100図　D地区　炉跡(1)



第101図　D地区　炉跡(2)



第102図　D地区　炉跡出土遺物

第23表　D地区炉跡計測表

挿図番号	掲載番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	平面形	出土遺物	備考
100	1	71	51	8	方形	445 土師器坏	−
	2	87	51	9	方形	−	−
	3	89	53	8	方形	−	−
	4	90	68	12	方形	−	−
	5	104	42+	33	不定形	443 青磁碗 444 土師器坏	2段堀り
	6	72	48	9	方形	−	−
	7	15	86	−	不定形	−	−
	8	90	71	8	方形	−	^{14}C年代:AD1,449～AD1,615
101	9	83	116+	9	方形	446 土師器	−
	10	201	89	15	方形	−	−

ウ　遺物

青磁

447～463は龍泉窯系青磁である。447～456が椀である。447～449は外面に細線による蓮弁文が描かれる口縁部であるが，細線と剣頭が蓮弁としての単位を意識していない。450は外面に片彫りによる幅広の蓮弁文が描かれるが，蓮弁の中央には稜はみられない。451は底部である。外面に細線による蓮弁文が描かれる。452は焼成不良であるのか胎土が黄橙色で，釉が黄褐色を呈する。外面に細蓮弁文の一部と思われる線書きがみられる。453は口縁部内外面に雷文帯が巡るものである。内面には「李白・加・巻」と思われる文字が描かれる。454は口縁部外面に崩れた雷文が描かれる。455は見込みに花文がスタンプされる。畳付から高台内底面は露胎する。456は腰部が張る形状の底部である。見込みには花文がスタンプされる。畳付から高台内底面は露胎する。457・458は盤である。457は口縁端部が外側へ強く屈曲するもので，外面に片彫りによる蓮弁文が描かれる。458は口縁端部が丸くつくられるものである。内外面に細線による縦縞状の文様が描かれ，口縁端部は輪花をなす。463は香炉の底部である。腰部には脚が３足つくと思われる。

白磁

464～470は景徳鎮窯系の白磁である。464・465は椀の口縁部で，端部は外反する。胎土は精良緻密である。466は椀の底部である。高台は細く高い。畳付のみ釉剥ぎされる。467は端反の皿である。高台先端が尖り，釉剥ぎされる。468は坏の口縁部と思われる。469は碁笥底を呈する皿である。470は菊花皿の口縁部である。

青花・色絵ほか

471は景徳鎮窯系の小坏である。見込みは輪状に釉剥ぎされ，その部分に上絵で装飾を施す。

472・473は景徳鎮窯系の碗である。胎土，釉ともに上質のものである。474は漳洲窯系の碗で，端反口縁を呈するものである。475は景徳鎮窯系の皿である。欠損しているが口縁部が端反になるものである。476は底部が碁笥底を呈する皿である。477は景徳鎮窯系の小坏である。欠損しているが口縁部は端反口縁をなすものである。

478・479は景徳鎮窯系の色絵である。478は碗で，外面は上絵が描かれ，口縁部内面には四方襷文が巡る。479は瓶と思われる。内面は無釉である。

染付ほか

480～483は肥前磁器である。480は小広東形の碗である。481･482は初期伊万里の皿である。481は高台径が小さい。見込みには山水文が描かれる。482は見込みに「日」の字，内側面に鳳凰文が描かれる。483は皿か鉢である。

484～486は近代以降の磁器で，色絵である。484は小碗である。485は高台が二重高台を呈する。

486は磁製の合子である。型押しで製作されている。

土師器

487は糸切り底の皿である。体部に煤が付着する。488・489は小皿で，488は内外面に煤付着。

坩堝

490・491は土師器坏の坩堝である。内外面に溶解物が粟粒状に付着する。491は手捏の坩堝片である。

国内産陶器

492は瀬戸・美濃産の天目碗である。外面腰部から高台内底面は鉄泥が塗布される。493は肥前陶器で，釉は外面腰部までかかる。494・495は同一個体と思われ，備前産の擂鉢である。内面には一単位８条の擂り目が入る。500は常滑産の壺である。口縁部は断面三角形の充実したものである。

瓦質土器

497は瓦質土器の鉢と思われる。蓋の可能性も考えられる。496は羽釜である。口縁部に上手を付けるため２個の孔を穿っている。鍔部下位には煤が付着する。498・499は火鉢である。499は深鉢形で口唇部は平坦で充実する。口縁部に細い突帯と花文の刻印が付され，498は口縁部がやや内弯する浅鉢形で，外面口縁部に亀甲形の印刻が施される。奈良火鉢と思われる。

カムィヤキ

502～506は広口壺の頸部片である。内面は横位の条痕と格子の当て具痕，外面は細格子目文の叩きを施す。

石製品

507は滑石製の玉である。両側から穿孔を施し，片面から下部にかけて線刻加工を施している。垂飾品と考えられる。507は508と同じく，丸く加工した滑石に穿孔加工を施すが，やや小振りである。509は未製品と思われる。510は口径12.8cmの小型の滑石製石鍋口縁部の破損品である。表裏面削りなど，丁寧な加工が施されている。511は天草陶石の砥石で，石材の各面を繰り返し使用している。使用過程で中心部が細まり加重により破損したものと思われるが，その後，左側は更に使用されたことが，接合面の段差から観察できる資料である。

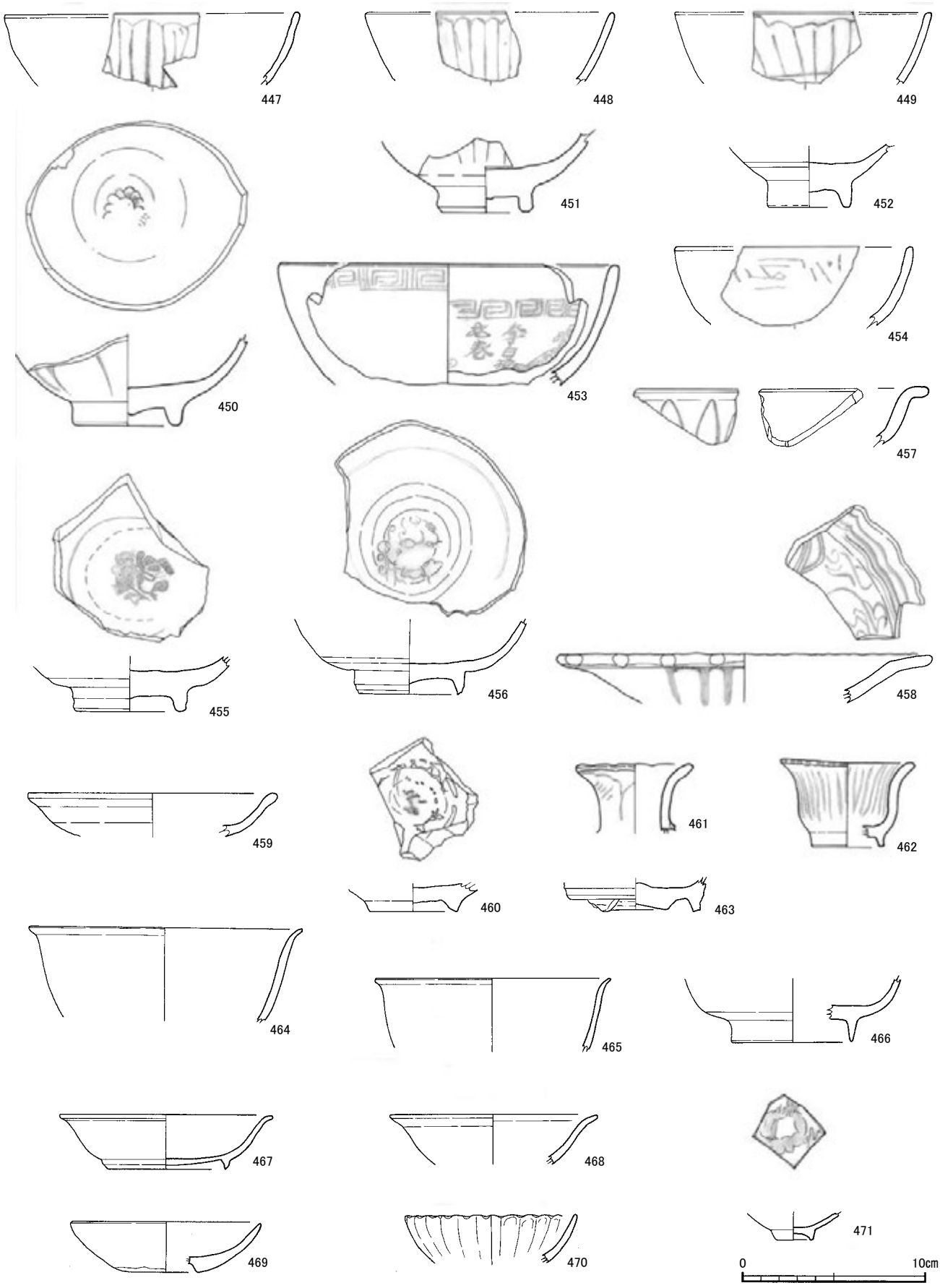
漆椀

512は腰部は丸味をおび，直行する口縁部となる。底部は輪高台であるが畳付けは欠損している。内面赤色漆で，花の漆絵。

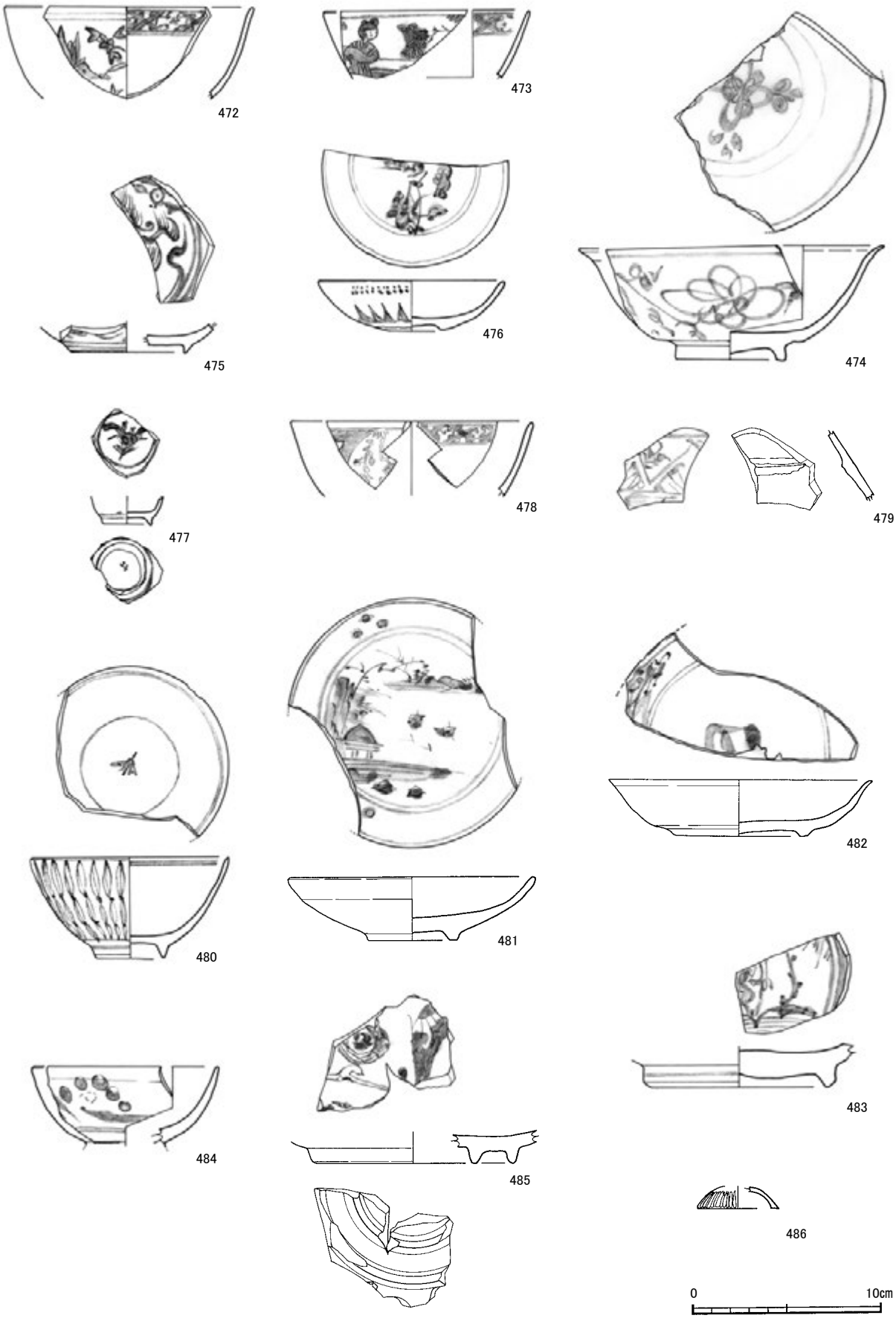
金属製品，古銭

513は先端を欠いた鉄製の角釘である。514は青銅製品で，剃刀の形状をし中空に木片が挟み込まれている。

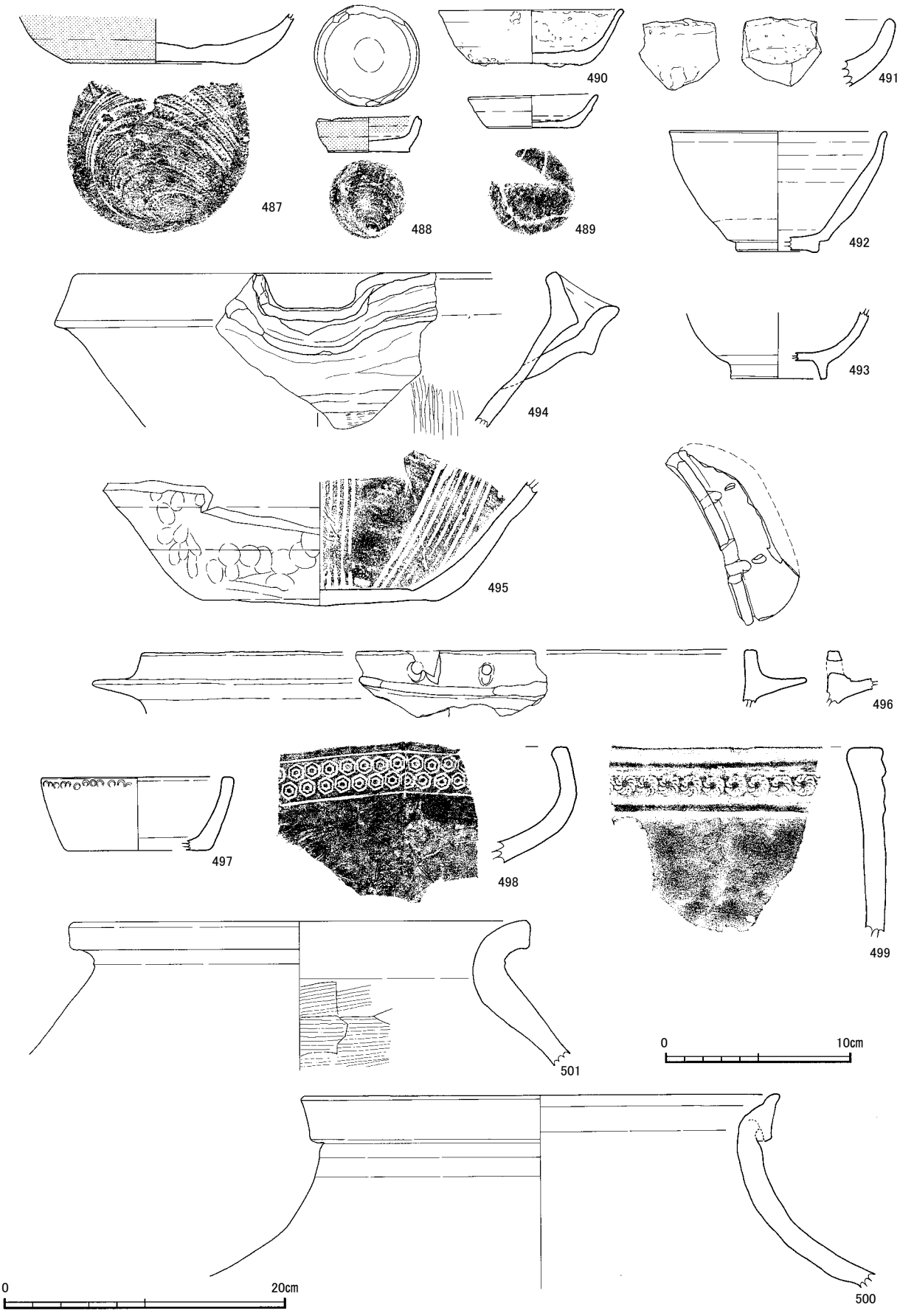
515は「照寧元寶」，516・519は「寛永通寶」，517は鉄銭で，錆に覆われており不明である。



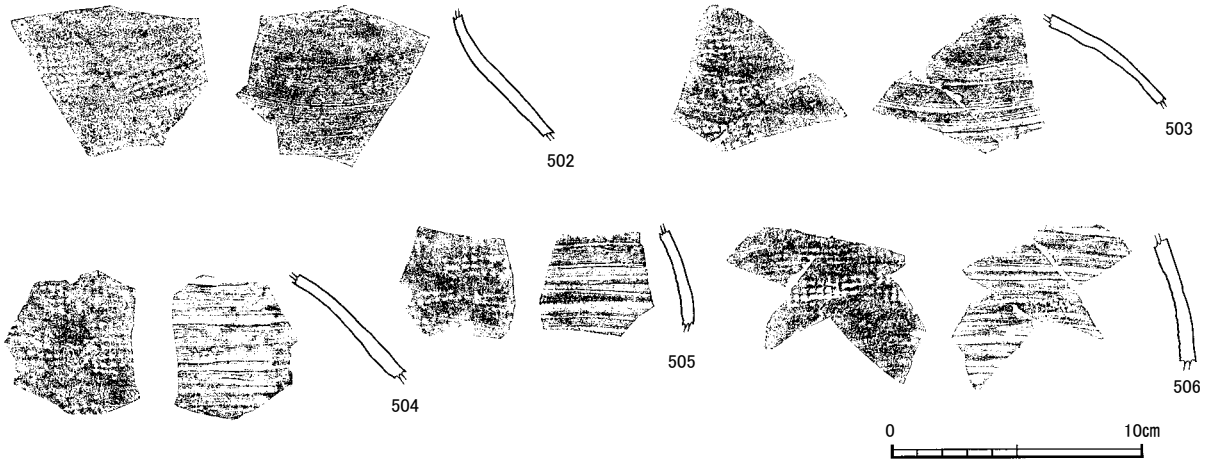
第103図　D地区　出土遺物(1)

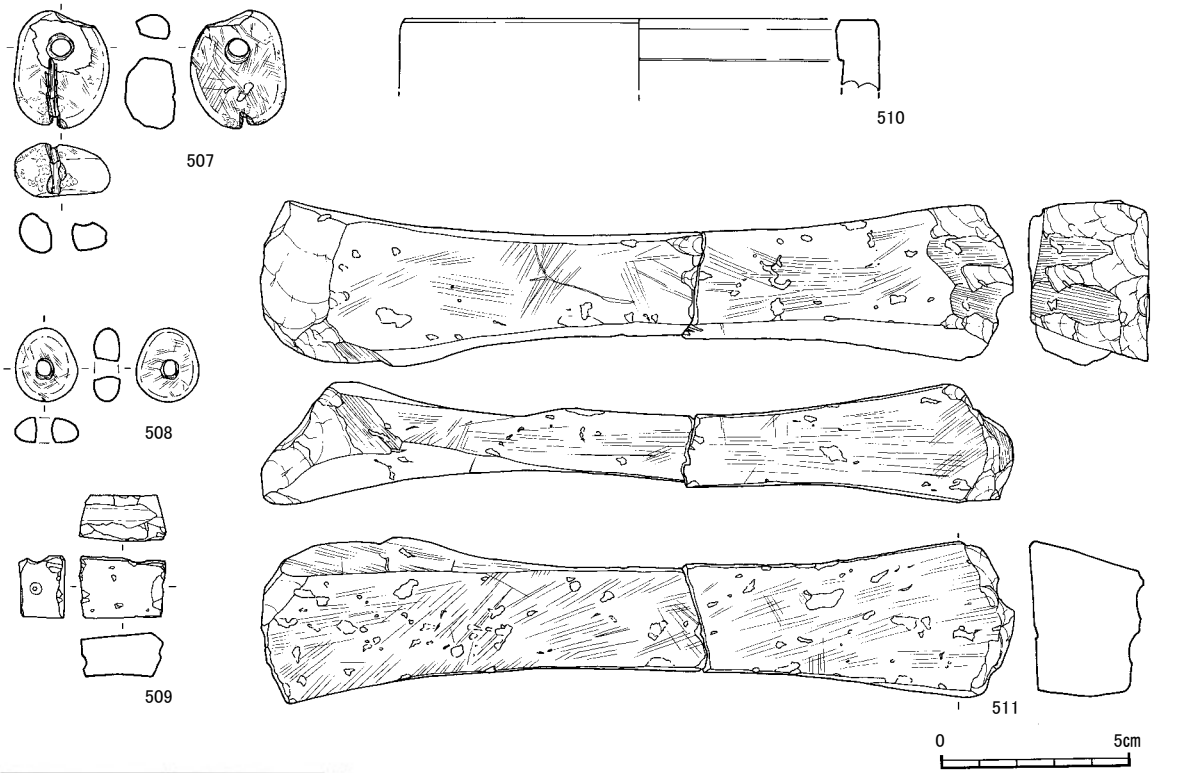


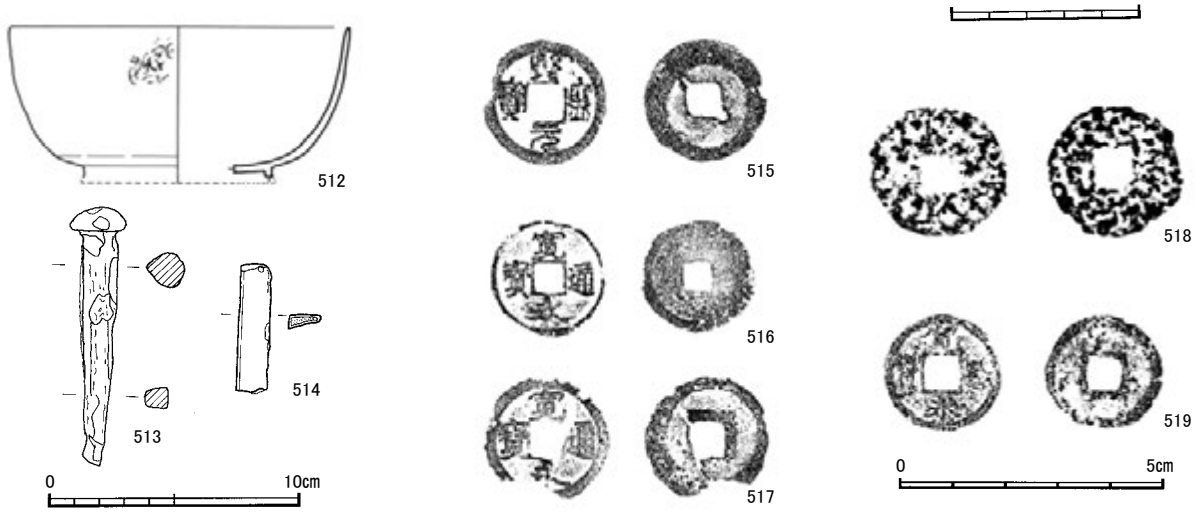
第104図　D地区　出土遺物(2)



第105図　D地区　出土遺物(3)







第106図　D地区　出土遺物(4)

（５）Ｅ地区（曲輪Ⅱ）の調査

ア　概要

曲輪Ⅱは，「中の城」と呼ばれている。

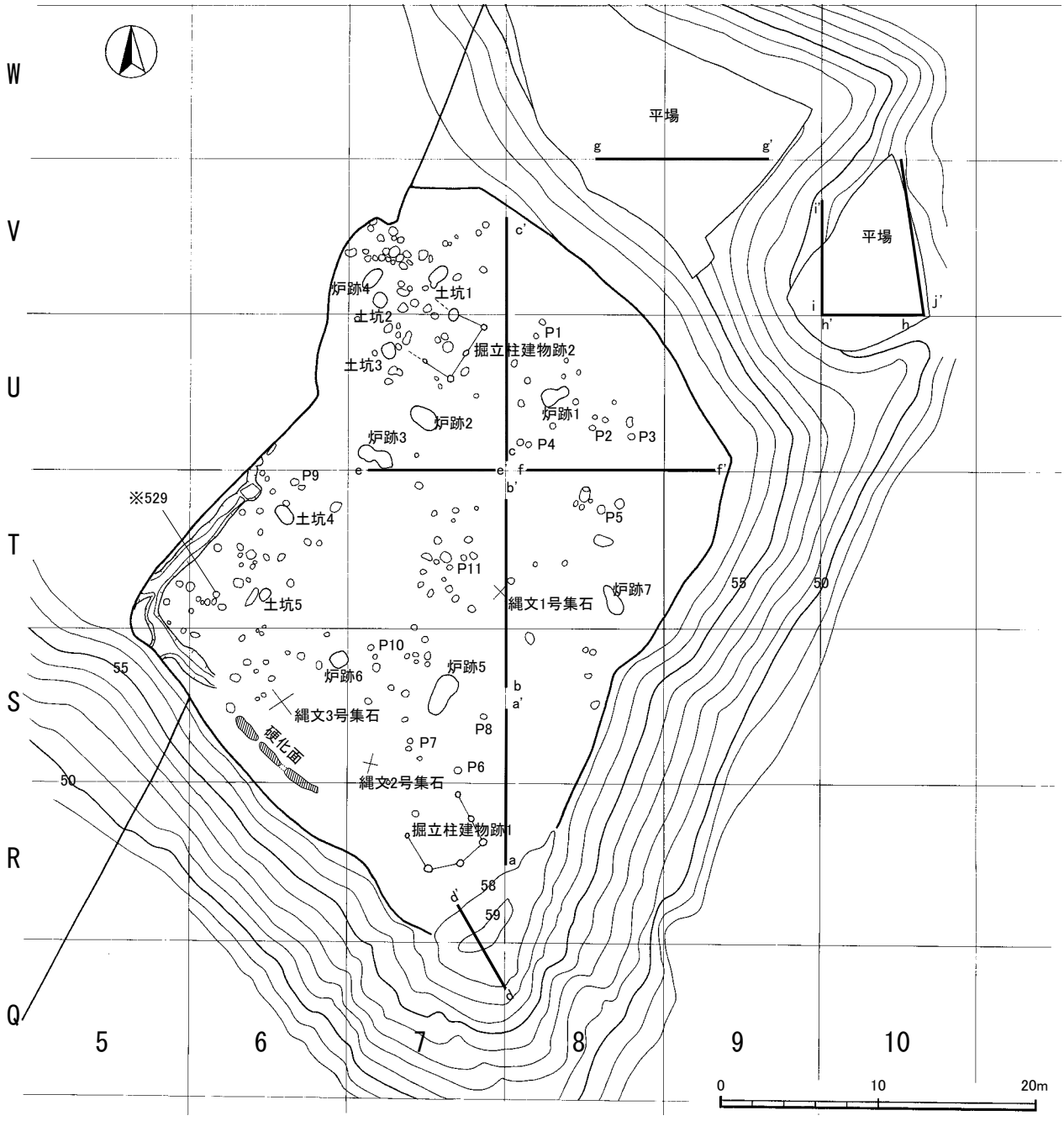
曲輪は，縦67m，横35mのほぼ長方形で北西～南東に細長く，北西部の半分はさらに一段小高い地形である。面積約2,350㎡，標高約58mである。

調査は工事区域の西側端にあたり曲輪部分の南東側約半分（面積約1,000㎡）を対象とした。

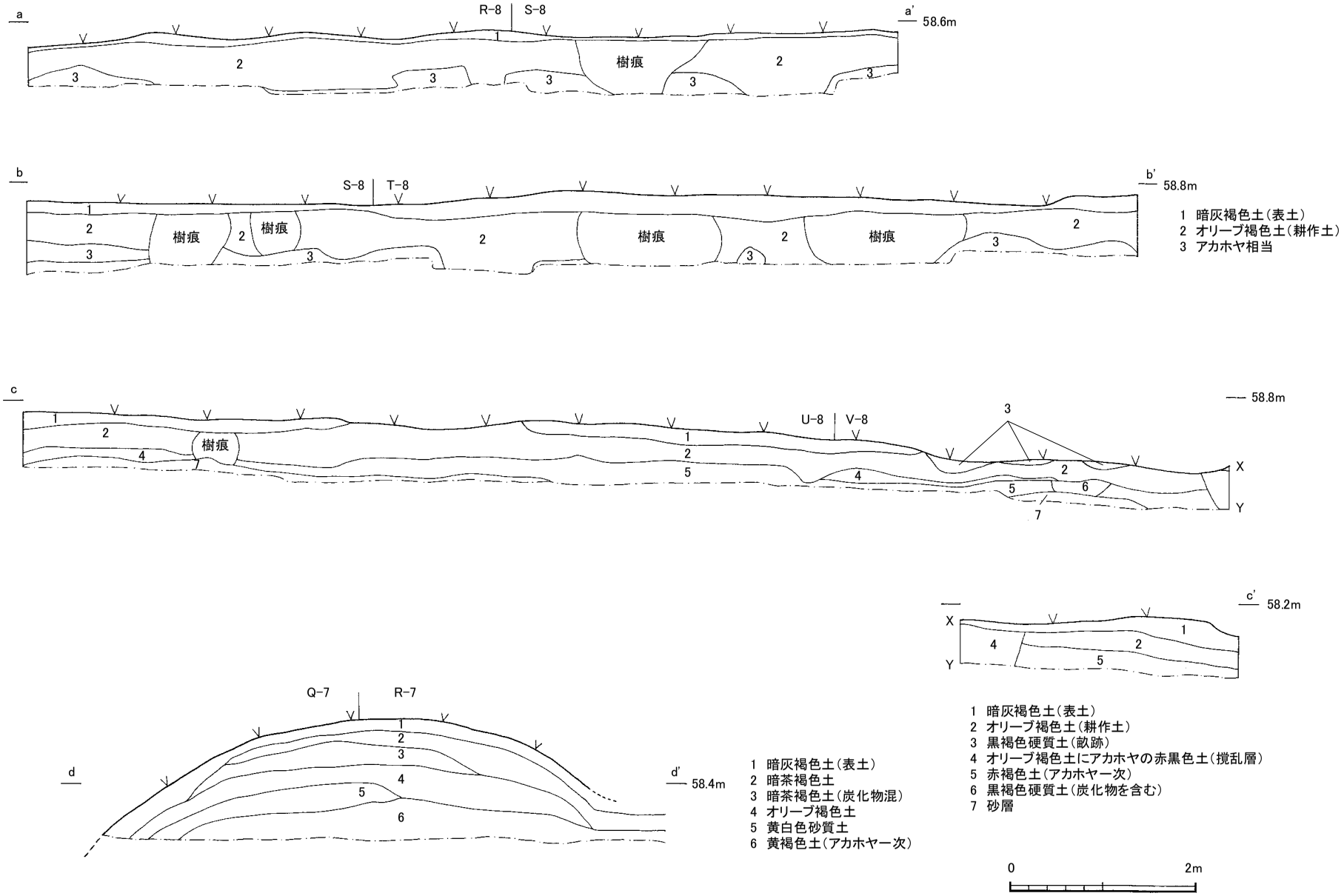
曲輪の北東側約10m下位には小規模な平場が２か所存在する。平場から急崖となって川内川へ続く。

東側は谷（空堀）を隔てて曲輪Ⅰ（塩の城），西側は谷（空堀）を隔てて虎居城の本丸と言われる松社城跡の曲輪が位置し，両曲輪に挟まれた位置にあたる。南側は急傾斜の崖から緩やかな傾斜地のＪ地区へ続く。谷との標高差約20mである。北・東側の谷部には，曲輪Ⅱを取り巻く空堀Ⅱが構築されている。（第85図）

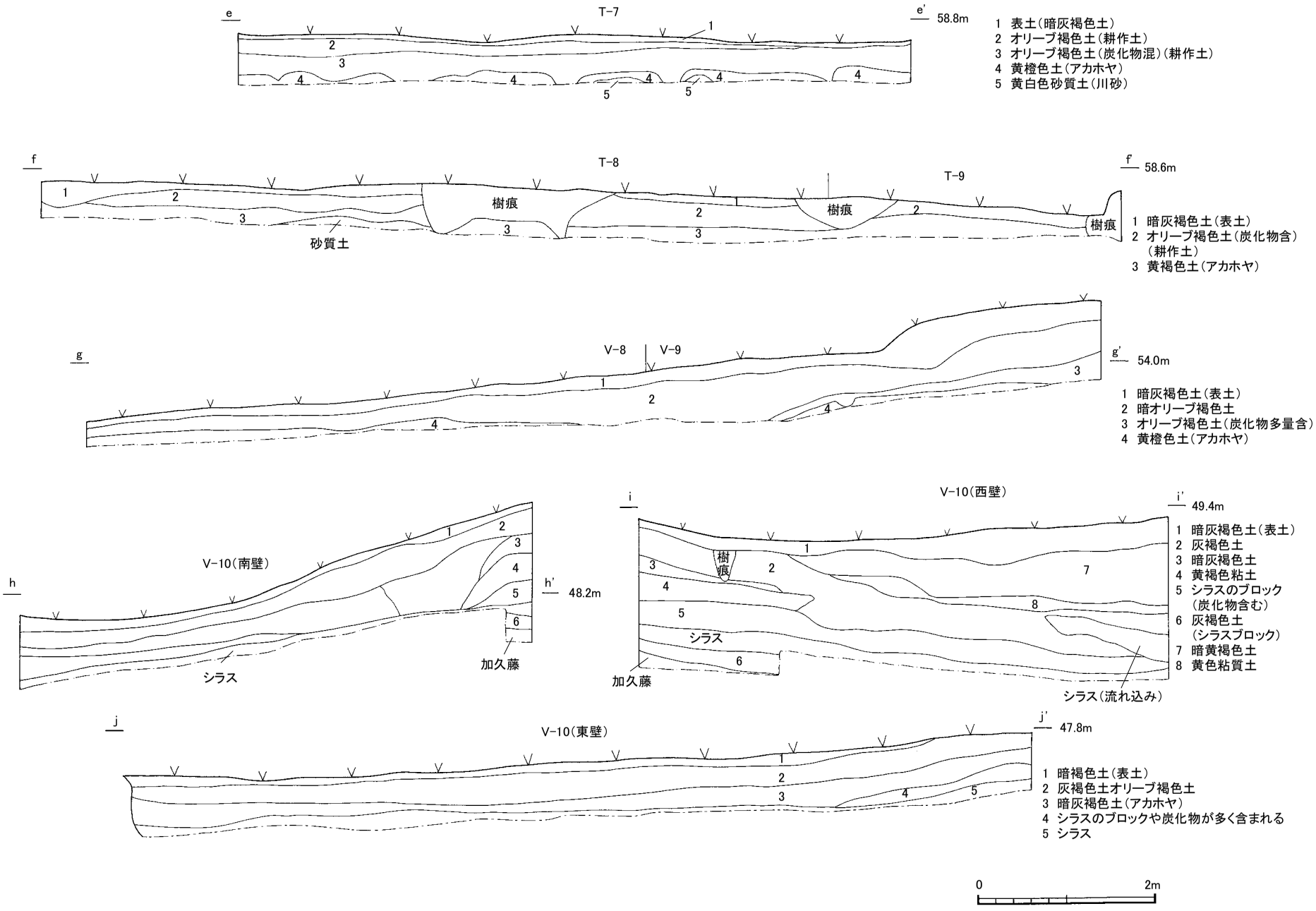
遺構には，現存する土塁，掘立柱建物跡，土坑，炉跡，ピット，溝状遺構，硬化面の道遺構等や青磁・白磁・青花等の遺物が出土した。なお，本曲輪では縄文時代早期の集石遺構や土器，石器が出土している。



第107図　E地区　曲輪Ⅱ全体図



第108図　E地区　土層断面図(1)



第109図　E地区　土層断面図(2)

イ　遺構

（ア）土 塁（第108・110図）

土塁は曲輪の南側縁の角地，Ｒ－７区を中心にして残存している。平面の形は北側は先細，南側は丸く膨らむ水滴状の形を呈し，長さ約10.8m，幅約5.7m，高さは約１m程の土饅頭形の土塁である。土塁の南側端からは急崖となって谷部の空堀Ⅱへ続く。

土塁の地層断面の観察から表層下に黒色層，アカホヤ火山灰層の堆積がみられることから，土塁は削り出して築かれている。

小規模な土塁であるが，東側対岸の曲輪Ｃの土塁の設置方向・設置場所・形状などが類似し，南からの進入の防御施設とともにも権威を表すものとして捉えたい。

（イ）掘立柱建物跡

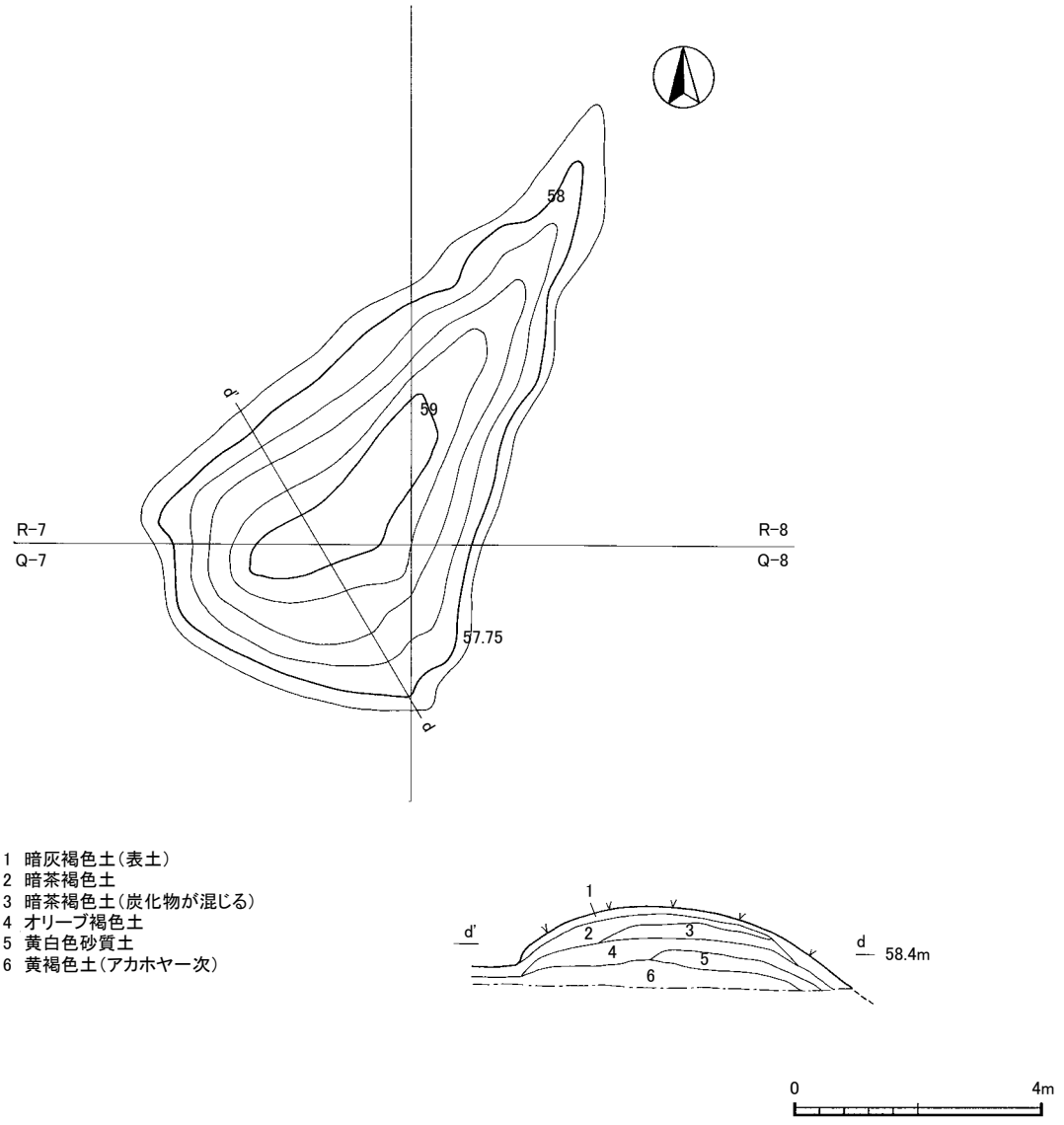
掘立柱建物跡２棟を確認した。２棟ともに桁行の規模は不明であり全体を把握することは出来ないが，桁行２間以上の建物が想定される。なお，１間の長さの平均値は梁間が長い。

ａ　掘立柱建物跡１（第111図）

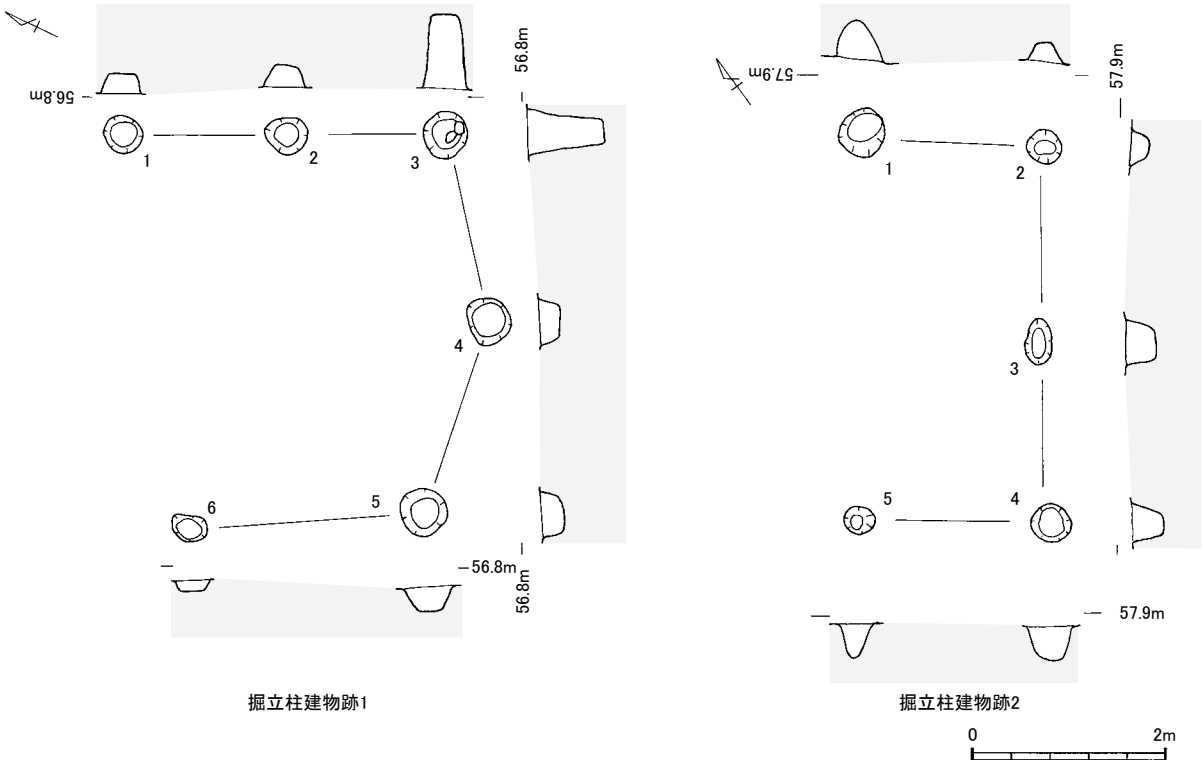
Ｒ－７区に位置し，土塁の北側に隣接する。主軸はN-29°-W。１間？×２間を確認した。柱穴は径が36～48㎝，深さ12～78㎝前後である。なお，柱穴３は深さ78㎝で最も深い。

ｂ　掘立柱建物跡２（第111図）

Ｕ－７区に位置し，主軸はN-57°-W。１間？×２間を確認したが，全体の状況は不明である。柱穴は径32～48㎝，深さは20～40㎝である。周辺は多数の土坑やピットが検出されている。



第110図　E地区　土塁



第111図　E地区　掘立柱建物跡１，２

第24表　E地区　掘立柱建物跡1計測表

主軸方向	方向	柱穴方向	柱間長さ		延長(cm)
			(cm)	尺=30.2cm	
N-29°-W	桁行	1―2	172	5.69	340
		2―3	168	5.56	
		5―6	245	8.11	245
	梁間	3―4	196	6.49	406
		4―5	210	6.95	

No.	柱穴			柱			樹種	備考
	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	形状	短径(cm)	長さ(cm)		
1	43	39	22	−	−	−	−	−
2	45	37	24	−	−	−	−	−
3	46	46	78	−	−	−	−	−
4	48	38	22	−	−	−	−	−
5	48	38	24	−	−	−	−	−
6	36	26	12	−	−	−	−	−

第25表　E地区　掘立柱建物跡2計測表

主軸方向	方向	柱穴方向	柱間長さ		延長
			(cm)	尺=30.2cm	(cm)
N-57°-W	桁行	1―2	192	6.35	192
		4―5	210	6.95	210
	梁間	2―3	200	6.62	385
		3―4	185	6.12	

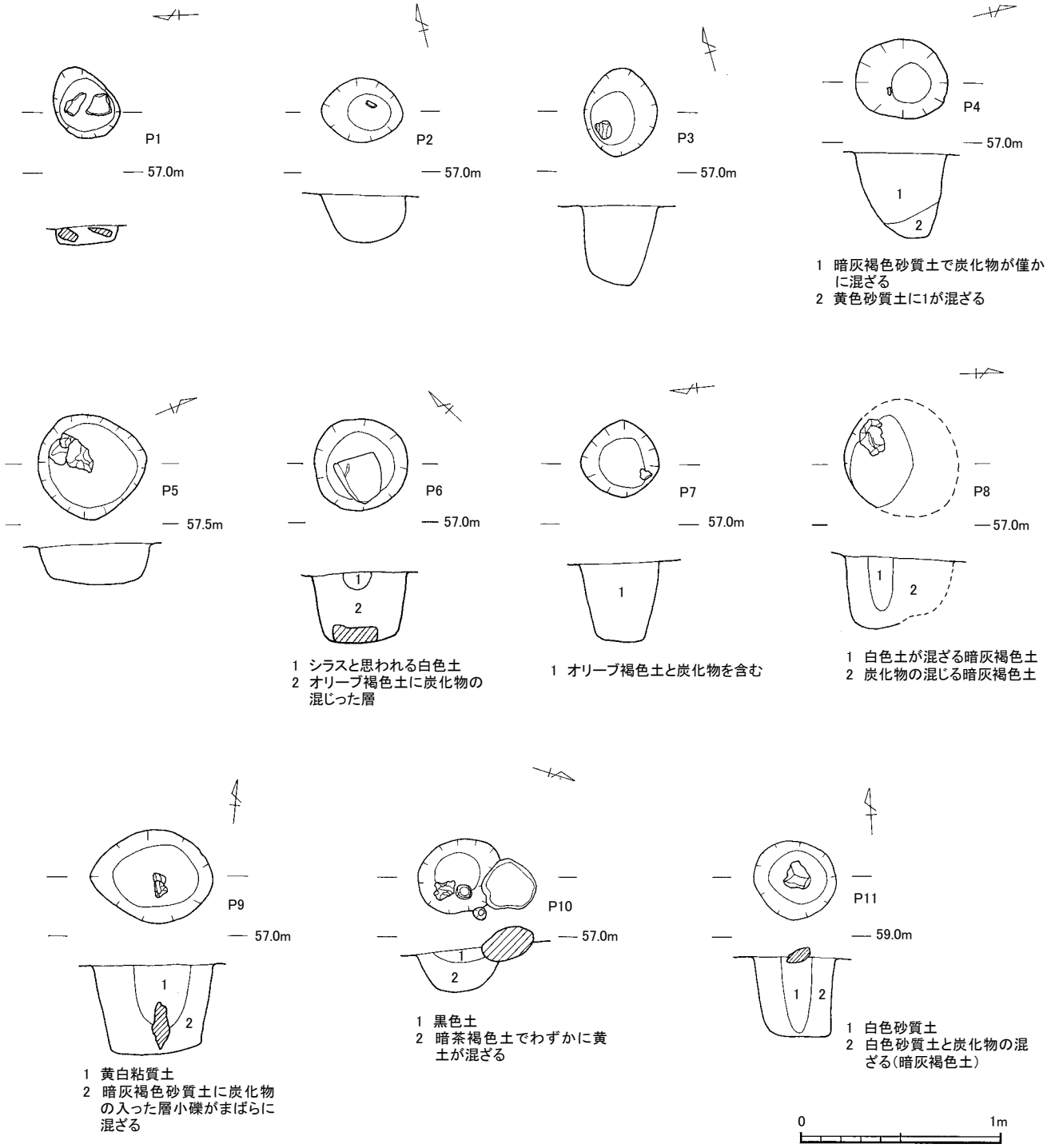
No.	柱穴			柱			樹種	備考
	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	形状	径(cm)	深さ(cm)		
1	48	38	40	−	−	−	−	−
2	37	30	20	−	−	−	−	−
3	46	26	32	−	−	−	−	−
4	34	40	34	−	−	−	−	−
5	32	26	34	−	−	−	−	−

（ウ）ピット（第112図）

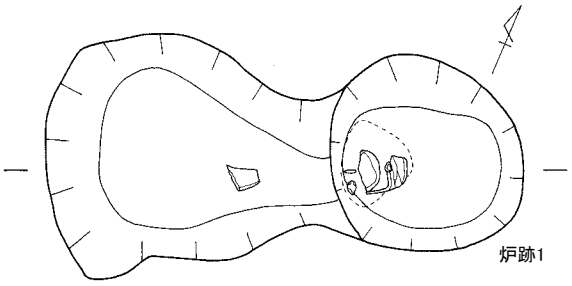
ピットが多数検出された。ピットの分布はまとまりがなく点在している。ピット内に礎石やぐり石を伴うものがあり，主なピット（以下，Ｐとする）11基について記述した。礎石を伴うピットはＰ６のみで，径は47㎝，深さは35㎝で底面には平坦な礎石が置かれていた。そのほかのピットは，ぐり石を伴っている。

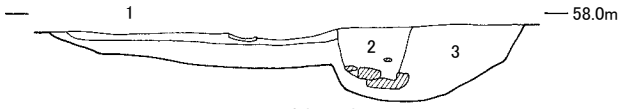
（エ）炉 跡（第113・114図）

炉跡は７基が発見された。これらの炉跡は全体に広がって分布している。炉体や上部構造は欠損し，保存状態は良くない。６号を除いて平面形は楕円形で，床面は船底状を呈し，深さは15～45㎝で炉体部が深い。炉体部には赤化した炉壁の一部が残存し，焼土や炭化物が堆積している。炉の主軸方向は一定ではない。

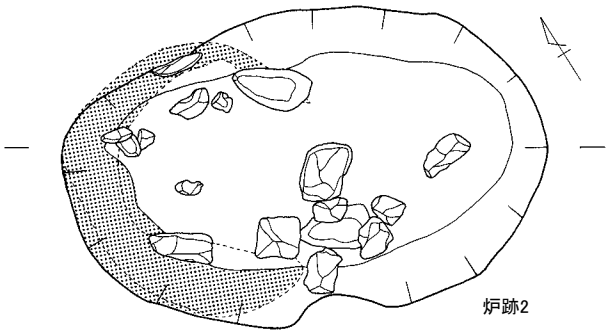


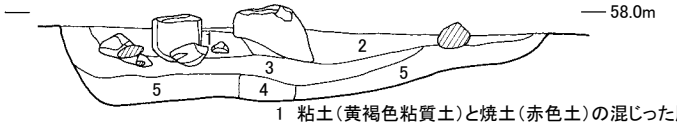
第112図　E地区　ピット



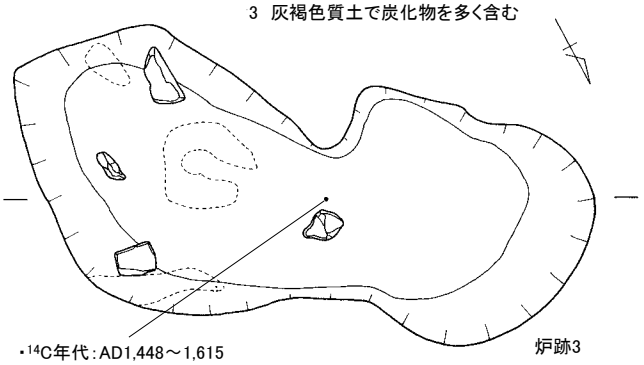


1 赤褐色焼土
2 炭化物を多く含む黒色土
3 灰褐色質土で炭化物を多く含む

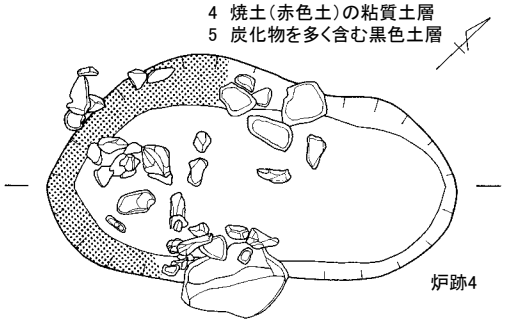




1 粘土(黄褐色粘質土)と焼土(赤色土)の混じった層
2 炭化物粒子を含むオリーブ褐色土
3 炭化物と焼土の混じった層
4 焼土(赤色土)の粘質土層
5 炭化物を多く含む黒色土層

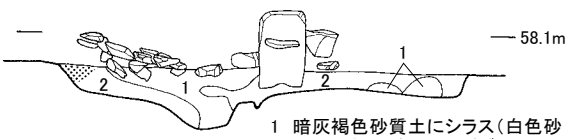


・^{14}C年代:AD1,448～1,615

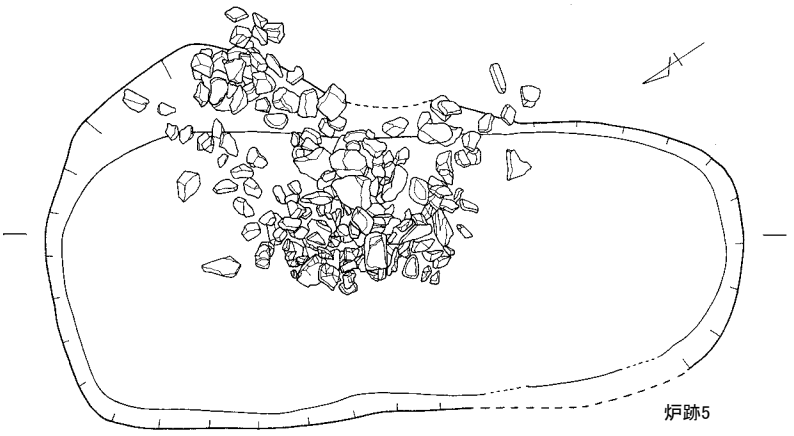


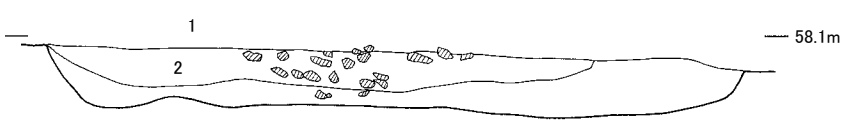


1 赤色焼土と炭化物がブロック状に混ざるオリーブ褐色土
2 黒色の炭化物集中に僅かに2の赤色の焼土が混ざる
3 赤色の焼土と粘土が焼けた感じと1が入り混じった層
4 黒色の炭化物集中区

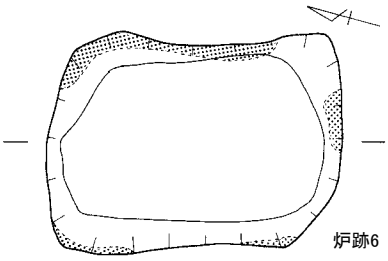


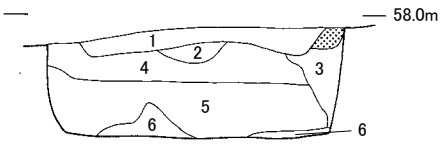
1 暗灰褐色砂質土にシラス(白色砂質土)焼土(赤色土)がブロック状に入り炭化物粒子も入った層
2 炭化物を多く含む黒色土層，焼土が全体に混ざる



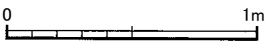


1 黒褐色土で炭化物や焼土と思われる赤褐色土が混ざる
2 オリーブ褐色土で所々に赤褐色土や炭化物を含む

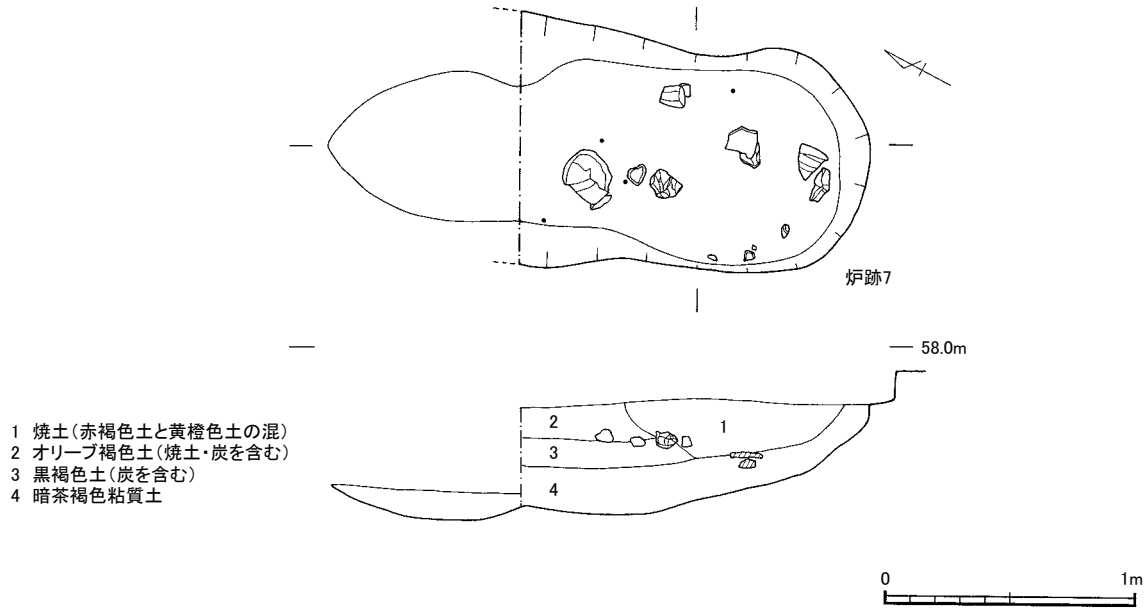




1 炭化物の多い黒色土，ほとんど炭化物
2 赤褐色硬質土，焼けてしまった焼土と思われる
3 炭化物を多く含んだオリーブ褐色土で粘質土
4 2の土が多く混じった黒色土
5 黒色土，炭化物をあまり含まない土
6 暗茶褐色粘質土



第113図　E地区　炉跡(1)



第114図　E地区　炉跡(2)

（オ）土坑（第115図）

土坑は，曲輪の中心部に近いT－6，U・V－7区で５基を検出した。形状は円形，楕円形の素堀りで，床面は平坦に仕上げる。縦72～87㎝，横69～135㎝，深さ15～92㎝と様々である。性格は不明。

ピット・炉跡内出土遺物（第116図）

520は炉跡4，521～523は炉跡7，528は炉跡1から出土した。520～522は龍泉窯系青磁の椀である。520は口縁端部がわずかに外反する。521は外面に雷文帯が簡略化されたと思われる横線が巡る。522は口縁端部が外反し，丸くつくられるものである。523は白磁の坏である。高台は抉り高台を呈する。524～527はピット内出土で，糸切り底の小型皿である。528は瓦質土器の擂鉢である。一単位９条の擂り目が施される。529は（第107図）※印のピットから出土した。長さ3.1㎝，幅1.6㎝，厚さ0.8㎝の分銅形の銀小塊である。成分分析の結果，銀純度は90％以上である。

（カ）溝状遺構（第107図）

調査区の西側，曲輪の南西端から北東に延びた，T－5区でL字に屈曲した幅約１m，長さ約17mの溝状遺構である。深さは7～45㎝である。溝は南側で曲輪の崖方向に枝分かれし，北側で未調査部分の曲輪中心部へ延びていると思われる。溝の性格は不明である。

（キ）硬化面（第107図）

S－6区の曲輪南縁の表層下に，長さ約７m，幅50㎝で直線的な硬化面が検出された。時期は不明。

ウ　出土遺物（第117～121図）

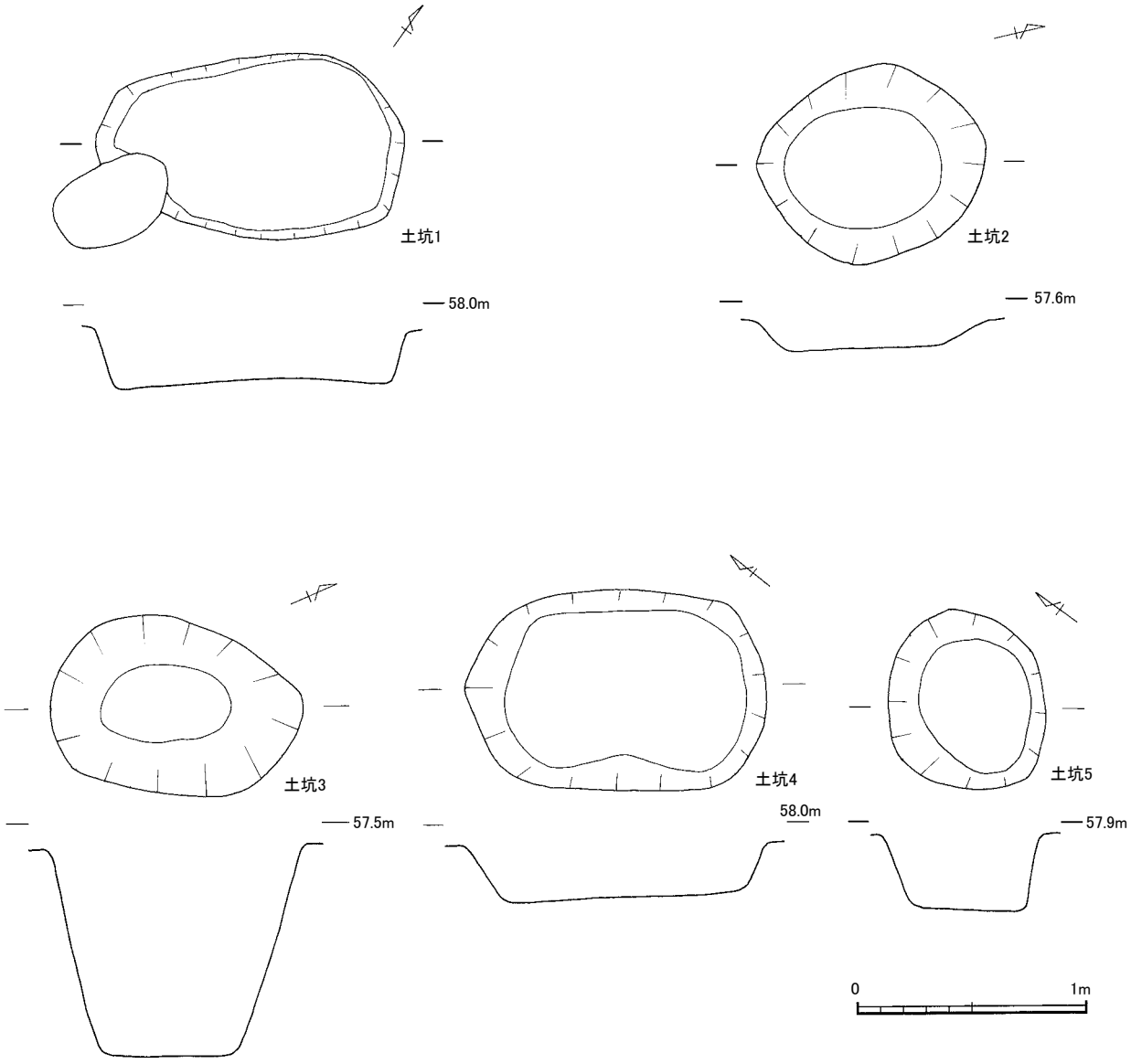
青 磁

530～545は龍泉窯系青磁である。530は剣先蓮弁文の椀である。剣先は省略され片側のみ描かれる。531は細線による蓮弁文が描かれるものである。532は口縁部が内弯するもので，外面に雷文帯が巡る。内面には片彫りによる文様が描かれる。533・534は口縁端部が外反し，丸くつくられるものである。535は外面に片彫りで蓮弁文が描かれる。蓮弁の中央に稜はない。見込みには印花文がスタンプされる。536は見込みに「顧氏」の印刻が押される椀である。537は畳付の外側が面取りされる椀の底部である。高台内面と高台内底面は露胎する。538は高台内底面が輪状に釉剥ぎされる椀の底部である。539は粗製のもので，胎土，釉調ともに質が悪い。見込みは円状に釉剥ぎされる。

540・541・542は皿である。542は口縁部が外側に強気に屈折する。外面に片彫りによる蓮弁文が描かれる。540は体部が内弯し口縁部で外反するものである。541は口縁部が外反する。腰部に鉋削りの痕跡が明瞭に残る。見込みは輪状に釉剥ぎされる。外面は腰部以下は露胎する。

543・544は盤で，543の口縁端部は輪花をなす。544は底部である。

545は香炉である。口縁部は直行し，口唇部は平坦でやや内側に突き出る。内外面に轆轤痕を残す。



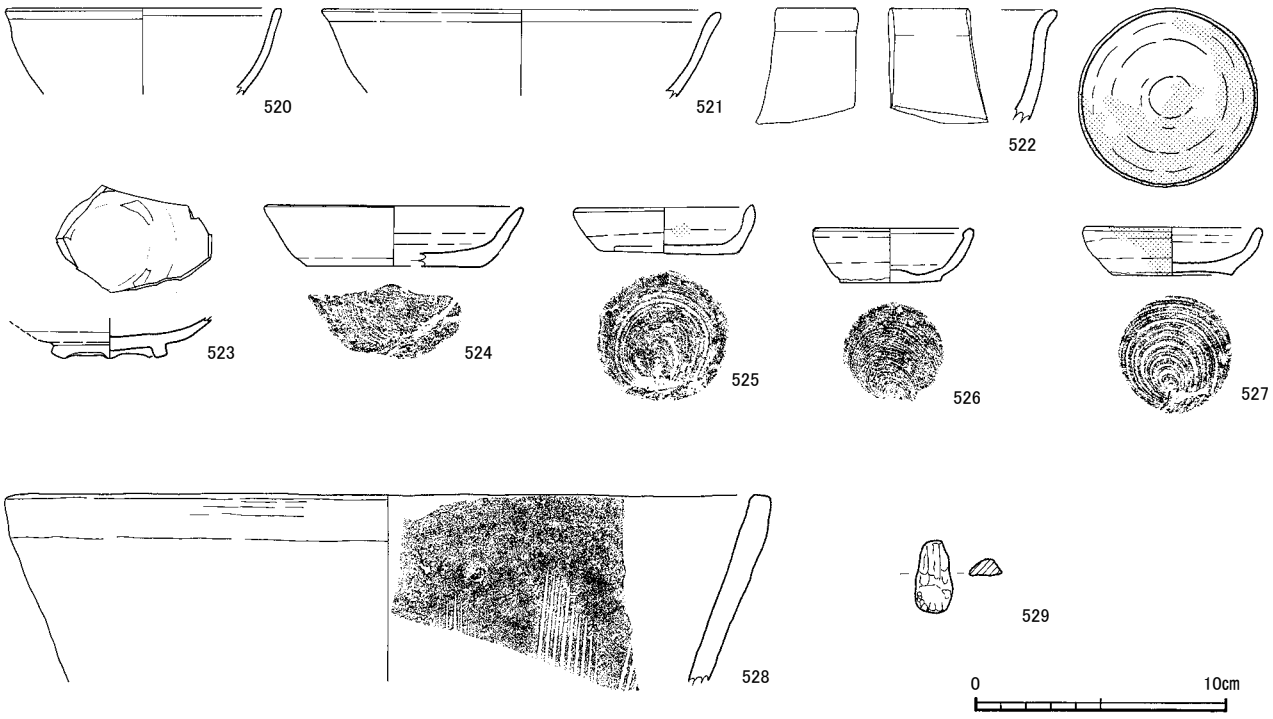
第115図　E地区　土坑

第26表　E地区　炉跡計測表

挿図番号	掲載番号	炉跡			全体	備考
		幅(cm)	長さ(cm)	深さ(cm)	長さ(cm)	
113	1	48	63	30	190	528
	2	73	75	31	195	−
	3	75	75	24	216	−
	4	58	40	15	163	520
	5	110	113	23	278	−
	6	104	63	44	80	−
114	7	215＋	85	45	−	521, 522, 523

第27表　E地区　土坑計測表

挿図番号	掲載番号	土坑			形状	備考
		縦(cm)	横(cm)	深さ(cm)		
115	1	80	135	27	方形	−
	2	86	101	15	円形	−
	3	72	111	92	略方形	−
	4	87	132	23	略方形	−
	5	74	69	35	円形	−



第116図　E地区　遺構内出土遺物

青白磁

546は青白磁の高台付の合子である。型作りされたもので，口縁部の釉は釉剥ぎされる。

白磁

547～549は白磁である。547は景徳鎮窯系の端反皿である。畳付先端の釉のみ釉剥ぎされる。548は八角皿である。高台は抉り高台を呈する。549は高台内底面は無釉で，「吾」の墨書文字が描かれる。

青花

550～555は景徳鎮窯系の青花である。550・551は蓮子碗である。体部はやや内湾気味に立ち上がるが，口縁部にかけては外上方向に直線的に開く形状を呈する。552・553は腰部が張る形状の碗である。見込みは広く平坦である。553の外底部には「長○○貴」の銘が書かれている。554は端反の皿である。見込みには玉取獅子文が描かれるものと思われる。555は瓶である。白化粧土をかけ，その上から呉須で花唐草文を描く。内面は基本的に無釉である。

緑釉陶器

556～558は緑釉陶器である。556・557は壺の肩部片，558は平底である。器壁は薄く，胎土は白粘土で粒子が細かい。

土師器坏・皿

559～563・565は坏である。高さが３㎝以上のものは坏とした。平底で，腰部から体部にかけて直線的に外開きの口縁部となる。腰部がやや凹む。562･563の内底面は中心部で高く波打つ仕上げとなる。564・566～582は器高が３㎝以下で皿とした。腰部から直線的に外開きするものと腰部から体部にかけて丸味を呈するものがある。腰部から坏と同様に内底が波打つ形状となる。

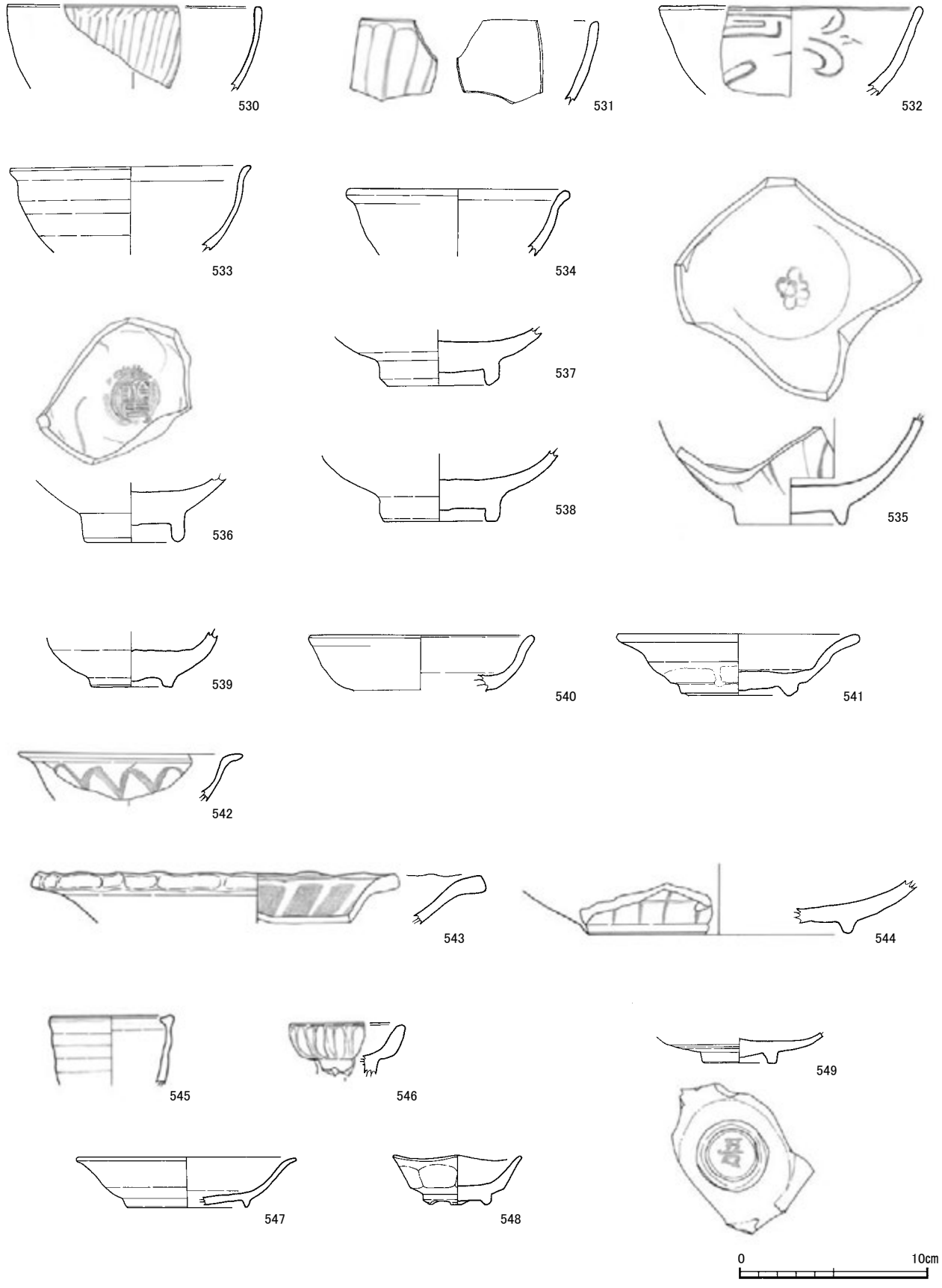
皿について，564・569・571・572・573を除いて，平底の底部が円盤状に外まで突き出し，腰部の立ち上がりは平坦または凹線状に凹み，体部との境に浅い稜線が付き，特徴的といえる。すべて糸切り底である。

天目碗

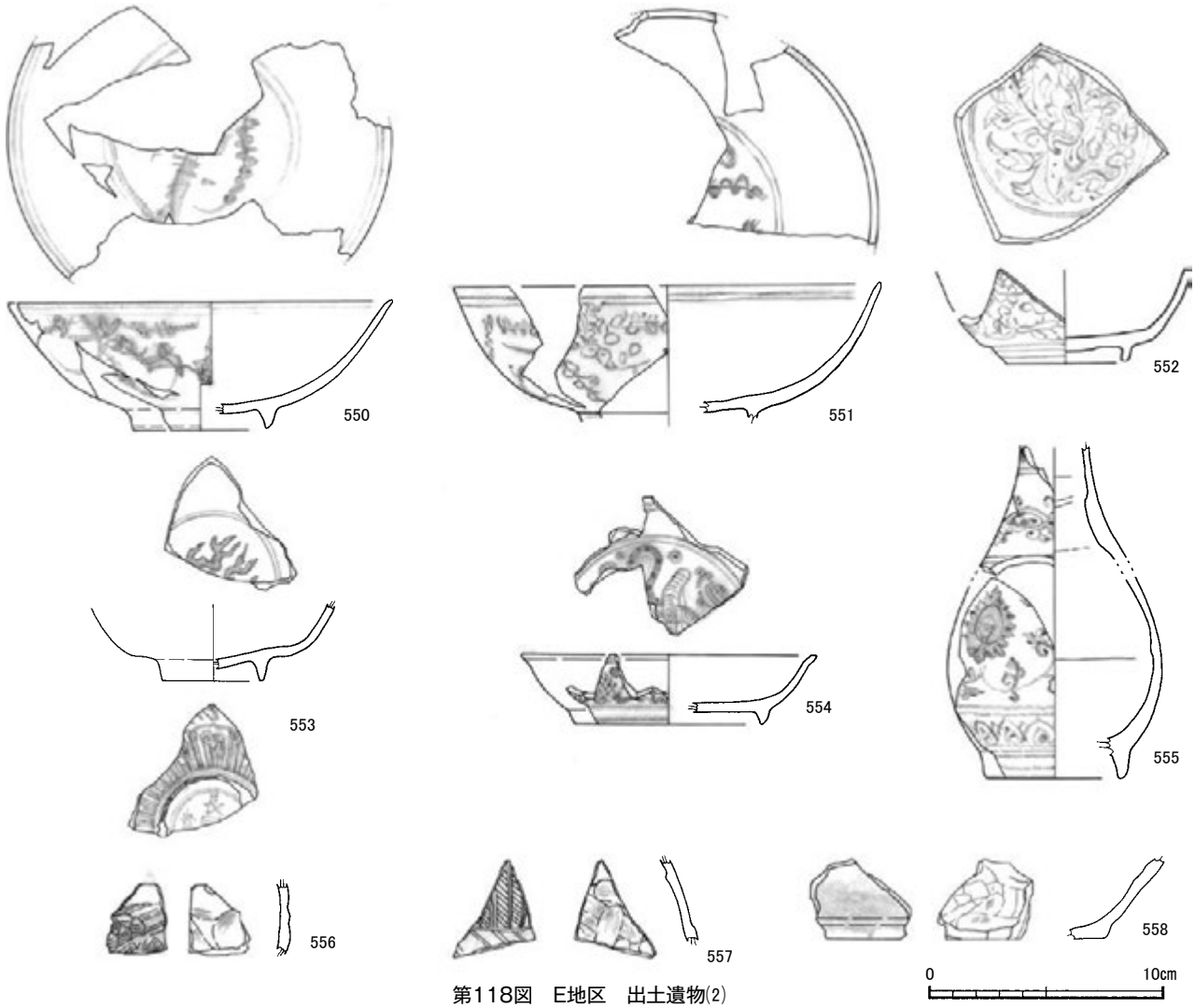
583は中国産の天目碗である。胎土は淡黄色を呈し，釉は鉄泥による化粧土の上から褐釉をかける。

薩摩焼

584は薩摩焼龍門司系で，山元窯産の灯明皿である。見込みに胎土目の痕跡が残る。585は大形の壺である。焼しめである。産地等は不明である。587は灯明具で，たんころ形の秉燭である。薩摩焼苗代川系のものである。588は仏飯器である。薩摩焼龍門司系のもので，見込みには蛇の目釉剥ぎが施される。



第117図　E地区　出土遺物(1)



第118図　E地区　出土遺物(2)

その他の陶器等

586は輸入陶器で中国南部産と思われる壺である。589は備前産の擂鉢である。一単位7条の擂り目が入る。590は瓦質土器である。590は擂鉢で，内面下位の擂り目は，使用のため摩滅している。591は風炉である。上中下に３本の突帯文を巡らし，突帯文間には鋸歯文，重弧文をスタンプで刻印する。592は土師質土器の焙烙である。口縁部の2か所に小孔が穿かれ，口唇部からは器の表側に縦に貫通した小孔が穿かれている。外面には煤が付着する。

土錘

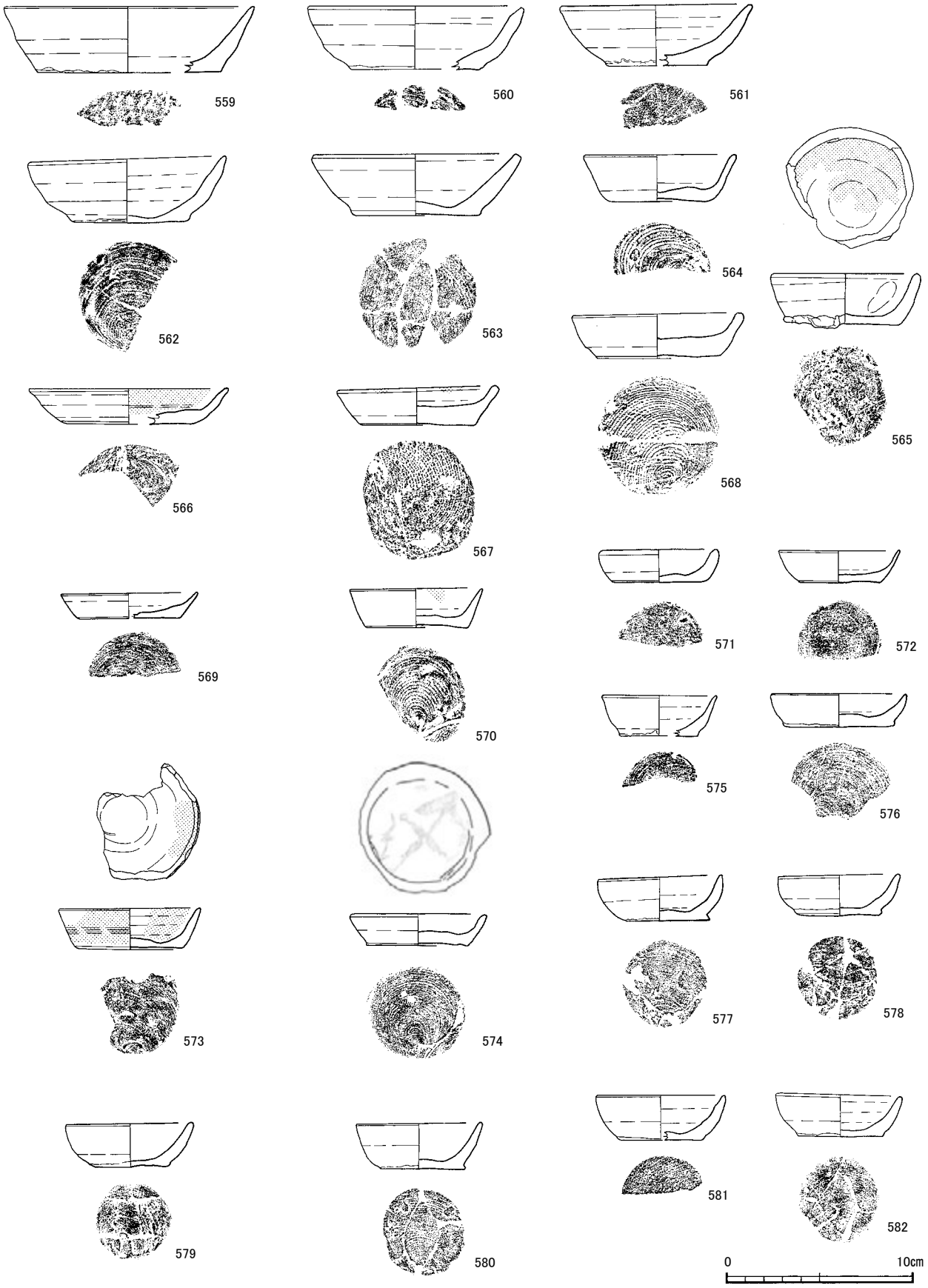
593～602は管状土錘である。中心部で膨らみ両端は細く仕上げる。

金属器

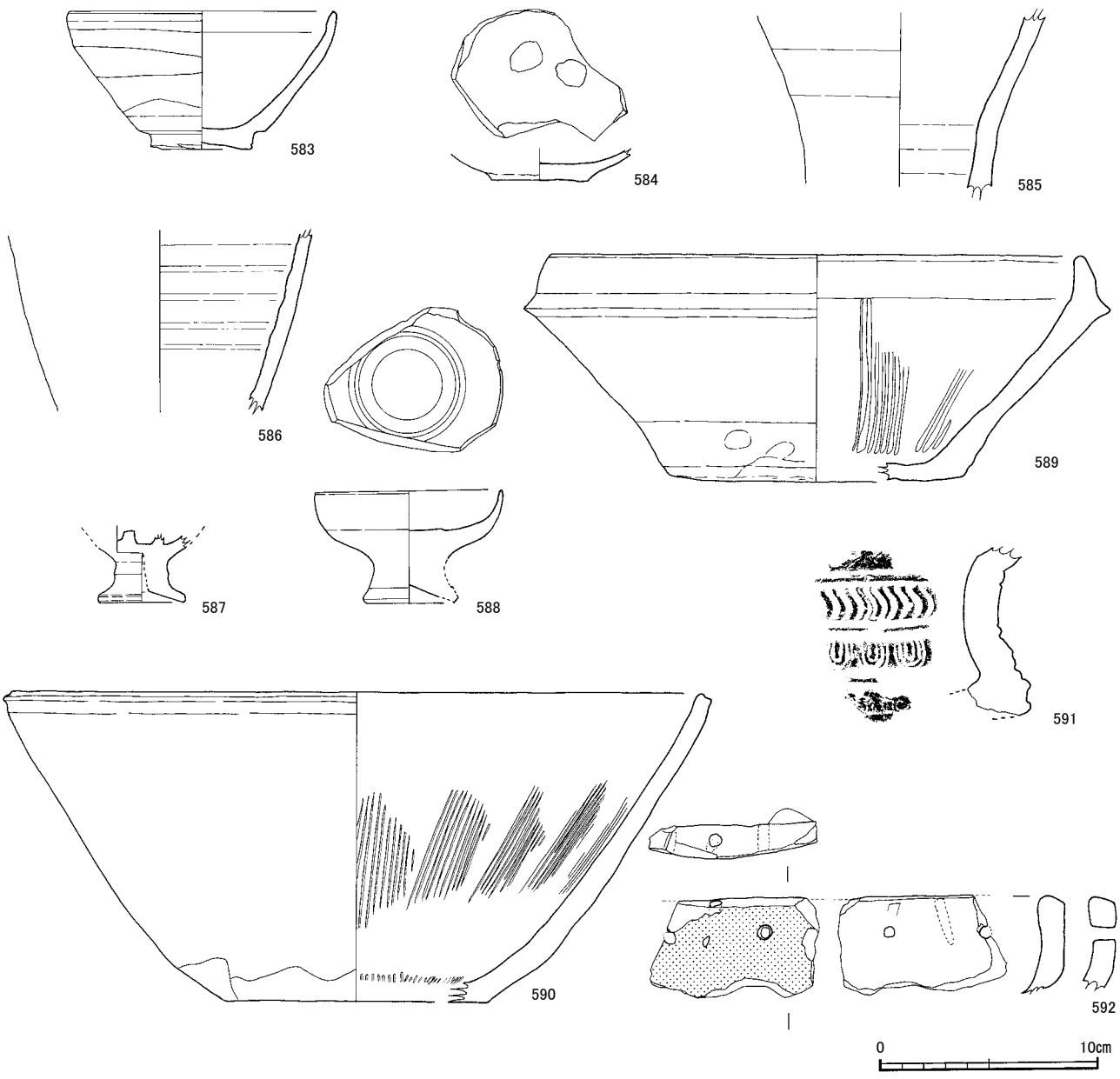
603は雁又鏃である。全体が錆に覆われ，両刃先は欠損しているが，雁又鏃の形はほぼ留めている。604～606は扁平でヘラ状の鉄製品の一部である。607は鉄板を二重に重ねて造られ先端は鋭く尖っている。608は青銅製のほぼ完形の笄である。609は青銅製の簪である。頂部は捻って耳かき部とし，頭部には丸十の形の透かし彫りを施し，島津家の家紋を摸っている。610は煙管の雁首部分，611は煙管の吸い口部分である。612は青銅製で表面に2本の細線が見られる。613は洪武通寶の古銭で，背文に「一銭」の文字がある。

石製品

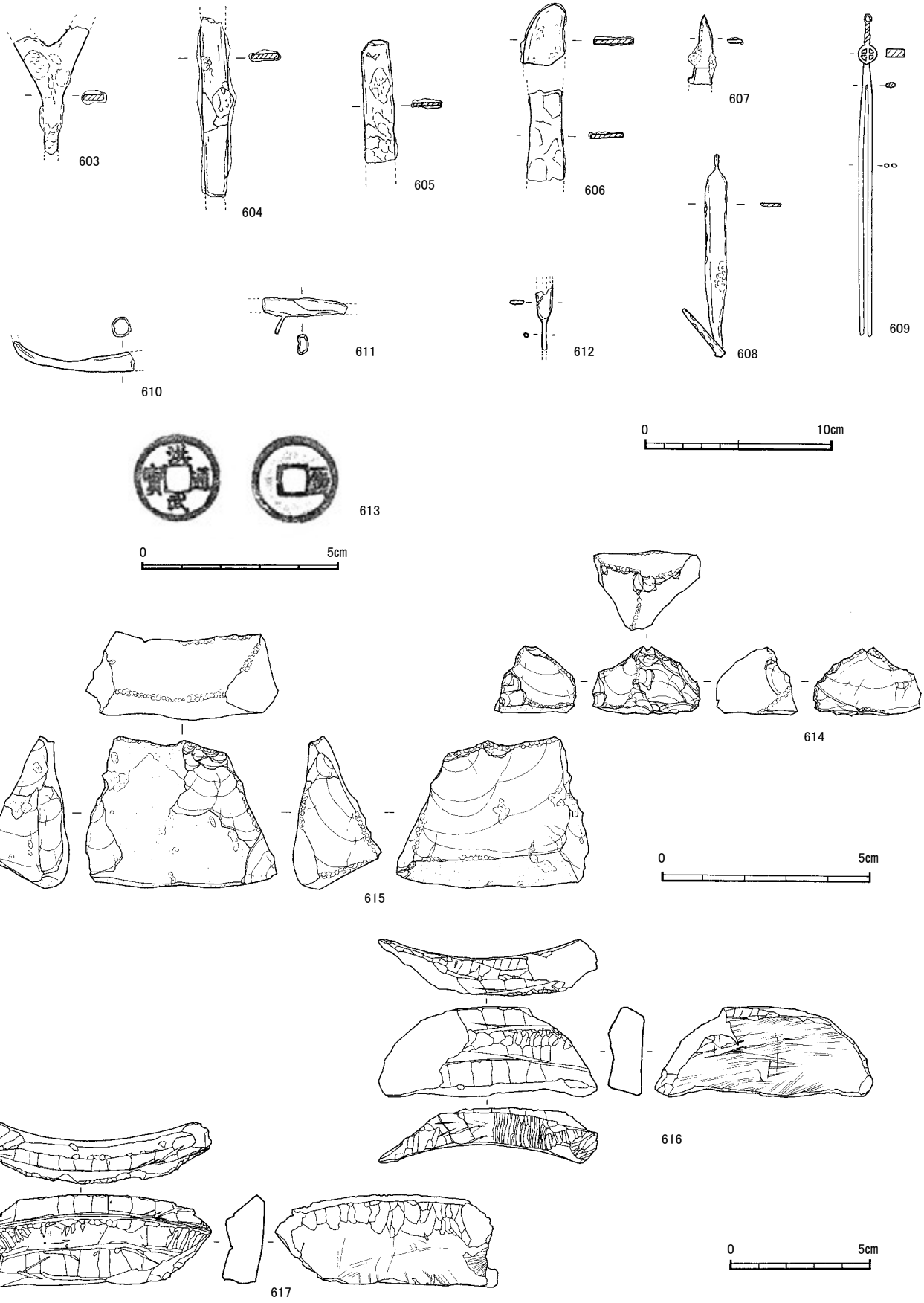
石製品には火打石2点，滑石加工品2点を図化した。614はチャートの三角錐様の小角礫を利用した火打石と推測される。615はチャート製のものであるが，ローリングを受けた自然面が残存していることから，河原石を打ち割り，加工して使用したものと推測される。打撃痕から，加工によって作出された側縁を火打ち鎌と打ち合わせ，使用した痕跡が残る。616と617は滑石製石鍋の口縁部の破損品である。幅1cm程度の突帯が確認できる。二次加工用品の素材として，保存しておいたものと推測される。石材，口縁部の形状等から，同一固体の可能性がある。



第119図　E地区　出土遺物(3)



第120図　E地区　出土遺物(4)



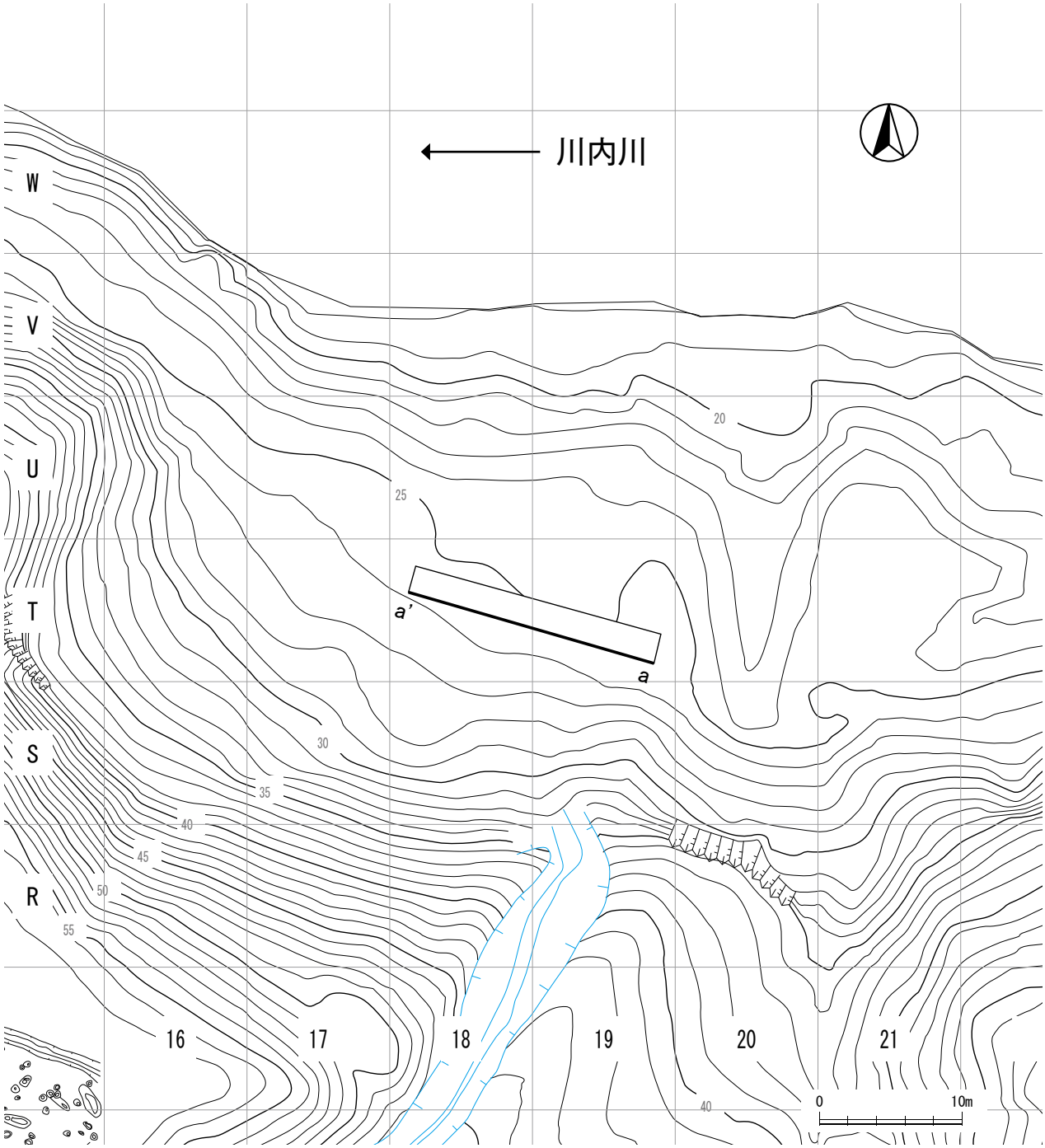
第121図　E地区　出土遺物(5)

（6）F地区の調査

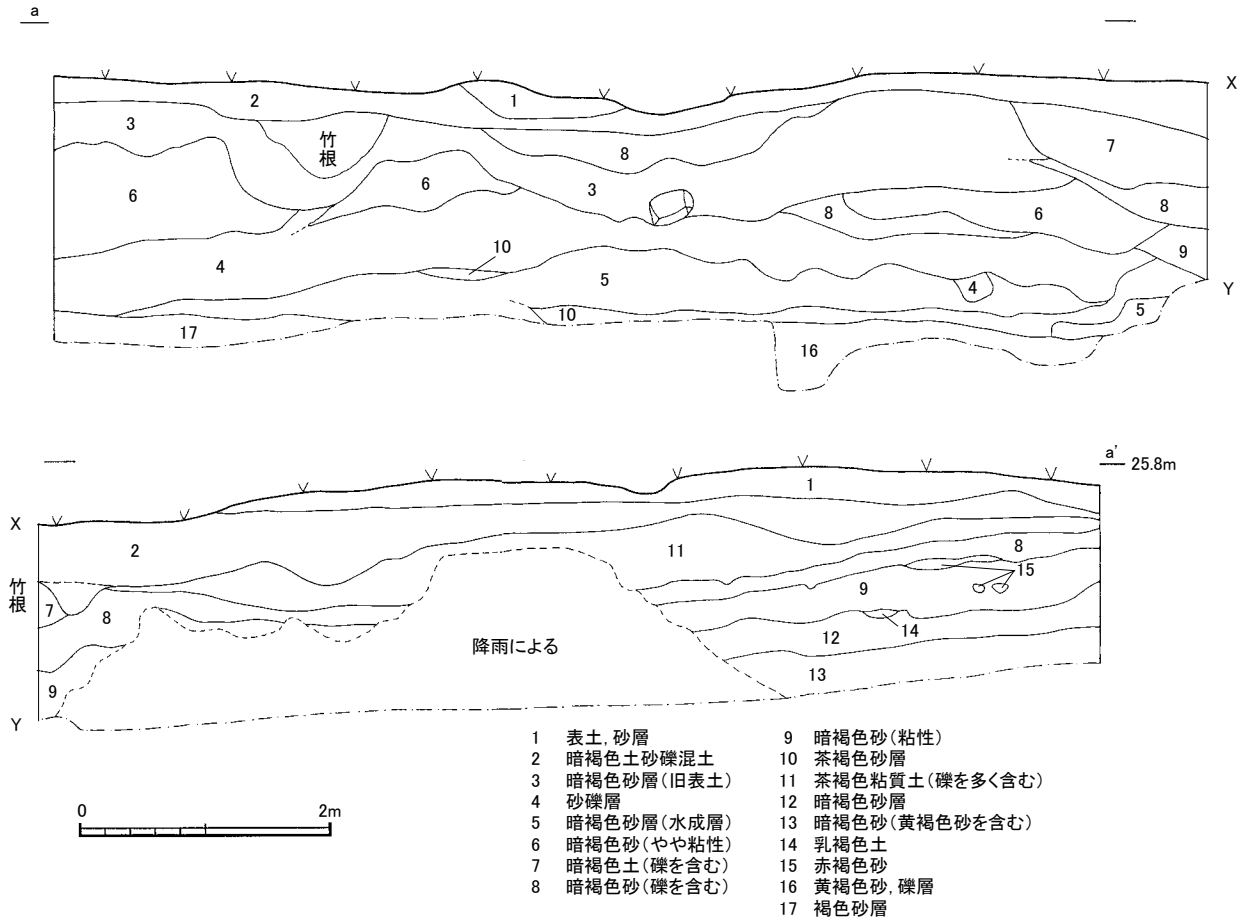
ア　概要

F地区は曲輪Cの北側の標高約14mの緩やかな傾斜地にあり，川内川に接する。

区域内に平坦地がほとんどないことから考えても，本区は曲輪として利用された可能性は低いと考えられる。周辺は竹林や雑木林に覆われていた。調査はそれらを取り除いた上で，わずかな平坦部分であるT－18・19グリッド付近にトレンチを入れて行った。トレンチ内の土層の表土は主として砂層であり，その下は黒褐色土や砂礫層，黄褐色土や礫を多く含む黒褐色土などを含む層が混在する状態であった。これは，川によって運搬されてきた土砂が堆積したり，堆積した土砂が流れによって浸食されたりした影響で複雑な層序になったと考えられる。本区からは遺構などは検出されず，出土遺物は陶磁器・土師器が２点と石製品が１点であった。



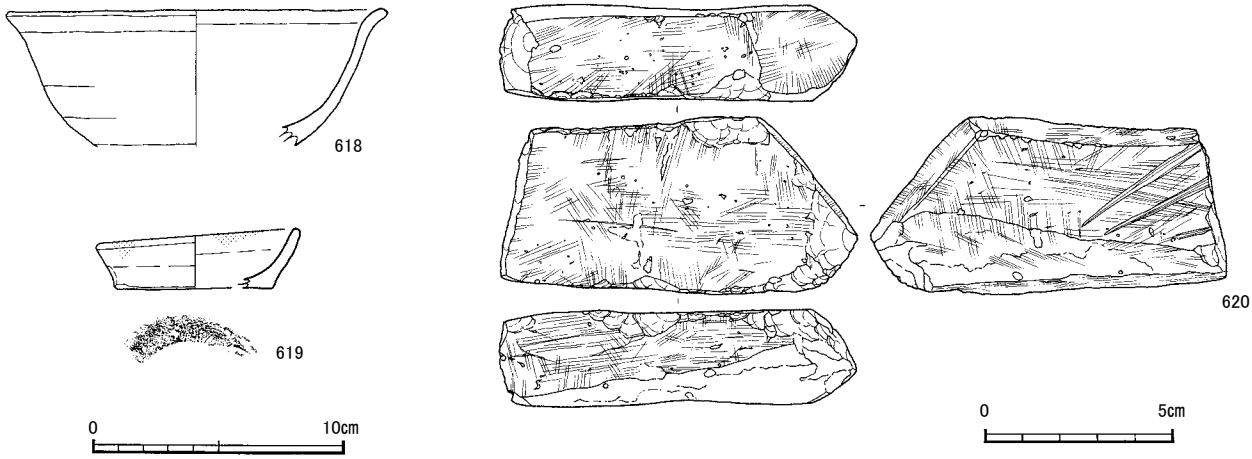
第122図　F地区　全体図



第123図　F地区　土層断面図

イ　出土遺物（第 124 図）

618 は青磁の椀。口径 15.2㎝。腰部は丸味を帯び，口縁部は外反する。619 は土師器の灯明皿で口径 8.2㎝，底径 6.2㎝，器高 2.4㎝で，糸切り底である。620 は天草陶石の砥石の破損品である。正面，上面，右側面を使用している。裏面には何かを研磨したと思われる直線の条痕が，交差するように数本確認できる。



第124図　F地区　出土遺物

（7）G地区の調査

ア　概要

G地区は約400㎡の平坦部を持つ曲輪である。南北に延びる平坦部の東側と西側に段差のある平坦部が取り巻いている。東側平坦部は約150㎡，西側平坦部は約600㎡の面積があり，H地区と接する。南側はM地区へと下り，東はK地区と接する。西は宮之城中学校の校庭に隣接する。標高は海抜62m。川内川の川面からは45mの高低差がある。東側及び西側平坦部は一段下がり，川面から38mの高低差がある。この曲輪はおきたの城と呼称されている。遺構としては，掘立柱建物跡1軒，溝状遺構1条，古道跡と思われる硬化面1条，土坑1基が検出された。遺物は青磁皿，石製品，鉄器，古銭などが出土している。

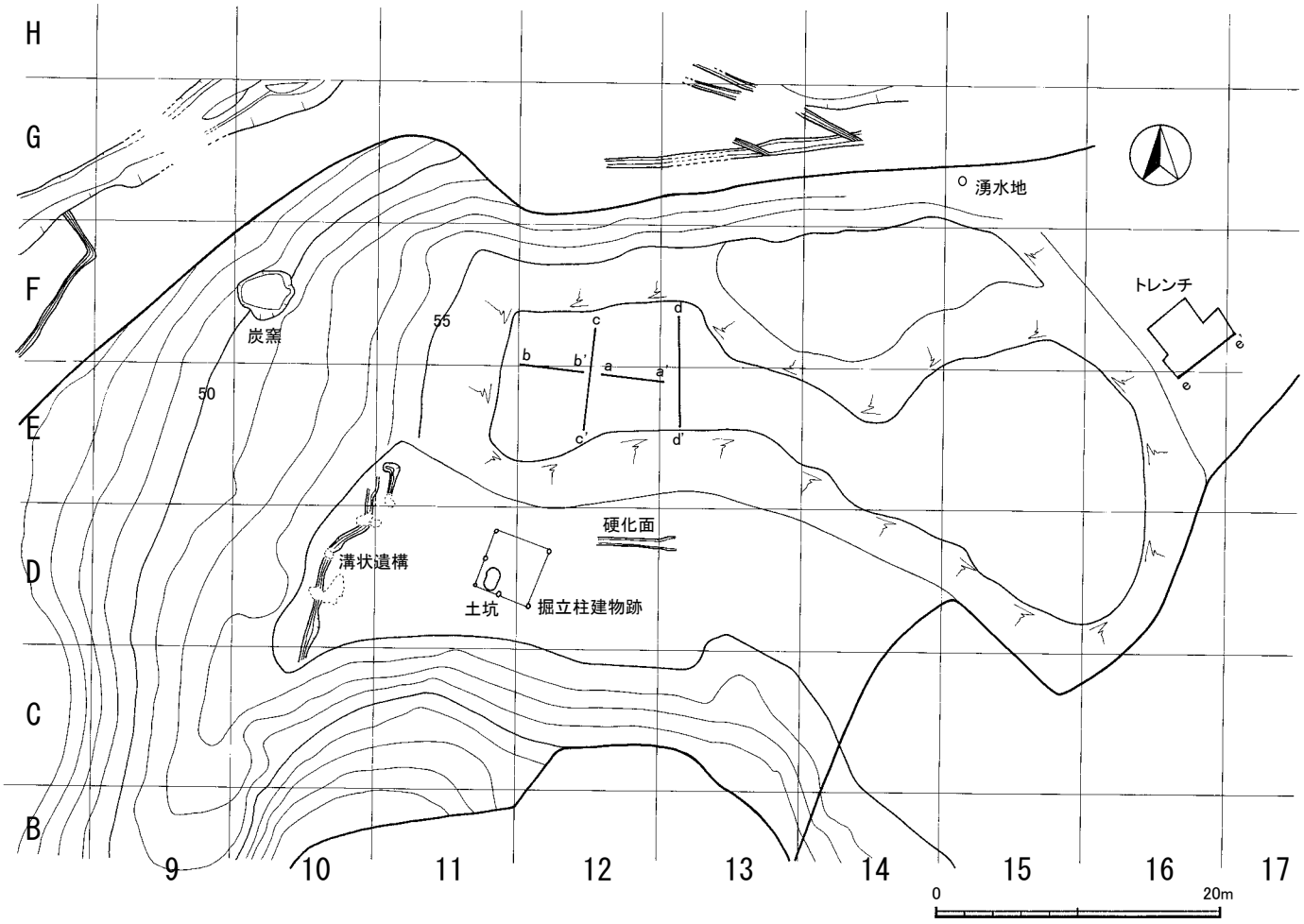
イ　遺構（第127～129図）

（ア）掘立柱建物跡（第127図）

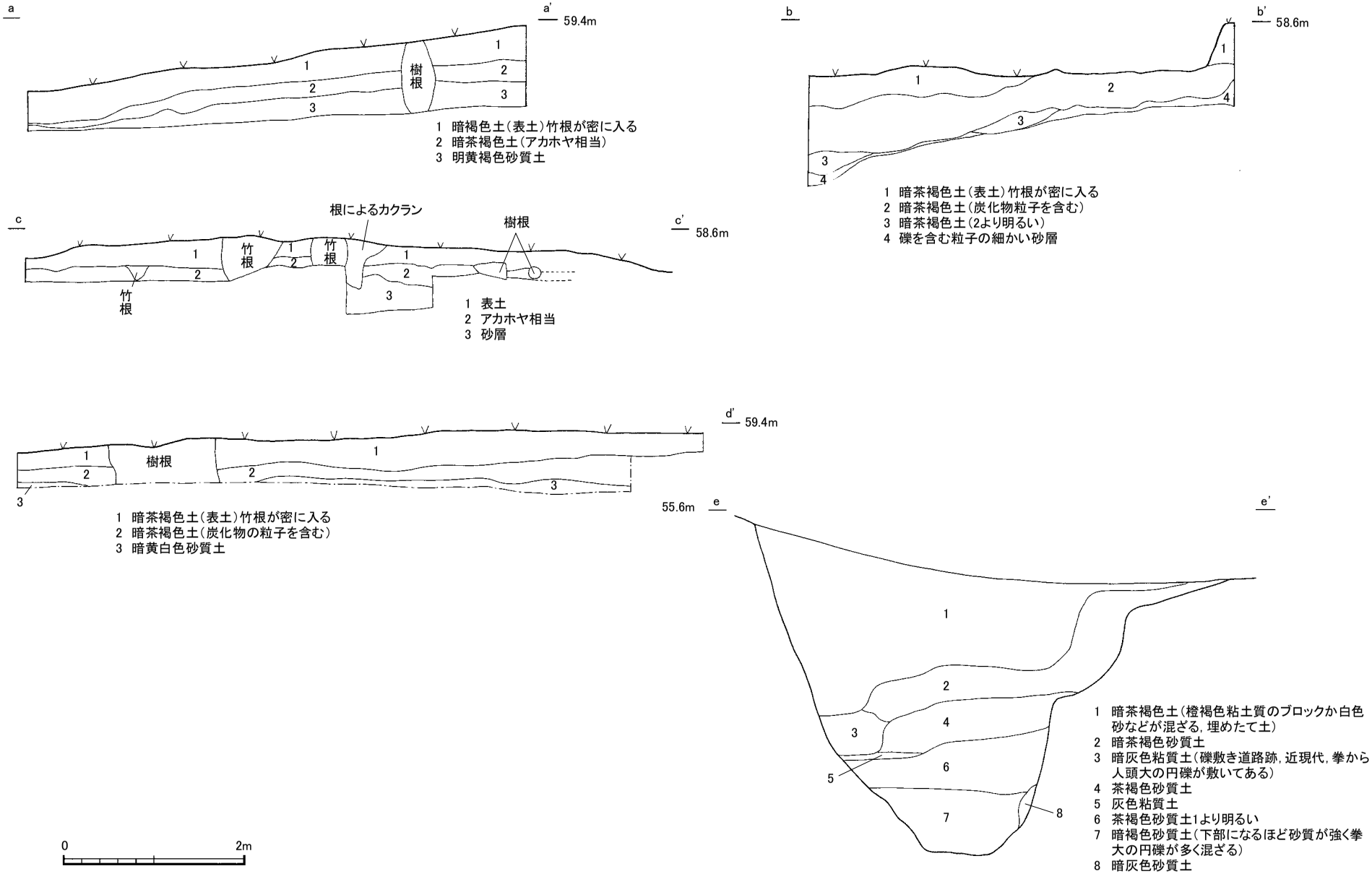
D－11・12区から，2間×2間の掘立柱建物跡が検出された。桁と梁の真ん中の柱穴は確認できなかったが，柱穴は6基を検出しされた。２・３の柱穴からはぐり石と見られる礫が出土した。柱穴２は浅いものの底付近に大角礫，上部には小角礫が配置されている。柱穴３の底には人頭大の角礫，上部には柱を取り囲むように小礫で固定している。柱穴の埋土には，炭化物を多く含んでいる。

（イ）溝状遺構（第128図）

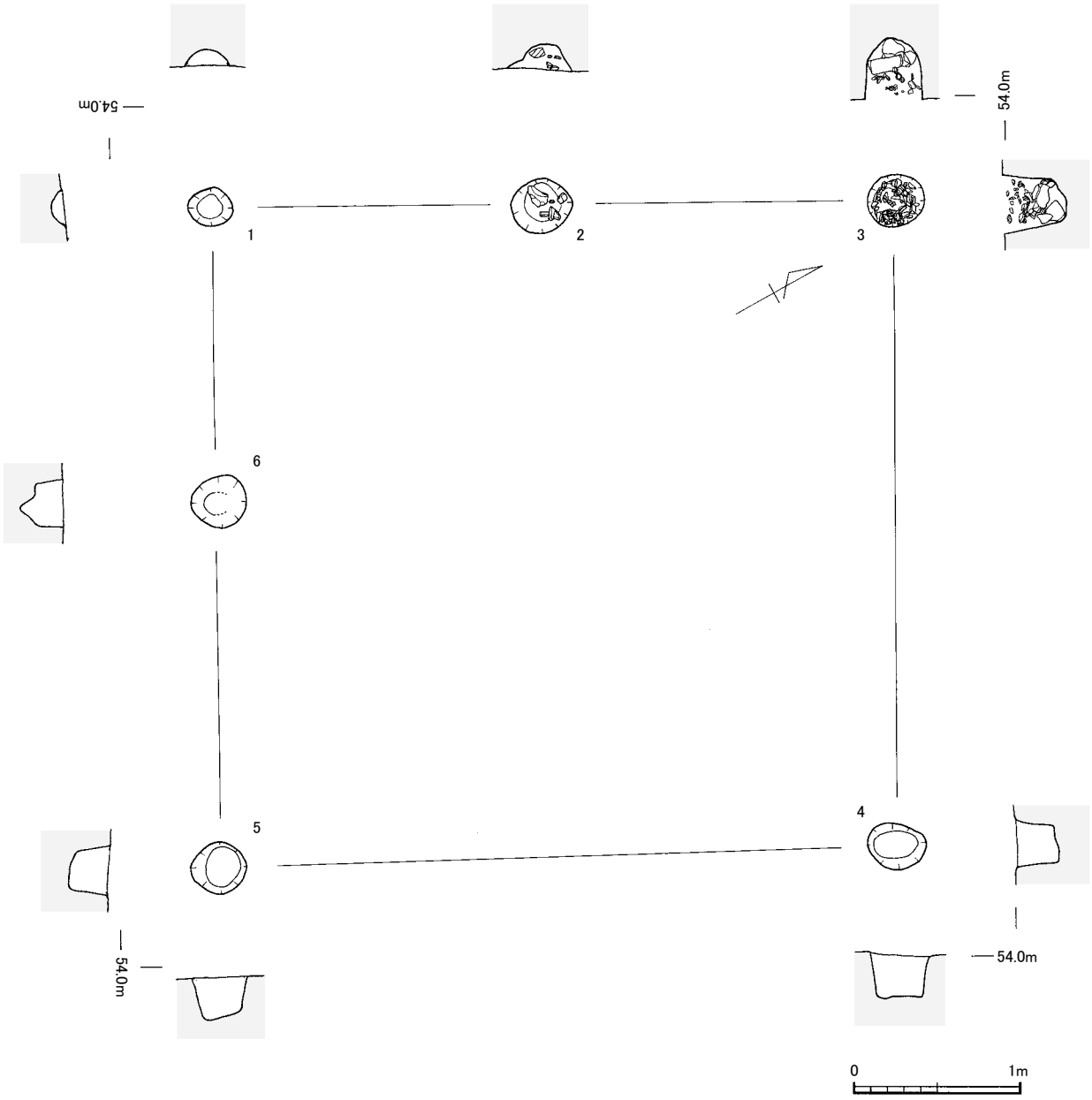
C～E－10・11区，曲輪南下段の平坦地の西側端部に，南北に延びる溝状遺構が検出された。所々攪乱が見られる。曲輪防御の施設と推測される。



第125図　G地区　（曲輪Ⅳ）全体図，遺構配置図



第126図　G地区　土層断面図



第127図　G地区　掘立柱建物跡

第28表　G地区　掘立柱建物跡計測表

主軸方向	方向	柱穴方向	柱間長さ		延長
			(cm)	尺=30.2cm	(cm)
N-29°-E	桁行	1—2	200	6.62	414
		2—3	214	7.08	
		4—5	410	13.57	410
	梁間	3—4	392	12.98	392
		5—6	220	7.28	398
		6—1	178	5.89	

No.	柱穴			柱		樹種	備考
	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	形状	径(cm)		
1	26	22	10	−	−	−	−
2	37	34	15	−	−	−	ぐり石
3	34	32	39	−	−	−	ぐり石
4	35	28	27	−	−	−	−
5	34	32	26	−	−	−	−
6	32	31	26	−	−	−	−

（ウ）硬化面（第125図）

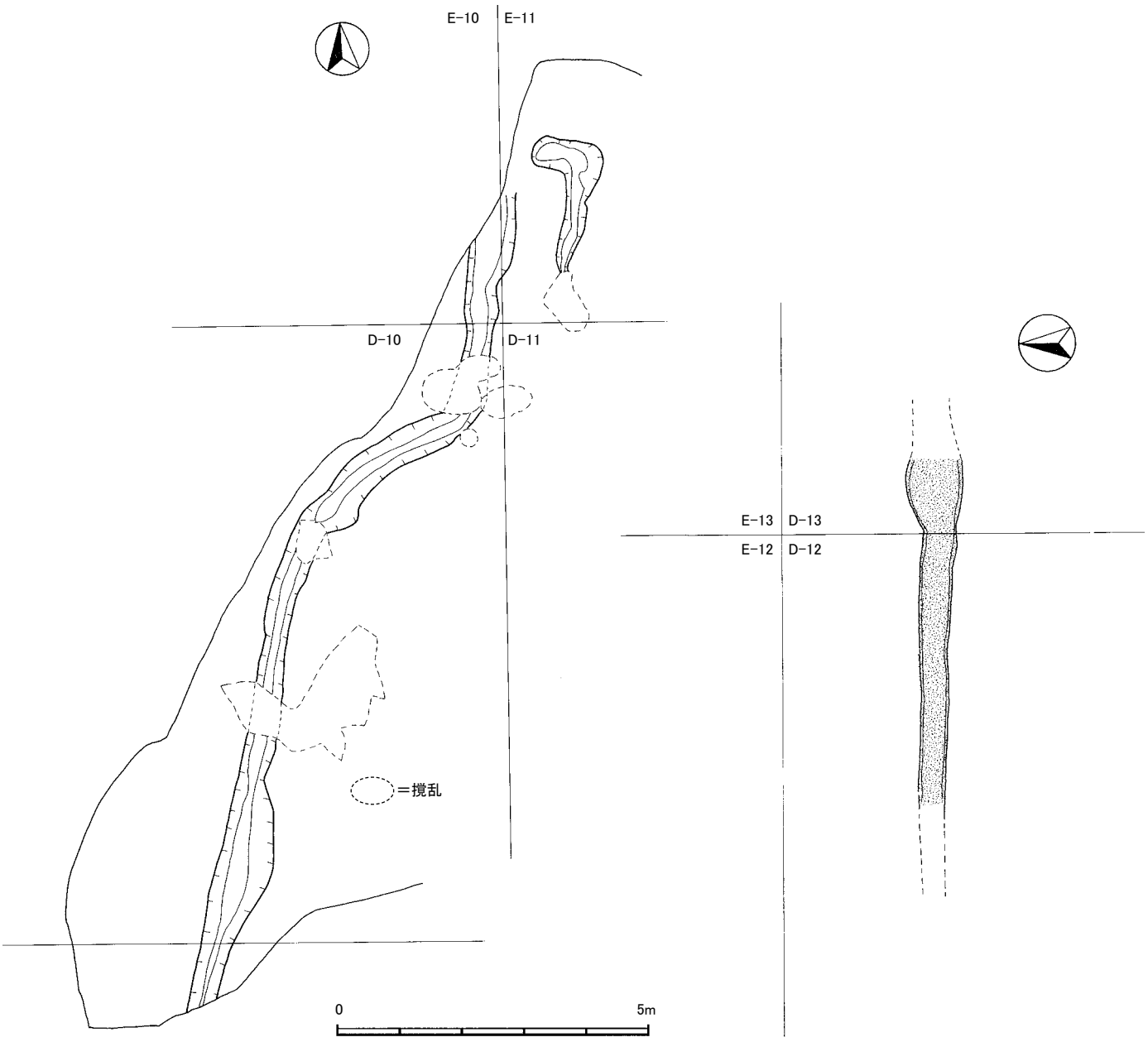
D－12・13区，南側平坦部に硬化面が検出された。古道と推測される。前述の掘建柱建物の東側に隣接するため，建物との関連が推測される。

（エ）土坑（第129図）

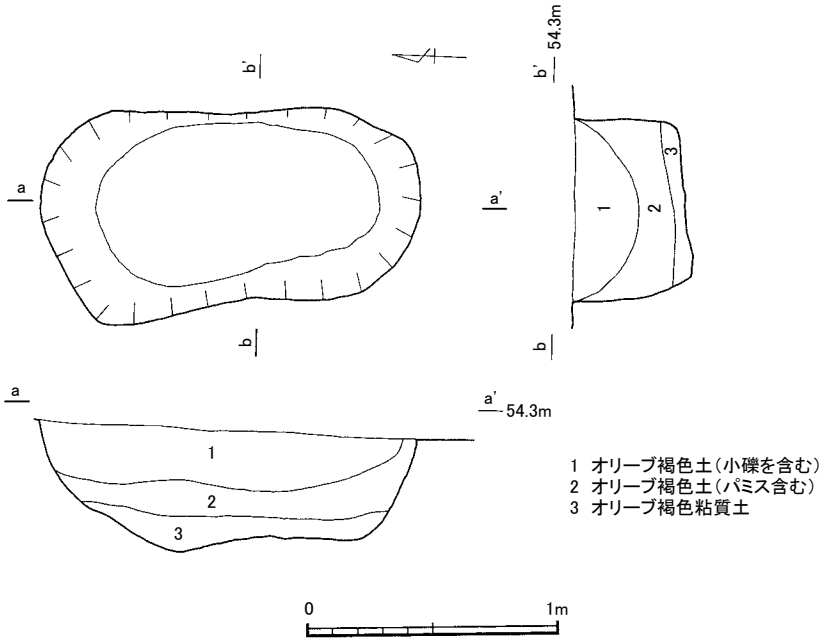
D－11・12区の掘立柱建物跡内に，土坑が検出された。長径1.53m，短径0.74mの南北方向に長軸を持つ楕円形である。埋土下部には小礫が多く確認され，埋土上部には炭化物を多く含む。埋土状況から建物に関連するものであろう。遺物は検出されなかった。

（オ）炭窯，湧水地（第125図）

F－10区で炭窯，G－15区で湧水地が検出された。いずれも近～現代に使用されたものと考えられる。



第128図　G地区　溝状遺構，硬化面



第129図　G地区　土坑

ウ　出土遺物（第130図）

青磁

621は青磁の皿である。腰部は張り，口縁端部が丸くつくられ口縁部は外反する。

土師器皿

622は土師器小皿を用いた坩堝である。内面に泡状の溶解物が付着している。

石製品

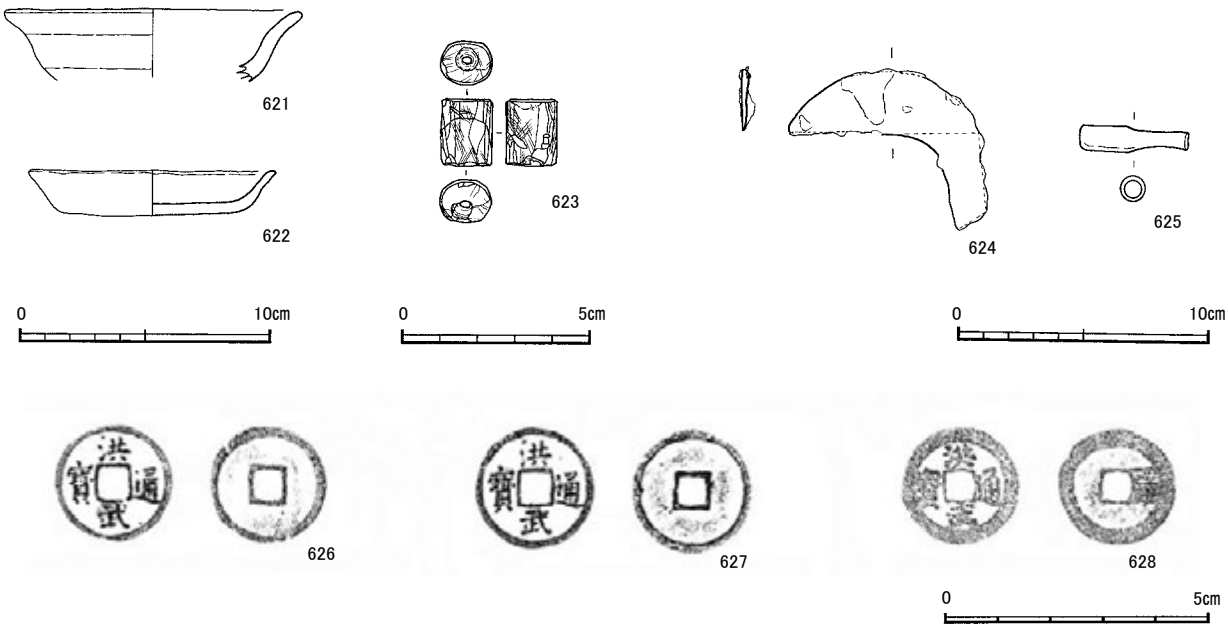
623は滑石製の長さ1.8cm，幅1.3cmの管玉である。未製品であるが，直方体に加工した石材に孔を穿ち，側面を管状に調整したもので，垂飾品と思われる。

金属器

624は腰曲輪から出土した小型の鎌状の鉄器である。刃部は長さ7.3cmで，柄尻は欠損している。625は銅製の煙管の吸い口である。

古 銭

626～628は銅銭で「洪武通寶」である。628の背に文字がみられ，小平銭と思われる。



第130図　G地区　出土遺物

（8）H地区の調査

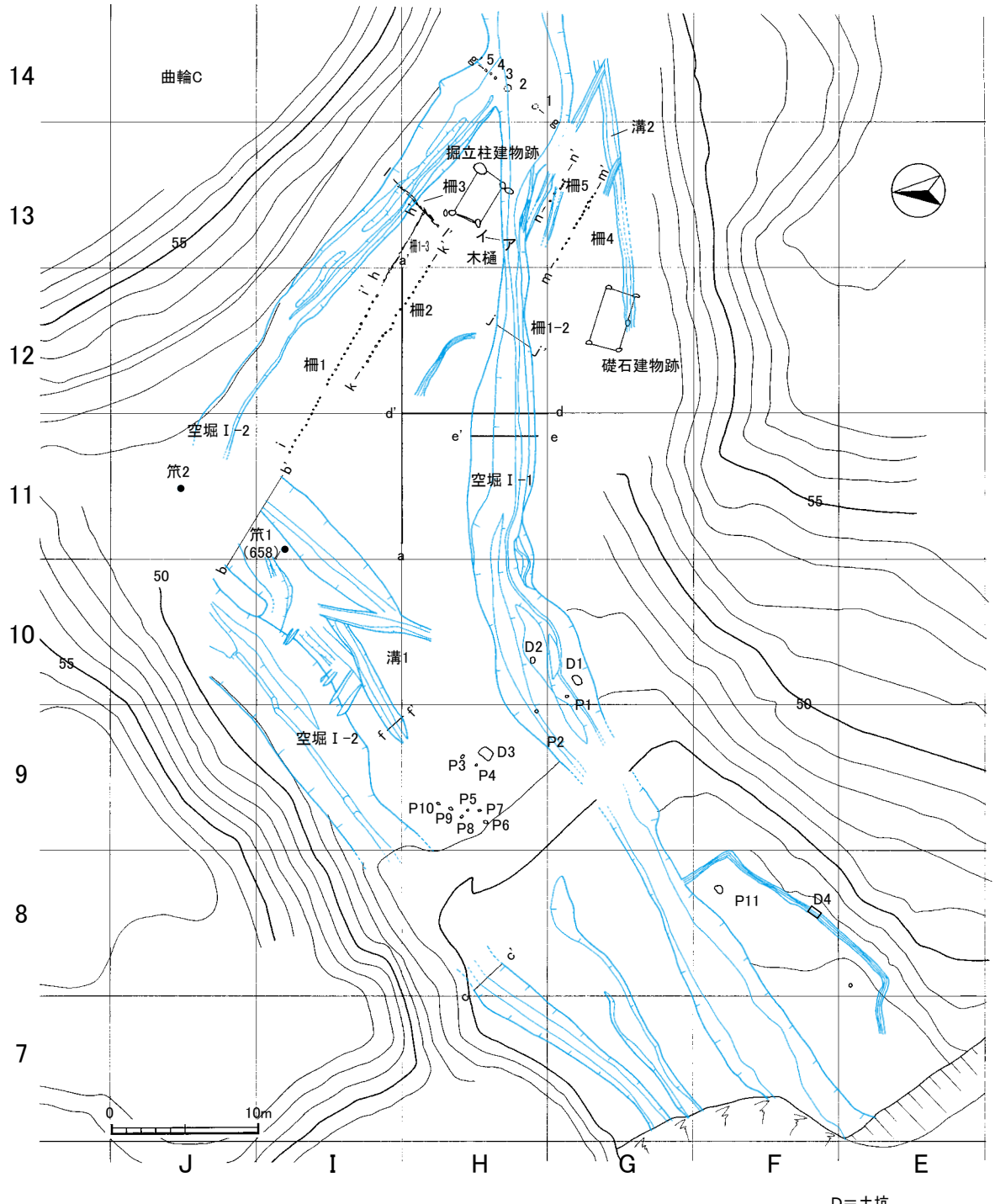
ア　概要

北は曲輪C，南はG地区，西はI地区に囲まれた谷部にあたる。谷部は南東方向に幅約20～50m，長さ約70mの緩やかな傾斜地でK地区の石切場，川内川下流へと続く。標高約40～50mである。

谷部の調査は，山からの湧水や浸み出た水が集積する場所であり，柵等の遺構や木製品も出土した。

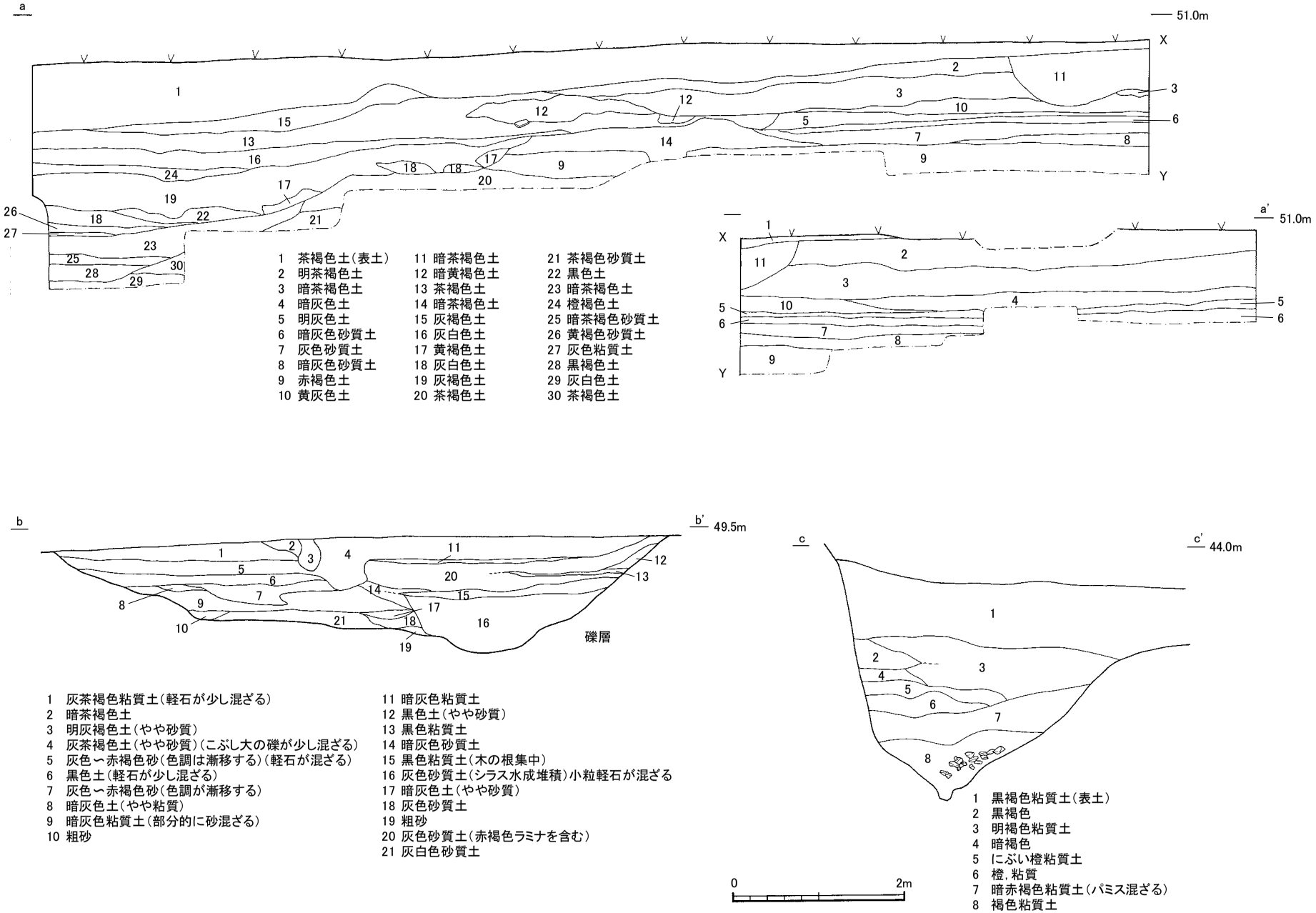
当地区は，空堀Ⅰが破棄された後，地層断面（第133図）32層の灰褐色土層上は幾重にも造成や自然堆積による互層の堆積がみられる。

中世山城に関係する遺構としては，B地区から空堀Ⅰが延びている。空堀が埋まった後の遺構として，掘立柱建物跡や礎石建物跡，柱痕，杭列，柵（しがらみ），木樋などが検出された。

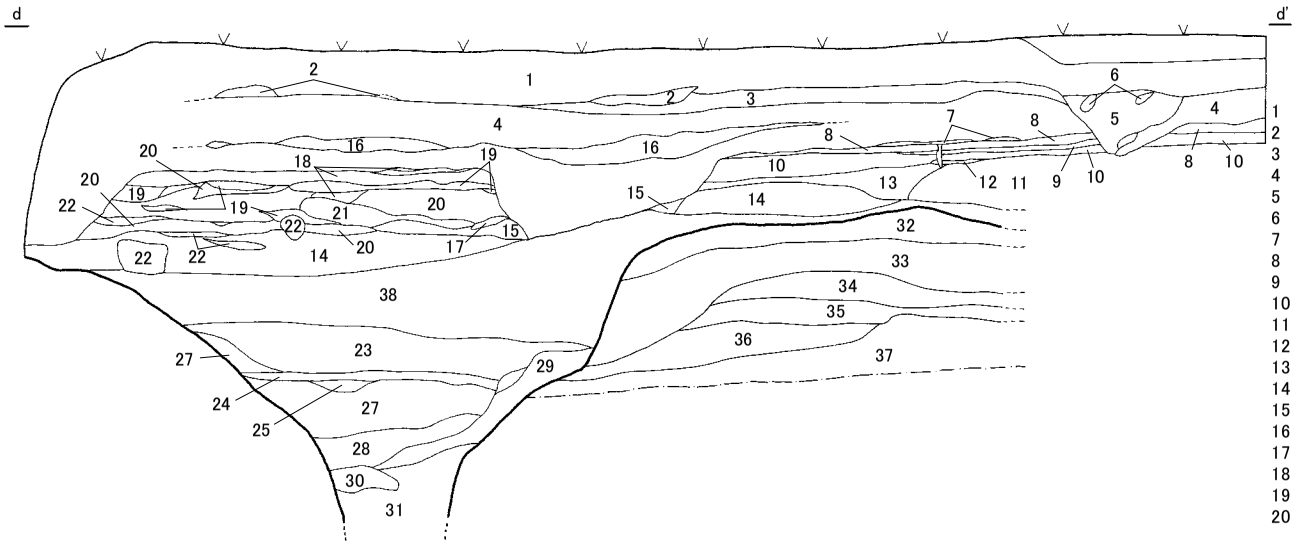


＊ D＝土坑
P＝ピット

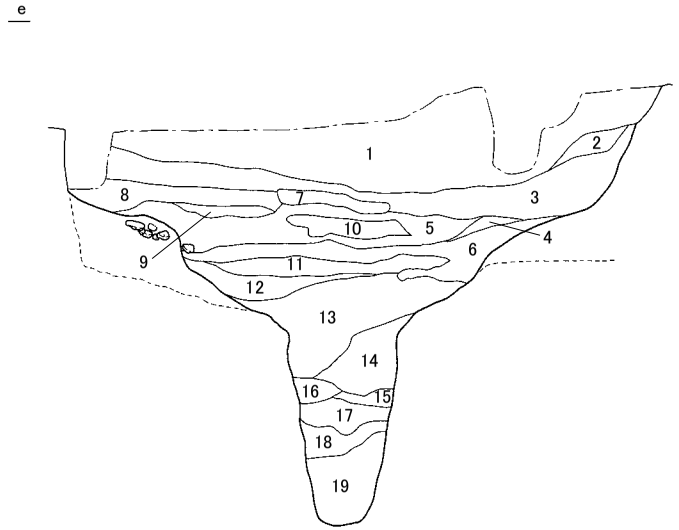
第131図　H地区　全体図，遺構配置図



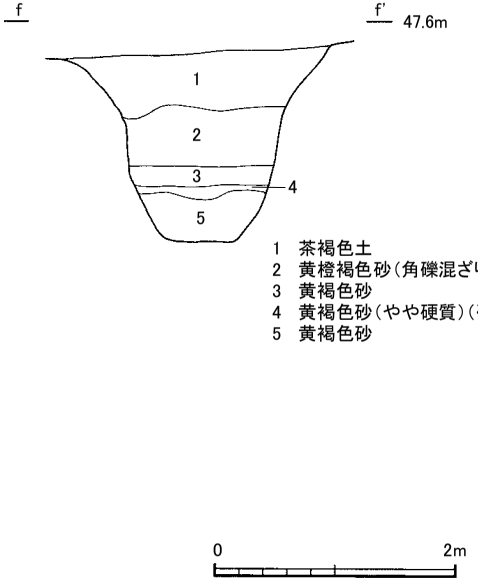
第132図　H地区　土層断面図



1 暗茶褐色土(円礫混ざる)
2 茶褐色土2次シラス混ざる
3 明茶褐色土
4 暗茶褐色土(やや粘質あり)
5 1とほぼ同質
6 黒色土(白色パミス混ざる)
7 灰色砂
8 黄橙色砂質土(白色パミス混ざる)
9 暗橙色砂質土
10 灰色砂質土(やや粘性あり)
11 暗赤褐色砂質土
12 8と同質
13 暗褐色砂質土
14 暗黄褐色砂質土(2次シラス)
15 14が少しにごった土
16 暗茶褐色土
17 白色砂質土
18 黄白色砂質土
19 黒色土
20 橙色粘質土
21 灰色砂質土
22 灰色粘質土(ブロック状)
23 黄褐色砂質土
24 灰色粘質土
25 赤褐色小礫
26 黄褐色砂質土
27 赤褐色砂質土(下部のみ灰色)
28 赤褐色砂質土(小礫混ざる)
29 黒色砂質土(やや粘性あり)
30 赤褐色砂質土
31 灰色砂礫
32 灰褐色土
33 明茶褐色土
34 灰色砂
35 明灰色粘土ブロック混砂
36 茶褐色砂
37 赤褐色硬質砂
38 黒褐色粘質土



1 暗茶褐色土(やや粘質がある，小指先大の黄色パミスが少し混ざる)
2 明茶褐色土(やや砂質，小指先大の黄色パミスが少し混ざる)
3 灰茶褐色土(やや砂質，礫が若干混ざる)
4 灰色粘質土(一部赤化がみられる)
5 赤褐色砂(水成作用及び鉄分集中により赤化している)
6 暗灰色粘質土
7 暗茶褐色砂質土
8 灰色砂質土
9 橙褐色砂質土
10 暗黄褐色砂質土
11 赤褐色砂(小石混ざりの粗砂)
12 灰色砂質土(粒子細かい)
13 赤褐色砂(礫が若干混ざる，鉄分でやや固くしまる)
14 暗茶褐色細粒砂
15 礫混じり赤褐色砂
16 明灰色粘質土(ブロック状にはいる)
17 暗茶褐色細粒砂
18 黄橙色粘質土(礫混ざり)
19 黄褐色砂混ざり礫層



1 茶褐色土
2 黄橙褐色砂(角礫混ざり)
3 黄褐色砂
4 黄褐色砂(やや硬質)(礫混ざり)
5 黄褐色砂

第133図　H地区　堀Ⅰ，溝状遺構断面図

イ　遺構（第131～135図）

（ア）空堀Ⅰ

Ｂ地区から延びた空堀Ⅰは，Ｈ－14区で二手に分かれて，２本の空堀が構築されている。Ｇ地区の裾野を巡る空堀を空堀Ⅰ－１，曲輪Ⅰ（塩の城）の南側の袖を廻りⅠ地区の方へ流れる堀を空堀Ⅰ－２とする。

空堀Ⅰ－１

空堀Ⅰ－１は，Ｂ地区から延びた空堀Ⅰの本流である。空堀は礫層を基盤に掘り下げ，Ｈ－13区で幅約1.8ｍと狭まるが，10ｍ下流では幅約4.7ｍと広くなり，この付近から堀の底の中程でさらに幅約90㎝の狭いＹ字状の深くて細い谷が形成される。深さは約２ｍで，底は幅約40㎝で先細となる。長さ約80ｍでＫ地区へと南流する。基盤が礫層であることから長年の流水によって浸食を受けて細く，深くなったものと思われる。

空堀Ⅰ－２

空堀１－２はＨ地区の北側，曲輪Ｃの裾野にあたるＨ－14区で分岐し，曲輪Ｃの南側裾野を廻り，Ⅰ地区の北側で左側に直角に折れて，Ｊ－11地区の東側裾野に沿って南流する。空堀は屈曲部の様子は把握できなかったが，屈曲部付近で溝状遺構１が重複している。Ⅰ－９区で幅は約５ｍで下流ほど細く深い空堀となる。Ｈ－14区で分岐する地点からの空堀Ⅰ－２の長さは約96mである。

空堀Ⅰ出土遺物

空堀の埋土から青磁，白磁，青花，擂鉢，木椀，下駄などが出土した。

青 磁

629～631は青磁の椀である。629は口縁端部が外反し丸くつくられる。還元焼成が不十分なためか，白みの強い青磁である。630・631は底部である。630は高台内面と高台内底面は露胎する。631は高台内底面を輪状に釉剥ぎし，見込みには少量の粘土が熔着する。

白 磁

632～634は白磁である。632・633は景徳鎮窯系の皿で，口縁端部が外反するものである。632は高台内底面に呉須（？）による角印が押される。634は口径9.2㎝の小壺である。頸部に模様が描かれる。

青 花

635～643は青花である。635・636は景徳鎮窯系のもので，635は口縁端部が大きく屈曲する端反碗である。636は碗の底部で，見込みは緩い饅頭心となる。高台内底面には「正」の文字が書かれる。637は景徳鎮窯系と思われる皿である。残存していないが，底部が碁笥底を呈するものである。638は景徳鎮窯系の端反皿である。高台はやや内傾し，先端は釉剥ぎされる。639～642は漳洲窯系と思われる皿である。639・640は鍔皿で，口縁端部は輪花状をなす。641は口縁部が内弯する形状のもので，見込みは輪状に釉剥ぎされる。642・643は底部が碁笥底を呈するものである。

緑釉陶器

644は緑釉陶器の口径７㎝の菊花皿であるが，青釉はほとんど剥落している。

土師器坏・皿

645は口縁部がやや内弯する坏。646は外開きの口縁部の皿。647・648は口縁部は欠損してるが土師器の坏と思われる。648は胴部立ち上がりに煤が付着し，ヘラ切り底である。

その他

649は薩摩焼苗代川系の土瓶蓋である。上面のみ黒褐色の鉄釉がかかる。650・651は瓦質土器である。650は風炉の胴部である。651は擂鉢で，内面は斜位に施されたハケ目状の工具痕の上に，内底面は4条一単位，側面は５条一単位の擂り目が入る。

漆椀

652は口径15㎝，底径８㎝，器高6.6㎝，腰部は丸味をおび，直行する口縁部となる。底部は輪高台である。内面赤色漆で，花の漆絵。653は口径13㎝，底径7㎝の輪高台，器高5.1㎝。内面赤色漆，笹葉の漆絵である。654・655は652と類似する口縁部の器形で654は漆絵。

下 駄

656は２枚歯の下駄である。表面の鼻緒の穴の両サイドに指痕と中程と右側に足形の摩耗した窪みがみられ，右足で履いていたものと思われる。

（イ）溝状遺構

溝状遺構１

空堀Ⅰ－２の東側と重複した，幅約５ｍ，深さ1.2m，長さ約15mで先端が二股に分かれる大溝状遺構である。溝ではなく窪地の可能性もある。さらにその上に新しい小溝が重複している。

木 簡

657は，木簡の残片である。現存する長さは12㎝，幅4.4㎝，厚さ２㎜である。表面には墨書で「南無○□□」の銘記があり，南無以下の部位は破損し，解読は困難である。○は「宗」と読め『寂』の異体文字とも考えられる（ラサール中学校教諭永山先生ご教示）。

笊

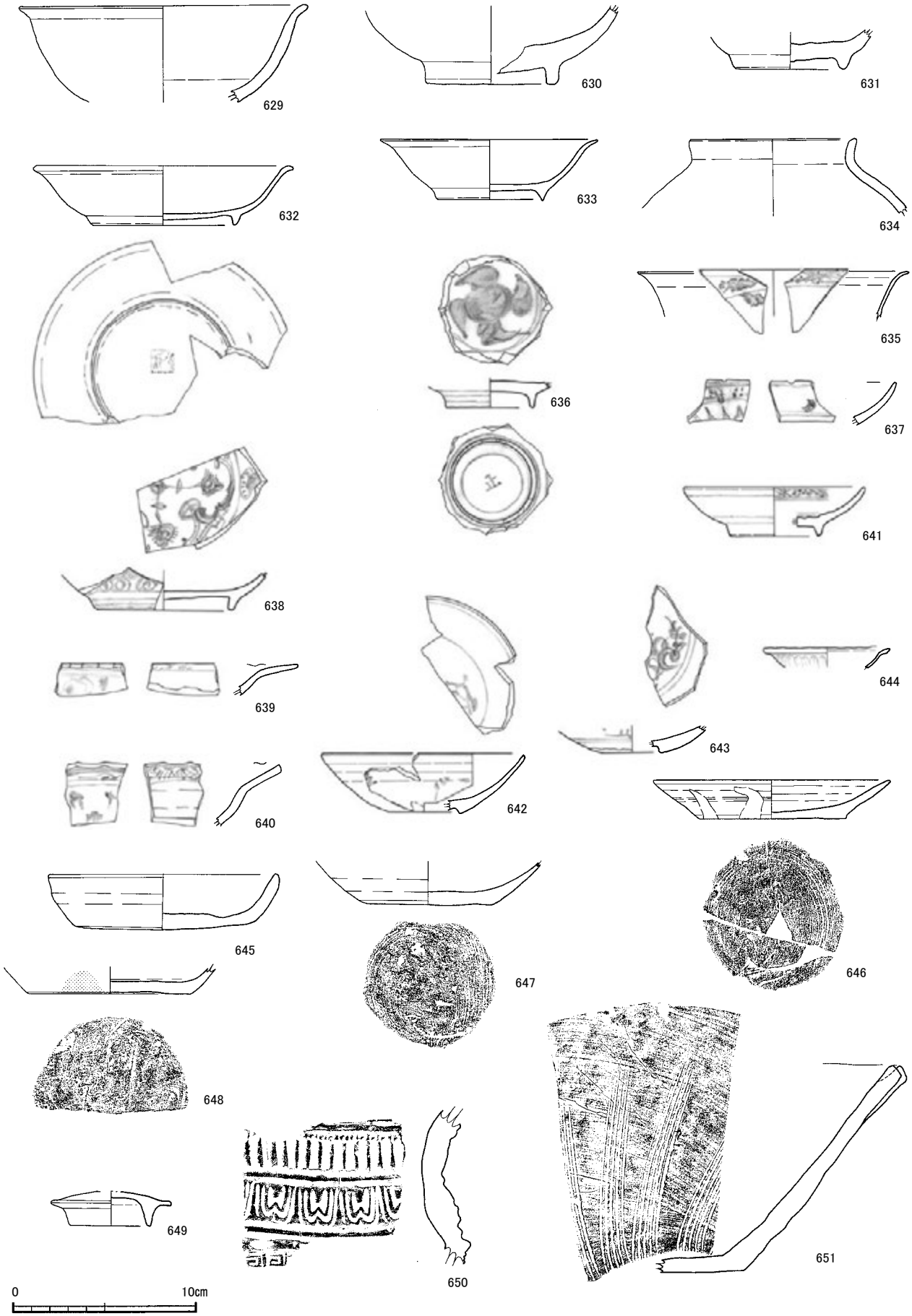
溝状遺構のI－11・J－11区から，竹製の笊の一部分が２点（658，図版40左下）出土した。笊1（658）は脆弱な状態で，取り上げは困難であった。笊2はバインダー処理して，取り上げた。

石製品

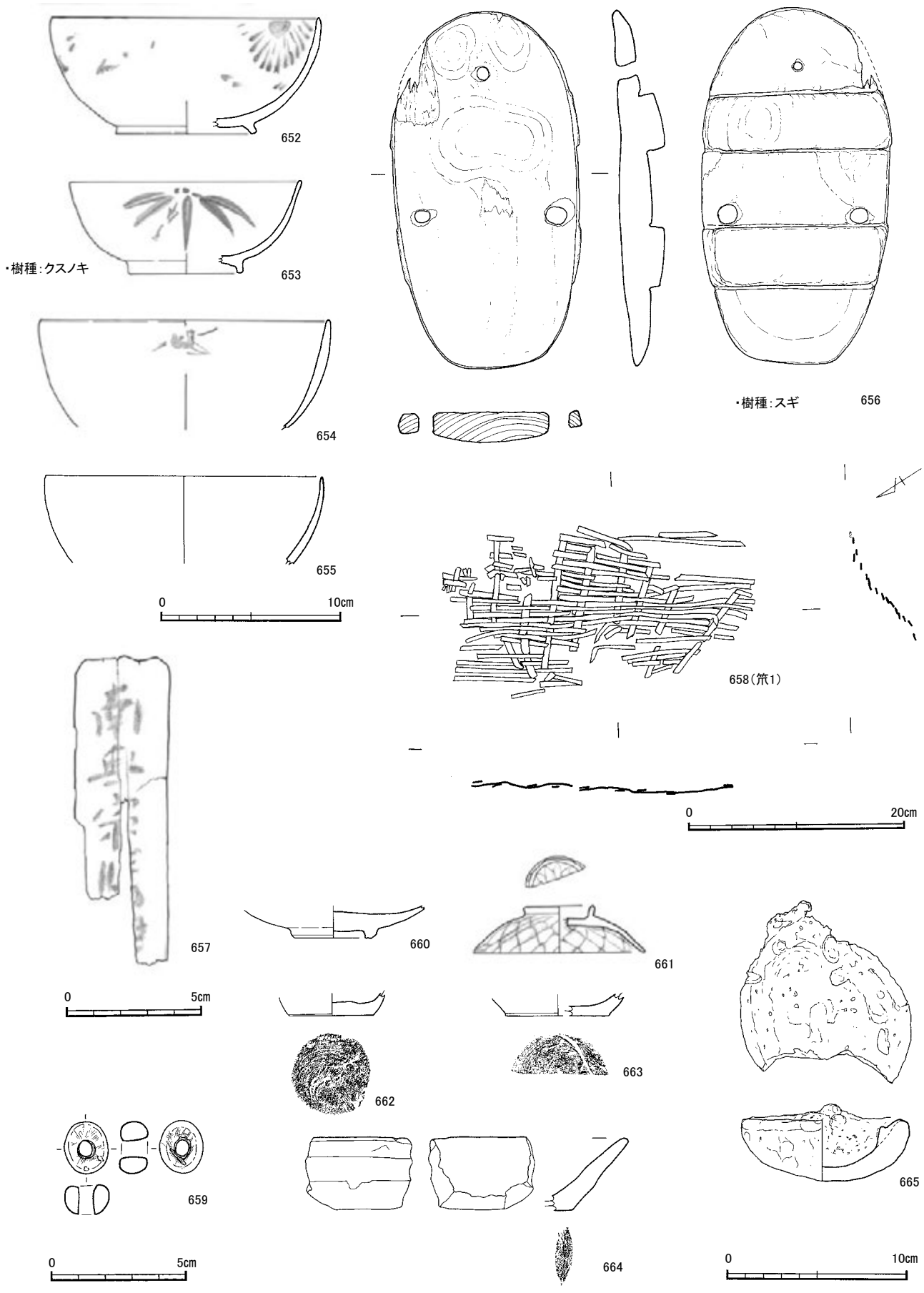
659は円の滑石製の玉である。全体を丁寧に研磨し，楕円球状に加工して，穿孔加工を施している。垂飾品としての使用が推測される。

溝状遺構２

空堀Ⅰ－１の東側，Ｇ区の裾野にあたり，空堀より高



第134図　H地区　空堀Ⅰ出土遺物



第135図　H地区　空堀Ⅰ，溝状遺構１出土遺物

い位置から検出され，近世以降の溝と思われる。幅50～70㎝，深さ35㎝で枝状に分かれた小溝である。

出土遺物

660は白磁の坏の底部である。黄白色の胎土に，乳白色の釉が内面と外面腰部までかかる。高台内底面に墨書が書かれる。661は染付の蓋で，網み目文。662・663は糸切り底の皿の底部。664は焙烙。665は手捏で丸底で椀形坩堝である。口径9.3㎝，高さ3.7㎝，内面全面に泡状の鉄溶解物が付着している。口唇部の注口部に溶解物が著しい。

（ウ）礎石建物跡（第136図）

Ｇ－１２区に位置する。主軸Ｎ-70°-W。

礎石と想定できる５個の石が存在し，正面の南側桁行は２間，奥行きの梁間は１間である。正面の北側桁行の中央は欠けており，喪失したものか，柱間を広く使う意図で二間飛ばしたかは不明である。。

２間×１間の礎石建物が想定され，桁行400㎝，梁行200㎝である。桁・梁ともに柱間は心芯で，約190㎝（6.27尺）～200㎝（6.39尺）である

柱間としては，近世柱間から少し広い程度である。（揚村先生指導による）

建物の内部床面には，中央部で密度が高く周辺に低く集石が散乱している。集石の下部には相当量の炭化物が認められ，建物の中央で火を用いてものを焼く作業が行われいたものと推定できる。集石はその上を覆うように集めて積まれたものと思われるが，これらには焼成痕は見られない。火を用いた作業の後，集石で覆ったものと思われる。その作業の内容は不明である。

主要な柱を礎石建てにすることは，一般に耐久性を想定した工法と思われる。

（エ）掘立柱建物跡（第137図）

Ｈ－13区に位置する。１間×１間の建物で，主軸はＮ-59°-W。１間の柱間は桁行が梁間より長い。柱穴１・３・５は丸柱の柱で，２は柱が抜かれたものと思われるが，数個のぐり石が残っていた。柱穴４・７は角柱（六角）柱で，柱穴５は柱穴１，柱穴７は柱穴４の斜めに位置し，添え柱と思われる。また，柱穴１と柱穴４の間には長さ1.6ｍで縦５×横6.5㎝の角材の横架材が出土し，両端には６～８㎝の切り込み，中程に貫通した臍穴を設けたものである。

（オ）土坑・ピット（第138図）

１～４は土坑である。土坑１・２とＰ１は空堀Ｉと重複しているが，空堀Ｉが埋まった後の検出である。土坑の平面形は楕円形，不定形，長方形を呈し，深さは20～50㎝。土坑内に礫を含む１・２・３がある。

土坑３は長軸99㎝，短軸69㎝，深さ33㎝で角に径15㎝のピットが見られるが，土坑に伴うか，重複かについては不明である。埋土に礫３個を検出。なお，ピット内にも石が見られる。土坑４は長軸83㎝，短軸47㎝，深さ48㎝の枡形の土坑である。溝３に伴うものか。

１～11はピットである。大半はＨ－9区に集中している。円形・楕円形・方形で，底辺は平坦。Ｐ１～４は礫を伴う。深さは６㎝～66㎝とまちまちである。中でもＰ８は51㎝，11は66㎝で深い。建物等の関連はつかめなかった。

（カ）柱痕と塀（第139図）

この柱痕はH-14区に位置し，空堀Ｉと重複する。

北東の方向に２本の柱痕と３本の杭の痕跡が長さ約4.6ｍで並び，門塀が想定される。空堀Ｉの床面より約1.4m上が検出面で，空堀を横断している。

２本の柱痕は，心芯で約２ｍ間隔を開け，径約40㎝前後の柱穴に，１は径25㎝で長さ75㎝，２は径25㎝で長さ110㎝の丸柱が残存していた。柱の先は鈍く尖らせた加工痕がみられる。２の柱痕から90㎝北側に，35㎝間隔で３本の杭痕が長さ１ｍで並んでいる。

（キ）木樋 （第139図）

H-13区の掘立柱建物跡の南西側に位置する。

木樋は，側溝施設として設置されたものである。溝の壁板には左右両サイドに角材を用い，底板はもたない形である。長さ2.2m，内側の幅（溝の幅）は12～14㎝である。なお，木樋を埋設するための掘り方，および蓋などは不明であった。壁板は長さ2.2m，幅９㎝，厚さ６～７㎝の角材で，両端の両面には約７㎝×３㎝の切り込みを入れている。２本とも同じ形態である。

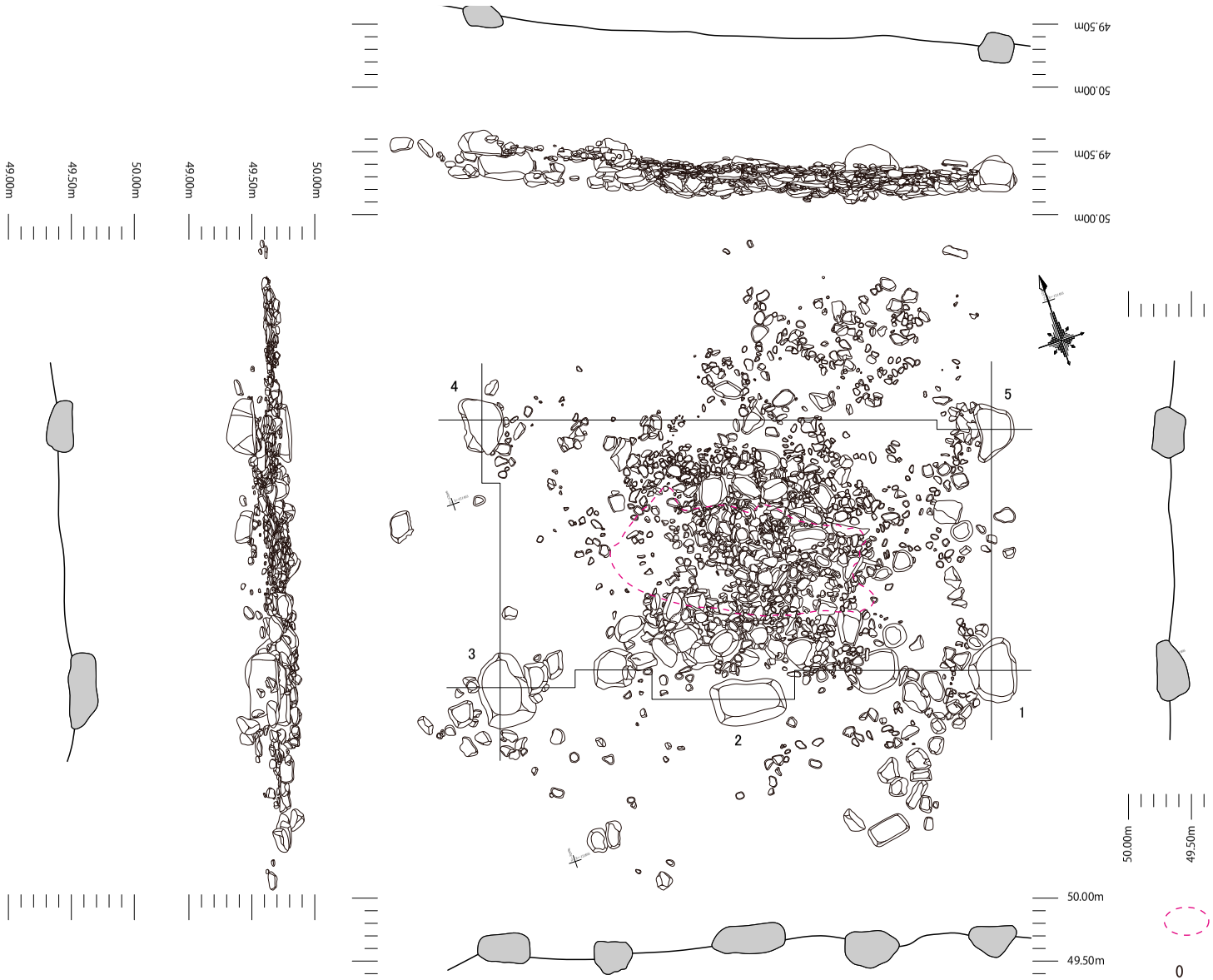
それぞれの壁板が内側に倒れないように内側の切り込み部分に長さ40～50㎝，直径３㎝前後の小杭を打込んで固定している。片面は切り込み部と杭がずれている。また，壁板の外側には10㎝前後の石を壁板と密着させて置き固定している。

（ク）柵「しがらみ」・杭列（第140～145図）

柵１・２は曲輪Ｉの南西の裾野から約５ｍ距て，幅約２ｍの間隔をもって，２本の柵列が並列して検出された。検出面は現地表面より1.5ｍ一段低場所である。杭は，先端を尖らせた直径５㎝前後の棒状のものである。

柵１は長さ19ｍで，東側３分の１は「しがらみ」の状態で残存していた。柵２は長さ8.27ｍで杭が残っていた。柵４・５はＧ地区の北側袖部から北への傾斜面に沿うように，２列を設けている。柵３は柵１の東端と直交し，長さ4.8ｍの柵である。

「しがらみ」には竹を細く裂いたものを用い，0.5～１ｍの間隔で打ち込まれた杭に交互に組んでいる。杭は短いもので６㎝，長いもので92㎝の杭が残存していた。なかには腐蝕して杭の痕跡だけのものもある。また，補強材として２本組の杭もある。

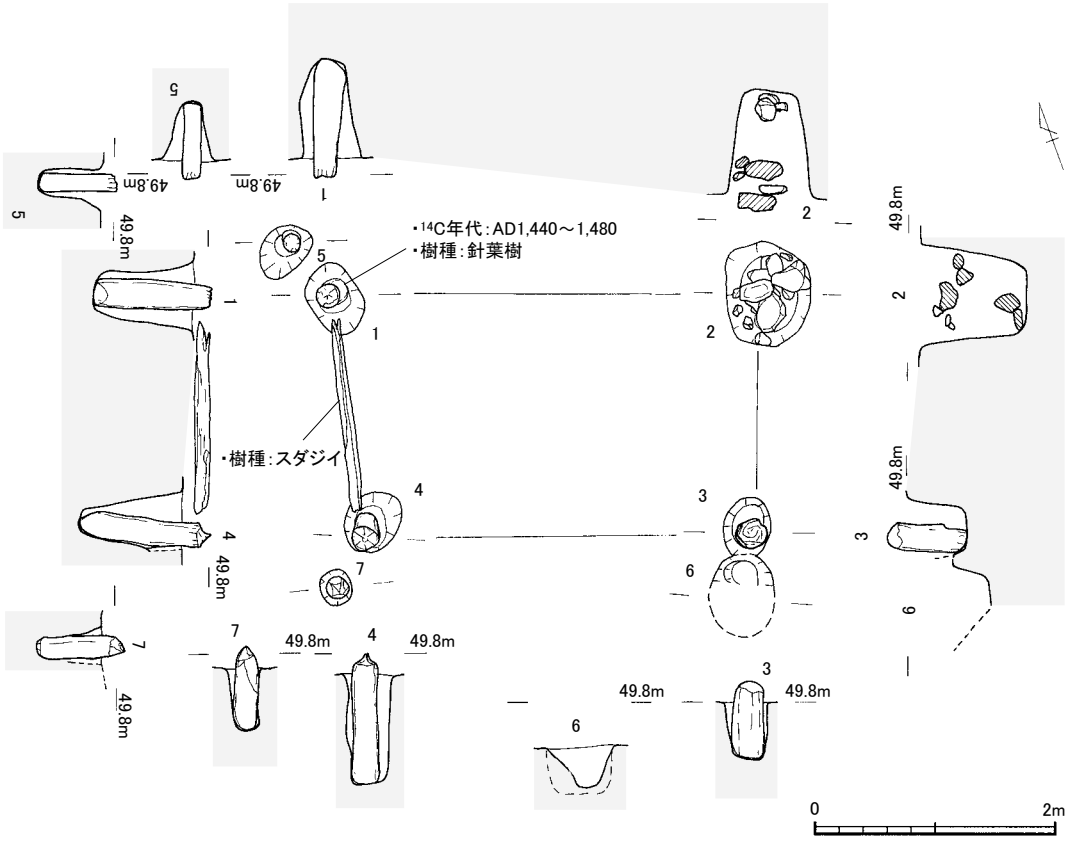


第136図　H地区　礎石建物跡

第29表　H地区　礎石建物跡計測表

主軸方向	方向	柱穴方向	柱間長さ		延長(cm)
			(cm)	尺=30.2cm	
N−70°−W	桁行	1−2	200	6.62	390
		2−3	190	6.29	
		4−5	400	13.24	400
	梁間	3−4	210	6.95	210
		5−1	190	6.29	190

礎石 No	長径 (cm)	短径 (cm)	備考
1	50	38	−
2	50.5	37	−
3	60	38	−
4	50	32	−
5	45	28	−

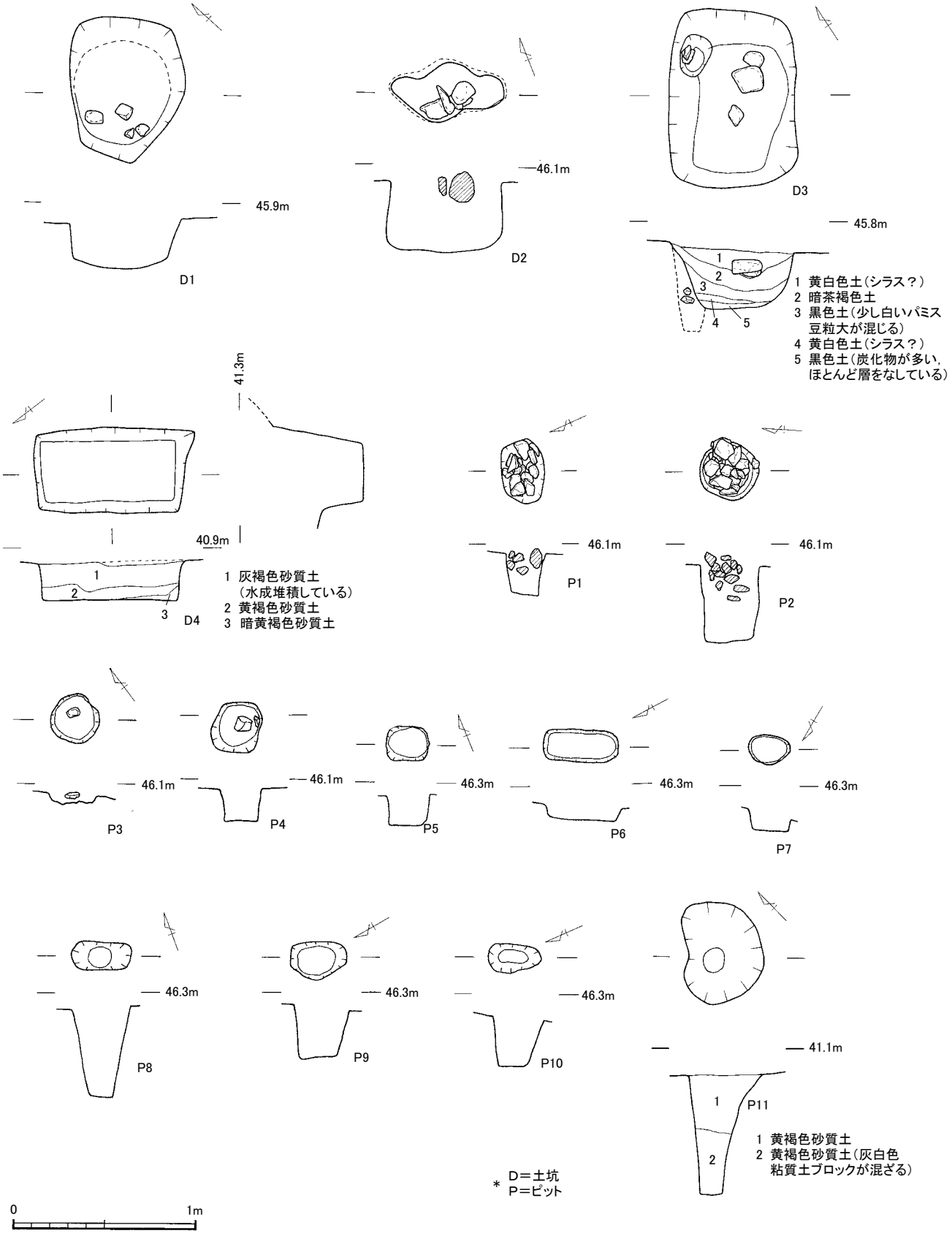


第137図　H地区　掘立柱建物跡

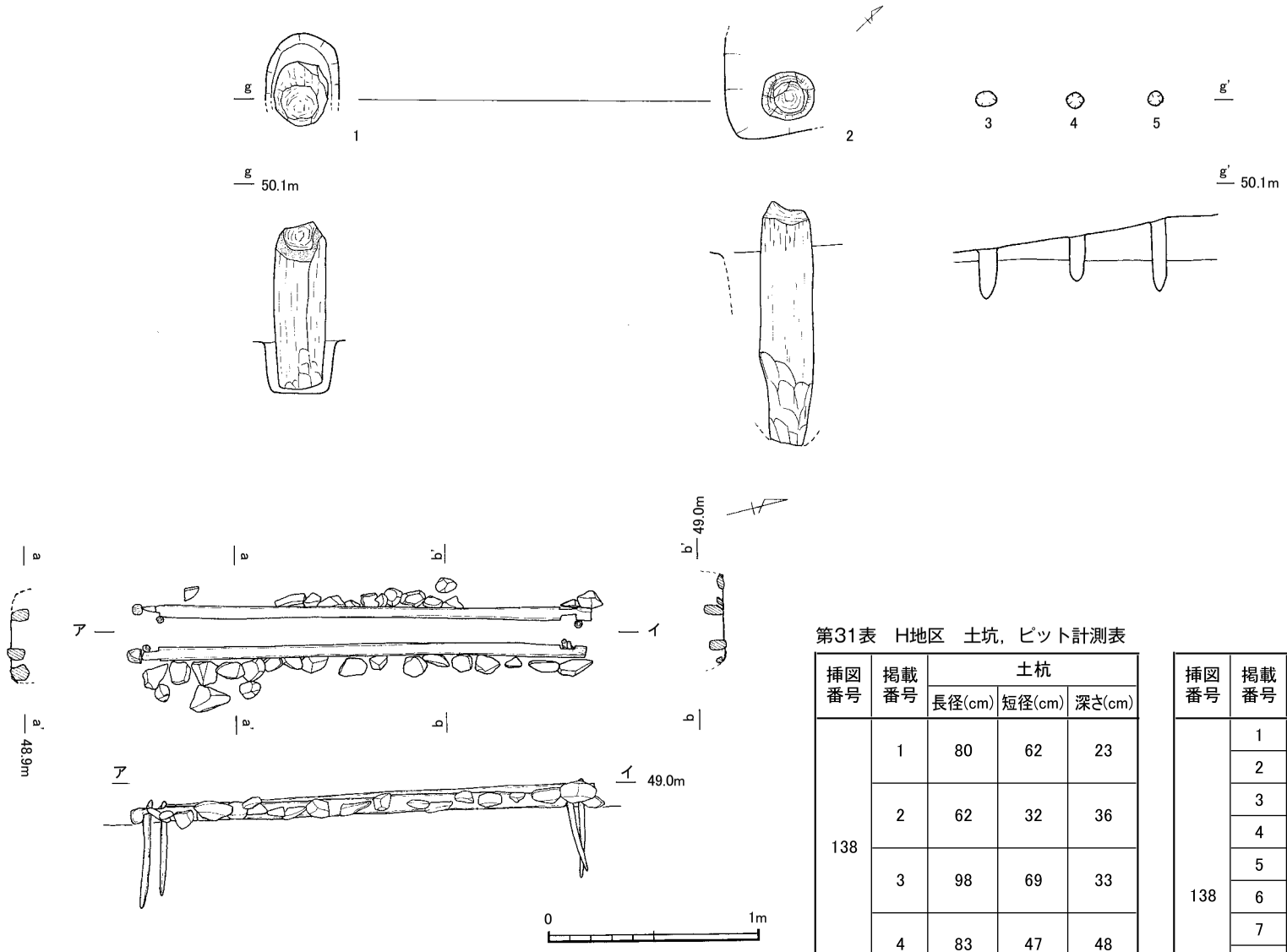
第30表　H地区　掘立柱建物跡計測表

主軸方向	方向	柱穴方向	柱間長さ		延長
			(cm)	尺=30.2cm	(cm)
N-59°-W	桁行	1-2	360	11.92	360
		3-4	320	10.59	320
	梁間	2-3	200	6.62	200
		4-1	188	6.22	188

No.	柱穴			柱			樹種	備考
	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	形状	径(cm)	長さ(cm)		
1	58	48	82	丸形	20	100	針葉樹	－
2	88	70	88	－	－	－	－	ぐり石
3	50	32	48	丸形	22	64	－	－
4	48	38	90	六角	20	110	－	－
5	42	30	52	丸形	16	64	－	－
6	－	50	34	－	－	－	－	－
7	30	26	54	六角	18	72	－	－



第138図　H地区　土坑，ピット

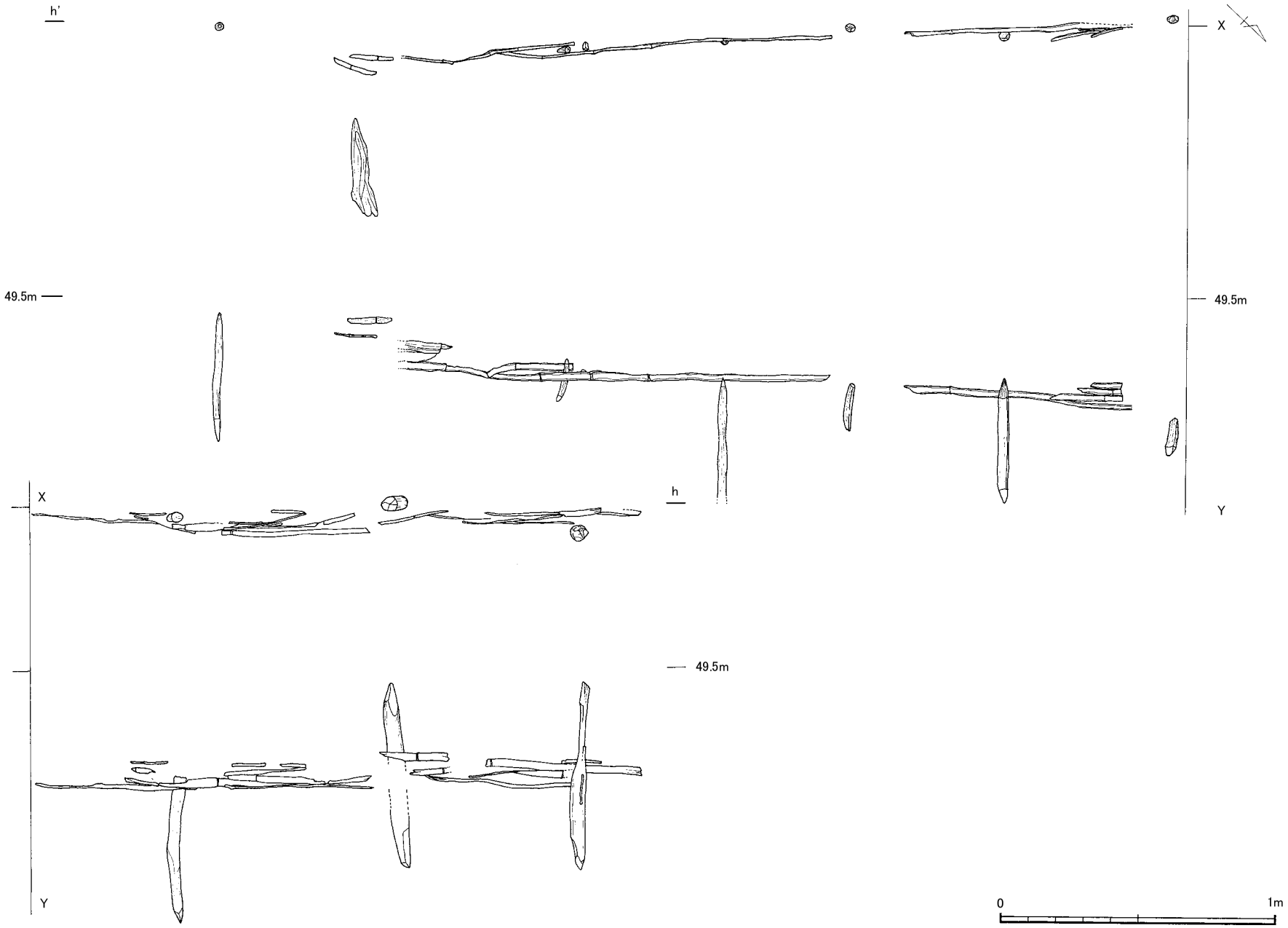


第139図　H地区　柱痕と塀，木樋

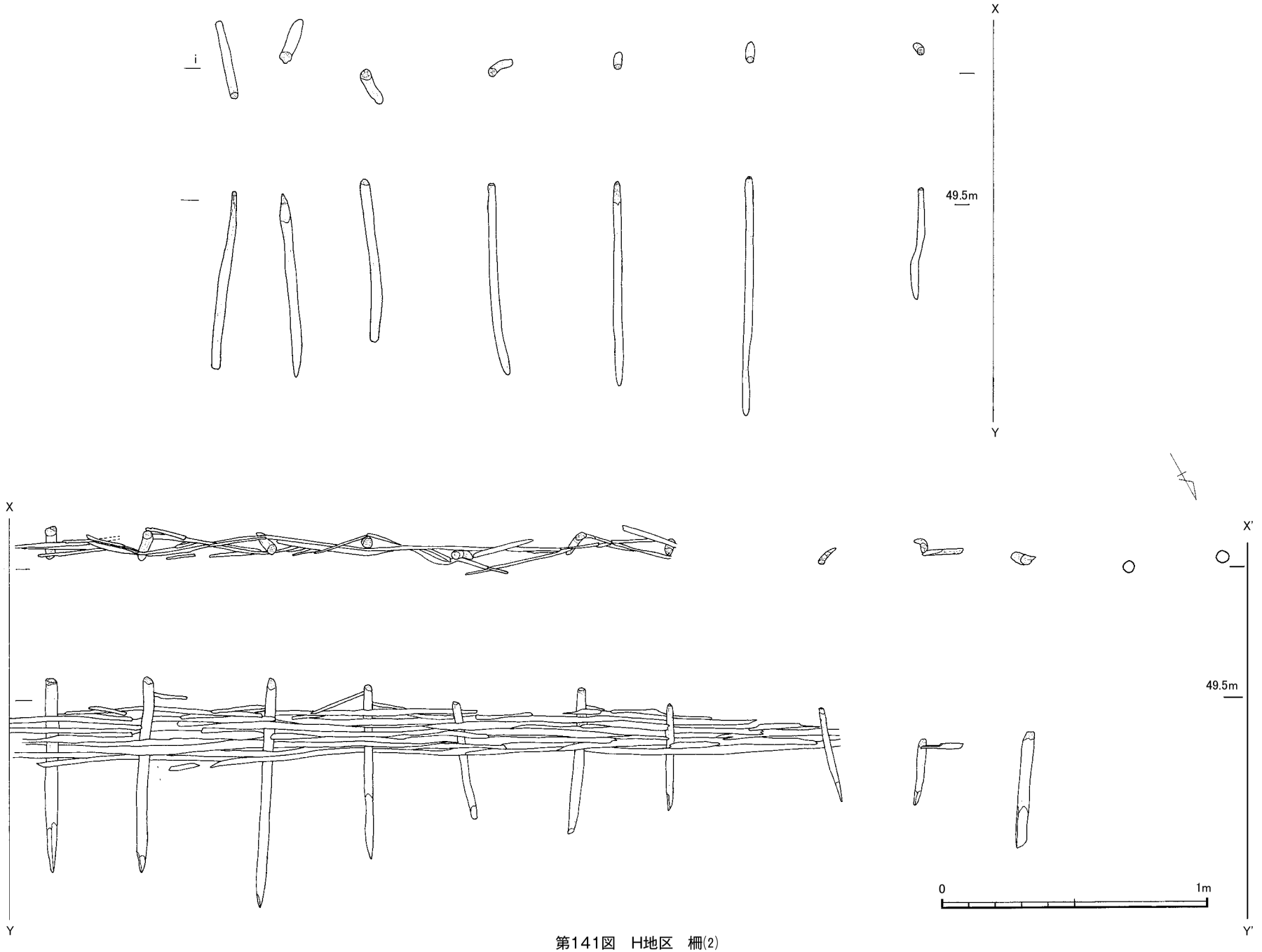
第31表　H地区　土坑，ピット計測表

挿図番号	掲載番号	土杭		
		長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
138	1	80	62	23
	2	62	32	36
	3	98	69	33
	4	83	47	48

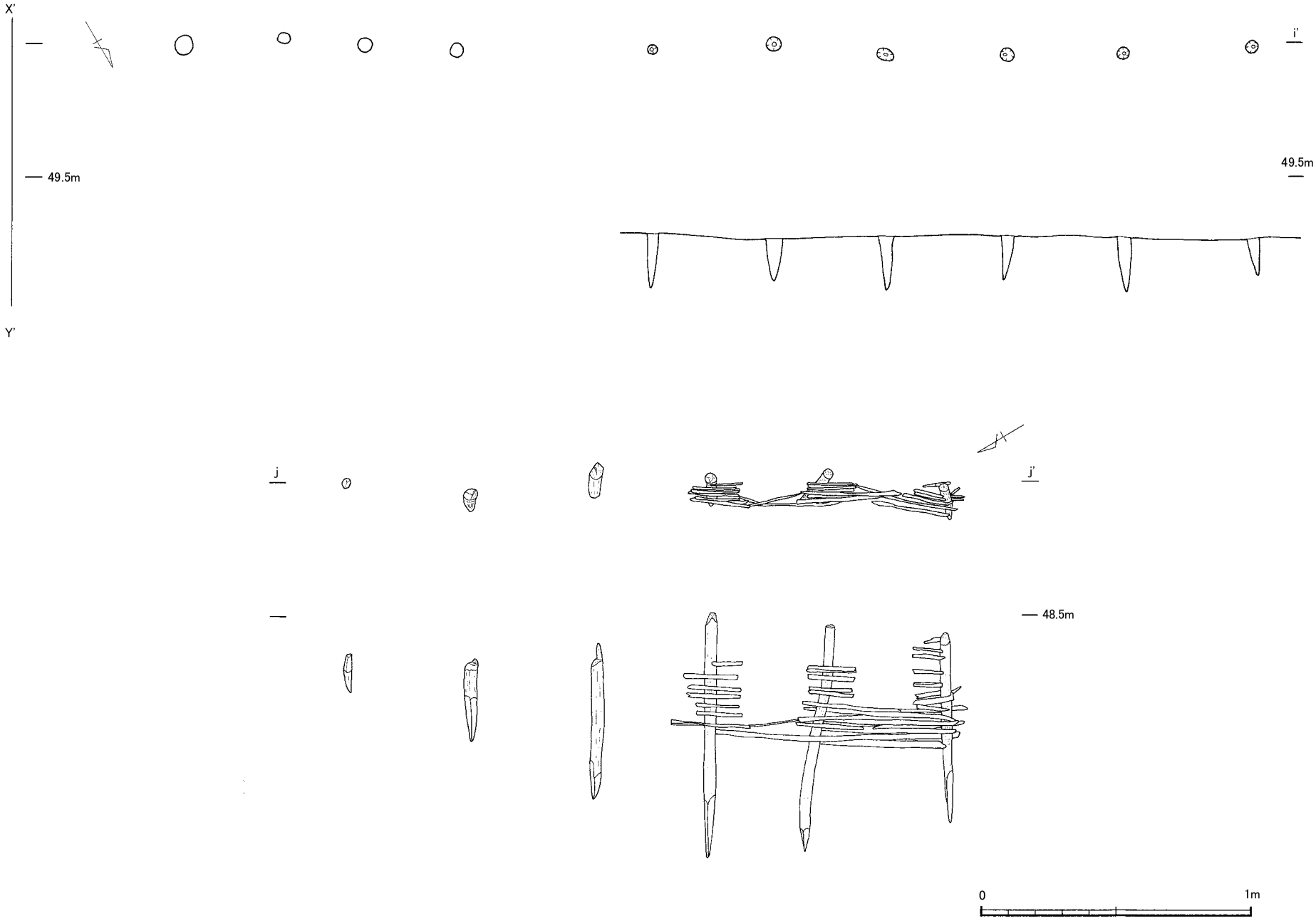
挿図番号	掲載番号	ピット		
		長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
138	1	36	23	23
	2	33	33	44
	3	27	27	6
	4	27	24	18
	5	23	17	11
	6	42	17	8
	7	23	18	17
	8	33	15	51
	9	30	18	30
	10	29	14	27
	11	56	41	66



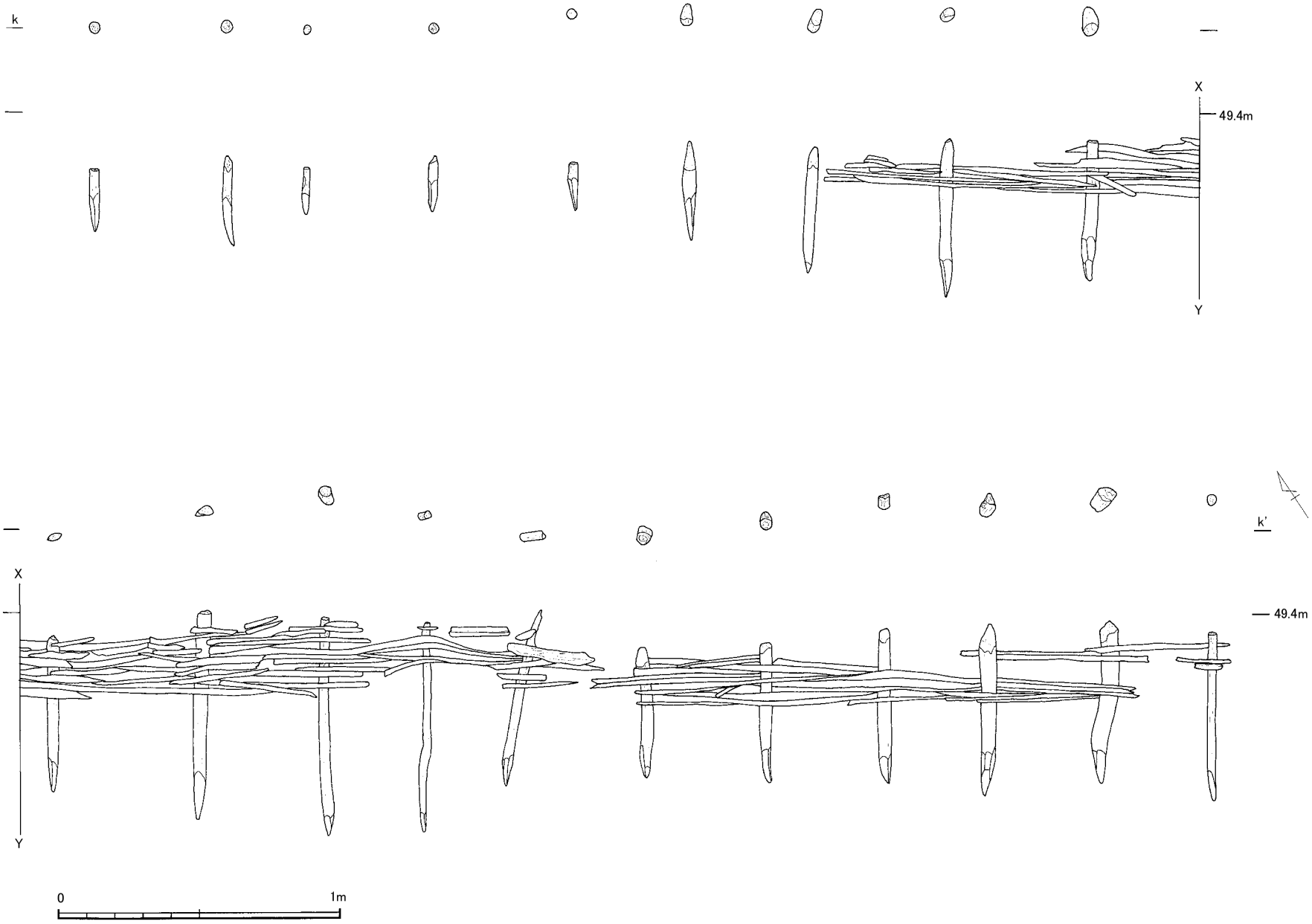
第140図　H地区　柵(1)



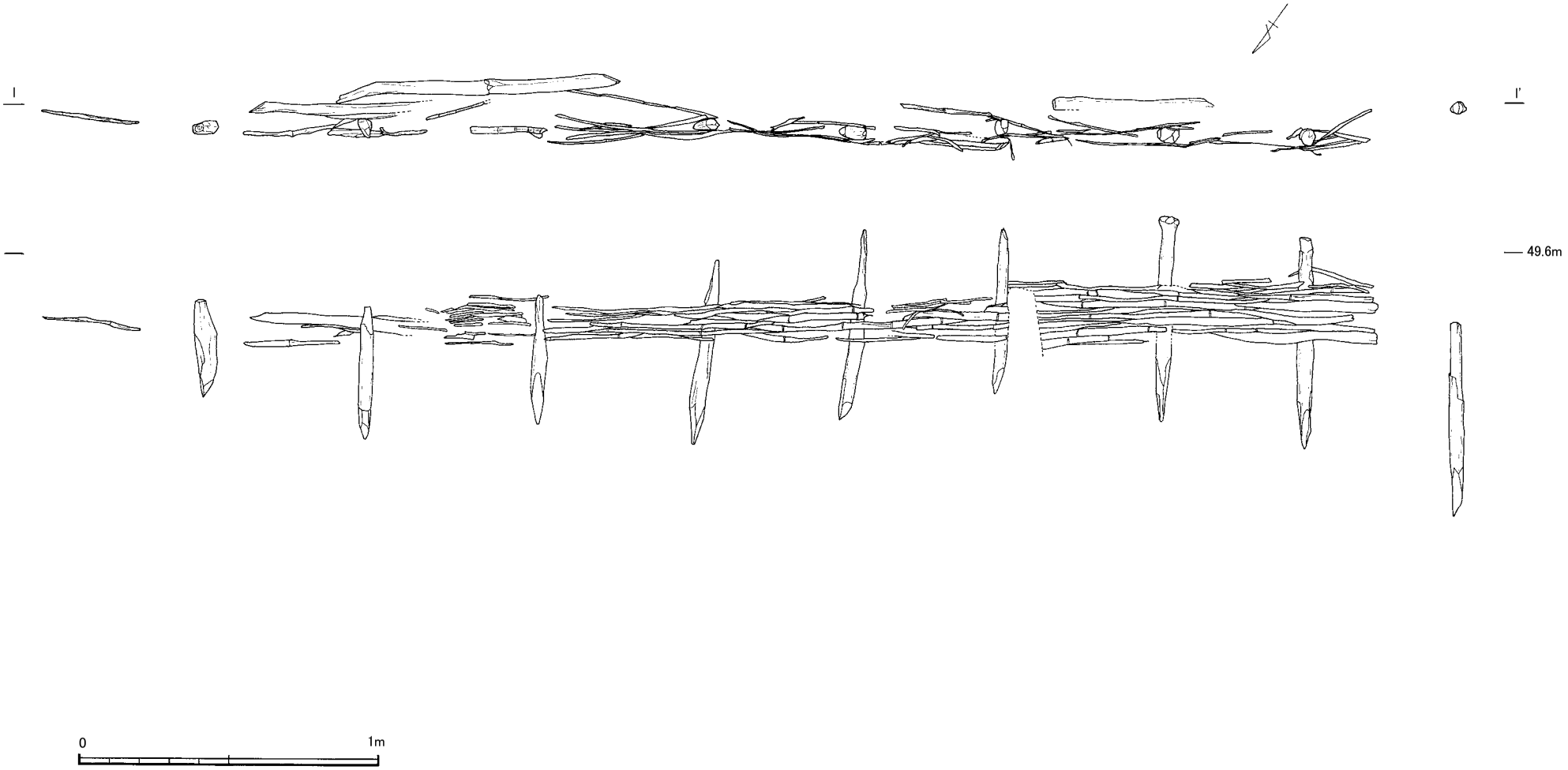
第141図　H地区　柵(2)



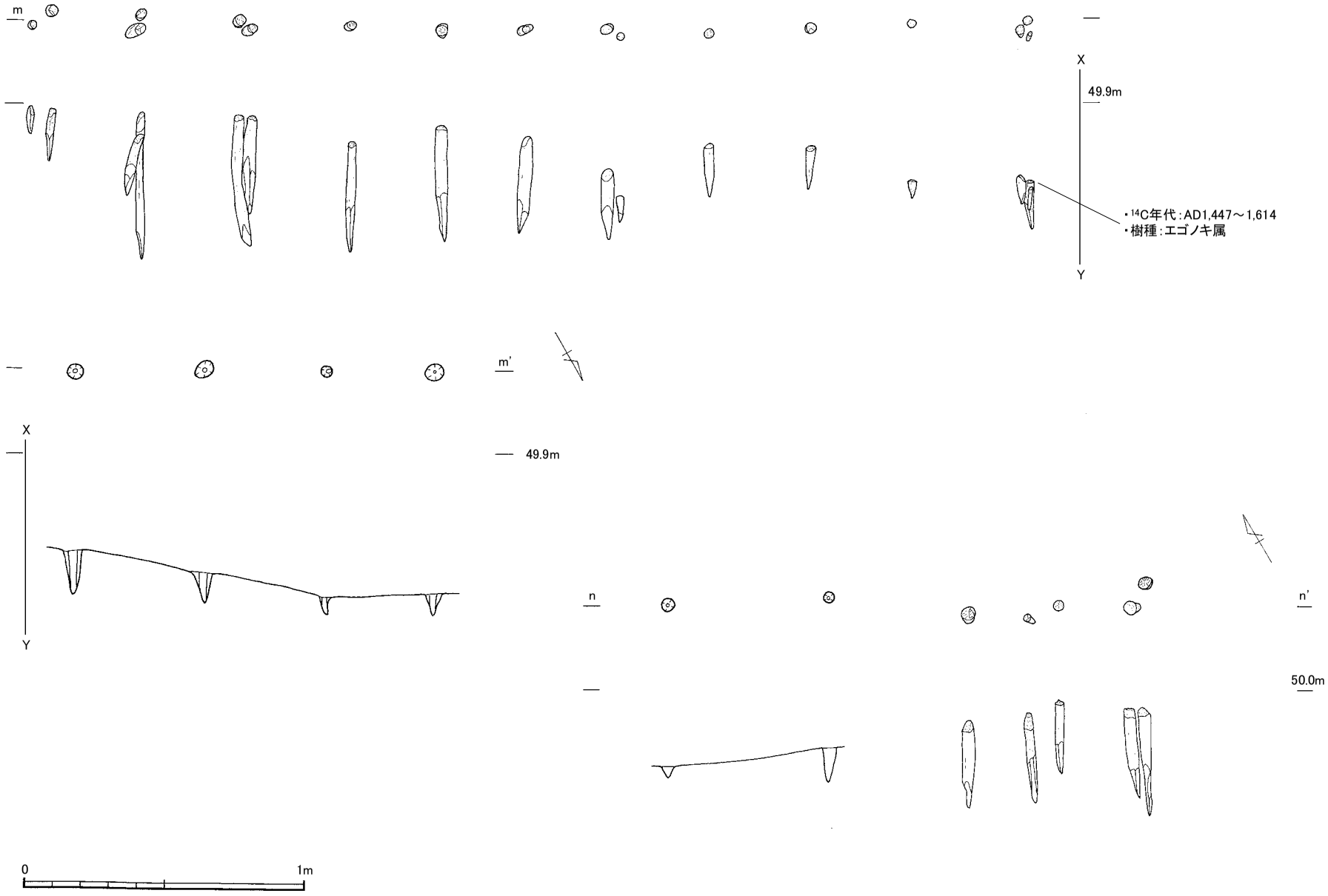
第142図　H地区　柵(3)



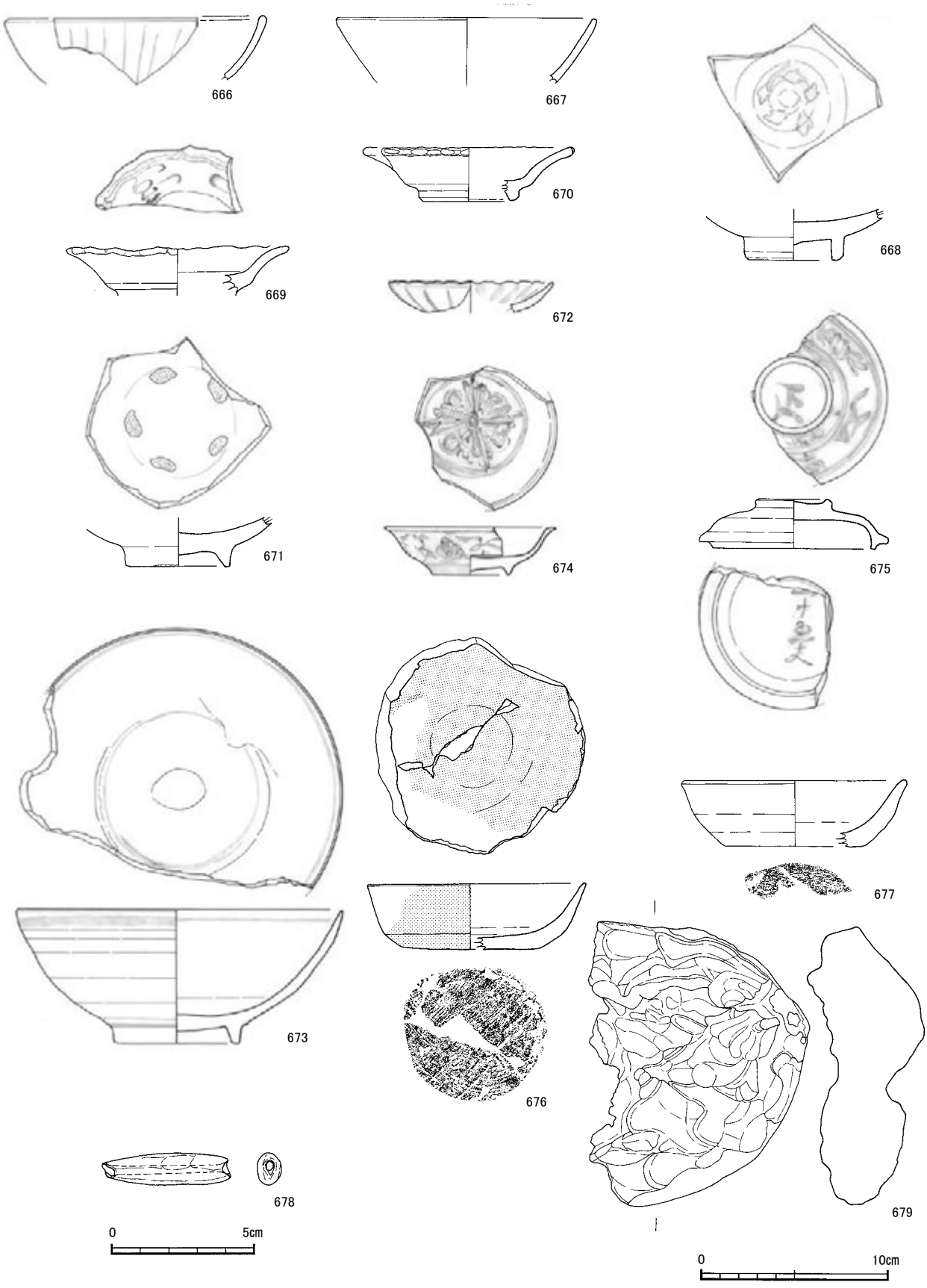
第143図　H地区　柵(4)



第144図　H地区　柵(5)



第145図　H地区　杭列



第146図　H地区　出土遺物(1)

ウ　出土遺物（第146・147図）

青 磁

666～670は龍泉窯系青磁である。666は外面に細蓮弁文の文様が描かれる椀であるが，剣頭部は略されている。667は粗製のもので，胎土灰褐色を呈する。龍泉窯系以外のものである可能性も考えられる。668は器壁が厚く，胎土は灰褐色を呈する粗製のものである。見込みには印花文がスタンプされるが明瞭でない。669・670は稜花皿である。669の内面には線彫りによる文様が描かれる。

白 磁

671は朝鮮系の白磁椀である。見込みと畳付には５個の目跡が観察される。672は白磁の小皿である。口縁端部は輪花をなし，外面は線書きにより花弁を表す。見込みは輪状に釉剥ぎされるものと思われる。

青 花

673は景徳鎮窯系の碗である。見込みは円状に釉剥ぎされる。見込みと外面腰部に呉須による圏線が描かれると思われるが，褐色に発色している。674・675は景徳鎮窯系のものと思われる。674は端反口縁の小形の皿である。畳付から高台内底面は露胎する。675は蓋である。内面は露胎し，天井部に「正」，見込みに「〇十五〇」の墨書が描かれる。

土師器

676・677は糸切り底の坏である。口径が12.1cmと12.6cmで，器高は3.6cmと3.7cmである。676は煤が付着している。

土錘

678は管状の土錘である。長さ4.7cm，巾1.2cmである。

流動滓

679は流動滓で半分欠いている。円形を呈す。

漆椀

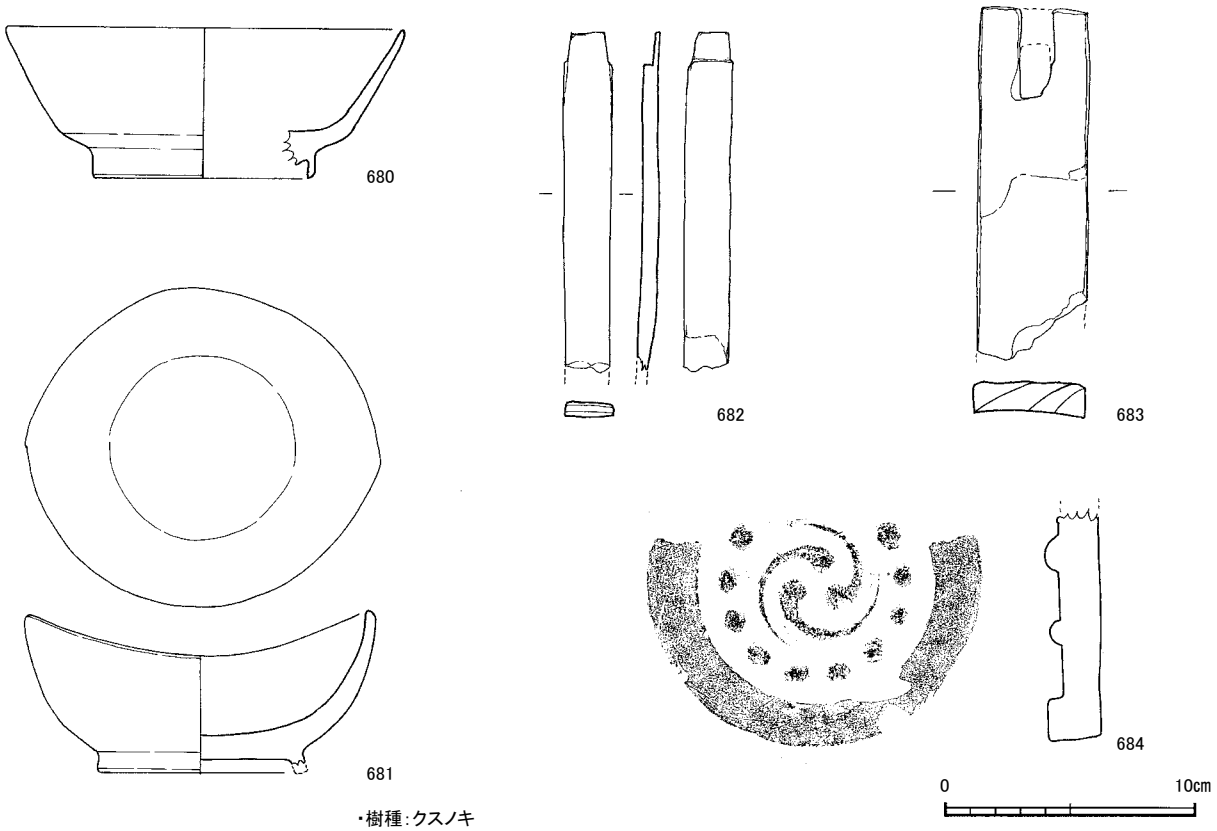
680は口径16cm，底径9cm，器高6.1cmで腰部で折れ，体部は直線的で口縁部は直行する，底部は細くてやや高い輪高台である。内赤色漆である。681は，輪高台で腰部は丸味を呈し，内弯気味の山形口縁となる。内赤色漆。

桶側板ほか

682は長さ13.6cm，巾1.9cm，厚さ0.8cmの平板で，基部の端部に切り込みを入れている。683は小型の桶側板で上端にほぞ穴が穿かれているが上部は欠落している。

瓦

684は軒丸瓦である。三巴文と13個の宝珠からなる。近世瓦と思われる。



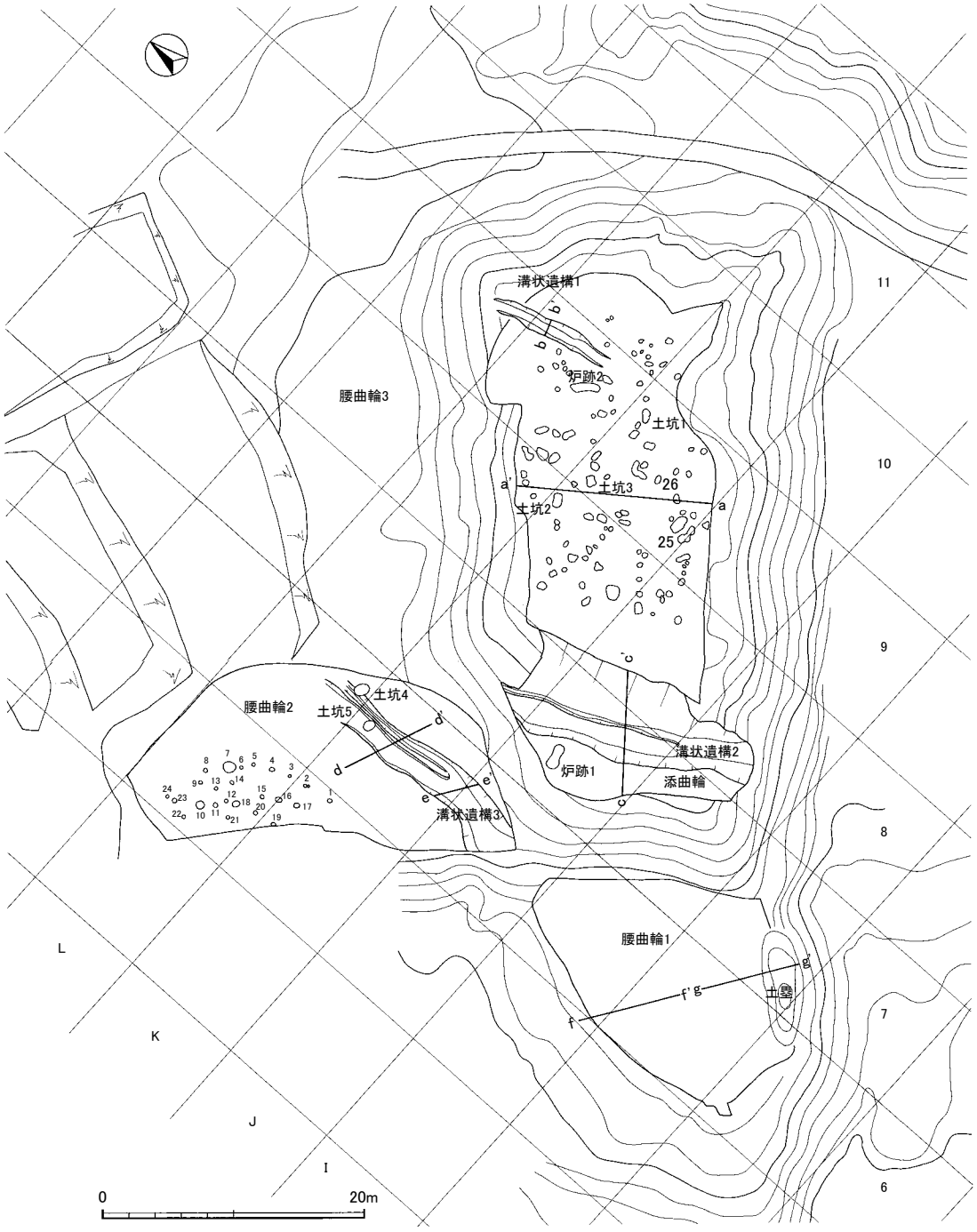
第147図　H地区　出土遺物(2)

（9）Ⅰ地区（曲輪Ⅲ）の調査

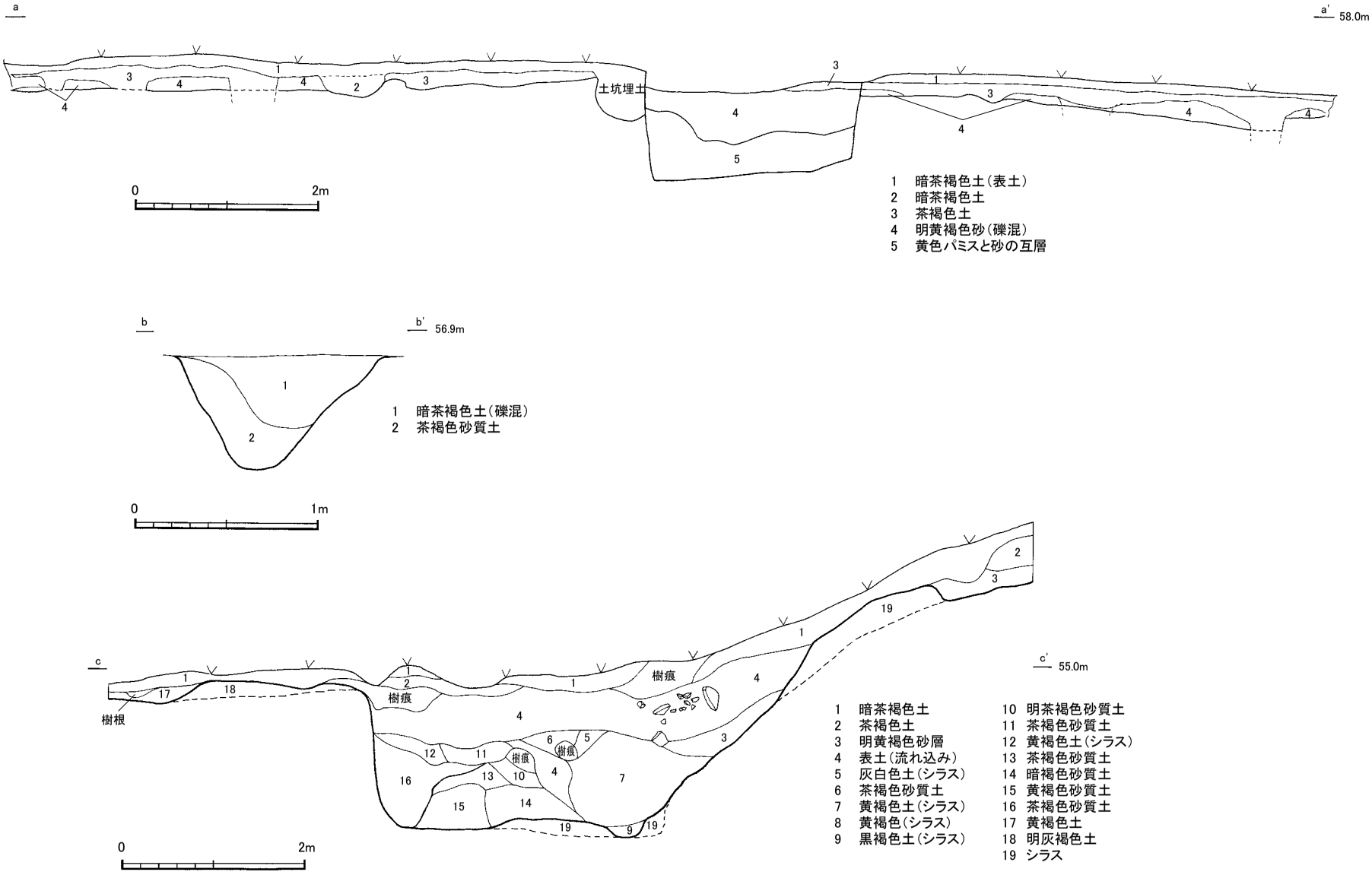
ア　概要

Ⅰ地区は約400㎡のほぼ長方形の平坦部を持つ曲輪である。本曲輪の南西斜面に接して標高差約６ｍ下に一段下がったところに，添曲輪と見られる平坦地がある。さらに南西側に腰曲輪１，西側に腰曲輪２，北西側に腰曲輪３が取り巻いている。また，北側は，曲輪Ⅰ（塩の城）と谷部を隔てて隣接する。西側は低地谷部のＪ地区と接し，東はＨ地区と接する。南西側は急斜面となり，石切場へ続くＫ地区とつながる。他の曲輪との標高差に大きな変化は見られない。調査期間中「近藤屋敷」と呼称されてきた地区である。

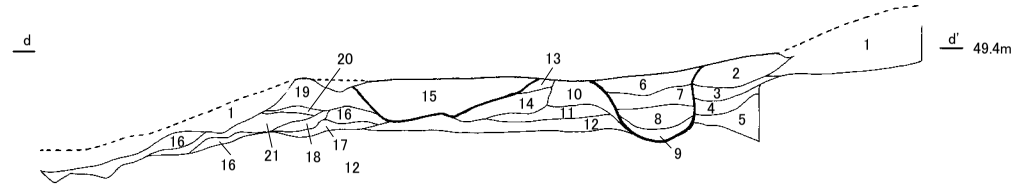
調査前は孟宗竹の林で包含層は竹根の密集で壊滅的であった。遺構検出面であるアカホヤ上面からの遺構検出は見られない。更に下部の川砂層での検出である。アカホヤ層が消失した状況は，曲輪Ⅰ（塩の城）の北側と同じ様相を呈する。



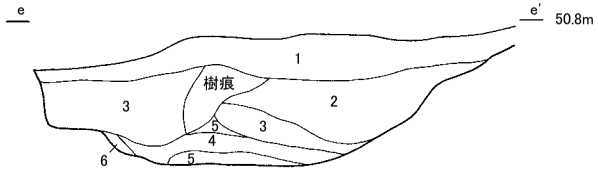
第148図　Ⅰ地区（曲輪Ⅲ）全体図，遺構配置図



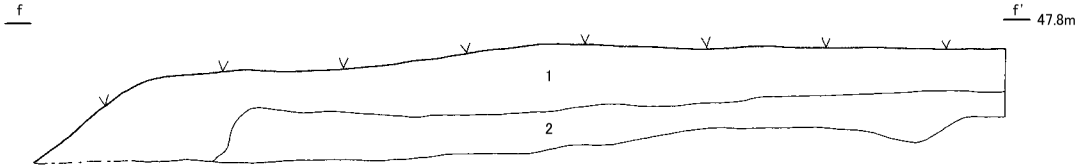
第149図　I地区　土層，溝状遺構断面図



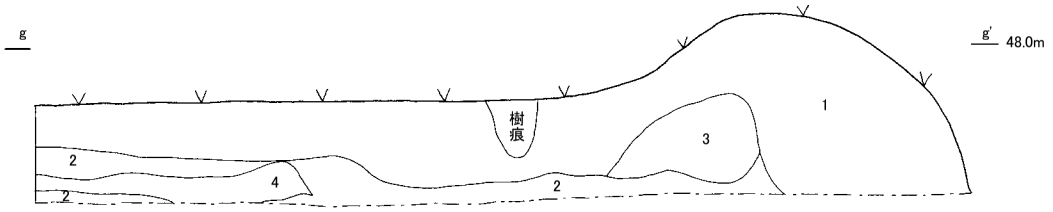
1 灰白色土(シラス)
2 明茶褐色土
3 灰白色砂質土(粘質土ブロック含)
4 黄灰白砂質土
5 灰白色粘質土
6 茶褐色砂質土
7 茶褐色土(粘質土ブロック含)
8 橙色粘質土
9 茶褐色粘質土
10 黄褐色粘質土
11 暗褐色土
12 橙色粘質土
13 茶褐色砂質土(粘質土含)
14 黄褐色砂質土
15 にぶい黄褐色砂質土
16 明灰褐色砂質土
17 茶褐色砂質土
18 にぶい黄橙礫ブロック
19 粘質土の大きなブロックを含み一部加久藤を含む
20 褐色砂質土(炭化物を含む)
21 褐色砂質土



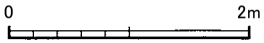
1 暗灰褐色土(表土)
2 暗灰褐色土(炭化物含)
3 オリーブ褐色土(黄褐色ブロック混)
4 オリーブ褐色土(円礫含)
5 黄灰色粘質土



1 表土
2 黄褐色ローム質土



1 表土
2 黄褐色ローム質土
3 明黄褐色弱硬質土
4 灰白色ローム質土



第150図 I地区 土層，溝状遺構，土塁断面図

イ　遺構

遺構として本曲輪からは溝状遺構，土坑３基，炉跡１基，ピット93個，添曲輪からは溝状遺構，炉跡，腰曲輪１からは土塁，腰曲輪２から溝状遺構と土坑２基，24基のピットが検出された。

（ア）溝状遺構（第148図）

a　溝状遺構１

曲輪の北側，Ｌ・M-９区に位置する。長さ10m，幅1.2m，深さ0.6mである。

b　溝状遺構２

添曲輪に位置し，本曲輪の南西袖部にあたる。長さ20m，幅３m，深さ約1.5m，底幅2.9mの箱堀である。曲輪の防御遺構と思われる。

溝状遺構２出土遺物（第151図）

青磁

685～692は龍泉窯系青磁である。685は口縁端部が外反し腰部から体部は丸くつくられる椀である。686は腰部が張る椀の底部で，見込みに印花文がスタンプされる。687は腰部が強く屈曲する椀の底部であるが，皿の可能性も考えられる。見込みは印花文が施されるが不明瞭である。688は外面に片彫りの蓮弁文が描かれる椀の底部である。見込みは円状に釉剥ぎされ，畳付から高台内底面は露胎する。689は見込みは無釉で花文が描かれる。690は稜花皿である。胎土，釉ともに粗製で，龍泉窯系青磁でない可能性も考えられる。691・692は盤の口縁部で，短く折れた口縁部となる。内面に蓮弁文が陽刻される。

白磁

693は白磁である。景徳鎮窯系のもので，腰部から外反するものである。高台は低く先細り，先端は釉剥ぎされる。

青花

694～703は青花である。694～697は碗で，694・695は蓮子碗である。696は見込みが緩い饅頭心をなし，外面腰部から高台底面は露胎である。697は景徳鎮窯系の蓮子碗の底部で，畳付けは釉剥ぎされる。698～700は端反皿の口縁部で，701は端反皿の底部である。702は碁笥底の皿，703は鍔皿の口縁部で，702・703は漳州窯系と思われる。

色絵

704は景徳鎮窯系の色絵である。

c　溝状遺構３

腰曲輪２にあり，本曲輪の南西側にあたる袖部に位置する溝状遺構である。南北に掘られた溝はK-６区で２本の小溝が一本となる。長さ20m，最大幅３m，深さ約１mである。北側には土坑４・５が重複する。

溝状遺構３出土遺物（第152図）

706は坏。705･707は土師器の小皿で糸切り底である。708・709は瓦質土器である。708は羽釜である。外面には煤が付着する。709は擂鉢である。一単位９条の擂り目が入る。710外面は褐釉がかかり，内面と外底面は露胎する。

（イ）土塁（第150図）

ほぼ台形の腰曲輪１の東側縁辺部に，長さ約7.8m，幅2.6m，高さ0.7mで細長い土饅頭の形をした小規模な土塁である。土塁断面でアカホヤ層が観察されていることから，造り出しの土塁と思われる。土塁の設置位置や規模から曲輪Ⅱ（中の城）の土塁と類似している。
東側を意識した遺構と思われる。

（ウ）炉跡（第153図）

炉跡と思われる楕円形の焼土遺構が，本曲輪と添曲輪から２基検出された。いずれも炉体は削平されているが，床面は船底状に弧状を呈し，赤く焼けた炉の痕跡が検出された。炉壁の粘土塊の小片が混じる。掻き出し部の床面には焼けた痕跡は残存しない。一時的に短期間使用されたものと思われる。

炉内出土遺物（第153図）

715は，炉跡１から出土した。口径40㎝の瓦質の火鉢である。やや内傾し直行する口縁部である口唇部は平坦に仕上げ充実する口縁部外面に２本の三角突帯文を巡らし，口唇部直下と突帯文間に幾何学文と縦線文のスタンプ押印を巡らす。奈良火鉢と思われる。火鉢は炉内出土としたが，炉跡の上位からのものである。

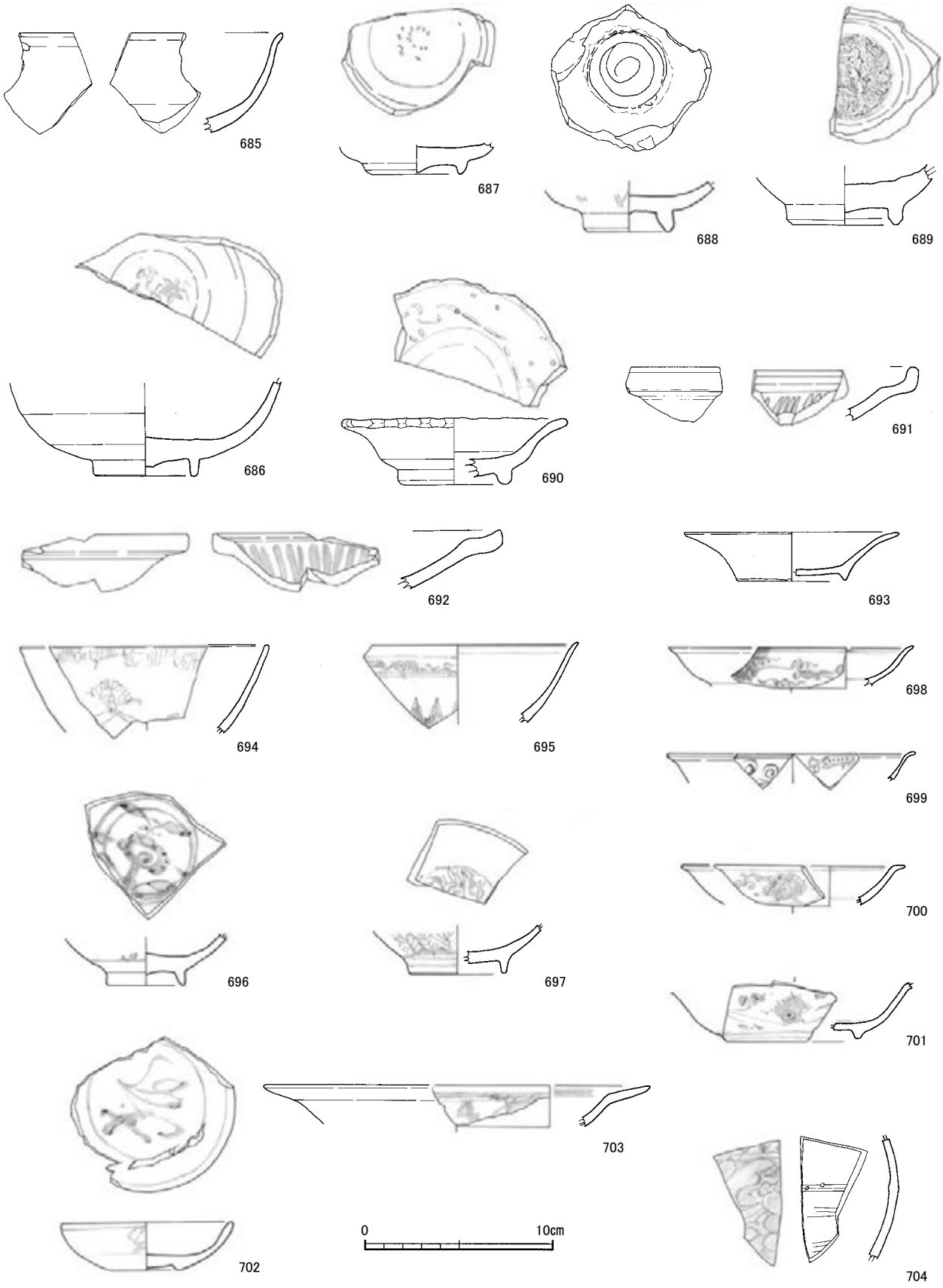
（エ）土坑（第153・154図）

本曲輪から３基，腰曲輪２から２基検出された。

土坑１・３は不定形で，３基ともに土坑内からは礫や石がみられる。土坑４・５は溝状遺構３と重複し，溝の北側に位置する。溝が破棄された後に，造られたものである。土坑４は径96～112㎝の円形で，深さは約18㎝で浅い。底には礫や小石がみられる。

（オ）ピット（第154図）

曲輪には93個のピット，腰曲輪２には24基のピットを検出したが，掘立柱建物跡等，遺構との関連はつかめなかった。



第151図　I地区　溝状遺構出土遺物

ピット内出土遺物（第152図）

711は龍泉窯系青磁の椀で，外面に細蓮弁文が描かれる。712は中国南部産景徳鎮窯と思われる瓶である。713・714は銅銭で713は「寛永通寶」，714は「朝鮮通寶」である。

ウ　出土遺物（第155・156図）

青磁

716～720は龍泉窯系青磁である。716は外面に細連弁文が描かれた椀である。細線と剣頭は連弁としての単位を意識して描かれる。717は口縁端部が外反し，腰部から体部にかけて丸くつくられる椀である。718は腰が張る椀の底部である。見込みは円形に釉剥ぎされ，印花文がスタンプされるが明瞭でない。719は見込みに花文が描かれる椀の底部である。高台内面と高台内底面は露胎する。720は稜花皿である。内面に線彫りによる文様が描かれる。

白磁

721は白磁の椀である。粗製のもので，釉が緑色を帯びる。722は小坏の底部と思われる。畳付のみ釉剥ぎされる。

青花

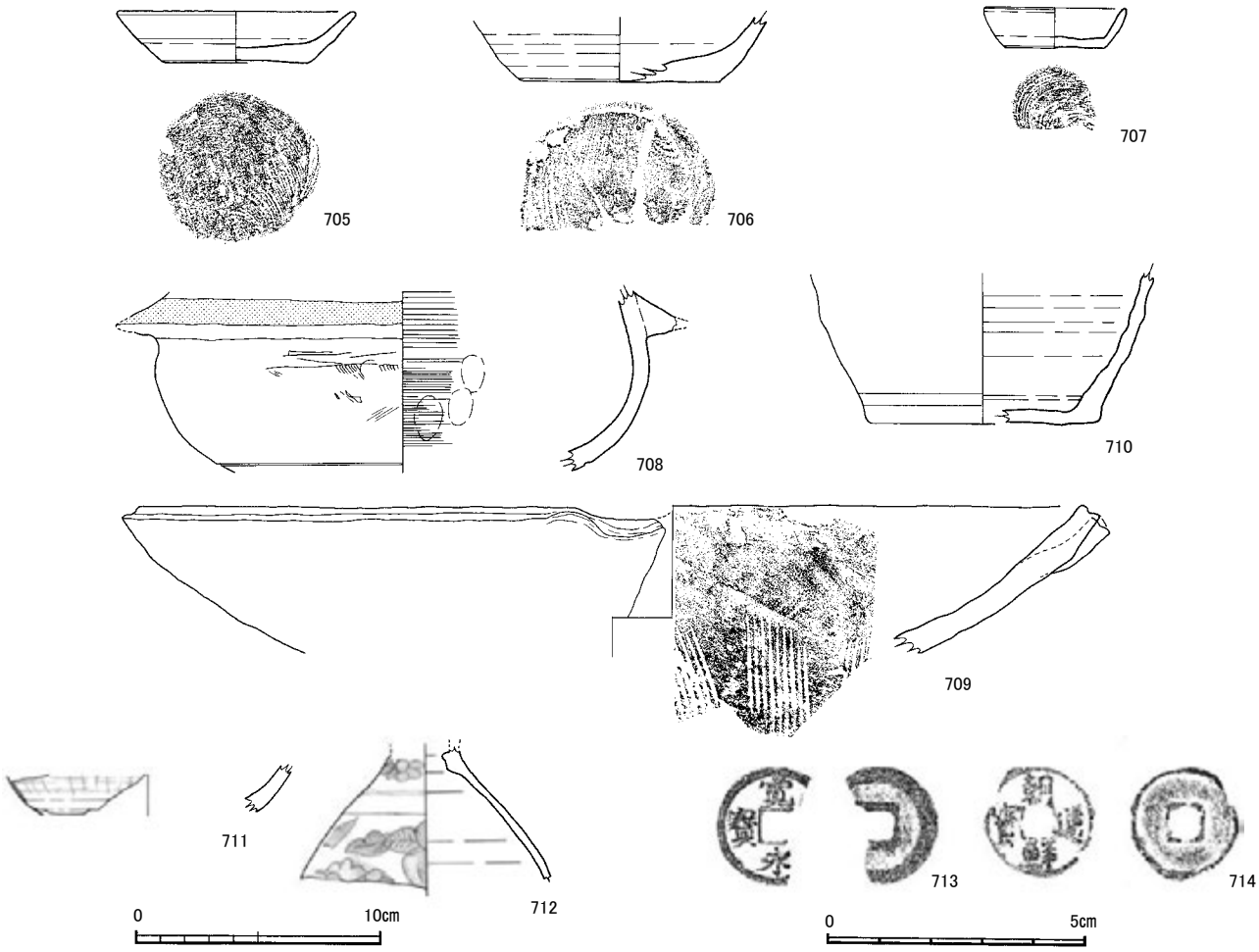
723・724は景徳鎮窯系のものである。723は饅頭心の碗で，高台内底面に「大明年製」の文字が描かれる。724は植木鉢である。底面に水抜き穴がみられる。725・726は漳洲窯系のものである。どちらも底部が碁笥底を呈し，砂粒が付着する。

土師器坏・皿

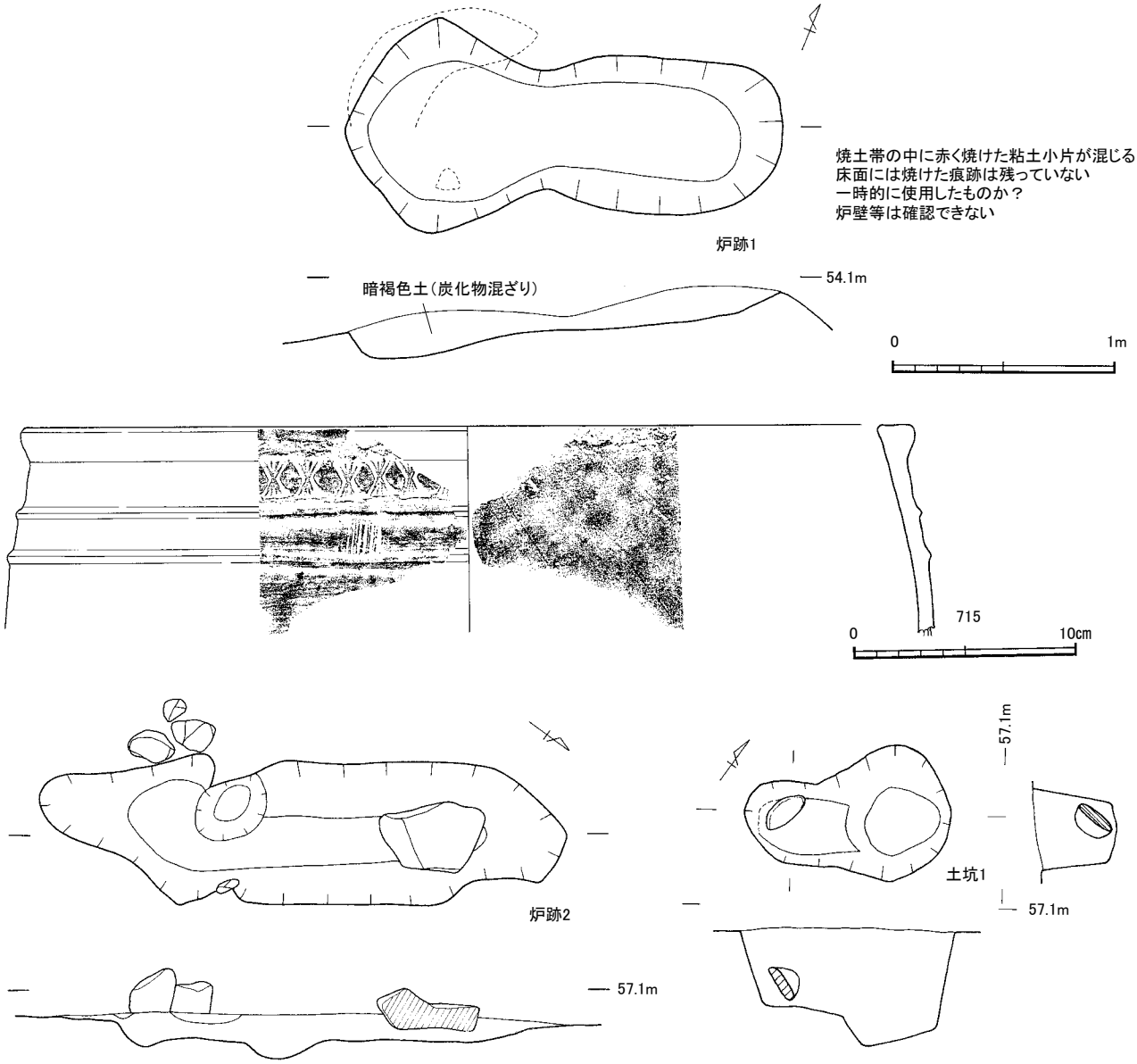
727は坏で，腰部は丸く，直行する口縁部となる。728は小型の灯明皿である。いずれも糸切り底である。

瓦質土器

729・730は擂鉢である。729は一単位6条の擂り目が斜位に入る。730は内面に工具によるハケ目状の調整を斜位に施したあと，一単位６条の擂り目を入れる。内底面は花状の擂り目が施される。外面はヘラ状工具で腰部を調整後，さらに横方向にヘラ削りを施す。



第152図　I地区　溝状遺構，ピット出土遺物

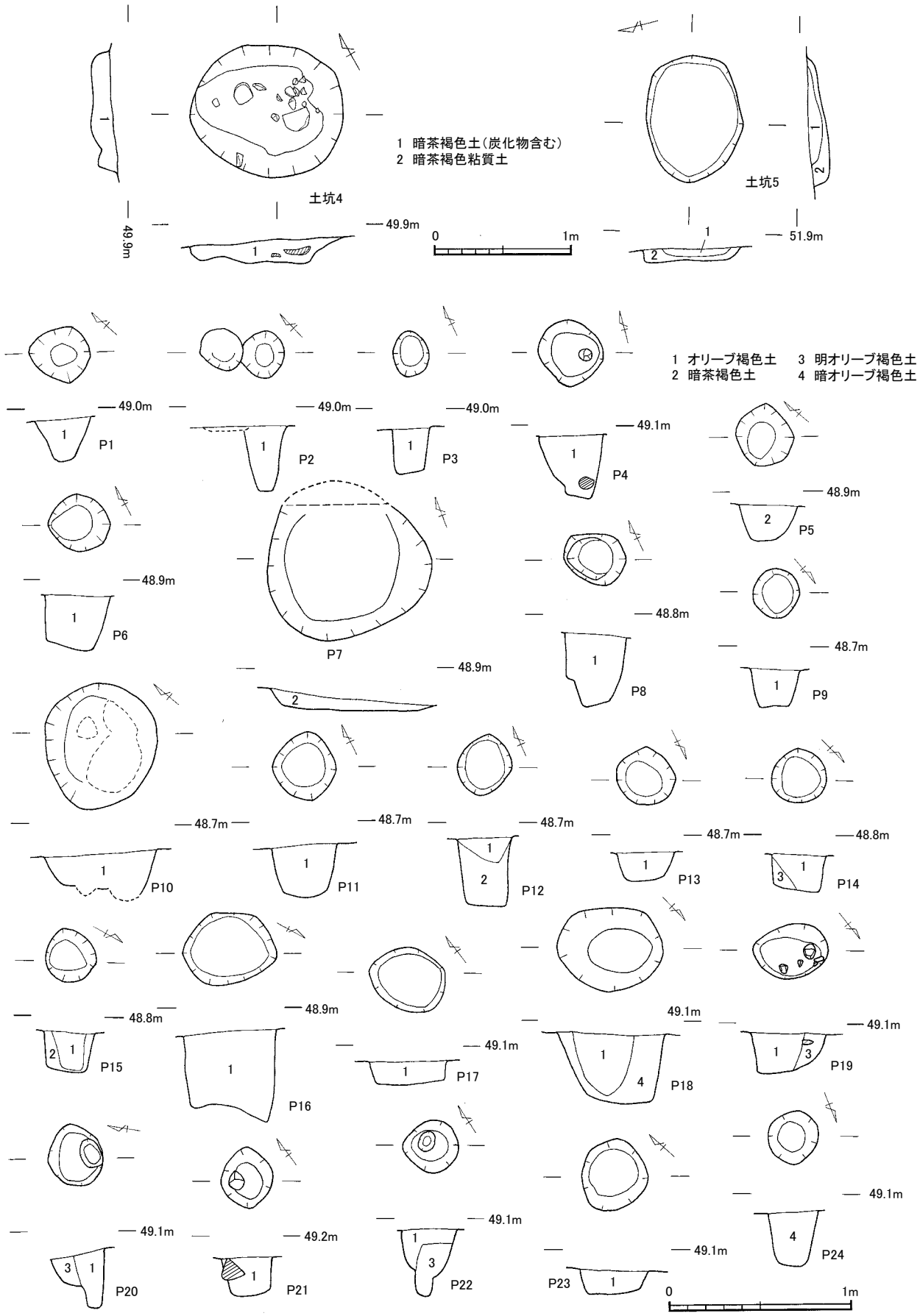


第153図　I地区　炉跡，土坑

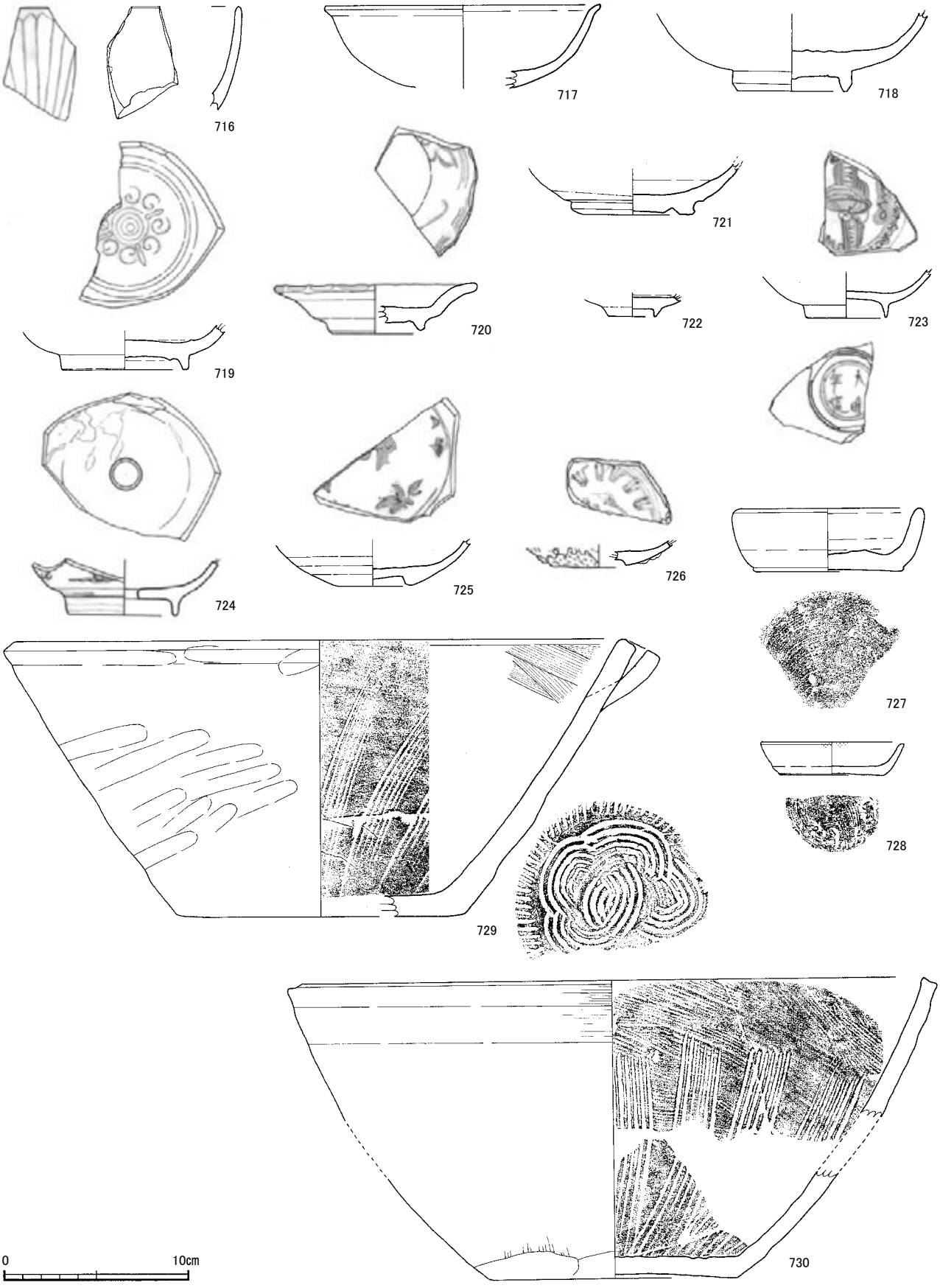
第32表　I地区検出炉跡，土坑計測表

挿図番号	掲載番号	炉跡				備考
		長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	全長	
153	1	61	76	18	197	不定形
	2	38	46	15	227	不定形

挿図番号	掲載番号	土坑				備考
		長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	全長	
153	1	93	37	53	－	不定形
	2	39	33	68	－	－
	3	85	63	49	－	不定形
154	4	112	96	18	－	－
	5	94	72	14	－	－



第154図　I地区　土坑，ピット



第155図　I地区　出土遺物(1)

731は三脚付きの火鉢である。腰部から体部へ開き，口縁部はキャリパー状に内弯する。口唇部は平坦で内側へ舌状に突き出る。三脚は欠損する。口縁部の外面に雷文のスタンプ押印を廻らす。

陶器

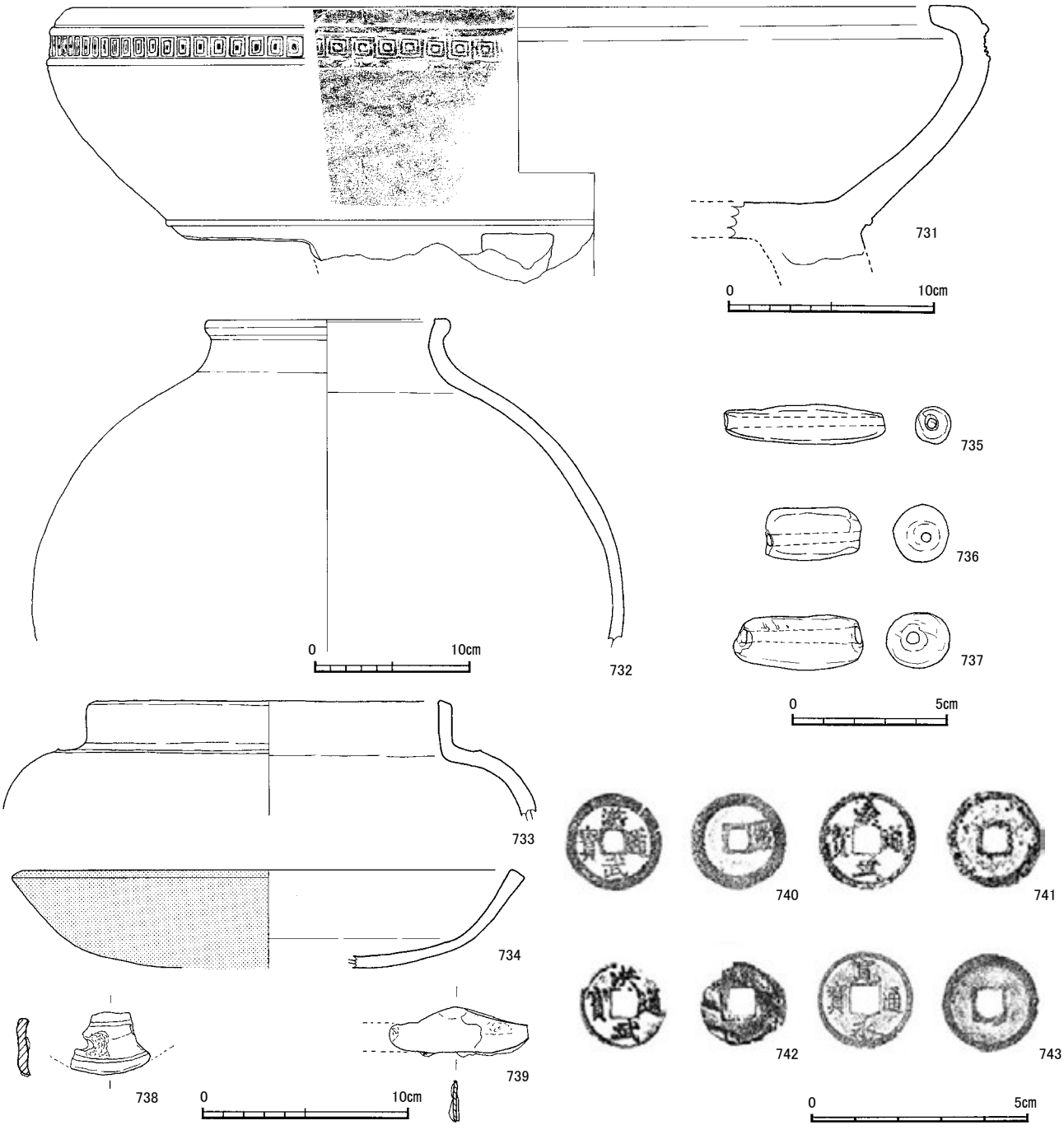
732は灰釉の陶器壺である。口縁部は短くわずかに外反し，丸味を帯びた口唇部となる。産地不明である。733は瓦質土器または陶器と思われる無釉の壺である。口縁部は短く垂直である。734は土師質土器の焙烙である。外面全体に煤が付着する。

土 錘

735～737は管状土錘である。

金属製品

738は円形の縁取りの銅製品の一部。739は鉄製の火打金と思われる。長さ6.7㎝。中央が山形をなし両端は丸みを帯びる。740～743は銅銭で，740～742は「洪武通寶」，743は「寛永通寶」である。



第156図　I地区　出土遺物(2)

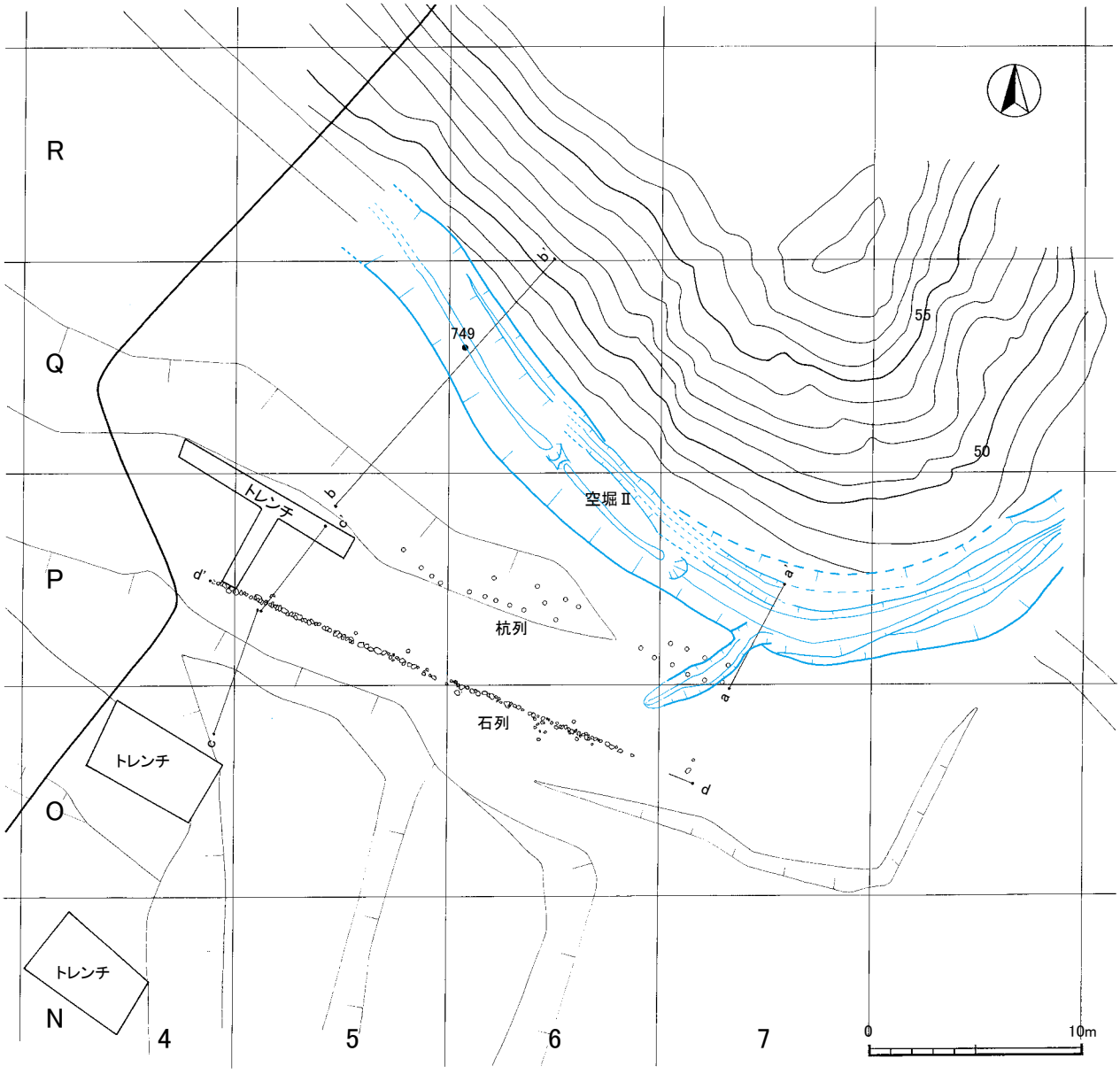
（10）J地区の調査

ア　概要

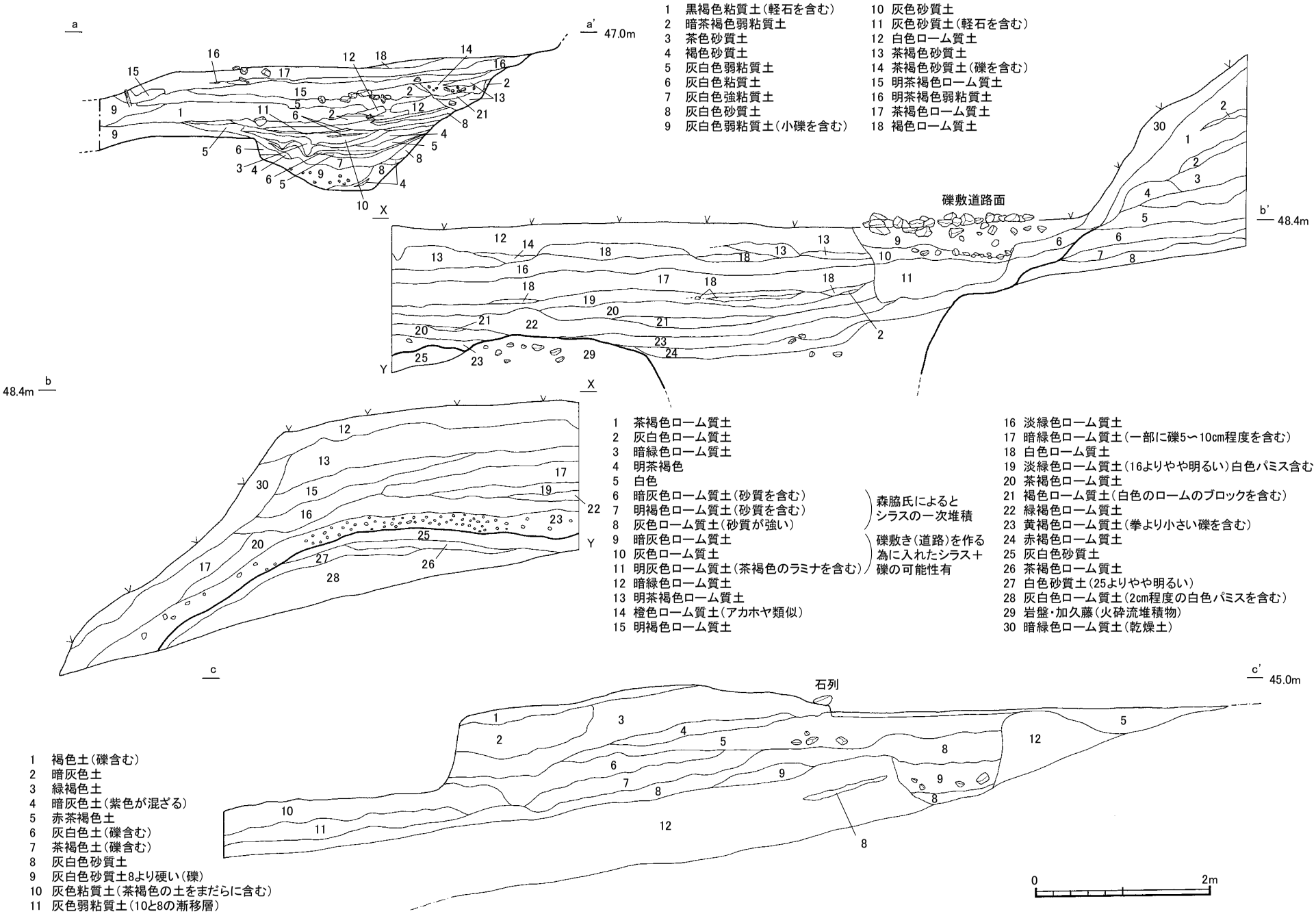
J地区は北側にE地区曲輪Ⅱ（中の城）があり，東側にI地区曲輪Ⅲがある。西側は調査区境界で，未調査区となるがその先には曲輪Ⅵ（松社城）がある。J地区の地形はE地区曲輪Ⅱの南側裾野から緩やかに下がる。K地区に繋がる部分では傾斜が急になり，谷を形成しながら川内川へと繋がる。E地区曲輪Ⅱ裾野部分が最も標高が高く，約48mである。調査前はこの裾野部分が歩道として利用され城奥へ進入できた。調査対象区のほとんどが杉林に覆われており，業者による伐採後は慎重に伐根しながら掘り下げを進めた。掘り下げを進めると水が湧いてくるため，有機質遺物の残存状況は良好であった。調査は確認トレンチを設定し，遺構や遺物の状況を把握しながら進めた。E地区曲輪Ⅱ裾野部分は表土が特に厚く（第158図），２mほど掘り下げてようやく空堀Ⅱの検出面が現れた。遺構，遺物の主な時期は土器形式，^{14}C年代測定等からおおよそ中世末（15～16C）～近世初頭（17C）と想定される。

遺構は空堀，溝状遺構，杭列，石列が検出された。

遺物は青磁，白磁，土師器，陶器，石製品，木器等が出土した。



第157図　J地区　全体図，遺構配置図　　∘ 杭



1 黒褐色粘質土(軽石を含む)
2 暗茶褐色弱粘質土
3 茶色砂質土
4 褐色砂質土
5 灰白色弱粘質土
6 灰白色粘質土
7 灰白色強粘質土
8 灰白色砂質土
9 灰白色弱粘質土(小礫を含む)
10 灰色砂質土
11 灰色砂質土(軽石を含む)
12 白色ローム質土
13 茶褐色砂質土
14 茶褐色砂質土(礫を含む)
15 明茶褐色ローム質土
16 明茶褐色弱粘質土
17 茶褐色ローム質土
18 褐色ローム質土

1 茶褐色ローム質土
2 灰白色ローム質土
3 暗緑色ローム質土
4 明茶褐色
5 白色
6 暗灰色ローム質土(砂質を含む)
7 明褐色ローム質土(砂質を含む)
8 灰色ローム質土(砂質が強い)
9 暗灰色ローム質土
10 灰色ローム質土
11 明灰色ローム質土(茶褐色のラミナを含む)
12 暗緑色ローム質土
13 明茶褐色ローム質土
14 橙色ローム質土(アカホヤ類似)
15 明褐色ローム質土
16 淡緑色ローム質土
17 暗緑色ローム質土(一部に礫5～10cm程度を含む)
18 白色ローム質土
19 淡緑色ローム質土(16よりやや明るい)白色パミス含む
20 茶褐色ローム質土
21 褐色ローム質土(白色のロームのブロックを含む)
22 緑褐色ローム質土
23 黄褐色ローム質土(拳より小さい礫を含む)
24 赤褐色ローム質土
25 灰白色砂質土
26 茶褐色ローム質土
27 白色砂質土(25よりやや明るい)
28 灰白色ローム質土(2cm程度の白色パミスを含む)
29 岩盤・加久藤(火砕流堆積物)
30 暗緑色ローム質土(乾燥土)

森脇氏によるとシラスの一次堆積

礫敷き(道路)を作る為に入れたシラス＋礫の可能性有

1 褐色土(礫含む)
2 暗灰色土
3 緑褐色土
4 暗灰色土(紫色が混ざる)
5 赤茶褐色土
6 灰白色土(礫含む)
7 茶褐色土(礫含む)
8 灰白色砂質土
9 灰白色砂質土8より硬い(礫)
10 灰色粘質土(茶褐色の土をまだらに含む)
11 灰色弱粘質土(10と8の漸移層)
12 シラス一次

第158図　J地区　土層断面図

イ　遺構

（ア）空堀Ⅱ（第157図）

Ｅ地区曲輪Ⅱ（中の城）の裾野の表土を掘り下げると２m程下げたところで空堀Ⅱが検出された。空堀Ⅱの一端は未調査区である松社城側からのび，Ｅ地区曲輪の裾野を沿うように検出され，東側D地区に繋がる。J地区での空掘Ⅱの断面形はＶ字形（薬研堀）の様相を呈し，深さは西側の深い所で約２m，東側に向かうにつれてレベルが低くなり，Ｐ－７区で最も堀底のレベルが低くなる。それより北東側は断面形が半円形状を呈し，北東側に向かうにつれて堀底のレベルは高くなっていく。空堀Ⅱの断面図(第158図)には水成堆積層が認められるため，自然に堆積していった過程が推察できる。埋土中からは青磁や白磁の他，Ｑ－６区より木製の櫂(749)が出土した(第160図)。

空堀Ⅱ内出土遺物

744～746は龍泉窯系青磁の椀である。744は外面に蓮弁文，内面に片彫りによる文様が描かれるものと思われる。745は見込みに印花文がスタンプされる。畳付から高台内底面は露胎する。746は内面に陽刻により文様が施される。見込みと高台内底面は輪状に釉剥ぎされ，高台内底面に粘土も熔着する。747は椀の腰部としたが，他の器種の可能性も考えられる。748は滑石製品である。中央に1か所穿孔があり，加工途中の可能性もあるが，垂飾品と思われる。749は櫂である。長さ84.4cm，身の長さは47.9cm，幅15cm，厚さ3.2cm，柄は長径3.5cm，短径2.6cmの楕円形で長さ36.5cmである。本体は長方形で，先端は片面を削り，側面は丸味を帯び，基部は両サイドを斜めに切り込んでいる。鍬の可能性もある。材質は常緑樹のスダジイである。

溝内出土遺物

750～753は龍泉窯系青磁である。750・751は口縁端部が外反し丸くつくられる椀である。752は口縁部が内弯し，外面にやや崩れた雷文帯がめぐる。753は腰部が張る椀の底部である。高台内底面は輪状に釉剥ぎされる。

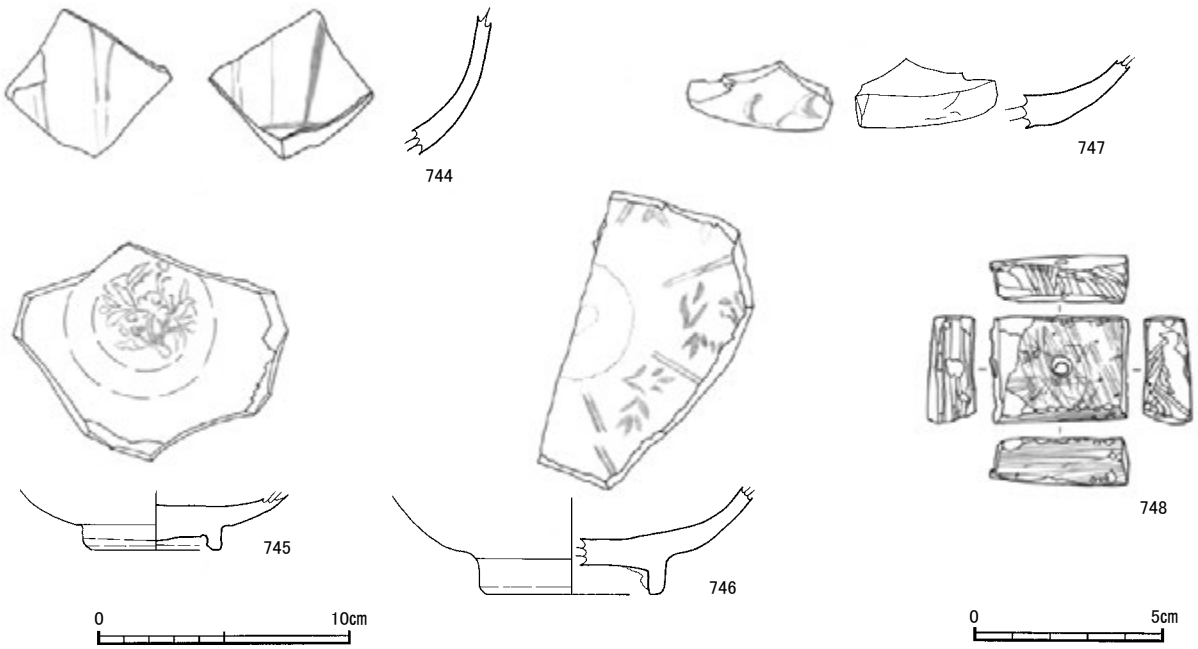
754は白磁の坏である。高台は抉り高台を呈する。

755は輸入陶器の水注または瓶と思われる。残存部は内面のみ灰白色の釉がかかる。756は瓦質土器の擂鉢である。内面には斜位のハケ目状の工具痕が残り，その上に一単位５条の擂り目が入る。757は国内産陶器で，備前産の壺である。口縁部は玉縁状をなす。

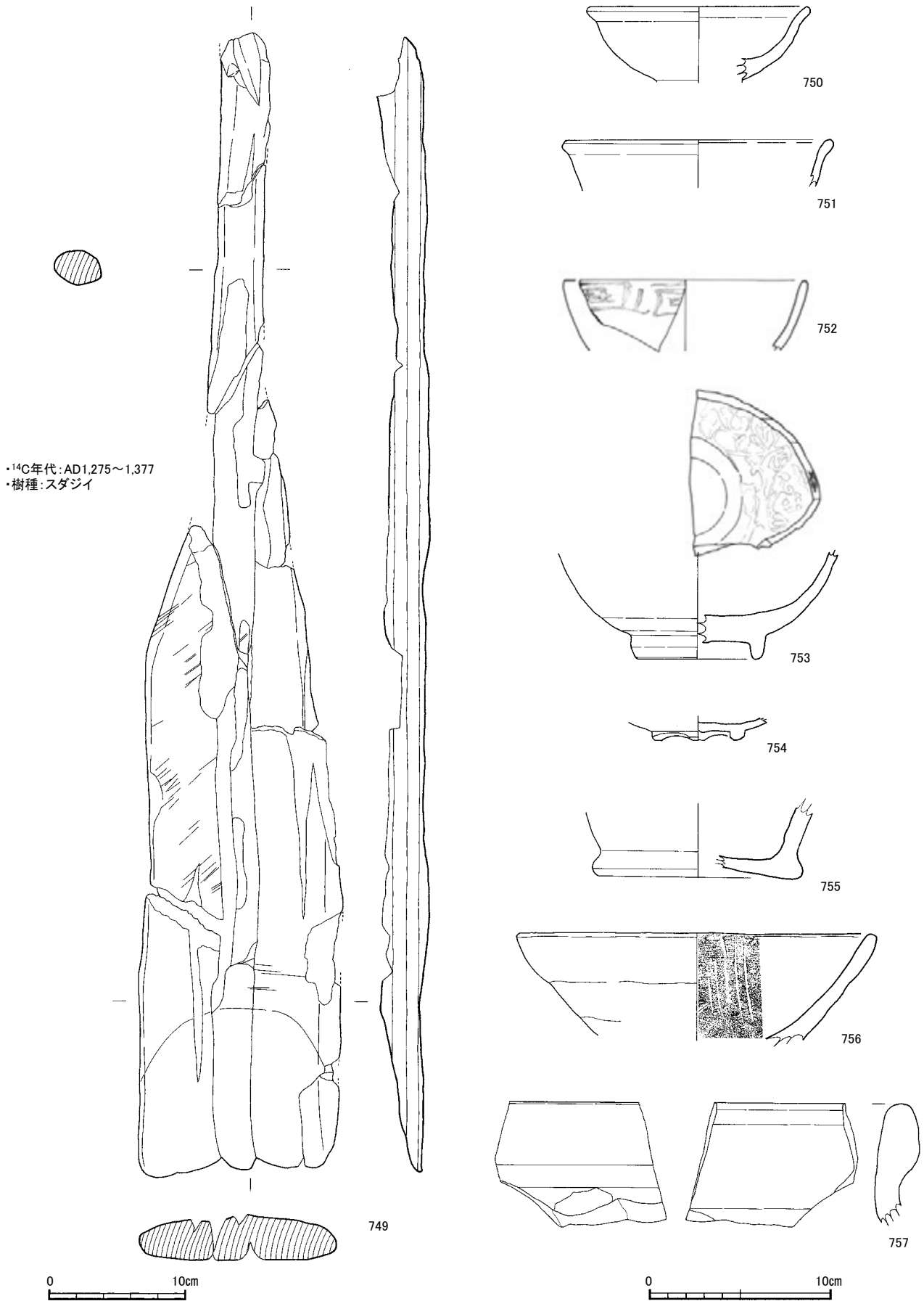
（イ）石列・杭列（第161図）

Ｏ－7区からＰ－4区にかけて石列が検出された。全長は24.6mで，人頭大の礫を用い，北側の杭列とほぼ平行に並ぶ。北側で面を揃えるように並べているため，北側（曲輪Ⅱ）を意識した区割り的な意図も伺えるが，詳細は不明である。

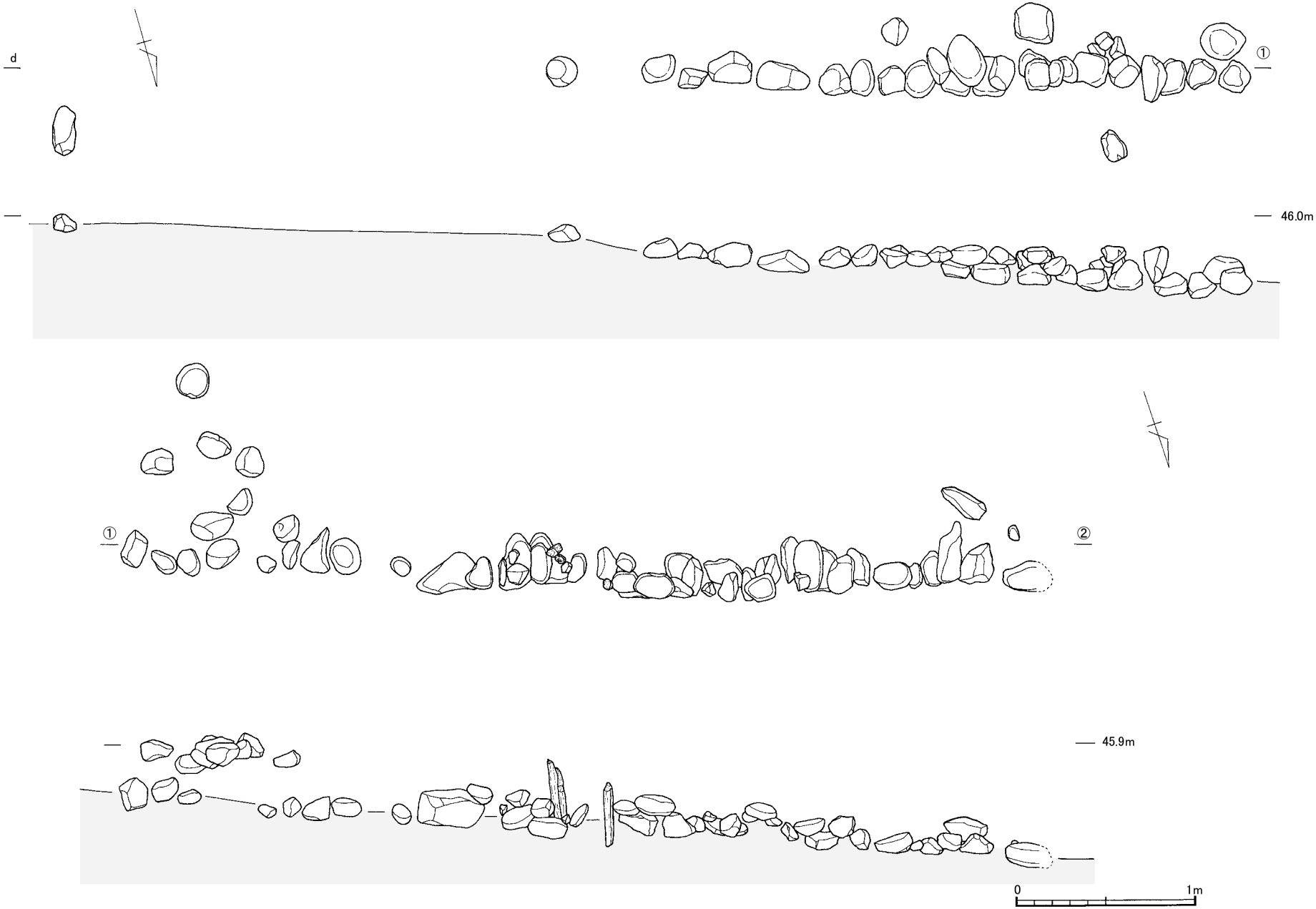
Ｐ－5区からＰ－7区に杭列が検出された。杭列は空堀Ⅱにほぼ平行して２列が検出された。杭列には一部竹が織り込まれた痕跡が残っており，柵の様相を呈していた。等高線に沿うように並ぶため，上位からの土砂崩れ等を防ぐための土留め的な役割があったかもしれないが，用途は不明である。



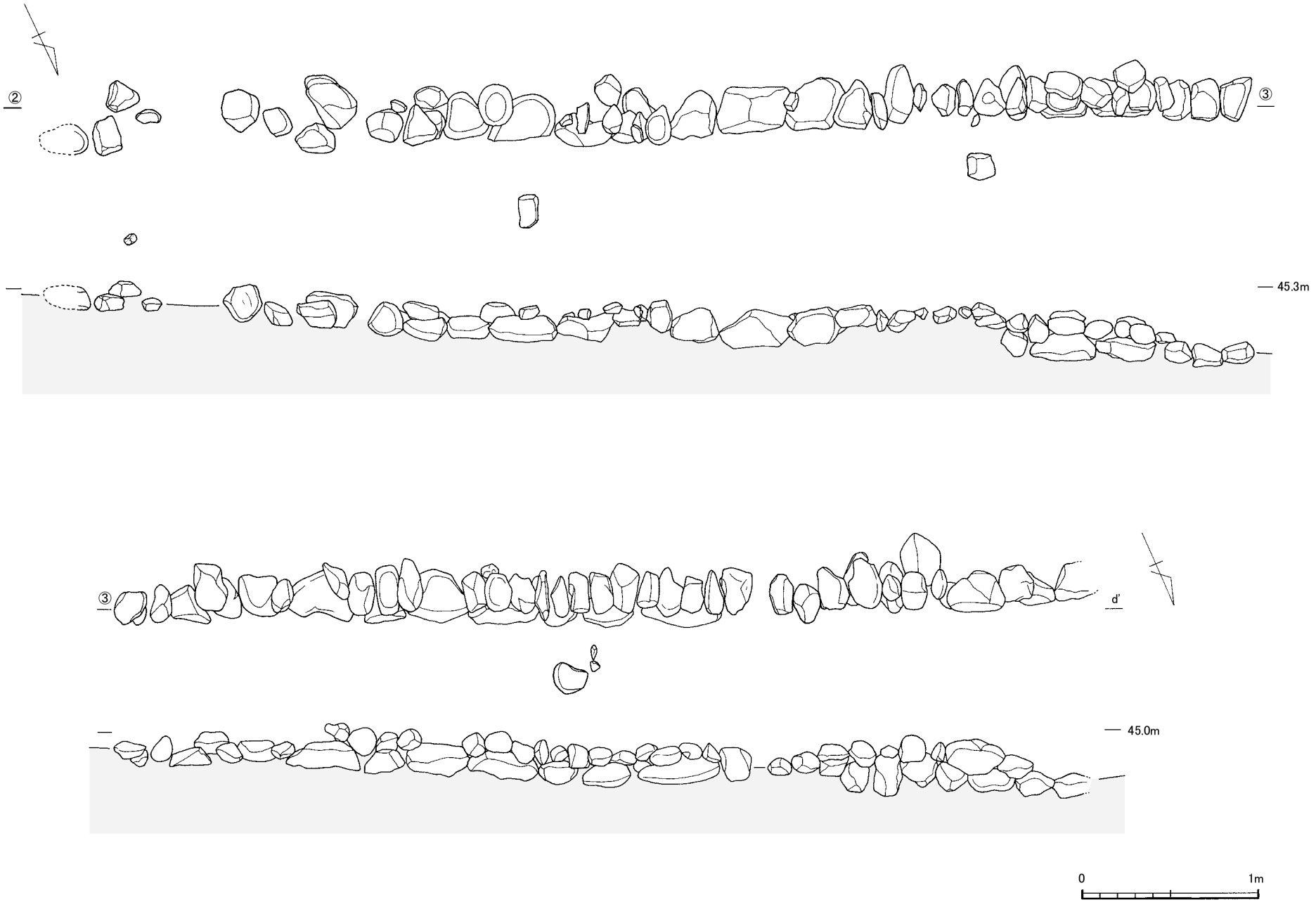
第159図　J地区　空堀Ⅱ出土遺物



第160図　J地区　空堀Ⅱ，溝状遺構出土遺物



第161図　J地区　石列(1)



第162図　J地区　石列(2)

ウ　遺物（第163図）

青磁

758はP－6区から出土した龍泉窯系青磁の皿である。釉は全面に厚くかけられ，高台内底面は釉剥ぎされる。

土師器

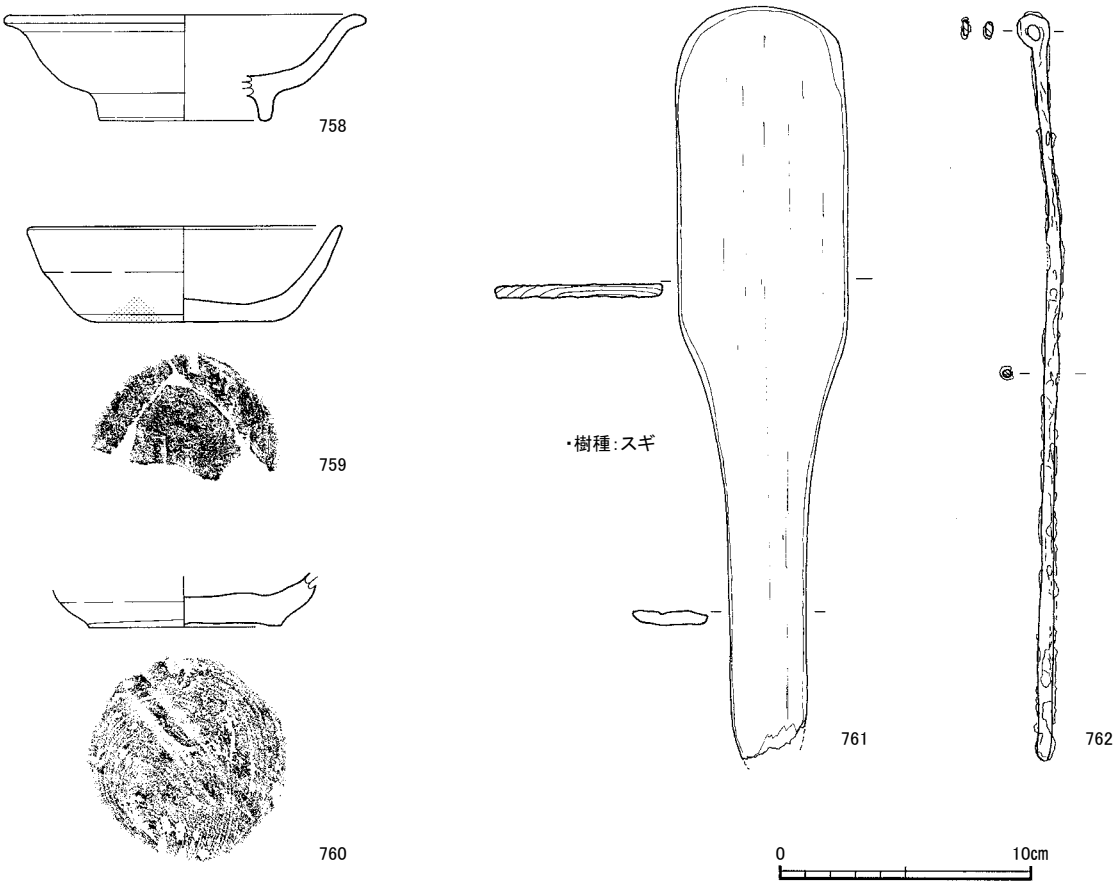
759・760は土師器の坏である。糸切り底で759は底部に煤が付着する。

木製品

761は杓子状の木製品である。柄頭はわずかに欠損している。長さ29.5cm，幅6.8cm，柄の幅は３cm，厚さ0.6cmの平板である。身の先端と柄頭の末端は丸く仕上げる。樹種はスギである。

金属器

762は棒状の鉄製品で表層から出土した。全長が29.5cmで，断面形はほぼ円形である。直径は最大５㎜で，全体的にほぼ同じ太さである。全体が錆に覆われているもののほぼ原型を留めているが，先端部分は折れた様子が認められる。頭部は丸く仕上げ，丸いひも留めのようなものが作られている。その穴の直径は約7.5㎜である。時期，用途は不明である。



第163図　J地区　出土遺物

（11）K地区の調査

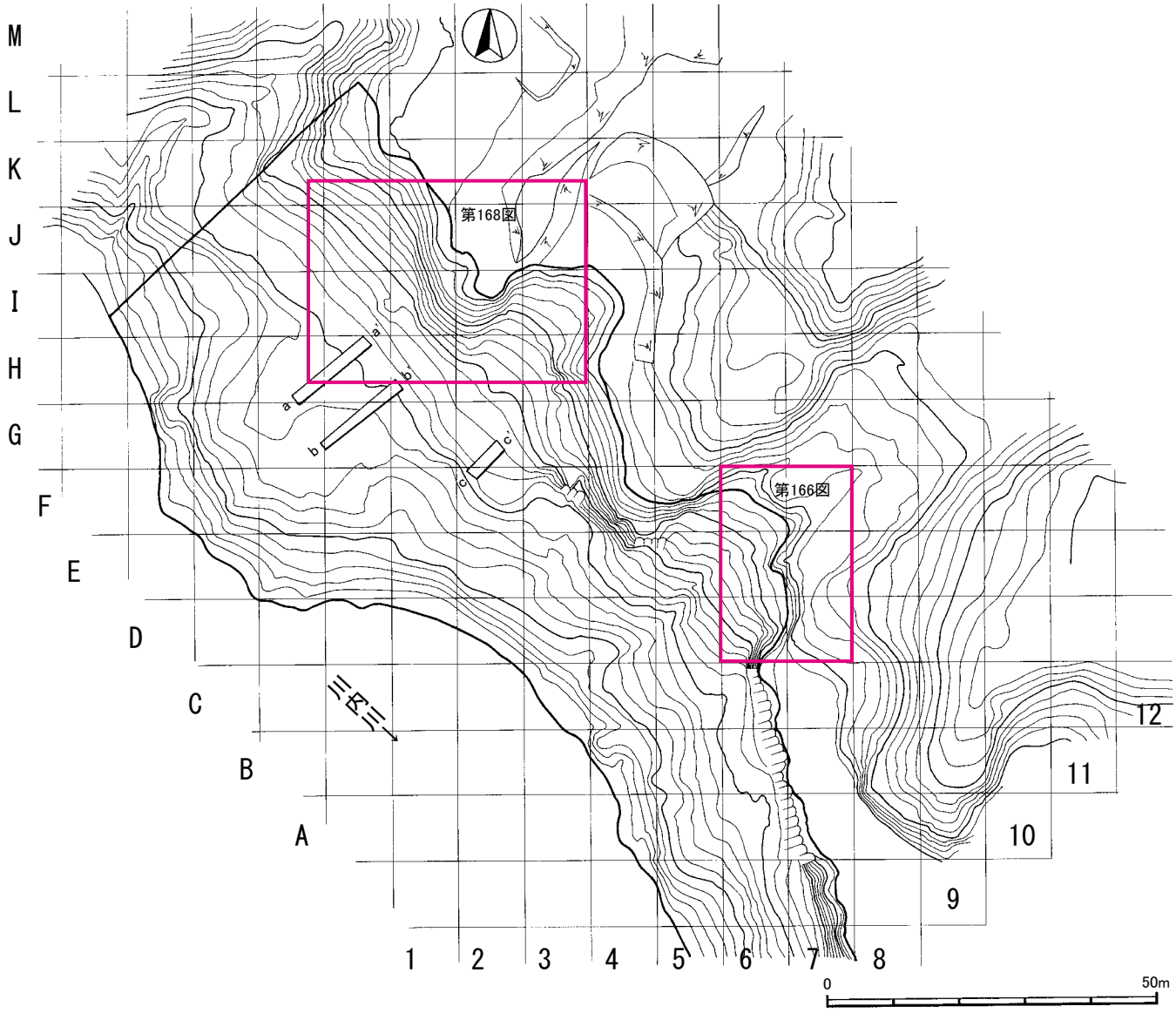
ア　概要

K地区は調査区の南西側に位置し，川内川に面する地区である。I地区曲輪ⅢやH，J地区の谷部と接しており，川際までの範囲となるため比高差が大きな地区である。I地区曲輪Ⅲの標高は57m，川内川水面が15mであるためその差は42mとなる。H地区からは空堀Ⅰ－１・２が延びており，H，J地区の雨水はK地区へ流れこみ川へ注がれる。斜面には加久藤火砕流堆積物である溶結凝灰岩が露出した場所が多い。上部の溶結度は小さく，下部は大きい。後述する石切場跡もこの溶結凝灰岩の節理を利用して切り出されたと想定される。

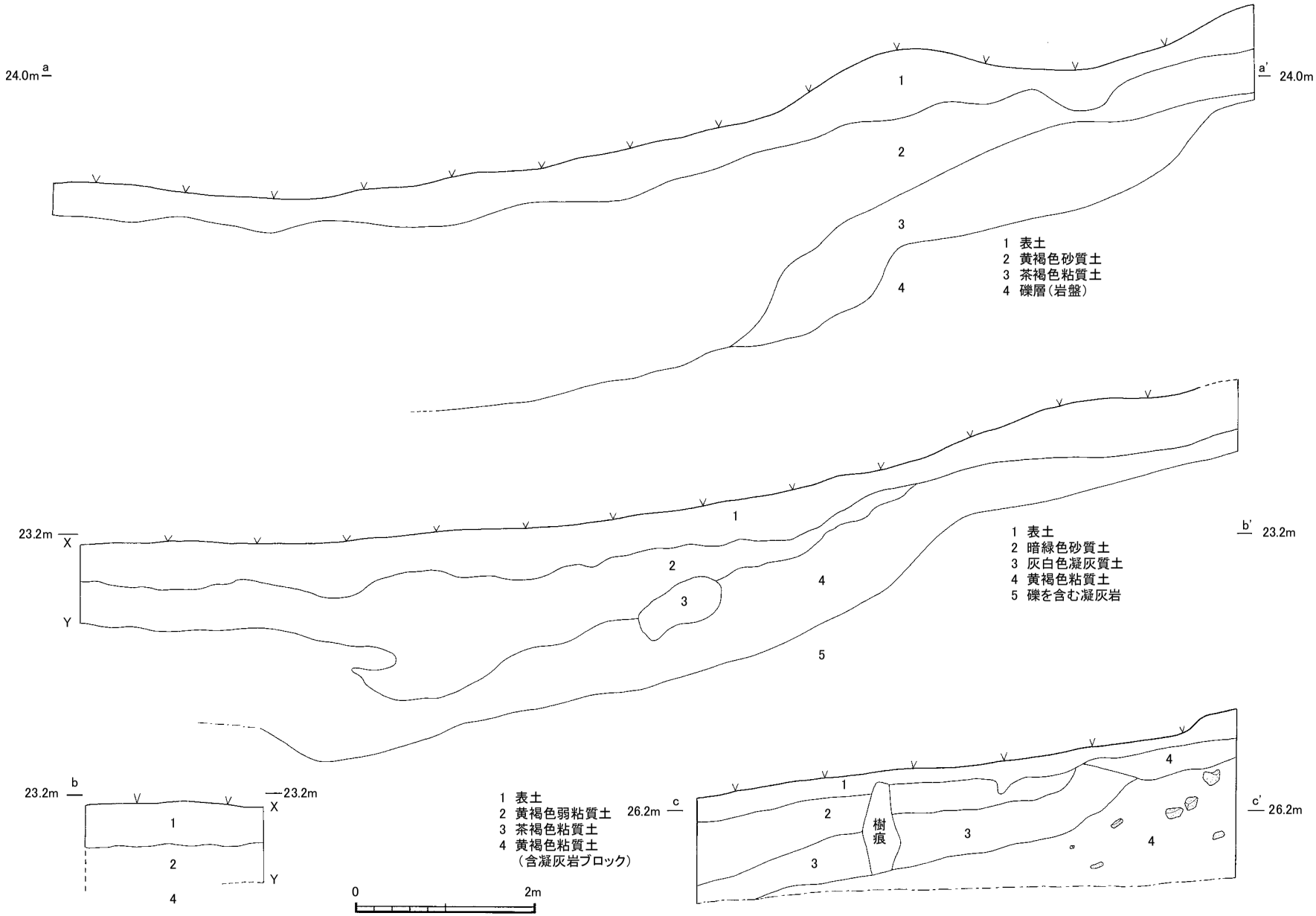
川内川はK地区に面した地点でぶつかり，流れが遅くなる。その影響か，K地区川際には「舟溜り」という名が残されている。調査前は杉林で業者による伐採が行われ，発掘調査は伐根作業と平行して行われた。

確認トレンチを数か所設定し，遺構，遺物の拡がりを確認した。H・G－ア・イ区には川面より約10m高い平場にトレンチを設定し，約２m掘り下げた。その結果，下層には河川の氾濫等により厚く堆積した砂質土が確認され，遺構，遺物は検出されなかった。

D・E・F－６・７区では石切場跡が検出された。遺物は石切場で使われたノミが１点と矢の痕跡が残った石屑を１点掲載した。



第164図　K地区　全体図



第165図　K地区　土層断面図

イ　遺構

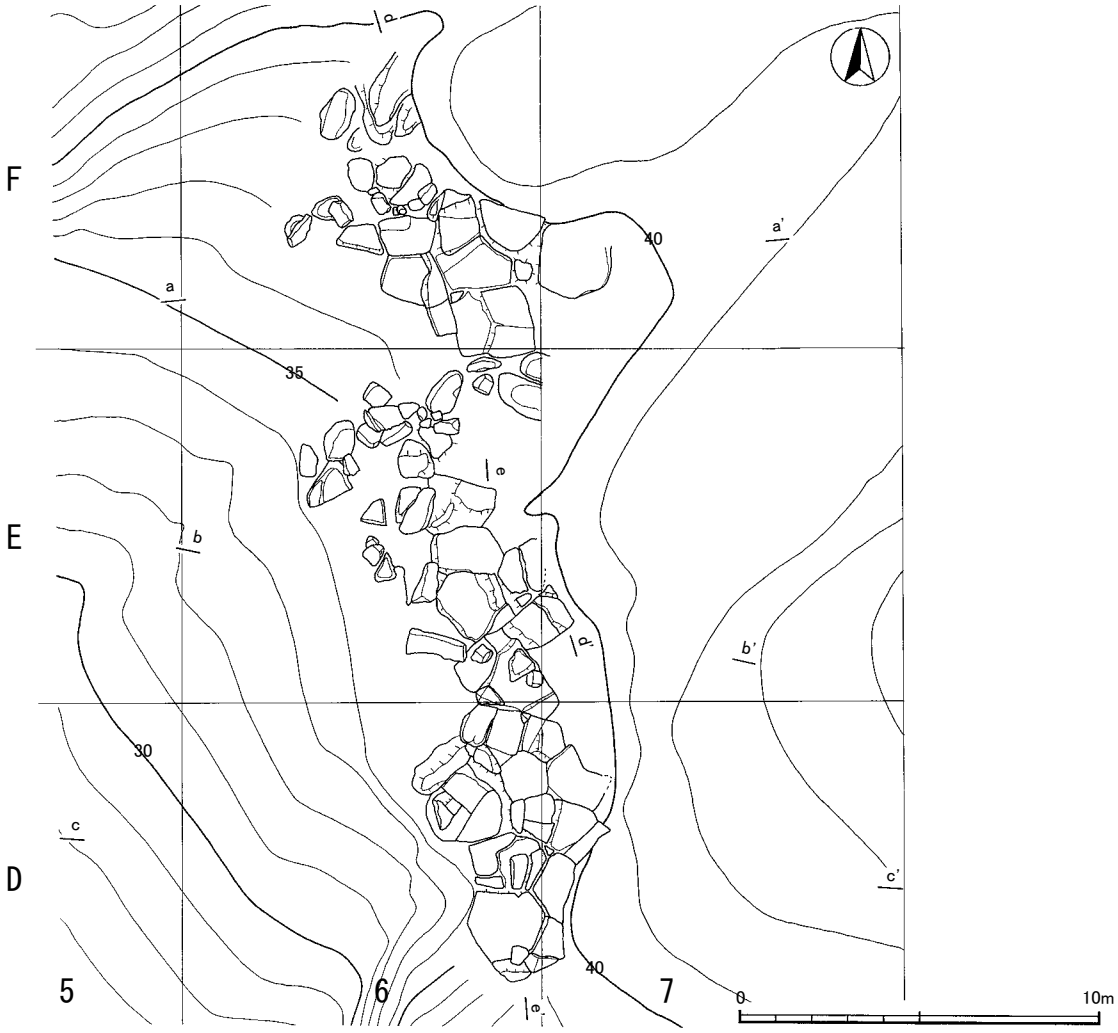
石切場跡（第166～169図）

石切場跡は３か所から検出された。D・E・F－6・7区の石切場跡を石切場跡１，I・H－2区で検出されたものを石切場跡２，K・J－ア区で検出されたものを石切場跡３とする（第166・168図）。いずれも南西方向の川内川に開析した谷部で検出された。切り出した面や矢の痕跡が最も多く残されていたのは石切場跡１で，最も南側に位置し，舟溜りにも近い。標高35～40mで検出され，加久藤火砕流堆積物である溶結凝灰岩の縦方向の節理を利用して，階段状に切り出されている。凝灰岩の上部は下部よりも溶結度が低く，比較的軟らかい。石切場跡２も標高約30mで検出されていることから，そのレベルが凝灰岩の溶結度が切り出すのに適した硬度であったか，目的とする石製品の硬度に適していた場所であったかを選択した可能性がある。矢の痕跡も多数残されており，川際付近には落下した切り屑も多数残されていた。

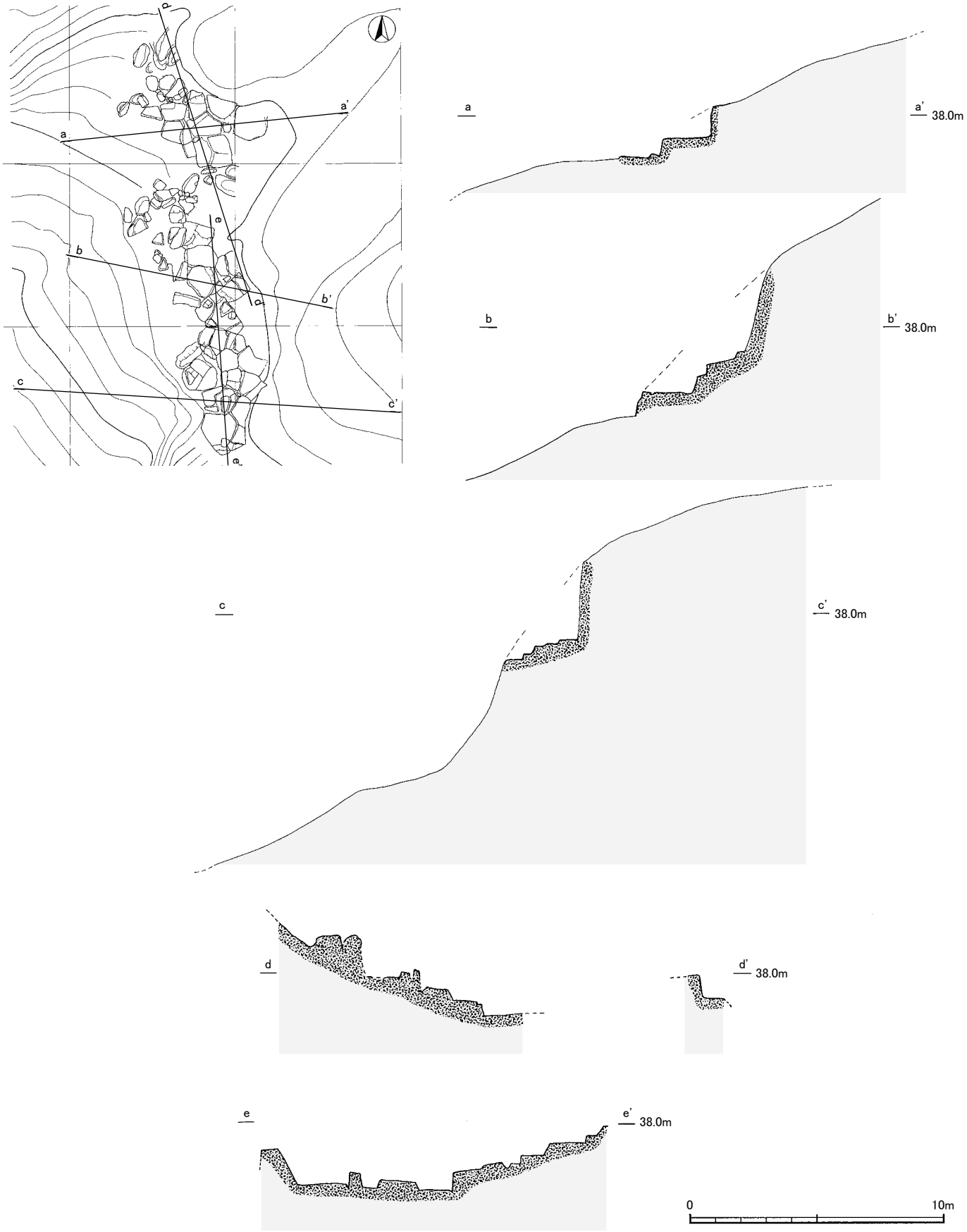
しかし，目的となる石製品は出土しなかったため，荒く切り出された石は川から運ばれ，異なる場所で製品化された可能性がある。石切場跡２，３は１に比べ，切り出された面や矢の痕跡が少なく，利用頻度が低かったと思われる。石切場跡の時期は，矢跡から18～20世紀前半のものであろうと考えられる（※三浦正幸氏の御教示による)。

ウ　遺物

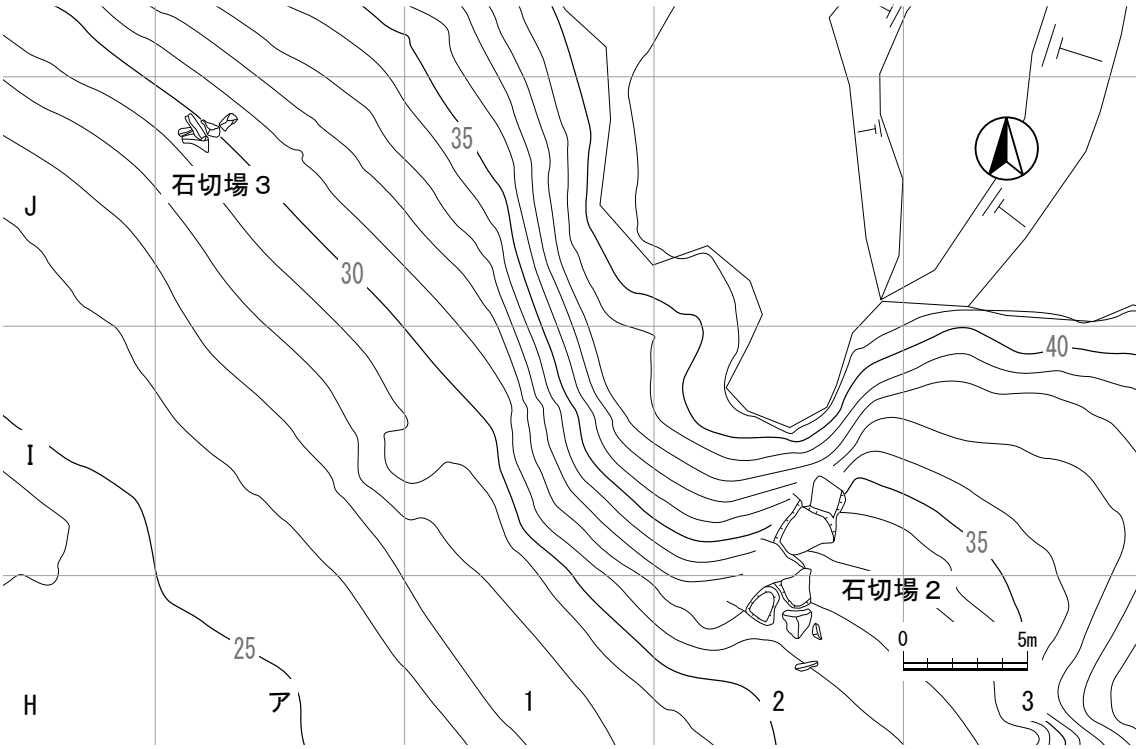
763は矢の痕跡が残った石屑である。凝灰岩で矢の幅は約7cm，深さは約6cmで，約10cm間隔に打ち込まれている。764は石を割る時に使用したと考えられる鉄製の鑿である。全体が錆に覆われているものの，先端部分は尖っており，ほぼ原型を留めている。最大長は17.3㎝，最大幅は2cm，重さは380gで断面形は四角形を呈する。表面には叩いて成形したような凹みが多数見られた。矢の痕跡は多く残されていたが，矢は出土していない。



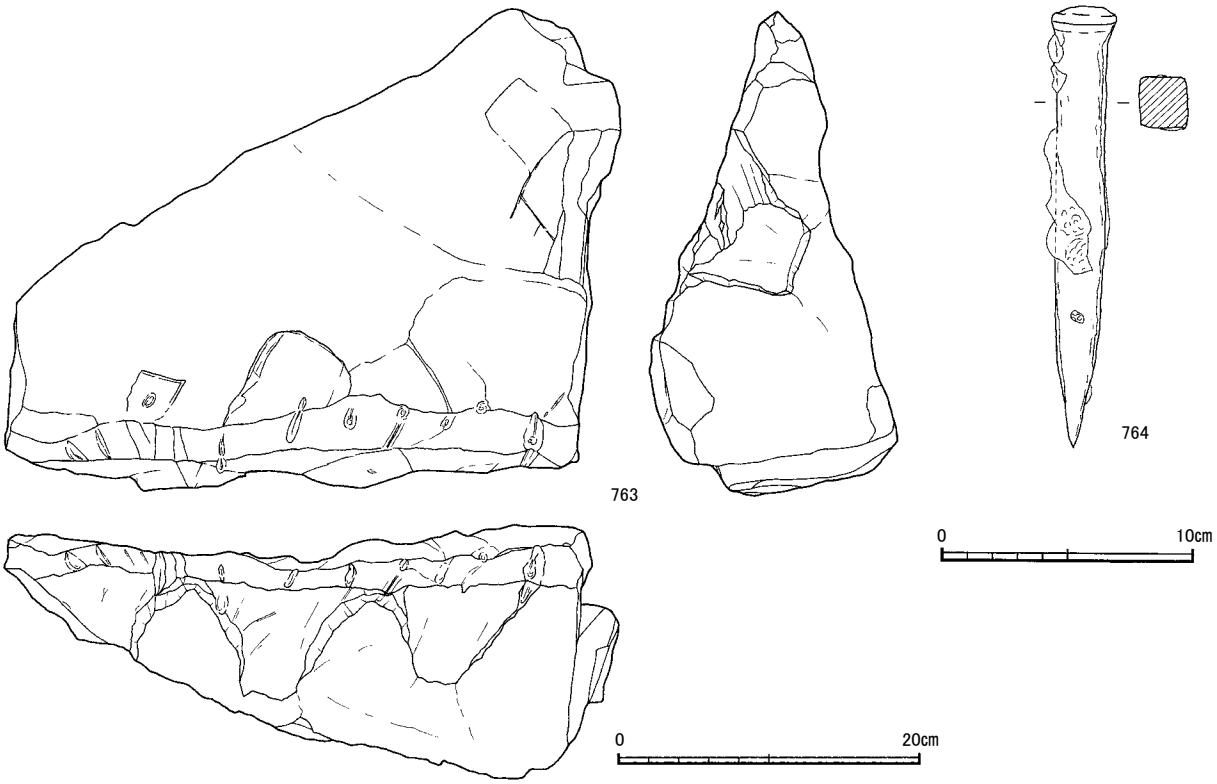
第166図　K地区　石切場１



第167図　K地区　石切場１断面図



第168図　K地区　石切場２，３



第169図　K地区　石切場１出土遺物

（12）L地区の調査

ア　概要

Ｌ区は海抜37～39mの南側の端の縄張りに当たる。南端にはM区から延びた丘陵先端部分が幅３～４ｍの切り通しとなっている(第170図　●印)。

そこから，北に向かって細長く伸びた平坦地がL区である。切り通しから見て左側，つまり西側は川内川を望む急峻な崖になっている。東側はM区に向かって緩やかに登っている。同区は川内川からM区に向かって登る斜面の途中に位置する。なお，切り通し箇所の西側には船着場があることから，位置的に船着場からの荷物等を搬入する場所として活用された可能性も考えられる。

G区の下付近は平坦地であるが，幅は最大でも20m程しかなく，曲輪として利用された可能性は考え難い。

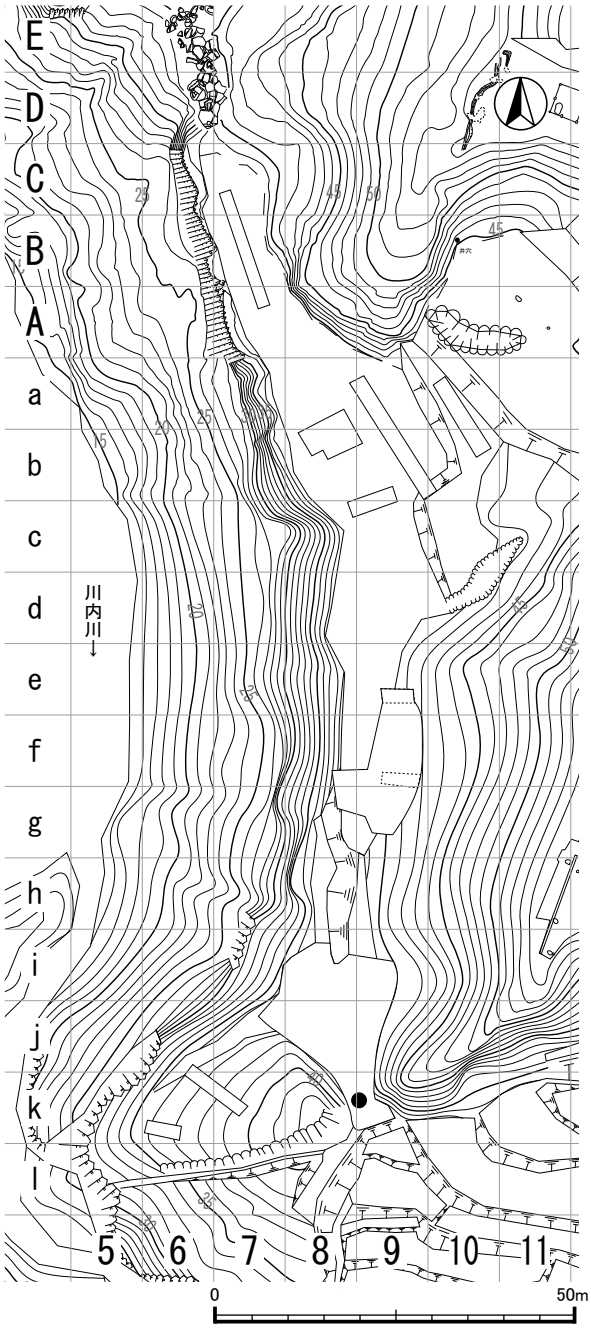
本区やその周辺は竹林や雑木林に囲まれており，発掘調査はそれらを取り除いた後に実施した。

調査方法は，最初に切り通し横の斜面に2本,平坦地に6本の合計8本のトレンチを入れた。その結果を基にe～g-8,9区周辺，切り通し部分の発掘調査を行った。その結果，遺構は検出されなかったが，釘と思われる鉄製品が5点，小型の鉄滓が26点，陶磁器が2点，土師器が1点，古銭が1点の合計35点の遺物が出土した。その内の陶磁器と土師器，古銭の4点を掲載する。

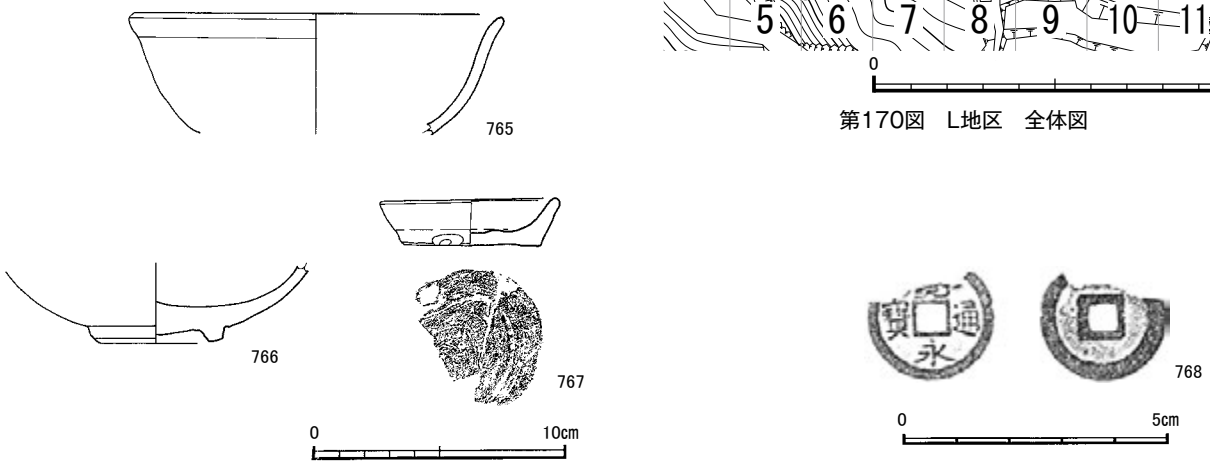
イ　出土遺物（第171図）

765･766は龍泉窯系青磁である。765は口縁端部が外反し丸く作られる椀である。766は腰部が張る椀の底部である。外面腰部から高台内底面は無釉である。

767は土師器の小皿である。口径7.2㎝，底径5.6㎝，器高2㎝。体部から口縁部は直行する。768は寛永通寶である。



第170図　L地区　全体図



第171図　L地区　出土遺物

（13）M地区（曲輪Ⅴ）の調査

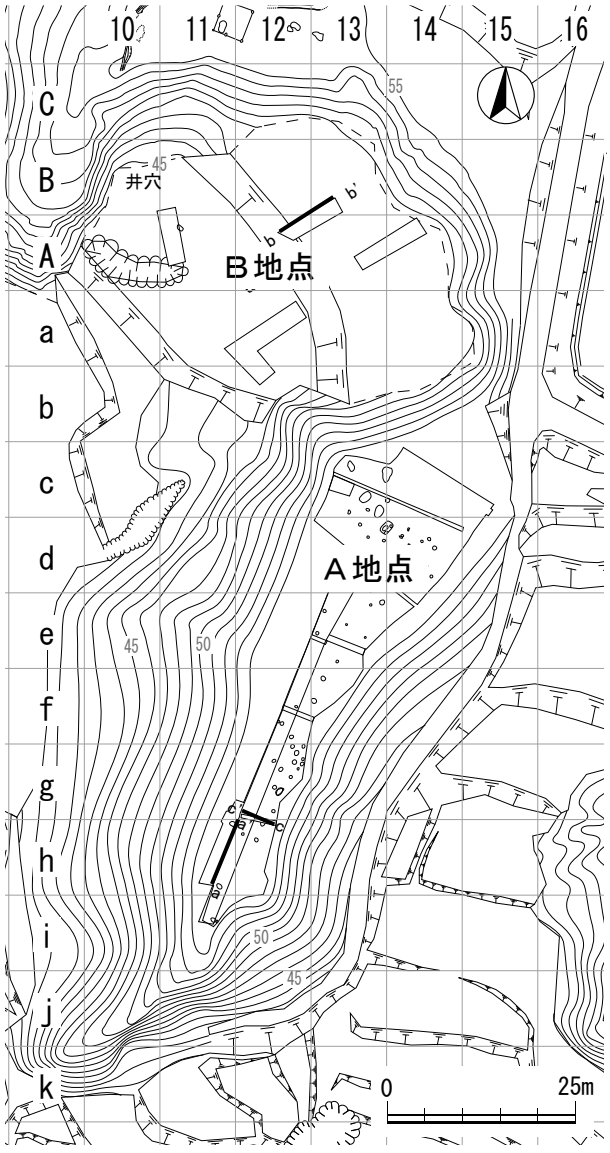
ア　概要

調査区の南側，現宮之城中学校の西側に位置する。南西方向に約60m延びた丘陵の地形（A地点）および北西側の谷間，２段のシラスからなる平場（B地点）にあたる。B地点の北西には井穴が所在する。

遺構には竪穴建物跡をはじめ，焼土，土坑，土坑墓，坩堝関連の炉跡が検出された。出土遺物には青磁，白磁，青花，坩堝，羽口，土錘，古銭，銅製品などがある。

イ　土層

Ⅰ層は表土層，Ⅱa層は鈍い橙色，Ⅱb層は褐色層，Ⅱcは黒褐色（炭を含む），Ⅲ層はアカホヤ層の２次堆積層，Ⅳ層は砂礫層。



第172図　M地区（曲輪Ⅴ）全体図

ウ　遺構

（ア）竪穴建物跡

竪穴建物跡は２棟を検出した。

竪穴建物跡１（第176図）

B地点谷間の平坦地，A-12区に位置し，縦2.7m，横2.7mでほぼ正方形を呈し，深さは約50㎝である。主軸はN-32°-W。

竪穴の北西側壁と北東側壁に沿って，床面に長さ約3.4m，幅７～８㎝，深さ５㎝の壁帯溝をL字状に設けている。溝の両端は柱穴が重複し，定かでない。さらに，壁帯溝と同じ向きの床面には溝よりやや内側に径20㎝前後，深さ20～32㎝の壁柱穴が７個が検出した。

竪穴建物跡２（第177図）

A地点の丘陵部のd-14区に位置し，平面プランは縦2.6m，横2.0mで方形である。遺構が所在する場所は，北東側へ傾斜する地形でレベルは西南部が高く北東部で低く，深さは高い所で65㎝から低い所で20㎝を計り，床面は水平に仕上げる。主軸は主軸はN-53°-E。柱穴は，竪穴の四隅にもきちんと設け，縦横３本ずつ計６本からなる。柱穴の径は13～43㎝，深さ12～60㎝である。なお，柱穴８の南半分を塞ぐように，三脚付き火鉢が床面着で出土している。

出土遺物

769は瓦質の三脚付き火鉢である。口径49㎝，高さ16.1㎝，脚の高さ4.8㎝である。丸平底で体部は丸味を帯び，わずかに内弯した口縁部となる。口唇部は平坦で，内側へやや拡張して突き出る。口縁部直下には３本の沈線文を巡らし，胴部中位に菊花文のスタンプを横位印刻し，立方体の脚を３か所に付す。奈良火鉢で，15C頃に想定される。

（イ）焼土（第174・176図）

焼土は，A-11区から２基出土した。

焼土１は，縦40㎝，横30㎝，深さ10㎝でわずかに窪んだ床面には炭化物層をみる。南側，北側には約14㎝前後の火を受けた２個の礫がある。

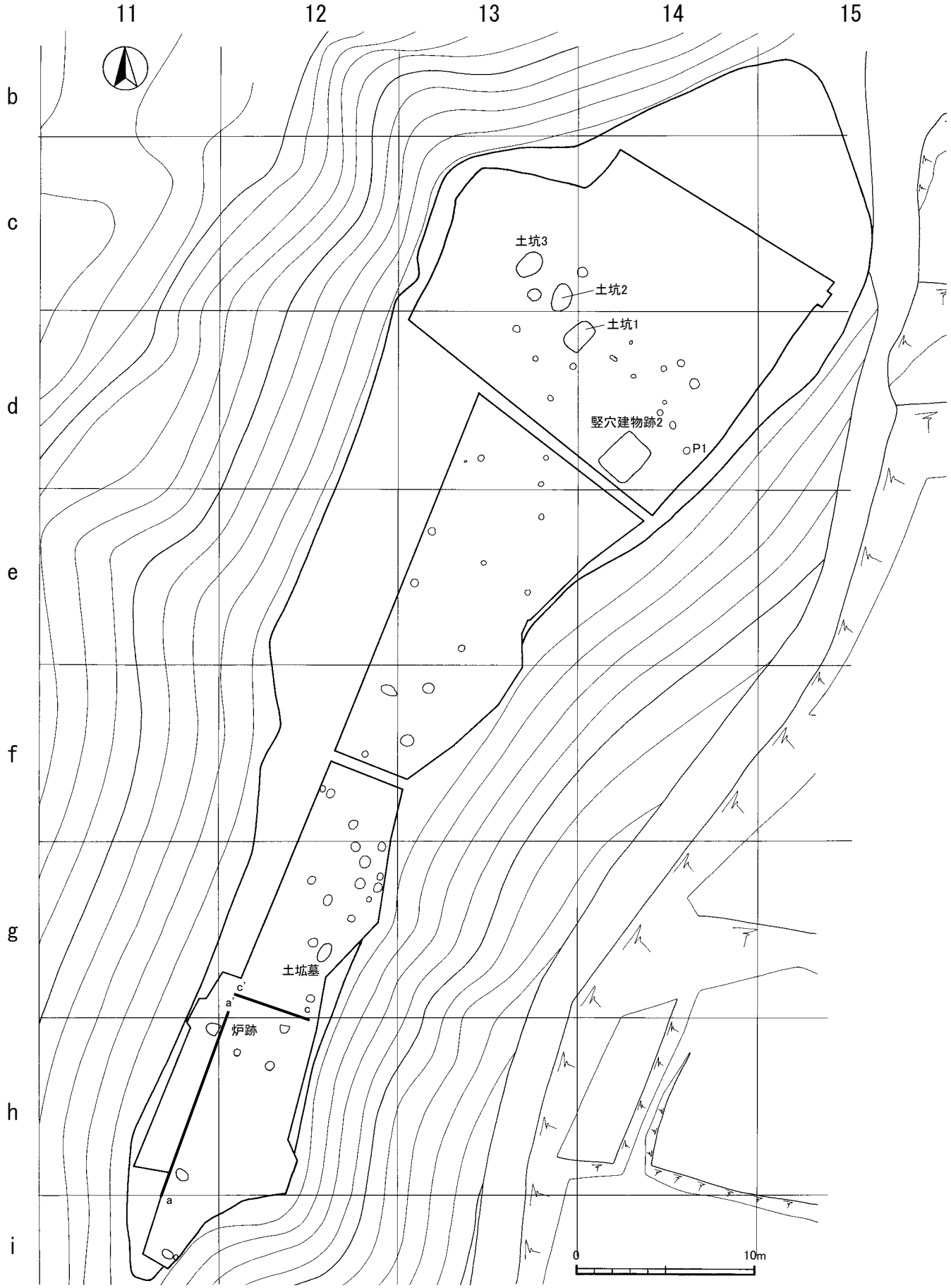
焼土２は，縦90㎝，横58㎝，深さ４㎝で床面には赤褐色土や炭化物がわずかに堆積している。

焼土遺構は炉跡の残欠と思われる。

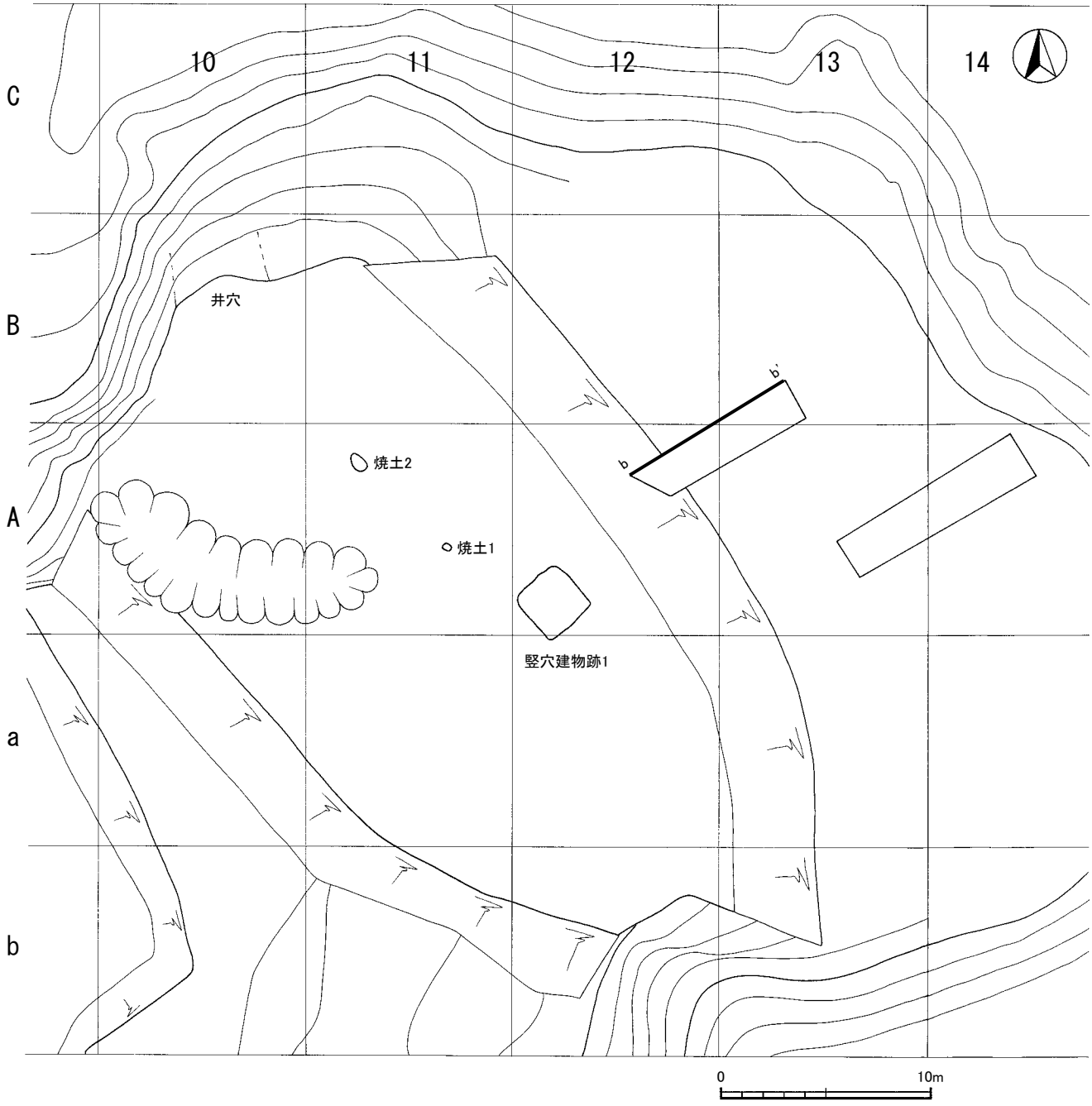
（ウ）炉跡（第178・179図）

h-11,12区にⅢ層のアカホヤ層を掘り込んだ炉跡である。

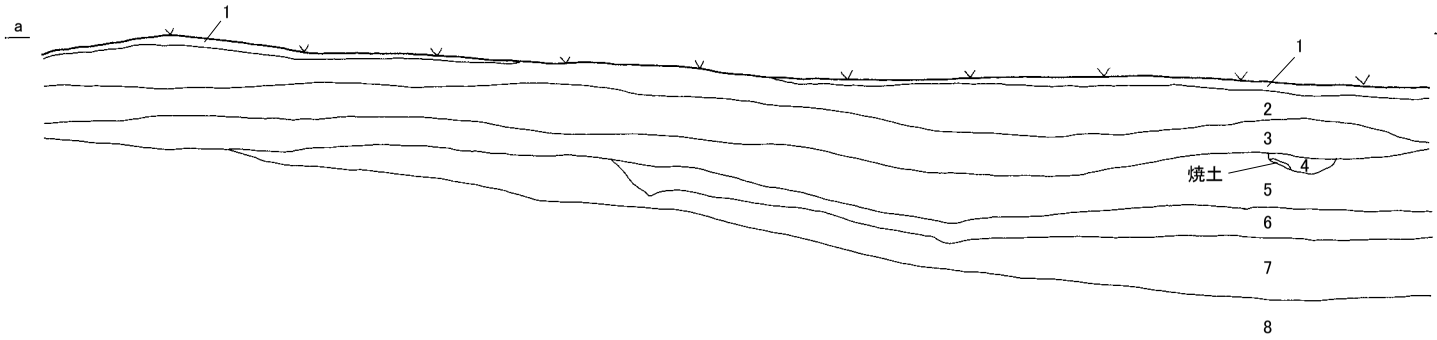
現存する形の規模は，最大長80㎝，幅60㎝の楕円形で東半分は不明。また，上部は残存していない。床面は船底状を呈し深さ15㎝である。炉の周辺は熱を受けて赤化し硬く締まり，内側は焼土や炭が多く含まれている。炉

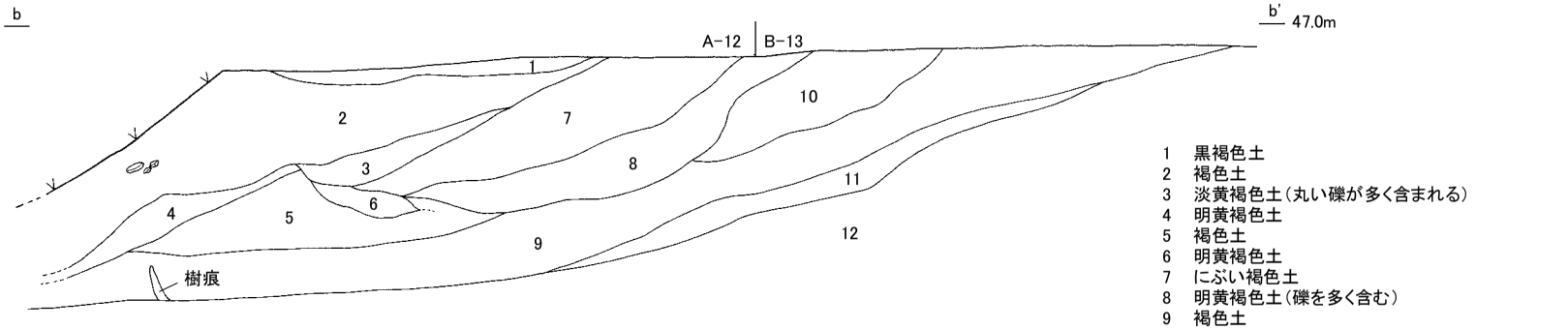


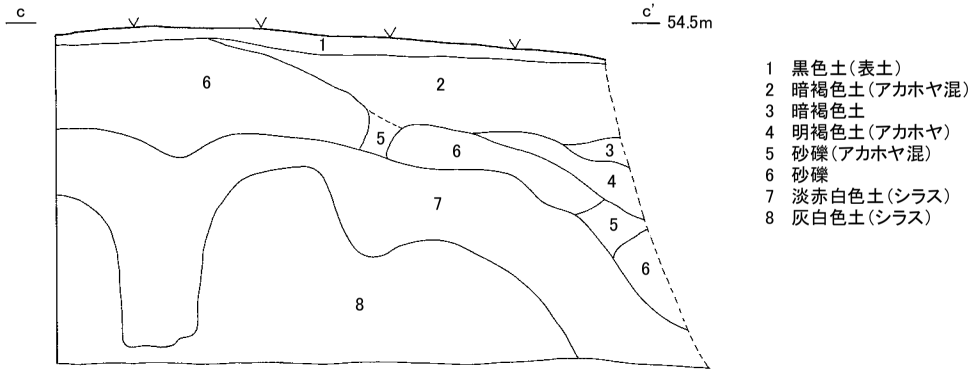
第173図　M地区　A地点遺構配置図

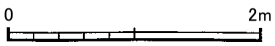


第174図　M地区　B地点遺構配置図

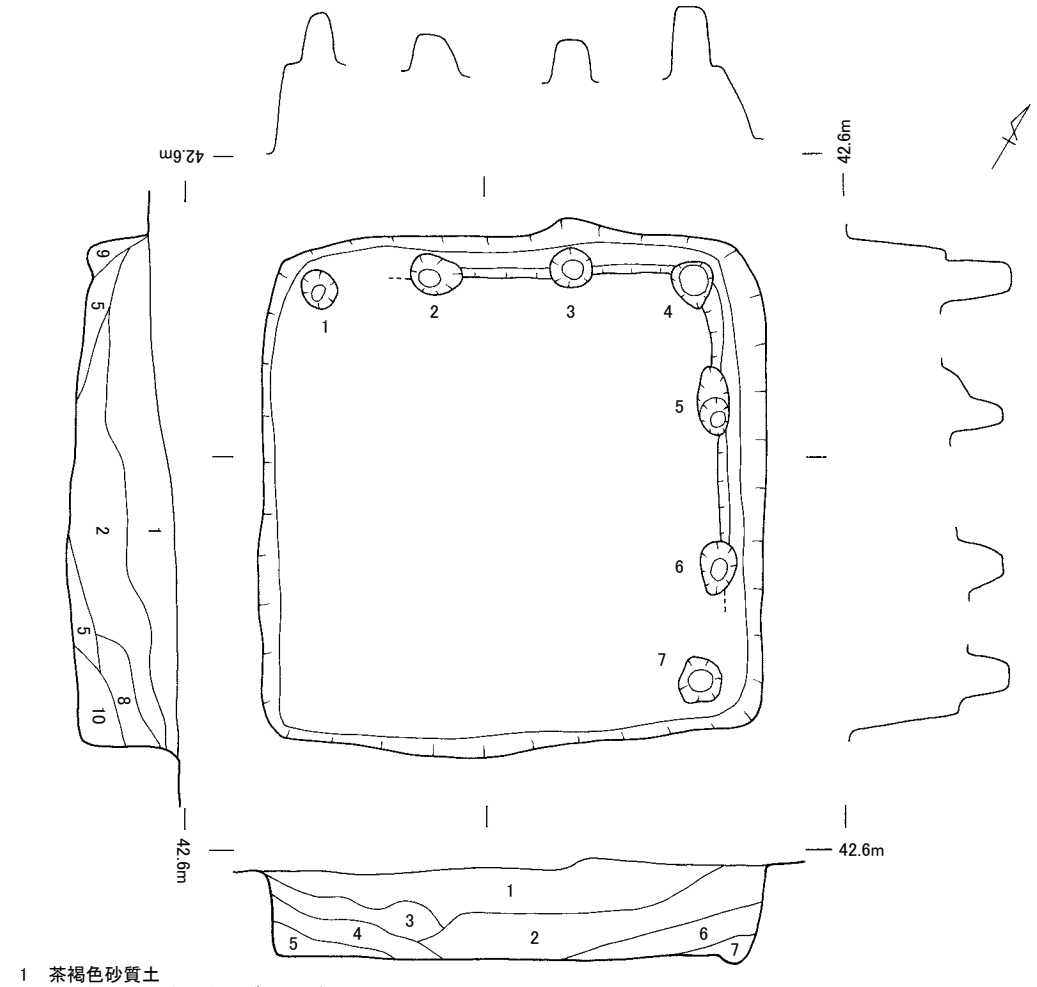






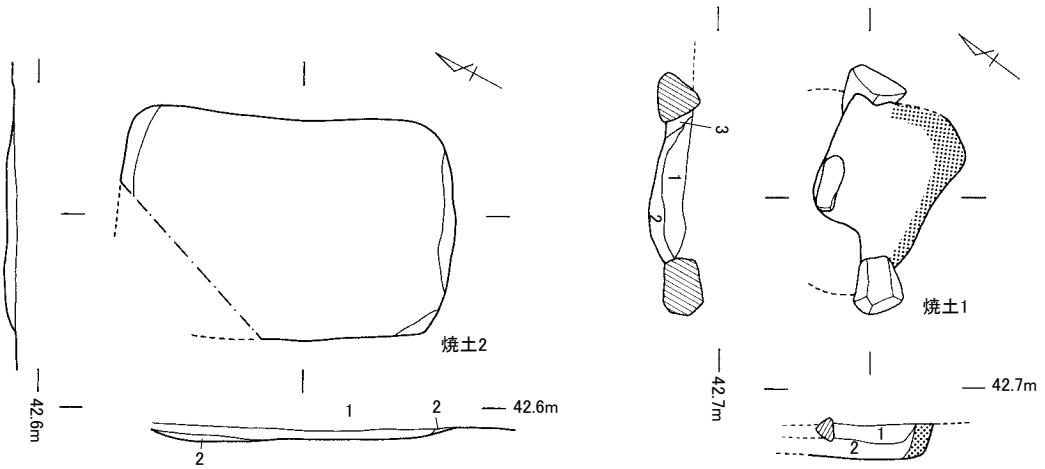


第175図　M地区　土層断面図



1　茶褐色砂質土
2　暗茶褐色土（黄褐色粘土ブロックが混じる）
3　赤茶褐色砂質土
4　赤茶褐色砂質土（地山となる灰色粘質土がくだけたものが多く混じる）
5　明灰色粘質土（地山となる灰色粘質土がくだけたものと茶褐色土の混ざり，粘質土が多い）
6　暗茶褐色粘質土（地山となる灰色粘質土がくだけたものと茶褐色土の混ざり，粘質土は少ない）
7　明灰色粘質土（地山となる灰色粘質土がくだけたものと茶褐色土の混ざり，粘質土は少ない）
8　2より暗い色調（粘土ブロックは混じらない）
9　茶褐色粘質土
10　茶褐色砂

0　1m

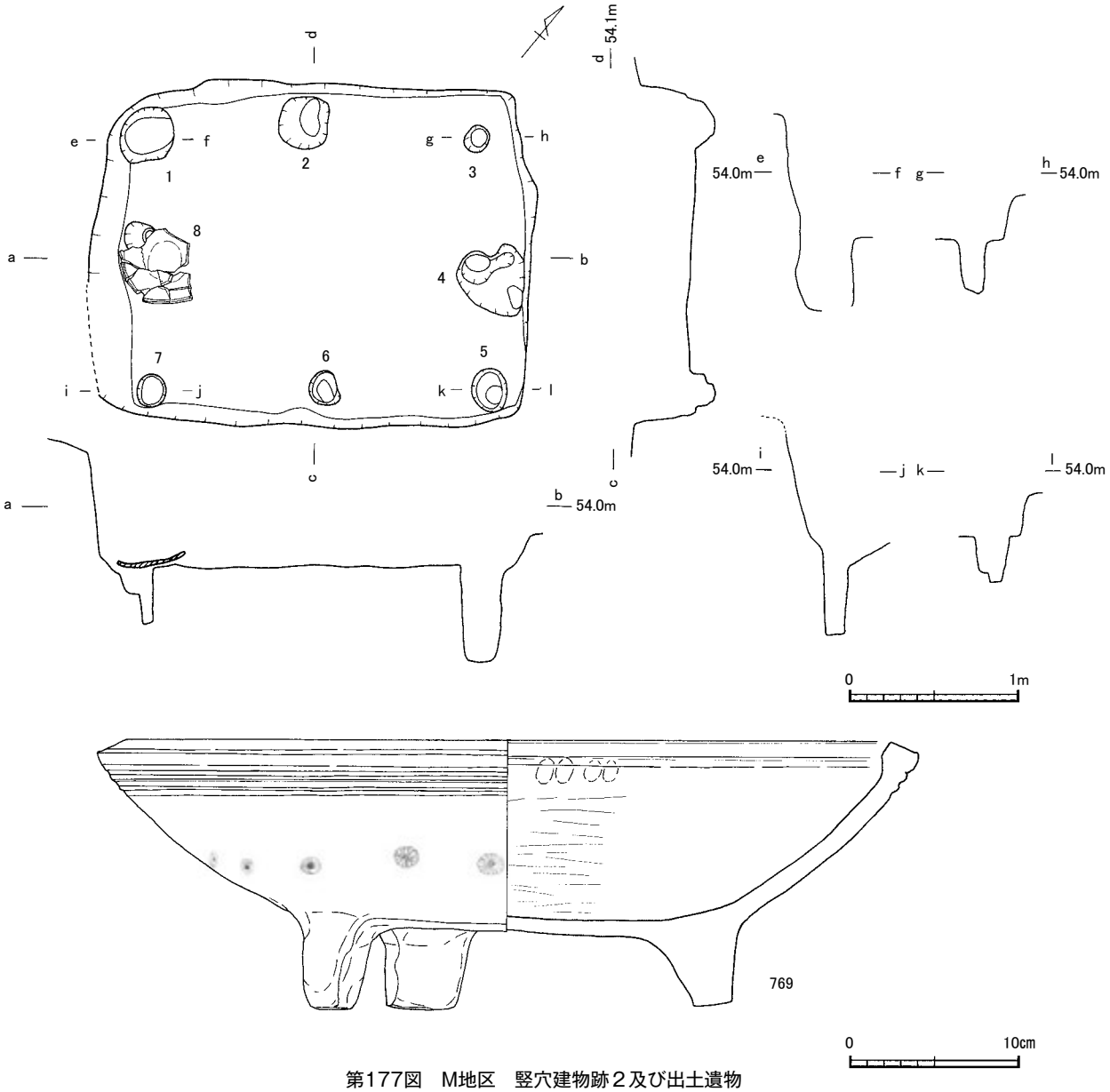


1　炭化物
2　赤茶褐色土

0　50cm

1　赤茶褐色土を多く含む明黄褐色土
2　炭化物を多く含む暗灰色土

第176図　M地区　竪穴建物跡１，焼土遺構



第177図　M地区　竪穴建物跡２及び出土遺物

第33表　M地区　竪穴建物跡1計測表

竪穴建物跡1…縦2.7m，横2.7m，壁帯溝あり				
柱穴番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	20	20	24	−
2	28	20	20	−
3	22	21	22	−
4	24	20	32	−
5	35	14	26	2段堀
6	28	18	22	−
7	22	22	26	−

第34表　M地区　竪穴建物跡2計測表

竪穴建物跡2…縦2.6m，横2.0m				
柱穴番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	32	32	44	−
2	30	30	15	−
3	15	15	32	−
4	43	37	60	−
5	25	20	26	2段堀
6	20	17	12	−
7	19	16	50	−
8	19	13	36	−

跡内からは坩堝が４点，羽口２点，小型の青銅製品が２点が出土している。

炉跡内及び周辺出土遺物（第179図）

770～773は坩堝で，すべて完全品の手捏土器である。口縁部は外開きで丸底の椀形を呈し，口唇部には浅い注口がみられる。内面には粟粒状に溶解物が全面に付着している。770は口径7.8㎝，高さ2.1㎝で，口縁部両サイドに浅い注口がみられる。771は口径9.4㎝，高さ３㎝。772は口径9.8㎝，高さ2.5㎝，口縁部の一部に自然釉をみる。口縁部左右両端に浅い注口がある。773は口径6.2㎝高さ2.1㎝，内面には特に溶解物が著しい。なお，772，773の坩堝の内面には青色（銅）の湯玉が付着している。

774は羽口の半裁品である。775は長さ3.5㎝，幅0.8㎝の板状の銅製品。776は方形の輪形の銅製品で表面に浅い刻み目を細工する。

この炉跡の周辺には坩堝や鉄滓，銅を溶かした時に生じたと思われる銅の湯玉が出土していることから，鉄や銅の鍛冶関連としての遺構が考えられる。

777～789は坩堝である。777・778は口径が10.5～11.6㎝で大ぶりで器壁も厚いものと779～788は口径が6.2～9.8㎝の小型のものがある。手捏でつくり丸底で椀形を呈す。口唇部には指で押圧して浅い注口を拵える。内面には粟粒状の溶解物が付着する。789は口径9.4㎝，平底で底径8.5㎝，高さ4.5㎝の筒状の手捏の坩堝である。内面は丸底である。この器形の坩堝は１点のみである。

（エ）土坑（第180図）

アカホヤ層を掘り込んだ方形１基・楕円形２基の３基の土坑が検出された。

土坑１は，縦1.9ｍ，横1.5ｍ，深さ20㎝。中央部分に礫や小石が混在した楕円形の深さ50㎝の凹地がみられる。また，土坑西側角には，深さ30㎝の円形のピットがある。土坑２・３は長径1.3～1.4ｍ前後，短径１ｍ前後，深さ32・33㎝前後の楕円形土坑である。土坑２から，鎌状鉄製品790が３分割して出土した。刃部は復元刃渡りで20㎝，柄部で５㎝である。

（オ）土坑墓（第180図）

ｇ-12区に位置する。土坑は最大長123㎝，幅54㎝の卵形を呈する。床面は深さ９㎝と15㎝の２つの凹地からなる。土坑内の凹地を挟んだ中央付近の傾斜面から六道銭と思われる古銭が６～７枚がまとまって出土した。これらは緑錆に覆われて脆く保存状態は悪い。取り上げは困難であった。４枚は原型を保ち「洪武通寶」と判読できた。人骨は確認出来なかったが墓ではないかと推定される。

（カ）ピット（第173・180図）

ｄ－14区の10個のピットは建物に結びつくものではない。P1から791が出土した。碗の底部で，畳付内底部は無釉で，景徳鎮の青花である。

エ　遺物（第181図）

青 磁

792～799は龍泉窯系青磁である。792～794は外面に片彫りによる蓮弁文が描かれる椀である。792・793は蓮弁の中央には鎬が見られるが，794は見られない。794は外面に細蓮弁文が描かれるが，細線と剣頭部が蓮弁と指定の単位を意識せず描かれる。795は口縁端部が外反し，丸みを帯びる椀である。胎土は灰褐色，釉は灰緑色を呈する。796は蓮弁文を腰部に描いた底部で，内底部は露胎である。797は盤である。内面にはハケ目状の縦線が描かれる。798は蓋である。瓶等に被せるものと思われる。上面のみ施釉される。799は香炉である。内面上位以下は露胎する。

白 磁

800～802は白磁である。800は残存部は無文の椀である。801は白磁の皿で，高台は抉り高台を呈する。802は蓋である。壺に被せるものと思われる。上面のみ施釉される。

青 花

803は景徳鎮窯系青花の端反皿である。高台端部は先細り，釉剥ぎがみられる。804は漳洲窯系青花の碁笥底皿で，籾殻が熔着する。

青釉陶器

805は青釉陶器の小皿である。口縁端部で外側に強く屈曲する。

土師器皿

806は土師器の小皿である。口径6.2㎝，底径5.0㎝，器高1.2㎝。糸切り底である。

羽 口

807は羽口の残欠である。

土 錘

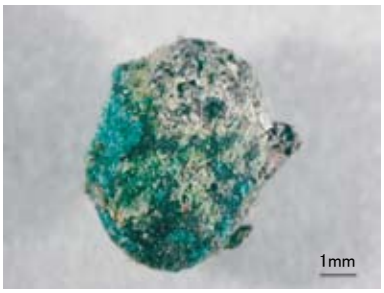
808・809は管状土錘である。

滑石製品

810は滑石製石鍋の口縁部片を再利用したもので，二次加工痕を見るが未製品である。

古 銭

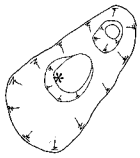
811は「洪武通寶」である。



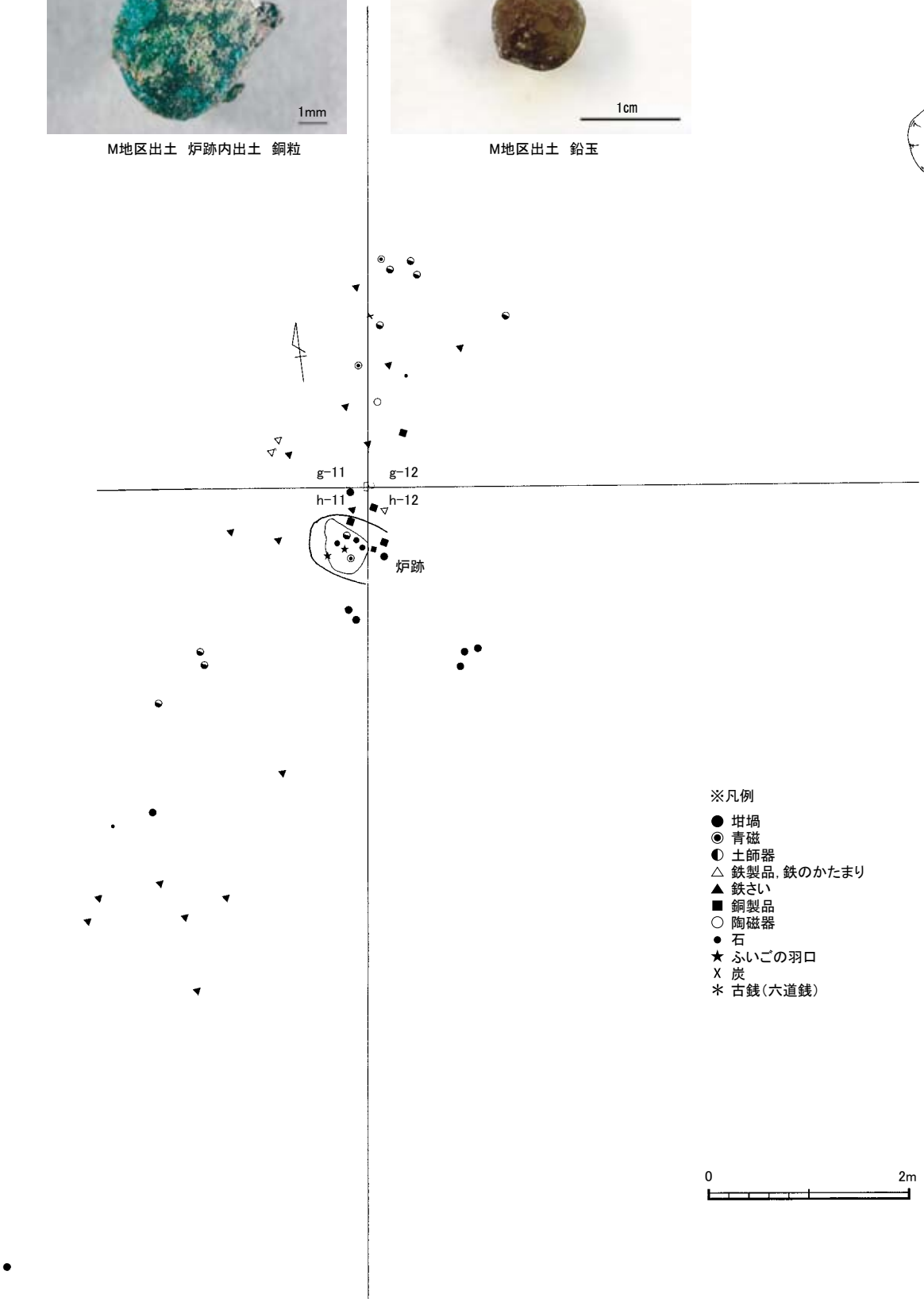
M地区出土　炉跡内出土　銅粒



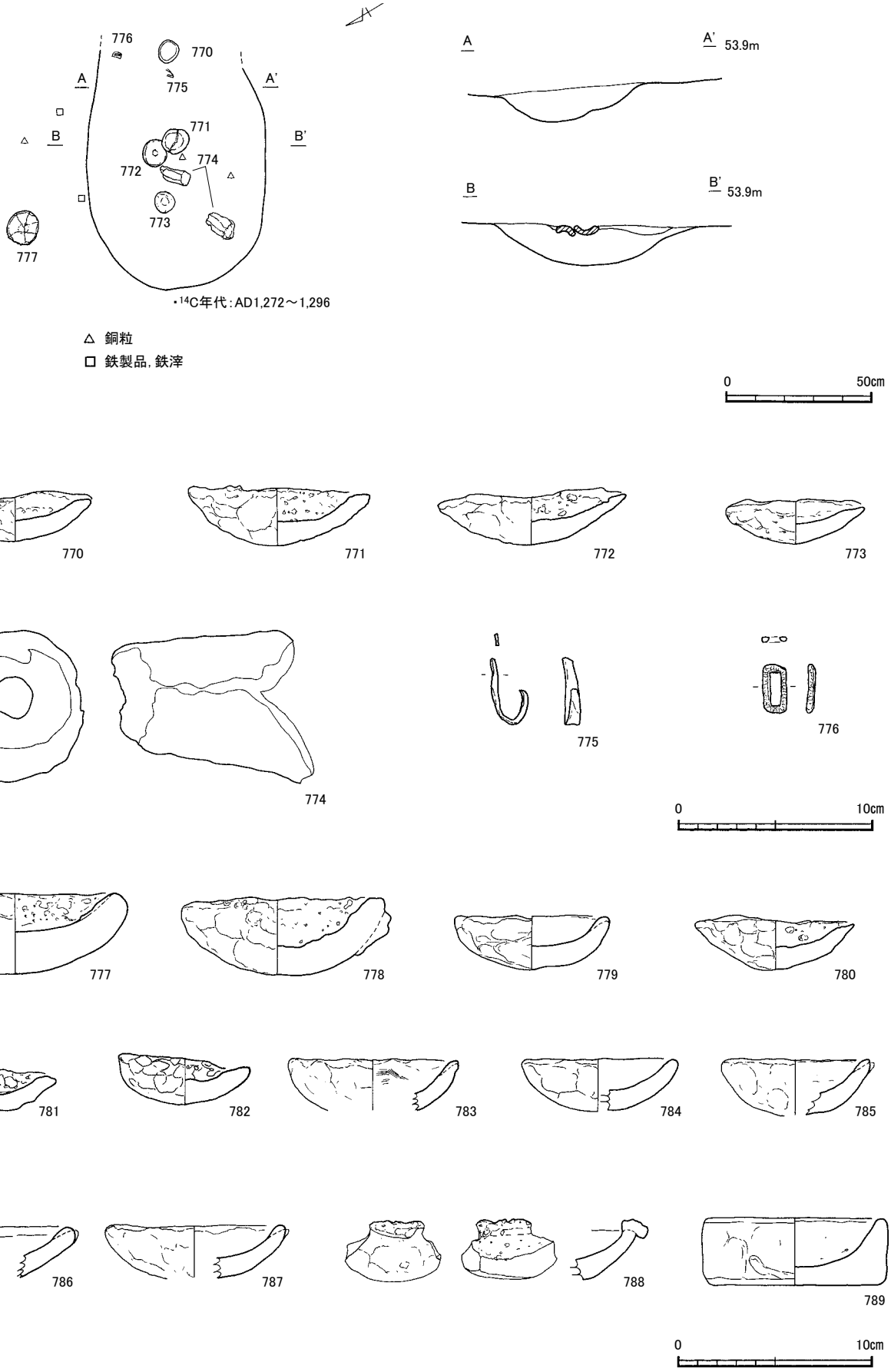
M地区出土　鉛玉



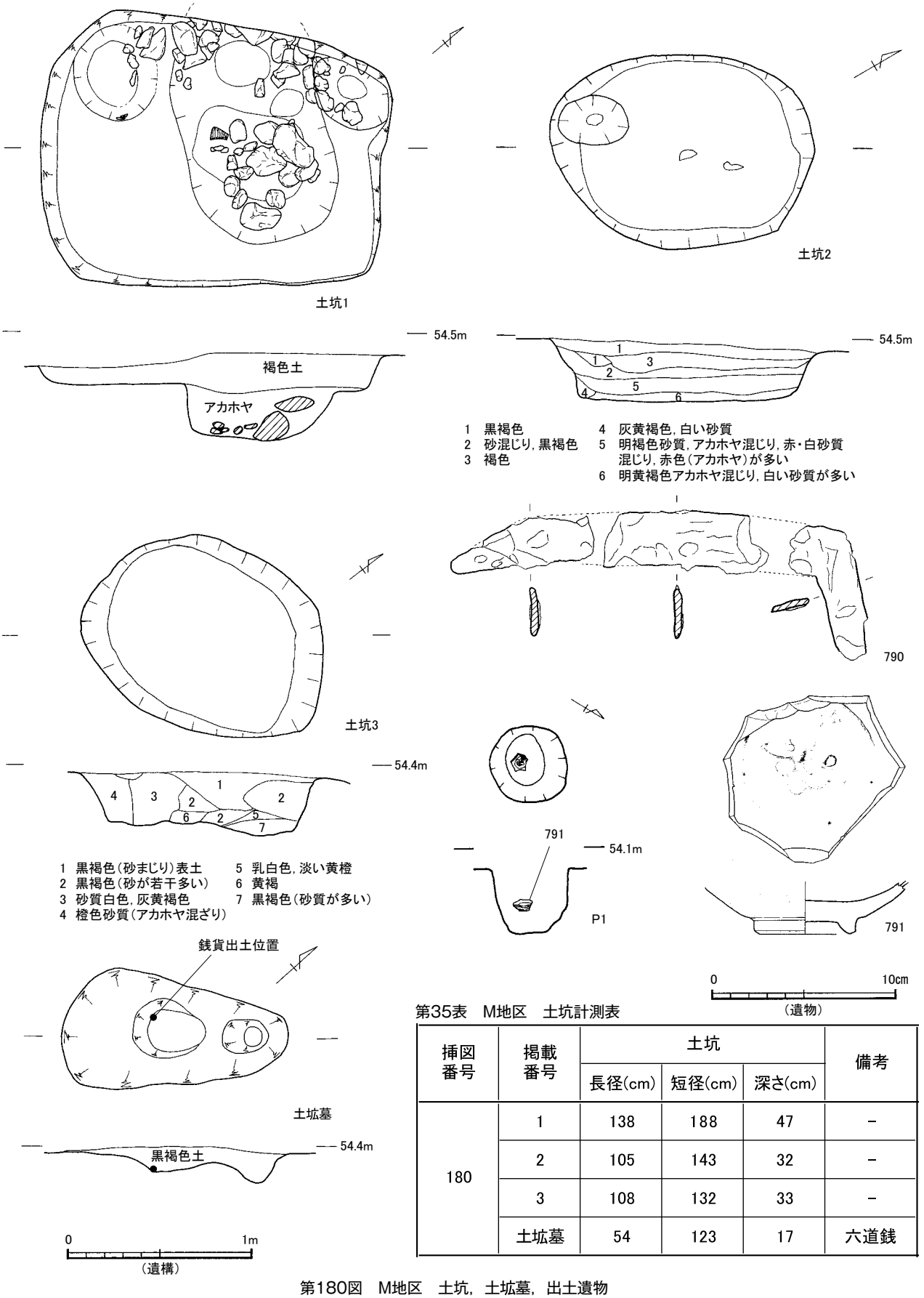
土坑墓



第178図　M地区　A地点遺構配置及び遺物出土状況



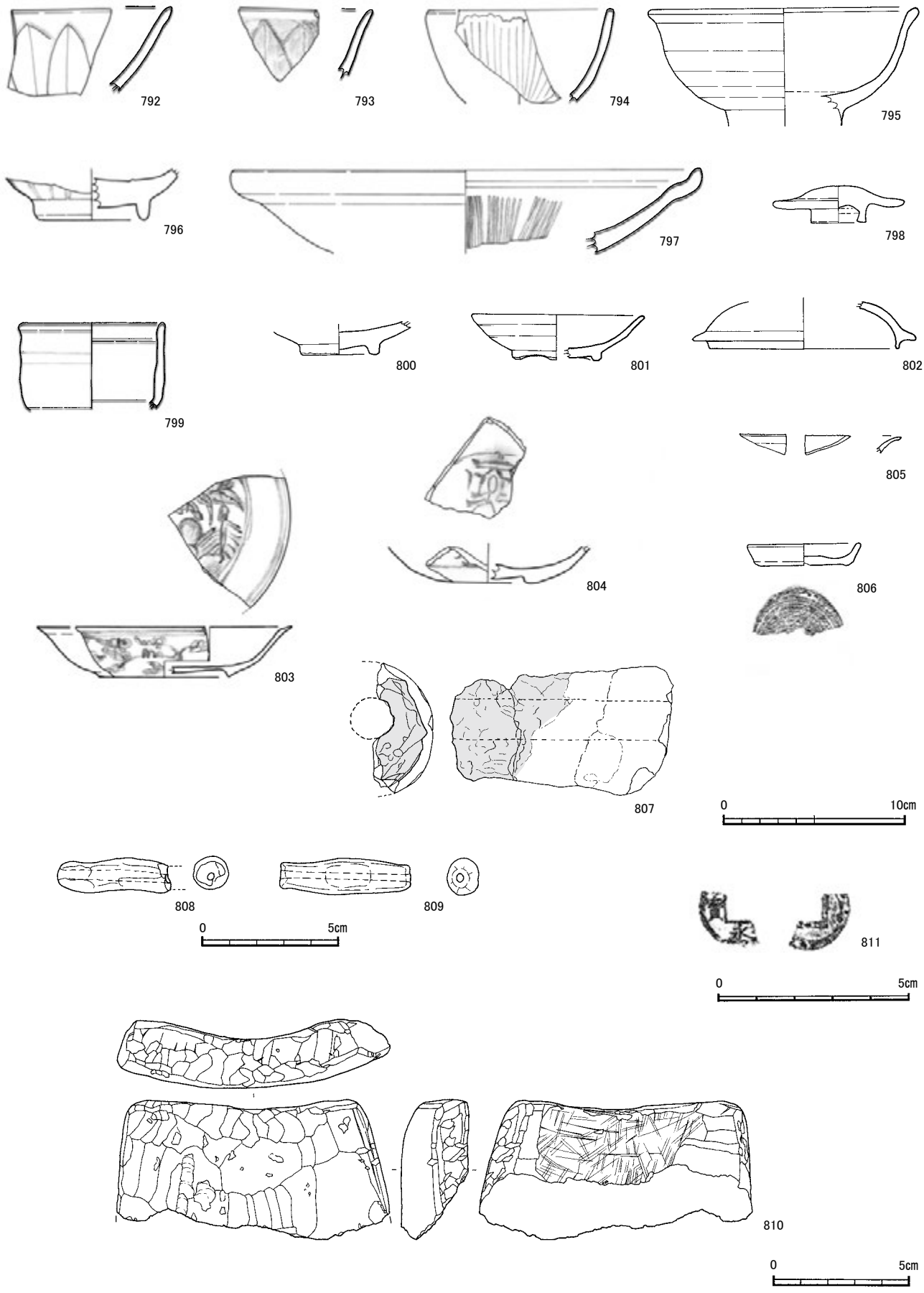
第179図　M地区　炉跡及び出土遺物



第35表　M地区　土坑計測表

挿図番号	掲載番号	土坑			備考
		長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	
180	1	138	188	47	−
	2	105	143	32	−
	3	108	132	33	−
	土坑墓	54	123	17	六道銭

第180図　M地区　土坑，土坑墓，出土遺物



第181図　M地区　出土遺物

第36表　縄文時代遺物観察表

挿図番号	掲載番号	出土地区	層位	分類型式	部位	調整(文様)		色調		胎土						備考
						外	中	外	中	石英	長石	雲母	角閃石	砂粒	小粒	
9	1	E	一括	Ⅰ	口縁部	口唇キザミ・貝殻条痕	ナデ研磨	明褐色	明褐色	○	○		○		○	前平式
	2	E	一括	Ⅱ	胴部	貝殻腹縁指圧	ナデ	明褐色	明褐色	○	○		○		○	吉田式
	3	C	一括	Ⅱ	胴部	貝殻押引	ヘラ研磨	明褐色	明褐色	○			○			吉田式
	4	I	一括	Ⅲ	口縁部	羽状文	ー	明褐色	明褐色	○	○			○	○	桑ノ丸
	5	C	一括	Ⅲ	胴部	羽状文	ナデ	明褐色	灰褐色	○	○			○	○	桑ノ丸
	6	D, E	一括	Ⅳ	胴部	貝殻文	ナデ	明褐色	灰褐色	○	○		○		○	貝殻円筒
	7	I	一括	Ⅳ	胴部	貝殻文	ヘラナデ	明褐色	明褐色	○		○			○	貝殻円筒
	8	E	一括	Ⅴ	頸部	撚糸文	研磨	明褐色	明褐色	○			○	○	○	撚糸文
	9	E	一括	Ⅵa	口縁部	山形押型文	ナデ	明褐色	明褐色	○			○	○		山形押型文
	10	E	一括	Ⅵa	口縁部	山形押型文	ナデ	明褐色	明褐色	○	○	○	○		○	山形押型文
	11	E	一括	Ⅵa	胴部	山形押型文	ナデ	明褐色	明褐色	○	○		○			山形押型文
	12	A	一括	Ⅵa	口縁部	山形押型文	ナデ	明褐色	明褐色	○	○		○			山形押型文
	13	M	一括	Ⅵa	胴部	山形押型文	研磨	明褐色	明褐色	○	○				○	山形押型文
	14	E	一括	Ⅵa	胴部	山形押型文	研磨	明褐色	明褐色	○	○				○	山形押型文
	15	I	一括	Ⅵa	底部	山形押型文	ナデ	明褐色	黒褐色	○	○		○			山形押型文
	16	I	一括	Ⅵb	口縁部	楕円押型文	楕円押型文, ナデ	明褐色	明褐色	○	○		○	○		楕円押型文, 口唇沈線
	17	E	一括	Ⅵb	口縁部	楕円押型文	楕円押型文, ヘラナデ	赤褐色	赤褐色	○	○		○			楕円押型文, 口縁外反
	18	I	一括	Ⅵb	胴部	楕円押型文	ナデ	赤褐色	赤褐色	○			○		○	楕円押型文, 輪積粘土の継目
	19	E	一括	Ⅵb	口縁部	楕円押型文	ナデ	赤褐色	赤褐色	○	○		○		○	楕円押型文
	20	A	一括	Ⅵb	口縁部	楕円押型文	楕円押型文, ヘラナデ	赤褐色	赤褐色	○	○		○			楕円押型文
	21	B	一括	Ⅵb	胴部	楕円押型文	ナデ	赤褐色	赤褐色	○	○		○			楕円押型文
	22	C	一括	Ⅵb	口縁部	楕円押型文	ナデ	明褐色	明褐色	○			○	○		楕円押型文
	23	D	一括	Ⅵb	胴部	楕円押型文	ー	赤褐色	黄褐色	○			○	○	○	楕円押型文
	24	E	一括	Ⅶ	頸部	菱形押型文	ヘラナデ	明褐色	明褐色	○					○	手向山式
	25	E	一括	Ⅶ	底部	ヘラ研磨	ナデ	明褐色	黒色	○		○	○	○		手向山式？
	26	E	一括	Ⅷ	口縁部	羽状文, 連点文	ナデ	明褐色	黒色	○	○	○	○		○	平柊式, 壺
	27	E	一括	Ⅸ	口縁部	ヘラ刺突文	ナデ	明褐色	黒色	○	○	○			○	寒ノ神A式

挿図番号	掲載番号	地区	出土区	層位	石器器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
10	28	I	－	一括	打製石鏃	チャート	3.0	2.2	0.4	1.9	－
	29	C	L-13	一括	打製石鏃	黒曜石(腰岳)	2.4	1.8	0.3	0.9	－
	30	I	－	一括	打製石鏃	黒曜石(針尾)	2.1	1.6	0.4	0.8	－
	31	E	－	一括	打製石鏃	黒曜石(腰岳)	1.5	1.3	0.4	0.4	－
	32	D	－	一括	二次加工剥片	玉随	1.8	4.2	0.7	5.1	－
	33	I	－	一括	二次加工剥片	玉随	2.3	3.5	0.9	5.7	－
	34	I	－	一括	スクレイパー	玉随	3.6	4.4	2.2	29.6	－
	35	B	－	一括	スクレイパー	玉随	3.2	2.5	1.7	14.4	－
	36	K	－	一括	磨製石斧	頁岩	14.4	4.5	1.9	344.3	－
	37	H	－	一括	磨製石斧	頁岩	12.3	4.8	3.0	240.0	－
	38	C	L-15	一括	軽石製品	軽石	8.3	6.9	3.1	41.8	穿孔あり
	39	E	－	一括	軽石製品	軽石	5.6	3.8	2.4	10.1	穿孔あり
11	40	C	L-15	一括	軽石製品	軽石	6.1	5.8	2.5	26.5	穿孔あり
	41	C	M-14	一括	軽石製品	軽石	4.9	4.7	1.6	9.4	穿孔あり
	42	E	－	一括	軽石製品	軽石	10.1	7.6	3.1	75.0	－
	43	A	－	一括	軽石製品	軽石	7.0	4.5	4.5	30.5	－
	44	E	－	一括	軽石製品	軽石	7.9	6.2	2.4	28.2	－
	45	C	L-15	一括	軽石製品	軽石	5.2	6.7	2.0	20.8	－

第37表　古墳時代～古代遺物観察表

挿図番号	掲載番号	出土地区	出土区	時代	種別	器種	法量(cm)			胎土の色調	調整	備考
							口径	底径	器高			
12	46	I	曲輪	古墳	金属器	鏡	直径12.1	－	－	材質：青銅	－	戦国鏡, 5世紀
	47	D	－		土器	甕	－	－	－	明褐色	ハケ	－
	48	D	Q.R-9		土器	甕	－	－	－	明褐色	ハケ	－
	49	H	－		土器	甕	－	7.4	－	明褐色	ハケ	－
	50	B	－	古代	土師器	椀	25.5	－	－	明褐色	ハケ	スス付着
	51	A	M-22		土師器	椀	－	7.8	－	明褐色	ハケ	高台
	52	B	J-20		土師器	椀	－	－	－	明褐色	ハケ	高台
	53	B	I-19		土師器	坏	－	6.1	－	明褐色	ハケ	中空脚

第38表　A地区遺物観察表

挿図番号	掲載番号	種別	器種	出土区	法量(cm)			胎土の色調	釉薬	釉薬の色調	施釉部位	産地	時期	分類	備考
					口径	底径	器高								
15	54	青磁	椀	M-22	16.0	-	-	灰白色	青磁釉	オリーブ灰	残存部全面施釉	龍泉窯	-	上田B-Ⅱ	-
	55	青磁	椀	-	-	6.4	-	淡黄色	青磁釉	オリーブ灰	残存部全面施釉	龍泉窯	-	上田D,E-Ⅱ	-
	56	青磁	皿	O～Q 23～26	13.3	7.6	3.6	灰白色	青磁釉	暗緑色	高台内底面無釉	龍泉窯	-	-	坏？
	57	青磁	皿	M,L-22	-	13.6	-	灰白色	青磁釉	オリーブ灰	高台内底面無釉	龍泉窯	G～H	太宰府Ⅳ～	盤？
	58	青磁	皿	-	-	4.8	-	灰白色	青磁釉	明オリーブ	腰部～高台内底面無釉	龍泉窯	-	太宰府Ⅰ類D期	露胎，碁笥底
	59	青磁	盤	Q-23,24	-	-	-	灰白色	青磁釉	オリーブ	残存部全面施釉	龍泉窯	G,H～	-	輪花
	60	青磁	香炉	M,L-22	8.8	-	-	灰白色	青磁釉	明オリーブ	残存部全面施釉	龍泉窯	-	-	-
	61	青磁	瓶壷	-	-	7.2	-	灰白色	青磁釉	明オリーブ	畳付きは釉剥ぎ	龍泉窯	-	-	-
	62	白磁	椀	-	-	6.0	-	灰白色	青磁釉	オリーブ灰白	腰部～高台内底面無釉	龍泉窯	明代	-	-
	63	白磁	坏	M-22	-	5.2	-	淡黄色	透明釉	-	外面無釉	龍泉窯	-	森田D	抉り高台，高台内底面墨書 見込みに目跡
	64	白磁	壺	Q-23,24	-	4.8	-	淡黄色	透明釉	-	畳付き～高台内底面無釉	-	明後半か？	-	壷？
	65	青花	碗	O～Q 23～26	12.0	-	-	浅黄橙色	透明釉	-	腰部以下無釉	漳州窯	16世紀後半	-	-
	66	青花	碗	O～Q 23～26	-	6.0	-	灰白色	透明釉	-	畳付きは釉剥ぎ	景徳鎮窯	15世紀	小野B	-
16	67	青花	碗	O～Q 23～26	-	5.0	-	灰白色	透明釉	-	畳付きは釉剥ぎ	景徳鎮窯	16世紀後半	小野E	稲削(内外底模様)
	68	青花	碗	-	-	4.4	-	灰白色	透明釉	-	畳付きは釉剥ぎ	漳州窯	16世紀後半	-	見込み輪状に釉剥ぎ
	69	青花	皿	M,L-22	14.4	-	-	灰白色	透明釉	青白	残存部全面施釉	景徳鎮窯	15世紀後半～ 16世紀中頃	小野C	唐草文
	70	青花	皿	M-22	10.0	3.8	3.0	淡黄色	透明釉	灰白	外底内底面無釉	漳州窯	16世紀後半	-	碁笥底
	71	色絵	合子蓋	-	-	-	-	灰白色	透明釉	灰白	残存部全面施釉	景徳鎮窯	16世紀後半	-	明･景徳鎮窯
	72	緑釉陶器	香炉	O～Q 23～26	-	5.2	-	浅黄橙色	緑釉	-	内面無釉	-	-	-	工具ナデ
	73	陶器	香炉	Q-23,24	8.6	3.6	4.7	灰白色	青磁釉	灰オリーブ	高台脇～高台内底面無釉	肥前 内野山	18世紀前葉～中葉	-	露胎，二条
	74	陶器	碗	O～Q 23～26	-	3.8	-	灰赤色	鉄釉	暗赤褐	畳付き～高台内底面無釉	薩摩焼 龍門司系	18世紀後半	-	見込みに蛇の目釉剥ぎ

挿図番号	掲載番号	種別	器種	出土区	法量(cm)			胎土の色調	調整	釉薬の色調	施釉部位	産地	時期	備考
					口径	底径	器高							
16	75	土師器	椀	M-22	-	7.8	-	-	-	-	-	-	-	三脚，底部糸切り
	76	土師器	椀	M,L-22	-	10.8	-	-	-	-	-	-	-	三脚
	77	土師器	坏	M-22	14.2	10.0	3.7	-	-	-	-	-	-	-
	78	土師器	皿	-	10.4	7.2	2.9	-	-	-	-	-	-	外面スス付着 底部糸切り
	79	土師器	皿	M-22	17.3	9.4	3.3	-	-	-	-	-	-	底部糸切り
	80	土師器	皿	-	13.2	6.2	2.7	-	-	-	-	-	-	内面スス付着 底部糸切り
	81	土師器	皿	-	13.6	6.0	2.4	-	ナデ	-	-	-	-	朱ヘラ 底部糸切り
	82	土師器	皿	-	14.6	9.0	2.3	-	-	-	-	-	-	底部糸切り
	83	土師器	皿	O～Q 23～26	11.8	6.0	2.4	-	-	-	-	-	-	底部糸切り
	84	土師器	皿	M,L-22	8.9	6.6	2.0	-	-	-	-	-	-	底部糸切り
	85	土師器	皿	-	11.4	7.5	2.1	-	ナデ	-	-	-	-	内面スス付着 底部糸切り
	86	土師器	皿	Q-23,24	-	7.6	-	-	-	-	-	-	-	底部糸切り
	87	土師器	皿	M-22	-	6.2	-	-	-	-	-	-	-	底部糸切り
	88	土製	土錘	一括	長3.6	短1.3	-	-	-	-	-	-	-	-
	89	土製	土錘	-	長2.2+	短1.2	-	-	-	-	-	-	-	-
17	90	石製品	火打石	O～Q 23～26	長3.8	幅4.2	厚2.3	重量33.3g	-	-	-	-	-	石材:チャート
	91	石製品	火打石	Q-23,24	長1.9	幅2.7	厚1.6	重量9.5g	-	-	-	-	-	石材:鉄石英
	92	石製品	火打石	Q-23,24	長3.9	幅3.6	厚2.4	重量30.0g	-	-	-	-	-	石材:石英
17	93	金属器	鉄鏃	-	長9.4+	幅1.0	厚0.4	-	-	-	-	-	-	鉄製
	94	金属器	楔	一括	長6.7	幅1.8	厚0.7	-	-	-	-	-	-	鉄製
	95	金属器	煙管	Q-23,24	長4.7	幅0.9	-	-	-	-	-	-	-	青銅製
	96	金属器	煙管	一括	長8.1	幅1.8	-	-	-	-	-	-	-	青銅製
	97	金属器	-	一括	長12.3	幅2.8	厚1.2	-	-	-	-	-	-	鉄製，穿孔1か所
	98	金属器	笄	一括	長16.2	幅1.2	厚0.2	-	-	-	-	-	-	青銅製
	99	金属器	古銭	一括	ー	ー	ー	-	-	-	-	-	-	洪武通宝(1368年以降)
	100	金属器	古銭	一括	ー	ー	ー	-	-	-	-	-	-	寛永通宝(1636年以降)
	101	金属器	古銭	一括	ー	ー	ー	-	-	-	-	-	-	寛永通宝(1636年以降)，鉄銭
	102	金属器	古銭	一括	ー	ー	ー	-	-	-	-	-	-	朝鮮通宝(1423年以降)
	103	金属器	古銭	一括	ー	ー	ー	-	-	-	-	-	-	朝鮮通宝(1423年以降)

第39表　B地区遺物観察表(1)

挿図番号	掲載番号	種別	器種	出土区	法量(cm)			胎土の色調	釉薬	釉薬の色調	施釉部位	産地	時期	分類	備考
					口径	底径	器高								
24	104	青磁	椀	K-19 溝	15.6	6.3	7.9	明赤褐色	青磁釉	灰オリーブ	見込み・高台内底面輪状に釉剥ぎ	龍泉窯	−	上田D類	−
	105	青磁	椀	K-19 溝	15.0	−	−	灰色	青磁釉	オリーブ灰	残存部全面施釉	龍泉窯	−	上田D−Ⅱ	内釉たまり
	106	青磁	椀	H-17 空堀Ⅰ	15.0	−	−	灰色	青磁釉	オリーブ灰	残存部全面施釉	龍泉窯	−	上田D類	−
	107	青磁	椀	K-19 溝	13.6	5.9	5.7	明橙色	透明釉	浅黄	畳付き〜高台内底面無釉	龍泉窯	−	上田E類	畳付露胎
	108	青磁	椀	N-17 空堀Ⅰ	−	5.2	−	灰色	青磁釉	灰	畳付き〜高台内底面無釉	龍泉窯	−	太宰府Ⅳィ	見込み印花文
	109	青磁	椀	K-19 溝	−	6.8	−	暗灰色	青磁釉	オリーブ灰	高台内底面円状に釉剥ぎ	龍泉窯	−	上田C又はDⅡ〜	−
	110	青磁	椀	J-19 溝	−	−	−	灰白色	青磁釉	オリーブ黄	残存部全面施釉	龍泉窯	−	上田BⅣ	−
	111	青磁	皿	N-17 空堀Ⅰ	15.6	−	−	灰白色	青磁釉	オリーブ灰	残存部全面施釉	龍泉窯	明	−	−
	112	青磁	皿	H-17 空堀Ⅰ	13.0	7.0	3.2	灰白色	青磁釉	オリーブ灰	畳付き〜高台内底面無釉	龍泉窯	明	−	見込み輪状に釉剥ぎ
	113	青磁	皿	L-17 空堀Ⅰ	14.6	−	−	灰白色	青磁釉	オリーブ灰	残存部全面施釉	龍泉窯	15世紀〜16世紀	−	稜花皿
	114	青磁	皿？	LK-21 溝	−	2.2	−	灰白色	青磁釉	オリーブ灰	外面腰部〜底部無釉	龍泉窯	−	−	碁笥底
	115	青花	碗	I-18 空堀Ⅰ	16.0	−	−	灰白色	透明釉	灰白	残存部全面施釉	景徳鎮窯	15世紀	小野B	−
	116	青花	碗	N-17 空堀Ⅰ	−	5.2	−	灰白色	透明釉	灰白	畳付は釉剥ぎ	景徳鎮窯	16世紀後半	小野E	−
	117	青花	碗	I-18 空堀Ⅰ	−	−	−	灰白色	透明釉	灰白	畳付は釉剥ぎ	景徳鎮窯	15世紀末〜16世紀中	小野C	−
	118	青花	皿	L-17 空堀Ⅰ	−	5.8	−	浅黄橙色	透明釉	灰白	畳付は釉剥ぎ	漳州窯系	16世紀後半	−	−

挿図番号	掲載番号	種別	器種	出土区	法量(cm)			胎土の色調	調整	施釉部位	産地	時期	備考
					口径	底径	器高						
24	119	土師器	皿	N-17 空堀Ⅰ	9.2	6.0	2.5	灰褐	−	−	−	−	底部糸切り，金属付着硬化
	120	土師器	皿	N-17 空堀Ⅰ	12.8	8.0	2.5	灰	−	−	−	−	アミ，底部糸切り，金属付着硬化
	121	土師器	皿	K-17 空堀Ⅰ	11.6	7.2	2.7	−	ナデ	−	−	−	底部糸切り
	122	土師器	皿	O-17 空堀Ⅰ	11.8	7.8	2.2	にぶい黄橙	−	−	−	−	底部糸切り
	123	土師器	皿	O-17 空堀Ⅰ	8.0	5.4	2.4	にぶい褐	ナデ	−	−	−	底部糸切り
	124	土師器	皿	N-17 空堀Ⅰ	11.2	7.8	2.5	−	−	−	−	−	底部糸切り，縁はヘラ切り
	125	土師器	皿	N-17 空堀Ⅰ	8.4	5.8	2.2	灰褐	−	−	−	−	スス付着 底部糸切り
	126	土師器	皿	O-17 空堀Ⅰ	8.4	5.5	2.3	黄褐	ナデ	−	−	−	底部糸切り
	127	土師器	皿	N-17 空堀Ⅰ	8.0	5.6	2.0	灰褐	−	−	−	−	底部糸切り，金属付着硬化
	128	土師器	皿	O-17 空堀Ⅰ	8.9	5.4	2.6	灰オリーブ	ナデ	−	−	−	底部糸切り
	129	土師器	耳皿	L-17 空堀Ⅰ	−	4.2	−	にぶい橙	−	−	−	−	底部糸切り
	130	土師器	坩堝	I-18 空堀Ⅰ	8.1	−	−	灰白色	−	−	−	−	金属(鉄)付着

挿図番号	掲載番号	種別	器種	出土区	法量(cm)			胎土の色調	釉薬	釉薬の色調	施釉部位	産地	時期	備考
					口径	底径	器高							
25	131	陶器	壺	J-17 溝	10.0	−	−	灰白色	褐釉	黒褐	内面口縁部下位無釉	中国南部	−	耳付 口唇部釉剥ぎ
	132	陶器	鉢	J-17 溝	21.0	−	−	黄灰色	−	−	−	中国南部	−	−
	133	陶器	擂鉢	L-17 空堀Ⅰ	24.0	−	−	褐灰色	−	褐灰	残存部全面施釉	備前	−	−
	134	陶器	徳利	L-17 空堀Ⅰ	−	6.9	−	赤褐色	−	にぶい黄	内面無釉	琉球	−	荒焼
	135	陶器	壺	K,M-17 空堀Ⅰ	35.0	−	−	灰赤色	−	−	−	備前	−	内外ナデ
	136	陶器	壺	N-17 空堀Ⅰ	40.2	−	−	暗赤灰色	−	−	−	備前	−	−
26	137	瓦質土器	鉢	O-17 空堀Ⅰ	12.0	9.8	4.3	褐灰色	−	−	−	−	−	ハケ，ナデ 外面口縁部に菊花文
	138	瓦質土器	擂鉢	溝	26.0	−	−	浅黄橙色	−	−	−	−	−	−
	139	瓦質土器	擂鉢	L-17 空堀Ⅰ	−	−	−	褐灰色	−	−	−	−	−	−
	140	瓦質土器	擂鉢	L-17 空堀Ⅰ	32.8	15.0	12.9	浅黄橙色	−	−	−	−	−	口，指押
	141	瓦質土器	火鉢	L-17 空堀Ⅰ	36.4	−	−	黒色	−	−	−	−	15世紀代	きざみ 外面口縁部に花文印刻
	142	瓦質土器	火鉢	H-18 溝	38.0	−	−	黄灰色	−	−	−	−	15世紀代	−

第40表　B地区遺物観察表(2)

挿図番号	掲載番号	種別	器種	出土区	法量(cm)			胎土の色調	釉薬	釉薬の色調	施釉部位	産地	時期	備考
					口径	底径	器高							
26	143	須恵器	甕	O-17 空堀Ⅰ	29.6	－	－	灰色	－	－	－	－	－	綾杉文
	144	土製品	土錘	JK-21 溝	(長)4.9	(径)1.7	－	－	－	－	－	－	－	スス付着
	145	金属器	笄	N-17 空堀Ⅰ	(長)9.0	(幅)0.4	－	－	－	－	－	－	－	青銅製

挿図番号	掲載番号	種別	器種	出土区	法量(cm)			胎土の色調	調整	施釉部位	産地	時期	備考
					口径	底径	器高						
27	146	木器	漆椀	O-17 空堀Ⅰ	15.2	8.2	5.4	－	－	－	－	－	松林？雲？,(外)黒漆 (内)赤漆
	147	木器	漆椀	O-17 溝	－	7.3	－	－	－	－	－	－	(外)黒漆 (内)赤漆
	148	木器	漆椀	空堀Ⅰ	14.5	8.9	4.5	－	－	－	－	－	単線,(外)黒漆 (内)赤漆

挿図番号	掲載番号	種別	器種	出土区	法量(cm)			胎土の色調	調整	施釉部位	産地	時期	備考
					長さ	幅	厚さ						
27	149	木器	下駄	M-17 溝	11.7	9.8	4.0	－	－	－	－	－	－
	150	木器	把手	I-21 溝	19.1	4.6	2.2	－	－	－	－	－	器種？
	151	木器	漆椀	C-17 空堀Ⅰ,溝	23.0	13.7	9.7	－	－	－	－	－	笹，畳付は欠損，注ぎ口？,(外)黒漆 (内)赤漆
43	152	木器	容器	L-17	(長)51.5	(短)24	(高)13.5	－	－	－	－	－	くり抜きためます
	153	木器	桶側板	J-18 桶内部	(長)18.8	(短)5.0	0.8	－	－	－	－	－	端から約1.7cmのところに内面底板の痕跡有り
	154	木器	桶側板	J-18 桶内部	(長)12.9	(短)4.7	0.7	－	－	－	－	－	－
	155	木器	桶側板	J-18 桶内部	(長)13.6	(短)7.3	0.5	－	－	－	－	－	端から約2.0cmのところに内面底板の痕跡有り
	156	木器	桶側板	J-18 桶内部	(長)13.8	(短)3.5	0.6	－	－	－	－	－	－
	157	木器	桶側板	J-18 桶内部	(長)13.3	(短)3.3	0.6	－	－	－	－	－	－
	158	木器	桶側板	J-18 桶内部	(長)14.5	(短)4.3	0.7	－	－	－	－	－	－
	159	木器	桶側板	J-18 桶内部	(長)14.4	(短)4.6	0.5	－	－	－	－	－	端から約2.8cmのところに内面底板の痕跡有り
	160	土師器	皿	J-18 桶内部	(口径)8.0	(底径)4.8	(高)2.0	－	－	－	－	－	底部スス付着，底部糸切り
	161	石製品	カマド	建物内	(口径)32.0	－	(高)32.0	－	－	－	－	－	石材:凝灰岩

挿図番号	掲載番号	種別	器種	出土区	法量(cm)			胎土の色調	釉薬	釉薬の色調	施釉部位	産地	時期	分類	備考
					口径	底径	器高								
44	162	青磁	椀	－	－	－	－	灰白色	青磁釉	オリーブ灰	残存部全面施釉	龍泉窯	－	太宰府Ⅱb 上田B-Ⅰ？	－
	163	青磁	椀	－	－	－	－	灰色	青磁釉	オリーブ灰	残存部全面施釉	龍泉窯	－	上田BⅠ'(大Ⅳ)又はBⅡ	－
	164	青磁	椀	J-21 J-20	13.8	4.4	6.3	灰色	青磁釉	オリーブ灰	畳付き～高台内底面無釉	龍泉窯	－	上田BⅣ又はⅣ'	漆付着 見込みに印花文
	165	青磁	椀	－	13.0	－	－	灰白色	青磁釉	明オリーブ	残存部全面施釉	龍泉窯	－	上田BⅣ'	－
	166	青磁	椀	－	14.3	－	－	灰白色	青磁釉	オリーブ灰	残存部全面施釉	龍泉窯	－	上田BⅣロ	－
	167	青磁	椀	M-18	17.6	－	－	灰白色	青磁釉	オリーブ灰	残存部全面施釉	龍泉窯	－	上田CⅡ	雷文帯
	168	青磁	椀	I-19	14.6	－	－	灰色	青磁釉	オリーブ灰	残存部全面施釉	龍泉窯	－	上田EⅡ	砂付着
	169	青磁	椀	J-20	13.6	5.4	6.8	灰色	青磁釉	オリーブ灰 (釉薬刷り)	高台内面～高台内底面無釉	龍泉窯	－	上田D？	－
	170	青磁	椀	L-17	15.5	4.9	6.3	灰色	青磁釉	明緑灰	畳付き～高台内底面無釉	龍泉窯	－	上田D	内模様
	171	青磁	椀	M-18	15.0	－	－	灰色	青磁釉	オリーブ灰	残存部全面施釉	龍泉窯	－	上田DⅡ	－
	172	青磁	大椀	L-17	－	7.7	－	灰白色	青磁釉	オリーブ灰	高台内底面輪状に釉剥ぎ	龍泉窯	－	上田C又はDⅡ	畳付に釉たれ
	173	青磁	椀	L-18	－	6.4	－	灰白色	青磁釉	オリーブ灰	高台内面～内底面無釉	龍泉窯	－	太宰府Ⅳイ又は 上田C又はDⅡ	－
	174	青磁	椀	I-19	－	5.2	－	灰白色	透明釉	明緑灰	畳付き～高台内底面無釉	－	－	－	ヘラ切り
	175	青磁	皿	－	12.4	5.8	3.4	明褐灰色	青磁釉	オリーブ灰	高台内底面釉剥ぎ	龍泉窯	－	－	－
	176	青磁	皿	K-21	－	4.4	－	灰色	青磁釉	灰オリーブ	畳付き～高台内底面無釉	龍泉窯	明	－	見込み円状に釉剥ぎ
	177	青磁	皿	J-19	10.4	4.5	2.8	灰色	青磁釉	オリーブ灰	見込み,高台内底面釉剥ぎ	龍泉窯	－	－	稜花皿
	178	青磁	盤	－	23.4	－	－	灰色	青磁釉	灰オリーブ	残存部全面施釉	龍泉窯	G～H	－	弱い屈折
	179	白磁	皿	J-21	11.8	6.7	3.9	白色	透明釉	灰白	畳付は釉剥ぎ	景徳鎮窯	16世紀後半	森田E	畳付釉
	180	白磁	皿or盤	－	－	8.0	－	白色	透明釉	灰オリーブ	腰部～高台内底面無釉	－	16世紀	－	ヘラ切り 見込み輪状に釉剥ぎ

第41表　B地区遺物観察表(3)

挿図番号	掲載番号	種別	器種	出土区	法量(cm)			胎土の色調	釉薬	釉薬の色調	施釉部位	産地	時期	分類	備考
					口径	底径	器高								
45	181	青花	碗	J-19	13.3	5.0	5.2	灰白色	透明釉	明オリーブ灰	畳付は釉剥ぎ	景徳鎮窯	15世紀代	小野B	－
	182	青花	碗	I-19 J-21	13.0	4.8	5.0	灰白色	透明釉	明緑灰	畳付は釉剥ぎ	景徳鎮窯	15世紀後半～ 16世紀半ば	小野C	－
	183	青花	碗	－	12.8	－	－	灰白色	透明釉	明緑灰	残存部全面施釉	漳州窯	16世紀後半	－	－
	184	青花	碗か？	－	－	5.3	－	灰白色	透明釉	明オリーブ	畳付き～高台内底面無釉	漳州窯	－	－	菊花文， 高台内底面に「大」の墨書
	185	青花	皿	I-19	15.4	－	－	灰白色	透明釉	青灰	残存部全面施釉	景徳鎮窯	16世紀後半	小野B	－
	186	青花	皿	I-19	17.0	－	－	灰白色	透明釉	明緑灰	残存部全面施釉	景徳鎮窯	16世紀後半	小野B	－
	187	青花	皿	－	－	－	－	灰白色	透明釉	明緑灰	残存部全面施釉	景徳鎮窯	16世紀後半	小野B	－
	188	青花	皿	－	13.2	7.7	3.5	灰白色	透明釉	灰白	畳付は釉剥ぎ	景徳鎮窯	16世紀後半	小野E	高台内底面「大明年製」
	189	青花	皿	I-19	10.9	4.1	2.7	灰色	透明釉	オリーブ灰	腰部～高台内底面無釉	漳州窯	16世紀後半	－	碁笥底
	190	青花	皿	I-19	－	－	－	灰白色	透明釉	明緑灰	畳付は釉剥ぎ	漳州窯	16世紀後半	－	稜花皿

挿図番号	掲載番号	種別	器種	出土区	法量(cm)			胎土の色調	調整	－	－	時期	備考
					口径	底径	器高						
46	191	土師器	坏	I-18	8.8	6.4	3.3	－	ナデ	－	－	－	指跡，底部糸切り
	192	土師器	坏	K-21	－	6.4	－	－	－	－	－	－	底部糸切り
	193	土師器	皿	－	12.3	7.8	2.4	－	－	－	－	－	内面スス付着，底部糸切り
	194	土師器	皿	I-20	12.0	8.0	2.3	－	ナデ	－	－	－	赤，底部糸切り
	195	土師器	皿	－	－	17.0	－	－	－	－	－	－	内面スス付着，底部糸切り
	196	土師器	皿	I-20	11.6	7.2	2.5	－	－	－	－	－	底部糸切り
	197	土師器	皿	－	7.2	5.2	1.6	－	ナデ	－	－	－	内面スス付着，底部糸切り
	198	土師器	耳皿	I-17	－	2.8	0.8	－	－	－	－	－	底部糸切り

挿図番号	掲載番号	種別	器種	出土区	法量(cm)			胎土の色調	釉薬	釉薬の色調	施釉部位	産地	時期	分類	備考
					口径	底径	器高								
46	199	陶器	壺	J-19 I-20	12.0	－	－	灰色	褐釉	－	口唇部釉剥ぎ	中国南部	－	－	四耳壺
	200	陶器	壺	－	－	－	－	灰褐色	不明	－	不明	中国南部	－	－	－
	201	陶器	壺	K-20	－	15.8	－	灰褐色	－	－	残存部全面施釉	中国南部	－	－	－
	202	陶器	壺	－	－	－	－	灰黄色	褐釉	－	底面無釉	中国南部	－	－	－
	203	陶器	壺	－	－	16.0	－	にぶい 黄橙色	－	－	底面無釉	中国南部	－	－	－
47	204	瓦質 土器	擂鉢	K-20 J-21	31.0	11.0	12.3	浅黄橙色	－	－	－	－	－	－	指痕
	205	瓦質 土器	擂鉢	－	35.0	15.0	13.1	灰白色	－	－	－	－	－	－	(外)指押痕
	206	瓦質 土器	擂鉢	K-17 L-17	30.0	15.0	12.0	灰褐色	－	－	－	－	－	－	(外)指押痕 口縁おさえ
	207	瓦質 土器	擂鉢	H-21	－	11.4	－	黄橙色	－	－	－	－	－	－	－
	208	陶器	擂鉢	－	29.4	－	－	灰褐色	－	－	－	備前	－	－	(外)ヘラ削り，ナデ
48	209	瓦質 土器	火鉢	L-18	36.0	20.0	7.9	橙色	－	－	－	－	15世紀代	－	(両)ナデ 口縁部外面に菊花文
	210	瓦質 土器	火鉢	J-19	－	－	－	灰白色	－	－	－	－	15世紀代	－	内スス,ナデ
	211	瓦質 土器	角鉢	－	－	－	8.2	橙色	－	－	－	－	－	－	押型あり，穴帯 口縁部外面に菊花文
	212	瓦質 土器	火鉢	J-19	－	－	－	黒色	－	－	－	－	－	－	渦模様，脚部
	213	瓦質 土器	火鉢	J-21	－	13.5	－	黒色	－	－	－	－	15世紀代	－	外底墨書，宗珠 植木鉢の転用品
	214	瓦質 土器	風炉	J-19	27.2	－	－	黄灰色	－	－	－	－	－	－	内スス？
	215	瓦質 土器	茶釜	P-17	7.6	－	－	橙色	－	－	－	－	－	－	内，外ナデ 外面にスス付着
	216	土師質 土器	蒸籠	O-17	－	－	－	灰白色	－	－	－	－	－	－	－
	217	土師質 土器	焙烙	I-19	22.7	8.0	4.2	にぶい 橙色	－	－	－	－	－	－	内外面にスス付着

挿図番号	掲載番号	種別	器種	出土区	法量(cm)			胎土の色調	調整	施釉部位	産地	時期	備考
					口径	底径	器高						
48	218	土製品	土錘	－	(長)5.7	(径)2.1	－	灰白色	－	－	－	－	－
	219	土製品	土錘	J-21	(長)5.0	(径)1.7	－	灰白色	－	－	－	－	－

第42表　B地区遺物観察表(4)

挿図番号	掲載番号	種別	器種	出土区	法量(cm)			胎土の色調	調整	施釉部位	産地	時期	備考
					口径	底径	器高						
49	220	木製品	漆椀	−	15.2	8.2	8.5	−	−	−	−	−	赤絵　草木？,(外)黒漆　(内)赤漆
	221	木製品	漆椀	−	−	−	−	−	−	−	−	−	鶴,(外)黒漆　(内)赤漆
	222	木製品	坏	K−21	13.0	7.5	3.6	−	−	−	−	−	(外)黒漆　(内)赤漆, 鶴絵, 畳目は平坦
	223	木製品	坏	−	12.0	8.0	3.0	−	−	−	−	−	−
	224	木製品	坏	−	15.8	7.4	5.4	−	−	−	−	−	−

挿図番号	掲載番号	種別	器種	出土区	法量(cm)			胎土の色調	調整	施釉部位	産地	時期	備考
					長さ	幅	厚さ						
49	225	木製品	下駄	M−17	12.2	9.2	0.8	−	−	−	−	−	−
	226	木製品	鋤？	M−17	10.6	8.4	2.6	−	−	−	−	−	−
	227	木製品	鍔	K−20	7.9	7.1	1.0	−	−	−	−	−	黒漆塗り
	228	木製品	板？	−	7.4	4.8	0.7	−	−	−	−	−	表面に黒漆が数ヶ所点在する
	229	木製品	板？	I,J−18	8.0	10.8	2.3	−	−	−	−	−	−
	230	木製品	板？	O−17	11.4	12.1	1.0	−	−	−	−	−	−
	231	木製品	板？	M−17	13.5	4.7	0.8	−	−	−	−	−	−
	232	木製品	丸板	−	37.4	33.1	1.6	−	−	−	−	−	−
50	233	木器	円形板	−	(径)26.8	−	2.4	−	−	−	−	−	−
	234	木器	円形板	J,K−21	24.3＋	−	0.9	−	−	−	−	−	−
	235	木器	円形板	−	23.5＋	−	0.5	−	−	−	−	−	−
	236	木器	円形板	I,J−18	16.2	−	0.8	−	−	−	−	−	−
	237	木器	円形板	I,J−18	15.0	−	1.2	−	−	−	−	−	−
	238	木器	円形板	−	10.8	−	0.6	−	−	−	−	−	−
	239	木器	円形板	−	11.5	−	1.0	−	−	−	−	−	−
	240	木器	円形板	−	15.6＋	−	0.7	−	−	−	−	−	表面数か所に黒漆
	241	木器	円形板	−	14.6	−	0.9	−	−	−	−	−	−
51	242	木器	折敷	J,K−21	(長)34.0	(短)11.0＋	0.5	−	−	−	−	−	四角の角を切り込み, 変形8角形の切り込み二箇所
	243	木器	折敷	I−19	(長)32.7＋	(短)6.2＋	0.4	−	−	−	−	−	−
	244	木器	折敷	−	(長)18.5	(短)17.7	0.9	−	−	−	−	−	−
	245	木器	折敷	I,J−18	(長)16.1	(短)14.1	0.9	−	−	−	−	−	−
52	246	木器	容器	−	(長)20.2	(短)11.1	(高)6.6	−	−	−	−	−	−
	247	木器	容器	I−21	(長)18.1＋	(短)6.1	(高)7.6	−	−	−	−	−	−
	248	木器	枡	−	(長)10.0	(短)7.1	(高)5.0	−	−	−	−	−	床厚2.0cm
	249	木器	容器	−	(長)51.5	(短)29.7	(高)18.7	−	−	−	−	−	床厚2.5cm
	250	木器	柄杓	J−21	(長)31.8	(短)15.0	(高)7.5	−	−	−	−	−	−
53	251	木器	平板	−	45.2	6.0	0.8	−	−	−	−	−	−
	252	木器	棍棒	−	46.1	3.0	2.7	−	−	−	−	−	−
	253	木器	箆	−	30.4	4.2	0.7	−	−	−	−	−	スギ
	254	木器	箆	I,J−18	16.2	1.8	0.7	−	−	−	−	−	−
	255	木器	箆	I,J−19	13.5	1.8	1.4	−	−	−	−	−	コウヤマキ
	256	木器	杭	−	15.2	3.4	−	−	−	−	−	−	−
	257	木器	杭	−	18.0＋	3.5	−	−	−	−	−	−	6面加工
	258	坩堝	**境形**	K−17	(口径)12.3	−	−	褐灰色	−	−	−	−	注ぎ口
	259	金属器	板?	−	11.0+	2.0	(重)27.51g	−	−	−	−	−	−
	260	金属器	古銭	I−20	−	−	−	−	−	−	−	−	洪武通宝(1368年以降)
	261	金属器	古銭	J−20	−	−	−	−	−	−	−	−	大世通宝(1454年以降)

第43表　C地区遺物観察表(1)

挿図番号	掲載番号	種別	器種	出土区	法量(cm)			胎土の・色調	釉薬	釉薬の色調	施釉部位	産地	時期	分類	備考
					口径	底(径)	器高								
58	262	土師器	坏	土塁	13.8	9.0	2.6	－	－	－	－	－	－	－	調整:ナデ, 底部糸切り
	263	瓦質土器	風炉	土塁他	－	37.0	－	黒色	－	－	－	－	15世紀代	－	押型たくさん
62	264	青磁	椀	虎口他	－	5.8	－	灰白色	青磁釉	灰オリーブ	高台内底面釉剥ぎ	－	－	上田B	－
	265	青磁	皿	虎口他	11.5	5.4	2.8	にぶい黄橙色	青磁釉	灰オリーブ	畳付き～高台内底面無釉	－	－	－	見込み円状に釉剥ぎ 稜花皿
	266	青花	碗	虎口他	14.0	4.8	4.5	淡黄色	透明釉	－	腰部～高台内底面無釉	漳州窯	16世紀後半	－	※ウラに墨書「〇」3つ 見込み円状に釉剥ぎ
	267	土師器	坏	虎口	14.8	6.4	3.2	－	－	－	－	－	－	－	ヘラ切り
	268	土師器	坏	虎口下	11.9	7.8	2.0	－	－	－	－	－	－	－	底部糸切り スス付着
	269	土師器	皿	虎口B	7.8	6.0	2.0	－	－	－	－	－	－	－	緑褐色の自然釉, 糸切り
	270	土師器	皿	虎口B	6.5	5.0	1.4	－	－	－	－	－	－	－	調整:ナデ, 底部糸切り 口縁に芯の煤, 灯明皿
	271	土製品	羽口	虎口	－	－	－	浅黄橙色	－	－	－	－	－	－	鉄滓熔着
69	272	青磁	椀	L-15 ピット	13.0	－	－	浅黄橙色	青磁釉	－	残存部全面施釉	－	－	上田B-Ⅳ'	－
79	273	青磁	椀	N-15 ピット	－	－	－	浅黄橙色	青磁釉	－	残存部全面施釉	龍泉窯	－	上田D	－
	274	青磁	椀	K-14 ピット	15.8	－	－	灰白色	青磁釉	－	残存部全面施釉	龍泉窯	－	上田C	雷文帯
	275	青磁	皿	L-13 ピット	11.6	5.0	2.9	灰白色	青磁釉	－	腰部～高台内底面無釉	龍泉窯	－	太宰府 Ⅰ-2a類D期か？	碁笥底,外露胎
	276	青磁	盤	K-13 ピット	－	－	－	灰白色	青磁釉	－	残存部全面施釉	龍泉窯	－	－	－
	277	青花	碗	L-14 ピット	10.6	－	－	淡黄色	透明釉	－	残存部全面施釉	景徳鎮窯	－	－	－
	278	青花	碗	M-13 ピット	－	4.3	－	灰白色	透明釉	－	畳付き～高台内底面無釉	漳州窯	16世紀後半	－	－
	279	青花	碗	M-12 ピット	－	4.4	－	灰白色	透明釉	－	畳付き～高台内底面無釉	漳州窯	－	－	見込みに数字の「五」 見込み輪状の釉剥ぎ
	280	青花	皿	N-14 ピット	12.2	－	2.6	灰白色	透明釉	青白	畳付は釉剥ぎ	景徳鎮窯	16世紀後半	上田B	－
	281	青花	盤	M-15他 ピット	32.6	－	－	淡黄色	青磁釉	－	残存部全面施釉	漳州窯	16世紀後半	－	模
	282	青花	蓋	M-15 ピット	18.4	－	－	灰白色	透明釉	－	見受け部無釉	景徳鎮窯	－	－	口唇部無釉
	283	色絵	合子蓋	M-14 ピット	8.2	－	－	灰白色	透明釉	乳白	見受け部釉剥ぎ	景徳鎮窯	16世紀後半以降	－	※赤絵,露胎
	284	土師器	坏	P1935 ピット	14.0	7.3	2.5	－	－	－	－	－	－	－	底部糸切り スス付着
	285	土師器	皿	P-15 ピット	12.8	8.8	2.8	－	－	－	－	－	－	－	ナデ, 底部糸切り スス付着, 灯明皿
	286	土師器	皿	P-15 ピット	11.7	7.8	2.2	－	－	－	－	－	－	－	底部糸切り
80	287	土師器	皿	ピット	14.0	7.4	2.5	－	－	－	－	－	－	－	ナデ, 底部糸切り スス付着
	288	土師器	皿	N-15 ピット	11.9	7.2	2.5	－	－	－	－	－	－	－	ナデ, 底部糸切り 内外面スス付着
	289	土師器	皿	K-14 ピット	10.0	6.8	2.2	－	－	－	－	－	－	－	ナデ, 底部糸切り
	290	土師器	皿	Q-15 ピット	6.5	3.7	1.8	－	－	－	－	－	－	－	ナデ, 底部糸切り
	291	土師器	皿	N-14 ピット	6.6	－	1.6	－	－	－	－	－	－	－	底部糸切り
	292	土師器	皿	K-13 ピット	6.6	4.6	1.5	－	－	－	－	－	－	－	ナデ, 底部糸切り スス付着, 灯明皿
	293	土師器	皿	J-15 ピット	7.4	5.6	1.8	－	－	－	－	－	－	－	ナデ, 底部糸切り
	294	土師器	皿	L-15 ピット	7.0	5.0	1.4	－	－	－	－	－	－	－	ナデ, 底部糸切り
	295	土師器	皿	L-15 ピット	5.9	4.2	1.2	－	－	－	－	－	－	－	ナデ, 底部糸切り
	296	土師器	皿	K-14 ピット	5.9	4.7	1.9	－	－	－	－	－	－	－	ナデ, 底部糸切り
	297	陶器	鉢	N-14 ピット	30.0	－	－	浅黄橙色	－	－	－	中国南部か？	－	－	－
	298	瓦質土器	火鉢	ピット	－	－	－	明黄褐色	－	－	－	－	15世紀代	－	押型
	299	土製品	土錘	L-14 ピット	(長)4.8	(径)1.2	－	－	－	－	－	－	－	－	－
	300	土製品	土錘	N-14 ピット	(長)2.5	(径)2.3	－	－	－	－	－	－	－	－	－
	301	金属器	銅製品	K-14 ピット	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
	302	金属器	銅製品	K-14 P422	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
	303	金属器	古銭	N-14 ピット	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	洪武通宝(1368年～)
	304	金属器	古銭	N-14 ピット	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
	305	金属器	古銭	M-14 ピット	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
	306	金属器	古銭	M-14 ピット	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	洪武通宝(1368年～)
	307	土師器	皿	土坑内	6.4	4.2	1.5		－	－	－	－	－	－	底部糸切り スス付着, 灯明皿
	308	陶器	壺	D7	14.4	－	－	褐灰色	－	－	－	備前	－	－	－
	309	陶器	壺	D4	－	－	－	褐灰色	－	－	－	備前	－	－	－
	310	土製品	土錘	D4	(長)5.3	(径)1.3	－	－	－	－	－	－	－	－	－
81	311	青磁	椀	L-15	12.0	－	－	淡黄色	青磁釉	明オリーブ	残存部全面施釉	龍泉窯	－	上田B-Ⅳ	蓮弁
	312	青磁	椀	－	－	－	－	灰白色	青磁釉	－	残存部全面施釉	龍泉窯	－	上田D	釉泊？
	313	青磁	椀	K-15	17.0	－	－	灰白色	青磁釉	オリーブ	残存部全面施釉	龍泉窯	－	上田D	－
	314	青磁	椀	－	7.0	－	－	灰白色	青磁釉	－	残存部全面施釉	龍泉窯	－	上田C	雷文帯
	315	青磁	椀	D-15	－	5.8	－	灰白色	青磁釉	－	高台内面～内底面無釉	龍泉窯	－	上田CかD	見込み印花文,露胎
	316	青磁	椀	R-5	－	6.2	－	灰白色	青磁釉	－	残存部全面施釉	龍泉窯	－	上田B-Ⅰ'	蓮弁,釉泊
	317	青磁	椀	－	－	3.0	－	灰白色	青磁釉	明オリーブ	高台内底面釉剥ぎ	龍泉窯	－	上田CかD	蓮弁
	318	青磁	皿	M-13	－	6.0	－	灰白色	青磁釉	－	畳付き～高台内底面無釉	龍泉窯	－	－	露胎 見込みに円状に釉剥ぎ
	319	青磁	皿	D-14	11.2	－	－	灰黄色	青磁釉	明オリーブ	残存部全面施釉	龍泉窯	－	－	稜花
	320	青磁	皿	N-14	13.0	－	－	灰黄色	青磁釉	明オリーブ	残存部全面施釉	龍泉窯	－	－	稜花
	321	青磁	皿	M-14	8.0	4.2	2.8	灰白色	青磁釉	明オリーブ	高台内底面釉剥ぎ	龍泉窯	－	－	露胎
	322	青磁	皿・(盤)	P-15	－	16.8	－	灰白色	青磁釉	オリーブ	高台内底面無釉	龍泉窯	－	－	－
	323	青磁	瓶	－	－	－	－	灰白色	青磁釉	明オリーブ	残存部全面施釉	龍泉窯	－	－	外凸あり
	324	青磁	香炉	N-14	－	6.6	－	灰白色	青磁釉	オリーブ	内面無釉, 畳付き～高台内底面無釉	龍泉窯	－	－	三足の獣文,碁笥底

第44表　C地区遺物観察表(2)

挿図番号	掲載番号	種別	器種	出土区	法量(cm)			胎土の・色調	釉薬	釉薬の色調	施釉部位	産地	時期	分類	備考
					口径	底(径)	器高								
81	325	青磁	瓶	N-15	−	4.8	−	灰白色	青磁釉	オリーブ	畳付は釉剥ぎ	龍泉窯	−	−	畳付無釉
	326	白磁	皿	M-15	−	6.0	−	灰白色	透明釉	−	腰部～高台内底面無釉	龍泉窯	−	−	底　朱　ヘラ切 見込みに輪状の釉剥ぎ
	327	白磁	皿	N-15	11.4	6.0	2.9	灰白色	透明釉	−	畳付は釉剥ぎ	−	−	−	畳付無釉
	328	青花	碗	L-14他	12.6	−	−	灰白色	透明釉	青白	残存部全面施釉	景徳鎮窯	15世紀後半～ 16世紀中葉	小野C	芭蕉文
	329	青花	碗	M-13	−	6.0	−	灰白色	透明釉	−	畳付き釉剥ぎ	景徳鎮窯	15世紀後半～ 16世紀中葉	小野C	芭蕉文, 脚の畳付は意識して削り
	330	青花	碗	M-15他	13.2	3.5	5.4	灰白色	透明釉	灰白	畳付は釉剥ぎ	漳州窯	16世紀後半	−	袈裟襷文, 畳付きに砂目？
	331	青花	皿	M-12,13	−	6.0	−	灰白色	透明釉	青白	畳付は露胎	景徳鎮窯	16世紀後半	−	−
	332	青花	皿	M-6他	23.4	9.8	−	灰白色	透明釉	−	畳付き～高台内底面無釉	漳州窯	16世紀後半	−	−
	333	青花	皿	Q-14他	−	7.6	−	灰白色	透明釉	−	畳付は釉剥ぎ	景徳鎮窯	16世紀後半	小野皿B	畳付無釉 玉取り獅子文
82	334	染付	仏飯器	N-15 添曲輪	−	4.2	−	灰白色	透明釉	灰白	底部無釉	肥前	18世紀後半	−	−
	335	青花	小坏	L-14	−	2.6	−	灰白色	透明釉	−	畳付きは無釉	景徳鎮窯	−	−	畳付無釉　底
	336	陶器	小坏	P-15	−	3.6	−	淡黄色	透明釉	灰白	腰部～高台内面無釉	瀬戸美濃	1610年代	−	瀬戸焼　鉄絵志野
	337	土師器	皿	N-14	13.4	7.6	2.6	−	−	−	−	−	−	−	ナデ，底部糸切り
	338	土師器	坏	M-14	10.2	6.0	3.00	−	−	−	−	−	−	−	内側指押し 火ぶくれした箇所あり
	339	土師器	坏	−	10.0	5.6	3.4	−	−	−	−	−	−	−	糸切り
	340	土師器	坏	N-13,14 添曲輪	10.2	7.5	3.1	明赤褐	−	−	−	−	−	−	ナデ，底部糸切り
	341	土師器	皿	−	7.0	4.8	1.9	−	−	−	−	−	−	−	内,外面墨か？
	342	土師器	皿	N-14	6.7	4.9	1.7	−	−	−	−	−	−	−	ナデ，底部糸切り
	343	土師器	皿	−	6.7	4.6	1.7	−	−	−	−	−	−	−	−
	344	土師器	皿	M-13	7.8	5.8	2.2	−	−	−	−	−	−	−	ナデ，底部糸切り
	345	土師器	坏	N-15	13.0	9.0	3.6	−	−	−	−	−	−	−	三脚あり
	346	陶器	壷	−	9.2	−	−	淡黄色	褐釉	茶褐色	内面口縁部以下無釉, 口唇部釉剥ぎ	中国南部	−	−	−
	347	カムイヤキ	壷	M-13	−	−	−	−	−	−	−	カムイヤキ	−	−	(外)格子目タタキ (内)轆轤痕
	348	坩堝	椀形	L-16	12.2	−	−	−	−	−	注口,青銅	−	−	−	−
	349	坩堝	椀形	N-15	12.6	−	−	−	−	−	注口	−	−	−	−
	350	陶器	甕	L-11,12	33.4	−	−	橙色	鉄釉	−	内面無釉	肥前か 在地	−	−	−
	351	土師質 土器	焙烙	N-14 N-24	25.8	−	−	浅黄色	−	−	−	−	−	−	内外面スス,ナデ
	352	陶器	釜	M-16	15.4	−	−	黒色	鉄釉	−	腰部以下無釉, 口唇部釉剥ぎ	薩摩焼 苗代川系	19世紀代	−	櫛目,口縁凹
83	353	陶器	土瓶	M-14他	6.0	4.0	9.8	にぶい・橙色	鉄釉	−	腰部以下無釉, 口唇部釉剥ぎ	薩摩焼 苗代川系	18世紀後半～ 19世紀代	−	−
	354	土製	羽口	N-14	(長)9.4+	(径)5.8	−	−	−	−	−	−	−	−	鉄滓付着
	355	土製	羽口	M-14	(長)11.5+	(径)8.2	−	−	−	−	−	−	−	−	−
	356	土製	土錘	P-15	(長)6.2	(径)1.3	−	−	−	−	−	−	−	−	−
	357	土製	土錘	Q-15	(長)5.9	(径)1.3	−	−	−	−	−	−	−	−	研磨仕上げ
	358	土製	土錘	−	(長)4.4	(径)1.2	−	−	−	−	−	−	−	−	−
	359	土製	土錘	N-15	(長)5.3	(径)1.1	−	−	−	−	−	−	−	−	−
	360	土製	土錘	P-15	(長)5.1	(径)1.0	−	−	−	−	−	−	−	−	−
	361	土製	土錘	下段1T	(長)4.6	(径)1.1	−	−	−	−	−	−	−	−	−
	362	土製	土錘	P-15	(長)3.5	(径)1.2	−	−	−	−	−	−	−	−	−
	363	土製	土錘	−	(長)2.8	(径)1.0	−	−	−	−	−	−	−	−	−
	364	土製	土錘	下段2T	(長)2.3	(径)1.1	−	−	−	−	−	−	−	−	−
	365	土製	土錘	N-15	(長)4.1	(径)1.7	−	−	−	−	−	−	−	−	−
	366	土製	土錘	−	(長)3.6	(径)1.6	−	−	−	−	−	−	−	−	−
	367	土製	土錘	M-14	(長)4.3	(径)1.6	−	−	−	−	−	−	−	−	−
	368	土製	土錘	N-14	(長)2.7	(径)2.1	−	−	−	−	−	−	−	−	−
	369	土製	土錘	N-15	(長)2.9	(径)1.7	−	−	−	−	−	−	−	−	−
	370	土製	土錘	−	(長)2.9	(径)2.1	−	−	−	−	−	−	−	−	−
	371	石製品	火打石	L-15	(長)2.4	幅2.5	(厚)1.5	(重) 13.0	−	−	−	−	−	−	石材:鉄石英
	372	石製品	火打石	M-13	(長)3.0	幅4.4	(厚)3.6	(重) 46.7	−	−	−	−	−	−	石材:石英
	373	石製品	火打石	−	(長)3.7	幅5.4	(厚)2.9	(重) 50.6	−	−	−	−	−	−	石材:チャート
84	374	石製品	硯	K-14	(長)8.6	幅10.2	(厚)1.3	(重) 112.6	−	−	−	−	−	−	石材:粘板岩
	375	石製品	垂飾品	−	(長)3.8	幅4.4	(厚)1.1	(重) 26.3	−	−	−	−	−	−	石材:頁岩
	376	金属器	角釘	N-13,14	(長)11.0	幅1.8	(厚)0.6	−	−	−	−	−	−	−	−
	377	金属器	鉄鏃	一括	(長)8.0	幅0.9	(厚)0.4	−	−	−	−	−	−	−	−
	378	金属器	鉄鏃	N-11	(長)10.5+	幅2.9	(厚)1.1	−	−	−	−	−	−	−	雁又
	379	金属器	煙管	M-14	(長)6.5	幅1.2	(厚)0.5	−	−	−	−	−	−	−	−
	380	金属器	煙管	O-13,14	(長)5.6	幅1.1	(厚)0.8	−	−	−	−	−	−	−	−
	381	金属器	?	一括	(長)6.7	幅4.6	(厚)0.5	−	−	−	−	−	−	−	材質:鉄，板状
	382	金属器	?	Q-15	(長)4.2	幅1.6	(厚)0.5	−	−	−	−	−	−	−	材質:鉄，板状
	383	金属器	?	P-15	(長)2.3	幅0.7	(厚)0.7	−	−	−	−	−	−	−	材質:青銅，筒状
	384	金属器	?	L-13	(長)1.3	幅1.3	(厚)1.3	−	−	−	−	−	−	−	材質:青銅，つまみ?
	385	金属器	?	J-15	(径)4.5	−	(厚)0.3	−	−	−	−	−	−	−	材質:青銅，輪
	386	金属器	古銭	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	寛永通宝(1636年以降)
	387	金属器	古銭	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	洪武通宝(1368年以降)
	388	金属器	古銭	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	治平元宝(1064年以降)
	389	金属器	古銭	L-13	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	寛永通宝(1636年以降)
	390	金属器	古銭	L-14	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
	391	金属器	古銭	1T	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	乾隆通宝(1763年以降)
	392	金属器	古銭	P-15	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	洪武通宝(1368年以降)
	393	金属器	古銭	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	寛永通宝(1636年以降)
	394	金属器	古銭	M-15	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
	395	金属器	古銭	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	寛永通宝(1636年以降)

第45表　D地区遺物観察表(1)

挿図番号	掲載番号	種別	器種	出土区	法量(cm)			胎土の色調	釉薬	施釉部位	産地	時期	分類	備考
					口径	底径	器高							
90	396	青磁	椀	空堀Ⅱ	18.4	－	－	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	龍泉窯	－	上田D類(D-Ⅱ?)	－
	397	白磁	椀	空堀Ⅱ S-11	－	3.3	－	灰白色	透明釉	腰部～高台内底面無釉	－	16世紀後半	上田D類	※赤三（朱書）
	398	土師器	坏	空堀Ⅱ	12.6	9.5	3.4	－	－	－	－	－	－	ナデ，底部糸切り
	399	土師器	坏	空堀Ⅱ	12.4	10.1	3.1	－	－	－	－	－	－	ナデ，底部糸切り
	400	土師器	坏	空堀Ⅱ	12.8	9.6	3.2	－	－	－	－	－	－	ナデ，底部糸切り
	401	土師器	坏	空堀Ⅱ S-10	12.4	9.0	3.2	－	－	－	－	－	－	ナデ，底部糸切り
	402	土師器	坏	空堀Ⅱ	13.1	7.6	3.6	－	－	－	－	－	－	ナデ，底部糸切り （内外）朱
	403	土師器	坏	空堀Ⅱ	13.6	9.2	3.4	－	－	－	－	－	－	ナデ，底部糸切り 内外面ススト付着
	404	土師器	坏	空堀Ⅱ	12.6	8.2	3.1	－	－	－	－	－	－	ナデ，底部糸切り 内面に指痕有り
	405	土師器	坏	空堀Ⅱ P-8	11.8	6.8	3.2	－	－	－	－	－	－	ナデ，底部糸切り （内外面）朱 外面にススト付着
	406	土師器	坏	空堀Ⅱ P-8	12.6	8.6	3.6	－	－	－	－	－	－	ナデ，底部糸切り 内面に刷痕有り ススト付着
	407	土師器	坏	空堀Ⅱ P-8	11.5	9.8	3.2	－	－	－	－	－	－	ナデ，底部糸切り
	408	土師器	坏	空堀Ⅱ	11.6	6.8	3.3	－	－	－	－	－	－	底部糸切り 内外面ススト付着
	409	土師器	坏	空堀Ⅱ	11.7	8.0	3.1	－	－	－	－	－	－	底部糸切り・割れ口・朱
	410	土師器	坏	空堀Ⅱ P-8	10.0	6.6	3.0	－	－	－	－	－	－	指押し，底部糸切り
	411	土師器	坏	空堀Ⅱ	－	8.4	－	－	－	－	－	－	－	底部糸切り
91	412	土師器	皿	空堀Ⅱ	7.4	6.4	1.8	－	－	－	－	－	－	ナデ，底部糸切り ススト付着
	413	土師器	皿	空堀Ⅱ S-10	7.4	6.0	2.0	－	－	－	－	－	－	底部糸切り
	414	土師器	皿	空堀Ⅱ S-10，11	7.0	5.4	2.6	－	－	－	－	－	－	ナデ，底部糸切り ススト付着
	415	土師器	皿	空堀Ⅱ S-11	7.4	5.8	1.7	－	－	－	－	－	－	ナデ，底部糸切り
	416	土師器	皿	空堀Ⅱ P-8	7.6	5.4	2.1	－	－	－	－	－	－	ナデ，底部糸切り
	417	土師器	皿	空堀Ⅱ	8.4	5.6	2.2	－	－	－	－	－	－	ナデ，底部糸切り，灯明皿 内面ススト付着
	418	土師器	皿	空堀Ⅱ P-8	7.7	5.4	2.4	－	－	－	－	－	－	ナデ，底部糸切り 内外面ススト付着
	419	土師器	皿	空堀Ⅱ	7.1	5.2	2.1	－	－	－	－	－	－	底部糸切り ススト付着
	420	土師器	皿	空堀Ⅱ	7.2	5.2	2.2	－	－	－	－	－	－	底部糸切り
	421	土師器	皿	空堀Ⅱ P-8	7.8	5.7	2.5	－	－	－	－	－	－	ナデ，底部糸切り
	422	土師器	皿	空堀Ⅱ	7.2	5.0	2.2	－	－	－	－	－	－	底部糸切り 外面ススト付着
	423	陶器	擂鉢	空堀Ⅱ	28.0	－	－	黒褐色	－	－	備前	15世紀代	－	－
92	424	土師器	坏	空堀Ⅱ	12.2	9.0	3.2	－	－	－	－	－	－	ナデ，底部糸切り
	425	土師器	皿	空堀Ⅱ	6.5	4.9	1.9	－	－	－	－	－	－	底部糸切り
	426	土師器	皿	空堀Ⅱ	7.2	6.0	1.8	－	－	－	－	－	－	底部糸切り
	427	土師器	皿	空堀Ⅱ	6.8	5.2	2.4	－	－	－	－	－	－	底部糸切り
93	428	土師器	坏	空堀Ⅱ	14.3	11.7	3.2	－	－	－	－	－	－	底部糸切り
	429	土師器	坏	空堀Ⅱ	13.1	9.8	3.3	－	－	－	－	－	－	底部糸切り
	430	土師器	坏	空堀Ⅱ	13.0	9.9	3.3	－	－	－	－	－	－	底部糸切り
	431	土師器	坏	空堀Ⅱ	11.5	8.0	3.2	－	－	－	－	－	－	底部糸切り
	432	土師器	皿	空堀Ⅱ	7.2	－	－	－	－	－	－	－	－	底部糸切り
	433	土師器	皿	空堀Ⅱ	－	9.4	－	－	－	－	－	－	－	底部糸切り
	434	土師器	坏	空堀Ⅱ	－	9.1	－	－	－	－	－	－	－	底部糸切り
	435	土師器	坏	空堀Ⅱ	－	9.2	－	－	－	－	－	－	－	底部糸切り
	436	土師器	坏	空堀Ⅱ	－	8.5	－	－	－	－	－	－	－	底部糸切り
	437	土師器	皿	空堀Ⅱ	－	8.9	－	－	－	－	－	－	－	底部糸切り
	438	土師器	皿	空堀Ⅱ	－	9.4	－	－	－	－	－	－	－	底部糸切り
	439	土師器	皿	空堀Ⅱ	－	8.0	－	－	－	－	－	－	－	底部糸切り
	440	土師器	皿	空堀Ⅱ	－	8.2	－	－	－	－	－	－	－	底部糸切り
	441	土師器	皿	空堀Ⅱ	－	9.0	－	－	－	－	－	－	－	底部糸切り
	442	土師器	皿	空堀Ⅱ	－	－	－	－	－	－	－	－	－	底部糸切り
102	443	青磁	椀	Q-10 炉跡5内	14.5	－	－	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	龍泉窯	－	上田C類(C-Ⅲ)	波，雷文帯
	444	土師器	皿	Q-10 炉跡5内	8.2	6.2	2.1	－	－	－	－	－	－	底部糸切り
	445	土師器	皿	炉跡1内	7.3	5.8	2.1	－	－	－	－	－	－	ナデ，底部糸切り 内面ススト付着
	446	土師器	坏	P-10 炉跡9内	－	－	3.5	－	－	－	－	－	－	－
103	447	青磁	椀	PQ-10	16.0	－	－	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	龍泉窯	－	上田B-Ⅳ'	蓮弁
	448	青磁	椀	－	13.6	－	－	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	龍泉窯	－	上田B類(B-Ⅲ？)	蓮弁
	449	青磁	椀	P-11	14.0	－	－	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	龍泉窯	－	上田B類(B-Ⅲ？)	蓮弁
	450	青磁	椀	－	－	6.0	－	灰白色	青磁釉	高台内底面無釉	龍泉窯	－	上田B類 (B-Ⅰ？Ⅱ？)	蓮弁,花文,露胎
	451	青磁	椀	中の城下	－	5.0	－	浅黄橙色	青磁釉	高台内底面無釉	龍泉窯	－	－	浅蓮弁,高台, 見込みに印花文
	452	青磁	椀	－	－	4.2	－	浅黄橙色	透明釉	高台内底面輪状に釉剥ぎ	龍泉窯	－	－	－
	453	青磁	椀	－	18.6	－	－	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	龍泉窯	－	上田C類	※季,自,功〇巻
	454	青磁	椀	P-11	13.0	－	－	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	龍泉窯	－	上田C類(C-Ⅱ？)	雷文
	455	青磁	椀	S-9	－	6.2	－	灰白色	青磁釉	畳付きは釉剥ぎ， 高台内底面無釉	龍泉窯	－	上田Bか？	見込に印花文,高台内露胎
	456	青磁	椀	R-9,10	－	5.3	－	灰白色	青磁釉	畳付き～高台内底面無釉	龍泉窯	－	上田Bか？	見込に印花文,高台内露胎

第46表　D地区遺物観察表(2)

挿図番号	掲載番号	種別	器種	出土区	法量(cm)			胎土の色調	釉薬	施釉部位	産地	時期	分類	備考
					口径	底径	器高							
103	457	青磁	盤	−	−	−	−	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	龍泉窯	−	太宰府Ⅳ	浅蓮弁
	458	青磁	盤	Q, R−9, 10	20.4	−	−	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	龍泉窯	−	−	稜花
	459	青磁	皿	Q, R−9, 10	13.6	−	−	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	龍泉窯	−	−	端反
	460	青磁	皿	−	−	4.8	−	灰白色	青磁釉	内面無釉, 畳付き〜高台内底面無釉	龍泉窯	−	−	※見込み玉の文字
	461	青磁	瓶	−	6.4	−	−	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	龍泉窯	−	−	稜花
	462	青磁	小坏	Q−9	7.4	4.0	4.8	灰白色	青磁釉	高台内底面無釉	龍泉窯	−	−	稜花,蓮弁,露胎
	463	青磁	香炉	−	−	3.6	−	にぶい橙色	青磁釉	内面,底部無釉	龍泉窯	−	−	内・外　露胎 脚
	464	白磁	椀	P−9	15.0	−	−	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	景徳鎮窯	−	森田E	−
	465	白磁	椀	−	13.0	−	−	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	景徳鎮窯	−	森田E	−
	466	白磁	椀	−	−	6.6	−	灰白色	透明釉	畳付き〜高台内面無釉	景徳鎮窯	−	−	−
	467	白磁	皿	−	11.7	6.5	3.0	灰白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	景徳鎮窯	−	森田E	−
	468	白磁	坏	P−8	11.4	−	−	淡黄色	透明釉	残存部全面施釉	景徳鎮窯	−	森田E	−
	469	白磁	皿	P−9	10.4	4.0	2.8	灰白色	透明釉	腰部〜畳付き無釉	景徳鎮窯	−	森田E	碁笥底,無釉
	470	白磁	皿	P−9	9.5	−	−	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	景徳鎮窯	−	森田E	菊花
	471	色絵	坏	−	−	2.0	−	灰白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	景徳鎮窯	16世紀後半以降	−	※色絵

挿図番号	掲載番号	種別	器種	出土区	法量(cm)			胎土の色調	釉薬	施釉部位	産地	時期	分類	備考
					口径	底径	器高							
104	472	青花	碗	P−10	13.2	−	−	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	景徳鎮窯	−	−	−
	473	青花	碗	P−9	11.0	−	−	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	景徳鎮窯	−	−	−
	474	青花	碗	−	16.2	5.8	6.2	−	−	畳付き〜高台内底面無釉	漳州窯	16世紀後半〜 17世紀初頭	−	露胎
	475	青花	皿	中の城下	−	6.2	−	−	−	−	景徳鎮窯	16世紀後半	小野B	畳付無釉
	476	青花	皿	P−9	10.0	2.7	2.7	灰白色	透明釉	腰部〜畳付き無釉	景徳鎮窯	15世紀後半〜 16世紀中葉	小野C	碁笥底
	477	青花	小坏	−	−	2.6	−	−	−	−	景徳鎮窯	−	−	−
	478	色絵	碗	P−9	12.8	−	−	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	景徳鎮窯	16世紀後半以降	−	※赤絵　内　タス
	479	色絵	瓶	P−9	−	−	−	−	−	−	景徳鎮窯	16世紀後半以降	−	※赤絵
	480	染付	碗	−	10.6	3.8	5.4	灰白色	透明釉	畳付きは釉剥ぎ	肥前	18世紀後半〜 19世紀初頭	−	小広東型 ？文？
	481	染付	皿	−	13.2	4.8	3.4	灰白色	透明釉	畳付きは釉剥ぎ	肥前	1630〜1640年代	−	畳付無釉
	482	染付	皿	−	14.0	7.0	3.0	灰白色	透明釉	畳付きは釉剥ぎ	肥前	1640〜1650年代	−	日の字鳳凰文
	483	染付	皿か鉢	P−8	−	9.8	−	−	−	畳付きは釉剥ぎ	肥前	1610〜1630年代	−	−
	484	色絵	小碗	−	10.0	−	−	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	瀬戸美濃か？	近世以降	−	※赤絵
	485	色絵	皿	−	−	11.0	−	灰白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	瀬戸美濃か？	近世以降	−	二重高台
	486	磁器	合子	T−10	4.6	−	−	灰白色	透明釉	上面無釉	在地	18世紀後半〜 19世紀前半	−	−
105	487	土師器	皿	Q, R−9, 10	−	9.6	−	−	−	−	−	−	−	底部糸切り 外面ス́ス付着
	488	土師器	皿	P−11	5.4	4.4	1.9	−	−	−	−	−	−	ナデ, 底部糸切り 内外面ス́ス付着
	489	土師器	皿	4T	7.1	4.8	1.8	−	−	−	−	−	−	ナデ, 底部糸切り
	490	坩堝	坏	P−11	10.0	6.5	2.9	−	−	−	−	−	−	底部糸切り
	491	坩堝	坏	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
	492	陶器	天目椀	−	11.8	4.4	6.5	浅黄橙色	鉄釉	腰部以下無釉	瀬戸美濃	16世紀後半〜 17世紀前半	−	−
	493	陶器	碗	シオノ側	−	5.0	−	−	灰釉	腰部〜高台内底面無釉	肥前	17世紀後半	−	京焼風陶器
	494	陶器	擂鉢	Q, R−9, 10	21.4	−	−	橙色	−	−	備前	15世紀後半〜 16世紀前半	−	片口
	495	陶器	擂鉢	R, S−9	−	12.4	−	橙色	−	−	備前	15世紀後半〜 16世紀前半	−	外面は指押,ナデ
	496	瓦質・土器	羽釜	P−9	33.2	−	−	にぶい橙色	−	−	−	−	−	穴あり,内外面ス́ス付着
	497	瓦質・土器	浅鉢	−	10.4	7.6	4.0	−	−	−	−	−	−	六角形の浅鉢(○型スタンプ)
	498	瓦質・土器	火鉢	Q, R−9, 10	−	−	−	にぶい黄橙色	−	−	−	15世紀代	−	(押型文)
	499	瓦質・土器	火鉢	Q, R−9, 10	−	−	−	黄橙色	−	−	−	15世紀代	−	穴帯(押型)
	500	陶器	壺	D−9	35.0	−	−	灰白色	−	−	常滑	−	−	−
	501	須恵器	甕	−	24.5	−	−	灰色	−	−	不明	−	−	稜杉文
106	502	カムィヤキ	甕	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	外面は細格子目文
	503	カムィヤキ	甕	P, Q−10	−	−	−	−	−	−	−	−	−	外面は細格子目文
	504	カムィヤキ	甕	Q−10	−	−	−	−	−	−	−	−	−	外面は細格子目文
	505	カムィヤキ	甕	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	外面は細格子目文
	506	カムィヤキ	浅鉢	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	外面は細格子目文
	507	石製品	垂飾品	P−8	(長)3.0	(短)2.5	(厚)1.4	−	−	−	−	−	−	−
	508	石製品	垂飾品	P−8	(長)2.0	(短)1.7	(厚)0.6	−	−	−	−	−	−	−
	509	石製品	滑石鍋	Q−10	(長)1.7	(短)1.2	(厚)1.2	−	−	−	−	−	−	−
	510	石製品	滑石鍋	P−9	(口径)12.8	−	−	−	−	−	−	−	−	−
	511	石製品	砥石	−	(長)20.1	(幅)4.0	(厚)3.0	−	−	−	−	−	−	−
	512	木製品	椀	−	13.6	7.6	6.0	−	−	−	−	−	−	腰にゆるい稜線が付く 畳付は欠損
	513	金属器	釘	−	(長)10.3	(短)1.7	−	−	−	−	−	−	−	−
	514	金属器	剃刀	−	(長)5.1	(短)1.2	−	−	−	−	−	−	−	−
	515	金属器	古銭	中の城下	−	−	−	−	−	−	−	−	−	熙寧元寶(1068年〜)
	516	金属器	古銭	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	寛永通寶(1636年〜)
	517	金属器	古銭	T−11	−	−	−	−	−	−	−	−	−	寛永通寶(1636年〜)
	518	金属器	古銭	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	寛永通寶(1636年〜)
	519	金属器	古銭	シオノ側	−	−	−	−	−	−	−	−	−	寛永通寶(1636年〜)

第47表　E地区遺物観察表(1)

挿図番号	掲載番号	種別	器種	出土区	法量(cm)			胎土の色調	釉薬	施釉部位	産地	時期	分類	備考
					口径	底径	器高							
116	520	青磁	椀	炉跡4	11.0	－	－	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	龍泉窯	－	－	－
	521	青磁	椀	炉跡7	16.0	－	－	にぶい黄橙色	青磁釉	残存部全面施釉	龍泉窯	－	上田D－Ⅰ？	－
	522	青磁	椀	炉跡7	－	－	－	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	龍泉窯	－	上田D？	－
	523	白磁	坏	炉跡7	－	3.8	－	灰白色	透明釉	畳付き～高台内底面無釉	－	16世紀後半～17世紀初頭	森田D	抉り高台 見込みに目跡あり
	524	土師器	皿	－	10.4	7.0	2.4	－	－	－	－	－	－	朱 底部糸切り
	525	土師器	皿	－	7.0	5.4	2.0	－	－	－	－	－	－	ナデ，底部糸切り スス付着
	526	土師器	皿	－	6.4	4.1	2.2	－	－	－	－	－	－	ナデ，底部糸切り
	527	土師器	皿	－	7.2	4.9	1.9	－	－	－	－	－	－	底部糸切り スス付着
	528	瓦質土器	擂鉢	炉跡1	30.6	－	－	浅黄色	－	－	－	－	－	－
	529	金属器	銀塊	T-6	(長)3.1	(短)1.6	(厚)0.8	－	－	－	－	－	－	－
117	530	青磁	椀	平場1	13.7	－	－	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	龍泉窯	－	上田B-Ⅳか？	－
	531	青磁	椀	平場2	－	－	－	灰色	青磁釉	残存部全面施釉	龍泉窯	－	上田B-Ⅳ'	－
	532	青磁	椀	平場1	14.2	－	－	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	龍泉窯	－	上田C-Ⅱ？	－
	533	青磁	椀	平場1	13.0	－	－	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	龍泉窯	－	上田D	－
	534	青磁	椀	平場2	12.0	－	－	にぶい黄橙色	青磁釉	残存部全面施釉	龍泉窯	－	上田D	－
	535	青磁	椀	平場2	－	5.8	－	灰白色	青磁釉	高台内底面輪状に釉剥ぎ	龍泉窯	－	上田B	内湾花 印花文
	536	青磁	椀	平場1	－	5.4	－	灰白色	青磁釉	高台内底面輪状に釉剥ぎ	龍泉窯	－	上田E？	内湾宇 見込みに雇氏の印刻あり
	537	青磁	椀	U-8	－	6.4	－	灰黄色	青磁釉	畳付き～高台内底面無釉	龍泉窯	－	－	－
	538	青磁	椀	平場2	－	6.4	－	灰白色	青磁釉	高台内底面輪状に釉剥ぎ	龍泉窯	－	－	内,外釉ハケ
	539	青磁	椀	平場2	－	4.4	－	浅黄橙色	青磁釉	畳付き～高台内底面無釉	龍泉窯	－	－	見込み円状に釉剥ぎ
	540	青磁	皿	平場2	12.0	－	－	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	龍泉窯	－	－	脚
	541	青磁	皿	Ⅰ-4	13.0	6.3	－	淡黄色	青磁釉	腰部～高台内底面無釉	龍泉窯	－	－	見込み輪状に釉剥ぎ 稜花皿
	542	青磁	皿	平場1	12.6	－	－	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	龍泉窯	－	太宰府Ⅳ類	－
	543	青磁	盤	平場1	24.1	－	－	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	龍泉窯	－	－	陵花器
	544	青磁	盤	U-7	－	13.6	－	灰白色	青磁釉	高台内底面釉剥ぎ	龍泉窯	－	－	－
	545	青磁	香炉	平場1	6.6	－	－	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	龍泉窯	－	－	－
	546	青白磁	合子	平場2	6.0	－	－	淡黄色	青白磁釉	口唇部釉はぎ	－	－	－	全面釉
	547	白磁	皿	平場1	11.8	6.6	2.7	灰白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	景徳鎮窯	－	森田E	－
	548	白磁	八角皿	平場2	7.0	3.0	2.6	淡黄色	透明釉	腰部～高台内底面無釉	－	16世紀後半～17世紀初頭	森田D	抉り高台 八角皿
	549	白磁	皿	平場2	－	3.6	－	淡黄色	透明釉	腰部～高台内底面無釉	－	16世紀後半～17世紀初頭	森田D	高台内底面に墨書 「吾」
118	550	青花	碗	－	16.2	5.6	5.5	灰白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	景徳鎮窯	－	小野C	－
	551	青花	碗	－	18.0	－	－	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	景徳鎮窯	－	小野C	－
	552	青花	碗	平場1	－	5.2	－	灰白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	景徳鎮窯	－	小野B	－
	553	青花	碗	－	－	4.4	－	－	－	－	景徳鎮窯	－	小野B	－
	554	青花	皿	平場1	12.6	8.0	3.0	灰白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	景徳鎮窯	－	小野B	－
	555	青花	瓶	平場2	－	6.0	－	－	－	－	景徳鎮窯	16世紀前葉～中葉	－	－
	556	緑釉陶器	壺	－	－	－	－	－	緑釉	－	－	－	－	－
	557	緑釉陶器	壺	－	－	－	－	－	緑釉	－	－	－	－	－
	558	緑釉陶器	壺	－	－	－	－	－	緑釉	－	－	－	－	－
119	559	土師器	坏	－	13.6	10.0	3.5	－	－	－	－	－	－	底部糸切り
	560	土師器	坏	T-6	11.7	7.0	3.4	－	－	－	－	－	－	底部糸切り
	561	土師器	坏	U-7	10.4	5.4	3.3	－	－	－	－	－	－	底部糸切り
	562	土師器	坏	U-7	10.7	6.2	3.6	－	－	－	－	－	－	底部糸切り
	563	土師器	坏	U-7	11.4	6.8	3.3	－	－	－	－	－	－	底部糸切り
	564	土師器	皿	T-7	8.3	5.2	2.5	－	－	－	－	－	－	底部糸切り
	565	土師器	坏	－	7.6	6.0	3.0	－	－	－	－	－	－	指押さえ，底部糸切り スス付着
	566	土師器	皿	－	10.7	7.0	1.9	－	－	－	－	－	－	底部糸切り 内外面スス付着
	567	土師器	皿	V-8	8.8	6.0	2.2	－	－	－	－	－	－	底部糸切り スス付着
	568	土師器	皿	V-8	9.2	6.6	2.5	－	－	－	－	－	－	底部糸切り
	569	土師器	皿	－	7.4	6.6	1.4	－	－	－	－	－	－	底部糸切り
	570	土師器	皿	平場2	7.2	2.8	2.1	－	－	－	－	－	－	底部糸切り スス付着
	571	土師器	皿	平場1	6.5	5.0	1.7	－	－	－	－	－	－	底部糸切り
	572	土師器	皿	－	6.6	4.4	1.7	－	－	－	－	－	－	底部糸切り
	573	土師器	皿	－	7.7	5.6	2.2	－	－	－	－	－	－	底部糸切り 内外面スス付着
	574	土師器	皿	－	7.5	5.6	1.7	－	－	－	－	－	－	底部糸切り 台底部墨書有り
	575	土師器	皿	U-7	6.2	4.2	2.2	－	－	－	－	－	－	底部糸切り
	576	土師器	皿	－	7.4	5.8	1.8	－	－	－	－	－	－	底部糸切り
	577	土師器	皿	U-7	6.8	4.8	2.4	－	－	－	－	－	－	底部糸切り
	578	土師器	皿	U-7	6.6	4.6	2.3	－	－	－	－	－	－	底部糸切り
	579	土師器	皿	U-7	6.9	4.3	2.3	－	－	－	－	－	－	底部糸切り
	580	土師器	皿	U-7	6.8	4.6	2.5	－	－	－	－	－	－	底部糸切り

第48表　E地区遺物観察表(2)

挿図番号	掲載番号	種別	器種	出土区	法量(cm)			胎土の色調	釉薬	施釉部位	産地	時期	分類	備考
					口径	底径	器高							
119	581	土師器	皿	−	7.0	4.4	2.4	−	−	−	−	−	−	底部糸切り
	582	土師器	皿	U−7	6.7	4.6	2.2	−	−	−	−	−	−	−
120	583	陶器	碗	V−8 258	12.4	4.6	6.4	−	−	腰部～高台内底面無釉	中国	14世紀～15世紀代	−	露胎
	584	陶器	灯明皿	平場2	−	4.4	−	−	−	−	薩摩焼 龍門司系	−	−	見込みに胎土目有り
	585	陶器	壺	平場2	−	−	−	浅黄色	透明釉か？	外面無釉か？	−	−	−	釉(炭緑色)
	586	陶器	壺	T−6 336	−	−	−	にぶい橙色	−	−	中国南部	−	−	−
	587	陶器	灯明具	平場2	−	3.8	−	灰褐色	鉄釉	腰部～底部無釉	薩摩焼 龍門司系	−	−	秉燭　たんころ形
	588	陶器	仏飯器	平場2	8.5	4.0	5.1	にぶい赤褐色	鉄釉	腰部～底部無釉	薩摩焼 龍門司系	−	−	見込み蛇の目釉剥ぎ
	589	陶器	擂鉢	平場1	24.6	13.6	10.4	−	−	−	備前	15世紀代	−	(外)指痕
	590	瓦質土器	擂鉢	平場2	32.6	12.0	14.2	浅黄橙色	−	−	−	−	−	−
	591	瓦質土器	風炉	平場2	−	−	−	灰黄色	−	−	−	−	−	−
	592	土師質土器	焙烙	平場2	−	−	−	橙色	−	−	−	−	−	器面に炭付着 穿孔二か所
	593	土製	土錘	一括	(長)4.3	(径)1.1	−	−	−	−	−	−	−	−
	594	土製	土錘	一括	(長)4.8	(径)1.2	−	−	−	−	−	−	−	−
	595	土製	土錘	平場1	(長)5.9	(径)1.5	−	−	−	−	−	−	−	−
	596	土製	土錘	一括	(長)4.4	(径)1.2	−	−	−	−	−	−	−	−
	597	土製	土錘	一括	(長)4.2	(径)1.2	−	−	−	−	−	−	−	−
	598	土製	土錘	一括	(長)5.2	(径)1.0	−	−	−	−	−	−	−	−
	599	土製	土錘	一括	(長)3.5	(径)1.2	−	−	−	−	−	−	−	−
	600	土製	土錘	一括	(長)4.3	(径)1.1	−	−	−	−	−	−	−	−
	601	土製	土錘	一括	(長)3.4	(径)1.0	−	−	−	−	−	−	−	−
	602	土製	土錘	一括	(長)3.3	(径)1.8	−	−	−	−	−	−	−	−
121	603	金属器	鉄鏃	平場2	6.9+	3.7	0.6	−	−	−	−	−	−	−
	604	金属器	鉄鏃	一括	9.2+	1.9	0.4	−	−	−	−	−	−	−
	605	金属器	鉄鏃	一括	6.5+	1.9	0.7	−	−	−	−	−	−	−
	606	金属器	鉄鏃	−	4.7+	1.9	3.5	−	−	−	−	−	−	−
	607	金属器	鉄鏃	一括	3.7+	0.8	0.1	−	−	−	−	−	−	−
	608	金属器	簪	平場	11.0	1.1	0.1	−	−	−	−	−	−	−
	609	金属器	簪	平場1	17.2	0.9	0.3	−	−	−	−	−	−	−
	610	金属器	煙管	一括	6.5	1.0	−	−	−	−	−	−	−	−
	611	金属器	煙管	一括	4.5	1.0	−	−	−	−	−	−	−	−
	612	金属器	簪	一括	3.3+	0.8	0.2	−	−	−	−	−	−	−
	613	金属器	古銭	一括	−	−	−	−	−	−	−	−	−	洪武通寶
	614	石器	火打石	−	(長)2.6	(短)1.6	(厚)1.6	(重)7.0	−	−	−	−	−	石材:チャート
	615	石器	火打石	−	(長)4.5	(短)3.5	(厚)1.9	(重)34.4	−	−	−	−	−	石材:チャート
	616	石器	滑石鍋	−	(長)7.8	(短)3.2	(厚)1.3	(重)43.4	−	−	−	−	−	石材:滑石
	617	石器	滑石鍋	−	(長)7.9	(短)3.2	(厚)1.5	(重)56.1	−	−	−	−	−	石材:滑石

第49表　F地区遺物観察表

挿図番号	掲載番号	種別	器種	出土区	法量(cm)			胎土の色調	釉薬	釉薬の色調	施釉部位	産地	時期	分類	備考
					口径	底径	器高								
124	618	青磁	椀	T−18,19	15.2	−	−	灰色	青磁釉	黒緑色	残存部全面施釉	龍泉窯	−	上田D−Ⅰ？	−

挿図番号	掲載番号	種別	器種	出土区	法量(cm)			胎土の色調	釉薬	釉薬の色調	施釉部位	産地	備考
					口径	底径	器高						
124	619	土師器	灯明皿	T−18,19	8.2	6.2	2.4	−	−	−	−	−	底部糸切り，スス付着，芯有り

挿図番号	掲載番号	種別	器種	出土区	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	−	−	−	−	備考
124	620	石製品	砥石	−	4.7	9.4	2.5	170.0	−	−	−	−	天草陶石

第50表　G地区遺物観察表

挿図番号	掲載番号	種別	分類	器種	出土区	法量(cm)			胎土の色調	釉薬	釉薬の色調	施釉部位	産地	時期	分類	備考
						口径	底径	器高								
130	621	青磁	−	皿	−	12.0	−	−	灰白色	青磁釉	灰オリーブ	残存部全面施釉	龍泉窯	−	−	−

挿図番号	掲載番号	種別	分類	器種	出土区	法量(cm)			胎土の色調	産地	時期	−	−	−	−	備考
						口径	底径	器高								
130	622	坩堝	−	皿	表	9.8	−	1.8	−	−	−	−	−	−	−	
	623	石製品	滑石	垂飾品	−	(長)1.8	(幅)1.3	(厚)1.1	(重)4.4g	−	−	−	−	−	−	石材:滑石
	624	金属器	−	鎌	D−10～14	(長)7.3	−	−	−	−	−	−	−	−	−	鉄製
	625	金属器	−	煙管	−	(長)4.3	(幅)1.1	−	−	−	−	−	−	−	−	青銅製
	626	金属器	−	古銭	D−10～14	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	洪武通宝(1368年～)
	627	金属器	−	古銭	D−10～14	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	洪武通宝(1368年～)
	628	金属器	−	古銭	曲輪Ⅳ	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	洪武通宝(1368年～)

第51表　H地区遺物観察表

挿図番号	掲載番号	種別	器種	出土区	法量(cm)			胎土の色調	釉薬	釉薬の色調	施釉部位	産地	時期	分類	備考
					口径	底径	器高								
134	629	青磁	椀	空堀Ⅰ-1	15.8	－	－	灰白色	青磁釉	－	残存部全面施釉	龍泉窯	－	上田D	－
	630	青磁	椀	空堀Ⅰ-2	－	7.0	－	灰白色	青磁釉	－	高台内底面輪状に釉剥ぎ	龍泉窯	－	－	無釉
	631	青磁	椀	空堀Ⅰ-2	－	6.0	－	灰白色	青磁釉	灰白	高台内底面輪状に釉剥ぎ	龍泉窯	－	－	見込みに砂目，釉ハギ 見込み輪状に釉剥ぎ
	632	白磁	皿	空堀Ⅰ-1	14.2	7.7	3.3	灰白色	透明釉	－	畳付きは釉剥ぎ	景徳鎮窯	－	森田E	高台内底面に呉須による角印
	633	白磁	皿	空堀Ⅰ-2	12.0	6.0	3.3	灰白色	透明釉	－	畳付きは釉剥ぎ	景徳鎮窯	－	森田E	畳付無釉
	634	白磁	壺	空堀Ⅰ-2	9.2	－	－	灰白色	透明釉	－	残存部全面施釉	－	－	－	肩部に模様か？
	635	青花	碗	空堀Ⅰ-2	15.0	－	－	灰白色	透明釉	－	残存部全面施釉	景徳鎮窯	－	小野B	－
	636	青花	碗	空堀Ⅰ-2	－	4.8	－	浅黄橙色	透明釉	－	畳付きは釉剥ぎ	景徳鎮窯	－	小野E	底に「正」の文字あり 見込み饅頭心
	637	青花	皿	空堀Ⅰ-2	－	－	－	灰白色	透明釉	－	残存部全面施釉	景徳鎮窯	－	小野C	芭蕉文？
	638	青花	皿	空堀Ⅰ-1	－	7.6	－	灰白色	透明釉	－	畳付きは釉剥ぎ	景徳鎮窯	－	小野B	畳付無釉
	639	青花	皿	空堀Ⅰ-2	－	－	－	灰白色	透明釉	－	残存部全面施釉	漳州窯	－	小野F	稜花，波状口縁
	640	青花	皿	空堀Ⅰ-2	－	－	－	灰白色	透明釉	－	残存部全面施釉	漳州窯	－	小野F	稜花
	641	青花	皿	空堀Ⅰ-1	10.0	4.8	2.7	灰白色	透明釉	－	畳付き～高台内底面無釉	漳州窯	－	小野D	襷文？内底 見込みに輪状の釉剥ぎ
	642	青花	皿	空堀Ⅰ-1	11.2	4.2	3.2	浅黄橙色	透明釉	－	腰部～高台内底面無釉	漳州窯	16世紀後半	－	碁笥底
	643	青花	皿	空堀Ⅰ-1	－	2.3	－	浅黄橙色	透明釉	－	腰部～高台内底面無釉	景徳鎮窯	－	小野C	碁笥底，底釉なし
	644	緑釉陶器	合子皿	空堀Ⅰ-2	7.0	－	－	灰白色	緑釉	－	残存部全面施釉	－	16世紀後半	－	緑釉
	645	土師器	坏	空堀Ⅰ-1	12.6	9.4	3.2	－	－	－	－	－	－	－	－
	646	土師器	皿	空堀Ⅰ	13.0	8.0	2.2	－	－	－	－	－	－	－	調整:ナデ，底部糸切り
	647	土師器	坏	空堀Ⅰ-2	－	7.6	－	－	－	－	－	－	－	－	底部糸切り
	648	土師器	坏	空堀Ⅰ-1	－	8.8	－	－	－	－	－	－	－	－	調整:ナデ，ススト付着 底部糸切り
	649	陶器	蓋	空堀Ⅰ-1	4.3	(庇)･6.6	－	にぶい赤褐色	鉄釉	－	上面施釉	薩摩焼苗代川系	18世紀後半以降	－	－
	650	瓦質土器	風炉	空堀Ⅰ-1	－	－	－	橙色	－	－	－	－	－	－	－
	651	瓦質土器	擂鉢	空堀Ⅰ-1	－	－	－	浅黄色	－	－	－	－	－	－	全体がひずみ，(内)ハケ目後ナデ (外)ナデ
135	652	木器	椀	空堀Ⅰ-2	15.0	8.0	6.6	－	－	－	－	－	－	－	(外)黒漆，(内)赤漆(変色)
	653	木器	椀	空堀Ⅰ-2	13.0	7.0	5.1	－	－	－	－	－	－	－	(外)黒漆，(内)赤漆(変色)
	654	木器	椀	空堀Ⅰ-2	15.9	－	－	－	－	－	－	－	－	－	草花文，(外)黒漆 (内)赤漆(変色)
	655	木器	椀	空堀Ⅰ-1	15.0	－	－	－	－	－	－	－	－	－	(外)黒漆，(内)赤漆(変色)
	656	木器	下駄	空堀Ⅰ-2	(長)19.8	(幅)10.3	(厚)2.6	－	－	－	－	－	－	－	－
	657	木器	木筒	溝	(長)12.0	(幅)4.4	(厚)0.2	－	－	－	－	－	－	－	「南無〇〇」
	658	木器	笊	溝	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	脆弱
	659	石製品	垂飾品	溝	(長)1.9	(幅)1.7	(厚)1.13	重4.71g	－	－	－	－	－	－	滑石製
	660	白磁	坏	溝	－	4.4	－	灰白色	透明釉	－	腰部～高台内底面無釉	－	－	森田D	高台内底面に墨書
	661	染付	蓋	溝	9.6	－	2.6	灰白色	透明釉	－	総釉	肥前磁器	17世紀後半	－	網目文
	662	土師器	皿	溝	－	4.6	－	－	－	－	－	－	－	－	底部糸切り
	663	土師器	皿	溝	－	5.8	－	－	－	－	－	－	－	－	底部糸切り
	664	土師器	焙烙	溝	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	底部糸切り
	665	坩堝	埦形	溝	9.3	－	3.7	－	－	－	－	－	－	－	－
146	666	青磁	椀	－	14.6	－	－	浅黄色	青磁釉	灰オリーブ	残存部全面施釉	龍泉窯	－	上田B-Ⅳ？	うすい蓮弁
	667	青磁	椀	H-9	14.4	－	－	浅黄色	青磁釉	灰オリーブ	残存部全面施釉	龍泉窯	－	－	内輪
	668	青磁	椀	G-12	－	5.2	－	灰白色	青磁釉	灰オリーブ	畳付き～高台内底面無釉	龍泉窯	－	－	印刷見込み，露胎
	669	青磁	皿	－	10.4	－	－	灰白色	青磁釉	オリーブ	残存部全面施釉	龍泉窯	－	－	稜花
	670	青磁	皿	G-9	11.8	5.8	3.0	灰白色	青磁釉	暗緑	残存部全面施釉	龍泉窯	－	－	稜花
	671	白磁	椀	－	－	5.8	－	灰色	灰釉	－	畳付き釉剥ぎ	李朝	16世紀	－	砂目
	672	白磁	皿	－	9.2	－	－	灰白色	透明釉	－	残存部全面施釉	景徳鎮窯	－	－	うすく緑をおびた灰白
	673	青花	碗	－	18.2	7.0	7.5	浅黄橙色	透明釉	－	腰部～高台内底面無釉	景徳鎮窯	16世紀後半～ 17世紀初頭	－	見込み円状に釉剥ぎ
	674	青花	皿	－	9.6	2.1	2.7	灰白色	透明釉	青灰	畳付き～高台内底面無釉	景徳鎮窯	－	小野B	墨付釉なし
	675	青花	蓋	－	9.0	(庇)･10.5	－	浅黄橙色	白化粧土に透明釉	－	上面施釉	景徳鎮窯	－	－	呉須による「正」の文字
	676	土師器	坏	J-12	12.1	7.6	3.6	－	－	－	－	－	－	－	ススト付着，底部糸切り
	677	土師器	坏	G-12	12.6	8.0	3.7	－	－	－	－	－	－	－	底部糸切り
	678	土製	土錘	－	(長)4.7	(径)1.2	－	－	－	－	－	－	－	－	漆は剥離したもの，高台接合部なし
	679	鉄滓	流動滓	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	流動滓
147	680	木器	椀	H-13	16.0	9.0	6.1	－	－	－	－	－	－	－	呈す，稜花椀，(外)黒漆 (内)赤漆(変色)
	681	木器	椀	－	14.0	8.0	6.5	－	－	－	－	－	－	－	－
	682	木器	不明	－	(長)13.6	(幅)1.9	(厚)0.8	－	－	－	－	－	－	－	－
	683	木器	桶	－	(長)14.2	(短)4.5	－	－	－	－	－	－	－	－	－
	684	瓦質	軒丸瓦	H-12	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	近世瓦

第52表　I地区遺物観察表

挿図番号	掲載番号	種別	器種	出土区	法量(cm)			胎土の色調	釉薬	釉薬の色調	施釉部位	産地	時期	分類	備考
					口径	底径	器高								
151	685	青磁	椀	溝2	－	－	－	灰色	青磁釉	灰オリーブ	残存部全面施釉	龍泉窯	－	上田D	－
	686	青磁	椀	溝2	－	5.6	－	灰色	青磁釉	オリーブ	畳付き～高台内底面無釉	龍泉窯	－	－	見込み無釉 見込みに印花文
	687	青磁	椀	溝2	－	4.6	－	にぶい黄橙色	青磁釉	オリーブ	畳付きは釉剥ぎ	龍泉窯	－	－	高台内底面輪状に釉剥ぎ 見込みに印花文
	688	青磁	椀	溝2	－	4.4	－	灰白色	青磁釉	明緑色	畳付き～高台内底面無釉	龍泉窯	－	上田B	見込みに円状の釉剥ぎ
	689	青磁	椀	溝2	－	5.6	－	灰白色	青磁釉	明オリーブ	畳付き～高台内底面無釉	龍泉窯	－	－	見込みに円状の釉剥ぎ 見込みに印花文
	690	青磁	皿	溝2	12.0	5.6	3.5	灰白色	青磁釉	灰オリーブ	高台内底面無釉	龍泉窯	－	－	稜花皿
	691	青磁	盤	溝2	－	－	－	暗灰黄色	青磁釉	オリーブ	残存部全面施釉	龍泉窯	－	－	－
	692	青磁	盤	溝2	－	－	－	灰白色	青磁釉	明オリーブ	残存部全面施釉	龍泉窯	－	－	－
	693	白磁	坏	溝2	11.4	5.8	2.6	灰白色	透明釉	－	畳付は釉剥ぎ	景徳鎮窯	－	森田E	－
	694	青花	碗	溝2	13.4	－	－	灰白色	透明釉	－	残存部全面施釉	漳州窯	16世紀後半～17世紀初頭	－	－
	695	青花	碗	溝2	13.0	－	－	灰白色	透明釉	－	残存部全面施釉	景徳鎮窯	－	小野C	－
	696	青花	碗	溝2	－	4.2	－	灰白色	透明釉	－	腰部～高台内底面無釉	漳州窯	－	－	饅頭心
	697	青花	碗	溝2	－	5.1	－	灰白色	透明釉	－	畳付きは釉剥ぎ	景徳鎮窯	－	小野C	－
	698	青花	皿	溝2	13.2	－	－	灰白色	透明釉	－	残存部全面施釉	景徳鎮窯	－	小野B	－
	699	青花	皿	溝2	13.4	－	－	灰白色	透明釉	－	残存部全面施釉	景徳鎮窯	－	小野B	－
	700	青花	皿	溝2	12.0	－	－	灰白色	透明釉	－	残存部全面施釉	景徳鎮窯	－	小野B	－
	701	青花	皿	溝2	－	7.2	－	灰白色	透明釉	－	畳付は釉剥ぎ	景徳鎮窯	－	小野B	－
	702	青花	皿	溝2	9.4	3.6	2.6	淡黄色	透明釉	－	腰部～高台内底面無釉	漳州窯	16世紀後半	－	碁笥底
	703	青花	盤	溝2	20.6	－	－	灰白色	透明釉	－	残存部全面施釉	漳州窯	16世紀後半～17世紀初頭	－	－
	704	色絵	瓶	溝2	－	－	－	－	－	－	－	景徳鎮窯	16世紀後半～17世紀初頭	－	－
152	705	土師器	皿	溝3	9.8	6.0	2.1	－	－	－	－	－	－	－	底部糸切り
	706	土師器	坏	溝3	―	8.0	―	－	－	－	－	－	－	－	底部糸切り
	707	土師器	皿	溝3	5.8	4.0	1.6	－	－	－	－	－	－	－	底部糸切り
	708	瓦質土器	羽釜	溝3	－	－	－	橙色	－	－	－	－	－	－	スス付着
	709	瓦質土器	擂鉢	溝3	38.5	－	－	浅黄橙色	－	－	－	－	－	－	－
	710	陶器	徳利	溝3	－	9.6	－	灰褐色	褐釉	－	外底面,内面無釉	中国か？	－	－	－
	711	青磁	椀	P25	－	－	－	灰白色	青磁釉	明オリーブ	残存部全面施釉	龍泉窯	－	上田B	－
	712	青花	瓶	P26	－	－	－	灰白色	透明釉	－	残存部全面施釉	景徳鎮窯	16世紀後半～17世紀初頭	－	－
	713	金属器	古銭	ピット	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	寛永通宝(1636年～)
	714	金属器	古銭	ピット	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	朝鮮通宝(1423年～)
153	715	瓦質土器	火鉢	炉跡1	40.0	－	－	にぶい褐色	－	－	－	－	－	－	－
155	716	青磁	椀	西側	－	－	－	灰白色	青磁釉	－	残存部全面施釉	龍泉窯	－	上田B-Ⅳ？	蓮弁文
	717	青磁	椀	腰曲輪2	15.0	－	－	灰白色	青磁釉	オリーブ	残存部全面施釉	龍泉窯	－	上田D？	－
	718	青磁	椀	I-4	－	6.0	－	灰白色	青磁釉	オリーブ	見込み円状に釉剥ぎ,高台内底面無釉	龍泉窯	－	－	見込み円状に釉剥ぎ 底部無釉
	719	青磁	椀	腰曲輪3	－	6.8	－	灰色	青磁釉	オリーブ	高台内底面無釉	龍泉窯	－	－	見込みに印花文
	720	青磁	皿	腰曲輪2	11.0	4.6	2.6	灰白色	青磁釉	明オリーブ	高台内底面無釉	龍泉窯	－	－	稜花
	721	白磁	椀	－	－	6.6	－	浅黄橙色	明褐色の釉	－	腰部～高台内底面無釉	－	－	－	見込み輪状に釉剥ぎ,露胎
	722	白磁	小坏	－	－	2.6	－	灰白色	透明釉	青灰	畳付は釉剥ぎ	－	－	－	釉剥ぎ
	723	青花	碗	－	－	4.4	－	灰白色	透明釉	－	畳付は釉剥ぎ	景徳鎮窯	－	小野E	底部文字在，染付け土器
	724	青花	植木鉢	－	－	5.8	－	灰白色	透明釉	青オリーブ	畳付は釉剥ぎ	景徳鎮窯	－	－	釉なし，染付け(灰白)
	725	青花	皿	腰曲輪	－	3.8	－	にぶい橙色	透明釉	茶褐	腰部～畳付は無釉	漳州窯	－	－	茶褐(赤褐)碁笥底
	726	青花	皿	西側	－	2.8	－	灰白色	透明釉	青白	畳付き～高台内底面無釉	漳州窯	－	－	砂？付着，碁笥底
	727	土師器	坏	腰曲輪3	10.4	8.2	3.4	－	－	－	－	－	－	－	底部糸切り
	728	土師器	灯明皿	I-4	7.8	5.8	1.8	－	－	－	－	－	－	－	底部糸切り スス付着
	729	瓦質土器	擂鉢	腰曲輪3	33.4	15.6	15.0	淡黄色	－	－	－	－	－	－	注ぎ口あり
	730	瓦質土器	擂鉢	腰曲輪3	35.2	13.2	－	浅黄橙色	－	－	－	－	－	－	篦切り
156	731	瓦質土器	火鉢	L-9	43.6	32.4	－	にぶい黄橙色	－	－	－	－	15世紀代	－	三脚欠損
	732	陶器	壺	腰曲輪3	16.0	－	－	淡黄色	灰釉	－	口唇部釉剥ぎか？	中国か？	－	－	－
	733	瓦質土器	壺	腰曲輪3	17.8	－	－	にぶい橙色	－	－	－	－	－	－	－
	734	土師質土器	焙烙	腰曲輪3	25.0	－	－	にぶい黄橙色	－	－	－	－	－	－	外面スス付着
	735	土製	土錘	腰曲輪3	(長)5.2	(径)1.2	－	－	－	－	－	－	－	－	器面に灰付着
	736	土製	土錘	腰曲輪3	(長)3.1	(径)1.9	－	－	－	－	－	－	－	－	－
	737	土製	土錘	腰曲輪2	(長)4.3	(径)1.8	－	－	－	－	－	－	－	－	－
	738	金属器	不明	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	青銅製品？
	739	金属器	火打金	腰曲輪3				－	－	－	－	－	－	－	火打金
	740	金属器	古銭	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	洪武通宝(1368年～)
	741	金属器	古銭	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	洪武通宝(1368年～)，加治木銭？
	742	金属器	古銭	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	洪武通宝
	743	金属器	古銭	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	寛永通宝(1636年～)

第53表　J地区遺物観察表

21	掲載番号	種別	器種	出土区	法量(cm)			胎土の色調	釉薬	釉薬の色調	施釉部位	産地	時期	分類	備考
					口径	底径	器高								
159	744	青磁	椀	R-5空堀Ⅱ	－	－	－	灰白色	青磁釉	－	残存部全面施釉	龍泉窯	－	上田Bか？	－
	745	青磁	椀	R-5空堀Ⅱ	－	5.0	－	灰色	青磁釉	暗オリーブ	高台内底面無釉	龍泉窯	－	－	見込みに印花文
	746	青磁	椀	R-5空堀Ⅱ	－	7.0	－	灰色	青磁釉	オリーブ・	見込み, 高台内底面輪状に釉剥ぎ	龍泉窯	－	－	見込み輪状に釉剥ぎ 内面陽刻文
	747	青磁	椀	R-5空堀Ⅱ	－	－	－	灰白色	青磁釉	明オリーブ・	残存部全面施釉	龍泉窯	－	－	－
	748	石製品	垂飾品	空堀Ⅱ	(長)2.8	(幅)3.6	(厚)1.2	重21.7g	－	－	－	－	－	－	滑石製
160	749	木器	櫂	空堀Ⅱ	(長)84.4	(幅)15	(厚)3.2	－	－	－	－	－	－	－	(素材)スギ
	750	青磁	椀	R-5溝	12.4	－	－	灰色	青磁釉	暗オリーブ・	残存部全面施釉	龍泉窯	－	上田D-Ⅰ？	－
	751	青磁	椀	R-5溝	15.0	－	－	灰白色	青磁釉	暗オリーブ・	残存部全面施釉	龍泉窯	－	上田D？	－
	752	青磁	椀	R-5溝	14.0	－	－	灰色	青磁釉	オリーブ・	残存部全面施釉	龍泉窯	－	上田C-Ⅱ？	－
	753	青磁	椀	R-5溝	－	7.0	－	灰色	青磁釉	灰オリーブ・	高台内底面輪状に釉剥ぎ	龍泉窯	－	－	高台,内面露胎
	754	白磁	坏	R-5溝	－	5.0	－	灰白色	透明釉	－	腰部～高台内底面無釉		16世紀後半～ 17世紀初頭	森田D	ヘラ切り 抉り高台
	755	陶器	瓶か 水注か？	R-6溝	－	10.8	－	にぶい 黄色	－	－	底部無釉	中国南部	－	－	－
	756	瓦質土器	擂鉢	R-5溝	20.0	－	－	灰白色	－	－	－		－	－	－
	757	陶器	壺	R-5溝	－	－	－	灰白色	－	－	－	備前	15世紀代	－	－
163	758	青磁	皿	P-6	14.4	6.8	4.2	灰白色	青磁釉	暗緑	高台内底面無釉？	龍泉窯	－	－	－
	759	土師器	坏	石列マワリ	12.6	7.4	3.8	－	－	－	－	－	－	－	底部糸切り スス付着
	760	土師器	坏	R-5空堀Ⅱ	－	7.8	－	－	－	－	－	－	－	－	底部糸切り
	761	木器	ヘラ	－	(長)29.5	(幅)6.8	(厚)0.6	－	－	－	－	－	－	－	柄幅3.0cm
	762	金属器	?	O-14	(長)29.9	(幅)0.7	－	－	－	－	－	－	－	－	鉄製，棒状，一端に輪

第54表　K地区遺物観察表

挿図番号	掲載番号	種別	器種	出土区	法量(cm)			時期	備考
					長辺	短辺	器高		
169	763	石	石屑	石切場1	40	30	－	18～20世紀前半	凝灰岩，矢の痕跡有り
	764	金属器	ノミ	石切場1	17.3	2.0	－	－	－

第55表　L地区遺物観察表

挿図番号	掲載番号	種別	器種	出土区	法量(cm)			胎土の色調	釉薬	釉薬の色調	施釉部位	産地	時期	分類	備考
					口径	底径	器高								
171	765	青磁	椀	－	15.0	－	－	灰白色	青磁釉	灰オリーブ	残存部全面施釉	龍泉窯	－	上田D-Ⅰ？	－
	766	青磁	椀	－	－	5.4	－	灰白色	青磁釉	灰オリーブ	腰部～高台内底面無釉	龍泉窯	－	－	露胎
	767	土師器	皿	－	7.2	5.6	2.0	－	－	－	－	－	－	－	底部糸切り
	768	金属器	古銭	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	寛永通宝(1636年～)

第56表　M地区遺物観察表

挿図番号	掲載番号	種別	器種	出土区	法量(cm)			胎土の色調	釉薬	釉薬の色調	施釉部位	産地	備考
					口径	底径	器高						
177	769	瓦質土器	火鉢	竪穴2内	49.0	(脚)4.8	16.1	−	−	−	−	−	−
179	770	坩堝	椀形	炉跡	7.8	−	2.1	−	−	−	−	−	溶塊
	771	坩堝	椀形	炉跡	9.4	−	3.0	−	−	−	−	−	溶塊
	772	坩堝	椀形	炉跡	9.8	−	2.5	−	−	−	−	−	両方に浅い注口があり，溶塊
	773	坩堝	椀形	炉跡	7.2	−	2.4	−	−	−	−	−	浅い注口
	774	土製	羽口	炉跡	−	−	−	−	−	−	−	−	−
	775	金属器	？	炉跡	(長)3.5	(幅)0.8	−	−	−	−	−	−	銅製品
	776	金属器	？	炉跡	(長)2.5	(幅)0.3	−	−	−	−	−	−	銅製品
	777	坩堝	椀形	−	11.6	−	4.2	−	−	−	−	−	−
	778	坩堝	椀形	−	10.5	−	3.8	−	−	−	−	−	溶塊
	779	坩堝	椀形	−	8.0	−	2.8	−	−	−	−	−	浅い注口溶塊なし
	780	坩堝	椀形	−	8.2	−	2.5	−	−	−	−	−	浅い注口銅溶塊
	781	坩堝	椀形	g,h−11,12	6.2	−	2.1	−	−	−	−	−	浅い注口
	782	坩堝	椀形	g,h−11,12	6.8	−	2.4	−	−	−	−	−	青銅片が付着
	783	坩堝	椀形	g,h−11,12	8.8	−	−	−	−	−	−	−	注ぎ口あり
	784	坩堝	椀形	g,h−11,12	8.0	−	2.7	−	−	−	−	−	−
	785	坩堝	椀形	−	7.8	−	−	−	−	−	−	−	−
	786	坩堝	椀形	−	8.2	−	−	−	−	−	−	−	注ぎ口あり
	787	坩堝	椀形	−	9.4	−	−	−	−	−	−	−	注ぎ口あり
	788	坩堝	椀形	−	−	−	−	−	−	−	−	−	銅溶塊
	789	坩堝	筒形	g,h−11,12	9.4	8.5	4.5	−	−	−	−	−	銅溶塊
180	790	金属器	鎌	−	−	−	−	−	−	−	−	−	鉄製

挿図番号	掲載番号	種別	器種	出土区	法量(cm)			胎土の色調	釉薬	釉薬の色調	施釉部位	産地	時期	分類	備考
					口径	底径	器高								
180	791	青花	碗	M−13	−	5.0	−	灰白色	透明釉	−	畳付高台内底無釉	景徳鎮窯	15世紀後半～16世紀中	−	芭蕉文
181	792	青磁	椀	A,B−12,13,14	−		−	灰白色	青磁釉	オリーブ	残存部全面施釉	龍泉窯	−	−	−
	793	青磁	椀	−	−	−	−	浅黄色	青磁釉	−	残存部全面施釉	龍泉窯	−	上田B−Ⅰ？	しのぎ蓮弁
	794	青磁	椀	d−14	10.2	−	−	灰黄色	青磁釉	−	残存部全面施釉	龍泉窯	−	上田B−Ⅳ？	浅い蓮弁
	795	青磁	椀	−	15.0	−	−	浅黄色	青磁釉	明オリーブ	残存部全面施釉	龍泉窯	−	上田D？	端反
	796	青磁	皿	A,a−11,12	−	6.0	−	灰白色	青磁釉	暗緑色	見込み，高台内底面輪状に釉剥ぎ	龍泉窯	−	上田B？	浅い蓮弁
	797	青磁	盤	A,a−11,12	26.2	−	−	灰黄色	青磁釉	−	残存部全面施釉	龍泉窯	−	−	−
	798	青磁	蓋	d−13	−	7.4	−	淡黄色	青磁釉	オリーブ	上面施釉	龍泉窯	−	−	−
	799	青磁	香炉	−	7.8	−	−	灰白色	青磁釉	明オリーブ	内面中位以下無釉	龍泉窯	−	−	内弯
	800	白磁	皿	A,a−11,12	−	4.2	−	灰白色	透明釉	−	畳付き～高台内底面無釉	−	−	−	−
	801	白磁	皿	c−14,15	9.6	4.8	2.5	淡黄色	透明釉	−	腰部～高台内底面無釉	−	−	森田D	抉り高台
	802	白磁	蓋	c−14,15	12.4	−	−	淡黄色	透明釉	−	上面施釉	−	−	−	−
	803	青花	皿	d−14	14.0	7.2	2.8	灰白色	透明釉	青白	畳付は釉剥ぎ	景徳鎮窯	−	小野B	−
	804	青花	皿	d−14	−	5.2	−	灰白色	透明釉	青灰	畳付は釉剥ぎ	漳州窯	−	−	−
	805	青釉陶器	皿	A,a−11,12	−	−	−	灰白色	青釉	青白	口唇部釉剥ぎ	−	16世紀後半	−	−
	806	土師器	皿	A,a−11･12	6.2	5.0	1.2	−	−	芯有り ススト付着	−	−	−	−	−
	807	土製	羽口	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
	808	土製	土錘	d−13	(長)4.1	(径)1.3	−	−	−	−	−	−	−	−	−
	809	土製	土錘	−	(長)4.9	(径)1.5	−	−	−	−	−	−	−	−	−
	810	石製品	石鍋	−	(高)5.1	(幅)10.1	(厚)2.2	(重)147.7g	−	−	−	−	−	−	滑石製
	811	金属器	古銭	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−

第４章　自然科学分析

第１節　概要

科学分析は放射性炭素年代測定と樹種同定，成分分析と地下レーダー探査の４種類を実施した。放射性炭素年代測定は竈内出土の炭化物や漆器，下駄，柱痕等の水浸木製品を対象に分析し，樹種同定は漆器や下駄，柱痕等を対象に分析した。この２種類の分析は外部民間業者へ調査・報告を委託した。年代測定の結果，多くは15～16世紀の木製品及び炭化物という結果が出ており，出土した青白磁の編年と概ね一致する。樹種は漆器椀がクスノキで柱痕跡にはスギが多く使われている。成分分析は坩堝に付着した金属の成分について分析した。緑青が付着しており，分析の結果も銅，錫，鉛が検出された。この分析は当センター所有の蛍光X線分析装置を使用した。地下レーダー探査は琉球大学考古学研究室と共同で調査した。塩の城下の掘など，遺構の位置や深さがほぼ一致する結果となった。注目する点は未調査区である中の城西側土塁と松社城東側土塁の間の谷部である。ここにも掘か溝状遺構らしきレーダー像が現れた。
以下にその結果を報告する。

第２節　放射性炭素年代測定

１　測定対象試料

測定対象試料は，虎居城跡出土木製品，柱，炭化物で（No.1：IAAA-91737，No.2：IAAA-92380，No8～12：IAAA-100086～100090，No13～28：IAAA-101650～101665の合計23点である（第58表，№は委託№を表す）。

２　化学処理工程

（１）メス，ピンセットを使い，根，土等の表面的な不純物を取り除く。
（２）酸処理，アルカリ処理，酸処理（AAA：Acid Alkali Acid）により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では1Nの水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。なお，AAA処理において，アルカリ濃度が1N未満の場合，表中にAaAと記載する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後，超純水で中性になるまで希釈し，90℃で乾燥する。希釈の際には，遠心分離機を使用する。
（３）試料を酸化銅と共に石英管に詰め，真空下で封じ切り，500℃で30分，850℃で2時間熱する。
（４）液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し，真空ラインで二酸化炭素（CO_2）を精製する。
（５）精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し，グラファイトを作製する。
（６）グラファイトを内径1mmのカソードに詰め，それをホイールにはめ込み，加速器に装着する。

３　測定方法

測定機器は，3MVタンデム加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

４　算出方法

（１）年代値の算出には，Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。
（２）^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は，過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され，1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。この値は，δ^{13}Cによって補正された値である。^{14}C年代と誤差は，1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また，^{14}C年代の誤差（±1σ）は，試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2％であることを意味する。
（３）δ^{13}C は，試料炭素の^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し，基準試料からのずれを示した値である。同位体比は，いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰）で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により^{13}C/^{12}Cを測定した場合は表中に（AMS）と注記する。
（４）pMC (percent Modern Carbon)は，標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。
（５）暦年較正年代とは，年代が既知の試料の^{14}C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ，過去の^{14}C濃度変化などを補正し，実年代に近づけた値である。暦年較正年代は，^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり，1標準偏差（1σ＝68.2％）あるいは2標準偏差（2σ＝95.4％）で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は，下一桁を四捨五入しない^{14}C年代値である。なお，較正曲線および較正プログラムは，データの蓄積によって更新される。また，プログラムの種類によっても結果が異なるため，年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは，暦年較正年代の計算に，IntCal04データベース（Reimer et al 2004）を用い，OxCalv4.1較正プログラム（Bronk Ramsey 1995　Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001）を使用した。

5　測定結果

虎居城跡出土試料No.1の^{14}C年代は260±30yrBPである。暦年較正年代（1σ）は，中世から近世の範囲を示し，17世紀頃の確率が高くなっている。炭素含有率は50%を超え，化学処理，測定上の問題は認められない。No.2の^{14}C年代は340±30yrBPである。暦年較正年代（1σ）は，15世紀末から17世紀前葉頃の範囲となった。炭素含有率は70%を超える十分な値で，化学処理，測定上の問題は認められない。

8が540±20yrBP，9が810±20yrBP，10が320±20yrBP，11が480±20yrBP，12が310±20yrBPである。10と12は誤差（±1σ）の範囲で重なり，近い年代を示す。8と11の年代値もおおむね近接している。暦年較正年代（1σ）で見ると，最も古い9は13世紀前半頃，最も新しい10と12は16世紀前半から17世紀前半の間の複数範囲，中間の8と11は15世紀前半頃の範囲で示される。

炭素含有率はいずれも50%を超え，化学処理，測定上の問題は認められない。

No13は430±30yrBP，No14が410±30yrBP，No15が610±30yrBP，No17が1280±30yrBP，No19が380±30yrBP，No20が350±30yrBP，No21が600±30yrBPである。暦年較正年代（1σ）は，No13が1435～1465cal AD，No14が1443～1485cal AD，No15が1303～1395cal ADの間に3つの範囲，No17が679～769cal ADの間に2つの範囲，No19が1450～1616cal ADの間に2つの範囲，No20が1480～1629cal ADの間に2つの範囲，No21が1307～1398cal ADの間に2つの範囲で示される。

No22の^{14}C年代は370±30yrBP，暦年較正年代（1σ）は1456～1618cal ADの間の2範囲である。No16は390±30yrBP，No24が420±30yrBP，暦年較正年代（1σ）は，No16が1447～1614cal ADの間に2つの範囲，No24が1440～1480cal ADの範囲となる。

No25の^{14}C年代は690±30yrBP，暦年較正年代（1σ）は1275～1377cal ADの間の2範囲である。

No.23は390±30yrBP，No.26が380±30yrBP，No.27が390±30yrBP，No.28が700±30yrBP，No.18が370±30yrBPである。暦年較正年代（1σ）は，No23が1448～1615cal ADの間に2つの範囲，No26が1453～1617cal ADの間に2つの範囲，No.27が1449～1615cal ADの間に2つの範囲，No.28が1272～1296cal AD，No18が1458～1618cal ADの間に2つの範囲で示される。

試料の炭素含有率はすべて50%を超え，化学処理，測定上の問題は認められない。

参考文献

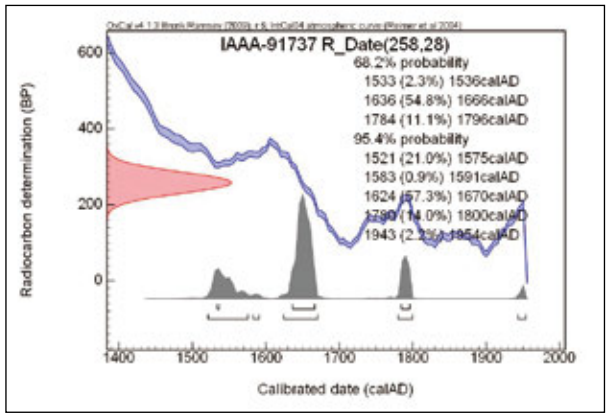
Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, Radiocarbon 19, 355-363

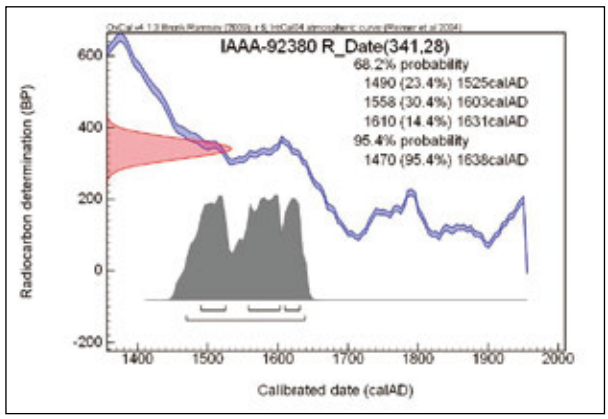
Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, Radiocarbon 37(2), 425-430

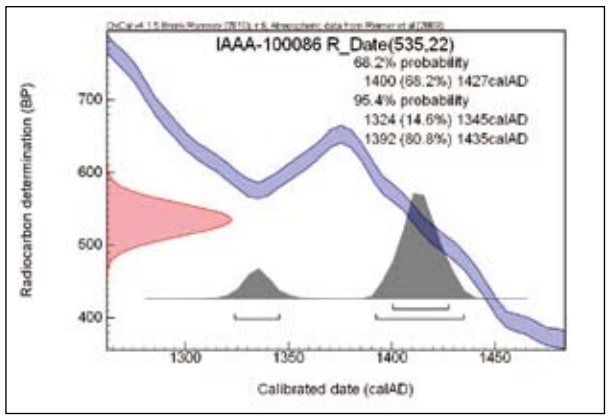
Bronk Ramsey C. 2001 Development of the radiocarbon calibration program, Radiocarbon 43(2A), 355-363

Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, Radiocarbon 43(2A), 381-389

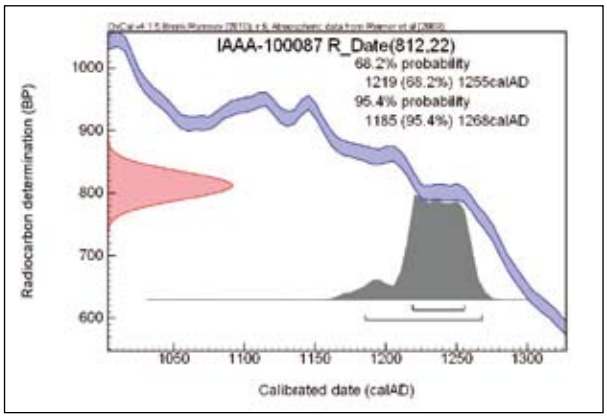
Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, Radiocarbon 46, 1029-1058

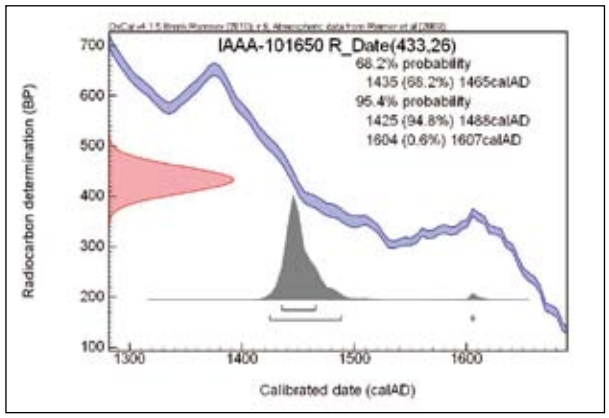


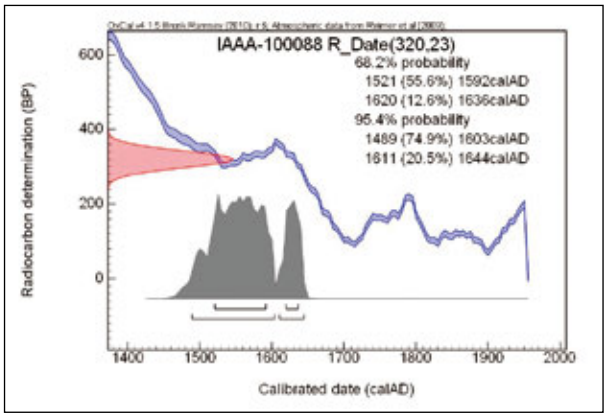


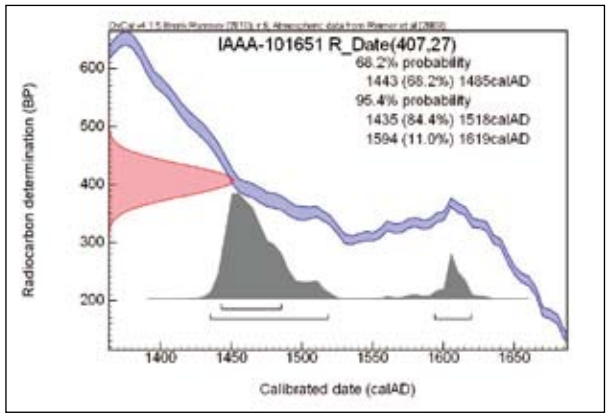


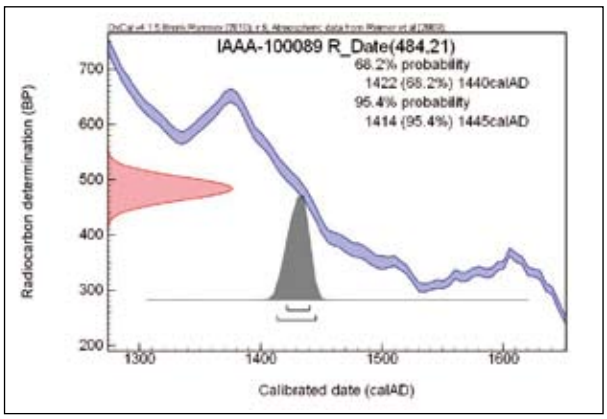
第182図　暦年較正グラフ(1)

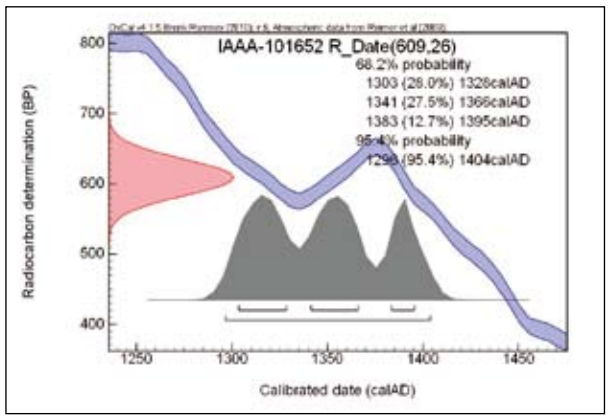


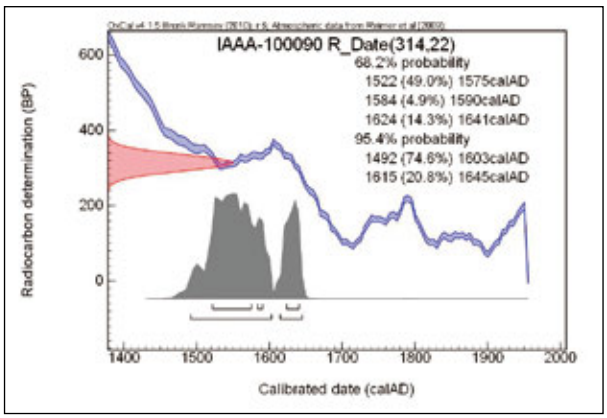


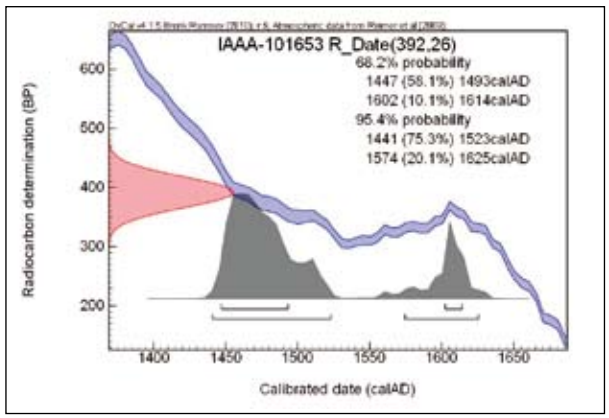




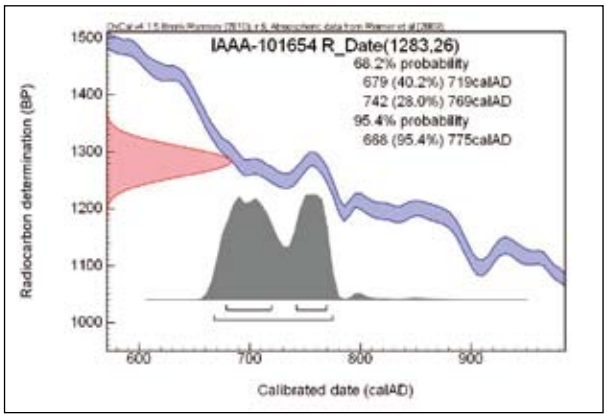


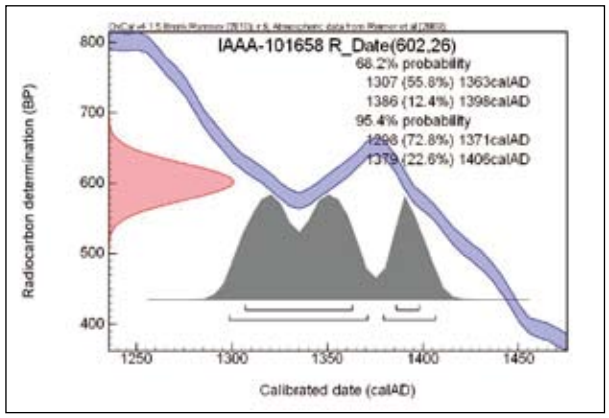


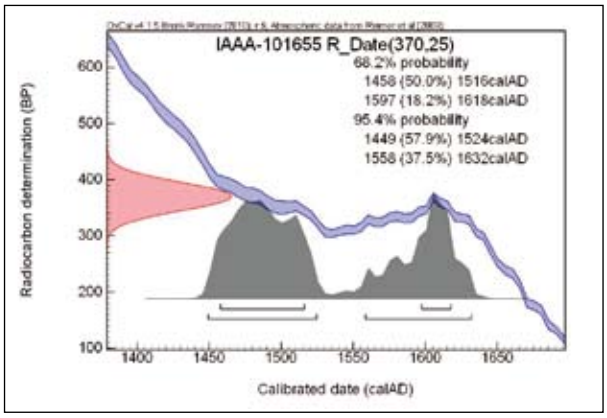


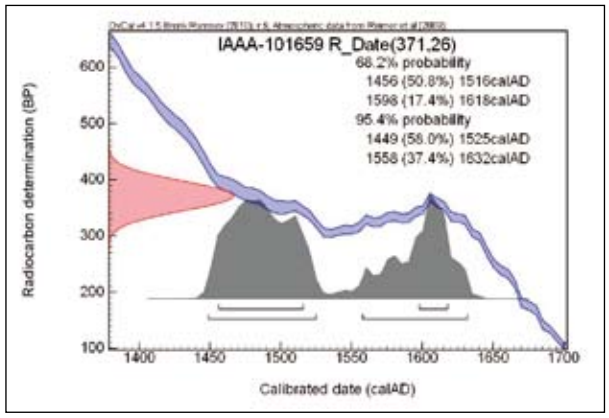


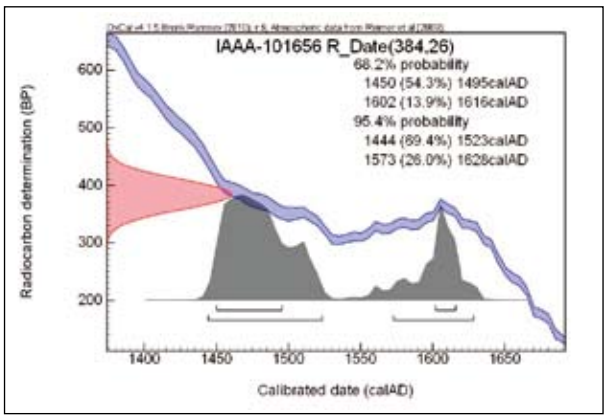
第183図　暦年較正グラフ(2)

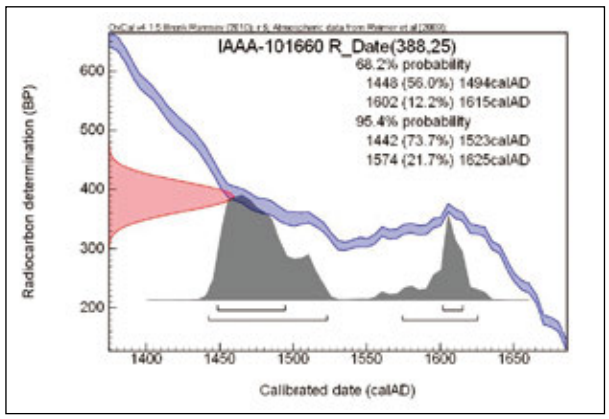


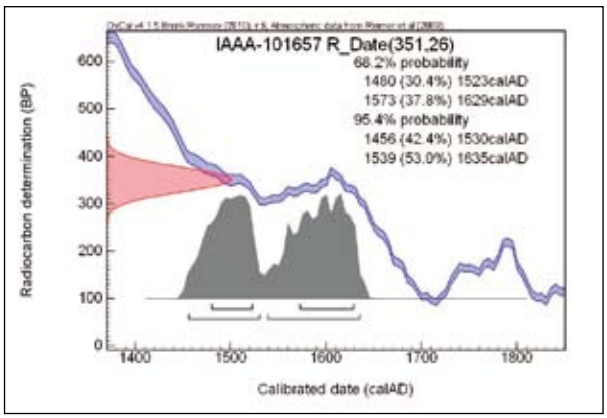


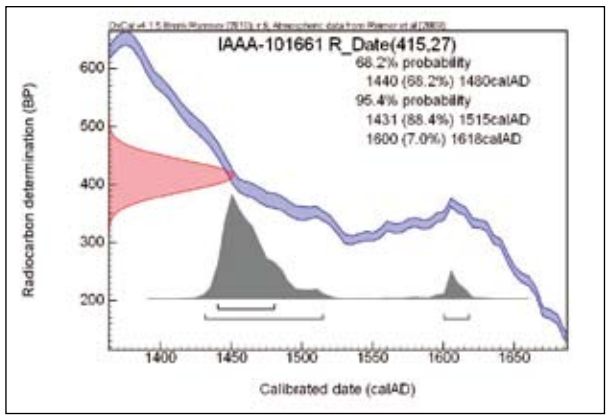




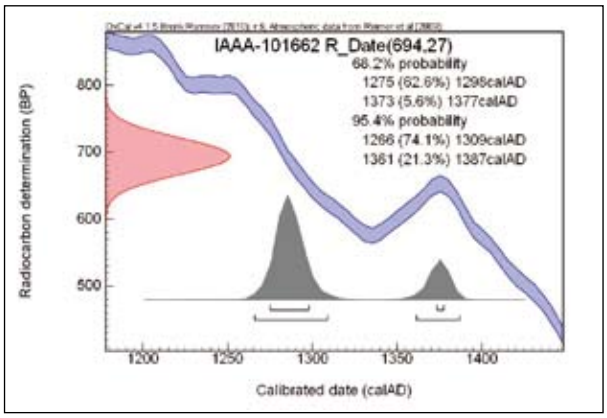


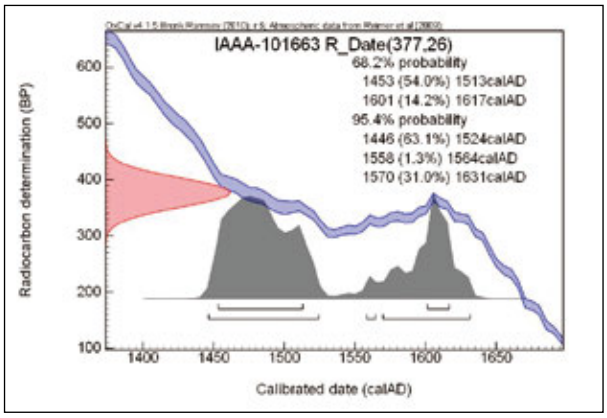


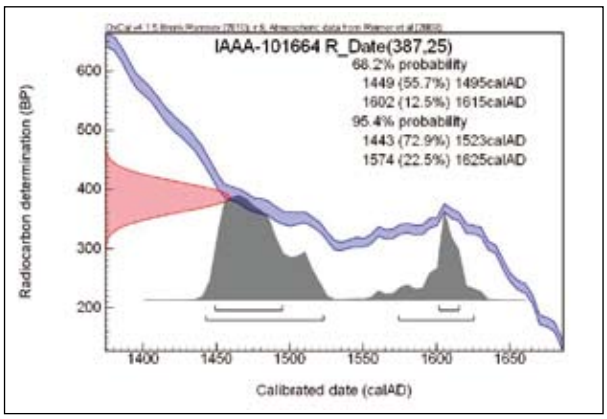


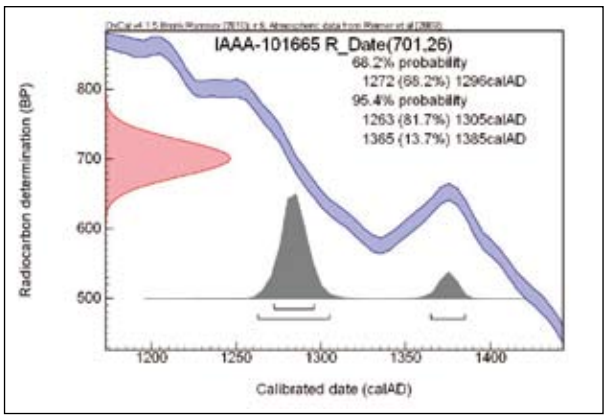


第184図　暦年較正グラフ(3)









第185図　暦年較正グラフ(4)

第３節　樹種同定

平成21年度委託(1)…㈱加速器分析研究所報告

1.試料

試料は，遺構内出土木材№3・4の2点である（№は委託№を表す）。

2.分析方法

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面），板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し，ガム，クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し，プレパラートを作製する。生物顕微鏡(Nikon製E600)で木材組織の種類や配列を観察し，その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお，木材組織の名称と特徴は，島地・伊東(1982)，Wheeler他(1998)，Richter他(2006)を参考にする。また，日本産木材の組織配列は，林(1991)や伊東(1995,1996,1997,1998,1999)を参考にする。

3.結果（第57表）

遺構出土木材№3は常緑広葉樹のスダジイ，遺構出土木材№4は針葉樹のスギに同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・スギ（Cryptomeria japonica (L. f.) D. Don）　スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で，晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で，1分野に2-4個。放射組織は単列，1-15細胞高。

・スダジイ（Castanopsis cuspidata var. sieboldii (Makino) Nakai）　ブナ科シイ属

環孔性放射孔材で，孔圏部は，接線方向に2個幅程度の3-4列，孔圏外で急激に管径を減じたのち，漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性，単列，1-20細胞高。

4.考察

遺構出土木材は針葉樹のスギと常緑広葉樹のスダジイに同定された。スギは，木理が通直で割裂性が高く，加工が容易な材質を有し，建築・土木・各種製品に有用である。重要な林業樹木の一つであり，古くから分割加工を施す製品を中心に大量に利用されてきた。今回の試料については，形状等の詳細が不明であるが，虎居城跡でも各種用途に利用されていたことが推定される。

一方，スダジイは，暖温帯性常緑広葉樹林（照葉樹林）の主構成種として鹿児島県内にも広く分布し，木材は比較的重硬で強度が高い材質を有する。周辺地域で入手可能な樹木を利用したことが推定される。
鹿児島県内では，中世の木材利用に関する資料が少ないため，今後さらに資料を蓄積されることがのぞまれる。

引用文献

林　昭三,1991,日本産木材　顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.
伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.
伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176.
伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.
伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.
伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.
Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（編）,2006,針葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部久・内海泰弘（日本語版監修）,海青社,70p.［Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004)IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification］.
島地　謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.
Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編）,1998,広葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修）,海青社,122p.［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification］.

※）本分析は，当社協力会社・パリノ・サーヴェイ株式会社にて実施した。

平成21年度委託(2)…パリノ・サーヴェイ株式会社報告

1.試料

試料は，板状の加工材1点と柱材2点の合計3点（№5-7）である（№は委託№を表す）。

2.分析方法

剃刀の刃を用いて木口（横断面），柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し，ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し，プレパラートを作製する。生物顕微鏡(Nikon製E600)で木材組織の種類や配列を観察し，その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお，木材組織の名称と特徴は，島地・伊東(1982)，Wheeler他(1998)，Richter他(2006)を参考にする。また，日本産木材の組織配列は，林(1991)や伊東(1995,1996,1997,1998,1999)を参考にする。

3.結果（第57表）

柱材2点はクスノキ科，加工材№6はスギに同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・スギ（Cryptomeria japonica (L. f.) D. Don）　スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で，晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で，1分野に2-4個。放射組織は単列，1-15細胞高。

・クスノキ科（Lauraceae）

散孔材で，管壁は薄く，横断面では角張った楕円形，単独または2-3個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性，1-3細胞幅，1-30細胞高。柔組織は周囲状および散在状。柔細胞には油細胞が認められる。

クスノキ科には多くの種類が含まれるが，クスノキやタブノキ属など，特徴的な組織を有する分類群を除くと，互いに組織が似ており，分類は難しい。今回の試料では，№5と№7で道管径や放射組織の大きさが若干異なることから，属や種が異なる可能性があるが，同定には至らず，クスノキ科に一括した。

4.考察

板状の加工材は，針葉樹のスギに同定された。スギは，木理が通直で割裂性が高く，板状の加工は比較的容易であることから，割裂性の高い木材を選択したことが推定される。一方，柱材は，2点ともクスノキ科に同定された。クスノキ科は，精油成分(樟脳)を持ち，耐水性・防虫性が比較的高い種類が含まれている。礎石や掘立柱等，柱材の利用状況も考慮する必要があるが，耐水性が高いことなどが木材選択の際に考慮された可能性がある。

本地域に限らず，鹿児島県内では中世の木材利用に関する資料が蓄積段階であり，不明な点が多いため，さらに多くの資料について樹種同定を行うことがのぞまれる。なおスギは，寿国寺跡の近世とされる木栓，提灯の

枠?，雨樋の支えに利用された例が報告されており（株式会社古環境研究所,2002a），今回の結果からスギ材の利用が中世まで遡ることが推定される。

一方，クスノキ科は，上野原遺跡の縄文時代後・晩期や弥生時代の建築部材と考えられる炭化材や中尾迫遺跡の弥生時代後期の燃料材と考えられる炭化材に確認されている（株式会社古環境研究所,2002b,2003,2005）。また，クスノキやタブノキ属が京田遺跡の縄文時代後期～古代の鍬，鋤，板状木製品等に確認されている（鹿児島県立埋蔵文化財センター,2005）。これらの結果から，クスノキやタブノキ属を含むクスノキ科は，古くから建築部材や木製品等に利用されていたことが推定される。

引用文献は平成21年度委託⑴に加えて

株式会社古環境研究所,2002a,寿国寺跡から出土した木製品の樹種同定.「寿国寺跡，梅落遺跡　九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ」,鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(40),鹿児島県立埋蔵文化財センター,186-190.

株式会社古環境研究所,2002b,炭化材の樹種同定.「上野原遺跡　（第2-7地点）　縄文時代早期編(第3分冊)　国分上野原テクノパーク第4工区造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(Ⅰ)」,鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(41),鹿児島県立埋蔵文化財センター,172-173.

株式会社古環境研究所,2003,炭化材の樹種同定.「上野原遺跡　第2～7地点：弥生時代～近世編(第6分冊)　国分上野原テクノパーク第4工区造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2」,鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書52,鹿児島県立埋蔵文化財センター,115-117.

株式会社古環境研究所,2005,中尾迫遺跡における樹種同定分析.「中尾迫遺跡　広域営農団地南薩東部地区整備事業に関わる埋蔵文化財発掘調査報告書」,指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書第38集,指宿市教育委員会,126.

鹿児島県立埋蔵文化財センター,2005,九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(ⅩⅣ)　京田遺跡.鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(81),278p.

Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（編）,2006,針葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部久・内海泰弘（日本語版監修）,海青社,70p.［Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004)IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification］.

島地　謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編）,1998,広葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修）,海青社,122p.［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification］.

平成22年度委託⑴…（株）加速器分析研究所報告

1.試料

試料は，城跡内出土木材5点(№8-12)である（№は委託№を表す）。

2.分析方法

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し，ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し，プレパラートを作製する。生物顕微鏡(Nikon製E600)で木材組織の種類や配列を観察し，その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお，木材組織の名称と特徴は，島地・伊東(1982)，Wheeler他(1998)，Richter他(2006)を参考にする。また，日本産木材の組織配列は，林(1991)や伊東(1995,1996,1997,1998,1999)を参考にする。

3.結果

樹種同定結果を第57表に示す。木製品は，針葉樹2分類群（モミ属・スギ）と広葉樹1分類群（クスノキ）に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・モミ属（Abies）　マツ科

軸方向組織は仮道管のみで構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで，晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成される。柔細胞壁は粗く，垂直壁にはじゅず状の肥厚が認められる。分野壁孔はスギ型で1分野に1-3個。放射組織は単列，1-20細胞高。

・スギ（Cryptomeria japonica (L. f.) D. Don）　スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で，晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で，1分野に2-4個。放射組織は単列，1-10細胞高。

・クスノキ（Cinnamomum camphora (L.) Presl）　クスノキ科クスノキ属

散孔材で，道管径は比較的大径，管壁は薄く，横断面

では楕円形，単独または2-3個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性，1-3細胞幅，1-20細胞高。柔組織は周囲状～翼状。柔細胞には大型の油細胞が認められる。

4.考察

虎居城跡内出土木材は，用途，機能，形状等に関する詳細が不明である。これらの木材には，針葉樹2分類群と広葉樹1分類群が認められた。スギとモミ属は，いずれも木理が通直で割裂性が高く，加工は容易であり，とくに板などの分割加工に適している。スギは，比較的耐水性もあるが，モミ属は保存性が低いとされる。クスノキは，やや重硬で保存性が高い材質を有し，切削は困難ではないが，交錯木理が出やすい。

本城跡では，これまでの同定調査でもスギが加工材に，クスノキ科が柱材に認められている。今回の結果から，モミ属やクスノキも利用されていたことが推定される。今後，用途・器種等を明らかにした上で，類例との比較・検討することが望まれる。

引用文献は平成21年度委託(1)と同一

平成22年度委託(2)…㈱加速器分析研究所報告

1.試料

試料は，出土した木材16点（遺跡内出土木材№13-28）である（№は委託№を表す）。

2.分析方法

剃刀の刃を用いて木口(横断面)・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し，ガム・クロラール(抱水クロラール, アラビアゴム粉末，グリセリン, 蒸留水の混合液)で封入し，プレパラートを作製する。生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し，その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお，木材組織の名称や特徴は，島地・伊東(1982)，Wheeler他(1998)，Richter他(2006)を参考にする。また，日本産木材の組織配列は，林(1991)や伊東(1995,1996,1997,1998,1999)を参考にする。

3.結果

樹種同定結果を第57表に示す。木材は，針葉樹5分類群（マツ属複維管束亜属・モミ属・スギ・コウヤマキ・ヒノキ），広葉樹4分類群（スダジイ・イスノキ・クスノキ・クスノキ科）に同定された。なお，遺跡内出土木材№24は，針葉樹の樹皮であるが，同定に必要な木部細胞が見られず，種類は不明である。同定された各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複維管束亜属（Pinus subgen. Diploxylon）　マツ科

試料は保存状態が悪い。軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで，晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は，仮道管と柔細胞が確認される。本来は，水平樹脂道やエピセリウム細胞も有するが，本試料では確認できない。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列，1-10細胞高。

・モミ属（Abies）　マツ科

軸方向組織は仮道管のみで構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで，晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成される。柔細胞壁は粗く，垂直壁にはじゅず状の肥厚が認められる。分野壁孔はスギ型で1分野に1-4個。放射組織は単列，1-20細胞高。

・スギ（Cryptomeria japonica (L. f.) D. Don）　スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で，晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で，1分野に2-4個。放射組織は単列，1-10細胞高。

・コウヤマキ（Sciadopitys verticillata (Thunb.) Sieb. et Zucc.）コウヤマキ科コウヤマキ属

軸方向組織は仮道管のみで構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで，晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は窓状となり，通常1分野に1個。放射組織は単列，1～5細胞高。

・ヒノキ科（Cupressaceae）

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で，晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列，1-10細胞高。

・スダジイ（Castanopsis cuspidata var. sieboldii (Makino) Nakai）　ブナ科シイ属

環孔性放射孔材で，道管は接線方向に1-2個幅で放射方向に配列する。孔圏部は3-4列，孔圏外で急激に管径を減じたのち，漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性，単列，1-20細胞高。

・イスノキ（Distylium racemosum Sieb. et Zucc.）マンサク科イスノキ属

散孔材で，道管は横断面で多角形，ほとんど単独で散在する。道管の分布密度は比較的高い。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性，1-3細胞幅，1-20細胞高。柔組織は，独立帯状または短接線状で，放射方向にほぼ

等間隔に配列する。

・クスノキ（Cinnamomum camphora (L.) Presl）　クスノキ科クスノキ属

散孔材で，道管径は比較的大径，管壁は薄く，横断面では楕円形，単独または2-3個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性，1-3細胞幅，1-20細胞高。柔組織は周囲状～翼状。柔細胞には大型の油細胞が認められる。

・クスノキ科（Lauraceae）

試料は小片で観察範囲が狭い。年輪の始めに大型の道管が認められないことから，散孔材と考えられる。道管は比較的厚壁で，単独または2個が放射方向に複合している。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性，1-2細胞幅，1-20細胞高。柔細胞には油細胞が認められる。

以上の特徴から，クスノキ科のいずれかと考えられるが，観察範囲が狭いため，種類は不明である。

・エゴノキ属（Styrax）　エゴノキ科

試料には年輪界が認められない。散孔材で，横断面では楕円形，単独または2-4個が複合して散在し，年輪界方向に向かって径を漸減させる。道管は階段穿孔を有し，壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性，1-3細胞幅，1-20細胞高。

4.考察

遺跡内出土木材は，いずれも木器とされているが，形状・木取り・器種に関する詳細は不明である。これらの木材には，合計9分類群と針葉樹の樹皮が認められた。針葉樹では，複維管束亜属，モミ属，スギ，コウヤマキ，ヒノキ科が認められた。複維管束亜属は，比較的強度・保存性が高いが，加工は容易である。モミ属，スギ，コウヤマキ，ヒノキ科は，木理が通直で割裂性が高く，加工は容易である。耐水性の高い種類が多いが，モミ属は保存性が低いとされる。一方，広葉樹では，スダジイ，クスノキ，クスノキ科，イスノキ，エゴノキ属が認められた。スダジイ，イスノキ，エゴノキ属は，比較的重硬で強度が高く，加工はやや困難である。クスノキやクスノキ科は，樟脳を含み，保存性が比較的高いが，交錯木理を有し，加工は困難な部類に入る。

スダジイは，暖温帯常緑広葉樹林の主構成種であり，クスノキ，クスノキ科，イスノキも常緑広葉樹林内に生育する。複維管束亜属やエゴノキ属は，二次林の構成種である。これらの種類は，現在の植生を考慮すれば，遺跡周辺に生育しており，木材の入手が可能であったと考えられる。このうち，クスノキ科は，これまでの調査でも柱材に認められている。

一方，スギ，ヒノキ科，コウヤマキは，九州に自生地があるものの，現在の遺跡周辺には自生してない。いずれも重要な有用材であり，木製品あるいは木材が運搬されたのか，当時周辺に生育していたのか不明であり，花粉分析や種実遺体同定などで遺跡周辺の古植生の検討をする必要がある。これらの種類の内，スギについては，これまでの調査でも板状の加工木などに認められており，虎居城では比較的よく利用されていたことが推定される。一方，ヒノキ科とコウヤマキは，これまでの調査では確認されていなかったが，今回初めて本遺跡での利用が明らかにされた。特にコウヤマキは，鹿児島県内でこれまでに確認された例がなく，当該期のコウヤマキ材の利用状況や流通などを考える上で重要な資料である。

引用文献は平成21年度委託(1)と同一

※）本分析は，パリノ・サーヴェイ株式会社の協力を得て行った。

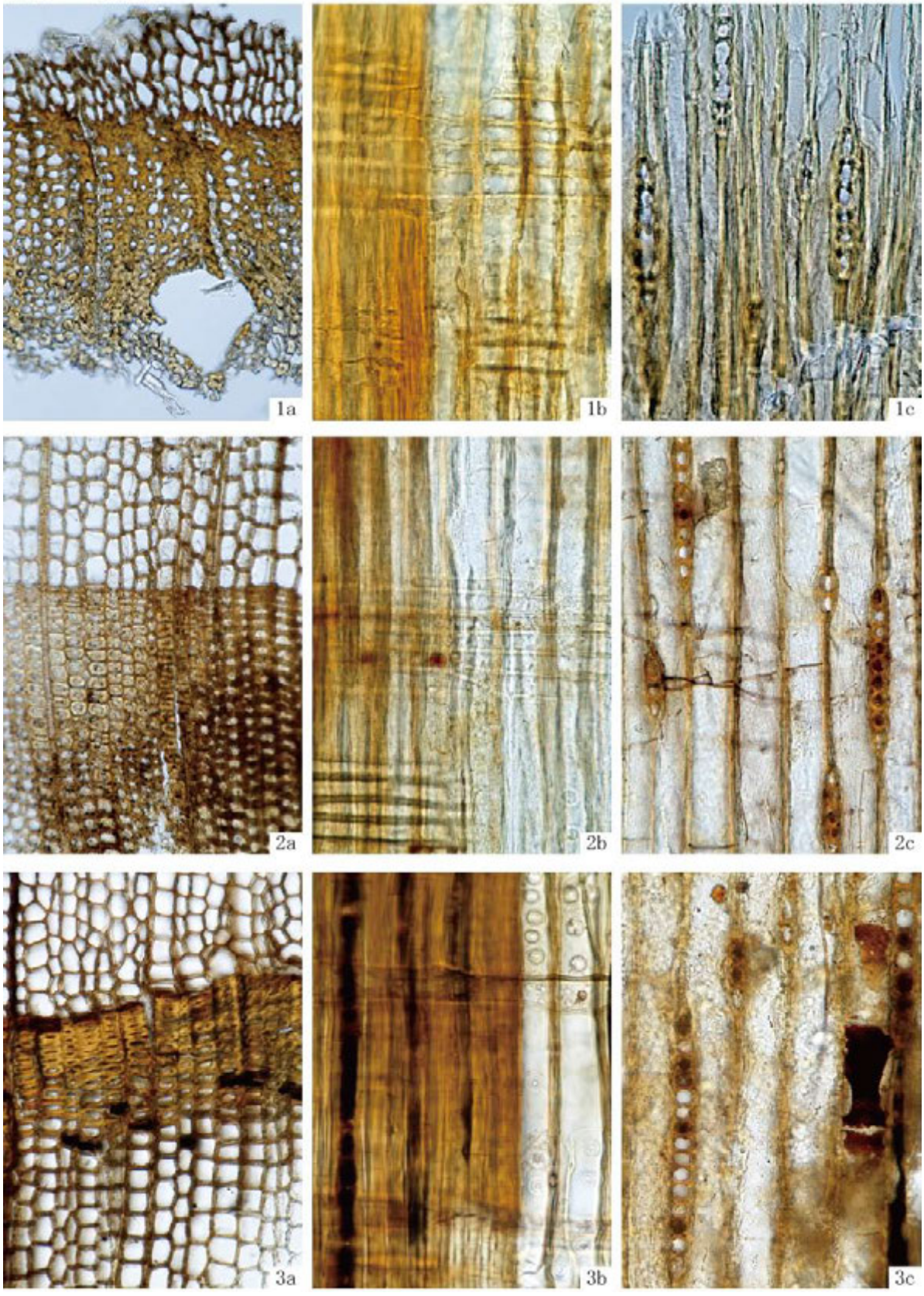
第 57 表　樹種同定結果一覧表

掲載 No	委託 No	器種	樹種
749	3	櫂	スダジイ
656	4	下駄	スギ
B地区H70	5	柱	クスノキ科
761	6	箆状木製品	スギ
D地区掘立1-4	7	柱	クスノキ科
242	8	折敷	モミ属
227	9	鍔	クスノキ
152	10	木製容器	スギ
158	11	桶側板	モミ属
248	12	枡	スギ
220	13	漆椀	クスノキ
149	14	下駄	ヒノキ科
253	15	箆状木製品	スギ
H地区柵4	16	杭	エゴノキ属
150	17	把手	クスノキ科
250	18	柄杓	スギ
B地区木樋	19	木樋	マツ属複維管束亜属
B地区掘立1	20	掘立横架材	スギ
B地区桶1	21	桶	モミ属
D地区掘立1-9	22	柱	イスノキ
255	23	箆状木製品	コウヤマキ
H地区掘立柱1	24	柱	針葉樹の樹皮
653	25	漆椀	クスノキ
H地区掘立横架材	26	柱	スダジイ
232	27	蓋	クスノキ
681	28	漆椀	クスノキ

第 58 表　年代測定結果一覧表

掲載No	測定番号	委託No	採取場所	分析器種等	試料形態	処理方法	$\delta^{13}C$ (‰) (AMS)			$\delta^{13}C$補正あり						$\delta^{13}C$補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
										Libby Age			pMC (%)			Age (yrBP)	pMC (%)			
222	IAAA-91737	1	B地区 K-21区	漆器椀	木片	AaA	−26.06	±	0.5	260	±	30	96.84	±	0.34	280 ± 30	96.63 ± 0.32	258 ± 28	1533AD − 1536AD (2.3%) 1636AD − 1666AD (54.8%) 1784AD − 1796AD (11.1%)	1521AD − 1575AD (21.0%) 1583AD − 1591AD (0.9%) 1624AD − 1670AD (57.3%) 1780AD − 1800AD (14.0%) 1943AD − 1954AD (2.2%)
−	IAAA-92380	2	C地区炉跡6号	炭化物	木炭	AAA	−25.62	±	0.69	340	±	30	95.84	±	0.34	350 ± 30	95.72 ± 0.31	341 ± 28	1490AD − 1525AD (23.4%) 1558AD − 1603AD (30.4%) 1610AD − 1631AD (14.4%)	1470AD − 1638AD (95.4%)
242	IAAA-100086	8	B地区 J,K-21区	折敷	木片	AaA	−23.13	±	0.43	540	±	20	93.55	±	0.26	500 ± 20	93.91 ± 0.25	535 ± 22	1400calAD − 1427calAD (68.2%)	1324calAD − 1345calAD (14.6%) 1392calAD − 1435calAD (80.8%)
227	IAAA-100087	9	B地区 K-20区	鍔(内部)	木片	AaA	−28.63	±	0.4	810	±	20	90.38	±	0.26	870 ± 20	89.71 ± 0.24	812 ± 22	1219calAD − 1255calAD (68.2%)	1185calAD − 1268calAD (95.4%)
152	IAAA-100088	10	B地区 L-17区	木製容器	木片	AAA	−24.03	±	0.46	320	±	20	96.1	±	0.27	300 ± 20	96.29 ± 0.26	320 ± 23	1521calAD − 1592calAD (55.6%) 1620calAD − 1636calAD (12.6%)	1489calAD − 1603calAD (74.9%) 1611calAD − 1644calAD (20.5%)
158	IAAA-100089	11	B地区 J-18区	桶側板	木片	AaA	−25.26	±	0.37	480	±	20	94.14	±	0.26	490 ± 20	94.09 ± 0.25	484 ± 21	1422calAD − 1440calAD (68.2%)	1414calAD − 1445calAD (95.4%)
248	IAAA-100090	12	B地区	枡	木片	AaA	−21.71	±	0.42	310	±	20	96.16	±	0.27	260 ± 20	96.81 ± 0.26	314 ± 22	1522calAD − 1575calAD (49.0%) 1584calAD − 1590calAD (4.9%) 1624calAD − 1641calAD (14.3%)	1492calAD − 1603calAD (74.6%) 1615calAD − 1645calAD (20.8%)
220	IAAA-101650	13	B地区 空堀Ⅰ	漆器椀	木器片	AaA	−27.89	±	0.56	430	±	30	94.75	±	0.31	480 ± 30	94.19 ± 0.29	433 ± 26	1435calAD − 1465calAD (68.2%)	1425calAD − 1488calAD (94.8%) 1604calAD − 1607calAD (0.6%)
149	IAAA-101651	14	B地区 M-17溝	下駄	木器片	AaA	−24.33	±	0.7	410	±	30	95.06	±	0.33	400 ± 30	95.19 ± 0.3	407 ± 27	1443calAD − 1485calAD (68.2%)	1435calAD − 1518calAD (84.4%) 1594calAD − 1619calAD (11.0%)
253	IAAA-101652	15	B地区	篦状木製品	木器片	AaA	−25.22	±	0.52	610	±	30	92.7	±	0.31	610 ± 30	92.66 ± 0.29	609 ± 26	1303calAD − 1328calAD (28.0%) 1341calAD − 1366calAD (27.5%) 1383calAD − 1395calAD (12.7%)	1296calAD − 1404calAD (95.4%)
−	IAAA-101653	16	H地区 G-13区	杭列	木器片	AaA	−29.59	±	0.48	390	±	30	95.23	±	0.31	470 ± 30	94.34 ± 0.29	392 ± 26	1447calAD − 1493calAD (58.1%) 1602calAD − 1614calAD (10.1%)	1441calAD − 1523calAD (75.3%) 1574calAD − 1625calAD (20.1%)
150	IAAA-101654	17	B地区 I-21区	把手	木器片	AaA	−27.41	±	0.68	1,280	±	30	85.24	±	0.28	1,320 ± 20	84.82 ± 0.25	1,283 ± 26	679calAD − 719calAD (40.2%) 742calAD − 769calAD (28.0%)	668calAD − 775calAD (95.4%)
−	IAAA-101655	18	H地区 G-12区 礎石建物跡内	炭化物	炭化物	AaA	−27.33	±	0.4	370	±	30	95.5	±	0.3	410 ± 30	95.04 ± 0.29	370 ± 25	1458calAD − 1516calAD (50.0%) 1597calAD − 1618calAD (18.2%)	1449calAD − 1524calAD (57.9%) 1558calAD − 1632calAD (37.5%)
−	IAAA-101656	19	B地区 I-17区	木樋	木器片	AaA	−27.42	±	0.61	380	±	30	95.33	±	0.32	420 ± 30	94.85 ± 0.29	384 ± 26	1450calAD − 1495calAD (54.3%) 1602calAD − 1616calAD (13.9%)	1444calAD − 1523calAD (69.4%) 1573calAD − 1628calAD (26.0%)
−	IAAA-101657	20	B地区 J-17区	掘立1 建物部材	木器片	AAA	−25.84	±	0.52	350	±	30	95.71	±	0.32	370 ± 30	95.55 ± 0.3	351 ± 26	1480calAD − 1523calAD (30.4%) 1573calAD − 1629calAD (37.8%)	1456calAD − 1530calAD (42.4%) 1539calAD − 1635calAD (53.0%)
−	IAAA-101658	21	B地区 J-18区	桶1	木器片	AaA	−27.33	±	0.44	600	±	30	92.77	±	0.31	640 ± 30	92.33 ± 0.29	602 ± 26	1307calAD − 1363calAD (55.8%) 1386calAD − 1398calAD (12.4%)	1298calAD − 1371calAD (72.8%) 1379calAD − 1406calAD (22.6%)
−	IAAA-101659	22	D地区 P-9区	掘立1 柱9	木器片	AAA	−27.35	±	0.62	370	±	30	95.48	±	0.31	410 ± 20	95.02 ± 0.29	371 ± 26	1456calAD − 1516calAD (50.8%) 1598calAD − 1618calAD (17.4%)	1449calAD − 1525calAD (58.0%) 1558calAD − 1632calAD (37.4%)
−	IAAA-101660	23	E地区 炉跡3号	炭化物	炭化物	AAA	−27.52	±	0.5	390	±	30	95.28	±	0.3	430 ± 20	94.78 ± 0.28	388 ± 25	1448calAD − 1494calAD (56.0%) 1602calAD − 1615calAD (12.2%)	1442calAD − 1523calAD (73.7%) 1574calAD − 1625calAD (21.7%)
−	IAAA-101661	24	H地区 H-13区	掘立 柱	木器片	AaA	−25.87	±	0.76	420	±	30	94.96	±	0.32	430 ± 20	94.79 ± 0.28	415 ± 27	1440calAD − 1480calAD (68.2%)	1431calAD − 1515calAD (88.4%) 1600calAD − 1618calAD (7.0%)
749	IAAA-101662	25	J地区 Q-6区	櫂	木器片	AaA	−28.06	±	0.69	690	±	30	91.71	±	0.31	750 ± 20	91.14 ± 0.28	694 ± 27	1275calAD − 1298calAD (62.6%) 1373calAD − 1377calAD (5.6%)	1266calAD − 1309calAD (74.1%) 1361calAD − 1387calAD (21.3%)
−	IAAA-101663	26	C地区 L-14区 ピットNo38	炭化物	炭化物	AAA	−26.82	±	0.61	380	±	30	95.41	±	0.31	410 ± 20	95.05 ± 0.29	377 ± 26	1453calAD − 1513calAD (54.0%) 1601calAD − 1617calAD (14.2%)	1446calAD − 1524calAD (63.1%) 1558calAD − 1564calAD (1.3%) 1570calAD − 1631calAD (31.0%)
−	IAAA-101664	27	D地区 炉跡8号	炭化物	炭化物	AaA	−26.61	±	0.46	390	±	30	95.29	±	0.3	410 ± 20	94.98 ± 0.29	387 ± 25	1449calAD − 1495calAD (55.7%) 1602calAD − 1615calAD (12.5%)	1443calAD − 1523calAD (72.9%) 1574calAD − 1625calAD (22.5%)
−	IAAA-101665	28	M地区炉跡	炭化物	炭化物	AAA	−25.33	±	0.57	700	±	30	91.64	±	0.3	710 ± 30	91.57 ± 0.28	701 ± 26	1272calAD − 1296calAD (68.2%)	1263calAD − 1305calAD (81.7%) 1365calAD − 1385calAD (13.7%)

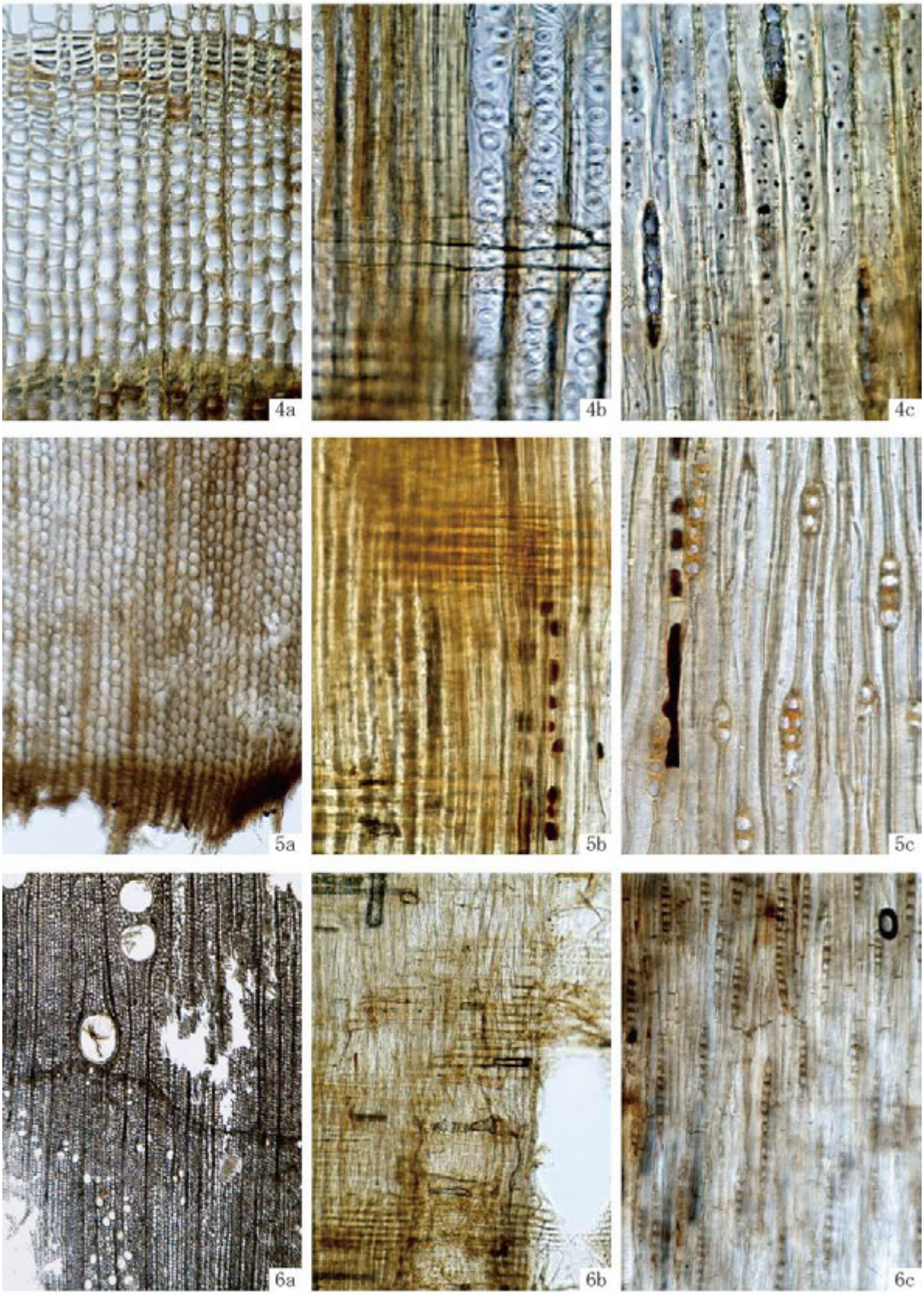
木材(1)



1. B地区木樋:マツ属複維管束亜属(遺跡内出土木材No.19)
2. B地区桶1:モミ属(遺跡内出土木材No.21)
3. 253箆状木製品:スギ(遺跡内出土木材No.15)
a:木口,b:柾目,c:板目

200μm:a
100μm:b,c

木材(2)



4. 255箆状木製品:コウヤマキ(遺跡内出土木材No.23)
5. 149下駄:ヒノキ科(遺跡内出土木材No.14)
6. H地区掘立横架材:スダジイ(遺跡内出土木材No.26)
a:木口, b:柾目, c:板目

300 μm:6a
200 μm:4-5a,6b,c
100 μm:4-5b,c



7. 232蓋:クスノキ(遺跡内出土木材No.27)
8. D地区掘立1-9:イスノキ(遺跡内出土木材No.22)
9. H地区柵4:エゴノキ属(遺跡内出土木材No.16)
a:木口,b:柾目,c:板目

200μm:a
100μm:b,c

第３節　坩堝の成分分析

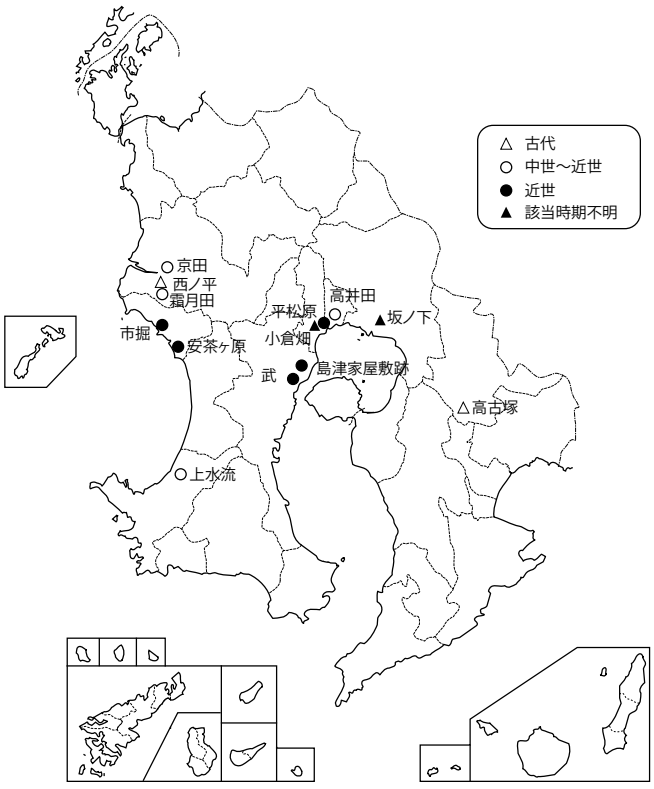
1　はじめに

虎居城跡（鹿児島県薩摩郡さつま町）の調査で，中世末～近世該当層から直径10cmあまりの坩堝が出土した。さらに調査を進めた結果，直径30cmほどの土坑内から，サイズや形状に特徴が見られる坩堝が多数まとまって出土し，内面には赤茶色や緑色の金属粒が付着していた。これらを鹿児島県立埋蔵文化財センター所有の蛍光Ｘ線分析装置で分析したところ，主にCu，Sn，Pb，Feが検出された。

そこで，これまでに鹿児島県内で出土している坩堝，取鍋を集成し，さらに蛍光Ｘ線による成分分析を行い，出土した金属製品との関連・傾向を探ってみた。特に今回は，虎居城跡の５点（中世末～近世）と寿国寺跡及び島津家屋敷跡出土の２点（近世）について，残存する金属成分を調査した。

2　鹿児島県内の坩堝，取鍋出土状況

当センターの調査では，これまでに15遺跡から40点あまりの坩堝，取鍋を確認している。大半は１遺跡１点から３点の出土であるが，虎居城跡からは20点と，まとまった数が出土している。



第186図　鹿児島県内の主な坩堝，取鍋出土遺跡

3　調査方法

(1)　表面観察

目視のほか，双眼実態顕微鏡（Nikon SMZ1000）による８～20倍観察を行い，坩堝や金属塊表面の特徴的な色調や形態等を観察した。

(2)　金属粒子の分布調査

透過Ｘ線撮影装置（HITACHI　PI-CR-1506）で撮影し，金属粒子の分布を調べた。

(3)　金属粒子の成分分析

非破壊では測定できない部分が大半のため(1)，(2)の結果を踏まえて，坩堝表面で確認できる金属粒子やその周辺の溶着層を採取して分析用試料を作成した。分析はエネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置（堀場製作所製XGT-1000，Ｘ線管球ターゲット：ロジウム，Ｘ線照射径100μｍ）で分析を行った。分析条件はX線管電圧50kVとしたほかは，それぞれの試料に最適になるよう自動設定とした。定性的なデータ収集を目的としており，標準試料による補正は行っていない。



坩堝表面の銅粒子

4　結果

(1)　坩堝の表面観察及び金属粒子の分布調査

表面観察により，直径１mm前後の細かい金属粒子が点在していることがわかった。このことは透過Ｘ線画像でさらにはっきりと確認できた。

今回調査した資料では，金属粒子を目視で確認できたのは銅だけであった。

(2)　坩堝の金属粒子とその周辺の溶着層の成分分析

虎居城跡で出土した坩堝（665）表面に見られた金属粒子をサンプリングして成分分析したところ，純度の高いCu粒子であることがわかった（第187図）。さらにこの他にこの資料の表面５か所からサ

ンプルを採取して分析したところ，場所によってばらつきは大きい（第188図）ものの，SnやPbなどが検出された。そのほかの坩堝からも同様の結果が得られた。島津家屋敷跡（報告書掲載No.85），寿国寺跡（報告書掲載No.321）の坩堝については，それぞれFe，Cu，PbやCu，Feなどを検出した。

(3) 金属遺物（529）の成分分析

いずれも非破壊で，金属光沢が見られる部分を分析したところ，微量のCuを含むAgが検出された。

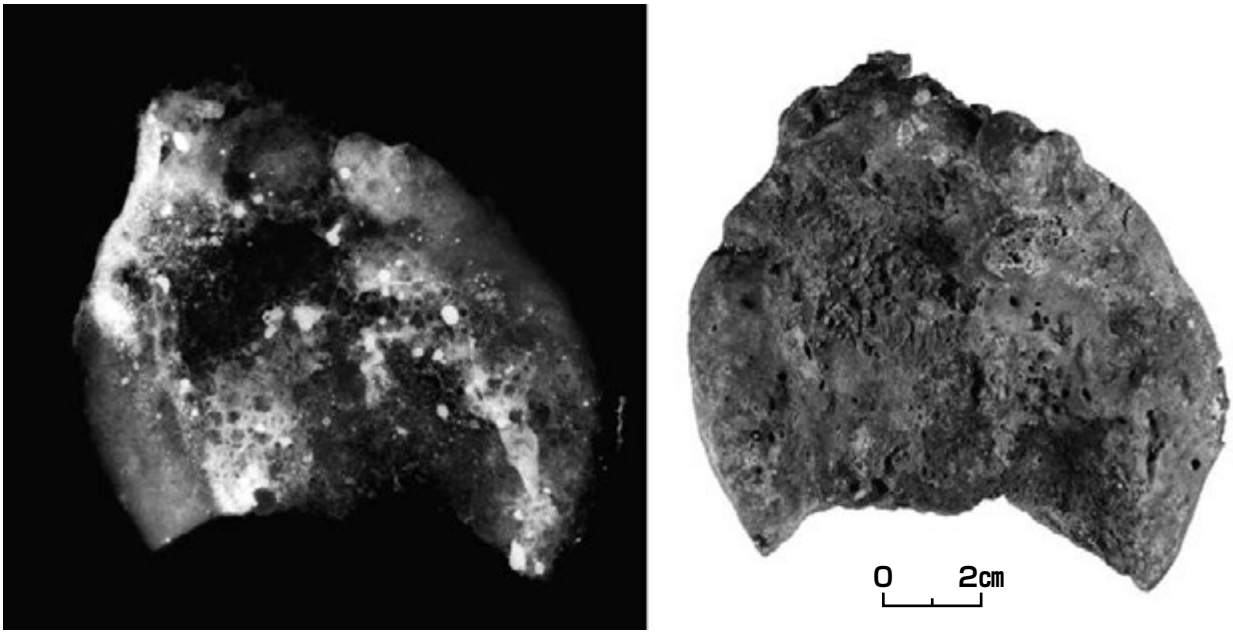
5 まとめ

虎居城跡からは，鉄鏃や刀子等の鉄製品のほか，キセル，鏡，簪，古銭などの青銅製品，Agのインゴッド，Pbの鉄砲玉が出土している。坩堝の出土点数や成分分析の結果から，鉄や銅を中心とした金属製品の生産活動が行われていた可能性が高いが，現段階ではこれらの金属製品にすぐに結び付く結果は得られていない。

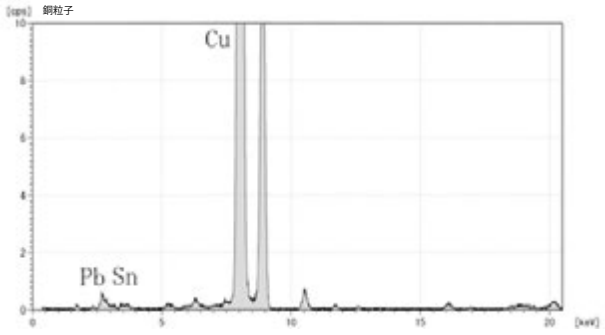
今後は，透過X線画像と対比させながら他の遺構との関連も含めて検討しなければならない。

参考文献

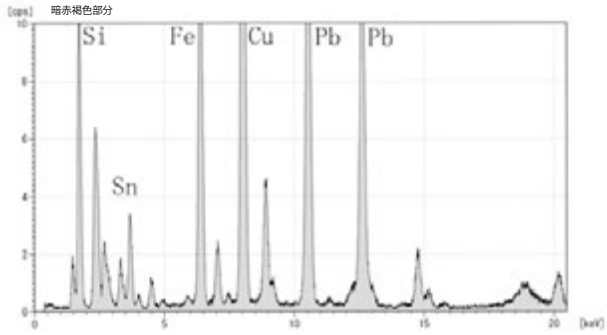
伊藤幸司「坩堝に残る金属成分の解釈-鉛の多寡から推し量るべきこと-」日本文化財科学会第26回発表要旨集



虎居城跡出土坩堝665（左：透過X線画像）



第187図　虎居城跡出土坩堝　付着銅粒子



第188図　虎居城跡出土坩堝　暗赤褐色部分

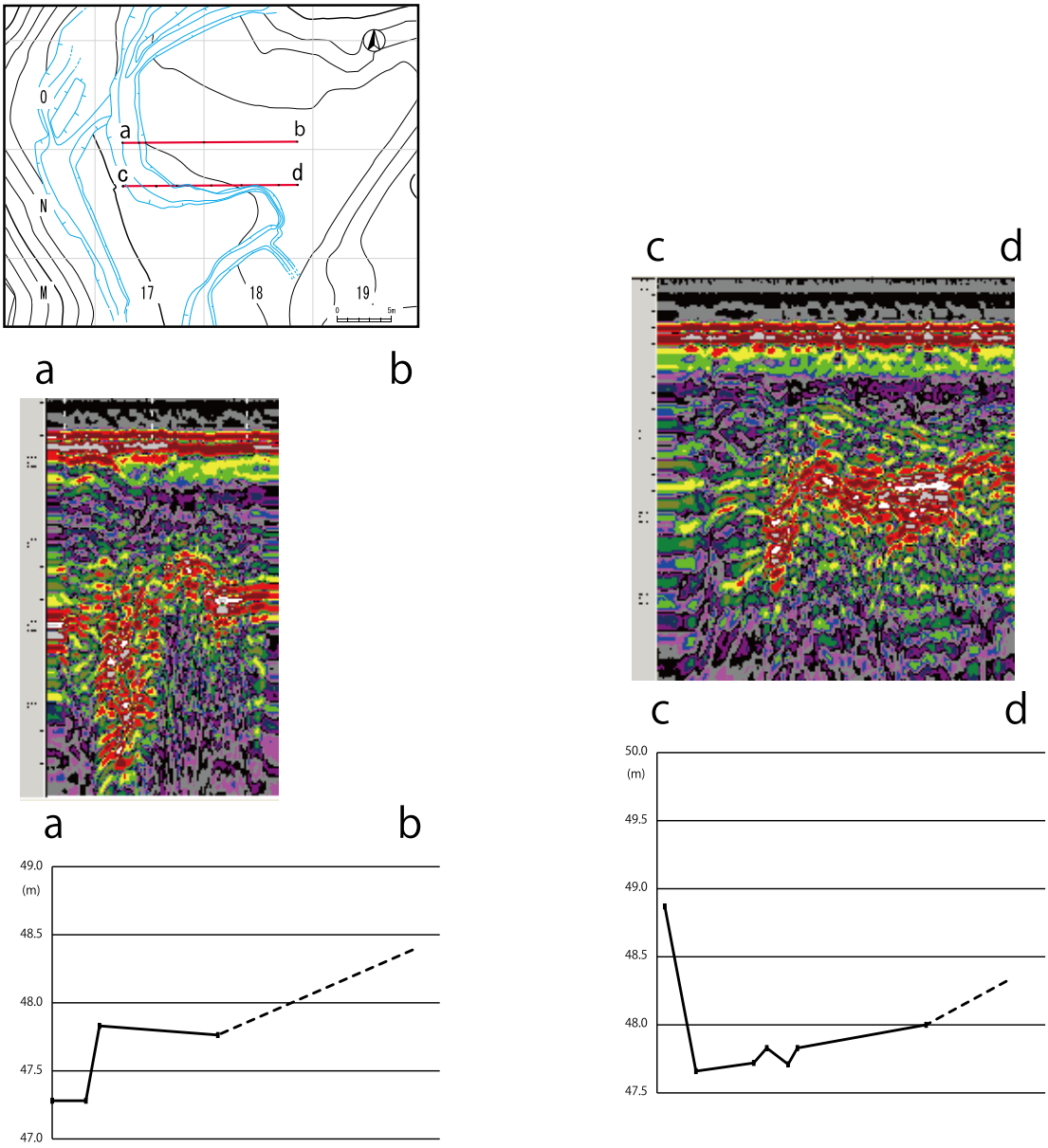
第４節　地下レーダー探査

後藤雅彦（琉球大学考古学研究室）

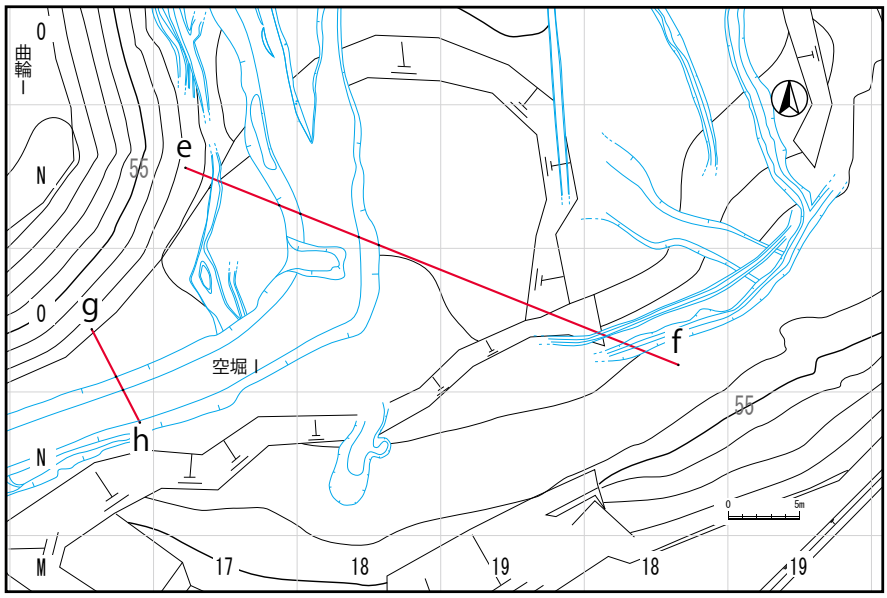
平成21（2009）年１月20日（火）～1月22日（木），虎居城跡において地中レーダー探査を実施した。地中レーダー探査は，電波を地中に送り，地層や遺構などから反射した速度や強さによって，対象物を探査するものである。今回の調査では，すでに発掘調査で確認されている曲輪直下の堀の延びる方向と曲輪ごとの堀の存在について確認することを目的にした。堀の推定深度については，表土の高低差もあり，80～120ns（ナノセコンド）にした。探査は米国GSSI社製地中レーダーシステムSIR－3000及び270ＭＨｚのアンテナを用いて実施した。

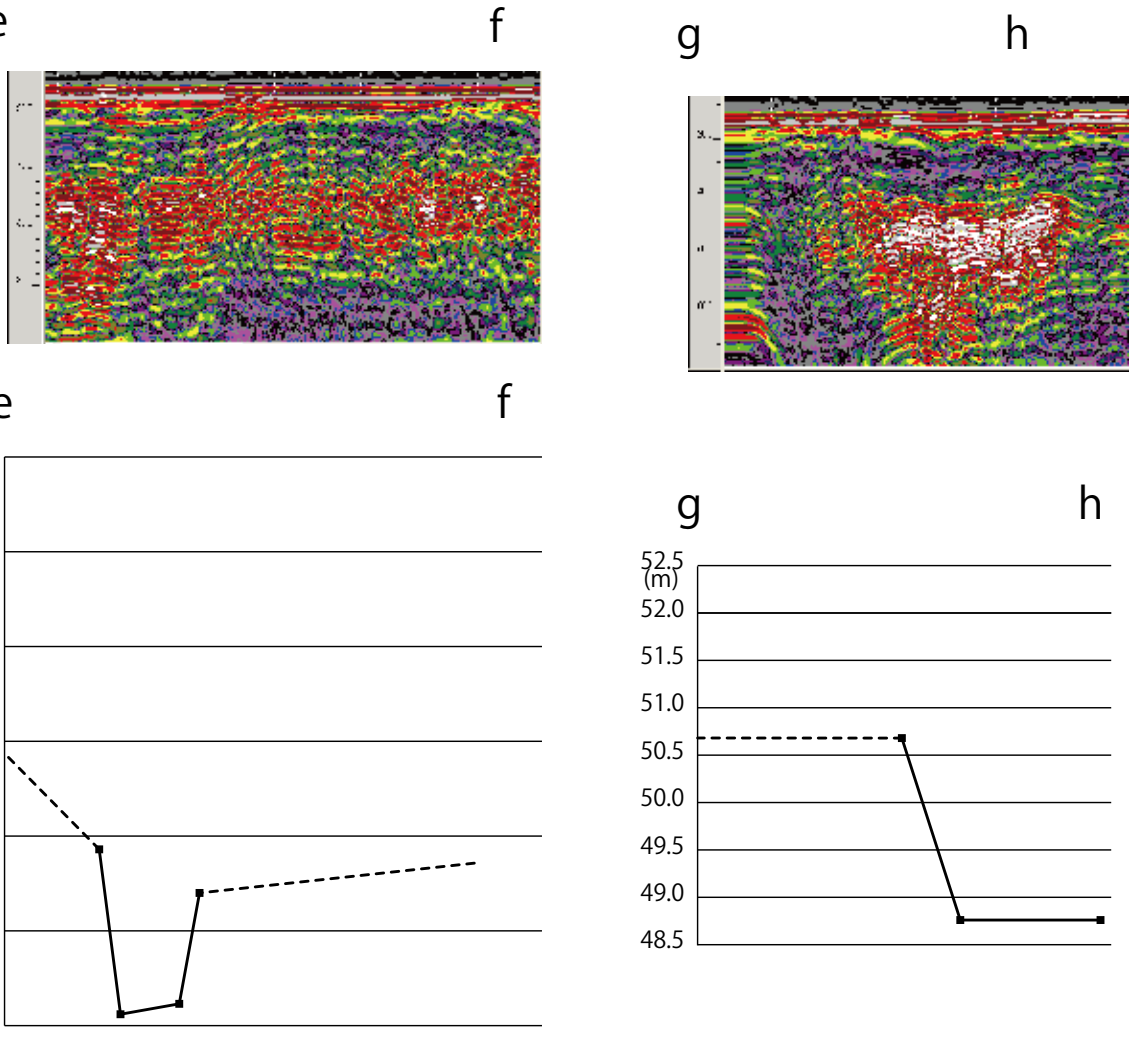
なお，下図左側の数値は深度をnsで表示したものであり，南九州の土壌では概ね３倍した数値を距離としてcmで表すと考えられる。

調査は，最初に「中の城」南側のトレンチ調査で確認された堀の反応（深度）を確認した後，周辺において探査を実施した。



第189図　地下レーダー探査結果(1)

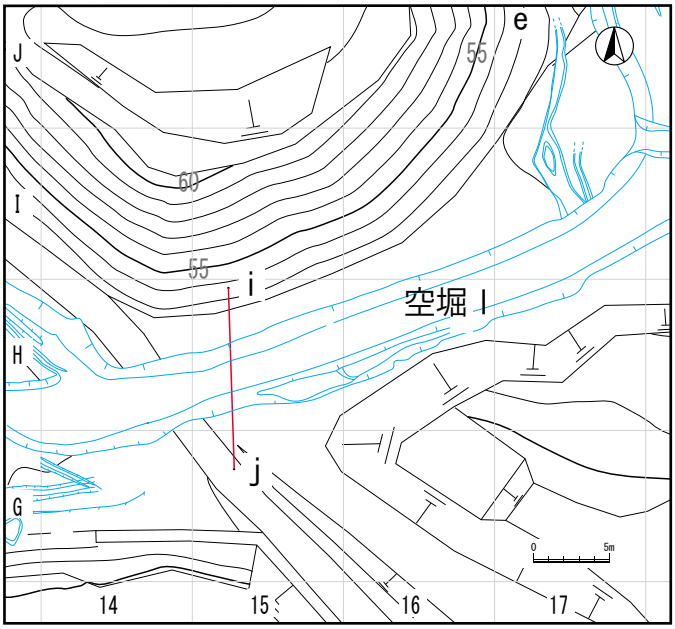


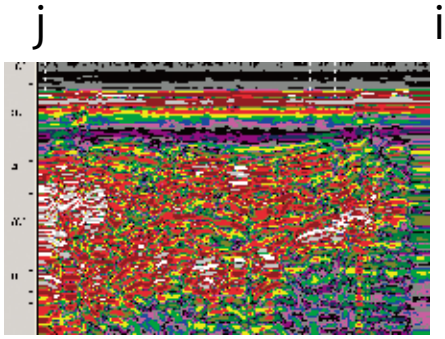


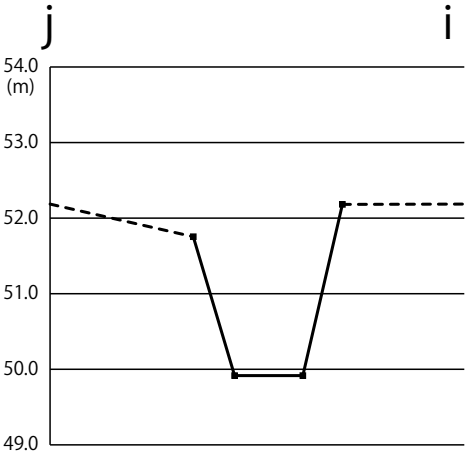
第190図　地下レーダー探査結果(2)

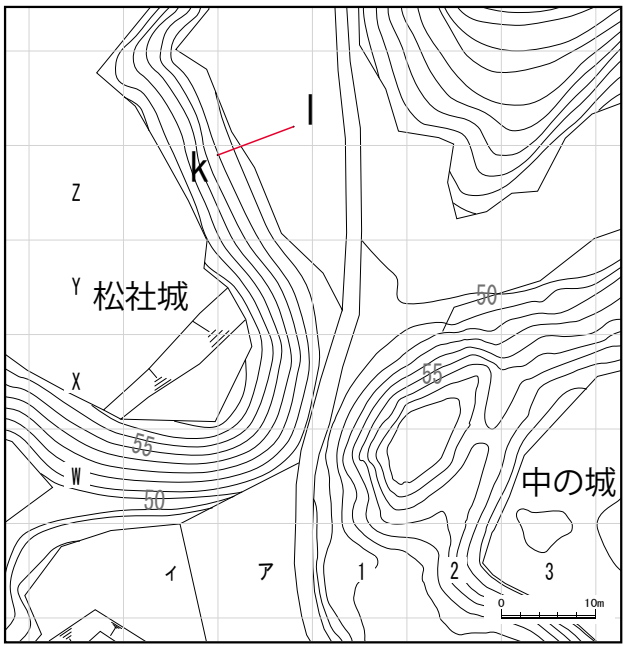
そして，発掘調査や地形から判断して堀が走る方向に対して垂直にアンテナを走らせた結果，「塩の城」の東部から南部にかけて設定した測線に堀（空堀Ⅰ）と考えられる周囲とは異なる反応が確認された。

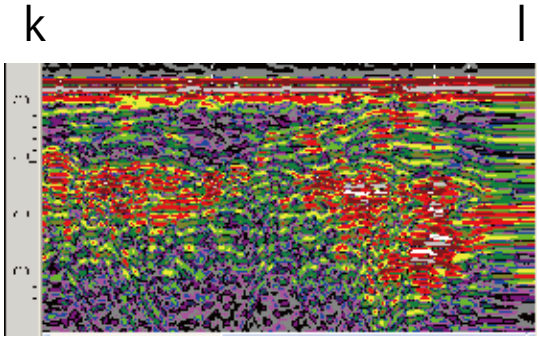
さらに，「中の城」より西側について，丘陵先端部にかけて，部分的に探査を行った。樹木などによって探査範囲は限られたため，設定した測線に対してすべて明確に堀と推定される反応がみられたわけではないが，「中の城」西側と「松社城」の間，あるいは「松社城」北側において周囲とは異なる反応を捉えることができたと考えられる（k－lライン）。











第191図　地下レーダー探査結果(3)

第５章　総括

第１節　虎居城の縄張り

虎居城の縄張りは，東側の字東ノ口から字薬師院・字風呂ヶ迫・字瀧ノ上・字井穴・字城段・西の字城内・字八女とし（参照：字絵図　注１），町道城の口・五日町あたりから川内川まで，大手口は宮之城中学校の南西付近であるとされている。

縄張りの想定される範囲は，「鹿児島県の中世城館跡」市来家隆，日本城郭体系「虎居城祉平面図－略測図」，宮之城文化懇談会ふるさと文化講演会「山城・虎居城について」三木靖の資料で概略説明されている。

「三国名勝図会」の項目名に“宮之城”とあり，城については『宮之城村に在，傳云く，往古大前某，初て此城を築，虎居城と名けて，是に居ると，按康治年中…』と「虎居城」の記載がある。

江戸時代中頃に編纂されたといわれる「宮之城記」，「祁答院記」によると，平安時代の薩摩国の国司として大前道助の名が記されている。祁答院地方は大前氏が領有していた。領地・名田の中心は時吉城であったといわれ，その時吉城を上の城，虎居城を下の城といい，虎居城は大前道秀によって平安時代の終わり頃築城され始めたといわれる。大前氏の築城，統治を第一段階とすると，宝治二年（1248）渋谷一族（吉岡三郎重保）が鎌倉幕府により相模の国から下向し祁答院の地頭職として封に就いた。渋谷氏が下向したときは，在地領主の大前氏が領地を所有しており，大前氏と渋谷氏との相論（土地争い）の中で1370年代南北朝の終わり頃，祁答院地方は大前氏の段階から渋谷氏に移ってゆく。この時期が虎居城の第二段階である。

虎居城に関係する合戦は，明徳年間（1390年頃）和泉大重悪四郎が渋谷重茂攻めたといわれる。

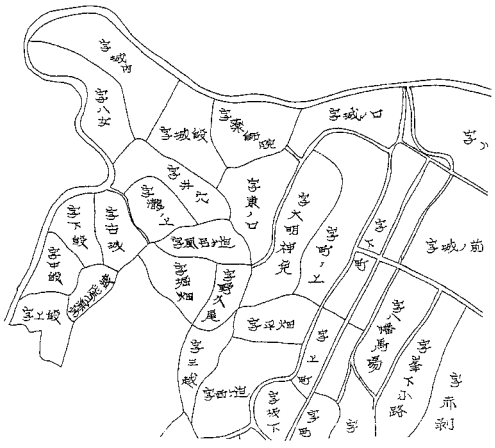
段三段階は，虎居城の城主は島津氏と縁戚関係にある入来院氏，その後、島津歳久が居城（1580～1592年）し歳久が秀吉に自刃させられた後，都城の北郷時久が文禄４（1595）年に領主として支配し，虎居城に入城した。時久は祁答院を「宮城」と命名し慶長元年宮之城で死去した。



『宮之城記』



『三国名勝図会』



『字絵図』



『旧宮之城郷大地図』県立図書館蔵

第192図　字絵図他・資料

その後，島津領となり，初代忠長は城に入らず城には家臣や娘を置いたと云われる。虎居城の今の縄張りは，本郷氏以降である（三木靖先生御教示による）。

虎居城は『宮之城記』によると「塩の城」，「中の城」，「松社城」，「おきたの城」，「小城」，「小姓屋敷」，「普請場」，「昌英大姉屋敷」等の曲輪から構成されている。今回の緊急事業に起因する虎居城跡の調査は，字城内・字八女・字井穴内にあたり，西から「中の城」，「塩の城」，東の「おきたの城」の曲輪にかけての範囲である。

名称や表記については，「宮之城記」に記載されている表記名を使用することとした。

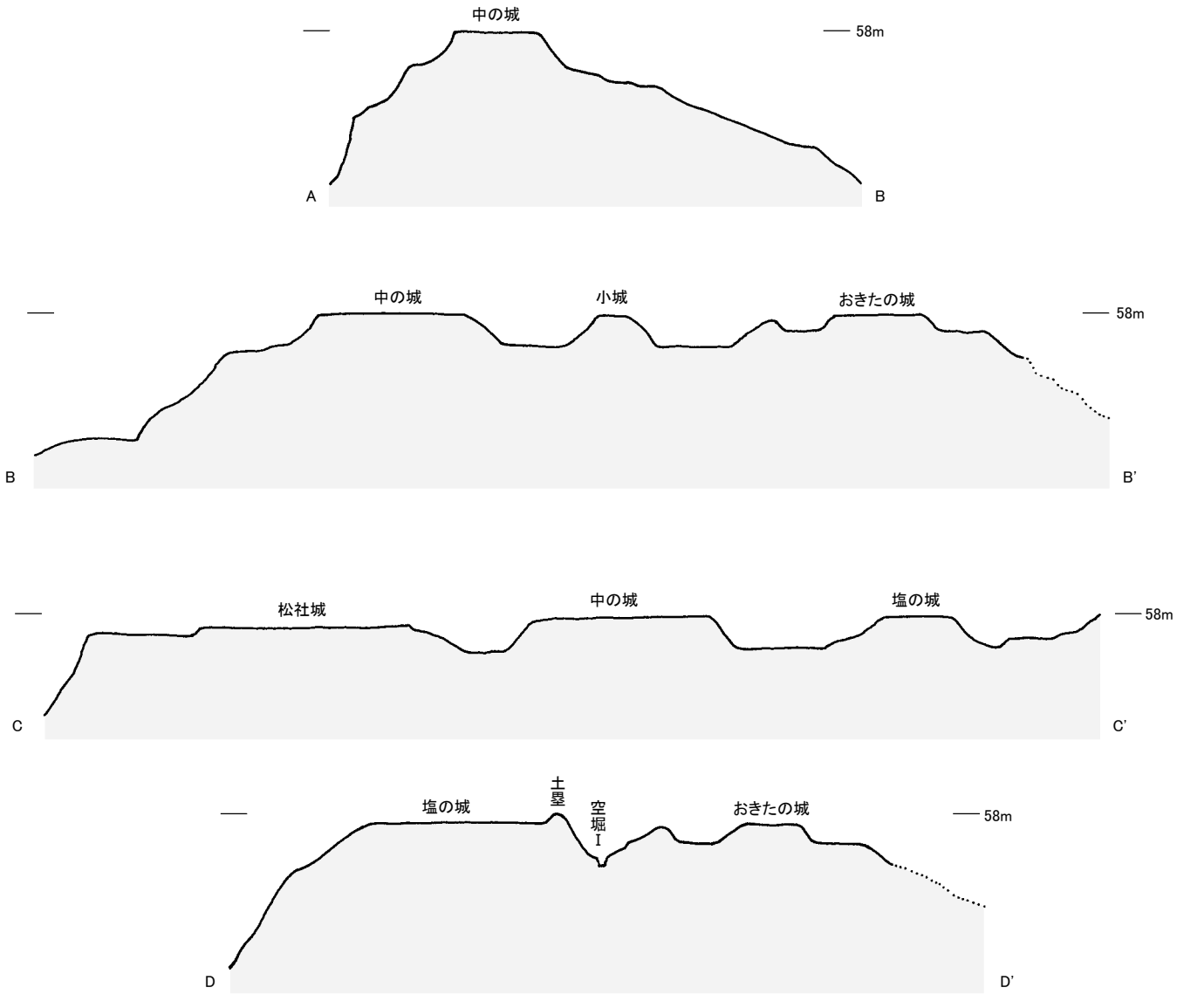
中世山城は，曲輪，曲輪の斜面，空堀（谷部）とで構成されている。曲輪は広大で，それぞれが独立的で，周囲を空堀で養護している。南九州の山城に見られる形態である。

第２節　縄張りと地形

第193図は，半島状に位置する虎居城跡の宮之城中学校校庭北側ほぼ全域の縄張り，調査区内曲輪を含めて大きく断面に起こし，高低差を表現したものである。

ＡＡ’は，Ｅ地区からＪ地区，Ｋ地区をつなぐ北東から南西へ中の城を断面で表したものである。北東側は川面へ急激に落ちる断崖になっているが，南西側は比較的なだらかな斜面になる様子がわかる。

ＢＢ’はＡＡ’と中の城上で直角に交わる断面線で，ＢＣＤＥ地区を貫いている。北東側から南西側の中学校校庭にかけての断面になる。今回調査は行わなかった松社城から中の城，塩の城を通る断面である。各曲輪及び曲輪に挟まれた低地部には，大きなレベル差は認められない。松社城から北西にある急斜面はまさしく天然の要塞を彷彿とさせる地形であることがわかる。

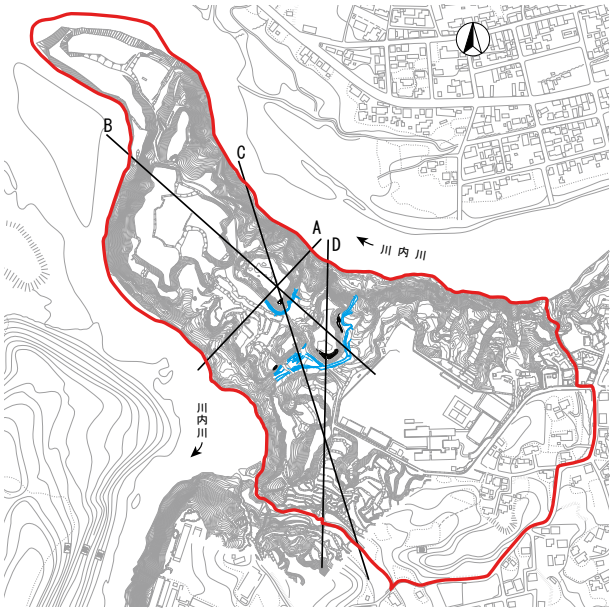


第193図　地形断面

ＣＣ’は中の城から小城を貫き，おきたの城までの南北を貫く断面である。調査区でいうとＭＧＨＩＪＤＥ地区を貫いている。中の城から近藤屋敷，おきたの城までの断面である。各曲輪の立ち上がり，平坦面の様子が観察できる。

ＤＤ’はＭＧＨＢＣＡの各地区を貫き，塩の城からおきたの城を通る断面である。塩の城の土塁及び空堀の断面が含まれる。

このように断面を表したことで，虎居城の山城としての優位的な環境及び立地的価値が自ずと見えてくる結果となった。



第194図　地形断面位置

第３節　遺構・遺物の編年について

虎居城跡出土青磁，白磁，青花，木製品，炭化物出土遺構の年代について第195図に表した。青磁，白磁，青花は（上田1982，森田1982，小野1982）の編年表に該当する虎居城跡出土遺物を掲載した。土師器は腰部をヘラ削りした坏A類を16世紀後半に比定し掲載している。また，木製品と遺構内出土炭化物を放射性炭素年代測定法（AMS法）で測定した結果を掲載した。測定結果は実年代に近づけるために暦年較正年代の１標準偏差（1σ＝68.2%）で表している。１σの中には２つ以上の範囲で表されるものもあるが，便宜上，複数の範囲があるものは合わせて表記した。詳細な暦年較正年代値については第58表を参考にしていただきたい。

これらによると，青白磁，青花と木製品の年代は15～16世紀が中心となる。青磁椀はB－Ⅰ類，幅の広い片切彫の鎬蓮弁文（791）が13世紀後半～14世紀前半と比定されるが，出土数は少ない。中心となるのはB－Ⅱ類，B－Ⅳ類で細線の線描連弁文，剣頭が連弁としての単位を意識しないで施されるものである。C類はⅡ，Ⅲ類の口縁部に雷文帯を施すものが多く15世紀前半～16世紀代に比定される。

白磁はD，E群が多く15世紀後半～16世紀前半となる。D群は小型の高台付皿，坏，多角坏で構成され，548，800のように高台に４ないし５か所の弧状の抉り込みを入れるものが属する（アーチ状高台）。E群は端反りの椀，皿，碁笥底の皿等であり，464，469，693等が該当する。

青花（染付）は碗B群の端反り碗(181等)が15世紀代に比定される。181は小ぶりで器壁が薄い。碗C群（182他）はいわゆる「蓮子碗」の系統に属し，広く開いた胴を持ち，見込みが高台内に凹む器形である。15世紀後半～16世紀半ばに比定される。碗E群（116他）はいわゆる「饅頭心」の碗の系統に属するもので小ぶりのものが多い。見込み部分が緩やかに盛り上がっているのが特徴で，16世紀後半に比定される。皿B群は高台を持つ端反りの皿（186他）である。16世紀後半に比定される。皿F群（639他）はいわゆる「つば皿」の系統に属し丸く内弯する胴から斜めにつばがつく。639は稜花皿で，皿F群は16世紀末以降に比定される。

次に木製品と遺構内出土炭化物の^{14}C年代測定の結果について述べる。第195図に掲載したものは分析委託したものの一部であり，測定結果は13世紀後半～14世紀のものもあるが，15世紀～16世紀初頭が中心となっている。前述したように空堀Ⅰ，Ⅱの時期については堀内から出土した櫂(749)の^{14}C年代測定値や堀が埋まった後に建てられた掘立柱建物跡の柱の^{14}C値等からその時期を検討したが，これは，あくまでも^{14}C年代測定の結果を前提にした考察であるため，今後関連資料の増加を待ち，検討していきたい内容である。

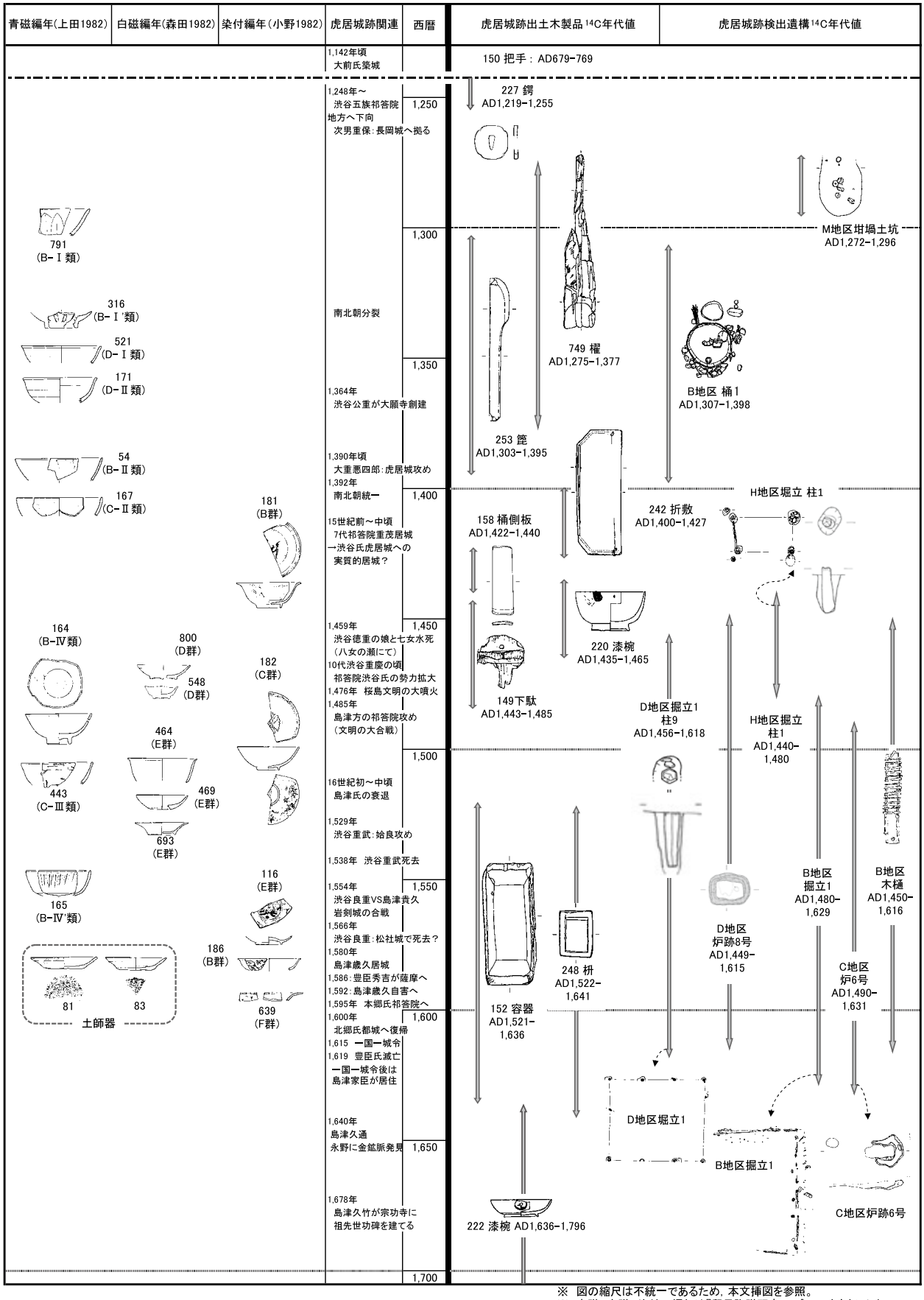
１　遺構について

虎居城跡は，川内川に半島状に突き出た川との比高差約43ｍの河岸段丘に位置している。北・西・南側の三方を川に囲まれ，台地縁辺は急峻な崖となる要害堅固な地形を選んで築かれている。

三方を取り巻く川は防衛上の堀の役目を担っている。また，下流の南，Ｌ地区の河岸には船溜まりがあったという伝承もあり，物資運搬の重要な場所であり，川内川の水運を押さえるための城でもあることが考えられる。

谷と空堀について

東側つまり陸からの城攻めにあたっては，独立した曲輪と曲輪の間には曲輪との比高差約８ｍの大きな自然の谷（堀切）が存在している。谷部はＢ地区とＨ地区を結ぶラインとＤ地区とＪ地区を結ぶラインは，「曲輪Ⅰ（塩の城）」を挟んで「曲輪Ⅱ（中の城）」と「曲輪Ⅳ（おきたの城）」との谷(空間)が非常に広く，この２つの谷はそれぞれの曲輪間を強力に遮断した防衛線の効果



※ 図の縮尺は不統一であるため，本文挿図を参照。
※ 青磁，白磁，染付の編年は『貿易陶磁研究No2』1982をもとにした。
※ 木製品等の14C年代測定値は暦年較正値（1σ）を掲載した。

第195図　編年と14C年代測定値

を意識したものと思われる（第196図）。（三木靖・太田秀春先生現地指導時の御教示による。）

谷部には，曲輪を取り巻く空堀を設けている。空堀Ⅰは「曲輪Ⅰ(塩の城)」の東・南の外縁に沿って裾野部分から「曲輪Ⅳ(おきたの城)」の西側裾野部分に位置し，北側では浅い溝状と化し，南側では浸食された深いＹ字状の谷となって南流する。さらに空堀Ⅰは曲輪Ⅰの南東裾野部分で西に分岐して，「曲輪Ⅲ(小城)」の東側外縁部分へと流れ，南流する。空堀Ⅱは「曲輪Ⅱ(中の城)」の東・南の裾野部分を廻り，調査対象外の虎居城の本丸と言われる「松社城跡」の南側外縁部分に延びるものと想定される。

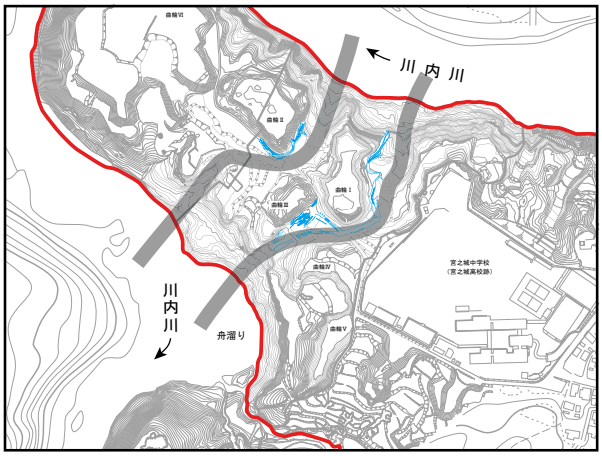
空堀Ⅰは「曲輪Ⅰ」と「曲輪Ⅳ」のライン，空堀Ⅱは「曲輪Ⅰ」と「曲輪Ⅲ」のラインの遮断を主眼として構築され，特に「曲輪Ⅰ」の土塁真下裾野部分にあたる空堀Ⅰは，最大幅5.5m，掘底最大幅2.7ｍで精密な箱堀状を呈し，その規模と形状のシャープさは格別なもので，特別な意味合いをもっていると思われる。

また，空堀Ⅱ北側（Q～S－5・6区）の堀底には約６～７ｍ間隔の４か所に幅80㎝前後，高さ1m前後，空堀Ⅱ-b（P・Q－6・7区）の堀底には８ｍ隔てて２か所に幅10㎝，高さ10㎝の小型の堀底仕切りが設けられている。

谷部と空堀は曲輪間の遮断性を目的とし，強力な防衛ラインを形成するとともに，城道・通路としての使用も考えられる。

さらに，防御遺構として土塁の存在がある。

曲輪Ⅰ(塩の城)，Ⅰ地区(小城)の腰曲輪に現存する矮小な土塁)，曲輪Ⅲ(中の城)で現存している。これらの土塁には規模の大小の違いはあるが，曲輪の南側縁辺部に位置していることや曲輪と一体的な空堀の真上に位置していることなど共通し，東・南からの進入の防御遺構としての役目はもとより，権威を象徴するものとしての存在が推察される。特に，曲輪Ⅰ（塩の城跡）の土塁は象徴的である。これまで，土塁については，知覧城跡(蔵之元)や志布志城（内城），頴娃城跡（本丸跡）等にもその存在が報告されている。



第196図　遮断ライン

空堀の破棄時期

Ｂ地区，Ｈ地区，Ｊ地区には空堀が構築され，空堀の破棄後，整地され掘立柱建物跡や柵などの遺構が構築されている。空堀の構築時期については現段階では判断することは困難である。

堀の堆積状況は，レンズ状に土砂が堆積していることから，自然堆積の状況が推察できる。堀底のさらえなどの様子は確認できない。

空堀Ⅱ内から出土した櫂（749）の^{14}C年代測定値はAD1,275～1,377という結果である。これを前提として最も古く仮定する。AD1,275には櫂の素材となるスダジイが伐採されたと考え，櫂の製作，堀への破棄までのスパンが最短であったとしてもAD1,275であるから，この時期には空堀Ⅱが存在していたことになる。では次に堀Ⅱの埋まった時期を考える。空堀Ⅱの埋まった後に建ったD地区掘立柱建物跡の柱9の^{14}C年代測定値はAD1,456～1,618という結果である。これを最も新しい時期で考えるとAD1,618年に柱の素材が伐採されて，その後何年使われずにいたかは不明だが，仮に伐採後すぐに建物を建てたとした場合，AD1,618年には空堀Ⅱは埋まっていたこととなる。^{14}C年代測定値と掘立柱建物跡の柱が伐採後すぐに立てられたという前提で空堀Ⅱの存在期間はAD1,275～1,618の中に収まると想定される。

虎口と城門について

城の出入り口である虎口は，曲輪Ⅰ（塩の城跡）の西側縁辺部の２か所（虎口Ａ，虎口Ｂ）で発見され，さらに各虎口は形態の異なる２つの虎口があり，計４基が発見された。虎口へは登城道は西側傾斜面からが想定されるが，完全に崩落していることから不明確である。

虎口Ａは，同じ間口で左右反対向きに二手に分岐し，右側は５段の階段からなる虎口Ａ１，左側は踏みかけ石・土留め石を設けた３段の階段からなる虎口Ａ２がある。基本形は枡形の虎口である。虎口Ａは，二重構造に見えるが，虎口Ａ１には投げ込まれたと思われる多数の石に覆われていることから，Ａ１がＡ２より古いものと想定しているが，二重構造の虎口の可能性もあり，今後の課題としたい。

虎口Ｂは，虎口Ａの約８ｍ北側に位置している。

虎口Ｂ１は，西から北へ折れて直行して登る３段の階段からなる枡形の虎口で，１段目には左のテラスを通ってスロープで曲輪へ登る。虎口Ｂ２は，虎口Ｂ１の北側にほぼ並行に隣接する。虎口は平入りで，曲輪へ登る方向は虎口Ｂ１とほぼ平行する。

登城道は崩壊等を受けて定かではないが，曲輪の西側N-11区からM-12区にかけて西方向へ山稜状に延びた緩やかな地形が存在し，この尾根を登城道と仮定した場合，虎口との関連性が見えてくる。位置的に，南側の虎口Ａが先行し，何らかの要因で使用不能となり手前北側

に虎口Ｂを新たに設置したと想定される。しかし，登城道や虎口入り口が不明な状況の中で，形態の異なる虎口Ａ１・２と虎口Ｂ１・２，中世山城時の遺構かその後の遺構なのか，その変遷については明言できるものではないが，当時の遺構であることは推察されるところである。

なお，平入りの虎口Ｂ２の延長上に一対の大型柱穴痕が発見され，「城門」としての存在が推測される。

南九州の城跡でこうした門跡と思われる発見はないが，虎口と門の関係について，知覧城の蔵之城跡において平入りの虎口(B)と木戸（門）の存在が想定されており，中世山城調査で注視していかねばならない。

掘立柱建物跡について

掘立柱建物跡は，曲輪Ⅰ，曲輪Ⅱ，低地谷部のＢ地区，Ｄ地区，Ｈ地区からは夥しい柱穴が検出いている。柱筋が真っ直ぐ通らないものが多く，建物の平面形と規模を指摘するには困難を要した。なお，低地谷部の掘立柱建物跡は，主に柱痕を伴うものである。谷部の掘立柱建物跡や柵・木樋などの遺構は堀が埋まった後に構築，設置されたものである。

曲輪Ⅰ「塩の城跡」の掘立柱建物跡は，掘立柱建物跡Ａは４間×３間が２棟，４間×２間が１棟，２間×１間が１棟，掘立柱建物跡Ｂが３間×３間が４棟の計８棟を確認した。建物の配置や方向，重複から，掘立柱建物跡Ａ１～４は創建時，その後，掘立柱建物跡Ｂ５・６，掘立柱建物跡Ｂ７・８の３時期にわたるものと推定した。

掘立柱建物跡Ａは，１間あたりの長さは桁行で192.2～212㎝（6.3～7尺），梁間で189～199㎝（6.3～6.6尺），掘立柱建物跡Ｂは桁行が216.3～230㎝（7.2～7.6尺），梁間が200～227㎝（6.6尺～7.5尺）となっている（なお，５号は３間×３間にもかかわらず桁が梁より60㎝以上長く長方形の建物であり計測対象から除外した）。創建時と思われる掘立柱建建物Ａが後出する礎石を伴う掘立柱建建物Ｂより，１間あたりの桁・梁ともに柱間の寸法が短いものとなっている。

曲輪Ⅱ「中の城」跡の掘立柱建物跡は２間×？が２軒を確認した。建物の総桁行は確認できなかった。１間の柱間の寸法は，桁行で168～210㎝（5.6～6.95尺），梁間で185～210㎝（6.1～6.95尺）である。

Ｂ地区，Ｄ地区，Ｈ地区は低地谷部にあたり，掘立柱建物跡が８軒，そのうちが柱痕を伴った掘立柱建物跡が５軒がある。Ｂ地区の掘立柱建物跡１は，「コの字型」に並んだ横架材と杭列からなる建物で，柱や柱間数は確認できないが梁の長さは22.38尺である。掘立柱建物跡２は六角柱・丸柱の柱を用いた２間×３間で，建物内には石組遺構や桶遺構を伴っている。南端の桁と梁の柱間は175～190㎝（5.79～6.29尺）と狭く，桁行の柱間は275～400㎝（9.11～13.25尺），梁間は190～255㎝（6.26～8.44尺）である。掘立柱建物跡３は柱間は186～249㎝（6.1～8.94尺）１間×１間の建物，Ｄ地区の掘立柱建物跡１は３間×？，掘立柱建物跡２は３間×３間，掘立柱建物跡３は２間×１間，掘立柱建物跡４は３間×２間の４棟を確認した。この中でＤ地区の建物２～４の桁行の柱間は63.1～214.4㎝（5.4～7.1尺），建物３の梁は196.3㎝（6.5尺）である。Ｈ地区の掘立柱建物跡１は１間×１間であるが，桁行が360㎝（11.92尺）と長いため２間×１間の可能性がある。

柱痕には四角形，六角形，八角形，多角形，丸柱の多種多様なものを使用し，極めて珍しい出土である。

八角形の柱痕について『神社建築を構築する主柱は丸柱であって，その床下部はほぼすべてにおいて八角形である。すなわち，丸柱を調整するためには前段階で八角形断面形状を経ることが普通であって，それがこの建物に使われていることが奇異であるわけではない。むしろ八角形柱痕がこの建物が丸柱によって構築されたものであることを示唆し，さらに高床を構えた可能性をも指摘できる例といえる』（揚村固氏の現地指導による)。

虎居城との関連として，宮之城記の「諏訪社」，「飛諏訪」，「薬師院」の説明や神社誌の文献資料から，虎居城と社寺との関わりを知ることができる。

宝治２年（1248）渋谷重保の薩州下向時に勧請した信州諏訪社に由来するものとして，宮之城記の「飛諏訪」の説明では“城内堀のめんに旧跡あり来由不詳”とあることや諏訪神社の変遷を記述した神社誌の「神社明細帳」から，寺社の建立や堀破棄後の様子が推察される。しかしながら，一国一城令後，宮之城島津等の居住地として使われていることから武家屋敷なども想定し，今後の研究・検討課題としたい。

曲輪Ⅰの１間×２間，Ｂ地区の１間×１間，Ｈ地区の１間×１間の掘立柱建物跡は，規模や柱間等から倉庫的な建物が考えられる。また，Ｈ区の掘立柱建物跡は両端に切込みと中程に柄穴をもつ横架材と推定される角材は建物の構造を知る上で貴重な資料である。

竪穴建物跡について

Ｍ地区（曲輪Ⅴ）の一段低い広場に２基の竪穴建物跡が発見された。竪穴建物跡は，機能的に中世の山城で必要な施設であるといわれるが，南九州の中世城郭内の竪穴建物跡や遺構の性格については，苦辛城跡(16世紀中心)の鍛冶場遺構，平泉城跡（14～16世紀），中尾田城跡（13～16世紀），野々美谷城跡（15～16世紀）金属加工，取添城跡（13～16世紀），都之城跡（14～17世紀）鍛冶工房，金石城跡（16世紀）鍛冶工房，櫛間城跡（14世紀）で報告されており，専用住居，作業場，倉庫，あるいは鉄関連鍛冶工房跡等の用途が考えられている。

Ｍ地区の小規模ながらも，製鉄及び錬銅の鍛冶炉関係の存在の可能性がある炉跡があることから工房関係の竪穴建物跡を想定している。

竪穴建物跡２から15世紀の奈良火鉢が出土している。

礎石建物跡について

低地谷部のＨ区から出土した礎石建物跡である。大石の礎石５個を用い，正面の南側桁行は２間，奥行きの梁行は１間である。正面の北側桁行の中央は欠けており，喪失したものか，柱間を広く使う意図で二間飛ばしたかは不明であるが，２間×１間の礎石建物が想定され，桁400㎝，梁200㎝である。桁・梁ともに柱間は心芯で，約190㎝（6.27尺）～200㎝（6.39尺）である柱間としては，近世の柱間から少し広い程度であると揚村固氏は述べている（現地指導所見による）。

建物の内部床面には，集石と相当量の炭化物が認められ，建物の中央で火を用いてものを焼く作業が行われいたものと推定できる。主要な柱を礎石建てにすることは，一般に耐久性を想定した工法と思われる。

炉跡について

今回の調査では，Ｃ地区(曲輪Ⅰ)で11基，Ｄ地区では10基，Ｅ地区(曲輪Ⅱ)で7基，Ⅰ地区(曲輪Ⅲ)で2基，Ｍ地区(曲輪Ⅴ)で4基の計34基の炉跡が検出された。

各曲輪・地区での検出状況は異なるが，共伴遺物の有無や，各曲輪との位置関係から，炉跡を厨房的要素のある竈遺構と，手工業生産を伴う金属加工関連遺構に分類した。

Ｃ地区（曲輪Ⅰ）掘立柱建物跡を主体とする柱穴は中央部および南側に集中し，炉跡の分布は北西側に集中している。形状は隅丸方形6基，楕円形及び馬蹄形4基である。^{14}C年代測定の結果から，建物現存時と同時期に使用された様子が伺え，厨房的要素のある炉跡と推測できる。

Ｄ地区　隅丸方形の炉壁を持つものが多いことや，Ｃ地区と同様，掘立柱建物跡やピットの密集域とはある程度離れていることから，竈の使用だったことが推測できる。ただ低地部での炉跡検出はD地区のみである。炉跡8の炭化物について，^{14}Cの結果15～16世紀前半という結果が出ている。　Ｅ地区（曲輪Ⅱ）炉跡は他と異なり，集中域を伴わず調査区全体に散在している。多くが欠損するなど，検出時の保存状態は芳しくない。炉跡6内の炭化物は^{14}Cの結果，15～16世紀前半であり，用途は竈と推測できる。

Ⅰ地区（曲輪Ⅲ）2基とも形状は瓢箪型及びそれに近い楕円形である。床面の状態や炉壁のない様子から，簡易的に或いは短期間に竈として使用されたと推測できる。

Ｍ地区（曲輪Ⅴ）一部削塀されているものの楕円形の炉跡が検出された。遺物として坩堝が4点，鞴羽口2点，小型の青銅製品が2点出土していることから，錬銅鍛冶遺構と推測される。同地区の坩堝集中域からは17点の坩堝や鞴羽口が出土している。本曲輪からは緑青付着の坩堝や青銅製品等や鉄滓，大量のスラグの検出があるため，小規模ながらも，製鉄及び錬銅の鍛冶炉関係の存在の可能性がある。

県内類例では，恒吉城や谷山弓場城のように，居住域とは明らかに異とする場所に鍛冶炉を設置する例がある（佐藤2000）ことから，虎居城でも，住居とする場所と，生産的手工業の場所は異なっていた可能性が推測できる。また，三木靖氏は,地形や遺物から見ると鍛冶は難しそうで，坩堝を埋設した可能性も考えるべきだと述べた。

各地区の検出状況から，34基の炉跡について，そのほとんどは中世掘立柱建物跡との関連や立地的環境，共伴遺物出土状況から，厨房的な用途としての竈施設だった可能性が高い。ただ，竈と想定した場合，屋根，囲い等の附属設備の存在があったことが推測される。今回の調査では，残念ながら竈に付随する建物関連遺構は検出されなかった。

柵（しがらみ）について

本遺跡からは土留めに使われた柵(しがらみ)がH地区，J地区で出土している。

作りは杭を等間隔に打ち込み，その間に竹を絡ませて作ったものである。土に埋まった杭や竹などの木・竹製品は傷みやすく，長期間形を保つことが難しいが，出土区域が湿地帯であったことから，ほぼ当時の現状を保った状態で出土した。

H地区の柵（P131図参照）は，二列で構成されており，その高さの差は30㎝程度である。下段の柵は建物までの道として利用する場所の土留め，上段の柵は平坦地を確保するために作られたものと考えられる。

J地区からは，柵を作ったと考えられる杭列が出土している。こちらもH地区と同様，土が崩れるのを防ぎ，その上に平坦地を確保するために作られたものと考えられる。

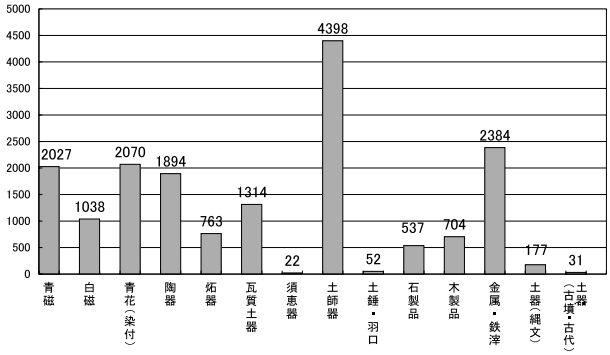
これまで発掘された県内の城郭跡からの柵の出土例は少なく，城郭における柵の役割やについて研究する上で貴重な資料になると思われる。

第４節　遺物

１　遺物の出土量と傾向

今回の発掘調査において出土した遺物は小片も含めて総数約17,400点で，内811点を掲載した。器種毎の出土量の内訳は第197図のようになる。総点数で言うと，土師器の量が最も多く約4,400点（約25%）で，次いで青花，青磁，金属・鉄滓が2,000点以上出土している。白磁も1000点以上出土し，全体の６％となる。また，低地（谷部）のB，D，H，J地区から700点を超える木器が出土した。

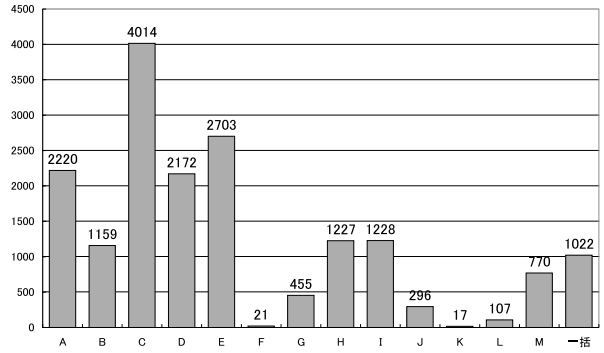
地区毎の遺物出土量を比較すると出土数が最も多いのはC地区で4,000点以上出土している（第198図）。次いでE，A，D地区で2,000点を超える。調査面積が異なる



第197図　器種別遺物出土数

ため単純に比較することは出来ないが，調査対象区の中心を北西－南東方向に伸びた通路よりも北側にある調査区がA，B，C，D，E地区で，この５地区の出土数が多く，全体の70％を占める。

地区毎の器種別の出土傾向として，A地区では土師器は腰部をヘラで削り面取りした坏，皿のA類が多く出土している（79～83，87）。これは富隈城跡や都城跡でも出土しており，時期は16世紀後半に比定される。D地区からはカムィヤキや滑石製石鍋，垂飾品が出土した。E地区からは縄文時代の炉跡２基と縄文時代早期の土器が多く出土し，M地区からは炉跡内より坩堝が集中して出土した。



第198図　地区別遺物出土数

２　祭祀関係の遺物

Ｈ区の溝状遺構から出土した木簡256がある。現存長12㎝で本体は一部欠損している。表面には墨書で「南無○□□」の銘記があり，南無以下の部位は破損し解読は困難であるが，○は「宗」と読め『寂』の異体文字とも考えられる。位牌の木簡と推定される。

３　漆について

漆製品については，漆器の椀や皿，木製の鍔などが出土している。そのうちの中に，Ｂ地区から口縁部を膠布で補修した漆椀（220），内面に漆の皮膜が付着した青磁椀（164）があり，このことは当地で漆を用いた作業が行なわれていたことを知る貴重な資料である。

４　土師器の坏・皿の分類

土師器の口縁部から底部が残存するする125点を対象に，法量差から坏と皿に分類した。器高が３㎝以上を坏，2.9㎝未満を皿とした。

坏は，器形によって５つに分類した。

坏Ａは，腰部から体部～口縁部へ直線的に移行して外傾する器形である。内面の成形は底部から腰部へ緩やかな弧状を呈し，稜がみられない。口径が広く，口縁部は先細りとなる。比率は8.3％。坏Ｂは，腰部から体部～口縁部へ直線的に移行して外傾する。底部からの立上がりは屈折する。11.1％。坏Ｃは，丸味を帯びた腰部から体部・口縁部は直線的に移行して外傾する。内面の底部と腰部の境に稜線が付される。比率は55.7％で最も多い。坏Ｄは，丸味を帯びた腰部からやや垂直に立つ口縁部となる。比率は11.1％で最も多い機種である。

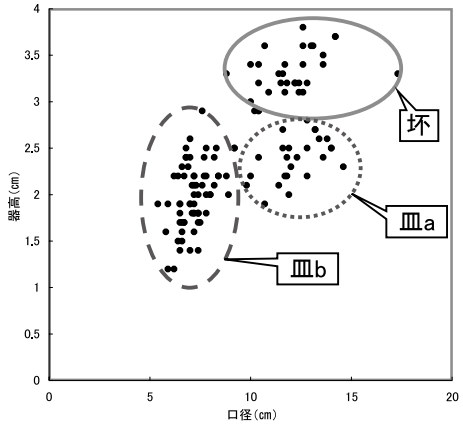
坏Ｅは，腰部から体部，口縁部へ直線的に垂直に移行し，口縁部端部は外反する。比率は11.1％。

坏Ｅは，腰部は丸く，口縁部は垂直気味に立ち上がる。器壁は厚い。比率は13.8％。

皿は，器高が2.9㎝未満で口径5.4㎝～14.2㎝の小型皿である。93個体を対象とし，器形によって６つに分類した。

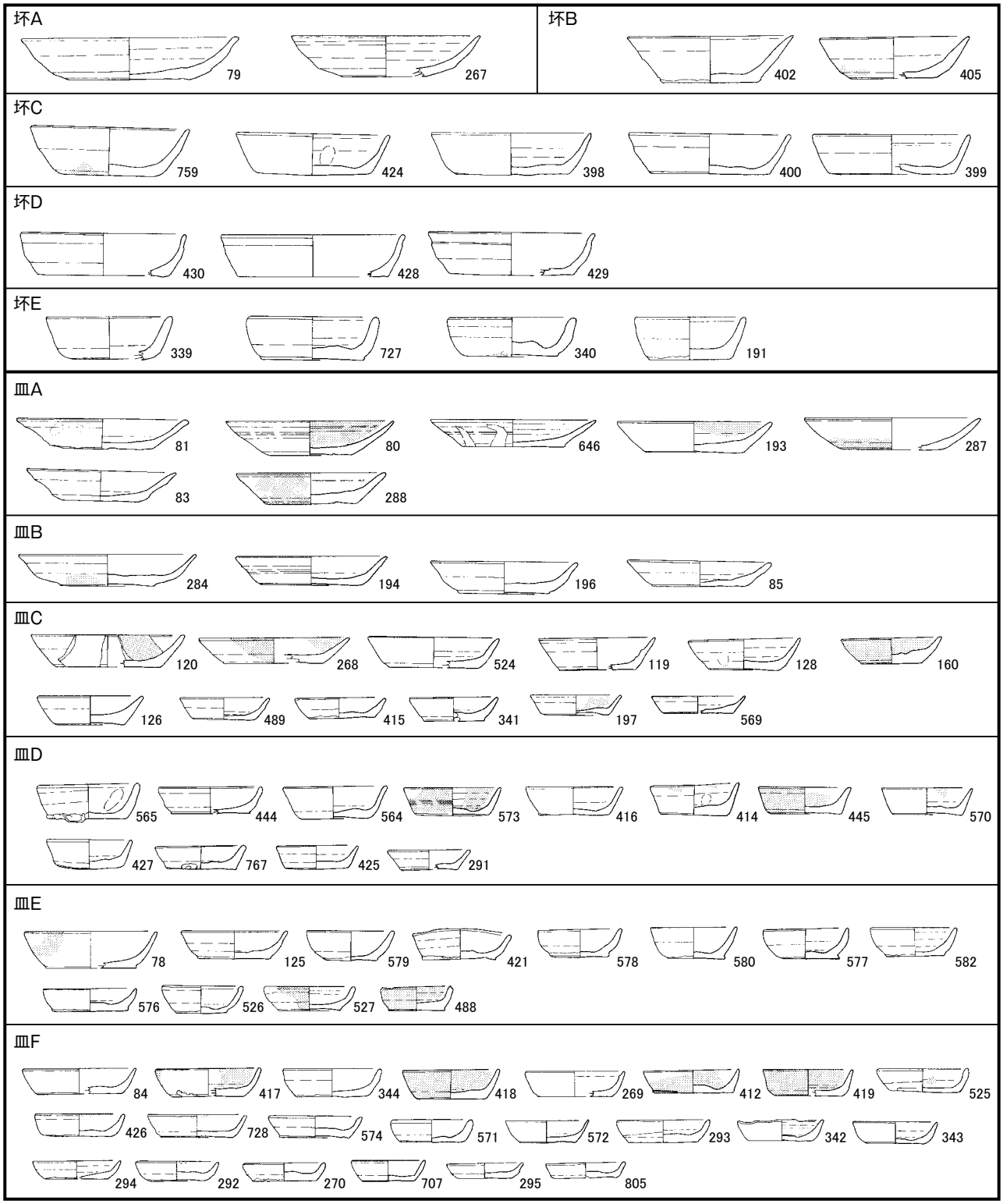
皿Ａは，腰部から体部・口縁部へと直線的に移行して外傾する。口縁部は先細りとなる。内面の底部と腰部の境には稜線が付かない。比率は15.7％。皿Ｂは，腰部～体部～口縁部が直線的に移行して外傾する。内面の底部と腰部の境には稜線が見られる。比率7.9％。皿Ｃは，腰部は底部との境で屈曲し，腰部から体部にかけて直線的に移行し外傾が緩やかな口縁部となる。比率は16.9％。皿Ｄは，丸味を帯びた腰部で底部との境は屈曲し，皿Ｃよりさらに口縁部がに立つ。17.9％。皿Ｅは，丸味を帯びた腰部から丸味を帯びた口縁部となる。特に底部がわずかに外に突き出る。15.8％。皿Ｆ類は，腰部は丸味を帯び，内弯気味体の口縁部となる。器高が低い比率は27％で，この種の４分１余りを占めている。

皿の特徴として，平底の底部は糸切り底で，腰部は面取りして浅い凹線状または平坦に仕上げて，体部に弱い稜線が付される。食器，または煤の付着したものは灯明皿，金属の付着したものは坩堝として用いている。



第199図　土師器法量相関グラフ

また，皿には口径と器高の法量から口径の小ささに比べ器高が高いものから低いものでまであるが，口径が６～８㎝の小皿は，器高が1.6㎝～2.9㎝と口径が小さい割に器高の高低差に幅があるaグループと口径が10～15㎝の小皿は，器高が1.8㎝～2.8㎝と約１㎝の幅に収まるbグループに分けられる（第199図）。これらの坏，皿は共伴する青磁や青花などと15～16世紀相当の時期と思われる。坏と皿の分類については，知覧城跡の出土土師器坏をＡ・Ｂ，皿をＡ～Ｈ類に分類されている。



第200図　土師器坏・皿分類

金属器について

本報告書に掲載した85点の金属器について，その内訳を①古銭，②生活用具（簪，キセル等）③工具（鑿，釘），④武器（鏃，鉄砲玉），⑤その他（使途不明金属器を含む）の5種類に分類した。その結果，古銭（43点）や生活用具（19点）の占める量が多く，次いで工具（10点），その他使途不明の金属器（8点），武器は（5点）となる。

第５節　おわりに

虎居城跡の遺構・遺物を通して，中世山城の歴史や人々の生業等について若干の検証する機会を得た。時期は出土陶磁器の編年，^{14}C年代測定値等から多くは15～16世紀に比定される。当時の虎居城跡は祁答院渋谷氏の勢力が増し，島津氏との攻防が盛んに行われていた時期でもある。実質的に渋谷氏が虎居城跡に居住したとされる時期は7代渋谷重茂の頃で，15世紀前半から中葉頃とも考えられており，遺物量の増大する時期と合致する。また，10代渋谷重慶のころには，祁答院氏の勢力が拡大した時期である。16世紀初頭～中葉（戦国時代）の島津氏一族は内紛と在地領主との軋轢で対立・分裂に明け暮れた時期とされている。1554年渋谷良重は，岩剣城での島津貴久との争いに敗れ，1557年以降に虎居城跡に撤退する。1566年，良重が死去し，約300年続いた祁答院渋谷氏の統治は終了することとなる。その後，1580～1592年には島津歳久が虎居城跡に居城。歳久の死後，北郷氏が居城するが，一国一城令後は島津家臣が居住することとなる。

このような渋谷氏と島津氏を中心とした戦乱期の中で虎居城跡では掘立柱建物跡等の遺構が築かれ，様々な陶磁器や木製品等が使用された。その中で16世紀後半の土師器A類は富隈城跡や都城でも出土しており，16世紀末に島津歳久が富隈城の兄義久を訪ねたことや都城の北郷氏が虎居城に居城したことは関連性が伺え，興味深い。個々の遺構・遺物と政治的イベントとを直接結びつけることは難しいが，遺物の編年と遺構の^{14}C年代測定値等を更に詳細に比較・検証することが課題である。

【引用・参考文献】

鹿児島県教育委員会「椙城跡」2010鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(155)

鹿児島県教育委員会1981「加栗山遺跡・神ノ木遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(16)

鹿児島県教育委員会「苦辛城跡」1983　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書27

鹿児島市教育委員会「川上城跡」1994　鹿児島市教育委員会発掘調査報告書18

大口市教育委員会「平泉城跡」1982 大口市教育委員会発掘調査報告書1

出水市教育委員会「松尾城跡」1999 出水市教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告書10

横川町教育委員会「横川城跡」1987 横川町教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告書1

隼人町教育委員会「冨隈城跡Ⅱ」1999　隼人町埋蔵文化財発掘調査報告書

児玉幸多，坪井清足監修1979「日本城郭大系　第18巻」 新人物往来社

永井久美男編「中世の出土銭」兵庫埋蔵銭調査会　ぎょうせい1994

「宮之城記」 関盛充家蔵『宮之城郷土史』宮之城町教育委員会

宮之城町教育委員会「松尾城及び宗功寺跡(2)」『宮之城町埋蔵文化財発掘調査報告書(5)』1995

宮之城町教育委員会「松尾城及び宗功寺跡(3)」『宮之城町埋蔵文化財発掘調査報告書(7)』1997

大隅町教育委員会「恒吉城跡」大隅町教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告書20

佐々木稔　他編著「鉄と銅の生産の歴史」雄山閣　2002

宮之城文化懇談会編「虎居城物語」 2001　宮之城文化懇談会

宮之城郷土誌編纂委員会「宮之城郷土誌」 2000年　宮之城町教育委員会

大阪府埋蔵文化財協会 「ミノバ石切場跡」 財団法人大阪府埋蔵文化財協会発掘調査報告書　第18輯

高砂市教育委員会 「竜山採石遺跡(調査概報)」 高砂市埋蔵文化財発掘報告書　2002

島根県教育委員会・日本道路公団b「来待石切場遺跡郡」中国横断自動車尾道松江線建設予定地埋蔵文化財発掘 調査報告書１　1998

財団法人大阪府埋蔵文化財調査研究センター 「椋谷石切場跡(南阪奈道路建設に伴う凝灰岩石切場跡の調査)」(財)大阪府文化財調査研究センター　調査報告書第58集

上田秀夫　1982「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究No.2』日本貿易陶磁研究会　pp.55-70

森田　勉　1982「14～16世紀の白磁の形式の分類と編年」『貿易陶磁研究No.2』日本貿易陶磁研究会 pp.47-54

小野正敏　1982 「15,16世紀の染付碗，皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究No.2』日本貿易陶磁研究会　pp. 71-87

知覧町教育委員会「知覧城跡(三)」2006年　『知覧町教育委員会発掘調査報告書』

広島県教育委員会 「吉川春元館跡　-第一次発掘調査概要-」1994 広島県教育委員会

広島県教育委員会 「吉川春元館跡　-第五次発掘調査概要-」1998 広島県教育委員会

広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 「草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅰ～Ⅴ」1993～1996 広島県教育委員会

薩摩川内市歴史資料館「中世薩摩の雄　渋谷氏～入来院・高城・東郷氏の軌跡から」2010

概説「中世土器陶磁器」1995　中世土器研究編　真陽社

中世土器の基礎研究ＸⅠ　1996　日本中世土器研究会

鹿児島県教育委員会　1982「中尾田城跡」鹿児島県埋蔵文化財報告書15

都城市教育委員会　1990「野々美谷城跡」『平成元年度遺跡発掘調査概報』都城市文化財調査報告書第11集

都城市教育委員会　1991「耳添城跡」『都城耳添遺跡発掘調査概報』都城市文化財調査報告書第15集

都城市教育委員会　1991「野々美谷城跡」『平成二年度遺跡発掘調査概報』都城市文化財調査報告書第13集

都城市教育委員会　1992「金石城跡」都城市文化財調査報告書第15集

宮田浩二・東憲章　1994「宮崎県南部における中世城郭の1例－串間市，櫛田城一」『宮崎考古』第13号　宮崎考古学会

写　真　図　版


調査前風景


調査前風景


確認トレンチ完掘状況


確認トレンチ完掘状況


礫検出状況


礫検出状況


遺物出土状況


完掘状況

Ａ地区

図版２









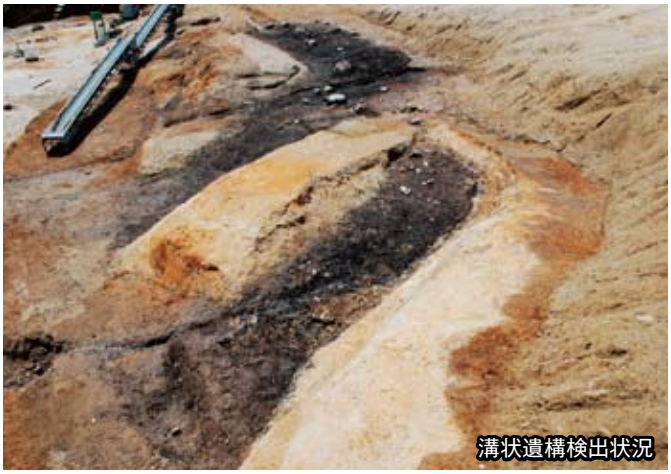


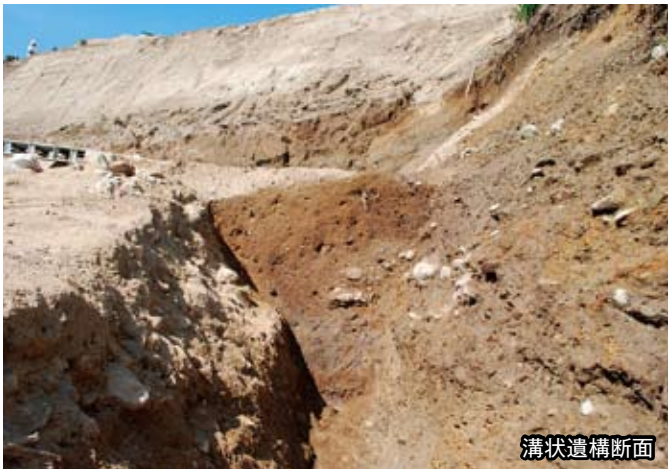




B 地区(1)


溝状遺構検出状況


溝状遺構検出状況


溝状遺構断面


溝状遺構断面


溝状遺構完掘状況

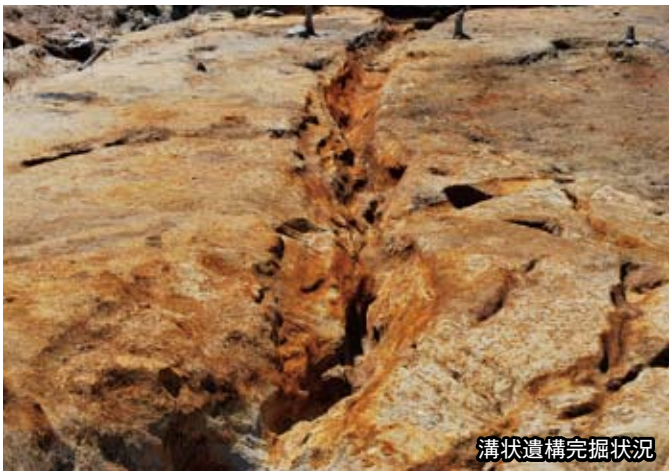

溝状遺構完掘状況

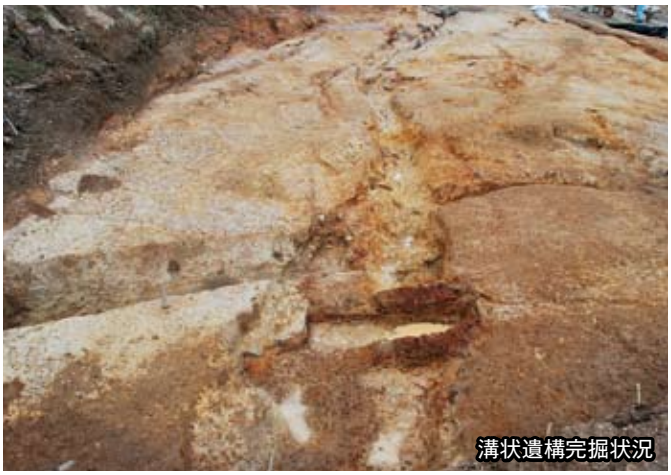
B 地区(2)

図版４

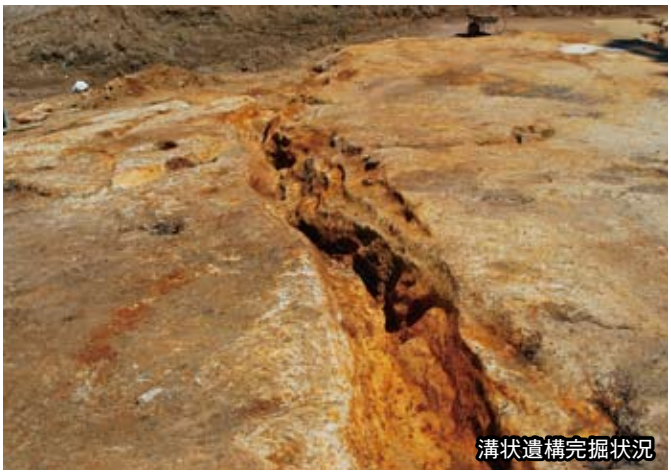

溝状遺構断面


溝状遺構完掘状況


溝状遺構完掘状況


溝状遺構完掘状況


空堀Ⅰ完掘状況


溝状遺構完掘状況


空堀Ⅰ断面

B 地区(3)


空堀Ⅰ断面(c-c')


空堀Ⅰと曲輪Ⅰ

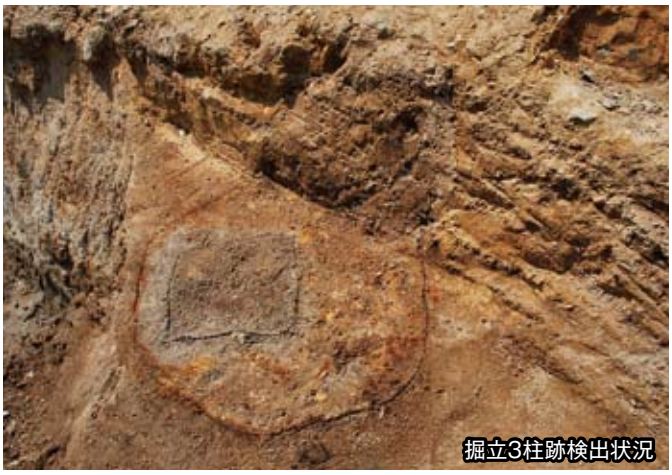
B 地区(4)


木樋検出状況


木樋断面


木樋検出状況


掘立3検出状況


掘立3柱跡検出状況


石列検出状況

B 地区(5)


遺構検出状況


柱(H18)


柱(H3)


ピット2


柱(H24)と根石

B 地区(6)


杭列


石組み遺構1検出状況


桶2


石組み遺構1検出状況


建物跡


建物跡断面


建物跡内木製容器①


建物跡内木製容器②

B 地区(7)


石組み遺構2


石組み遺構2


土坑内木製容器(152)


桶1検出状況


溝状遺構


桶1半堀


青磁(170)出土状況


青磁(172)出土状況

B 地区(8)


漆椀(151)


漆椀(220)


漆椀


漆椀(148)


漆椀(146)


土師器出土状況(126他)


下駄(225)


円形板(240)

B 地区(9)


調査前風景


調査前風景


確認トレンチ


土墨


土墨断面


土墨断面


土墨断面


土墨断面

C 地区(1)


土塁礫検出状況


ピット6


ピット12


ピット11


掘立5の7,8


土坑5,6


掘立7の6

C 地区(2)


虎口B


虎口B内ピット


虎口Bと曲輪Ⅲ


虎口B

C 地区(3)

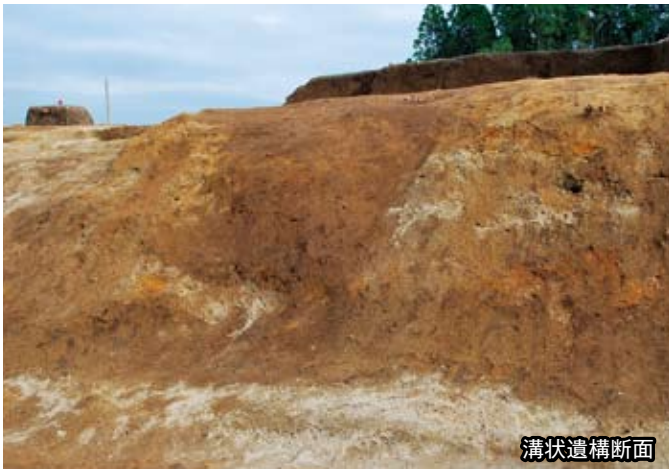








C 地区(4)


溝状遺構断面


溝状遺構完掘状況


溝状遺構完掘状況


土坑2,3,12


土坑2,3


炉跡11


炉跡11


炉跡

C 地区(5)

図版 16













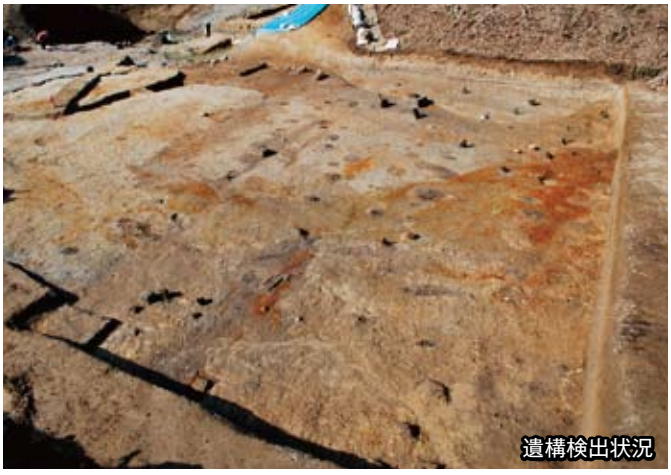




C 地区(6)


確認トレンチ


土層断面


遺構検出状況


遺物出土状況

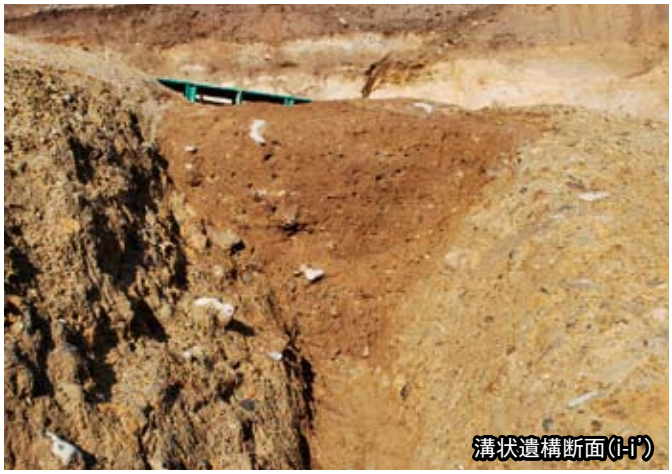

溝状遺構完掘状況


遺構検出状況


遺構検出状況

D 地区(1)


空堀Ⅱ検出状況


溝状遺構断面(i-i')


空堀Ⅱ断面(e-e')


空堀Ⅱ内土師器集積(2)


掘立1の柱1


掘立1の柱2


柱22

D 地区(2)


掘立2の柱1


柱4


柱1


柱17


柱10


掘立1の柱10

D 地区(3)

















D 地区(4)


炉跡4


炉跡6


炉跡2


炉跡2


炉跡5


炉跡2


漆椀(512)


金属器

D 地区(5)


確認トレンチ


確認トレンチ


北側平場調査状況


遺構検出状況


遺構検出状況


遺構検出状況


集石3号(縄文)


集石3号(縄文)

E 地区(1)


集石1号(縄文)


集石1号完掘状況


土墨


土墨


土墨断面(d-d')

E 地区(2)


溝状遺構検出状況


炉跡3


炉跡3


炉跡6


炉跡6完掘


炉跡4

E 地区(3)

















E 地区(4)


炉跡2


炉跡2


炉跡5


遺物出土状況


土器集中


F地区調査前風景


F地区確認トレンチ


F地区確認トレンチ

E,F 地区


遠景


溝状遺構検出状況


湧水地


掘立柱ピット3

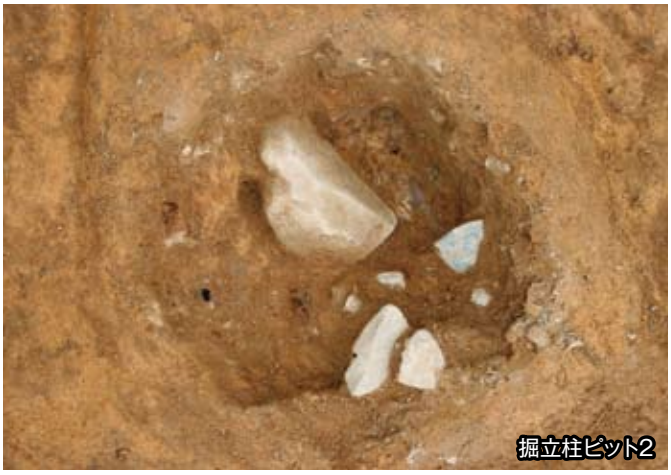

掘立柱ピット3


掘立柱ピット3


掘立柱ピット3

G 地区(1)


掘立柱ピット6


掘立柱ピット2


遺構検出状況


確認トレンチ


炭窯


炭窯


堀?断面

G 地区(2)


確認トレンチ


溝状遺構完掘状況


溝状遺構完掘状況


溝状遺構内礫

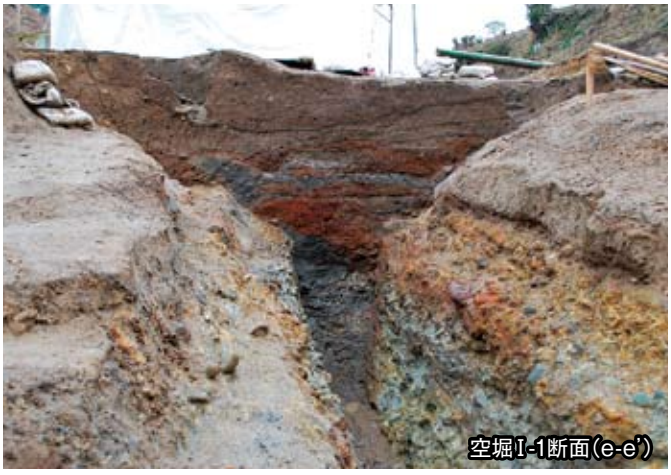

堀Ⅰ上礫検出状況

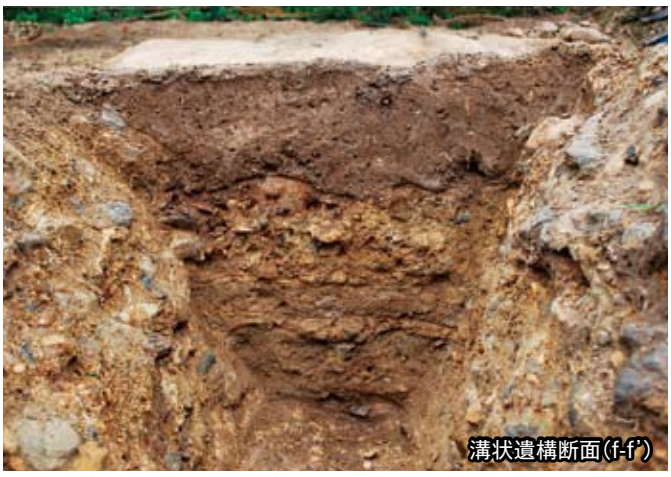
H 地区(1)


空堀Ⅰ-2完掘状況


空堀Ⅰ-2完掘状況


空堀Ⅰ-1


空堀Ⅰ-1断面(e-e')


溝状遺構断面(f-f')

H 地区(2)


空堀Ⅰ-2検出状況


空堀Ⅰ-1


空堀Ⅰ-2


空堀Ⅰ-1


空堀Ⅰ-2検出状況

H 地区(3)


空堀Ⅰ-2と柱列


空堀Ⅰ-2


掘立柱建物跡検出状況

H 地区(4)


掘立柱建物跡,柱と横架材


柱と横架材


掘立,柱7

H 地区(5)









H 地区(6)















H 地区(7)









H 地区(8)


礎石建物跡


礎石建物跡


礎石建物跡


青花(673)


坩堝(665)

H 地区(9)


土師器杯


軒丸瓦(684)


漆椀(653)


木製椀


木製椀


下駄(656)


竹製品(笊1,658)


竹製品(笊2)

H 地区(10)


遠景


遠景


確認トレンチ


確認トレンチ


虎口?


虎口?

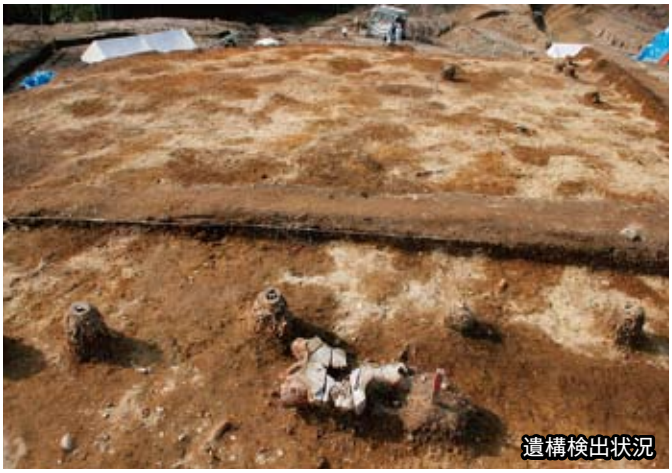

虎口?


虎口?

I 地区(1)











Ⅰ地区(2)



遺構検出状況



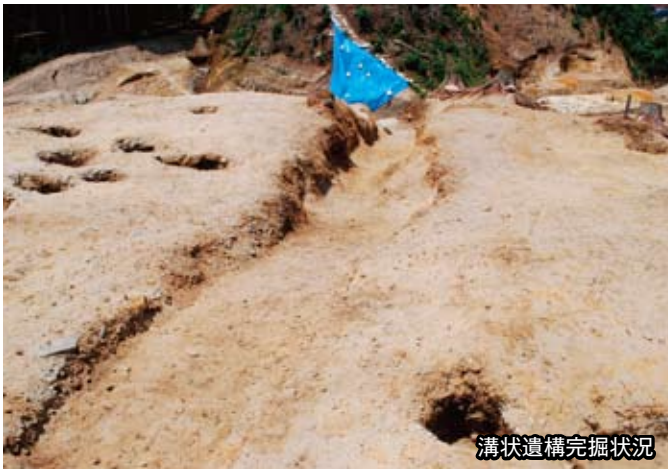
ピット完掘状況

Ⅰ地区(3)

図版 42

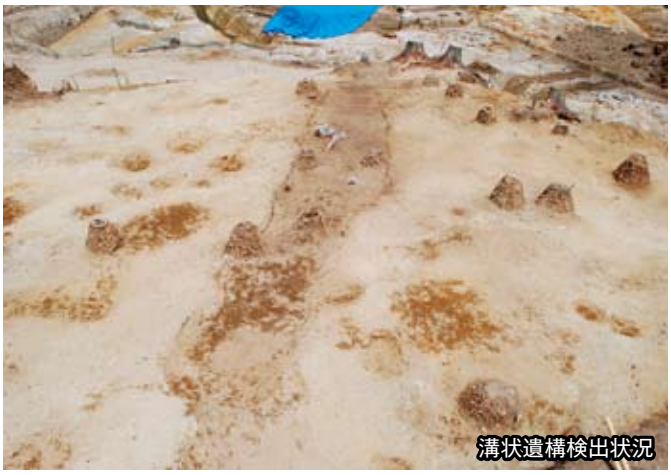

ピット完掘状況


土坑2


溝状遺構完掘状況


土坑1


遺構検出状況


溝状遺構検出状況


礫検出状況

Ⅰ地区(4)


溝状遺構断面(b-b')


溝状遺構断面


溝状遺構完掘状況


溝状遺構断面


溝状遺構2


溝状遺構2

Ⅰ地区(5)


溝状遺構2


堀切断面


溝状遺構2完掘


溝状遺構2


溝状遺構2


土坑5検出状況

Ⅰ地区(6)

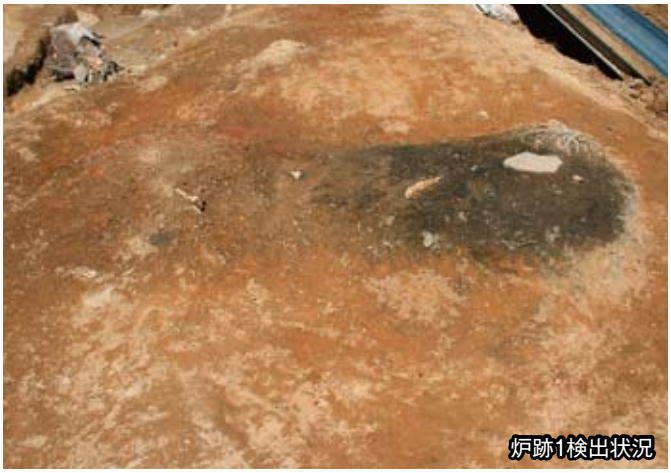

土坑5検出状況

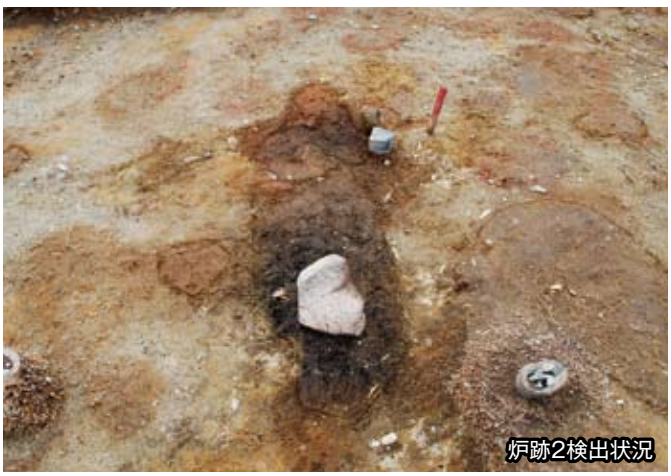

土坑4


土坑完掘状況


土坑5


炉跡2完掘状況


炉跡1検出状況


炉跡2検出状況

Ⅰ地区(7)









Ⅰ地区(8)


遠景


石列


石列(近現代)


石列と杭列

J 地区(1)


空堀Ⅱ内出土青磁(746)


石列と擂鉢


空堀Ⅱ調査状況


空堀Ⅱ断面

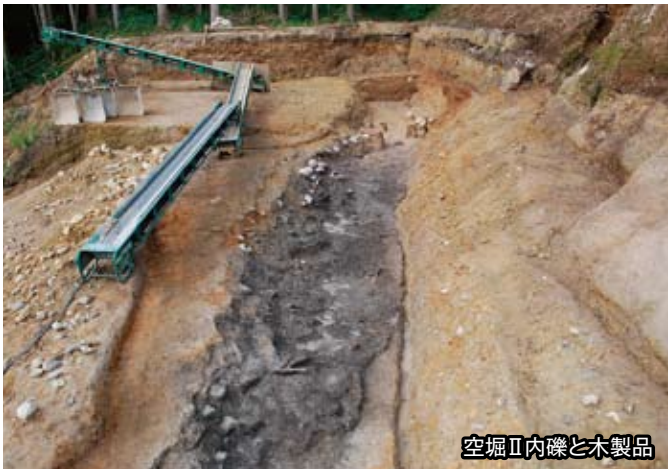

石列と杭列


空堀Ⅱ

J 地区(2)


空堀Ⅱ検出状況


空堀Ⅱ検出状況


空堀Ⅱ内礫と木製品


櫂(749)


空堀Ⅱ内遺物出土状況

J 地区(3)


空堀Ⅱ断面


空堀Ⅱと曲輪Ⅱ


空堀Ⅱ断面(a-a')

J 地区(4)















K 地区(1)









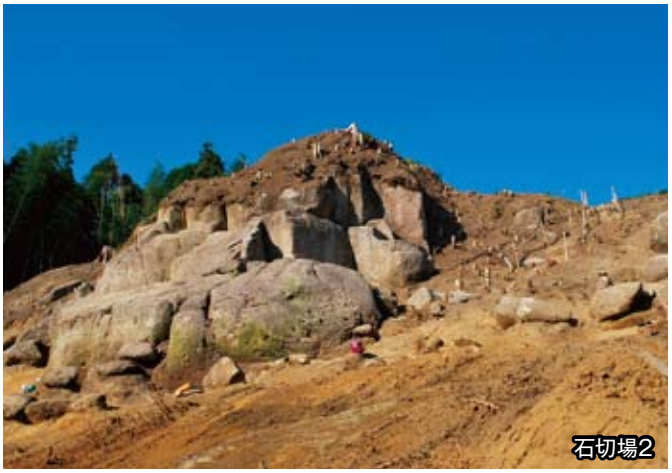
K 地区(2)


石切場から望む川内川


石屑


石切場2


石切場1


石切場2


石切場遠景


石切場遠景

K 地区(3)

図版 54

















L・M 地区


A地点


B地点


A地点確認トレンチ


A地点土層断面


炉跡出土坩堝, 羽口

M 地区(1)


竪穴建物跡1検出状況


竪穴建物跡1


竪穴建物跡1完掘状況


竪穴建物跡1完掘状況


竪穴建物跡2完掘状況

M 地区(2)


竪穴建物跡2完掘状況


竪穴建物跡2完掘状況


土坑墓


P1と791


P1と791


ピット


土坑3


青磁(798)出土状況

M 地区(3)


井穴


井穴


井穴


井穴


井穴

M 地区(4)





空撮(1)





空撮(2)





空撮(3)

図版 62





空撮(4)





空撮(5)



空撮(6)





空撮(7)



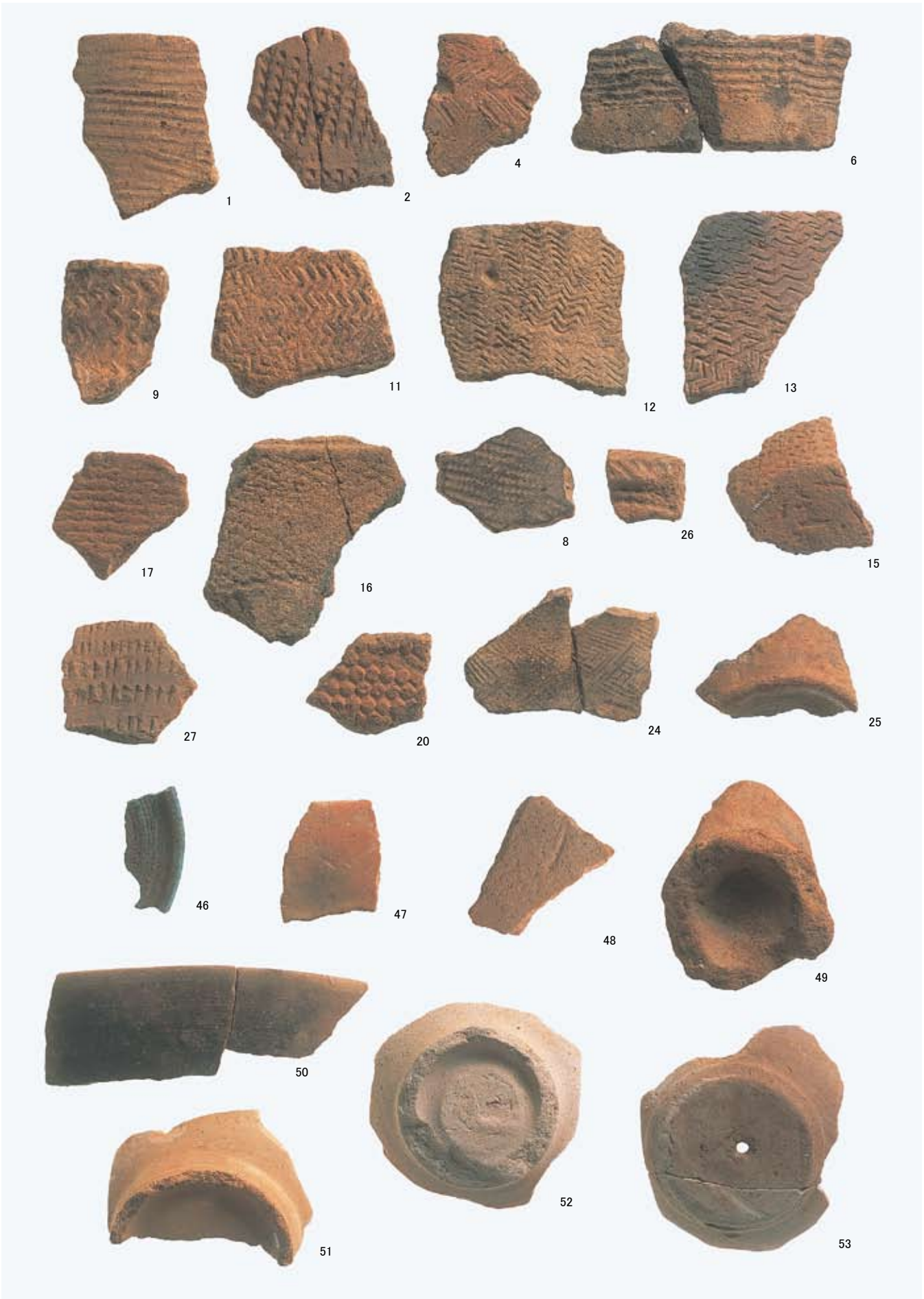


空撮(8)





空撮(9)



縄文・古墳時代・古代遺物


107


104


170


541


769


731

青磁，火鉢


54
55
56
62
57
58
73
59
60
61
63
65
66
68
67
69
71
76
64
70
74
72
75
77
78
79
80

A 地区　遺物(1)





A 地区　遺物(2)


113
116
121
127
120
160
131
143
142
167
163
165
166
177
169
179
190
181
182
183
184
189
188

B 地区　遺物(1)



B 地区　遺物(2)



C 地区　遺物(1)


311
314
319
321
320
323
324
325
327
330
329
334
335
336
338
340
346
342
344
348
349
365
360
368
354
355

C 地区　遺物(2)


398
412
414
426
425
445
434
444
423
443
397
453
447
448
450
454
458
463
461
462
460
471
470
467

D 地区　遺物(1)


481
474
485
476
473
478
472
486
479
492
496
487
501
499
490
502
504
500

D 地区　遺物(2)


527
525
526
521
523
530
532
542
546
543
540
535
536
547
555
552
548
549
558
557
545
574
568
567

E地区　遺物



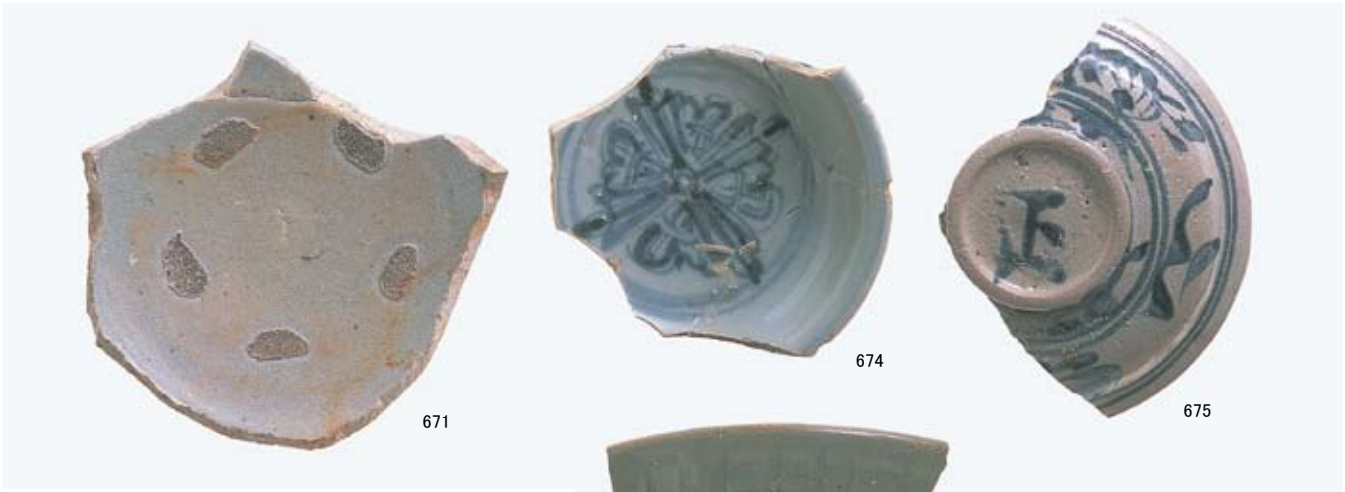
E,F,G 地区　遺物


660
634
644
650
651
678
649
636


645


632


665


671
674
675
666
672
669
678


673

H 地区　遺物


692
690
693
696
695
702
703
704
707
706
708
712
709
716
719
725
723
715
720
724


727


730



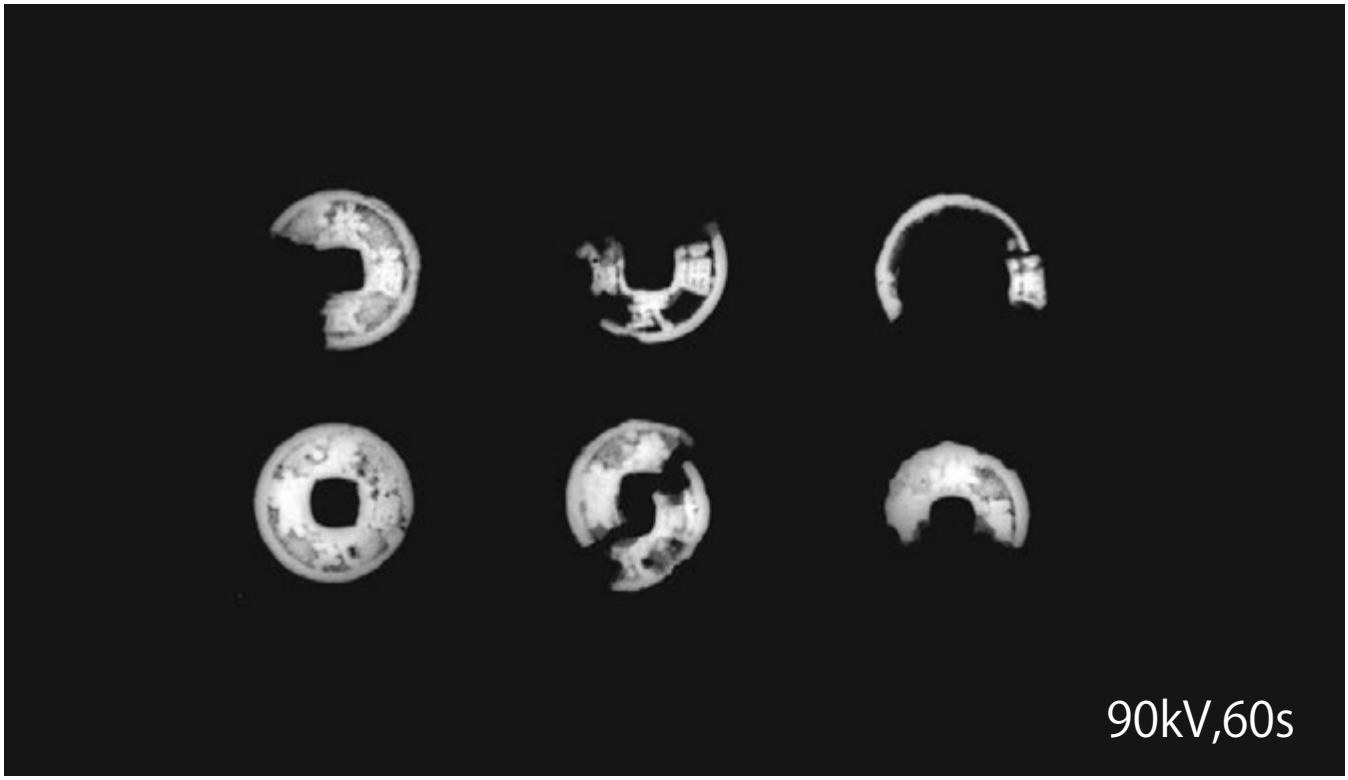
I,J,L 地区　遺物


777
771
778
781
773
807


792
794
797
799
801
803
805
798
806
774
802
804
808
809

M 地区　遺物





鉄滓他，M 地区土坑墓出土六道銭


764


679


385
610
625
379
603
377
378
384
612
529
739
776
775
608
624
381
513
609

金属器，鉄滓


152
246
248
220
146
151
652
221
150
242
234
236
656
153
159
238
227
761
254
255

木製品(1)


749


227


226


248


251


244
245


232


237
239
238
240
241


234
228
235
231

木製品(2)


656


225


681


652


652

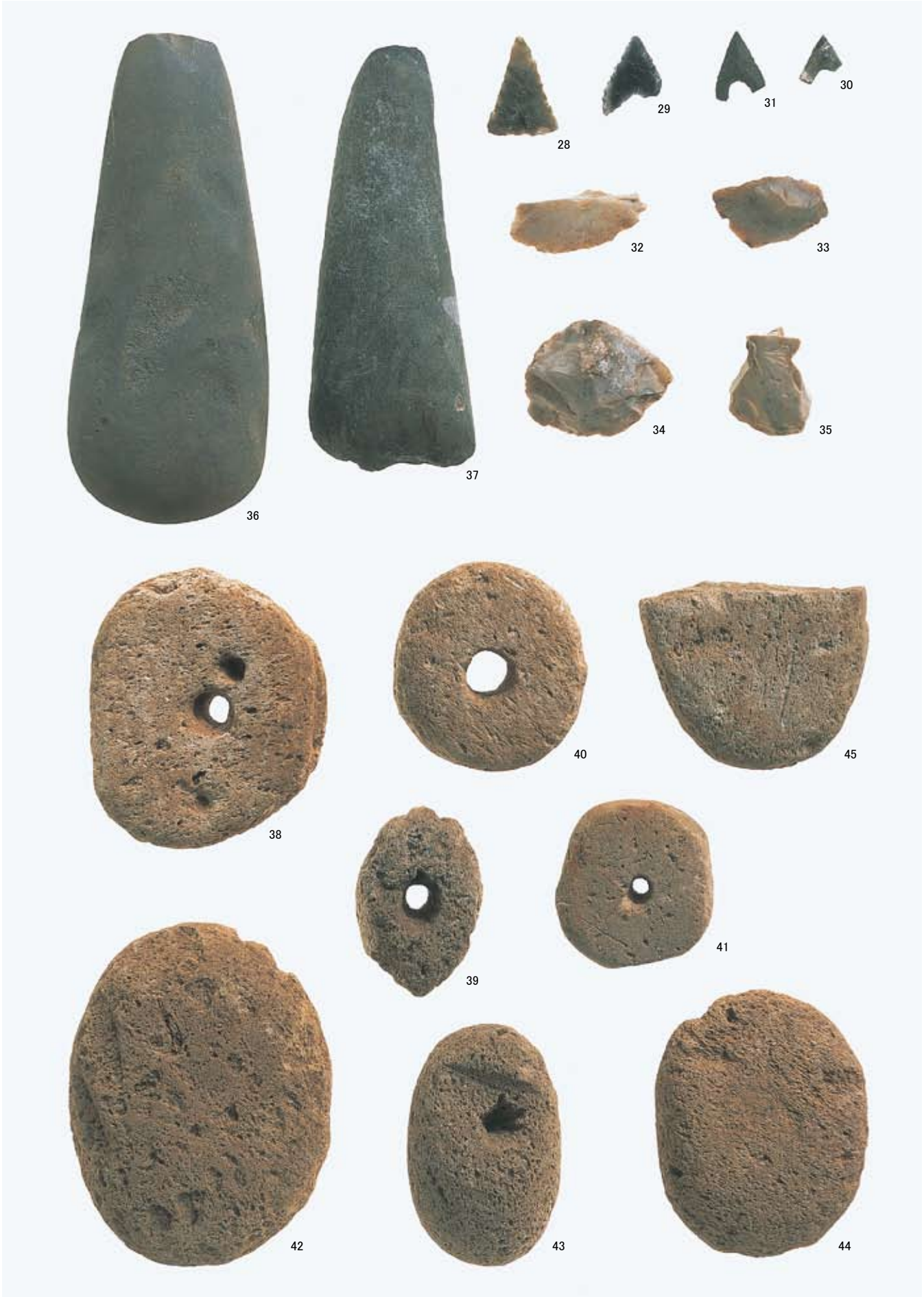

222


146


151


220

木製品(3)



石器(1)


614
659
91
372
373
371
615
90
92
510
374
507
508
509
623
617
375
748
616
511
620
809

石器(2)

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(162)

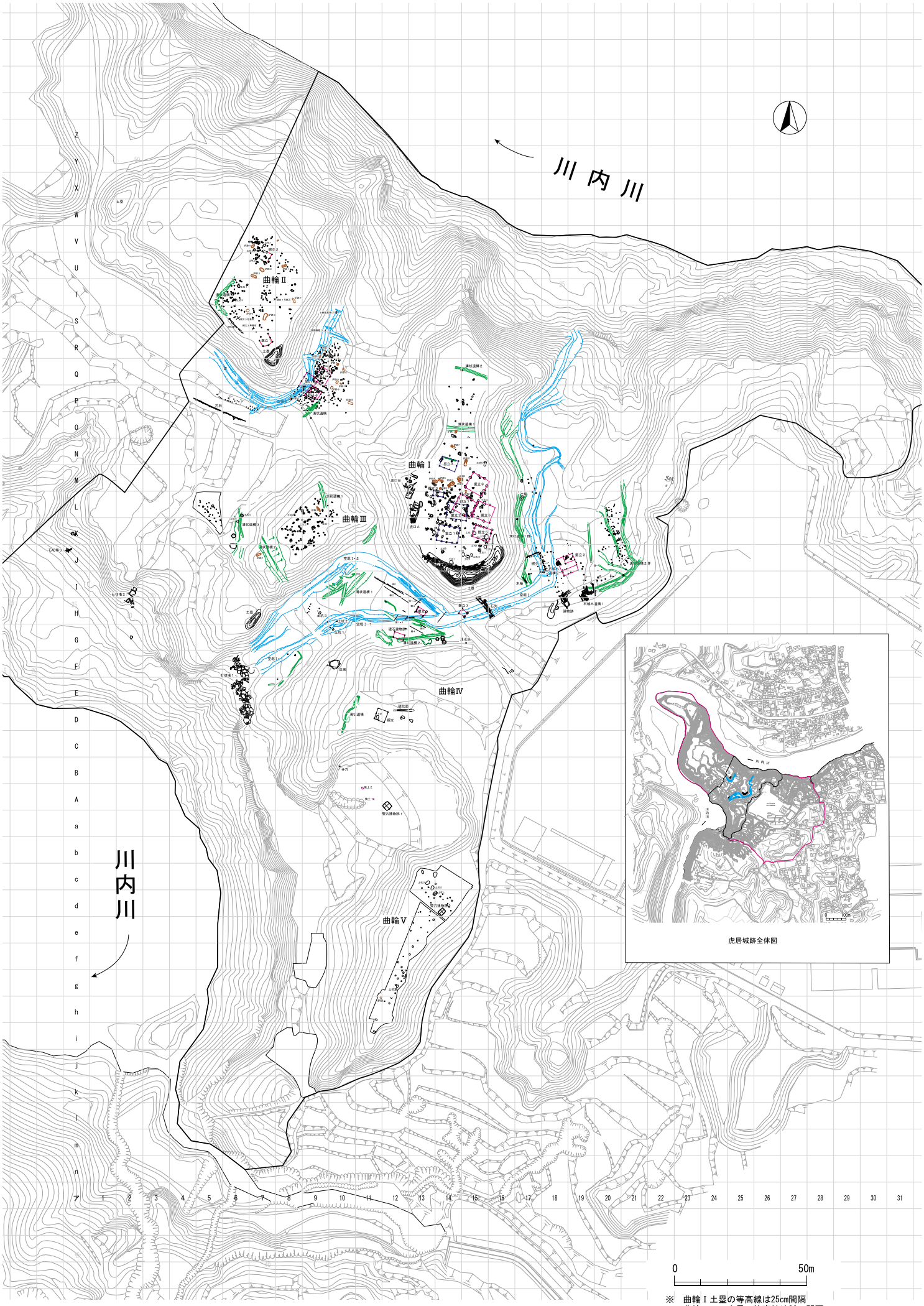
虎 居 城 跡

発行年月　２０１１年３月

編集･発行　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号
TEL　0995-48-5811　　FAX　0995-48-5821

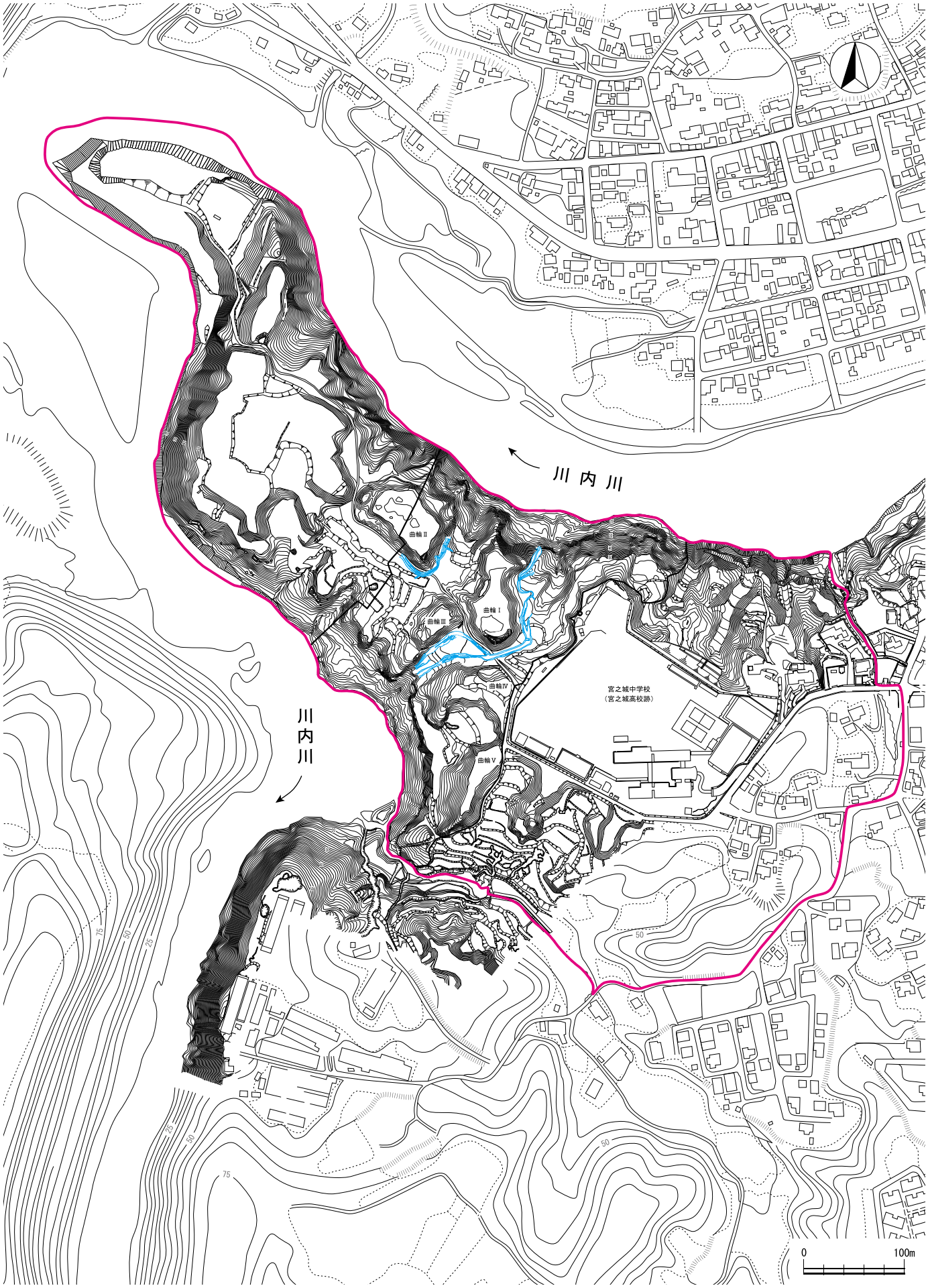
印　　刷　㈱イースト朝日
〒891-0122　鹿児島県鹿児島市南栄３丁目30-7
TEL　099-266-5522　　FAX　099-266-5523


鹿児島県



付図２　虎居城跡調査区全体図（ S=1/625 ）

※　曲輪Ⅰ土塁の等高線は25cm間隔
曲輪Ⅱ，Ⅲ土塁の等高線は20cm間隔



付図１　虎居城跡全体図（S=1/2,500）